

Fate/ $\sqrt{\quad}$ knight

【ムラサキノウエ】

わが立つ柚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

F a t e / s t a y n i g h t H Fの亜流となっています。

士郎とライダーの視点中心に物語は進行します。ライダールートと思って読んでいただければ違和感はないかと思えます。ほぼオリジナルキャラは出てきませんが、多少の独自設定、性格の改変等があります。

原作への理解が表面的な部分も多く、アバウトな設定、解釈もあるかもしれませんが、ご容赦いただければ幸甚です。

(ファジーさもF a t eのいいところかと・・・)

お陰様で物語は完結しました。お読みいただいた皆様本当にありがとうございます。

(誤記の修正は引き続き実施しておりますが・・・)

目次

第1話	〜序章〜		1
第2話	〜1日目①〜	「騎士の邂逅」	10
第3話	〜1日目②〜	「開戦、そして激戦」	27
第4話	〜2日目①〜	「貸し借り」	45
第5話	〜2日目②〜	「英霊ふたり」	61
第6話	〜3日目①〜	「騎士王」	72
第7話	〜3日目②〜	「すれ違い」	86
第8話	〜4日目①〜	「ナイフと魔術」	99
第9話	〜4日目②〜	「柳洞寺の乱戦」	113
第10話	〜5日目①〜	「不穏」	129
第11話	〜5日目②〜	「しるしがないということ」	139
第12話	〜5日目③〜	「磨眼」	155
第13話	〜6日目①〜	「鮮血神殿」	170
第14話	〜6日目②〜	「躍動する槍兵」	191
第15話	〜6日目③〜	「監督役の務め」	212
第16話	〜6日目④〜	「殺しと薬」	227
第17話	〜7日目①〜	「泰山」	236
第18話	〜7日目②〜	「遺産」	248
第19話	〜7日目③〜	「蛇神」	258
第20話	〜8日目①〜	「アインツベルン城外の戦い」	268
第21話	〜8日目②〜	「頂上決戦」	282
第22話	〜8日目③〜	「消えゆくモノ」	292
第23話	〜9日目①〜	「◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆」	301
第24話	〜9日目②〜	「弓兵は死なず」	318

第25話	〜10日目①	「黒幕の焦り」	335
第26話	〜10日目②	「造反者たち」	348
第27話	〜11日目①	「兄妹あるいは姉弟」	355
第28話	〜11日目②	「前世のルール」	364
第29話	〜12日目①	「魔術師の死」	377
第30話	〜12日目②	「神父と教師」	394
第31話	〜13日目①	「夜襲」	410
第32話	〜13日目②	「FD」	422
第33話	〜13日目③	「マキリの夢の跡」	436
第34話	〜14日目①	「告げる」	451
第35話	〜14日目②	「綺礼vs葛木」	469
第36話	〜14日目③	「Battle of Knight	484
s			
第37話	〜14日目④	「清なる願い」	501
第38話	〜15日目①	「エミヤタチ」	512
第39話	〜15日目②	「ケモノたち」	524
第40話	〜15日目③	「スマレノウエ」	539
第41話	〜終章		549
後書き	〜登場人物総括	マスター編①	559
後書き	〜登場人物総括	マスター編②	564
後書き	〜登場人物総括	サーヴァント編①	569
後書き	〜登場人物総括	サーヴァント編②	574

第1話 序章

Prologue

「……繰り返す都度に五度、ただ満たされる刻を破却する。

告げる。汝の身は我が元に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄る辺に従い、この意この理に従うならば応えよ」

暗闇の中に、抑揚のない少女の声の木霊していた。

そこは地の底。

おびただ 夥しい数の奇怪な虫の群れが這いずっている。

石造りの床には、魔術師と呼ばれる存在が描く召喚の門である魔法陣が刻まれており、薄っすらと光が湧き出ていた。

「誓いを此処に。我は常世全ての善と成る者。

我は常世全ての悪を敷く者」

陣の前には、肩にかかる程の長さの菫色の髪を桃色のリボンで結わえた少女が立っていた。

そして、その少し後ろに、ウエーブのかかった青い髪をした少年と、よわい 齢百に届くのではないかと見える杖をついた老人が立っている。

「汝三大の言霊を纏う七天。

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ」

カツツ――

少女の言葉、即ち召喚の詠唱が終わると同時に、魔法陣の中心から一層の光が溢れ出る。

その眩い光により一瞬、中の様子が全くわからないほどになった。光が収束し、やがて落ち着くとともに一人の女性の姿が浮かび上がる。

「……サーヴァント、ライダー。召喚に従い参上しました」

女性としてはやや低く、落ち着いた声で簡潔な口上が発せられた。

先ほどの少女よりは薄い紫色の髪。ただし、その髪は地面に届くほどに長い。また、かなりの長身で、少女の後ろに立っている少年とほぼ同じ程度の高さがある。

体を覆う衣服は、黒を基調としているが、肩から胸元にかけて覆うもののない煽情的なものであり、そこから覗く肌は白く透き通っていた。

最も異様なのは両目に桃色の眼帯をしており、完全に目を隠している事であろう。ただ、その異様さを差し引いたとしてもなお、美しい女性であることが窺えた。

「あなたが、私のマスターですか？」

眼帯の女性は、目の前の少女にそう問いかける。

「・・・ええ・・・確かにそうです。だけど・・・」

少女の返答は、少し曖昧なものであった。

「いや、お前の主人はこの僕だ！そんなグズじゃない！」

割って入ってきた声の主は、少女の後ろに控えていた青い髪の少年だった。

R t u r n

・・・何やら事情が混み入っているようですね。

召喚された直後で、自身も若干の酩酊感がある中、目の前で繰り広げられたやり取りは不快に感じるものだった。

何事もすんなりと出来ないのは慣れているとは言え、心の中で嘆息する。

聖杯戦争や現代の知識は一通り与えられて、現界した。

生前、雄々しく戦場を駆け抜け名を馳せたような、真つ当な『英雄』であれば、再び自身の力を奮う機会が訪れたことに心躍らせることもあるのだろう。

しかし、私はそのような存在ではない。

『戦争』などに駆り出されることは決して望ましいものではないし、意義も見出せない。

ただの怪物に過ぎない自分としては、無理矢理与えられた仕事を忠実にこなさなくてはいけないという感覚しかなかった。

そして、今更、聖杯に託す望みなども見当たらない。

そんな気乗りしない状態で、召喚された直後に知らされたのは、実際に召喚した本人である『どこか夢中で気になる少女』ではなく、『やたら態度だけは偉そうな少年』が自身のマスターになるという内容だった。

少年からは魔力も感じない。

しかし、その手にした本【偽臣の書】の力により私は、彼をマスターとして強制的に認めざるを得ない重圧を感じた。

その本からは微量ながら魔力も供給されているのを感じる。

「承知しました」

と、簡潔に少年をマスターとして認めた。多くの言葉を費やす必要性は見出せそうになかった。

その場で、意識を割くべきなのは、少女のほうのように思えた。

直観に過ぎないが・・・

自分に似ていると、そう思ったのだ。

「聖杯戦争の開始までは、しばしの時があるう」

その見解は、少年【間桐慎二】と少女【間桐桜】の祖父であるという老人【間桐臓硯】のものだった。

現時点で、現界したのは自分を除くとバーサーカーとキャスター。未だ4体が現界しておらず、それらの全てが召喚されるまでは、一月程度はかかるだろうとのことだ。

その間、魔力の増強などでもしたいところだったが、老人はあまり早期に目立つことも避けるべきであると言う。

「当面は、マスターである慎二に同行し、この街の様子を確認したり、魔術師の動向を密かに情報収集するがよからう」

慎二は、学生なので学校に通っている。ここで戦闘になることは少ないように思えるが、何が起きるかわからない。また、校内には魔術師が一人居るということがわかっている。情報を得るため、私も霊体化して学校を訪れる機会が何度もあった。

「よう衛宮。そのおかず僕に分けてくれない？今日、弁当忘れちゃっ

てき」

「構わないぞ。お前の好きな卵焼きもあるしな」

慎二が絡んでいる赤毛の少年は事も無げに答えた。
嫌がる素振りは一切ない。

ちなみに慎二が弁当を忘れたというのは嘘だ。単に自分の嫌いな
おかずが多くて残したので、腹が満たされていないだけである。

「慎二も自分で料理してみたらどうだ？」

赤毛の少年の名は、「衛宮士郎」という。

学校内で、慎二とまともに会話をする男子生徒は彼だけのようだった。

勿論、全くいないというわけではない。だが、上辺だけの会話に留
まっているという印象だった。慎二の会話の目的があくまでも自身
に利するものだけということを、話しかけられたほうも分かっ
てしま
うようだった。

「なんでこの僕が、そんな使用人みたいなことしなくちゃいけない
だよ」

要するに、慎二は大抵の生徒から嫌われているということなのです
が・・・

この【衛宮士郎】だけは違った。

慎二の性格を把握したうえで、受け止めているように感じる。

当の慎二は、それが分かっ
ていて甘えているのか、あるいは慎二自
身が彼を特別視しているのかはわからない。

しかし、傍目には他の男子生徒に対する時と同じ態度や口調にしか
見えない中でも、親しくしようという気配がある。

「衛宮は八方美人だからね。誰にでもそうなのさ。そんなにしてま
で、みんなからの好感を得たいのかねえ。生徒会長には尻尾降るよう
に、太鼓持ちやっ
ているしね」

そんな憎まれ口にも、微妙な感情が少し含まれているように感じら
れた。

私の本来のマスターである間桐桜も、この学校に通っている。

その桜とも、衛宮士郎は仲良くしているようだった。

桜も兄とは違う理由で、あまり親しく話す相手がいない。

彼女はどんな相手からも一歩ひいているというか、距離を保つような雰囲気醸し出している。

周囲の生徒の若い感性は、そのシグナルを敏感に受け取るため、はつきりと嫌われるわけではないが、敢えて距離を詰めてくる生徒も殆どいない。

「桜、朝伝えたように今日はバイトが遅くなるから、晩飯は作りになくても大丈夫だからな。桜も友達との付き合いとかがあるだろうから、そつちを優先してくれていいんだぞ」

そんな中で、やはり衛宮士郎だけは特別だった。

聞けば桜は毎日のように、彼の家を訪れて食事を作っているという。

私の生前過ごした世界は貞操観念がやや雑であり、男女の交流は肉体関係も含めて頻繁にあったものだ。しかし、この年代の若い女が男の家に頻繁に通うというのは、この国、この時代の一般常識ではあまり例のないケースのようだ。

「いいえ、今日は部活ありませんので、先輩が帰ってきてから食べるものを準備しておきます。遅くなる前に、家には戻りますから心配しないでください。変な気を回さないでくれると嬉しいですよ」

桜は、なるべく少年の家に行きたいという思いが強いようだ。

「うくん。そうなのか。桜がそう言うなら敢えて断る理由もないな」

「はいっ。それに晩御飯がないとわかったら、藤村先生が暴れだしますからね」

桜が朗らかに応え、相好を崩す。

それはこの少女が間桐邸では見せない自然な笑顔だった。

ある日、慎二が軽い風邪をひいて学校を休んだため、私が単独で学校に行く時があった。必ずしも学校に行く必要はなかったが、本来のマスターである桜の様子を、見守ろうと思ったのだ。

その日は、朝方は快晴だったのに、下校の時間近くになって、突然

の雨が降ってきた。

当然のように多くの生徒は、傘を持ってきておらず、桜も同様だった。

「どうしよう・・・」

途方に暮れながらも、桜は正面玄関に向かう。

周囲の生徒達は、意を決して雨の中に駆け出していく者もいれば、友達と傘を共有している者もいた。

私は、急いで家から持ってきてあげたかったが、霊体化しているため、桜に傘を渡す手立てがなかった。

「あれ？先輩？」

下駄箱の手前にいたのは、衛宮士郎だった。

その手には少し薄汚れた傘がある。

彼は、傘もないままに外へと出ていく同級生達に少し申し訳なさそうな目を向けていた。彼らに傘を貸そうとしない自分に罪悪感を覚えていたような表情だ。

「桜。良かった。まだ帰っていなかったんだな」

桜を待っていたのだろう。

ほっとしたように、硬かった彼の表情が崩れた。

「先輩。私を待っていてくれたんですか？」

桜が驚きながらも、嬉しさを隠しきれずに華やいだ声で訊いた。

「たまたま一成に頼まれて直した傘があつて、借りられたんだ。一緒に帰ろう」

「はい。ありがとうございます。先輩」

桜は即答して、笑顔を見せた。

「先輩・・・話したことなかったんですけど、私、先輩の事を中学の頃から知っていたんです」

桜と衛宮士郎は、一本の傘の中に二人で入り、冷たい雨の中を歩いて下校する。衛宮邸へと二人で向かうその途上で、桜がそんな話を切り出した。

「そうなのか？」

「ええ。私が中学に進学したばかりの頃です。放課後、校庭で走り高跳びの練習を一人だけで何時間もやり続けている男子生徒がいたんです……」

ああ、それが衛宮士郎だったのですね。

一通り、桜がそのエピソードを話して終わっても、彼自身はすぐに思い当たるところがなかったようだった。

「その人が、今、私の目の前にいる先輩だったりします」

桜はその人物が衛宮士郎と確信を持っているようだった。

それは間違いではないはずだ。

「そっか……何か恥ずかしいところを見られていたんだな……」

少年は、いまだにピンと来ていないようだった。

おそらく、彼にとつてはその出来事は特別なものではなかったということだろう。

彼は、頬をかきながら恥ずかしそうに苦笑いを浮かべた。

学校には、もう一人観察すべき人物がいる。

【遠坂凜】という女生徒だ。

校内にいる唯一の魔術師。

そして、御三家と呼ばれるこの聖杯戦争の核となる家系の当主だ。優秀な魔術師で、今回の聖杯戦争でも強力な相手になるだろうと間桐家内では評されている。

「なあ、遠坂。お前、たまに弓道場に見学に来ているみたいだけど、何が目的なのかなあ？」

なぜか慎二は、彼女にかなりご執心のように、何かと絡もうとする。「ただの通りがかりよ。練習の邪魔になつていないようなら控えるわ」絡まれた側の少女は、決まってつれない態度を取る。

「そんなことないさ。僕くらいになれば、多少ギャララーがいたほうが却って集中できるくらいさ。そのうえ、遠坂なら大歓迎だ」

「あなたに歓迎してもらおう謂れはないわ、間桐慎二君。何か勘違いをしているようだけど、少なくともあなたを見に来ているわけでは決してないので、そのところはつきりご認識いただきたいわね」

きつぱりとした態度で彼女は慎二を拒絶する。
なかなか清々すがすがしい物言いである。

「何だと！遠坂！お前く〜！」

案の定、慎二が激昂する。

彼女は慎二を怒らせるツボを的確に刺激するような言葉を使う。

・・・あの・・・狙ってやっているわけではないですよね？

控えめに言っても、慎二はクズである。

「ライダー。わかっていると思うけど、お前は僕のサーヴァントなんだから・・・絶対服従だからな。な」

召喚されて2週間ほど経った頃だろうか。ある夜の出来事。

そう言つて、彼は少しずつ私ににじり寄ってくる。窓から差し込む月光が照らし出すその顔は少し赤味がかつていて、息も荒い。

一言で言えば興奮している。

ここは慎二の部屋だ。

この男が何を求めているかは一目瞭然だった。

今更この身を男に委ねることに抵抗感などない。

サーヴァントは他者の体液により、魔力供給を受けることもできる以上、場合によっては必要な行為とも言える。

ただ、少なくとも今の状況はそんな必要に迫られてのものではない。
い。

単に私に欲情しているだけである。

「お前が悪いんだからな。そんな・・・体と恰好しているから・・・いや。これはお前の力を高めるために必要な行為なんだ。仕方なく抱いてやるんだ。有難く思えよ」

滑稽極まりない言い草だった。

淫夢に落として、本人に満足感だけ与えることも可能だが、その労力を費やすことすら疎ましい。

「承知しました。ご随意に」

私は知っている。

この男は、妹も抱いている。いや犯している。

それを私は既に知ってしまったている。
だからなのか、それは自分にもわからなかったが・・・何もしない
ことにした。

桜の苦しみのほんの一端でも共有しようと思ったのか、これで彼女
に向けられる慎二の欲情を僅かでも反らすことができると思ったの
か。

自分のこの『何もしない』という選択の理由を明確に見出すことは
難しかった。

慎二の指が私の太ももに触れる。そしてその指が私の中心部に近
付いてくる。

怖気が走る。空っぽにした心で、気持ちの悪い感触が自分を蝕むの
を感じながら私は眼を閉じた。

私の肌の表面を悍ましい虫が舐め回しているかのようにだった。

そう思った時、

ほんの僅かではあるが、目の端に湿ったものを感じた。

「えっ？」

私は、思わず小さく呟いた。

何事も諦めているつもりだった筈だ。

それなのに。

いつ、どこにいても私はこんなままなのだろうか・・・

そんな感傷が自分に残っていることに少しだけ驚いた。

第2話 　　～1日目①～ 「騎士の邂逅」

R t u r n

「衛宮、道場の掃除やつといてくれよ。僕はこの後、忙しいんだ」
「わかった。今日は暇だしな」

衛宮士郎はいつもどおりの二つ返事で引き受けた。

今日は1月30日。

その放課後である。

聖杯戦争の始まりが近付いていた。

昨日アーチャーが召喚されたという情報が入り、残るはセイバーのみ。

いつ開戦となるかもわからない状況だが、慎二は女友達と遊びに行く算段で、弓道部の顧問である「藤村大河」に指示された道場の掃除を衛宮士郎に押し付けたのだった。

そして、今、時刻は19時を過ぎたあたり、女友達とカラオケなる娯楽を堪能した後、慎二は家路についていた。

「そう言えば、衛宮の奴、ちゃんと掃除したのかな・・・一応確認しておるか」

さすが清々しいまでの勝手な言い草だが、少し後ろめたい気持ちが混ざっているような口調ではあった。

明日から、学校内に私の宝具の一つである【鮮血神殿】ブラッドフォートの結果用の呪刻を敷設する予定になっていた。

現状、私の魔力量は潤沢には程遠い。

現在のマスターである慎二は魔術師ではないため、私は魔力供給を殆ど受けられていないからだ。

魔力を得るための手段は幾つかあるが、慎二はことであろうに校内で【鮮血神殿】ブラッドフォートを展開するつもりだった。

彼の口にした理由は、

『学校の奴らに僕の凄さを、身を持って味わわせてやるんだ』
とのことだった。

はあ・・・

当然、気は進まない。愚の骨頂だ。

一般人に被害が出ることを気にしているわけではない。

単純に悪目立ちしすぎるのだ。

学園内にいる魔術師、すなわち遠坂凜に気付かれる可能性が高いし、桜にも影響が出るかもしれない。

それに、成功してしまった場合、慎二自身も終わった後に後悔するのではないだろうか。彼に、多くの知り合いを犠牲にする肝が本格的に据わっているとも思えない。

「何とか慎二の方針を変えさせたいところですが・・・」

私は独り言ちた。

結界を張らずに済む代替案を提示するか、未遂に終わるような方策を思案しているところだった。

このあたり、その場で慎二の意見を否定できない自分自身の性格も嫌だった。

私は、基本的に上位者の命令等に従順である。この性格が最終的に怪物になった遠因だったというのにどうにも変えられなかった。

結界を別の場所に張るか、あるいは、個別に人を襲うか。

後者であれば、血を吸う量を加減すれば、左程目立たずに実行できるかもしれない。

夜の暗がり、一旦意識を奪っておき、あまり目立たない部位から吸血すれば当人にも殆ど気付かれずに目的を果たせる。

正直、効率の悪さは否めないが・・・

慎二が弓道場に向かうということだったので、私は一時的に彼から離れて、魔力補給ができそうなポイントを探すことにした。

「学校の周辺で、人を襲えそうな場所を探すことにしましょうか」

校内は今更調べる必要はないし、夜になれば殆ど人はいないので魔力補給のポイントとしては相応しくない。

既に勝手知ったる場所ということで、慎二から離れることの危うさに私は少し鈍くなっていた。

「ふう。こんなところか」

やるとなれば、徹底的にやらないと気が済まない性格だ。

かつて世話になった空間だし、どこに何があるかも熟知しているだけに作業が捗るため気持ちも乗ってしまった。

「今夜は、月が綺麗だな・・・」

冬の澄んだ空気を通して、弓道場の板張りの床から見上げる月が白く美しい。

充実した気持ちを噛みしめながら、鍵を閉めて弓道場の外に歩みだすと同時に・・・

その音が耳に飛び込んできた。

ギインツツツ!!

金属音。

テレビの時代劇で聞く剣戟の効果音に近い。

しかしそれよりはるかに重厚だ。

ギインツツ!!ギンツツ!!ガインツツ!!

音が連続する。

音源は、校庭で撃ち合う赤い影と青い影だった。

オレからの距離はかなりある。

赤い影は、両手にやや短い片刃の剣を持っているようだ。

一方の青い影は、長柄の赤い槍を両手に構えていた。

「何なんだ・・・あいつら?」

遠目にも二人が凄まじい速さと力で打ち合っていることが分かる。

連撃の合間に、お互いに蹴りを交える場合もある。

リーチの差もあって僅かに槍使いのほうが押しているようにも思われた。

しかし、双剣使いのほうも、一方的に下がるのではなく、繰り出される相手の突きを、片方の剣で受け流しながら間合いに入り込みもう一方の剣で斬撃を与えに行く場面もある。

はつきりとはわからないが、表情や態度にも一定の余裕があるよう

に感じられる。

槍使いの動きは、野生の獣を連想させるものだ。無論、確かな技術がベースにあるのだろうが、本能を優先しているように見えるその攻撃は自由奔放だ。

一方で、双剣使いの動きは、理詰めが無駄をそぎ落としたものだ。熟練の職人が、自身との対話の中で研磨し続けることで身に着けた技術。そんな印象を受けた。

「綺麗だな・・・」

オレは、槍使いではなく、双剣使いの剣と剣捌きに自然と目が吸い寄せられていく。

その非現実的な光景を、いつまでも見ていたいと思ってしまう。

既視感というのとも少し違う。

強いて言えば親近感だろうか。

二人の戦いは拮抗しており、簡単には勝負がつかないそうに見える中・・・

「面白れえっ！とは言え、このままじゃ埒があかねえなっ！」

動きの速さで勝る槍使いが一旦間合いをとると同時に、槍の穂先をやや下に向ける形の奇妙な構えをとる。

そして、一気に禍々しいまでの力がその槍に収束していくのが感じられた。

オレの周囲にある空気、いや大気に含まれる魔力までがその槍に吸い寄せられるように感じられる。

「くっ！宝具を使う気か!？」

それを見た双剣使いは、これまでとは違い、焦りの色を浮かべて、大きく後退して距離をとる。

それとともに、弓矢をどこからともなく取り出して槍使いに狙いをつけた。

「はっ！ようやく本来の武器を使う気になったようだな！」

槍使いからすれば明らかに自身の武器が届かない間合いになったにも関わらず、表情には余裕の色があり、その場に留まる。

槍使いの言葉に構わず、双剣使いが矢を放った。

ゴツ！

ここまで風切り音が聞こえてきそうな凄まじい勢いの矢だったが、槍使いは事も無げにその矢を躲していた。

「どうも、こっちの正体がバレている気がするんでな。ここで決めさせてもらうぜ！」

その攻撃を合図にしたかのように、片手で槍を肩に乗せるようにして構えた。

「どの程度の範囲に影響があるかわからんな。止むを得ん」

対峙する双剣使いは、有効ではないと判断したか、弓をその場に放り投げた。気にするようにちらりと後方に視線を送る。

オレは、その時初めて、その場にもう一人の人物がいることに気が付いた。もつとも、このとんでもない戦いをしていた槍使いと双剣使いの二人が、本当に人間なのか疑わしいが・・・

その人物は、はつきりとはわからないが、髪が長いことやほつそりとしたシルエットから若い女性のように見える。

双剣使いはオレには聞こえない小さな声で何事かを呟き始めた。

それは魔術の詠唱のように感じた。そして、心なしか知っているフレーズのように聞こえた。

「その心臓、打ち抜かせて貰う!!」

槍使いが、僅かに助走して空高く跳躍すると、

「――突き穿つツ――」

大きく、体をしならせて後ろに槍を引く。

空中から投擲する体勢だ。

「――死翔の槍!!」

凄まじいまでの魔力を帯びた死の槍がその手から放たれた。

ゴウツツ!!!

対峙する双剣使いは、突き出した右腕の手首を左手で支えるように掴んだままに叫ぶ。

「熾天覆う七つの円環!!」

同時に、七枚の桜色に輝く花卉が右手の平の前面に大きく展開された。

ズシャアツツ！

その花弁は、襲い掛かってきた凄まじい圧力を持つ死の槍を食い止め、拮抗した。

やがて、花弁は槍の圧力の前に、一枚また一枚と散っていき……

「支えきれないか!？」

「くそがつ!!これじゃとても斃しきれねえっ!」

最後の一枚も貫いて、

ズサツ！

鈍い音とともに血飛沫が舞う。

「アーチャーッ!」

初めて双剣使いの男の後方にいた女性の声が聞こえた。

「あの声は……」

驚くことに聞き覚えのある声だった。

「ちっ!とんでもないな!」

「こっちのセリフだぜ!」

赫い槍は勢いの大半を殺されながらも、その余波で双剣使いにダメージを与えていた。

とは言え、戦闘不能となるような傷ではないようだ。

すぐに双剣使いは、左腕にどこからともなく取り出した先ほどの剣を手にしていた。そして、着地したばかりの槍使いに接近すると、肩口に剣を振り下ろす。

おそらく先程の攻撃は、必殺の一撃だったのだろう。槍使いは全力で繰り出した反動で体勢を崩していたこともあり、慌てて大きく後方に跳躍しながら避けた。

「……さてどうするか。宝具まで凌がれるとはな。そこまでの盾を持ち、双剣を振るう弓兵なんてさっぱり心当たりがないぜ」

「こちらは想定通りの答えを得たな。アイルランドの光の御子。アルスターの英雄、クー・フリーンか」

「ちっ。有名過ぎるのも時として仇になるもんだ。まあ真名まではわからんがそつちの特徴はだいたい掴んだ。マスターも戻れと言っているしな……」

と、独白した次の瞬間、

「誰だっ!？」

槍使いが叫んだ。

ヤバい!

見つかった?

と一瞬焦ったが、違ったようだ。

槍使いの顔は、オレのほうを向いてはいない。

そもそもオレは弓道場の陰に隠れるような位置にいるため、あいつらからは見つかり辛い。

「慎二?」

槍使いの視線の先には、青くウェーブのかかった髪のおれの良く知る生徒がいた。

「ひいつ!!」

恐怖に満ちた声を上げて、青い髪の学生、即ち間桐慎二が慌てて逃げだした。当然、槍使いから少しでも離れるように、方向としては校舎の方へと走る。

オレから見ると、左に向かっている。

「取り敢えず、今日のところは休戦だ。次は全力で削り合いたいもんだな」

「そういう趣味は特にないが、休戦には賛成だな」

それだけの言葉を先ほどまで死闘を繰り広げていた赤い双剣使いと交わして、槍使いが慎二に向かって駆けだした。先ほどまでの戦闘の時ほどの速度はない。

本気ではないのか、あるいは戦いの疲労が多少なりと残っているのかはわからない。

しかしそれでも圧倒的に早い。人間に可能な速さを凌駕していた。そんな様子をオレは、慎二と槍使いが重なるはずの交点を目指して全速力で走りながら見ていた。

直感的にあいつが慎二を殺すつもりなのが、あまりにも明確にわかった。

だから、オレは駆けだした。

慎二を殺させるわけにはいかない。助けなくちゃいけない。それだけがオレの頭を埋め尽くしていた。

一方の慎二は振り返りながら槍使いの速さを見て、表情は絶望的なものになる。

が、何かを思い出したように叫んだ。

「・・・ラッ・・・ライダーアーツツ!!どこにいる!?!早くっ!早く僕を助けろおぉっ!!」

らいだー?

なんのことだろう?

一般的にはバイク乗りのことだとは知っているが・・・

そんな疑問に思考を奪われたが、それも一瞬のことだった。

槍使いの間に慎二が捕らえられた。

槍が一瞬引かれ、その穂先が獲物である慎二に狙いを定める。

「悪いが成仏しやが・・・」

そんなセリフを口にした槍使いがオレの存在に気付いた。

「なんだと!?!」

同時に、オレは自分の体を投げ出し、慎二の体を右腕で押し出すことができた。

ドンッ!

「うわあっ!?!」

慎二の声が校庭に響く。

オレという不可解な闖入者の存在を認識して驚きはしたものの、槍使いはあくまでも当初の目的を果たすべく、慎二に向けて槍を突き出したが、その穂先には既に目標物はなかった。その代わりに新たに出現したオレの右腕を掠めていった。

「ぐっ!」

結果的に、オレの制服の袖が切り裂かれ、槍は僅かにオレの右腕の皮膚に赤い傷跡を残したのみだった。

オレに押し出された慎二はそのまま横滑りして地面に転がった。

オレ自身はダイブした体をそのまま前転させて、きっちり三回転してその勢いですぐに立ち上がる。

慎二を助けることには成功した。

が、正直これ以降のことは何も考えていなかった。今やらなくてはいけないと思ったことを全力で実行しただけなのだ。

「ほう……」

槍使いは少し驚いたような、それでいて感心したような表情を浮かべたが、それだけだ。

決して焦ったり、怒ったりという感情は見せていなかった。

当たり前だ、獲物が二匹になっただけ。

仕事にかかる時間がほんの僅かに伸びただけなのだから。

「……え……衛宮？ 僕を助けてくれたのか……」

と、地面に転がったままの慎二が驚く。

「もう一人ギャラリーがいやがったのか……いや、そっちの小僧はギャラリーじゃねえかもしれないねえな」

槍使いは慎二をチラリと見る。

「それにしても、無謀というか、考え無しというか……難しいところではあるが、とんでもねえ度胸だな坊主。お前もさっきの戦いを見ていたんだろ？ それなら、ここで飛び出してくるということが、どれだけ『死』に直結しているかってことが想像できるだろうに」

「……」

オレには返す言葉がない。

そのとおりで。そんなことはわかっていた。

それでも、こうすべきだと思った。だから走り出したのだ。「なににせよ。おしまいだ。悪く思うなよ。こっちはこれも仕事なんぞでな」

あつさりと言って、微塵の躊躇いもなく、男は死の槍を軽く構える。まだだ……

次の一手を考える。とにかく初撃を躲すんだ。

やつの槍は速い。絶対に目では追えない。であれば、タイミングだけを合わせる。

足掻けるだけ足掻くんだ。

そう決めた。

その時、

ギヤリンツツ!!

という音とともに、銀色に輝く鎖がオレに狙いをつけた赫い槍に絡みついた。

その僅か後に。

ふわり・・・

と灰ほのかに甘い香りを纏って、薄紫色の髪が柔らかに広がっていき・・・

オレの視界を埋め尽くした。

「感謝します」

冷たく低く、しかし言葉どおりの感情を含んだ美しい声がオレの耳朶を心地よく震わせた。

R t u r n

「サーヴァントがいる?」

学校周囲の状況を確認して、慎二の元に戻ろうとした時に気付いた。

それも二人。

戦っているのだ。

だから、大気中の魔力が震えている。

さらに、その震えが大きくなる。直感的に宝具が発動される予兆であると理解した。

「まずいですね・・・」

完全な失策だった。

怠慢と言われても仕方ない痛恨のミス。

ほんの僅かにしろ、仮のマスターである慎二から離れてしまった。

極小の可能性だとしても、外で行動する以上、常に聖杯戦争参加者との遭遇戦は想定しておくべきだった。

特に本来の主従関係ではない私と慎二の繋バがりスは弱い。

令呪もないから、瞬時に私を呼ぶこともできない。

慎二を疎む気持ちだが、行動に顕れてしまったのかもしれない。

彼を嫌ってはいいるが、それとこれとは話が別だ。

義務は果たすべきだし、彼が脱落すれば桜は望まぬ戦いに巻き込まれる。臆視という得体のしれない老人の挙動も気にかかる。

少なくとも今の段階で、無闇に慎二を危険に晒すわけにはいかないのだ。

とにかく全速力で駆ける。

万一、二騎のサーヴァントのうち一騎でも、慎二の存在に気付けば狙われる可能性がある。

即座に口封じとして殺されるかは、相手次第ではある。

だが、【偽臣の書】の存在に気付けば、マスターであることが露見し、確実に命を奪われるだろう。

学校のグラウンドに辿り着くと、慎二の気配がする方向に一直線で走る。

青い服を着た赫い槍を持つサーヴァントを視界に捉える。

「ランサー？」

その男も慎二に向かって走り出した。殺意は明らかだ。

私と同等の速さを持っている。到底間に合わない。

私が辿り着く前に、槍は慎二を串刺しにするだろう。

だが、私は気付いた。

慎二に向かっているもう一つの人影があることを。

「あれは……？」

それはあの衛宮士郎に他ならなかった。

ランサーも慎二もまだ彼には気付いていない。

慎二は私に助けを求めて大声で叫んでいる。

タイミングとしては衛宮士郎が慎二に到達するほうが、ランサーの槍よりも一瞬早いことがわかった。

「一体、何を……」

彼が何をしようとしているか。

それは、あまりにも明確だった。これまで聞いてきた彼の言葉。見

てきた行動。そして今、彼の眼に宿る鋼の意思。
助けるつもりなのだ。

あのどうしようもない私の仮初のマスターを。

何の見返りも考えず。

ただそうあるべきと決めている。

「彼は尋常ではありませんね」

いずれにせよ慎二が助かる道筋が見えた。

こちらとしては、衛宮士郎の行動を前提として、自分の成すべきことを瞬時に考える。

慎二は彼の行動により、初撃を避けられるだろう。

「うわあっ!?!」

慎二の無様な悲鳴が校庭に響く。

果たして衛宮士郎は、見事に慎二が槍の餌食になることを回避させてくれた。

であれば、私は二撃目を止める。

ランサーの槍が闖入者である衛宮士郎に向いた瞬間に、私は杭剣に繋がれた鎖を放つ。

ギャリンツツ!!

鎖は狙いどおり槍に絡みつき、攻撃を中断させる。

その僅かな時間で、私はランサーと衛宮士郎（と慎二）の間に体を割り込ませることに成功した。無論、両手には杭剣を握っており、ランサーの次の攻撃に備える。

「感謝します」

自然と自分の口からその言葉が紡がれた。

衛宮士郎に対する正直な心情だった。

私という存在に彼が面食らっているのが、後方の気配だけでわかった。

とは言え、状況は楽観できない。

ランサーは先程、別のサーヴァントと戦って消耗していると推測できるが、私自身も本調子には程遠い。今の状態では、ランサーの消耗を計算に入れても、劣勢を強いられるのは間違いない。

「そっちの坊主の呼び掛けからすると、あんたはライダーなんだな。全く一晩に二組の参加者を見つけちまうとは運がいいんだか悪いんだか……」

私の乱入にも、さほど驚く様子も見せずランサーが口を開いた。「しりぞ退いては如何ですか？ だいぶ消耗しているように見えますよ」
できれば、退却してほしい。

こちらの意図を悟られない程度に、水を向けてみる。

「それも有りなんだが。折角の機会だ。少なくとも力量を図るくらいはしておきたい……」

私の言葉はあっさりとは却下され、警戒していたとおり、ランサーは踏み込んできた。

「つんだよな!!」

ギンツ!!

交差した杭剣で頭上に槍を反らしながら、ランサーの懐に飛び込み、そのまま下段への回し蹴りで、足を払いに行く。

この程度の動きは読んでいたのだろう。軽く跳躍して私の蹴りを躲しながら、

ランサーは、槍をそのまま縦に打ち下ろしてくる。

ガイんツツ!!

これも杭剣で受け止めるが、すぐさま今度は手元に引いた槍が私の胸元に突き出されてくる。

安易に後ろに下がるわけにはいかないため、何とか右手の杭剣で横に槍を反らしながら懐に飛び込み、左手の杭剣をランサーの胸元に突き立てようとしたが、向こうは大きく後退して間合いをとる。

「……こんなもんか……」

眩くランサーには余裕が感じられる。

本来なら私としては、大きく動いてヒット&アウェイに徹して攻撃主体で立ち回りたいのだが、守るべき対象がいるので、戦い方が限定されてしまう。

真つ当に戦ってすら不利であろう相手にこのハンデは大きい。

「何やってんだライダーッ！ そんな奴とつと片付けろよ！」

気持ちいいくらいに、心が折れそうになる叱咤が飛んでくる。勘弁してほしいところだが、

「慎二……こっちに来い。俺たちはなるべく離れたほうがいい」
どうやら衛宮士郎は状況が見えてきているようだ。

私が戦い辛そうにしていることがわかったのかもしれない。

「うまく立ち回っているが、ギリギリで戦っているのがバレバレだな。本当なら機動力を活かしたいんだろうが、後ろの小僧共が足枷になっているってどこか。そういう意味ではあの赤頭の坊主はしっかりとやがるな」

ランサーが槍を肩に乗せて、ニヤリと笑う。

「それにしても、あんたライダーのくせに騎乗していないんだな。宝具を使わせないと何に乗るかは拝めないってことか」

「答える義務はないでしょう」

だが、ある程度この会話に付き合って、衛宮士郎と慎二が離れる時間を作りたかった。

「そりやそうか……あんたも素っ気ないんだな。さっきのアーチャーも面白味がなかったが……双剣使いのアーチャーに、徒歩のライダーか。この分だと、セイバーも剣を持ってないかもな」

「あなたは本当に軽口が多いですね」

少し本気で呆れながら突っ込んだところで、聞き捨てならない単語があったことに気付く。

それとともに、この状況の危険性にも気付く。

「アーチャー？先ほどあなたが戦っていたのはアーチャーだったんですね？」

「そうだが、それがどうし……」

ランサーも気付いたようだ。

「まずいか」

「でしようね」

アーチャーの姿は見えない。

遠距離攻撃を最も得意とする敵が、こちらの位置がわかっている状況で、こちらは相手の位置がわからないのだ。

「休戦だな」

「当然ですね」

決まってしまうえば、ランサーの動きは速かった。

「だいたいあんたの力もわかったしな。次は全力で殺りにいくぜ。じゃあな」

そう言い残すと、学校を囲む柵を飛び越えて闇の帳の彼方へと消えていった。

こちらも早々にこの場を離れるべきだ。

マスターである慎二を探すと、彼は半ば衛宮士郎に引き摺られる形で校舎付近の物陰まで退避していた。

「あの青いサーヴァントは逃げたのか？」

慎二は、戦況をしっかりと見ていたわけではないのだろう。

「あれはランサーですね。退いたのはアーチャーの狙撃を警戒してのものです。我々もこの場を早く立ち去るべきです」

「そ、それもそうか」

流石に慎二も現状の危険性を認識したようだ。

「衛宮。どうだ？これが僕のサーヴァント、ライダーだ。さっきの戦いは凄まじかったろう。こんなとんでもない力を持った使い魔を僕は自由に操れるんだぜ」

・・・私は慎二を未だに見誤っているようですな・・・

「どうやら本当の理解には程遠かったようで、いきなり、自慢話(?)を始めてしまった・・・」

そもそも一般人に対してこんな話をして理解されるはずもないし、本来聞かせるべきではない。

まあ戦いを見られてしまった以上、大差ないが。

「使い魔？そんな風には見えないな。確かに凄い力があるのはわかるけど、どこからどう見ても人間じゃないか」

「・・・？」

この反応は想定外だ。彼は『使い魔』を知っているような口ぶりだ返してきた。

一般人であれば、意味が分からず呆然とする単語だろう。

疑念は残るが、これ以上危険な状況を継続するわけにはいかない。

「慎二、これ以上過剰な会話を続けるわけにはいきません。行きましよう」

「ち、仕方ないな」

「そうだな。済まなかった。そして助けてくれてありがとう。あんたが来てくれなければ間違いなくオレは殺されていた」

衛宮士郎は自然に私への謝意を口にした。

「いいえ。こちらこそ、慎二を助けていただきありがとうございます。ごさいます」

全くおかしな話である。

彼は慎二のことなど見捨てて帰れば良かっただけなのである。

それなのに、間違いなく自分の命が危険に陥るといふとわかっていながら、慎二を助けたのだ。

私が彼を助ける形になったのは、完全に結果論である。

全く釣り合いが取れていない。

「あと、正直何がなんだかよくわからないけど、慎二が危険な目にあっていることはわかった。オレが言うのも変かもしれないけど、これからも慎二を守ってやってくれ」

「え？」

さらに思いもかけない言葉にまた、啞然とさせられる。

「あ……いや……すまない。女性にこんなことを言うのはおかしいな……あんた自身も危険な目にあわないよう気をつけてくれ」

体が石になったような錯覚を覚えた。

この少年は私を呆然とさせる天才なのだろうか？

今の私はさぞ間抜けな顔になっているはずだ。

それでも何とか気持ちを立て直して、言葉を捻りだす。

「本当にあなたはお人良しなのですな」

そうとだけ返して、私は慎二を小脇に抱え間桐邸に向けて走り出した。

おそらく私の顔には奇妙な笑みが浮かんでいるだろう。

「そう言えば、慎二。彼に掃除のお礼を言うのを忘れてしまいました」

「はあっ!?!何でそんな必要があるんだよ!?!」
ね

第3話 　　く1日目②　　「開戦、そして激戦」

E t u r n

「問おう。あなたが私のマスターか？」

敷地内の庭に建てられた土蔵。

そこは、オレが魔術の訓練をする場所。魔術師が構える工房に該当する（それにしてもはガラクタが多すぎるが）。

この夜、そこで金髪の少女は呆然とするオレにそう問いかけてきた。

学校でのとんでもない戦いを見て、あの「ライダー」に助けられながら徒歩で家に帰り着いた。

そして、オレはあの槍使い「ランサー」に再び襲われたのだ。

家に張り巡らされた検知の結界により、襲撃には気付いた。

魔術で強化した木刀を使って、奇跡的に攻撃を凌ぎ、この土蔵まで逃げて、そして本当に『詰み』だった。これ以上足掻いても自分ではどうにもならないという絶体絶命の状況に追い詰められた・・・

その時、彼女が突如として出現したのだ。

凜とした佇まいの金髪碧眼の少女。

西洋の騎士がよく着ている（実物を見たことはないが。）白銀の甲冑に身を固めたその少女は、とにかく美しかった。

「サーヴァント、セイバー。召喚に従い参上した」

彼女が突然現れたことではなく、彼女のその姿に見惚れて呆然としていると、ほんの僅かに昨日から左手甲に浮かび上がった痣が熱を帯びた。

「我がマスターよ。これより我が剣は貴方と共にあり、あなたの運命は私と共にある。ここに契約は完了した」

そう告げるとともに、彼女は開け放たれた扉の向こう。ランサーの元へと駆け出した。

いや、駆け出すと言うよりも、一足で飛び込んでいった。

その手には何も持っていない。しかし、確実に何かを握っていた。その腕を一気に振り下ろす。

「サーヴァントだどっ!」
ギンツ!

ランサーも何も見えなくても反射的に動き、槍でその不可視の何かによる攻撃を受けていた。

しかし、セイバーと名乗った少女の攻撃は苛烈だった。間髪入れずに続け様に斬撃（おそらく）、を浴びせる。

「ギンツ! ギンツ! ギャリツ!

重い金属音が連続して響き、その度にランサーは後退する。

オレが把握しているだけでも、この夜だけで三戦目となるランサーは、万全ではないのだろう。しかし、それを差し引いても、少女の力は非常に優れているように見えた。

少なくともランサーはアーチャーとライダーに対しては優勢だった。

そのランサーを少女は圧倒しているのだ。

「つええな!」

そう賞賛を送った直後、後退する一方だったランサーは、間合いが測れないのも気にせず、自身の前に槍を斜めにする、盾として押し出すように踏み込んだ。

一瞬流れを断ち切られた少女は不可視の武器（おそらく剣だろう）でその前進を食い止めた。両者の武器が噛み合った状態で、一瞬の間、力が拮抗する。

それも束の間、二人は各々の武器を押し出すようにして、お互いを弾き飛ばした。その動きにより、両者の間に大きな距離ができた。

これがランサーの狙いだったのだろう。

「あばよ!」

というセリフとともに、ランサーはそのまま背を向けて大きく跳躍して門を飛び越えていった。

「・・・くっ!」

少女は悔しそうな表情を浮かべたが、すぐに冷静になった。

「まあ、止むをえませんね。マスターの危機を救えたことで良しとしましよう」

速さに関しては、ランサーが一枚上手と判断したようだ。

少女は、すぐに追うことを諦めた。

取り敢えず、状況としては当面の危機は去つたと見ていいだろう。

こちらとしては、色々と聞きたいことだらけだ。

彼女は自分をサーヴァントだと告げてきた。

ということは、慎二が関与している出来事と、彼女も関係があるということだろう。

いや、オレも関与することになったと考えたほうがいいのかもしれない。

「とにかく、先ずはお礼を言わせてくれ。助けてくれて本当にありがとう。えっと・・・なんて呼べばいいのかな?」

「私はセイバーのクラスで現界したサーヴァントです。ですからセイバーと呼んでください。マスター」

「わかった。セイバー。オレは衛宮士郎。士郎と呼んでくれればいい」

「わかりました。それでは『シロウ』と。ええ。この発音は私には好ましい」

と言ったところで、突然セイバーの顔が険しくなった。

「もう一組、敵がこちらに向かってきています。気を付けてください、マスター。いえ、シロウ。私は全く問題ない状態です。うまくすれば、今度は逃がさずに仕留めることができますでしょう」

と言うが早いのか、彼女は屋敷の正門を飛び出していった。

「ちよ、ちよっと待ってくれ!」

慌てて、オレも正門から外へ出る。

既に戦闘は始まっていた。

というべきなのか終わっていたというべきなのか。

相手は先ほど校庭でランサーと戦っていた赤い外套を着た双剣使いの男だった。

が、数合打ち合ったところで、セイバーの剣が彼をとらえ、ダメー

ジを負ったのだ。

その瞬間、後ろにいた少女が叫んだ。

「アーチャー！」

その少女は、先ほどの校庭での戦いの際にも双剣使いと共にいた人物であり、また、オレ自身もよく知る穂群原学園の女子生徒だった。

数刻後、オレの家、即ち衛宮邸の居間に、オレと二人の女子が座っていた。

普段よくいる二人、藤ねえと桜とは全く違う闖入者だ。

一人は自称オレのサーヴァント。セイバー。

もう一人は、学年・・・いや学校一の優等生【遠坂凜】である。

二人の前にはオレが淹れたお茶が置かれていた。

「——というわけ。だいたい分かった？」

「納得できるかはともかくとして、内容はわかったよ。遠坂。オレは、その聖杯戦争ってやつに巻き込まれ、他のマスターやサーヴァントを斃していかなくちゃいけないと言うんだな？」

オレは、話の概要を確認した。

「そうよ。この戦いからは逃げられない。覚悟を決めたほうがいいわ」

先程、うちの前の路上に出た時、遠坂のサーヴァントであるアーチャーにオレのサーヴァントであるセイバーが手傷を負わせ、咄嗟に遠坂はアーチャーを消した。正確には【霊体化】というらしいが。

そして、遠坂自身がセイバーに魔術で攻撃を仕掛けたが、それをセイバーがあつさりと突破して、切りつけようとしたのだ。

それをオレがすんでのところで、制止した。

何せ事情もよくわからないまま、学校の同級生をいきなり切り殺されては堪らない。

セイバーは不満そうではあったが、何とかこちらの言い分を聞いてくれ、遠坂もこちらに感謝しつつ、お互いの事情を聞くためにオレの家に入ってもらったというわけだ。

遠坂からは、【聖杯戦争】、【サーヴァントとマスター】、【令呪】の説

明を受けた。

オレは槍使いであるランサーと双剣使いのアーチャーの校庭での戦闘を目の当たりにし、さらにライダーとの接触もあったため、実感をもって遠坂の説明を聞くことができた。

「——そして、セイバーがランサーを退けてくれたんだ」

逆にこちらからは、オレが魔術師の端くれであること、弓道場の掃除からの流れで校庭での戦闘を見たこと、そしてセイバーが突然現れたことなどを説明した。

「ランサーに慎二が襲われそうになって、それを衛宮君が助けた。その後、慎二のサーヴァントが現れて戦闘になったのも見ていたわ。アーチャーがダメージを受けていたから、ランサーが慎二を追った時、すぐに私達は退避して物陰に隠れたのよ」

ちよつと情けない話だけだね、と自嘲気味に遠坂は続けた。

「そのせいで衛宮君が危険に陥ることになったから、後ろめたい気持ちもあるわ。ごめんなさい」

「いや、ランサーとライダーの戦闘が中断されたのは、アーチャーの狙撃を警戒したからだ。見たところ、ランサーのほうが上手のように見えたから、あのまま戦いが続いていたら、ライダーが負けて、俺たちがまた襲われる可能性が高かったんじゃないかな」

学校での戦いを思い出しながら、正直な感想を伝える。

「結果的に、あの場に遠坂達の姿が見えなかったことで助けられた部分もあるから、おあいこだろう」

「驚いた。衛宮君、状況判断が的確なのね」

遠坂が少し感心したように、口に手を当てた。

「それに、ライダーとランサーの戦闘も素人目には拮抗していたように見えたんじゃないかしら。衛宮君は確か弓道部には所属していたと思うけど、他にも何かやっていたの？」

「藤ねえ……いや、藤村先生とは昔からの知り合いだから、剣道は多少できる。この敷地内に道場もあるしな」

「成程ね。能ある鷹は何とやらというか……いいえ、私自身が認識している事なんて当てにならないってことよね。慎二がマスターだっ

たことも完全に想定外だったわけだし・・・」

遠坂は、そう言いながらお茶を啜った。

「慎二もマスターなんだから、魔術師なわけだろ。あいつ自身、サーヴァントを従えていることを誇らしげにしていたし。魔術師って基本的には魔術協会に所属していて、少なくとも近場の魔術師くらいは把握しているもんじゃないのか？」

「ええ。あなたの言う通り、慎二の家系が魔術師であることは知っているわ。でも、あいつは魔術師じゃない。これは断言できるの。衛宮君は、レベルはともかく魔術が実際に使える。でもあいつは『全く』使えないの。それは確か。魔術回路がないんだもの」

「ということは、魔術師であることは、マスターであることの必須条件ではないってことだな？」

「そうね。私の認識とは違うけど、現実として受け入れざるをえないわね。確かにマスターの役割は、召喚と魔力供給だけなんだから」

「基本的には令呪でサーヴァントを制御するんだけど、もし、サーヴァントの間に絶対の信頼関係があれば、令呪がなくてもサーヴァントが『マスター』と認めればマスター足りうる。魔力は自前の貯蔵と、別の手段による供給も可能だから」

別の手段による魔力供給が何なのか気にはなるが、それ以上に聞きたいことがある。

「そもそも、何で遠坂はオレの家に来たんだ？校庭の場面を最後まで見ていたんなら、ライダーのマスターがオレじゃないってこともわかったんだろう。『一般人』のオレを殺しにきたわけじゃないよな？」

「そんなわけないじゃない！」

と叫んで、顔を赤くした。

「まずい。本気で怒らせたか？」

「ランサーがあなたを殺しに来るかもって思ったからよ。あの場では一旦離脱しても、基本的には聖杯戦争は秘匿されるべきもの。マスターである慎二は、逆に聖杯戦争の参加者なわけだから後は単純に競い合う相手になるけど、あなたは知るべきでない事情を知った一般人

だから」

ということとは、オレは、オレを助けようとした相手を危うく殺すところだったことになる。

申し訳ない気持ちでいっぱいになり、顔と心臓が一気に熱くなった。

「すまないっ！遠坂。このとおりだ！オレは自分を心配してくれたやつを間違つて殺しかけちゃった！」

両手を正座した膝に置き、テーブルにぶつかる直前まで頭を下げて謝罪した。

「え？・・・や・・・やめてよ。衛宮君。私はそんな助けるつもり・・・だったのは確かだけど・・・」

遠坂は大いに慌てて、両手を振った。

「そもそもこれは戦争。あなたはマスターでサーヴァントを召喚した。私はそれと知らずに、ノコノコとあなた達の目の前に現れた。そして、私たちは戦闘になって、私が負けそうになった。簡潔に言えばさっきの状況はそれだけなの」

その場限りでオレへの配慮から言っているだけではなく、遠坂が本気で言っているのがわかった。

つまり、彼女はそれだけの覚悟を固めて、この聖杯戦争に臨んでいるということなのだろう。

「遠坂の覚悟はよくわかった。それでもオレの謝罪の気持ちは変わらない。そして、お前がすごくしつかりしていて、それでいて、思いやりのある人間だつてことはよくわかったよ。オレ、お前みたいなやつは好きだ」

「へ？..」

遠坂の顔が一層真っ赤になる。

あれ？オレ、今おかしなこと言ったか？?

「だから、お前と戦うことにはならないよう努力する」

「・・・そう・・・私もあなたがどんな人間だか、わかったような気がするわ。でも、この戦いはそんなに甘くはない。今は、まだ受け入れきれないと思うけど、すぐにわかるわ」

遠坂はオレの意思を受け止めたうえで、しっかりと忠告をしていく。

真っ赤になつていた顔は、既に落ち着きを取り戻している。

「ちようどいいわ。衛宮君には今日のうちに顔を出してほしいところがあるの。私も一緒に行くわ」

そう言つて、遠坂は立ち上がった。

遠坂がオレを連れて行くのは、新都側にある「冬木教会」とのことだった。

歩くと1時間ほどかかる。

その道すがら、オレはセイバーと少し話すことにした。家の中では殆ど彼女と会話できなかったからだ。

「セイバー、お前は何か聖杯に託す望みがあるのか？オレはまだこの聖杯戦争というものについて否定的だ。遠坂は避けられないと言っていたが、今のところ積極的に関わる理由がないんだ」

「シロウ。出会つてまだ僅かな時間でしかないが、あなたの気質は概ねわかつてきている。私を召喚したのも偶然ということもわかつたし、魔術師であるが、殆ど一般人と変わらない。魔力供給も決して潤沢とは言えない」

「すまないな」

「いいえ。私は、マスターがあなたであったことについては、否定的ではない。むしろ好ましいと思つている」

「え？」

「先ほどの遠坂凛との会話を聞いていたが、私に出会う前の行動や、戦闘に対する見識は十分に誇つていい。あなたの勇気や聡明さ、そしてその気質は私にとっては好ましいものだ」

オレ、今、物凄く褒められているのか？

「ですから、運悪くこの戦いに巻き込まれてしまったあなたが、戦わないうという結論に至ったとしても止むを得ないと思つているし、尊重する。そのようなあなたがマスターとなったのは運命だったということだ」

セイバーの言葉は、全て本心から発せられるものなのだろう。一言一言に重みがある。

「勿論、私としては残念ですが、その場合には、私自身の望みが叶うような次善の方策を考え、実行するだけです。戦場では常に最善の道が開けるわけではない」

オレは召喚したのがセイバーで本当に良かったと思った。

彼女を召喚できたのは、このうえもない幸運だったのだ。勿論、彼女の強さも含めてだが、この高潔で清廉な心構えがどれほど尊いものか、オレにも十分に分かった。

「ありがとう。召喚したのがセイバーでオレも本当に良かったと思う。実際、セイバーがいなければ、間違いなくオレは殺されていた」と口にしてふと、あれ？全く同じ言葉を口に行っているなど、気付いた。

それは、あの紫色の髪のサーヴァントだったと、頭を過った。

「セイバーは紛れもなくオレの命の恩人だ。そして、セイバーにも望みがある。そのことも考慮したうえで、オレはこれからの行動を決めることにする」

「ありがとうシロウ。ですが、あなたは自分が正しいと思う決断をすればいい。その結果によって私があなたに対して負の感情を抱くことは決まないと、この場で誓います」

「わかった。本当にありがとう」

オレは、セイバーの言葉の全てを受け止めて決断することを心に誓った。

やがて教会に到着し、主である神父【言峰綺礼】から、聖杯戦争に関する情報を一通り聞かされた。

オレにとつて殊更に重要だったのは、この儀式が既に5回繰り返されていて、しかも10年前に起きた前回の戦争の爪痕があの大火災であるという点だった。

オレはその事件の被害者だった。

その大火災で両親と妹をなくすとともに、オレ自身も生死の境を彷徨

徨い、養父である【衛宮切嗣】と出会うことになったのだ。

それは、決して忘れることのできないものであり、間違いなく今もオレを規定する出来事であり続けている。

即ち、この儀式に参加するための理由となりうる真実であった。

「戦うしかない」

結果的に、先刻セイバーと話し合った時の懸念が実現するような決断には至らなかったわけだ。

「喜べ少年。君の願いはようやく叶う。たとえ君にとって容認しえぬものであろうと、正義の味方には倒すべき悪が必要だ」

「なんだと・・・？」

オレが心に抱く『正義の味方』への憧れと執着。

その何をこの神父が知り得ると言うのだろうか。

「君の葛藤は人間としてとても正しい。忠告だが、帰り道には気をつけたまえ。これより君の世界は一変する。君は殺し、殺される側の人間になった」

神父の言葉が礼拝堂内に重く響く。

その言葉は殆どが真実だろう。

しかし一つだけ違う、とも思った。

オレの世界は、あの校庭での出来事に遭遇した時点でどうに変わっていたのだ。セイバーには参加を決めかねていると伝えたが、神父の話を抜きにしてもオレはこの戦いに関わる決断をしていただろう。

この聖杯戦争には、既に慎二と遠坂というオレが知っている人物が関与している。

それだけではなく、サーヴァントであるセイバーやそしてライダーも・・・

サーヴァントも人間だ。

「もう、目を瞑ってやり過ぎるなんてできない」

例え参加することで、目を背けたくなるような事態を目の当たりにするのだとしても、無関心を装うことなど不可能になっていたのだ。

そう思いながら、教会を後にした。

「それじゃあね。衛宮君。あなたが戦うと決めたからには、ここからは馴れ合えない。私とあなたは敵同士。次に出会ったときには容赦しないからそのつもりでいてね」

「遠坂の意思はよくわかった。けれど、オレはオレなりのやり方でこの争いを止めるつもりだ。遠坂はいいやつだし、頭もいい。オレの存在が、遠坂にとつてプラスになり得るなら助け合える可能性がある筈だ」

「・・・そうね。あなたの言い分は正しい。お世辞も冗談も抜きで、あなたの活躍に期待しているわ。それじゃお先に」

遠坂はそう言つて、協会の敷地を後にした。

実際には、ここからだと言坂の家も、オレの家も方向は同じなので、途中まで同行するのが自然だったのだが、彼女なりのけじめというやつだろう。

オレもそれを尊重して、少し間を空けることにした。

セイバーに改めて話すこともある。

「セイバー。神父の話聞いて、オレはこの戦いに参加することに決めた。正直なところ、個人的な理由ができたんだ。ただ、セイバーの望みを叶えるために、積極的に他の参加者を斃すという動き方にはならないと思う。それでも、オレをマスターとして認めてくれるか？」

「シロウ。最初に言つたはずだ。剣としての私をあなたに捧げると。そして、先ほどもあなたの性質を理解したうえで、マスターとして認めると伝えた。あなたの迂遠さは既に受け入れている」

「ありがとう」

そうとしか言えない。セイバーの言葉には感動すら覚える。

こんなオレを認めてくれるのだから。

「改めてよろしく頼む。セイバー」

そう言つて右手を差し出す。

「こちらこそ。シロウ。決して楽な道程ではないでしょうが、あなたとなら苦難を乗り越えていけると信じている」

セイバーもすっかりとオレの手を握り返してくれた。

紛れもなく少女の手。しかし、それはこの上もなく頼もしい騎士の

手でもあった。

取り敢えず、今日は家に戻ることにした。
オレもセイバーも既に複数の戦闘に遭遇している。

少し落ち着いて、これからの方針について考えたいし、お互いの理解を深めたいということで見解は一致した。

そして、深山町方面に向けて歩き出したのだが、新都と深山町を繋ぐ橋付近の公園でそれを目撃することになった。

「なんなんだ・・・あれは?」

戦っているのは、遠坂のサーヴァントであるアーチャーと、身の丈2mを遥かに超える灰色の巨人だった。

遠坂達がオレに背を向ける形となっている。おそらく、オレ達と別れた後、深山町に戻ろうとしていたところで、相手のサーヴァントに遭遇したのだろう。

間が良すぎることも考慮すると、待ち伏せされたのかもしれない。

巨人のサーヴァントの後方には、可愛らしい銀髪の少女がいた。その顔には笑みが浮かんでおり、余裕が感じられる。察するに彼女が巨大なサーヴァントのマスターなのだろう。

「—————!」

ひょっとして狂っているのだろうか?

人の声とは思えない、奇音を発しながら巨人は石でできた巨大な剣を、凄まじい速度で振り回していた。

だが、振り回すという表現は正しくはないかもしれない。音にならないその雄叫びをあげながらも、巨人の奮う剣筋には理があった。

速過ぎて殆ど視認できないが、それはわかった。

「これは、キツイな!」

その重く、かつ合理的な斬撃をアーチャーは2本の剣で流したり、かわしたりしながら対応していた。まともに受け止めれば、それだけで腕が砕けそうな攻撃だ。

アーチャーは安易に受け止めたりしないよう腐心しているようだった。

しかし、じり貧だ。

アーチャーは既に今日三戦目だ。しかも、それぞれの戦闘でダメージを負っている。

そして、全ての戦いで白兵戦を強いられている。

アーチャーというからには、本来、遠距離での戦いが得意なはずだが、いずれもマスターである遠坂が敵のサーヴァントの近くにいる状態であるため、離れるわけにはいかない。

今もまさしくその状況にある。

今のところ、巨人は遠坂を狙う素振りは見せないが、アーチャーが大きく距離をとれば、遠坂を標的にするだろう。

「それにしても・・・」

学校で見た時もそうだったが、アーチャーの戦いは理屈抜きで、オレの心を揺さぶる。

どうしても目が離せない。心に直接響いてくるのだ。

憧憬、親近感、既視感などの言葉が連想されるが・・・

これは、『目指すべき姿』なのかもしれない。

そんなオレの心中に構うことなく、戦いは展開する。

ドンツツ！

凝縮された重い爆発音が響く。

戦闘の最中、アーチャーと巨人の間合いが少し空いたところで、遠坂が魔術を放ったのだ。

ここからでははっきり見えないが、何かを投げ、それが巨人に着弾したところで、爆発したようだ。

かなり強力な魔術であることは、オレでもわかるが、巨人は全くダメージを受けていない様子だ。

しかし、一瞬意識はその攻撃に割かれたようだった。

「出し惜しみなどできる状況ではないな！」

その間、聞き取れない内容の詠唱をしていたアーチャーが叫ぶ。

「鶴翼三連!!」
かくよくさんれん

と叫ぶと同時に巨人に向けて、持っていた双剣を両方とも投じた。双剣は過たず巨人の首に挟み込むように飛んでいく。
あやま

巨人は反射的にそれらを剣と、拳(!?)で撃ち落とすが、一方のアーチャーは、投擲と同時に一気に間合いを詰めている。

その手には既に新たな双剣があった。

ランサーとの戦いでもそうだったが、アーチャーはあの剣を何本も簡単に『作り出せる』ようだ。

そして、

「トリス同調、オン開始」

何だって？

微かに、しかし、確かに聞こえた。

何万回と耳にしたフレーズ。

それは何万回とオレの口から発せられことのあるフレーズだった。頭が混乱した。

それがアーチャーの口から発せられたのだ。

そのフレーズとともにアーチャーの構えていた双剣が一回り大きくなり、剣の背にも羽のような装飾が現れた。

剣の性能を強化したのがわかった。

さらに、最初に投擲して弾かれた双剣が、いずれも弧を描き、巨人に背後から襲いかかっていく。

そのタイミングに合わせて、アーチャーは手にした左右の双剣をほぼ同時に斬りつけた。

巨人は、背後から襲ってきた双剣に気が付き、反射的にそれを剣で再度弾いたことで、正面からの剣戟に対する防御が疎かになった。

その隙をついたアーチャーの正面からの攻撃が、巨人の首に直撃した。

ザシユツ!

双剣が太い首に食い込み、血飛沫が上がる。

「トリス同調、オン開始」

アーチャーは間髪入れずに再度双剣を作り出し、

「トリス同調、オン開始」

もう一度強化。

手にした双剣をさらに先ほど攻撃した箇所を重ねるようにして巨

人の首を切り裂いた。

明らかに致命傷となる攻撃だった。

巨人の首からは、夥しい量の鮮血が吹き出しており、頭も半ば傾いている。

下半身が崩れ、膝が地面に着く。

いくらサーヴァントが常人離れた存在であったとしても、間違いなく戦闘不能になったはずだ。

「よくやったわー！アーチャーッ！」

遠坂が喝采を上げる。

しかし……

マスターであるはずの銀髪の少女の顔には焦りの色が浮かぶどころか、先ほどまでと全く変わらない笑みが浮かんでいた。

「意外とやるわねアーチャー。まさかあたしのバーサーカーを1回殺すなんて」

1回？1回ってなんだ？

「宝具を見てもどこの英霊かはよくわからないけど。立派なものよ。でもね……」

「——■■■■■■■■■■——!!!」

巨人の雄叫びが大気を切り裂いてここまで届く。

そして、その体に揺らぐ黒炎が纏わりついたかと思うと、首の傷が見る間に修復され、何事もなかったかのように立ち上がったのだ。

「なにっ!?!」

「そんなんっ!?!」

アーチャーと遠坂が同時に驚愕の声を上げる。

それはそうだ。明らかに相手を斃したと安堵したはずだ。

「あたしのバーサーカーは12回斃さないと、殺せないのよ」
「は？そんなのアリ!?!」

遠坂が思わず、突っ込んだ。

無茶苦茶だ。いや、ハツタリなのかもしれないが、事実だとしたら反則としか言いようのない能力だ。

宝具なしの白兵戦では、明らかにアーチャーは分が悪かった。ランサーと互角に近かったアーチャーがだ。

それだけの戦闘能力を有するサーヴアントを12回殺さないと斃せない？

「シロウー」

隣のセイバーがオレに声を掛けてくる。

今までは少し離れた位置で巨人、バーサーカーとアーチャーの戦いを遠巻きに見ているだけだった。

実際、先ほどの攻撃で、アーチャーが勝っていれば、オレ達は関与することなく、この場から離脱することができたのだが。

ここは判断のしどころだ。

だからこそ、セイバーはオレに指示を仰いできた。

彼女がどういった出自の英霊なのかは、まだわからない。

しかし、その戦闘力や聡明さから、間違いなく高名な英雄だったに違いない。

そんな彼女が自尊心を押さえて、オレみたいな素人をあくまでもマスターとして立てて、意見を求めてくることに感謝した。

「オレをマスターとして信じてくれてるんだな」

「勿論です」

どんな決断にせよ、迅速かつ覚悟を持って実行すべきだ。

アーチャーは先ほどの攻撃や学校で見せた盾など、多様な宝具を使いこなし、白兵戦もしっかりとこなせる優秀なサーヴアントだが…

12回斃さなければならぬという先程の少女の言葉をそのまま信じるのは危険だが、このまま戦えば遠坂とアーチャーが勝つのはほぼ不可能だろう。

だが、そこにオレ達が加勢すれば状況は変えられる。

セイバーは今日3戦目だが、ランサー、アーチャーとの戦いは短時間で終わっており、消耗は僅かだ。

ほぼ万全の状態と言える。

そして何より、

バーサーカーのマスターである少女の目がオレの視線と交わり、

・・・くすり。

と笑った。

オレ達に気付いたのだ。

セイバーと視線を合わせると、オレと同じ結論に至っているのがわかった。

「セイバー。アーチャーに加勢してくれ！バーサーカーは強敵だ。今後、聖杯戦争がどんな展開になっても、いずれは相対しなくてはいけない大きな相手になる。」

ここでアーチャーと共闘してバーサーカーに対処しないと、各個撃破されることになり兼ねない。

「了解しました！シロウー！」

同意の言葉と同時に、セイバーがバーサーカーに向けて駆け出した。

「セイバー!?!衛宮君も!?!」

オレ達に気付いた遠坂が振り向く。

「あいつは、協力しないととても対処できる相手じゃない」

オレは遠坂に駆け寄って行く。

「そうね。アーチャーもよくやってくれたんだけど・・・あれだけ強い上に復活するなんて反則よね」

「ああ。接近戦はセイバーが対応して、アーチャーが遠距離から狙撃する形をとれば、勝機はあると思う」

「そうね」

遠坂が頷く。

「はあああつ!!」

「—————」

セイバーがバーサーカーと剣を交え始めた。

アーチャーは状況を察して、距離を取る。

「アーチャー！あなたは離れて本来の戦い方をして！でも、セイバーを巻き込まないよう決定打を放つ時には合図するのよ！」

「了解した、凜。正直、もう打つ手がなかった」

そう言っつて、アーチャーは橋の方角へと向かった。

ガイインツツ!!

バーサーカーの打ち下ろした岩剣をセイバーが受け止め、弾き返す。

二人は身長で1m近くの差があるが、その攻撃を弾き返すなど客観的に見れば冗談にすら思える。

が、それをセイバーは実現している。

そのうえで、

「つあああつー!」

そのまま、バーサーカーの足に斬撃を浴びせた。

「くうっ・・・!」

しかし、その攻撃は全くバーサーカーには通じなかったようだ。

アーチャーが双剣で攻撃していた時もバーサーカーはダメージを受けていなかったようだし、遠坂の魔術もそうだった。

一定水準を超える攻撃でないと、通じないということだろうか。

「それならば!」

今まで剣の周囲を覆っていた風が払われ、剣本体が露わになった。

美しい両刃の刀身が月光を反射し、白銀に輝く。

打ち込んでくるバーサーカーの一撃を、綺麗に避けながら踏み込み、袈裟切りに剣を振るう。

バーサーカーはその斬撃を避けようとするが、切っ先が体に届き、血が舞った。

攻撃が通じるようになったのだ。

その時、

「離れて!セイバー!」

遠坂の声が響いた。

「螺旋剣!」

アーチャーの声が聞こえ、同時にセイバーは反射的に後方へと退いた。

ドンツツツツツツツツ!

アーチャーの放った強烈な一撃が灰色の巨人に直撃し、その全身は炎に包まれていった。

第4話 2日目① 「貸し借り」

R t u r n

「どうやら最後のサーヴァントであるセイバーが現界したようじやな」

登校前に、間桐臓硯が慎二に伝えてきた。

昨日、校庭で開戦前にランサー、アーチャー、そして私自身が絡んで前哨戦が行われたわけだが、殆ど間を置かずに、正式に開戦の運びとなったようだ。

それでも、慎二は今までどおり学校に行くと言っている。

昨日の一件で、元々校内で唯一の魔術師とわかつていた遠坂凜がアーチャーのマスターであることは判明した。

一方で、慎二が私のマスターであることが向こうには気付かれているだろうか？

結果的にアーチャーの狙撃はなかったことを踏まえると、ランサーとの戦いの後にすぐに離脱していた可能性もある。しかし、少なくとも慎二が私の名を呼んだ声が聞こえていたのではないだろうか。

「同盟してやってもいいって、遠坂に提案してやろう」

現時点での私たちの戦力は心許ないため、誰かと手を組むという方針は悪くない。

遠坂凜とは一定の面識があり、優秀なサーヴァントを従えてもいる。慎二にしては、妥当な案と言えた。

もっとも、彼が彼女に嫌われてさえないなければ・・・の話ではあるが。

「お断りよ」

痛快なまでに一刀両断であった。

ここは休み時間中の屋上。

慎二は、『例の儀式のことで』とだけ伝えて遠坂凜と話す機会を設けた。

彼女は普段他者と接するときには、基本的にオブラートで包んだソフトな言い回しで対応している。

その基本スタンスは、慎二と接する時にも最初は変わらないのだが、慎二のしつこさに辟易し、すぐに剥がれ落ちて辛辣になる。

おそらくこちらが彼女の地なのだろうが、このパターンを既に何度も見ていた。

だが、今回は最初の時点から地が発揮されていた。

多少嫌っている相手だとしても、客観的には彼女にとっても一考の余地のある話として、少しは検討するかと思っただが・・・

「あなたみたいな人に背中では預けられない。この戦いは生きるか死ぬか。私にとつての『全て』なんて言わないけど、避けては通れない運命の舞台なの。それを芯のない人とは分かち合えないわ」

そう断言する少女は眩しいくらいに輝いていた。

これは、慎二が関与できるような相手ではない。

と、私ははつきり認識させられた。

「何だと・・・昨日の戦いを見ていたけど、アーチャーはランサーにやられてたじゃないか。だから、遠坂が困っているだろうと思って、こっちは助けてやろうといい提案を持ってきたっていうのに!」

「そんな話は関係ないわ。私があなただを信頼できないって言っているだけよ」

「!?・・・なんだって・・・じゃあ遠坂は誰だったら信頼できるんだよ?」

「衛宮君よ」

「え?」

え??

私も驚いた。

『衛宮君みたいな人』ですらなく、彼女は『衛宮君』と断言した。

「・・・え・・・衛宮だと・・・?」

「そうよ。昨日あなたを助けたのは彼だったでしょ?あの時の彼は、あなたという友達を救うこと。それだけの思いで、命懸けでランサーの前に飛び込んでいったのよ」

確かにそうでしょうね。

私の知る【衛宮士郎】像と、遠坂凜の語る【衛宮士郎】は完全に合致していた。

「まあ、正直、危なすぎて怖いけど。自分の成すべきことを彼は心で規定している。芯があるってそういうことですよ。あなたとの比較に持ち出すことすら、申し訳ないくらいよ」

言っていることは、よくわかる。

が、ここまで言うのはもつと決定的な何かがあるからではないだろうか。

「それじゃあね。間桐慎二君」

そう言い残して、彼女は鮮やかに屋上を去っていった。

「衛宮だと・・・」

慎二は彼女の後姿を見送ることもできず、拳を握りしめて立ち尽くした。

E t u r n

「セイバーもアーチャーもなかなかやるじゃない。ちよつとは楽しくなりそう」

昨夜の出来事。

バーサーカーは、アーチャーの弓を使った宝具による攻撃で斃したものの、1回目と同様、瞬く間に蘇った。

「それじゃあね。凜、そしてお兄ちゃん。次に会った時は殺すからね」歌うように軽やかに告げて、バーサーカーのマスターである【イリヤスフィール・フォン・アインツベルン】と名乗った少女とバーサーカーは、オレ達の前から去っていった。

その脅威をまざまざと見せつけられたオレと遠坂は、対抗するためにその場だけでなく当面の間共闘することにしたのだ。

今日は学校がある。

セイバーは反対したが、オレは今までどおり学校に通うことにした。セイバーは霊体化できないため、家で留守番だ。

「それでは危険を感じたら、令呪を使って呼んでください」
「勿論だ」

この問答でセイバーは、なんとか納得してくれた。

この学校にいるマスターはオレと遠坂と慎二。

遠坂の話では、校内には他に魔術師がいないことは事実ということだ。

であれば、左程危険はないし、遠坂とは校内で落ち合って、今後の方針について話したい。

一方で、慎二の動向も気になる。

「場合によっては、慎二とも協力できるかもしれないよな」

そのためにも、慎二の聖杯戦争に参加する目的を確認したいところだ。

現状、慎二はオレがマスターになったことを知らないどころか、魔術師であることも知らない。まずは、そこから話さないといけないな
と思っていたのだが・・・

「さつき、慎二が私と手を組んでやるなんて言ってきたもんだから、衛宮君と組むならともかく、あんたとなんか真っ平ごめんよって断っちゃった」

と、遠坂凛様は宣のたまいました。

・・・えつと・・・

「・・・とおさか・・・さん・・・できればもう少し詳しく経緯を話していただけると助かるんですが・・・」

「だから、あいつが偉そうに手を貸してやるなんて言ってくるもんだから、きつぱり断ったって話。あんな信用できない奴と、一緒に戦うなんて無理に決まってるじゃない」

オレの憧れていた優等生【遠坂凛】は、昨日既に死んでいる。

学校では完全に猫を被っていたということも理解した。

とは言え、昨日の時点では、ここまで容赦のないタイプだとはわかっていなかったのだが・・・

「まあ、慎二とウマが合うわけないよな・・・」

「あ。でも、衛宮君がマスターだってことは言っていないわよ。あく

までも、信頼できる相手としてあなたの名前を挙げただけ。衛宮君自身が慎二にマスターだって伝える前に、私から伝えるのはフェアじゃないでしょ」

「あいや・・・そこを気にしているわけじゃないんですよ・・・」

オレがマスターであることは、そう遠からず、慎二には直接伝えるつもりだったから、その点に関しては心配していない。遠坂が仮定の話としてオレの名前を持ち出したとしても、オレがマスターであるとは、今の時点では微塵も思わないだろう。

とは言え、これで慎二と共闘する可能性はなくなったわけだ。

「ていうかこの話を持ち出した場合、遠坂がそもそも『うん』と言わなかったってことだしな」

オレは、遠坂に聞こえないように小声で呟いた。

昨日、オレは遠坂と同盟を組むという選択をした。

その結果なのだから仕方ないときっぱり諦めるべきだ。

とは言え、

「あいつプライド高いからなあ。遠坂にそこまでやられたとなると、この後が心配だな」

共闘しないにしても、慎二の今後の行動は気になるところだ。もしかしたら、早急な対応が必要になるかもしれない。

「そんなんだからダメなのよ」

赤い悪魔は辛辣だ。

オレは付き合いが長いだけに、慎二がこの後、別のところに怒りをぶつけることを懸念した。

「癩癩を起こすと、何をしでかすかわからないやつだからな」

放課後になった。

遠坂はアーチャーの回復に専念したいので、今日の夜は行動しない方針とのことだった。

「ごめんなさい。こちらの都合で行動を制限させてしまって」

「いや、セイバーが負わせた傷もあるし、他の二戦ともオレが生き残ることに繋がっている。気にするようなことじゃない」

遠坂達と手を組んだオレも、今日はセイバーと共に、せいぜい近場の巡回程度に止めるということになったのだ。

「それでも、気を付けてね。念のためにこれを渡しておくわ」と言つて、遠坂は小さな黄色い宝石をオレに持たせた。

遠坂も同じ宝石を持つている。

「これは対になっているの。魔力を通すことでもう一方の宝石に伝わるようになってる。おおまかな場所もわかるわ。お互いに敵と遭遇したときや、早く合流したい時に使いましょう」

「わかった」

だが、アーチャーの回復のためにも、今日はこの宝石をなるべく使わないようにしなければならぬ。

実のところオレは今日、一つだけやろうと思つていることがあつた。

「慎二を見張つておいた方がいいと思うんだよな・・・」

オレ、桜、藤ねえにセイバーを加えた4人で夕食を終え、少し落ち着いた頃合い。

時計は夜の9時を示している。

ちなみに、セイバーがしばらくここに滞在することは朝食の際、桜と藤ねえには伝えていた。

『まあ、切嗣さんを頼ってきたつて言うんじゃ仕方ないわよねえ』

すんなりと納得してくれたわけではなかったが、切嗣の知り合いだと紹介したことで、藤ねえは受け入れてくれた。藤ねえが折れたことで、桜も反対する術すべを失つたような格好になったのだ。

これで取り敢えず、セイバーの滞在が我が家で認められたわけだ。既に、桜も藤ねえも自宅に帰っている。

オレは予定していたとおりに行動するべく、昨日の夜も世話になった木刀を持ち出した。

「セイバー。外に出かけよう」

「シロウ。今日は周囲の巡回程度ということではなかったのですか？」

セイバーが不思議そうに問い掛けてきたので、学校での遠坂との会話とオレの抱いている懸念を伝えた。

「なるほど。シロウの友人は、痲癩持ちのマスターということですか。厄介そうですね」

セイバーはすぐに納得してくれた。

「ああ。何事もなければいいんだけどな」

正門を出て、間桐邸に向かう。

最近はまだ行かなくなったが、以前は何度か訪れたことのある家、というより屋敷だ。この界限では、一番大きいのではないだろうか。

その間桐邸へと分岐する交差点に差し掛かった時、オレが向かおうとしていた方から誰かが歩いてくるのに気が付いた。

「・・・慎二・・・？」

間違いなく慎二だった。

向こうはまだ気付いていないようだったので、咄嗟に戻って身を潜める。ついてきていたセイバーも同じようにしている。

慎二はそのまま交差点を直進していく。

「あいつ、どこに行くつもりだ？」

方向としては、新都に向かっているようだった。

勿論、ただの散歩。気紛れ。買い物？という可能性もゼロではないが、聖杯戦争が開戦したこのタイミングで、そんなことをすると考えるほど、オレも能天気ではない。

であれば、この戦いに関連した行動のはずだ。

慎二はともかく、霊体化して同行しているであろうライダーに見つかるとは思えないので、かなりの距離を空けて、尾行することにした。

慎二を追っていくと、案の定、橋を渡り新都側に着いた。

昨日、バーサーカーとの戦闘があつた中央公園に近い。

ここまでは、橋を渡る必要があるため、向かう方向を推測できたが、ここからはそうはいかない。

「しまった。ちよつと距離を開けすぎたかな・・・」

案の定と言うべきか、慎二を見失ってしまった。

オレもセイバーも慎二を探すため、少し早足になって歩いていた時だった。

——やああ！——

聞こえるか聞こえないか。

空耳かもしれないと思うほど微かに女性の悲鳴が聞こえた。

「シロウ。聞こえましたか？間違はなく悲鳴です」

セイバーのほうが知覚が鋭いのだろう。

「急ぎましょう」

彼女は確信をもつて、悲鳴の聞こえた方向に走り始めた。

「ああ」

オレもついていくと、程なくして悲鳴の発信源に辿り着いた。

そこは公園の手前にある木々の暗がりだった。

「・・・何だ？あれは？」

そこには、人ならざるモノがいた。

印象というのは、見る場面によつて変わるものだということをまぎまぎと思い知る。

彼女は間違いなく、昨日オレを救ってくれたサーヴァントだった。少ないながらも言葉も交わした相手だ。

「・・・血を・・・吸っているのか？」

しかし、今、オレの視線の先で人の生き血を啜る彼女は、間違いなく怪物だった。少し世慣れた男なら『女は化けるもの』とか言うのかもしれない。

「間違いなくライダーだ・・・」

「あれが、昨日私を召喚する前に会ったという英霊ですね」

セイバーが警戒を強める。

長い髪は地面に広がっており、四つん這いのような体勢になったライダーは、倒れている女性の二の腕に牙のような歯を突き立てていた。

悲鳴を上げていた被害者の女性は、年の頃は二十代後半くらいだろうか。スーツ姿であることから、仕事帰りのOLなのだろう。気を

失っているようだが、まだ命に関わるような状態ではなさそうだ。そして、その傍らには口元に笑みを浮かべた慎二が立っていた。

「慎二！何やってんだ!？」

「衛宮？何だってお前が?」

慎二がオレを視認する。

同時にライダーもオレに気付いて、こちらに顔を向けてきた。

その口元からは、血が滴したたっている。

「慎二。彼の隣にいるのは、サーヴァントです」

ライダーは、オレの隣にいるセイバーを見ながら、そう慎二に伝えた。

「なんだって?」

「ああ。昨日、あの校庭での戦闘の後に、偶然な。伝えられなくてすまなかったが、一応オレもマスターになったんだ」

「衛宮が・・・マスターだど?」

慎二はまだ状況を受け入れきれていないのか、小刻みに体を震わせていた。

だが、オレとしては襲われていた女性の状態が心配だった。

慎二との問答に悠長に時間を割いているわけにはいかなかった。

「慎二。ライダーに人を襲わせていたのか?何でそんなことをする?」

「お前もマスターだつて言うんならわかるだろ?こいつらは常に魔力を必要とする。手段は色々あるけれど、ライダーがこうしたいって言うからね。僕は止めたんだぜ」

「魔力の補充?そのために人の血を啜るだつて?」

オレは、ちらりとセイバーを見る。

セイバーがそんなことをするとはとても思えなかった。

「魔力の補充が必要なのは確かですが、私は血を啜ることなどありません。ライダーの特性によるものでしょう」

オレの視線の意味を察したセイバーが即座に答えてきた。

「それにしても、衛宮がマスターとはねえ・・・ってことは、学校で遠坂が言っていた話は、例え話じゃなかったってことか?」

「ああ。オレと遠坂は既に手を組んでいる。その事を伝えられていなかったことについては、すまないと思っっている」

「なるほどね。それで、遠坂はあんな態度を取っていったってことか」

慎二の思考はどうもおかしな方向に進んでいるような気がする。何か誤解をしているようだった。

「衛宮。遠坂との共闘を解消するんだ。遠坂は、お前みたいな半端者では生き残れないと心配して、手を差し伸べたんだろう。だからこそ、僕の提案を拒絶せざるを得なかった。でも、本当にあいつと一緒に戦うべきなのは、由緒正しい御三家の家柄である僕のほうだ」

慎二には悪いが、ついていけない話になっているのを感じる。だが、受け入れられない内容であることだけは明らかだった。

「すまない慎二。それはできない。遠坂の信頼を裏切るわけにはいかないし、一度約束したことを翻すことは許されない」

「そうかい衛宮。僕は望まないままに、殺し合いに巻き込まれた友達を助けてやろうと思ったのにな」

そう言うと、右手を体の前に差し出す。

その手には、一冊の古びた本が握られており、その本はかなりの魔力を帯びているのがわかった。

「もういいよ。お前」

慎二の口調が一気に険悪な雰囲気帯びる。

「さあ、戦おうぜ。衛宮。せっかく聖杯戦争が始まったんだ。サーヴァント同士の殺し合いをしよう」

慎二は、やる気だった。

後方にいるライダーの構えが低くなり、戦闘体勢に入っている。くそ・・・どうにもならないのか。

「シロウ！下がって！」

セイバーが不可視の剣を構えて、オレの前に出る。

「行け！ライダー！衛宮のサーヴァントを殺せえ！」

ダンッ！

慎二の号令と同時に、ライダーが大きく跳躍して後ろの大木に両足を着くと、一気にセイバーに飛びかかってきた。

構えていた両手の杭剣をセイバーに叩きつける。

「ふっ！」

ツガイんツ!!

セイバーはそれを剣で受け止め、弾き飛ばす。

避けることもできたんだろうが、後ろにいるオレのことを意識したのだろう。

オレはセイバーから少し離れるようにした。

とは言え、ライダーの動きは速く、トリツキーだ。そのうえ、周囲の木々も利用しており三次元的でもある。

「この戦い方がライダー本来のものなんだろうな」

昨日のランサー戦のような正面切った戦い方とは、違っていた。

多少セイバーから離れたとしても、オレを標的にされると彼女が庇うのは難しいだろう。

「同調、開始」

オレは竹刀袋に入れていた木刀を取り出し、魔力を通して強化する。オレが狙われた時には、とにかく最初の一撃を止めるつもりだった。

だが、さしあたり、ライダーはセイバーへの攻撃に集中しているようだ。

縦横無尽に動き、間断なく攻撃を浴びせ続けている。

「ははっ！何だ衛宮、お前のサーヴァントは？一方的にやられているだけじゃないか？」

勝ち誇ったように慎二が笑う。

「僕のライダーは、昨日、アーチャーより強かったランサーを退けたんだぜ。そんなちっこいサーヴァントが太刀打ちできるわけないのさ」なるほど。そういう分析もあるのか。

だが、セイバーはライダーが劣勢だったランサーを圧倒し、あのバーサーカーにも拮抗して見せたのだ。

だから、オレは、この戦いにおいてセイバーの心配は全くしていなかった。

オレが気に掛けるべきは・・・

ドゴオツ!!

タイミングを見計らったセイバーの一撃が大気を震わせた。

「ぎゃあああつつつ!!」

悲鳴を上げながらライダーの体が宙を舞う。

夥しい鮮血をまき散らして、長い髪を大きく広げながら、

ドゴツ!

その体は、慎二の横を通過し、後ろの大木に激突して、無残に正面から地面に崩れ落ちる。

ライダーの攻撃に対して、セイバーは突き出される杭剣を身を捻って躲し、袈裟切りにライダーの体を斬り裂きながら弾き飛ばしたのだ。

「とどめだー!」

セイバーが最後の一撃を加えるために、瀕死のライダーに突進する。

サーヴァントとして当然の行動だ。

だからこそ。

「令呪をもって命ずる」

オレは、躊躇なく唱える。

「セイバー。ライダーへの攻撃をやめてくれ!」

左手の令呪の一角が消えると同時に、効果は発揮されてセイバーの動きが止まる。

「・・・なっ!?シロウ!なぜ止めるのです!?!」

オレの思わぬ行動に驚いたセイバーが、こちらを振り返る。

「すまないセイバー。ライダーには、昨日殺されかけたところを助けられている」

オレはそう言いながら、セイバーとライダーの間に体を位置させる。

「要するに借りがあるんだ」

最初からこの事をセイバーに言い含めることで、万が一にも彼女が負けることに繋がってはいけなかった。

そして、いくらセイバーでもサーヴァント相手に一撃で致命傷まで

負わせる可能性は極めて低いと考えていた。その時の位置関係次第では、体を張って止めに入ることで、令呪を使わずに済ませることも考えたが、そこまでの僥倖には恵まれなかった。

そのため、予定どおり令呪を使って止めたのだ。

「・・・借りですか・・・それでは止むを得ませんね。不満はありますが・・・正直、彼女からは邪な気配よこしまを感じます。ここで、消滅させたほうが禍根を残さないとは思うのですが」

いかにも不承不承という体ていではあるものの、セイバーは剣気を収めてくれた。

「わかってくれてありがとう。セイバー」

「いいえ。令呪まで使うことは無かったとは思いますが、あなたらしいと言えばそれまでですね」

少し微笑みながら彼女は言った。

その一方で、

「・・・な・・・なにやってんだよ・・・ライダー」

慎二が呆然としながら、呟いていた。

「立てよ！ライダー！これじゃあ、僕が衛宮より弱いみたいじゃないかあー！」

激昂した慎二が手にしていた本を開き、何事か詠唱する。

すると、その本が閃光を発するとともに、ライダーの体を電撃が襲った。

「立てーライダー！立って衛宮を殺すんだー！」

「やああああーっ!!」

ライダーはその痛みに悶絶した。

彼女はとてもこれ以上は戦えない。致命傷をぎりぎりですべて免れているという状態なのだ。この強制により、死線を越えてしまうかもしれない。

「セイバー！あの本を！」

オレは、即座に判断して、セイバーに指示を出す。

「了解しました。シロウ！」

「ひいつ!?!」

慎二の顔が恐怖に埋め尽くされると同時に、セイバーが一瞬で慎二の元に辿り着き、手にしていた本を斬り裂いた。

ボツ！

本は青い炎に包まれて、すぐに燃え尽きていった。

フツ・・・

すると、少し間を置いてライダーの体が消えていった。

「セイバー。ライダーは？」

思わずセイバーに確認した。

「おそらく、霊体化したのでしよう。私の攻撃は霊核を破壊するまでには至っていませんし、先程の本による電撃でも死に至るほどのものではなかったと思います」

「そうか」

一瞬、ライダーが完全に消滅したのかと焦ったが、セイバーの言葉で安堵した。

一方で、慎二の怒りは収まる様子がなかった。

「この外れサーヴァントが！あいつ、女としてしか役に立たないじゃないかっ!!」

ぷちん。

その言葉にオレの中の何かがキレた。

何だと？外れ？女としてしか？

昨夜、ライダーは、オレと慎二を救ってくれた。

今日だって慎二のために体を張って戦っていた筈だ。そのサー

ヴァントに対しての言葉がそれなのか。

そして、一体、お前は彼女に何をしていたんだ？

ゴツ！

気が付いたら、慎二を殴っていた。

慎二の体が地面に崩れる。

「ぐああああ・・・」

オレは、悶絶する慎二を意識から外して、もう一人、気にすべき今回の被害者のほうに目を向けた。

「セイバー。彼女を教会に連れて行こう」

ライダーに血を吸われて倒れていた女性に近付いて、状態を確認してみる。

思ったほどには、血を失ってはいないようだった。気を失っているがおそらくそれだけだろう。

とは言え、サーヴァントに吸血された人間が本当に大丈夫なのか明確なことは言えないので、教会に運んで神父に診てもらうのが一番安全だろう。

「セイバー。頼まれてくれるか？」

「わかりました」

セイバーはこちらの意図をすぐに察して、女性を担いだ。

倒れたままの慎二を一顧だにせず、オレ達は教会へと急いだ。

オレ達は被害者の女性を教会に連れて行き、神父に診てもらった。

「ふむ。まあ、問題ないだろう。吸われた血は献血程度だ。気を失っているのは、魔術的暗示によるもので、限定的に記憶を奪う魔術もかけられているな。目が覚めても何が起こったかはわかるまい」

血を吸われた箇所も二の腕の裏側であり、全く気付かずに日常生活に戻れるということだ。

「聖杯戦争の監督役として、この手の事件の隠ぺいが私の仕事でもあるが、その観点からはほぼ理想的な犯行と言えるな」

珍妙な表現ではあったが、問題ないということだ。

オレ達は後のことを神父に任せて早々に立ち去ることにした。

今日は慎二の動向を探ることが目的だった。

あの後、慎二自身がどうなったかわからないが、サーヴァントを失った以上、一旦は自邸に戻っているだろう。

オレ達としても、これ以上、夜の街をうろついて、意図しない遭遇戦に巻き込まれることは避けたいところだ。

慎二やライダーのことは気になるが、今日はもう家に戻るべきだろう。

「セイバー。今日はここまでにして家に戻ろう。お疲れ様。そしてありがとう」

「いいえ。こちらこそ。今日もシロウの戦闘時の判断は的確でした」
セイバーは爽やかに笑みを浮かべて、そう応えてくれた。

第5話 2日目② 「英霊ふたり」

R t u r n

「・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

息切れは自分の口から発せられるものだった。

袈裟切りにされた胸から腹までの出血は止まっていなかった。それで絶命するほどサーヴァントは柔^{やわ}ではないものの、体の自由が効かないというのは不便だ。

セイバーの剣によって、偽臣の書は破壊され、そこからの魔力供給はなくなったが、代わりに本来のマスターである桜とのパスが通じた。そういう意味では問題ないが、如何せん戦闘によるダメージが大ききすぐには回復しない。

桜との距離も離れているので、現状の魔力供給は微々たるものだった。

戦闘後、霊体化して戦いの場からは離れたものの、しばらくは動けないでいた。時間が経ち何とか動けるようになってから、霊体化したまま這いずるように間桐邸を目指していた。

「・・・無様ですね」

自嘲気味に呟く。

敵のサーヴァントは、昨日現界したと聞いていたセイバーだった。

油断していたつもりはないし、ましてや慎二の浅薄な見解に影響されたわけもない筈だったが、所詮は想定が甘かったということだ。

「あれ程とは・・・」

あそこまで、圧倒的な力の差があるとは思わなかった。

少なくとも昨日のランサー戦は形になっていた。ランサーより少し強い程度は予想していたが、一撃で戦闘不能にされる程とは。

衛宮士郎が令呪を使ってまでセイバーを止めてくれなければ、間違いなく消滅させられていた。

「それにしても、衛宮士郎がマスターだったとは・・・」

因果なものだった。

・・・だが、その可能性を示す材料はあったのだ。

昨日、魔術師しか知りえない使い魔という概念をあつきり納得した点。学校の屋上での慎二と会話した時の遠坂凜の反応。

そして、何より異常とすら思える程の心の在り様。

衛宮士郎は間違いなく稀有な存在だ。

「いいえ、彼がマスターになるのは必然だったのかもしれませんが」

普段とは比較にならない程の時間をかけて、何とか深山町に入る。

途中で多少意識も飛んでいたようだ。霊体化していることもできなくなってきた。

まさか、こんなところで私は消えるのだろうか。

この街の分岐点となる交差点が近付いてきたが、自分自身が希薄になりつつあるのを感じる。

焦りが募る。

「・・・く・・・」

体は徐々に言うことを聞かなくなってきた。

桜とのパスが通じたが、偽臣の書が消失したことによる強制的なものであったためか、魔力供給が円滑でないことがわかる。

魔力を補給する必要があるが、今となっては住居内の一般人を襲う力も残っていない。

絶望的な状況に思えた。

「はは・・・」

どうしようもなく、自分の在り様を笑ってしまう。

既に一度自らの生を全うしている身だ。

それに、英霊の座に還るのは死とは違うことを理解しているので、消滅することに恐怖を感じたりはしない。

それなのに・・・

「なぜ、私はこんなにもまだ消えたくないと思うのでしょうか・・・」
まだ、この世界にしがみつきたいと思っていた。

自分はまだ成すべきことがある。

あの少女を救わなくてはいけない。

そして、もう一度、

「あの少年と・・・」

なぜか、あの彼の顔を思い浮かべる。

「・・・ライダー？」

一瞬前に思い浮かべたその少年の声が聞こえた。

「・・・大丈夫・・・じゃないな・・・」

ああ、たすかった。

と。

その声は、浅ましくも絶対の確信を抱かせてくれた。

「早くオレの血を吸え」

慌てたように駆け寄ってきた衛宮士郎は、躊躇なく袖をまくってその左腕を私の眼前に差し出してきた。

驚きもしたが、それ以上に興奮が私の体を支配した。

私の目の前に御馳走が差し出されたわけだ。

遠慮などできるわけもなかった。

むしやぶりつくようにその二の腕に歯を突き立てる。

ザクツ

「っ・・・」

彼が僅かに顔をしかめるが、我慢できない。

甘美な味だ。

魔術師の血は極上の魔力補給になる。

単に飢えていたからかもしれないが、とりわけ彼の血は美味びみに思えた。

「セイバーに気付かれるかもしれない。手早く済ませてくれ。この状態を見られたら今度は止められないぞ」

確かにそうだ。

程々にしなければ。

空っぽだった力が少しずつ戻ってくる。

既に、危うい状態を脱するのに十分な血をもらった。これなら間桐邸まで何とか戻ることができるだろう。

そうわかっているとしても、どうしてもこの腕から離れることができなかった。

本能が血を欲していた。

いや、彼の血が欲しいのか・・・

そんなことを自問していると、

「すまなかつたな」

唐突なその言葉に、はっとさせられた。

あまりの違和感に驚いたのだ。

驚いた勢いで、啞え続けていた彼の腕からようやく口を離すことができた。

とは言え、体がまだ思うように動かず、彼にもたれかかる格好になる。

「・・・な？　・・・一体あなたは何を言っているのですか？」

『わけのわからないことを』と続けたいところだったが、それは堪えた。

「いや、さつきライダーが消えた時、すぐにでも探すべきだった。これだけの傷だ。あの場でもう少し対処していれば、ここまで衰弱しなかつたろう」

余りにも私の認識から遙か遠く、突拍子もない見解だった。

彼と関わるとこういう感想を抱く事が多いが、一向に慣れない。

そもそも命を奪おうと襲ってきた敵を、令呪という多大な犠牲を払って庇つたのだ。さらにどこへ消えたかもわからない敵の傷の手当をするために奔走するなど、狂っているとすら言える。

「・・・もうこんなことは止めなさい・・・あなたはもつと自分を大切にすべきです」

思わず口を突いて出たのは、自分でも全く予期していなかった言葉だった。

こんなことを言うつもりはなかつたのに。

「・・・あ・・・いえ。ごめんなさい。本当は先に言うべきことがあるというのに・・・」

敵のマスターとは言え、ここまでしてもらったのだ。素直に礼を言うのが筋だと思っていた。

「衛宮士郎・・・」

「士郎で構わないぞ」

「それでは士郎」

回り道をしてしまったが、言うべきことを言わなくては。

「本当にありがとうございませす。あなたには二度も救われました。それに申し訳ありませんでした。だいぶ血をいただいてしまいました」
「大丈夫だ。ちよつと多めの献血をしたくらい感覚だしな。それに言つたら。少なくともさっきの戦いでセイバーを止めたのは借りを返しただけだし、今回はその延長線上だ。ここで死なれたら、さっきのが無駄になつちまう」

「・・・そうですか・・・承知しました。素直にあなたの厚意を受け入れましょう」

そう応えなければ、話が進まないだろう。

「しかし、先程見たように、そして今、体験したように私は生き血を啜る怪物です。真つ当な英霊ではありません。次にあなたの前に現れた時には、躊躇なく殺しなさい。勿論、私も殺されるつもりはありません。あなたを本気で殺そうとするでしょう」

「違う。あんたは怪物なんかじゃない。今こうしてちゃんとオレに礼を言い、オレの心配をしてくれている。思慮深い人間だろう」

ああ。ダメだ。この少年は。

とても、私の言葉が通じる相手ではない。

もしかしたら見透かされているのかもしれない、そんなふうに考えた瞬間、鋭い風を感じた。

「シロウ！ 無事ですか!?!」

セイバーが駆け付けてきたのだ。

彼女は私と士郎の直前で止まると、私への敵意を剥き出しにしてその目を向けてきた。

当然だろう。

「シロウから離れなさい。ライダー」

「わかっています。これ以上、世話になるつもりはありません」

そう応えて、私は士郎に預ける形になっていた体を離し、なんとか自力で立つ。

少年はさりげなく私とセイバーの間に体を入れてくる。

「セイバー。早まらないでくれ。ライダーに害意はない」

「それはわかっています。そして少なくとも今夜は、ライダーを討たないというシロウの意思を尊重します。しかし、万に一つ、豹変してシロウを害することがないと断言することもできない」

「わかったわかった。オレがライダーから離れればいいんだな。でも、ライダーの状態はまだ深刻だ。間桐邸付近までは送ってやりた
い」

「わかりました。それであれば私が彼女に肩を貸しましょう」

「いいのか？ 絶対に嫌がると思っただけだな」

「止むを得ません。シロウの身を危険に晒すよりは何倍もいい」

そう言つて、セイバーが私に近づき、ぶっきらぼうに肩を貸してき
た。

身長差があるため、少し不恰好な形になるが、この際止むを得ない。

もう少し間桐邸に近づけば、桜からの魔力供給も円滑になり、肩を
借りる必要もなくなるだろう。

「一応、礼を言います」

「不要です。私はシロウの指示に従っているだけです。これは、我が
マスターの寛大さによるものであることを肝に銘じるのですね」

「充分に承知しています」

私がセイバーにもたれるようにして、ゆっくりと歩きながら会話を
する。

実際には、セイバーが私を担いで走ったほうが圧倒的に速いのだ
が、お互いにそれは避けたいという心情が結果的にこういった形にさ
せているのだろう。

一方、士郎は少し離れてついてきている。

「とは言え、昨日、シロウの危機を救ってもらった話は聞いています。
その点についてはこちらも礼を言わなくてはいけない」

「・・・ふふ・・・それこそ本来不要です。あの時、私は慎二を守る必
要があっただけです。士郎も助ける形になったのはあくまでも偶然
に過ぎません」

「そんなことは、シロウもわかっています。それでも彼は、あなたに助けられたと認識した。であれば、私もそれに従うまでです」

ああ。

なぜだか、無性に腹が立ってきた。

ざわざわと心が逆立ち、弑逆心が鎌首をもたげてくるのを感じた。

私は彼女を少し虐めてやりたくなった。

「セイバー。あなた、今、顔がニヤけていますよ」

「え？」

セイバーが顔を赤らめ、咄嗟に自由なほうの左手を顔にあてた。

「よほど。士郎がお好きなのですね」

「・・・は？・・・え？」

「恋する乙女の顔ですよ。それ」

「な・・・なにを戯言ざれごとを!! そもそも私は女である前に騎士だ! 私はあくまでもサーヴァントとして、シロウを信頼しており、慕っているだけだ! そんな不埒な感情など微塵もない!」

面白いくらいに引つ掛かったものだ。

少しだけスツキリしました。

と同時に、却かえってモヤモヤする何か湧き上がってくるもの感じた。あれ?

「だいたいさつきから聞いていれば何なのですか、ライダー! なぜあなたが、シロウのことを気安く『士郎』と名前で呼んでいるのですか!?!」

「彼がそう呼べと言いましたので」

そう応じると、モヤモヤのほうも少し薄れていった。

「どうしたんだ二人とも?」

私達が言い争いを始めたのに気付いて、士郎が近付いてきた。

「シロウ! どういうことですか!?! 敵であるライダーに自分の下の名前を気安く呼ばせるなど! あなたは、節操なしなのですか!?!」

「な・・・何言っているんだセイバー。そりゃ、ライダーは美人だと思うけど、それとこれとは関係ない。命の恩人に対して呼び易い呼び方

をしてもらって何が悪いんだよ？」

「美人だと思う？ やはり、あなたはそんな目で彼女を見ていたのですね。見損ないました！」

「いや、セイバーも凄く綺麗だぞ」

「とってつけたような言い方ですね。そもそも私は女である前に騎士であり、戦士です。そんなことを言われても全く嬉しくありません！」

まあ、この辺が頃合いだろうか。

この二人の痴話喧嘩を見ているのは腹立たしいと感じると同時に、羨ましいとも感じる自分がいる。

煽ったのは私自身だが、その結果はどうにも心地いいものではなかった。

「二人ともあまり大声を出すと付近の住民に気付かれるし、何より迷惑でしょう」

士郎とセイバーはぐうの音も出せずに、同時に固まる。

「ここまで同行していただき助かりました。感謝します。ですが、私の状態もだいたい回復してきました。これ以上の馴れ合いは、今後のことを考えれば控えるべきでしょう」

「そのとおりです。これでお互いに貸し借りなし。次に相見えるときは遠慮なく葬らせていただきます」

「それは、状況次第だと思う。ライダーが一般人を犠牲にしたり、オレの大切な人達に害をなすことがない限り、積極的に事を構えるつもりはない」

あくまでもこの少年のスタンスは変わらないということだ。

だが、彼の言う『事を構える』条件に合致することは、私の性質と立場を考慮すれば十分にあり得るのだ。

「それでは失礼します。士郎。あなたの血は極上でした」

私はそれだけを言い残して、後ろ髪をひかれる感覚を振り払い、暗がりの向こうに見える間桐邸に向けて歩き出した。

きつと、彼は私の姿が見えなくなるまで、見送ってくれるだろう。

陰鬱な間桐邸に戻ると、気配を察したのか桜がやってきた。

彼女は心配そうな表情を浮かべている。

私自身の体の傷は、表面上は覆ってわからないようにしている。それくらい魔力は戻ってきていた。

「ライダー。何があったの？ 帰ってきた兄さんの様子はおかしいし、あなたと私のパスが通じるようになったみたいだし」

「申し訳ありません。私が敵のサーヴァントに負けたのです。何とか消滅することだけは避けられましたが、偽臣の書は消えてしまいました」

どこまで伝えるか難しいところだった。敵のマスターが士郎だったと聞いたら、桜はどんな反応をするだろうか。

「そうなの・・・だとすると、この後、お爺様がどんな差配をするかわからないわね」

「・・・ええ」

無理矢理にでも桜を焚きつけてマスターとして、戦場に送り込むか。再び偽臣の書を与えて慎二にマスターとして動かすか。

あるいは・・・

「ライダー。あなたも知っているかもしれないけど、先輩がこの戦争の参加者になってしまったの」

勿論、知っている。

「私にとって、一番大切なのは先輩の無事。だからライダー。先輩を守ってあげて」

「・・・え・・・？」

トクン・・・

現界してから約一ヶ月。

初めて私の心が高鳴るのを感じた。本当のマスターからの本物の願い。

そして、私自身にとっても意義のある行為。

「いい、何があってもよ」

続けられた桜の言葉は素直には受け入れられなかった。

それは無理だ。桜と士郎のどちらかを優先しなくてはいけない場

面が訪れたら、私は桜を優先する。

「これは、あなた自身を信頼して、お願いすること。だから令呪は使わないわ」

少しだけ奇妙な笑みを桜は浮かべた。自嘲するような。

そんな微笑み。

「ええ。あなたなら大丈夫・・・あなたは、私に似ているもの」

それは、私も同じ思いだ。

しかし、何か私の認識している『似ている』と、桜の言う『似ている』は違うところを指しているようだ。

「あなたに使うべき令呪は違うところにあるわ。ライダー。令呪をもって命じます」

「え？」

なにを強制しようというのだろうか？

「兄さんに危害を加えないでね」

え？

と疑問を投げ掛ける暇もなく、令呪による強制力が私の体に沁み込んでいく。

想定外の指示に驚いたが、少し考えれば得心する。私の心中は、意外と彼女に見透かされているということだろう。

確かに偽臣の書から解放されたこの状態で、私が一番に考えるのは、桜に害をなす慎二を殺すことだった。だが、それを実行に移すかは疑問だ。

桜自身が慎二を失うことを望んでいないこともわかっている。私としても、判断がつかないというのが、実情なのだ。

「承知しました」

この場はこう応じるだけでいい。

「ごめんなさい。ライダー。あなたにばかり負担を掛けてしまつて」

「いいえ。桜は桜のことだけを考えてください」

少なくともこの夜の桜との会話は、私にとっては好ましいものだった。

眠ろう。

傷の回復には眠ったほうが効率がいいし、もしかしたら今日はいい夢が見られるかもしれない。

サーヴァントらしからぬ事だが、私はなんとなくそんな思いを抱いた。

「それでは、桜。今日は私も休みます」

「ええ。ライダー。たまには体を休めてね」

ザ——

暗い玄関の僅かな電灯の光の中で、少しだけ桜の影が騒さわついたように見えた。

きつと、私は疲れているのだろう。

第6話 3日目① 「騎士王」

E t u r n

朝の5時。

自分の部屋で、概ね習慣どおりの時刻に目が覚めた。

昨夜、ライダーには強がりと言ったが、血をかなり吸われていた。あの時は痩せ我慢していたに過ぎず、『献血』レベルでなかったのは間違いない。

「でも、意外と問題なさそうだな」

多少の気怠^{けだる}さなどで、寝起きにも影響が出るかとも危ぶんだが何ともないようだった。

自分の回復の早さにちよつと感心するくらいだ。

今日は2月1日。

休日だ。

昨夜は教会から一旦この家に戻った後、すぐに土蔵で鍛錬しようかと思っていた。しかし、ふと慎二のことが気になって間桐邸に向かうあの交差点に向かったのだ。

「あの状態を見たら、誰だって助けようとするよな・・・？」

そこで動けなくなつたライダーを見つけ、彼女の回復のためにと腕を差し出した。

ライダーに吸血された被害者の容態は大したことがなかったのも、彼女に血を吸われることに抵抗感はなかった。

「それにしても、セイバーとライダーは険悪な雰囲気だったな・・・」
原因はよくわからなかったが、二人が口論していた様を思い出した。サーヴァント同士は基本的に相争う競争相手なのだから、仕方ないのかもしれない。

間桐邸近くまでセイバーと共に彼女を送った後、この家に着いた頃には日付が変わる手前の時刻になっていた。

「さて、今日は一人で朝食の準備をしなくちゃな」

今朝は桜はうちに来ないと言っていたので、セイバーと藤ねえのた

めに一人で朝食の準備に取り掛かる。

考えるべき事はたくさんある。

だが、できればセイバーも交えて話したいところだ。

「おはようございます。シロウ。体の調子はどうですか？」

当人がいいタイミングで登場してくれた。実際には、セイバーはオレの隣の部屋で殆ど寝ることなく待機している。だから、オレが起きたこともわかっていた筈だ。

「おはよう、セイバー。不思議なくらい快調だ。朝食はすぐにも準備できるから少し待っていてくれ」

「わかりました。シロウ。楽しみにさせていただきます」

そう言って、座布団に背筋を伸ばして綺麗に正座する。

彼女が着ている服は、昨日、遠坂から借りたものだ。白いブラウス姿が似合っている。戦闘時の鎧姿のまままで日常を過ごすのは魔力の無駄だし、日中に外出することもできない。

用意したお茶を彼女の前の座卓に置く。

本来、サーヴァントは食事が不要なことだったが、昨日、オレの作った料理を食べてからは、その設定は消え失せたようだった。

「……て言うか、滅茶滅茶食うんだよなあ」

すごく美味しそうに食べてくれるから作り甲斐があるのだが、若干我が家のエンゲル係数の爆増に恐怖しているところだ。

それはともかく、藤ねえが来る前に、セイバーとは状況を整理し、今後の方針を話し合いたいと思っていた。

「セイバー。まずは慎二とライダーのことについて話したい」

オレは、食事の準備をしながらセイバーに話しかけることにした。

「はい」

「慎二はあの本でライダーを使役していた。それを失ったことで、一旦マスターではなくなったことは間違いない。だけど、ライダーは間桐邸に戻った」

「ええ。彼女は間桐家に使役されているということでしょう。あの本が1冊しかないとは限りませんし、再度、作ることが可能かもしれません。その時、シロウはどうするつもりですか？」

セイバーが確認したいのはその一点だろう。昨日はある意味、マスターである慎二にも、ライダーにも手心を加えた対応になった。次は全力で斃しに行くのか、その方針を共有したいのだ。

「ライダーの吸血は問題だけど、被害者の実質的な被害は殆どなかった。とは言え、気紛れ一つで命に関わる可能性もある。あるいは命令一つで」

そんなことはないと思いたいが。

「そうですね。それでは・・・」

「それでもすまないが・・・ギリギリまで我慢する。慎二もライダーも悪人ではないことはわかっている。だから、先ずは慎二と話す。そして、向こうの事情を確認する。ライダーの本当のマスターや慎二の目的をだ。そこから、解決策を考える」

「どうやって聞き出すのです?」

「基本的には話し合いだが、最悪、力づくで聞き出す。その時にはセイバーに力を貸してもらおう可能性もある。なりふり構ってられない場面もあるだろう」

当然、ライダーを使って妨害してくる可能性もある。

「その時は、ライダーを討つても構いませんね」

「ああ。でも、極力無力化するまでに止めてくれないか。昨日の戦いを見る限り、セイバーとライダーの戦力には大きな差があるからな。そしてまた、あの本を消滅させる。これは可能だと思っている」

昨日は実際にそうなったわけだ。

「おそらくあの本は、令呪を物質化させたような性質があるんだろう。だから、無限に作る事ができるわけじゃないはずだ」

「ですが、シロウ。あなたは根本的なところで矛盾している。聖杯で望みを叶えるためには、他のサーヴァントを斃さなければいけない。つまり、最終的にはライダーも消滅させなければならぬ」

そうだ。オレにはないが、セイバーには聖杯に託す望みがある。それは、ライダーにもあるかもしれない。

そうなれば、どこかで必ず決着を付けなければいけないということになる。

それは、勿論わかっていた。

「セイバーの言うとおりだ。最初は、ライダーには魔力切れで消滅してもらおう事も考えたんだけどな」

つまり、あの本を全て失って魔力供給が途切れ、自然と消滅してもらおうという方法だ。この場合の、サーヴァントの感じる苦痛や心情は事前に確認したいと思っていた。人が老衰で亡くなるようなものか、飢え死にするようなものなのか。後者であるなら、むしろ戦いで死んだほうがマシなのかもしれない。

「ええ。ライダーは切羽詰まれば、見境なく人を襲って魔力補給をすることでしよう。昨日とは比べ物にならない量の血を吸うようになる可能性もある」

そうだ。

ライダーは魔力を吸血により補給することが可能なのだ。

そうなる前に斃してしまわなければならないという結論に帰着せざるをえないのだが、

「だけど、すまないセイバー。この点については、結論が出ていない。ライダーとも話し合いたい」

「シロウ」

疑わし気な目でセイバーがオレを睨んでいた。

「あなたはライダーに甘過ぎます。本当に籠絡されてしまったのではないでしょうね？」

「だから、何だってそうなるんだよ。彼女は命の恩人だって・・・」

「それは、昨日の件で相殺されているはずです。本来は相殺ですらないのですが」

「う・・・でも、悪人ではないサーヴァントへの対応という点では、彼女だろうと、他のサーヴァントだろうと同じように悩むぞ。オレは」

これはオレの本心の筈だ。

だが、例えばアーチャー、ランサー、バーサーカーについてここまで悩むかというのと、自分でも疑問だ。

この辺りの心情は、理屈だけではないように感じた。

「はあ・・・まあ私としてはマスターの意向に従い、善処します。です

が、実力差があるということは、昨日の戦いで相手もわかっているのです。当然、次に戦う時にはそれなりの備えをするか、別の戦い方をしてくるでしょう」

「わかっている。慎二もライダーもなりふり構わない可能性が高い。その時には、全力で斃してくれ」

そう。

優先順位を間違っではいけない。

相手に情けをかけてるうちに、セイバーが斃されてしまっでは本末転倒としか言いようがない。

「わかりました」

一旦、この件については、着地させられた。

そして、この件に関連してもう一つオレが考えていることを伝えた。

それは桜に関することで、セイバーは少し思案したが、基本的には受け入れてくれた。

そこまで話したところで、朝食の準備が終わった。

白いご飯、焼き鮭、だし巻き卵、切干大根、ほうれん草のお浸し、豆腐の味噌汁と、純和風である。

「ご飯はお替り自由だぞ」

と言って、セイバーの目の前に並べていく。

少し険しかった彼女の表情がきらきらと輝いていくのが、一目瞭然だった。

まずは、お腹を満たすことにしよう。

「さて、さしあたり今日はどうしますか?」

食事が終わり、仕切り直すようにセイバーが問い掛けてきた。

「今日は学校が休みだから、一旦、どこかで遠坂と会って、昨日起きたことも含めて話し合う。ただし、オレ達は、今日は大きく動かないつもりだ」

「そうなのですか?」

「ああ。一昨日の夜からずっと、連続で戦闘に関わっている。オレ自

身も少し、心身ともに疲労が溜まっているみたいだ」

実は嘘である。

確かに緊張の連続で、ややストレスが溜まっているかもしれないが、自覚するほどの疲労感はない。

休ませたいと思ったのは、セイバーのほうだ。切羽詰まった戦闘は、バーサーカー戦くらいだが、それでも体を張った戦いが連続している。

しかし、セイバーの疲労が気になるから休もうと言ったところで、彼女が素直に受け入れると思えなかったのだ。

だから、オレが疲れているという事にした。

「わかりました」

「それに、アーチャーも回復すれば、遠坂達と協力して本格的に聖杯戦争の渦中に飛び込んでいくことになる。その前に少し休息して、本番に備えるというのは悪くないと思うんだ」

「激戦となる明日以降に備えるわけですね。納得です。それでは、今日の稽古はどうしますか？」

昨日からセイバーはオレに剣の稽古を付けてくれている。いざという時に、気後れせずに動けるようにするというのが第一目的だが。

「稽古はこの後、お願いするよ。終わった後に、遠坂と会う」

そこまで話したところで、

「シロ〜〜〜は〜ん〜〜〜!」

腹ペコの飼い虎がやってきたようだ。

朝食が終わってから遠坂に電話したところ、

「今日は新都で用事があるの。15時に中央公園でどうかしら?」
と言われたので、了解した。

朝の稽古が終わり、中途半端に時間が空くことになったので、セイバーと一緒に街中を散策することにした。

昼食を新都で食べて、そのまま遠坂に会うというプランだ。

セイバーは一昨日の夜に現界して、昨日の日中は外に出ていない。たまには外に連れ出してこの街を見せてやりたいと本音を言うと、反

対されることは目に見えている。

「セイバー、今後の戦闘に備えて街の概観を掴んでおいたほうがいいと思わないか？」

と言つて、外に連れ出すことにした。

こういう説得の仕方だとセイバーを納得させやすい。

「わかりました。シロウ」

深山町側については、オレの通う穂群原学園、近くの商店街、柳洞寺、海浜公園をざっと案内した。

特に商店街では、

「シロウの作る美味しいご飯の材料は、ここで調達しているのですか。間接的に私もお世話になっていているということですね」

とのコメントだった。

また、柳洞寺の付近まで来た時（実際には石段の登り口までで、お堂までは行かなかつたが）は、

「ここは、霊脈としてかなり抜きんできた場所のようですね。この戦いでも戦略的に重要になりそうです」

という見解だった。

その後、この街を二分する未遠川に架かる大橋を渡つて新都側に降り立った。

橋を渡つてすぐのところにある公園は、一昨日のバーサーカー戦、昨日のライダー戦の舞台となった場所だ。

今日は、これまでに縁のなかつた場所を案内するのが目的なので、この街一番のショッピングビルにセイバーを連れて行つたが、さほど彼女の気を惹くものはなかつた。

止むを得ずビルを出て、その近くにあるファンシーショップを訪れたところで、セイバーが初めて露骨に興味を示すアイテムに出会つた。

「これは・・・なんと愛らしい・・・」

それは、ライオンのぬいぐるみだった。

「かわいいな。オレもなんかこいつには惹かれる。セイバーが反対しなければ、オレが家に置きたいから、買ってでもいいかな？」

「も、勿論です！マスターが買いたいというなら、私に止める権利などあろうがありませんっ！」

セイバーがここまで物欲しそうな顔をしたのは、今日初めてだったので、買うことにした。当然、セイバーに買ってあげるなどという、意固地になつておかしな反論がくることは・・・以下略である。

「セイバーの部屋にこういうぬいぐるみを置くのに丁度良さそうなスペースがあったな。あそこに飾るかな」

オレのセリフにセイバーが目を輝かせる。

ほんと、わかりやすい反応するよな。

なんと言うか、微笑ましい。戦いの時には、あんなにも頼もしく、凛々しい彼女とはまるで別人のようだった。

やっぱりサーヴァントだつて人間だ。

それぞれに性格もあり、感情もある。使い魔なんてとんでもない。彼ら、彼女らは、単に凄い能力を持った人間なのだ、再認識させられた。

「・・・いや、あのバーサーカーだけはちよつと違うかもしれないけど・・・」

ぬいぐるみの会計を済ませ、『悪いけど荷物持ってもらつてもいいかな』と告げてセイバーに渡した。彼女がにんまりとしたことは言うまでもない。

「ところで、シロウ・・・私はそろそろ・・・その・・・」

「ああ。オレもお腹が空いてきたところだ」

案の定、セイバーが空腹を訴えてきた。

時刻はきつかし13時。そろそろいいだろう。

元々予定していた店に向かう。

「・・・これは・・・!?!」

その光景にセイバーが、再び目を輝かせた。

「好きなものを好きなだけ食べていいぞ」

「素晴らしいシステムですね」

言うまでもなく、ランチビュッフェである。

外食でセイバーに満足させるためには、オーダー式の店よりもコースパが良い。まあ、ご飯お替り自由のお店が一番安上がりになると思うが、そこはそれ。

折角外に連れ出したのだ。満足度を高めることが大事だ。

60分の時間制限の中で、セイバーはデザートまでたっぷり堪能した。

オレだって、食べ盛り、育ち盛りだし、折角なので元をとろうと全力で食べまくった。

「・・・をををう・・・これはもう動けないな・・・」

「・・・そ・・・それは、戦いの最中としては問題ですが、しかし、これだけの料理を目の前にして、全力で食べないというのは失礼というものですし・・・んふう・・・」

オレも、セイバーも魔力ゼロになったかのようにテーブルに突っ伏した。

ちなみに、セイバーの食いつぶりには店員さんも、目を丸くしていた。

そもそも可愛いらしい金髪の外国人で、流暢に日本語を話すセイバーは、道中でも明らかに周りからの注目を集めていた。勿論、みんなあくまでもさりげなく視線を送ってくるくらいなのだが、それでもわかる。

ついでに、オレに対してのやつかみの視線も強烈だった。

「さて、そろそろ遠坂との約束の時間も近い。公園まで歩いて腹を落ち着かせよう」

「了解です」

お腹をさすりながら、セイバーは頷いた。

「シロウ。今日はありがとうございます。色々とお気遣いいただきました」

公園までの道中で、セイバーが話しかけてきた。

ああ、やつぱりこっちが彼女に気を遣っているのがわかつちやつて
いるんだな。

「そうか。オレ自身が楽しんでいたんだから、特に礼を言う必要はないんだぞ。とは言え、セイバーも楽しめたかな？」

「ええ。私の時代と違い、この時代が平和で、多くのみんなが楽しく生きられる世界だということは知っていました。しかし、シロウとともに歩き、再び見て回ることができたのは格別でした」

ん？

単純に聖杯に予備知識を与えられているからこの時代を知っているという話とは違うニュアンスが含まれていた。まるで以前にもこの時代を体験しているというような。

「そして何より、私自身に対してマスターがここまで配慮してくれるということに、私はとても感謝しています。そして、幸せだと感じました」

セイバーの目が少し潤んでいた。

それに、引きずられるようにオレも目頭と顔全体が熱くなるのを感じた。

「シロウ。本当にありがとう。私のマスターがあなたで本当に良かった」

「そこまで言われると照れるな」

最上級の感謝の言葉をもたらってしまった。正直、そこまでのことはしていない。逆にこの程度のことと、ここまでのことを言う目の前の少女がむしろ可哀そうに思えてしまう。

これまで、この少女はどんなに過酷な人生を歩んできたのかと。

そう思うと、オレは却^{かえ}って罪悪感を抱いてしまった。

「セイバー。それはむしろオレの言うべきことだ。一昨日、オレの危機を救ってくれてからずっと、お前がいなければ何度死んでいたかわからない。だから、お前がオレに感謝する以上に、オレはお前に感謝している。お前は最高のサーヴァントであり、そして最高の相棒^{パートナー}だ」

言いながら、右腕を差し出す。

「ありがとうございます。『相棒^{パートナー}』いい言葉ですね」

につこりと笑いながら、セイバーはしっかりとオレの手を握り返してきた。

一昨日の夜以上にしつかりとだ。

「とは言え、前線に立つのは私です。シロウは、無茶なことはせず、的確な判断と指示に専念してください」

少し釘を刺されてしまった。

「わかっているよ。今のところ、それほどの無茶はしていないだろう？」

実際、セイバーが絡む場面ではそんなに無茶はしていない。

それだけセイバーが危機に陥る場面が殆どないということでもある。

「そうですね。ですが、私が現界する前に慎二を助けた時の話や、昨日のライダーとの件、そして普段の言動から、シロウは自分自身に対する優先度が低いようです。下手をすると、私が危機に陥った時に、意味もなく身を挺して助けようとするような危うさを感じます」

「そんなわけではないじゃないか。マスターが消えれば、サーヴァントも結局消えてしまう。であれば、そもそもサーヴァントより遥かに劣るマスターが身を挺して助けるなんて無意味もいところだ。そんな奴がいたら、ただの莫迦じゃないか」

と反論するが、何故かセイバーは明らかに信じていない目でオレを睨んでいた。

「いったい、人を何だと思っているのだろうか。」

「まあ、自覚がないのなら止むを得ません。サーヴァントである私がそれも考慮したうえで、適切に対処するまでのこと・・・ええ。そもそもそのような場面に陥る私自身の問題なのですから。そうならなければいいだけのこと」

絶対オレの言うことを信じていない発言ですよね。セイバーさん。

「ところでシロウ。凜との約束の時間までまだ少し時間がありますね。それまでに話しておきたいことがあります。私自身の話です」

ちようと公園に着き、ベンチに二人で腰をおろしたところで、セイバーが改まった口調になった。

勿論、召喚した後、セイバーの特性や力、聖杯に託す望みなどにつ

いては一通り話している。敢えて伏せられたものもあつたので、そのあたりを話そうというのだろうか。

「ああ。オレも正直、色々聞きたいとは思っていたんだ」

そもそも、セイバーの真名がオレにはわからない。あまりにも魔術師としてのオレが拙いので、敵に思考を^{つたな}読まれて真名を看破されることを危惧して、教えないほうがいいと二人で判断したのだ。

とは言え、これまでのセイバーの戦いぶりは抜群だ。判断も的確。高名な英雄であることは間違いない。バーサーカー戦で輝く剣も見ているので、何となく目星もついている。まあ、オレの想像通りだとしても、彼女が女性というのが腑に落ちないが。

また、聖杯に託す願いは、勿論、邪なものであろうはずもなく、『とある選択をやり直すこと』ということだ。『歴史の改変』ということになるのかもしれないが、その影響については、それとなく遠坂に聞こうと思っている。

「シロウ。私は10年前にもこの地の聖杯戦争に召喚されました。そして、その時のマスターは【衛宮切嗣】という名でした」
「えっ？」

実際にセイバーが語り始めたのは、全くこれまで話題にならなかった事柄についてだった。

そして、それは先程オレが感じた違和感に対する答えでもあつた。

「衛宮・・・切嗣？」

「ええ。あなたの父親。正確には養父ですね」

心情としては簡単に消化できる話ではないが、であれば色々合点がいく。

切嗣がオレを必死になって救い出してくれたこと。

オレがセイバーを召喚できたこと。

セイバーがこの時代を体験したことがあるかのように話したこと。
「親父が前回の聖杯戦争の参加者で、セイバーがそのサーヴァントだったのか・・・」

だとすると、先程のセイバーの発言から一つの推測も可能だ。

「さらに付け加えると、バーサーカーのマスターであるイリヤス

フィール・フォン・アインツベルン、そして、教会の神父である言峰綺礼も知っています。とは言え、後者は直接会ったことがあるわけはありませんが」

その話も聞きたいが、その前に一番大事なことを確認したかった。「セイバー。切嗣はお前に対してどんな対応をしていたんだ？」
そう。

知りたかったのは、この点。

先程のセイバーのオレに対する感謝の度合いは尋常じゃなかった。それは、前のマスターとの関係が良好ではなかったことを示唆しているのではないか。

「シロウ・・・本当にあなたという人は察しがいいのですね・・・」
予想外の問いを投げられて、セイバーは少し戸惑ったようだった。「そうですね・・・召喚されてから、彼と私の間で会話と呼べるものは全くなかった。そして、彼からの私への言葉は3回だけでした」

3回。それは令呪の画数と同じだ。
親父とセイバーとの間には殆ど会話がなかった。
おそらく信頼関係もなかったのだろう。

「・・・そうか。済まなかったな」

親の罪を子供が背負うことが合理的ではないことなんて、オレだって百も承知だ。

それでも謝らなければいけない。

そういう場合もある。

「いいえ・・・本当にシロウは思いやりがある。そして聡い。素晴らしいです」

彼女はふわりと微笑んだ。

「切嗣との縁が、あなたとの出会いに繋がったと考えれば、むしろ有意義だったと思える。不思議なものですね」

彼女が心からそう言ってくれたのがわかった。

それから、特に前回の聖杯戦争の内容で、今回に関係する部分を中心に教えてくれた。

切嗣は、聖杯戦争の勝者となったものの、最後には聖杯を破壊したこと。

言峰綺礼こそが切嗣達が最も警戒し、そして最後まで争ったマスターだったこと。

イリヤスフィールが切嗣の実子であること。

遠坂家、間桐家は聖杯戦争の創始者であり、前回もマスターだったこと。

などだ。

「あまり触れられなかったり、省略したところも、何かの役に立つかもしれない。今後、折に触れてお話します」

そうセイバーが話を締め括ったところで、公園内に設置された時計が遠坂との待ち合わせの時刻を示していた。

第7話 3日目② 「すれ違い」

E t u r n

赤いショートコートを着て、髪の両サイドをリボンで結わえた（確かツーサイドアップというのではなかっただろうか）少女が公園の入り口からやってくる。

「こんにちは、衛宮君。少し待たせてしまったかしら？」

アーチャーも連れてきているのだろうが、今は霊体化しているのだろう。視認することはできなかった。

「遠坂は時間どおりに来たんだ。気にする必要はないさ。こっちは食べ過ぎたんで腹を落ち着かせる必要があったしな」

「そうなの？・・・あら？セイバーもなの？」

遠坂が不思議そうにオレとセイバーを見る。まあ、普通サーヴァントは食事しないみたいだから、セイバーも食事をしたという点を不思議がっているのだろう。

「はい。恥ずかしながら」

「まあ、そういうこともあるか。アーチャーも味見程度には食べたりするし。何にせよ今のコンディションは問題ないってことよね。早速、衛宮君が報せたい昨日の話っていうのと、今日からの方針について話し合いましよう」

「ああ」

そう応えて、オレは先ず昨日の夜の出来事をかいつまんで話した。とは言え、ライダーへの止めをオレが止めたことや血を吸わせた話は伏せて、単に逃げられたという形にしておいた。

まあ、本筋とは関係ないだろう。

「そう。衛宮君と慎二が戦うことになったのね」

遠坂の顔が少し翳る。

「ごめんなさいね。あ、衛宮君と手を組むことになったことについてじゃないわよ。慎二がそこまで意固地になったのは、私の突っぱね方が少しキツかったのが影響したのかもしれないってことよ」

多少の自覚はあるんですね。遠坂さん。

と、突っ込みたい気持ちをぐっと抑える。

「それもあるかもしれないが、それだけじゃないと思う。昨日の慎二はやけに好戦的だった。戦いたくてたまらないというか」

さらに付け加えるなら、『オレと』戦いたがっているようでもあった。

「そうでしょうよ。簡単に言えば、いきなり凄いいもちやを手に入れた子供みたいなもんだもの。早くそれで遊びたいし、誰かに見せびらかしたくて我慢できなくなっていたんでしょ」

ええ、ええ。遠坂さん。

昨日、学校ではその勢いで慎二をやっつけちゃったんでしょね。

「二昨日話したように、あいつに魔術回路はない。だけど、間桐の血筋は魔術師の家系。きっとあいつは、魔術師になりたいって仕方なかったのよ。特別な存在である魔術師にね。サーヴァントを使役するということとは、魔術師にしか成せないこと。あいつは、それを実現して有頂天になっていたってわけ」

「そういうものなのか」

オレにはピンとこない話だが、そういうこともあるのだろうか。

「それで遠坂。慎二がライダーの仮のマスターだとして、本当のマスターは誰だと思う？」

これ以上、遠坂に慎二をけなさせていると、言葉の暴力だけで慎二が殺されてしまいそうなので、少し話の方向性を変えることにした。

今、一番気になっていることだ。

「おそろく、間桐臓硯よ」

「ああ。慎二と桜の爺さんか」

以前、慎二の家に遊びに行つた時に、少しだけ見かけたことがある。一見したところかなりの老齢で、杖も突いていた。とても戦えるような人物ではないように思えるが……

「間桐臓硯は、間違いなく魔術師よ。でも、10年前の聖杯戦争時点でとても戦えるような状態じゃなくて、今回と同様に代理のマスターと

して、出奔した息子を無理やり戦争に駆り出したみたい。まあ、慎二の場合は本人も望んだんでしようけど」

「だとすると、本人が出張ってくる可能性は少ないか」

その場合、この状況ではオレが最も危惧する可能性が現実になるかもしれない。

「慎二が戦いを放棄した場合、桜が代理のマスターにされる危険があるってことか……」

そう。桜が聖杯戦争への参加など望むわけもないが、間桐臓硯が聖杯に固執するのであれば、十分にあり得る話ではないか。

「……桜……ね。その子は、衛宮君にとっては大事な子なのね」

遠坂は少し顔を伏せて考え込んだ。

「……どうかしら。通常、魔術師の家系は一子相伝。誰かを後継者にすると決めたら、他の子には秘奥を伝えないものよ。今回、慎二がマスターとして参加した以上、他の人物にもそれを伝えるかどうか。そもそも、慎二が一回やられたくらいで、諦めるようなヤツかしらね」

「確かにな」

遠坂の答えは、完全に安心できるものではなかったが、そう悪いものでもなかった。引き続き慎二がマスターを続ける可能性が高いということだ。

とは言え、オレとしては朝から考えていた一つの行動を実行する材料にもなった。

「遠坂。オレは、慎二と間桐臓硯のこれからの動向が気になって仕方ない。特に昨日の一件で、慎二の精神状態は不安定になっている。あいつは感情が昂りやすいし、以前も桜に暴力を振るっていた節がある」

その点がオレの心配の種だった。

「だから、桜をオレの家に匿おうと思う」

セイバーが少しだけ身じろぎした。

これが今日の朝、セイバーにも相談した内容だった。

朝の時点では確定までしていなかったが、遠坂と話して実行すべき

だと考えたのだった。

「・・・そう。それは、私が何か意見する筋合いのものでもないわ。その子がそれだけ大事だって言うんなら・・・しっかりね」

この件について、もう少し遠坂は異論を唱えるかと思っただが、あっさりとして認めてくれた。共闘関係にあるオレが、他のマスターの親族を匿うというのは、微妙な問題を孕む。

最悪、桜がマスターにさせられた場合、身中に敵を抱えるという構図になるのだ。勿論、オレはマスターにさせられた場合の桜を敵だとは思わないが、遠坂は違うだろう。

遠坂の態度には少し腑に落ちないものがあるが、敢えて深入りしないことで遠坂なりにオレの私的な感情に配慮してくれたということかもしれない。

「それで、今日からのことなんだけど」

遠坂がこの話題はお終いとばかりに話題を変える。

「アーチャーはほぼ回復したんだけど万全ではないから、今日は軽めの偵察に止めようと思うの。明日からが本番ってことね」

そういうことなら、今日を休息に充てるつもりだったこちらとしても都合だった。

「そうであれば、オレ達は非番ってことでいいか？一昨日からの連戦で疲労も溜まっているから、少しこの辺で落ち着きたいし、明日からが本番というのはオレ達も考えていたんだ」

「構わないわよ。昨日は衛宮君達だけが働いていたわけだしね」

「勿論、もし今日の偵察で危険が迫るようだったら、例の石を使って遠慮なく連絡してくれ」

「まあ、そんな場面にはならないよう注意するわ。ていうか、昨日のあなたたちのほうがよほど危ない目に遭ってるじゃない」

と、非難の目を向けてくる。

元々、昨日は石を使うつもりがなかったからな。

「まあ、セイバーとライダーの戦力差を考えれば、そんなに切羽詰まった状況にならないって計算があっただらうけどね。そして、実際に苦も無く撃退しているわけだし」

そう言いながら、今度はセイバーのほうも見る。

「ほんと。そういうところは、しっかりと分析できてるわよね」

そう。昨日、手を組んだ遠坂達の加勢が期待できない中でも、慎二の動向を探ったのは、万一そのまま戦闘になっても、負けないという自信があつたからなのだ。

オレも遠坂も、一昨日のライダーの戦いぶりを見ていて、当然セイバーの力も分かっている。この両者がぶつかった時に、結果がどう出るかはほぼ分かっていたわけだ。

その点、慎二はこちらの力が分からないままに、挑んできたのだから、マスターとしては思慮に欠けたということは間違いない。

彼我の戦力がわからないままに戦うということは、それだけ危険ということだ。

「そんなわけだから、私たちはまだ正体がわかっていないキャスターとアサシンの居場所を探るわ」

「だけど、全く目星が立たない状況でどうするっていうんだ？・・・いや、遠坂に限ってそんなことはないか」

「ご名答。ある程度敵の拠点の見当はついているの。だから、そこを重点的に探るってわけ」

「どこなんだ？」

「柳洞寺よ。元々この街では霊的な力が一番強い場所なんだけど、最近一層魔力が集まっているの。聖杯戦争に関係する誰かが動いているんじゃないかしら。一番怪しいのはキャスターのサーヴァントだけど、もしかしたらアサシンのマスターかも」

「柳洞寺か」

学校で一番親しい友人である柳洞一成の自宅でもある。

彼自身がマスターである可能性は皆無に等しいが、今の遠坂の話どおりだとすれば、聖杯戦争に巻き込まれる危険もあるだろう。そういう観点では、心配だった。

「まあ、何にせよ今日は深入りしないわ。明日以降の本格稼働前の交通整理ってところよ」

「明日の具体的な行動については、今日の遠坂達の調査結果次第って

ことになるな。それは、明日、学校で話せばいいか
「そうね」

今日、明日の指針については、これくらいだろう。

この後、セイバーが前回の聖杯戦争で切嗣のサーヴァントであったことを伝えたくえで、アインツベルンや言峰綺礼のことに、遠坂に聞いてみた。

遠坂はかなり驚いていたが、

「ああ。衛宮君がセイバーを召喚できた理由は、お父さんとの縁があつたからなのね」

と、納得してくれた。

そして、彼女が知る限りの話をしてくれたのだった。

アインツベルンについては、聖杯戦争の創始者である御三家と言われる家系の中でも最も根幹を成す家系で、そもそも聖杯の作り手であることなど。

ちなみに、その御三家の残り二つが遠坂家と間桐家なわけだ。

言峰については、前回の参加者ではあるものの、具体的に彼がどのような立ち回りをしたかは、聞いたことがないとのことだった。

ただし、遠坂の父親である【遠坂時臣】のサポートのような立場であつたが、結局、遠坂時臣は勝ち残ることができず、命を落としてしまったと言う。

「別にあいつのせいだとは思っていないわ。そもそも聖杯戦争は、個々の戦い。綺礼だってマスターだったんだから、最終的には敵同士になる可能性すらあつた。父さんが負けたのは父さん自身の問題よ」

この話で気になったのは、セイバーが言峰は最後まで残つたと言っていた事との兼ね合いだ。これが意味する所は、サポートすべき遠坂時臣が先に脱落した後も、言峰は戦い続けたということであり、本人も何らかの目的を持って戦っていたということに他ならない。

もう少し話そうかとも思ったが、そろそろ家に戻ることにした。

夕飯の支度以上に、大事なミツシヨンがある。

桜に今日からうちに泊まるよう説得しないといけないのだ。桜は

夕飯前にオレの家に来ることが多いため、そのタイミングで話そうと思っていた。

「遠坂。色々と聞かせてもらってありがとう。お前にとっても、あまり触れられたくない話もあっただろう。すまなかった」

「衛宮君、あまり私を舐めないでね。この戦いに臨む以上、そんな感傷は引き摺っていない……って、そんなわけないか。わかつたうえで、謝ってくれてるのよね。あなた」

そう、わかっている。遠坂凜は親の死などで揺らぐことはない、彼女自身がそう規定しているであろうことを。

しかし、それはあくまでも自分の中でのルールに過ぎない。本当にそれを消化しきれているかと言えば、きつと違うだろう。

「買い被り過ぎだ。ところで、帰りは少し急ぎたいからバスを使う。遠坂はどうするんだ？」

「途中までは一緒だから、私も同じところまで乗っていくわ」

「そう言えば、バスという乗り物に乗るのは初めてです」

遠坂との会話では、聞き手に徹していたセイバーが目を輝かせる。

「あんまり、期待しないでくれよ。爽快感とか欠片もないからな」

「そうなのですか？」

「セイバーが走ったほうが速いんじゃないかな」

「ま、体験すればわかるわよ。それじゃあ行きましようか」

と言って、遠坂が先頭に立つ恰好になり、三人でバス停に向かった。

「知り合いに見つかったらちよつと嫌だな……」

「何が不満なのよ？」

「いや……何でもない……」

ただでさえ、セイバーと一緒にいると目立つのに、そのうえ学園NO.1の人気を誇る美少女優等生（嘘）と休日一緒にいるところを見つかったら、学校中のやかみの視線の餌食になることは明白だった。

夕飯の食材を買い求めるため、深山町商店街付近のバス停で降り、馴染みの八百屋に向かおうとしたところで、

「先輩？セイバーさんも。あれ、遠坂先輩も？」
桜に遭遇した。

白いワンピースに桜色のカーディガンを羽織っていて、よく似合っている。

それにしても、タイミングがいいとか悪いとかいうか。

なんとなくバツが悪い。

「あいや。私はたまたま同じバスになっただけよ。知り合いだし、少しくらい話をしてたけど」

珍しく遠坂が狼狽うろたえていた。

「そうなんですね。先輩と遠坂先輩が仲がいいなんで知りませんでした」

「ま・・・まあ、同じ学年なわけだしね。一成つていう共通の知り合いもいるし・・・あ、それじゃあ私は家に帰るわ。それじゃあね」

それだけを言って、そそくさと遠坂は道の向こうへと消えていった。

「新都のほうにお買い物だったんですか？」

ちらつと、セイバーが持っているファンシーショップの袋に目をやりながら聞いてきた。そこには購入したぬいぐるみが入っている。

後ろめたいところは全くもって微塵もないはずなのに、何故か少しヒヤツとした汗がこめかみをつたう。

「ああ。セイバーにこの街のことを色々と教えてあげたくてな。学校がある時には、なかなか時間を作れないから」

「先輩は偉いですね。それじゃあ私も今日はこれで失礼しますね」

「いや、桜。ちよつと待ってくれ」

明らかに桜はこの商店街で食材を調達してから、うちに来ようとしていたはずだ。変な気を回させて、その厚意を無駄にさせるわけにはいかないし、例の話をする機会を逸してしまう。

「セイバーへの街の案内はもう終わった。この商店街だって午前中に見てもらったしな。オレも夕飯の食材を買うためにここに来たんだ。折角だから何を作るか話しながら、一緒に買い物しよう」

「でも、セイバーさんもいますし」

「私への気遣いは無用です。桜。シロウや桜に美味しい料理を作っていたからですから、せめて荷物持ちくらいはさせてもらいたい。それに、二人の話を聞きながら、この国の食材を鑑賞するのも新鮮です」
セイバーが絶妙な言い回しでフォロワーしてくれた。

もつとも、衆人環視のこの商店街で、荷物持ちを女性にさせるのは、オレの世間体にもろに関わるので断固抵抗するつもりだ。

「な。セイバーもこう言っているし。みんなで一緒に買い物をするう」

「そういうことならわかりました。何て言うか……すみませんでした」
桜が少し頭を下げる。

いや、桜はセイバーに気を遣ってくれただけで、謝るところじゃないと思うんだが。

そんなわけで、商店街の店を渡り歩き、3人で夕食の食材の買い出しを済ませた。

「昼は洋食メインだったから、今夜は鍋にしよう」

「いいですね。先輩」

「おお……また、初めての料理ですね。楽しみです」

ビュッフェでたらふく食べたわけだが、セイバーの食欲は底が知れない。材料は多めに買っておいだつもりだ。余った場合には、明日以降に回せばいい。

荷物持ちについては、案の定一悶着あったが、セイバーがぬいぐるみを持っているため、食材を多く持つのはオレという形になって落ち着いた。

そうこうしているうちに、家に着く頃にはすっかり日が落ちていた。

まあ、今日は鍋なので、準備にそう時間はかからないしご飯は予約タイマーで炊飯中だ。

玄関を閉め、荷物を置いてからすぐに居間に3人で集合した。

藤ねえもそろそろ現れるだろう。

「さてと」

藤ねえが来てからにするか、その前にするか悩みどころではあったが、先ずは本人と1対1で話して了承を得てから、藤ねえを説得するべきと考え、例の話を切り出すことにした。

「桜。突然で悪いんだが、今夜からしばらくうちに滞在してくれ」

単刀直入に伝えるべきことをはっきり言う。

「え？」

当然、桜は戸惑う。

「理由は二つある。最近、街で物騒な事件が立て続けに起きているだろう」

実際に殺人事件や昏睡事件が起きている。

殆ど直感に過ぎないが、もしかしたら、聖杯戦争に関連しているかもしれないとオレは思っていた。

「桜の家は、お爺さんと慎二しかいないけど、慎二はたまに夜遊びが酷くて帰るのが遅い。それが心配だ」

理由として苦しいのは百も承知だが、とにかくオレが心配しているというのを伝えることが大事だと考えていた。

「そして、もっと大きな理由が慎二のことだ。昨夜、慎二と話す機会があったんだが、情緒不安定になっているみたいだった。原因はわからないがトラブルがあったらしい」

慎二が感情的になっているのも、遠坂に散々やられたことも一応事実である。

「あいつとは付き合いが長いから、結構よく分かっているつもりだ。こういう時に、何をしでかすか・・・いや、正直に言くと、桜に対して何か八つ当たりのようなことをするかもしれない」

とにかく目的は間桐家と桜の接点を少なくしたかった。そして、桜を守りたい。

嘘をつかない範囲で何とか説得するしかないのだ。

「……………先輩。とにかく先輩は私を心配してくれているということですね？」

沈黙していた桜が問い掛けてきた。

「そうだ。頼む」

「わかりました。ありがとうございます。そこまで、私なんかのことを気に掛けてくれて」

「私なんかなんて言うな。桜はちゃんとしている。自分自身のことを卑下する必要なんかない」

それはともかく、承諾してくれて良かった。

頑なに突っぱねられたら、どうしようもなかったかもしれない。

「確かに、昨日から兄さんの様子がおかしいんです。何かに怯えているみたいで。今日の朝からどこかに出掛けていて、少なくとも私が家にいる間は戻ってきませんでした」

「そうか。桜も気付いていたんだな」

それにしても慎二は、今日一日不在だったのか。

単に休日なので遊びに繰り出したということも普段ならあるんだろうが。

仮にも今の慎二は、サーヴァントを失ったマスターだ。

もしかしたら、教会に保護を求めたのかもしれないな。

と思索していたところで、

「シロ〜！晩ごはん〜！」

タイミング良く、腹ペコの飼い虎がやってきた。

話の展開次第では、折角の食事が台無しになるので、桜を泊めるという話は食事中ではなく、落ち着いたところで、藤ねえに話すことにした。

ちなみに、セイバーは昼間あれほどビュツフエを食べたにも関わらず、締めのおじやを3杯食べていた。

「本当に底なしだな・・・」

「どうかしましたか？シロウ？」

そのセイバーのセリフに戦慄しつつも、桜の滞在について説明したところ、意外なほどあっさり藤ねえは賛成してくれた。

セイバーの時はそれなりに抵抗があったが、まあ、男女二人きりよリマシということか。あるいは、家族同然の桜であるということが影

響したか。

途中、ニヤニヤと変な笑みを浮かべながら、

「うふふ．．．士郎もやつとその気になってきたのかしらね」
などと言っていたのが気にはなったが。

藤ねえは、この件について、間桐家の保護者、即ち間桐臓硯に連絡することも買って出てくれたし、桜の着替え等についても準備してくれたのだ。

「じゃあ、電話してくるわね」

そう言つて、実際に廊下に置いてある電話機へと向かつていった。

勿論、桜の滞在の理由は、慎二が不安定などというものではなく、外国人（つまりセイバー）との異文化交流のためという名目である。

「先生が言うのならつてことで、あつさり納得してくれたわよ」
すぐに戻つて来て、藤ねえは向こうの反応を伝えてくれた。

ということは、間桐臓硯は桜を聖杯戦争に駆り出すつもりはないということだろうか？

「藤村先生。ありがとうございます」

桜も嬉しそうに藤ねえにお礼を言った。

「セイバーさんもこれからよろしくお願いします」

「こちらこそ。桜の料理も美味ですから、私も大変嬉しいです」

桜とセイバーもこの2日間で多少打ち解けている。

若干ぎこちないものの、これからしばらく同居することになるわけで、しっかりと挨拶を交わしていた。

それにしてもセイバー、お前、ブレないな．．．

今後、オレが不在時の慎二の動向には気を付けないといけませんが、日中は基本的に学校だし、夜になったら呼び鈴が鳴っても鍵を開けないようにすれば問題ないだろう。

桜の部屋の準備などで少しバタついたが、今日は休息に充てる日と決めたのだ。

土蔵での鍛錬は早めに切り上げて、しっかり寝ることにしよう。

その夜。

オレは夢を見た。

それは、とても人には言えないくらい淫らなもので、そこにはオレと遠坂の二人だけしかいなかった。

第8話 　　く4日目①　　「ナイフと魔術」

E t u r n

朝の5時前。

幸いなことに普段以上に早く目覚めた。

好都合だった。

「速やかに証拠隠滅だ！」

よりもよって、桜が泊まるようになったその日にこんなことになるうとは。とにもかくにも証拠物件である下着トランクスをどうにかせねば。

しっかりと手洗いをした後で、少し不自然だが洗濯機に放り込みスピード仕上げを選択してスタートボタンをポチツとする。

「・・・ふう。これでよしと。文明の利器ハンザイ」

やたらとリアルな夢を見た。

それは、オレと遠坂が・・・何と言うかアレをする夢だったのだ。

心なしか若干の疲労感もある。

しっかりと休息をとって、万全の体調にするための夜にこれでは本末転倒もいところだ。

「授業中、ちよつと寝るしかないな」

先生、すいません。

健康な若い男子には色々と事件があるものなのです。

6時以降は概ね平常どおりとなった。

これまでと違うのは桜が間桐邸からうちにやって来るのではなく、うちの離れにある客室から居間に直接来るという点だ。

とは言え、大した違いではない。

「おはようございます。先輩」

「おはよう。桜」

いつもどおりの挨拶を交わし、いつもどおり2人で食事の準備を始める。方に一つも早朝のオレの行動を悟られるわけにはいかない。

極力、普段どおりを心掛けた。

藤ねえとセイバーも含む4人分の朝食を作り、さらに今日はセイバーの昼食も準備する。

「ちゃんと眠れたか？桜」

枕が変わると寝られないタイプかもしれないので、聞いてみた。

「大丈夫です。いつもと違うのでちよつと緊張しましたがけど、すぐに寝付けました」

朝食の支度が整う頃に、セイバーが居間に顔を出し、藤ねえもやってきたので、4人揃って食卓を囲むことになった。

この後、桜は弓道部の朝練で、藤ねえも授業の準備のため、オレより早めに家を出ることになる。

「慎二の奴、今日は休んでいたな」

学校の屋上の片隅で昼食を食べながら、オレと遠坂は作戦会議をしていた。

あの夢に出てきた女子と、二人きりというのは緊張を強いられるが、全てオレの中での出来事に過ぎない。必死でオレは意識しないように会話をしていた。

「そうみたいね。家に引きこもっているのか。あるいは教会に逃げ込んだのかもしれないわね。根は臆病なやつだもの」

「昨日相談したとおり、桜はオレのうちに泊まることになった。藤ねえが間桐家に電話した時には、間桐臓硯はあっさり許可してくれたみたいだった。慎二がもし教会に匿われたとしたら、もう臓硯自身が動くしかないっていう状況になるのかもな」

「充分あり得るわね。とは言え、一旦は家に籠城するかも。他が潰しあうのを待つ方針でね。こちらとしても、向こうの本拠地においそれと乗り込むわけにはいかないもの」

「ライダーでは他のサーヴァントに対して分が悪いことは分かっているしな。でも、セイバーに聞いたんだが、聖杯が出現するのは期間限定なんだろう？であれば、聖杯が欲しいやつにしてみればずっと守りに徹するわけにはいかないよな？」

「そのとおりよ。どこかで動かざるを得ない。だから、あくまでも『一旦は』なの」

「一度教会に行つて、慎二がいるか確かめるか」

慎二は、臆視にとつてはある意味貴重な手足だ。それが動かせる状態なのかを確認したいところだった。

「そうね。でも、綺礼が喋るとも思えないのよね。元マスターを匿うのが仕事だから、匿っているとも匿っていないとも言わないと思う」「そうすると確かめようがないか」

「まあ、ダメ元で一度私が探りを入れてみるわ」

「頼む」

これで間桐家陣営の話はおしまいだ。

「で、昨日の首尾はどうだったんだ？」

昨日は、遠坂達がアサシンやキャスターの居場所を探してくれた筈だった。

「上々だったわ。おそらくアサシンのサーヴァントが柳洞寺にいる。

そして、キャスターもね」

「そこまでわかったのか？」

だとすれば、かなりの収穫だ。

「先ず、正面の山門からじゃなくて、山の中から柳洞寺に近付こうとしたんだけど、アーチャーが入れなかったの。サーヴァントを寄せ付けない結果が張ってあったのよ。強行突破することは不可能ではないんだろうけど、かなり損耗しそうだったみたい」

「強力な結界だったわけか」

「そう。それだけの結界を張れるのはおそらくキャスターね。柳洞寺に魔力が集められつつあることも含めて考えると、間違いないと思う」

「成程な。でも、アサシンもいるんじゃないかっていうのは、どういうことなんだ？」

「ええ。勿論それだけじゃないわ。側面から忍び込めないとすれば、当然、正面から行つてみることにしたわけよ」

「まあ、そうなるか」

正面から入るので危険度は上がるが、遠坂の性格では手ぶらで帰ることを良しとはしないだろう。

「で、山門に向かってあの石段を登って行ったんだけど、山門の手前でサーヴァントにでくわしたってわけ。で、そいつはちよつと洒落た紋付袴を来た侍だったのよ」

「侍？」

「ええ。長い刀を持っていたわ。で、ここを通るなら相手になるって言ってきたのよ。こっちは今日は強行突破をするのが目的じゃないから、あなたの相手はまた今度ねって、手を振ってとつととおさらばしたわけ」

見事なまでに自分の都合のみを一方的に相手に押し付ける対応だ・・・

そう言われた侍とやらの反応をちよつと見たかった。

「つまり明らかにそのサーヴァントは、キャスターって風情じゃなかったってことだな。だから、消去法でアサシンと判断したわけか」

「そういうこと。まあ、侍がアサシンっていうのも、だいぶ違和感あるけどね。山門を通るなら戦うっていうことは、門番みたいなものじゃ。そうでない場合は、結界に阻まれちゃうわけだから、基本的に正面から行かざるを得ない。だけど、そのためにはあいつを突破するしかないっていう寸法ね」

「そうすると、そのアサシンとキャスターが組んでいる可能性が高いってわけか」

「ご明察。キャスターのマスターとアサシンのマスターは共闘関係にあると見るのが妥当よね」

「で、今日はどうするんだ？オレとしては、選択肢が三つあるんじゃないかと思ってるけど」

遠坂の話の聞きながら、今後の方針についてオレなりに考えていた。

「聞かせてもらおうわ」

「二つ目は、間桐家とライダーの動向を監視する」

オレとしては最も気になるところだが、純粹に間桐家陣営の脅威度

を考えると優先度は高くない。ライダーのサーヴァントとしての能力や、間桐臓硯あるいは慎二のマスターとしての能力は左程脅威ではない。共闘するオレ達が遅れをとることはまずないだろう。

「二つ目は、ランサーのマスターを探る。今のところ手掛かりがないからな」

今日の遠坂の報告により、オレ達はサーヴァントに関する情報は一通り手に入れたことになる。不明だったキャスターとアサシンが柳洞寺にいることがほぼ確定となった。一方でマスターとサーヴァントの組み合わせは、オレとセイバー、遠坂とアーチャー、イリヤスフィールとバーサーカー、慎二とライダーである。

マスターがわからないのは、キャスター、アサシン以外だと、ランサーだ。話の流れ次第では、ランサーのマスター探しを優先してもいいだろう。

「そして三つ目が、遠坂達もたらしてくれた情報の深掘りだ。つまり、柳洞寺にいるのが、キャスターとアサシンであることの確認と、そのマスターが誰かを探ることだな」

柳洞寺にキャスターとアサシンがいることはほぼわかった。だが、事実確認はできていないうえに肝心のマスターがわかっていない。この点について、調べる必要がある。

「妥当な選択肢ね。衛宮君のお勧めを聞こうかしら？」

遠坂はオレの挙げた三つの案を肯定し、こちらの考えを聞いてきた。

「オレとしては、三つ目だな。柳洞寺にキャスターとアサシンとい二人のサーヴァントがいるっていうのは脅威だと思う。あそこは、魔力が濃くて、この戦いの要衝になるってセイバーも言っていたしな」

「私も同意見よ。決まりね」

遠坂は片目を瞑って、オレに賛成してくれた。

「お帰りなさい。シロウ」

学校から帰宅するとセイバーが出迎えてくれた。

今日の夜は柳洞寺に向かう。状況次第では、キャスター、アサシン

との戦闘もあり得るので、セイバーとの稽古は軽く汗を流す程度に留めておいた。

「シロウはスジがいい。これまではあくまでも気持ちの備えのための稽古でしたが、次からはもう少し本格的に時間を取って鍛えましょう」

彼女からはそんな有難いお言葉をいただいた。

「今日とはかく、その前は充分にスパルタだったと思うんだけどなあ……」

まあ、英霊からしてみれば、稽古のうちに入らないということかもしれない。

部活から帰ってきた桜と夕食の準備をし、藤ねえが来てから4人で食卓を囲んだ。

「最近物騒になっっているから、明日から部活も放課後の練習はできなくなるわよ」

とのことだった。

これも聖杯戦争の余波なのかもしれない。

藤ねえが帰宅し、桜も離れの部屋に戻った頃合いでオレとセイバーは柳洞寺に向かうことにした。遠坂とは石段の登り口で夜の10時に落ち合う約束だが、その時刻よりは少し早く着くだろう。

今夜の目的は、キャスターとアサシンのマスターを突き止めること。戦闘になっても無理しないという方針だが、当然状況次第だ。

オレは一昨日と同様に木刀を竹刀袋に入れ、走りやすい運動靴を履いて玄関を出た。セイバーも続く。

ゾワツ

いつもの交差点に差し掛かったところで、違和感を覚えた。

腐臭。だろうか。気持ちの悪い何かが肌に纏わり付くのを感じた。

思わずセイバーを見る。

「……シロウ。これは……」

セイバーも、この違和感に気付いたようだった。

「何が良くないものがここを通り過ぎたような感覚です」

頷いて、さらに柳洞寺に向かう。ほんの僅かだが、腐臭が強くなっているように感じた。

遠坂との合流場所である石段まで到着した。オレ達を感じた「得体の知れない悪いモノ」はこの上にあるような気がする。

勿論、何も確証はない。

「先ずは遠坂が来るのを待……」

ズンツ……

上から不吉な音がした。

何か良くないことが起きた、と直感する。

「一体、何が……」

見上げてみるが、ここからでは長く続く石段の先が見えない。途中に踊り場もあるため、山門まで視線は通らない。

これから間違いなく上でもっと悪いことが起きる。これが何かは見当もつかないが、その確信だけはある。

寺には一成のような一般人もいるのだ。

ここで覚悟を決めないで何が『正義の味方』か。

ポケットから遠坂から渡された宝石を取り出し、握り締める。

「行くぞ。セイバー」

「ええ。勿論ですシロウ」

オレとセイバーは一気に階段を駆け上っていく。

オレは手にした宝石に魔力を流した。これで遠坂にはこちらで非常事態が起きたことが伝わる。遠からず駆け付けてくれるだろう。

キンツ！

長い石段を登り、山門が視界に入ったところだった。

金属音を響かせながら一本の長刀が落ちてきて、オレ達が踏み込む直前の踊り場に転がるようにして止まった。

「なんだ？」

「ただの刀ではありませんね。凜が話していたサーヴァントのものではないでしょうか？」

「そういうことは……」

そのまま刀を横目に石段を登って山門まで辿り着くと、そこには一人の侍が倒れていた。

「な……」

オレは絶句した。

凄惨な有様だった。

彼には手足がなく、紫を基調とした鮮やかな色合いの和装を纏ったその体は無残に中心から引き裂かれている。そして、そこから夥しい量の血が溢れてきており、その体をより鮮やかに彩っていく。

「……これはまた、みやび雅な……」

普通であれば、即死するか、苦しみで悶え、発狂するような状態だ。

だが、その侍は笑みを浮かべており、あまつさえ言葉を紡ぎ続ける。

「ふ。おぞましい磨羯まかつだかつ蛇蝎なまになま翱なまられたかと思えば、かように美しい花を愛でられようとは……」

侍はセイバーに視線を送っている。

「今宵の月は気紛れなものよ」

その体は少しずつ、希薄化していき、僅かに輝く光の粒子となって宙へと舞いつつある。

オレもセイバーも今は言葉を発さない。

「ゆめゆめ気をつけるがよい。あれは我らを呪うものよ」

侍の姿は徐々に希薄になっていく。

「そして勝手な願いではあるがざれごと戯言ざれごとと思つて耳だけ傾けてくれ」

侍は目を閉じる。

「我が主マスターの様をとくと見て欲しい。あれは……ただの少女に過ぎぬ……」

最後まで微笑みながら、侍は消えた。

僅かの間だったが、オレもセイバーも身じろぎ一つできず、立ち尽くした。

彼の残した余韻を壊してはいけない。

そんな気がした。

「アサシンのサーヴァントだったのでしょうかね」

しかし、いつまでもこの場に留まっているわけにもいかない。

セイバーが止まった時を強引に動かすかのように推測を口にした。

「ああ、遠坂の話と一致している」

「この先にマスターがいるということですね」

「そうだな。急ぐう」

まだ、侍が残した清廉な空気が残る山門を背に、オレ達は本堂へと向かった。

オレとセイバーが堂内へと至る木製の階段を駆け足（参拝する時にはとでもあり得ないが）で昇ったところで、

「・・・うさまぁー!!」

その声が微かに聞こえてきた。

女性の叫び声だ。

悲痛に誰かの名前を呼んでいるように聞こえた。

その声の通り抜けてきたと思しき方角へと急ぐと、本堂を抜けた先にある小部屋に辿り着いた。

その部屋の襖は開け放たれており、その奥に先ほどの悲鳴の主らしき女がいた。

「・・・落ち着くのよ・・・まだ・・・まだ・・・大丈夫。必ず助ける・・・落ち着いて治療の魔術を・・・」

濃い紫色のローブを纏い、水色に近い紫色の髪。特徴的なのは耳が少し尖っていることだろうか。

美しい顔を今は悲痛に歪めながら、腕に血塗れの男を抱いている。

その男はオレの知っている人物だった。

名は葛木宗一郎。オレの学校の社会科の教師だ。

異様なことに、その体は血塗れというだけでなく、顔や服の一部がまるで炭で塗られたように黒く染められていた。

「誰っ!？」

女はオレ達に気づき、こちらに顔を向けてくる。その双眸からは涙が溢れていた。

彼女が魔術師なのは推測がつく。格好からして魔術師然としているだけでなく、『治療の魔術』と言っていたことから明らかだ。

さらに言うならマスターとしてのオレの目から見ると、サーヴァントであることもわかる。

おそらくこの女がキャスターのサーヴァントだろう。つまり、基本的には敵と言うことになる。

だが、この状態を見せつけられて問答無用で殺しにかかるような人間になりたくはなかった。

「セイバー」

オレはそれだけ言ってセイバーのほうを見る。

「わかりました」

オレの意図を察して、高まっていたセイバーの剣気が収まる。

戦闘時には容赦のないセイバーも、流石にその気にならないようだ。

「まさか、セイバーなの・・・？よりもよってこんな時に・・・アサシンは・・・？」

アサシン？

あの侍のことか？

やはりアサシンとキャスターは手を組んでいたということだろう。

「落ち着いてくれ。まずは葛木先生の応急処置が先だろう。あんたの様子じゃ、とにかくその男が大事なんだろう？」

「え・・・？ええ、そう。そうよ。早く宗一郎様の手当てを・・・」

取り乱し方が尋常じゃない。

ふと侍が言い残した「ただの少女」という言葉が頭を過った。

「どいてくれ。今のあんたよりはオレの方がマシだ」

そう告げながら、オレは上着を脱ぐ。

女は戸惑いながらも、抵抗せずに男の体をこちらに預けてきた。

今の自分が役に立たないことを察したのだろう。

セイバーは念の為というところか、オレと女の間に関に体を入れて、いざとなればオレを守れる状態を作っていた。

「やはり、葛木先生だよな・・・」

キャスターとの関係が何なのかはわからないが、とにかく助けなくてはならない。

右の肩口から鋭利な刃を突き立てられたようだった。かなりの出血ではあるが、しつかり止血すれば致命的な状態にはならない。

しかし、そのためには長めの布が必要だった。

残念ながら、手近には見当たらない。

「投影、開始」

手にナイフを投影する。

隣でキャスターが息を呑む気配を感じた。

脱いだ自分の上着をナイフで短冊状に斬り裂いて、それぞれをきつく結び繋げることで即席のタオルを作る。そして、持っていたハンカチを傷口に当てて、そのタオルで左脇まで巻きつけて縛った。

「これで、止血はできた。当面は大丈夫だろう」

「見事な手際です。シロウ」

「・・・た・・・助かったわ。ありがとう、坊や」

女の蒼白だった顔に少しだけ色が差した。

それとともに冷静さを取り戻したようだった。

「それで、あなたはキャスターのサーヴァントということの間違いありませんね」

セイバーの全身から、一度は沈静化していた剣気が湧き上がる。

「ええ。そうよ」

あつさりと女は自分がキャスターであることを認めた。

「取引よ。セイバー。そして、そのマスターである坊や」

オレ達を睨みつけるようにして、そして、揺るぎない覚悟を秘めてキャスターはその視線を向けてきた。

「宗一郎様を治療するための時間を頂戴。その間だけ私を殺すのを待って欲しいの。終わったら私を遠慮なく殺せばいいわ」

「な・・・」

「え・・・？」

「時間が惜しいの。私にとって最も大事なものは宗一郎様の命。ただそれだけでいい」

キャスターは部屋の片隅の棚から、古びた西洋風の巻物と万年筆のようなものを取り出してきた。

「これは自己強制証文セルフギアス・スクロールといって、書いた術者本人に強制的な制約を課すもの。これに書いた内容によって、死後の魂までその文言に縛られる最大級の呪いの書よ。これに私がさっき言った内容を書くわ」
そう言いながら、巻物を広げる。

「信じられるかはあなた達次第だけど、私はこれに書こうが書くまいが、治療さえ終われば何もせずにあなた達に殺されてあげる。私が抵抗したところで、セイバーに勝てるわけがない。そんなことをしても無駄だし、それで宗一郎様に危険が及べば本末転倒だもの」

女の言葉からは、捨て身の気魄が伝わってきた。

「あんたの望みはよくわかった。こつちとしては、そこまで強制するつもりはないぞ。オレだって葛木を助けたいんだ」

少し気圧された感はあるが、オレは正直な心情を伝えた。

オレは、セイバーに視線を送り、彼女の意見を確認する。

「シロウがそう言うのであれば、私も反対する理由はありません。あなたは自身の命を差し出すことに、一切の躊躇がなかった。主を思うその忠義は見事だ。その覚悟を無下にできよう筈もない」

間違いなくこの女は本心を伝えてきている。セイバーもそれは直感的に分かっているのだろう。オレの意見に異を唱えなかった。

「ただし、その証文スクロールに今後、私たちに対して危害を加えないことを明記しなさい」

セイバーがオレに視線で了解を求めてくる。

オレとしても、異論のない条件なので、無言で頷く。

「わかったわ」

キヤスターは、全く抵抗を示さず受け入れた。

「念のため、他者への指示や示唆によってもできないような文面にするよように」

セイバーは、条件を追加した。

「そんな発想、今の私にはなかったけれど・・・あなた、結構悪辣なことを考えるのね」

「いいえ。私はその証文スクロールに酷似したものを知っています。そして、それを悪用して騙し討ちした場面を目の当たりにしているので、用心深

くなっているだけです」

「わかったわ」

キャストが書き終えた文面は、こちらの要望に則したものとなっており、直接、間接問わず彼女がオレとセイバーに対しての害を成す事を禁じるものとなっていた。

「いいでしょう」

とセイバーが認めると、キャストは自身の指先をオレが渡したナイフで僅かに傷つけ、証文スクロールに血判を押印した。

「これで、いいかしら。宗一郎様の治療の邪魔だけはしないで」

「ああ。約束を違えるつもりはない」

「行きましょう。シロウ」

治療を始めた一人の女と、その対象となる男を残して、オレ達はその部屋を出ると、静かに襖を閉めた。

もう、ここに用はない。

廊下に出て、さらにしばらく奥へと進む。

すると途中にある角部屋で何人かの門弟と思しき男たちが倒れているのが見えた。

彼らの状態は、先ほどの葛木とは違い、血塗れというわけではなかった。ただ体の所々が黒く塗り潰されている点は同じだ。

警戒するようにしてセイバーがその部屋の中に入っていく。

「一体、これは何なんだ・・・」

オレは、廊下から倒れたままの門弟達を見回しながら、啞然とする。と、その時だった。

ギンツツ!!

突然、オレのすぐ後ろで甲高い金属音が響いた。

「シロウ!?!」

オレに先行する形で部屋に入っていたセイバーが振り向き、慌ててこちらに戻ってくる。

その視線はオレではなく、さらに後ろに向けられている。

オレも咄嗟に後ろを振り返る。

すると、見覚えのある長い髪が広がり、オレの視界を埋め尽くしていった。

「ラ・・・ライダー!？」

第9話 く4日目②く 「柳洞寺の乱戦」

R t u r n

彼らの後を少し離れて尾行していた私は、右側が外と面した暗い廊下の先で、士郎とセイバーが正面にある角部屋に入ろうとするのを見ていた。

そして、その時、

悪寒が私の全身を駆け巡った。
すぐさま霊体を解除する。

この間の時間差がもどかしい。
実体化が完了すると同時に足元の廊下を構成する木板を蹴つていった。

二人からは僅かに距離を取って様子を見守っていたが、果たして間に合うか？

フ——

私と同様に音もなく、士郎と私の間に黒い影が実体化していく。見えはしないが、得物を構えて、士郎を狙っているのがわかる。

私は、手にした杭剣に付いている鎖を投じた。

これが一番早い。

黒い影が気配を感じてこちらを振り返った。

それは、異様な出で立ちをしていた。

全身が黒い幌のような外套で覆われていて、白い仮面だけが闇に浮かび上がっている。

私の鎖はすんでのところで、身を捻って躲かれた。

それでいい。注意を引き付けられた。

そのまま接近して、杭剣を突き出す。

ギンツツ!!

白い仮面は手にした黒い短剣で私の杭剣を反らしながら、体を入れ替えるようにして、私の攻撃から逃れる。

これで、目論見どおり少年を背に守る形を作ることができた。

「ラ・・・ライダー!？」

彼が私の名を戸惑ったように呼ぶのが聞こえた。

「怪我はありませんね？」

「あ・・・ああ。お陰で助かった」

感謝の声が心地良い。

「ライダー!?!なぜ敵であるあなたが？」

先行していたセイバーも戸惑いながら、士郎の方へと戻ってきた。

まあ、驚くのは無理もないだろう。

「結果的に士郎を守ったのは私ですよ」

軽く煽ってみる。

「ぐ・・・それは確かにそうですが・・・」

もつと煽り続けたいところだが、そういうわけにもいかない。

「ライダーが、なぜセイバーに加勢する？」

白い髑髏の仮面から意外なほど理知的な声が漏れた。が、こちらにはその問いに答える義務はない。

私は相手に向かって一気に間合いを詰めようと動いた。

が、こちらが追う気配を見せたところで、白い仮面は後方へ大きく退きながら、殆ど予備動作無しで黒塗りの短剣を投擲してきた。

飛んでくるのは3本。

うち1本は私。残り2本は後方の士郎への攻撃を意図したものだ。

ギン!ギン!——ギャリッ!

2本を手にした杭剣で、残りの1本を鎖で叩き落とした。

続け様にさらに3本。短剣が投じられる。

間を取るための牽制なのはわかるが、士郎が狙われているので迂闊には飛び込めない。

止むを得ず、先ほど同様に弾き落とそうとした。

ゴウッ!

その矢先、私の横を青い風が吹き抜けていく。

セイバーが敵に向けて、駆け出していた。

彼女は一振りですべての短剣をなぎ払い、接近していく。

「一体、お前は何なのだ!？」

セイバーが白い仮面に問い掛ける。

「？」

私としては、あれは見るからにアサシンのサーヴァントのように見えるが、彼女は、そう判断していないようだ。

だが、確かに疑問はある。

先程の部屋でやり取りをしていた女がキャスターであることは微かに聞こえた会話の内容で私もわかっていた。アーチャーは直接見ているが、慎二から風体は聞いている。そのため、私が全く知らないサーヴァントはあとバーサーカー一体だけである。

そして、山門で消えていった侍のような男も間違いなくサーヴァントだった。

確かなことは言えないが、消えた侍はバーサーカーには見えなかった。

セイバー、ランサー、アーチャー、ライダーである私、アサシンの思われる白い仮面、キャスター、まだ見ぬバーサーカー、さきほどの侍。

サーヴァントが8体いることになってしまったのだ。

これはどういうことだろうか？

「セイバーか。私とでは格が違いすぎるな」

白い仮面（おそらくアサシンだろう）は、さらに続け様に短剣を投げながら後退し、本堂のほうに駆けていく。

「逃すか！」

セイバーはそれを追う。スピードは向こうのほうがやや速いか。彼女としては、直感的にあの敵がマスターを狙ってくる存在だと感じているのだろう。

見失ってしまうと、いつ士郎が奇襲されるかわからないからこそ追っているのだ。ただし、本来なら彼女が士郎を守り、私が白い仮面を追う方が適任だろう。

「士郎が狙われたことと、私の言葉で少し熱くなってしまうまいか・・・」

とは言え、敵である筈の私を士郎の傍らに残して、追ったというこ

とは、

「多少は信用されているということでしょうか」

私が士郎の敵ではないということをや彼女なりに理解してくれているのかもしれない。

「それでライダー……」

士郎が私に話しかけてくる。

私に対する警戒心のようなものは感じられなかった。

嬉しい半面、それもどうなのかと心配になるが……

「!?!」

士郎のほうに振り返った私の右手方向。

廊下の外から何かが凄まじい速度で迫ってきた。

あれは!?!

「士郎っ!!」

咄嗟に士郎を押し倒す。

ゴツツ!

一瞬、士郎の上に覆い被さるような体勢になった私の背中を何か冷たく、それでいて熱いものが過ぎ去り、左の壁を易々と破壊して止まった。

背中に熱を感じた。

今の何かが少し掠めていって、流血したのかもしれない。

「矢?」

士郎が襲いかかってきたものを確認して小さく呟く。

確かに壁を破壊したのは矢だった。

その矢は僅かな時間だけ、そこにあったがすぐに消えていった。

だが、悠長に眺めている時間はない。

士郎を殺すという目的を果たせなかった以上、二の矢、三の矢がくる筈だ。

「失礼します」

「うわ、ライダーッ!?!」

私は立ち上がりながら、士郎を抱えて走り出す。

士郎が顔を赤らめながら、驚きの声をあげるが、躊躇している余裕

はない。

ゴウツ!

案の定、一瞬前まで私たちが立っていた廊下を先程と同様の矢が抉る。

ドンツ!!

さらに次の瞬間、私たちの行く手を塞ぐように、目の前を矢が通り過ぎて壁を破壊する。

狙いとしては、こちらの足を止めたいということだろう。

安易に後ろには下がるのは、攻撃を仕掛けてきている相手の思う壺のような気がした。そのため、右後方に飛ぶようにして、廊下から中庭へと出た。

私は、境内全体を囲む塀の上に攻撃してきた相手を視認する。

赤い外套を着たその男は、塀を飛び降りながら持っていた弓を捨てて、刃幅の広い2本の片刃剣を手にしてこちらに向かってくる。

「アーチャー!?!」

得物が矢であつた以上、攻撃してきたのがアーチャーなのは半ば予想できた筈だが、それでも士郎は驚きを隠せず、声を上げた。

それはそうだろう。

遠坂凜は彼と共闘関係にある。

そのサーヴァントであるアーチャーが明らかに自分を狙ってきたのだから驚くのも無理はない。

「士郎、ここを動かないでください」

私は私で士郎を抱えていては攻撃に対応できない。

彼をその場に下ろして、アーチャーを迎え撃つため、杭剣を構えて走る。

ギヤリンツツ!

アーチャーが振り下ろしてきた二つの剣を交差した杭剣で食い止めた。

私とアーチャーそれぞれの両手にある剣がギチギチと絡み合い、その向こうに白髪の精悍な男の顔がある。

「どういふつもりですか?あなたは士郎の味方の筈です」

とてもマスターである凜の指示とは思えなかった。
彼女はこういう裏切りを是とする人物ではない。

「ちっ！セイバーが離れ、凜もない千載一隅の好機だというのに……お前の方こそどうという料簡だ？なぜお前がその男を庇う？」

刃を押し込めながら、男は心底憎々し気にそう聞いてくる。
今日三度目だろうか。誰も彼もが同じようなことを言う。

……まあ不思議ですよ。

「私が彼を好いているからです。とても言えば納得しますか？」
たまにはこういう冗談もいいでしょう。

「ふん。そこまで献身的に守っているとすればあなたがち冗談でもなさそうだぞ」

え？

一瞬、思考が停止しそうになるが、冷静にならなければいけない。
「私はそういうことで一向に構いませんよ」

そう思ってくれたほうが、本来のマスターである桜という存在に行き着く可能性は低減するだろう。

「ちい！時間は限られている。お前とくだらないお喋りをするつもりなど毛頭ない！」

アーチャーが力任せに私を押し切ろうとしてきた。
が、今なら私のほうが強い。

「ハッッ！」

全身を使つて押し返し、交差していた剣を広げるようにして、反対にアーチャーの体ごと双剣を弾き飛ばした。

「くっ!？」

後方に大きく飛ばされる形になったアーチャーは驚いている。

間髪入れずに次撃を加えるべく駆け出し、そして間合いに入る直前にアーチャーの頭上に跳び上がって、真上から左右の杭剣を少し時間差を設けて振り下ろす。

ギギイイイン!!!

しかし、彼も相当な手練れだ。この攻撃を双剣で食い止めた。

一瞬、彼の両手に私の落下速度と全体重がかかり、拮抗したのを利用して、私は空中で前方へと体を半転させた。

そしてそのまま前へ、即ちアーチャーの後方に着地する。

アーチャーも私を目線で追って体をこちらに向けようとするが、私のほうが速い。

ザグツ！

鈍い音とともに、私が走りながら突き出した剣が、それを躲し損ねたアーチャーの脇腹を抉っていった。

「ちっ……！」

しかし、アーチャーもギリギリで身を捻っていたため傷はそう深くはない。

この一連の攻防で、結果的に元の立ち位置に戻っていた。

私のやや後方に士郎がいる状態だ。

士郎は、木刀を構えて私達の戦いの趨勢を見守っていた。

校庭でのランサー戦と同様に私から離れることも考えたのだろうか、相手がアーチャーなのが判断を難しくしている。

「士郎、私からあまり離れないように気を付けてください」

「ああ。わかっている」

私から離れば、アーチャーの遠距離攻撃に対して対処ができなくなってしまうのだ。

「莫迦な……先日ランサーとの戦いを見たが、その時とは力もスピードも全く違う」

アーチャーが疑問を呈する。

それは実際そうだ。

偽臣の書による支配ではなく、桜がマスターに戻ったことで、私は本来の力を発揮できるようになった。

供給される魔力量が、慎二がマスターだった時とはまるで違う。

「単にあの時は本気を出していなかったただけです」

「ふざけるな！力を自制しているかどうかなど、一目でわかる。あの時のお前は間違いなく全力だった。一方で、ランサーは明らかに全力ではなかった。それでもあのまま戦っていれば、そう長くはもたず、

お前はランサーに敗れていた筈だ。しかし、今のお前は本気のランサーとも伍せるほどだ・・・何かウラがあるな」

英霊なのだから当たり前なのかもしれないが、彼の洞察力は鋭い。あまり長引かせると、隠しておきたいことも見通されてしまうかもしれない。

できれば、早めに終わらせたい。

私は、視界を封じる眼帯に手を伸ばそうとする。

「とは言え、オレの目的は一つだけだ」

そう呟くと、アーチャーの両手から双剣が放たれた。

2本の剣は私から大きく外れた方向に、有り体に言えば外側を回り込むようにして飛ばされていた。

「・・・!!」

彼の狙いは士郎だ。

双剣は弧を描くようにして、左右から士郎を挟撃する形で迫る。

私はすぐさま士郎の元へと駆け出す。

「これくらいならー」

士郎もすっかりと状況を把握しており、後方に飛び退って、すんでのところで双剣を躲すことができた。

流星に慎二とは違うところを見せてくれる。

安堵して、再びアーチャーに視線を戻すと、彼は遙か後方へと走っていた。

「撤退する気ですか？」

そんなわけはない。

彼の士郎に対する殺意。

理由は皆目見当もつかないが、それは抜き身の剣のようにギラギラと凶悪だった。

これで諦めるわけがない。

とすれば、狙いは明らかだ。

弓矢を用いて、これまで以上に強力な一撃を狙ってくる。

私が直接士郎を抱えて躲すことができない状況になることも、考慮しなければならぬ。

となれば。

「出し惜しみなどできませんね」

私は地面に手をつく体勢となり、アーチャーによる最初の攻撃で負った背中への傷の血を利用して眼前に召喚陣を描く。

「ライダー？何を？」

「士郎。これから天馬を喚びます。驚かないでください」

「わかった。ライダーに任せる」

あ。

これはダメだ。

「必ずあなたを守ります」

「ああ。信じてるよ」

全身に鳥肌が立つような快感を覚えて、私は震えた。

「士郎。魔力を使ってあなたが落ちないように固定はしますが、念のためしっかりと私の腰に掴まっていてください。絶対に振り落とされないように」

陣から天馬を召喚すると、士郎を抱えてその背に跨る。

「う。わかった・・・すまない。これ、普通逆だよ・・・」

なぜか赤面して謝りながら、士郎が私の腰に腕を回す。

「行きます」

そう言つて、前方を見やればアーチャーが当初と同様に塀の上に立ち、矢をつがえて、弓を構えているのが見えた。

いや、あれは矢ではない？

「宝具？」

私は愛馬に上空へと舞い上がるよう伝えた。

天馬が一啼きして、一気に空へと駆け上がる。

その時、アーチャーの声が微かに聞こえた。
「フルンディング
赤原猟犬！」

来た！

凄まじい速度で、その【紅い矢剣】は襲いかかってきた。
が、想定内の範囲内だ。

愛馬を操り、その一撃を躲した。

「ライダー、まだまだ！あれは、追ってくるぞ！」

刹那、安堵した私に対して、士郎が警戒を促して来る。追ってくる？

後ろを振り向くと、確かに旋回するようにして剣がその先端をこちらに向けようとしていた。

「厄介ですね」

それにしても士郎はよく一目見ただけで、この宝具の性質を見抜いたものだ。

何にせよ対処のしようはある。

ゴウツ！

再び襲って来た矢剣を回避して、反撃の準備に入る。

「士郎。いきます」

「頼む」

E t u r n

オレは柳洞寺上空の馬上（？）でライダーにしがみついていた。

自転車で言うところの二ケツ状態で、男としては情けないばかりだ。

ライダーの細くしなやかな腰に腕を回して、強く抱きついている状態なので、彼女の長い髪もオレの体に絡みついており、いい匂いがするような気がする。

正直、とんでもなく刺激的だったが、それどころではない。

白い仮面の襲撃からずっと、ライダーが懸命にオレを守ってくれているのが伝わってくる。

一方で、守ってもらえばかりで何もできない自分の不甲斐なさに愕然とするが、それはそれだ。今はほぼ何もできない。であれば、精一杯彼女の足手纏いにならないようにするだけだ。

アーチャーがあればそこまで執拗にオレを殺そうとする理由は全くわからないが、殺らなければ、間違いなく殺られる状況だ。

追尾してくる剣を矢として放ってきたあいつの宝具は厄介だが、本来ならもう少し準備が必要なところを、性急に放った一撃のように感じた。

スピード、威力共に脅威的ではあるが、致命的ではないように思えた。

ライダーも捌けるといふ自信があるようだ。

もつともずつと捌き続けるわけにはいかない。

ライダーもそれをわかっている。

「士郎。いきます」

と、彼女が反撃の合図を送ってきた。

「頼む」

オレは、ここまでオレを守ってくれた彼女を信じて同意するだけだ。

ライダーが巧みに天馬^{ベガサス}を反転させる。

これにより、急旋回してこちらに向かおうとする矢剣と正面から対峙する形になった。

「士郎。これからの攻撃で決着がつかない場合、魔眼を使います。私がこの眼帯を外すとき、決して私の眼を見ないでください。それだけ早く石になってしまいますので」

魔眼？

石？

「わかった」

疑問は尽きないが、とにかく同意する。

余計な思考は命取りになる。

現状、オレ達と矢剣とアーチャーが一直線上に並ぶ構図になった。

堀の上のアーチャーまでの距離は100m強というところか。

「ぬうっ！」

アーチャーが何かを察し、魔術の詠唱を始めた。

一方で、ライダーの魔力も一気に膨れ上がる。

黄金に輝く手綱が現れ、彼女の手がそれを固く握りしめた。

その手綱は天馬^{ベガサス}の口元に繋がっている。

眩い光がオレ達を包み込み、オレの周囲には結界のようなものが張られて保護されたような状態になった。

宝具の余波でオレに被害が及ばないような処置をしてくれたのだろう。

「^{ペルレ}騎英の——」

ライダーが宝具を解き放つ。

「——^{フオーン}手綱ツッ!!」

視界が真っ白になる。

一瞬で凄まじい速度に達して……

オレ達は白い弾丸となって、眼前の突破すべき敵に向かって発射された。

ゴッ!!

コンマ数秒で、アーチャーが【^{フルンディング}赤原獵犬】と称した矢剣と正面衝突する。

ツッ——

刹那、拮抗した後、剣は音もなく飲み込まれるように消失した。

この先にはアーチャー本人がいる。

片腕を突き出したその体勢には見覚えがあった。

あれは、校庭で見た……

「——^{アイアス}七つの円環!!」

叫ぶと同時に、アーチャーの手に、そしてオレ達の眼前に5枚の花弁が展開されると同時に、

ズシャアツツ!

ぶつかり合った。

ライダーの^{ベガサス}天馬の突撃に対してアーチャーの花卉の盾は、柔らかく吸収するようにして食い止めている。

守りに特化した宝具。

錐のようにねじ込み突破しようとする圧力に対して、反発するのではなく、受け流し、減衰させてその場に押し止めているようだ。

「くっっ!」

オレの前で手綱を握るライダーは姿勢を前傾させ、なんとかこの守

りを突破しようともがく。

一方で、

「フルンディング赤原猟犬」を突破して、なおこれかっ!」

アーチャーもライダーの宝具に驚愕しているようだ。展開した5枚の花弁はあと2枚にまで減っていた。

凄まじいスピードで展開したアーチャーの弓矢とライダーの天馬との攻防から一転して、数秒を数える静止の時間。

残り1枚。

ズシャアア

遂にその最後の防壁を打ち破った。

「ぬうううっ!?!」

「あうっ!!」

「ぐあっ!」

が、そこまでだった。

アーチャー、ライダー、そしてオレ。

3人がそれぞれ地面に放り出される形となる。

ライダーの宝具は、アーチャーの二つの宝具を突破した。

そして、その余波でアーチャーが立っていた塀を崩し、アーチャー自身にも僅かに威力が伝わった。

だが、効果的なダメージまで与えることはなく勢いは途絶えていた。

アーチャーは崩れた塀の向こう。

オレとライダーは、塀の内側に落ちる形となった。

オレは、咄嗟にアーチャーの姿を探した。

あいつはオレを殺すことを絶対諦めない。

その確信があった。

だからオレは地面に転がっていた冷たく硬いそれを右手に掴み、詠唱する。

「トレース同調、オン開始」

そしてオレの予想どおり。

あいつは、地面に膝をついた状態のまま、弓矢を構えたところだっ

た。

「シロウツ!!」

どこからかセイバーの声が響く。

彼女はかなり遠くにいるようだ。

「アーチャーッ!? あんた何やってんのよ!?!」

これもどこからだろうか?

久しぶりに聞く遠坂のよく通る声、愕然としたようにアーチャーに投げかけられる。

しかし、むしろその声を合図にするかのように、あいつの矢がオレに向けて放たれた。

「士郎っ!」

そう叫んだのはオレよりも僅かにアーチャーに近い位置に落ちたライダーだった。

彼女は懸命に右腕をオレを庇うように差し出す。

ザグツツ!

「あうっ!」

しかし、ライダーの腕を貫いて矢は過たずオレに迫る。

だが、

ガンツツツツ!

硬い音が響き、アーチャーの放った矢はオレの前の地面に落ちた。

腕には強烈な痺れが残ったが、それだけだった。

「ふう」

オレの手には崩れた塀から落ちた瓦がある。

地面に投げ出されたオレは、咄嗟に手近にあつたそれを強化して盾にしていた。

「アーチャー!? あんた、なんだって衛宮君を!?!」

遠坂がアーチャーに詰問を投げかけながら、こちらに走ってくる。

「くそ... 仕損じたか。凜も来てしまったし、どうやらここまでだな」

アーチャーが大きく溜息をつきながら、弓を降ろした。

駆け寄ってきた遠坂を見て、顔をしかめている。

その様子に少し安堵を覚えながら、オレを庇って手を貫かれたライ

ダーの状況を確認した。

「ライダー、大丈夫か？」

彼女は右手の平からかなりの出血をしており、顔を歪めている。

「だ・・・大丈夫です。士郎もよく今の攻撃を防ぎましたね」

「いや、ライダーが庇ってくれなければ防ぎきれなかった。本当にありがとう」

言いながら、先程セイバーの声が聞こえたほうを確認する。

オレから見て左手方向のかなり離れたところ。

最初にオレがアーチャーからの攻撃を受けた渡り廊下で、セイバーはあの白い仮面と対峙していた。

「シロウ。無事ですか!？」

セイバーは敵から視線を反らさないようにしながらも、オレの身を案じてくれた。

「ふむ。このあたりが潮時か」

白い仮面が呟いた。
と。

その時。

それは現れた。



え？

なんだあれ？

ただどこまでも黒いモノが月の光の下に浮かび上がっていた。

オレの視線の先。ライダーの向こう側。

黒い風船のようにも見える。

次の瞬間、その黒いモノから地を這うようにして黒い帯が2本伸びたのがわかった。

「っ!？」

咄嗟に目の前のライダーを抱きかかえるようにして、その黒い帯から逃れさせようとした。

「士郎!？」

ライダーはそれに気付いておらず、突然抱きついてきたオレの行動に驚く声を発した。

ドツ

オレとライダーの体が地面に転がる。

辛うじてライダーをその難から救うことはできたが、黒い帯はオレの足の一部を掠めていった。

ズンツツツツ

視界が暗転していく。

薄れゆく意識の片隅で。

最後に見たのは、遠くでセイバーがその黒い帯に絡めとられる姿だった。

「・・・セ・・・セイバー・・・」

オレの意識はそこでお終いだった。

あとは、ただただ真っ黒な泥に塗り潰されていった。

第10話 5日目① 「不穩」

R t u r n

目の前には、私が守るべき対象である少年が横たわっていた。ここは彼が自室として使っている和室だ。

「士郎……」

柳洞寺での出来事から約6時間が経過しているが、まだ目覚めていない。

だが、遠坂凜達による治療の甲斐もあつて今はただ眠っているだけだ。息遣いは落ち着いており、遠からず目を開くだろう。

こびりついていたあの黒い泥のようなものは、既に取り除かれている。

昨夜は衛宮士郎とセイバーが危機に陥るようであれば助勢するために、彼らの後を追って柳洞寺に向かった。

アサシンと思しき白い仮面の襲撃から士郎を守り、その直後にアーチャーと交戦することになった。

そしてあの黒い影が現れた。

「二体、あれは……」

士郎がいち早くあれの動きを察知し、私は助けられた。

逆に彼が触れられてしまったことで、昏睡することになってしまったのだ。

キャスターが治療した葛木という男や、堂内で倒れていた数多あまたの門弟達と同様に体の一部が黒い泥に覆われたようになった。

そしてセイバーを取り込んだあれは、現れた時と同様に忽然と消えた。

セイバーは、私と同じくあれを視認できる位置になく、その上アサシンと対峙していた。

私は士郎に助られたが、彼女の傍には士郎がいなかった。

ただそれだけの差だった。

おそらくセイバーは、私たちが天馬ベガサスに乗って、上空で戦闘を始めた

ことで、こちらの状況に気付いたのだろう。そのため、アサシンを牽制しながら、本堂側から中庭側に戦場を移した。

本来、まともなぶつかれば彼女が手間取るような相手ではないが、速さはアサシンが上回っていた。上手く立ち回られたことで、短時間で仕留めるまでには至らなかったのではないかと推測している。

「今となっては、推測しかできないが。」

「もう大丈夫なはずだけど、目覚めてくれるまではなかなか安心できないものね。早く起きなさいよ。衛宮君」

私の傍らにいる遠坂凜が祈るように呟いた。

「あなたにも謝らなくちゃいけないわね。ライダー。本来なら敵同士って関係だから変な話なんだけど」

アーチャーの行動が、今回のこの大混乱を招いた。しかし、そのマスターである彼女が直接関与しているわけではないことは、戦場に到着した時の彼女の反応でわかっている。

それでも彼女としては立場上、謝るという選択肢以外ないのだから。

「私が見たのは、あなたと衛宮君が上空にいたこと。アーチャーが明らかに衛宮君を狙って攻撃したこと。そして、あなたが彼を庇って怪我した後、あの変な黒いやつの攻撃から衛宮君があなたを助けたことよ」

「さぞかし混乱したことでしょう?」

「まったくよ。どんな罰ゲームって感じ。テストでこんなひねくれ問題が出たらクレームもんよ」

彼女は大きく溜息をついた。

「その情報だけだと、あなた達を士郎が裏切り、私と手を組んでアーチャーと戦闘になったとも解釈できたのでは?」

と、一つの可能性を提示してみるが、彼女は手をひらひらと振って否定した。

「衛宮君がそんなことするわけないじゃない」

即答ですか。

思わず、くすつと笑ってしまう。

「あなた、そんな笑い方するのね」

ちよつと意外そうに彼女は言った。

「なんにせよ彼が私と手を切る時は、絶対に私に一言断りを入れるわよ」

それにね、と言いながら彼女は目を瞑る。

「何をしたのか問い詰めたらアーチャーはあつさり認めたわ。『衛宮士郎を殺そうとした』ってね」

「なぜ彼はあそこまで執拗に士郎を殺そうとしたのですか？」

アーチャーの殺意は鬼気迫るものがあつた。

まるで、これこそが自分の唯一つの目的だとも言うかのように。

「わからないのよ」

彼女は悔しそうに首を振った。

「衛宮君を殺そうとしたことはあつさり認めても、理由に関しては頑として教えてくれなかった」

「そうですか。では、再び士郎が襲われるかもしれないということですね」

それが一番の問題だ。

「それがね。あいつ『残念ながらも衛宮士郎を殺している場合ではなくなった。だから安心しろ』なんて言うのよ」

思い返しているうちに段々腹が立ってきたのだろう。

口調が荒々しくなってきた。

それにしても・・・

『そんな場合ではなくなった』ですか」

「ええ。んなこと言われたって、信用できるわけがないじゃない。だから、共闘関係である限り、衛宮君を襲わないように令呪を使って命令しておいたわ」

「そうですか」

なかなか思い切ったことをするものだと思ひさせられるが、であれば一安心だった。

「私も聞かせてもらってもいいかしら？」

「まあ、そうくるでしょうね」

「あなたが衛宮君を守ったのはなぜ？」

「それは答えられません」

「なら、質問を変えてみようかしら」

少女は悪戯を思いついた子供のように目を細めた。

「あなたがあんなにも献身的に彼を守ったのはなぜ？ 私が実際に見たのは最後の場面だけだったけど、アーチャーの話では何度も身を挺して守っていたようだけど」

「質問が変わっていませんよ。遠坂凛」

「凛でいいわ、ライダー」

彼女にしては珍しく、少し憐れむような笑みを浮かべて続けた。

「あなた・・・難儀な人なのね」

そう言つて、彼女はこの話を打ち切った。

私はつい先日、士郎に淫夢を見せた。

魔力を回復するためのものだったが、士郎の夢には目の前の少女が現れたのだ。あの少年にとって、遠坂凛という女性はかなりポジションを占めていることを私は知っている。

今の私に返せる言葉はなかった。

程なくして、私は居間を後にした。

「私も暫くしたら家に戻るわ。桜と顔を合わせるのはちよつと気まずいの」

と凛も言っていたので、もうじき帰るだろう。

私は面識があることを凛たちに悟られないよう、途中で一旦霊体化してから桜の部屋に向かう。

桜には戻ってきた直後にある程度の事情は話していた。

だが、非常にもどかしかったろう。なにせ彼女は私のマスターどころか、魔術師であることを他者に隠している。

日付が変わった頃に戻った私達だったが、桜はそもそも眠っていて私達が帰ってきたことにも気付いていないという体裁を取り繕っていた。

下手に凛たちと顔を合わせてしまった場合、会話の流れから勘付か

れる可能性がある。

そして何より、桜は自分自身の存在が士郎を治療する凜たちの妨げになるのを恐れた。

そのため、朝までこの部屋でじっと待つしかなかったのだ。

「士郎の治療は終わりました。もう大丈夫ですよ」

桜の部屋に入った私は、先ずこう伝えた。

「そう・・・本当に良かった」

桜は大きく息をついて、安堵の表情を浮かべる。

「それにしてもどうということなの？姉さんのサーヴァントが先輩を殺そうとしたって」

桜はかなり気色ばんだ。

「落ち着いてください、桜。私にもわかりませんが、アーチャーの行動はあくまでも彼個人の私的な理由からのようです。凜の指示によるものではないでしょう」

「そんなことわからないじゃない」

桜とて、凜がそんな人間でないことを分かっているはずだが・・・
「それに、先輩がこんなことになる原因を作った姉さんが先輩の治療をするなんておかしいわ」

「彼女の尽力もあって士郎が回復したのです。そのことには感謝すべきではないかと思えます」

実際のところ、治療についてはあまり凜は関わってはいない。

もう一人の魔術師が殆ど対応していたのだが、敢えて触れる必要はないだろう。

「・・・ええ。それは確かにライダーの言うとおりね」

そこで、ふと彼女は笑みを浮かべた。

「でも、これで先輩は戦わなくても良くなったのよね」

「そういうことになりますね。サーヴァントを失ったのですから」

そう。セイバーは消えた。

普通に考えれば、彼が戦うことはもうないはずだ。

だが、本当にそうだろうか。

彼の性質は、それを是とするだろうか。

全く事情を知らない状況でも、慎二を助けた少年。

本来助ける必要のない敵のサーヴァントである私を助けた少年。

自分の身が危うくなることを彼は充分に理解していながらも、あっさりとそれをやってのけてしまう。

自身の命をまるで無価値な物のように、容易く秤に掛ける行為だ。

この聖杯戦争を知ってしまった今、彼が見て見ぬふりをするのが可能なのだろうか。

「ただし、サーヴァントを失っても、マスターは他の参加者に狙われることもあります」

それらの疑念を一旦は振り払い、桜には違う観点の懸念を伝えることにした。

「それはそうよね。また、姉さんのサーヴァントに襲われる可能性もあるものね」

しかし桜は私の伝えたかった内容とは少しだけ別方向に捉えたようだ。

「お願い。ライダー。これからも先輩のことを守ってね。いいえ、次は姉さんのサーヴァントを斃してしまつて頂戴」

「え?」

「わかるの。あなた昨夜の戦いでは全力を出し切っていなかったのでしょう。次はきつと勝てるわ」

「全力ではなかったのは、確かにそうですが・・・」

おかしい。

ズドンズドンおかしな方向に話がズレている。

「そろそろ朝食の準備に取り掛からないといけない時間ね。たまには、先輩が起きるのを待ちながら作るのも悪くないわ」

弾むような口調で彼女は言う。

「ごめんなさいね。ライダーには食べさせてあげられないけど」

「いいえ。そのことはお気遣いいただき必要はありません」

「誰もいない時なら作ってあげられるから。私、ライダーにもお料理を食べて欲しいの。必要ないっていうだけで、食べられないわけでも、味を感じないわけでもないんでしよう?」

桜は腰かけていたベッドから立ち上がり、寝巻を脱ぎながら私に問い掛けてきた。

「そうですね。桜の料理は食べてみたいです」

「楽しみにしててね」

そう言つて、彼女は部屋のドアを開けて居間へと向かう。

本来であれば望外の心躍る会話だったはずなのに、そうは感じられなかった。

それよりも引つ掛かることがあった。

士郎の昏睡の原因であるあの黒い泥について、桜は一切触れなかったのだ。

私は常時霊体化している必要がある。

この眼帯【自己封印・暗黒神殿】を着けてなくてはいけないからだ。こんな物をしている現代人がいるわけもない。

そのため、姿を晒せるのは聖杯戦争関係者くらいだ。そして、今の桜は『一般人』であるため、私に桜が普通に接すること自体がおかしい。

そのため今も霊体化してから、居間に向かった桜の後を追った。

「え？葛木先生？どうしてここに？それにこちらの方は？」

居間にはキャスターと、そのマスターである葛木宗一郎という男が並んで正座をしていた。

勿論、私は二人がこの家に滞在することを桜に伝えてある。

だから、桜がこうやって驚いているのも演技である。

「間桐か。藤村先生から事情は聞いている」

昨夜のうちに、葛木はキャスターの治療により概ね回復していた。

「本来、家主である衛宮に先ずは伝えるべきことだが、現在、ここに滞在しているお前にも断つておきたい」

「えっと・・・な・・・なんででしょう？」

「迷惑をかけることになるかもしれないが、しばらくここに許嫁であるこのキャスターと滞在させて貰おうと考えている。勿論、衛宮と、衛宮の保護者代わりとなつている藤村先生の許可を得てからではあ

るが」

「そうなんですか・・・いえ・・・一体どうされたんですか？葛木先生が突然そんなことを仰るなんて、余程の事情があるということですよね？」

「勿論だ。そもそもこのような時間に他人の家に上がりこんでいるなど、非常識にも程があるので、重ねて詫びさせてもらう。事情については、実は昨晚、柳洞寺で事件または事故が起きた。門弟が皆、昏睡するというものだ」

「え？」

「私自身も倒れたが、このキャスターの尽力もあって比較的すぐに回復できた」

その言葉に反応して隣に座るキャスターが嬉しそうにはにかんでいる。

「その現場に衛宮もいたのだ。衛宮がなぜあの時間に柳洞寺を訪れたのかはわからないが、一番最初に発見した私達にその場から離れるように誘導し、この家まで案内してくれた。逆に衛宮自身が昏睡してしまったことが、教師としては痛恨だったが」

「先輩は大丈夫なんでしょうか？」

「大丈夫だろう。今はただ眠っているだけのようだ」

「勿論、然るべき先には既に連絡済だ」

実際には、凜が教会に連絡したのだ。

今頃、監督役の神父が事後処理に奔走しているだろう。

「当面、柳洞寺は居住できる状態ではなくなってしまうだろう。勿論次の住まいは探すか、キャスターもいたく衛宮に感謝し信頼もしている。できればここに暫く滞在させてもらいたい」

「そ・・・そうなんですね。勿論、私は何かを言えるような立場にはないですから」

「キャスターは見てのとおり海外の出身だ。間桐の目的である国際交流と言う点でも、役に立てるだろう」

見事な論法だ。

これでは、「一般人」である桜は断れないだろう。

私としては反対ではあるが。

これで、この家に滞在する聖杯戦争に関わる者が士郎、桜、葛木、キャスターの4人になる。

私は桜がマスターであることを隠しているため、落ち着いたところでこの家を離れる。

私が士郎を守る動きをしていることはキャスター達も承知しているが、その背景は伏せている。本来のマスターがここでないどこかにいる以上ここに長い間滞在するのは不自然だからだ。

だが、万一桜がマスターだと知られば、キャスター達の攻撃対象になる可能性がある。

その事態に備えて、私は始終この家の付近で霊体化して待機するつもりだった。

いざとなれば令呪で桜に呼んでもらうことになる。

そう思案していると、

「シロー、桜ちゃん！起きてる〜？」

藤村大河がやってきたようだ。

「あ、藤村先生」

桜が玄関に向かう。

「おはようございます。藤村先生」

「おはよう桜ちゃん。士郎は？」

「ちよつと体調が悪いみたいで、まだ寝てるんです」

「え？そうなの、珍しいこともあるもんね。ところで、桜ちゃん、悪いんだけど今日は朝食はパスで。すぐに学校に行かなくちゃいけないなって」

「何かあったんですか？」

「うん。ちよつと柳洞寺で事故があったらしくて。その件でね。士郎の体調が悪そうだったら無理しないように言っておいてね」

「わかりました。多分、先輩は休むことになると思います」

「うん。わかった。たまには士郎も休んだほうがいいし」

そう言って、彼女は玄関を出ようとした。

「藤村先生。私も一緒にします」

と言つて、廊下の奥からやつて来たのは、葛木だった。

「え？葛木先生？どうしてこのうちに？」

「事情は学校への道中でご説明します。少し混み入っていますので」

「わかりました」

藤村大河は少し怪訝そうにしたが、そう答えると二人は玄関を出ていく。

「あ、それでは行ってらっしゃい。藤村先生。葛木先生」

それを桜が見送った。

それから暫くして、桜の登校時間が近付いた頃に士郎が目を覚ました。

少しふらつきながらではあったが、あからさまに顔色が悪いということもない。

「おはよう。桜。すまない。完全に寝坊したみたいだ」

居間に入つてくると桜に挨拶をした。

そして、もう一人の存在に気付く。

「……えつと……あれ？」

「あ、先輩。こちらは……」

「葛木先生の許嫁でキャスターと申します。突然で恐縮ですが、しばらくこちらに御厄介になりますので、以後、よろしくお願いします」

と、キャスターは、膝に手を添えて丁寧にお辞儀をしたのだった。

「……」

士郎は暫く固まったが、何とか声を絞り出す。

「あ、こちらこそよろしくお願ひします」

第11話　く5日目②　「しるしがないということ」

E t u r n

目を覚ますと、この時期としては外がだいぶ明るくなっていることに気が付いた。

時計を見やると、時刻は7時半。

完全に寝坊だった。

「いや、それどころじゃない状況だったんだよな」

昨夜の出来事ははつきり覚えていた。

自分自身はあの黒い影によつて、意識を塗り潰された。

しかし何より気持ちを重ねさせるのは、セイバーのことだった。意識を失くす直前、彼女があの黒い影に取り込まれるのを見た。直感的に、あれは絶望的な状況だと理解してしまっていた。

それを確かめるのが怖かった。
なるべく普段どおり。

とにかくそれだけを意識して、居間に入って桜に挨拶をした。

だが、残念ながら状況はそんな普段どおりを許してはくれなかった。

そこにはなぜかキャストがいた。

一方で、セイバーはいなかった。

いるべき存在がなく、不可思議な存在があった。

頭の中が真っ白のまま、挨拶を交わした。

何と言ったかは覚えていない。

一方で桜はもう登校の時間だったため、一人で学校に行くと言っていた。

「先輩は本調子じゃないんですから、今日は休んでください。藤村先生にもそう伝えてありますから」

とも言っていた気がする。

「坊や」

キヤスターが誰かを呼んでいる。

「ぼ・う・や」

そんな人物がいただろうか。

「ぼーうーや!!」

「えっと・・・オレを呼んでる?」

「当たり前じゃない。ここにはほかに坊やはいないわ」

「えっと。オレはこれから縊^{くび}り殺されるのかな? いや魔術師だから呪い殺されるのか?」

「奇遇ね。ちょうど今、その殺意を抱いたところよ」

うんざりしたような目で、オレを睨んでくる。

「そもそも私にはそれができない制約がかけられているのを忘れたの?」

ああ。思い出した。

「ちよつと目の前の光景の異常さに頭が真っ白になって、軽い記憶障害になっていたようだ」

「その独^{モノローグ}白。声に出ているわよ」

キヤスターは大きく溜息をついた。

「まあ、私だつてこの状況の意外さには驚いているくらいだし、目覚めたばかりの坊やの理解が追いつかないのは無理もないわよね」

「ああ。説明を頼む。ただでさえ混乱しているんだ」

「そうね。その前に・・・」

と、キヤスターは居間の外、つまり廊下のほうを見て叫んだ。

「ちよつと、ライダー! いるんでしょう? 盗み聞きしてないで、出てきなさい。あなたにも説明を手伝って欲しいのだけれど」

「え? ライダーもいるのか?」

しばらくすると、本当にライダーが実体化して現れた。

彼女は仕方なくという体で、居間に入ってくる。

「流石と言うべきでしょうか? 霊体化した私を感知していたのですね」

「そんなわけないじゃない。ただの勘よ。女のね」

事も無げにキャスターは言った。

「女の勘ですか？」

ライダーが不思議そうに呟いた。

こちらとしては、ますます混乱に拍車がかかるばかりだ。

確かに彼女には昨日散々助けてもらった。

その理由はわからないが、普通に考えれば、本来のマスターが別にいるはずの彼女が未だにここにいるのは不思議だ。

「あなたが説明すればそれで充分なのでは？」

「一部始終を私は見ていないもの。それに、第三者の話もあつたほうが信憑性が増すでしょう。私は嘘をつく気はないけど、それでもね」「わかりました。補足程度はさせていただきます」

「面倒臭い女ねえ。あなた」

ライダーは軽くキャスターを睨んだが、それ以上何も言わなかった。

二人の会話を聞いているうちに、少なくとも表面上、オレは平静さを取り戻しつつあつた。

「ライダー。昨日はありがとう。いや昨日もつて言ったほうがいいのか・・・とにかく、滅茶苦茶助けられた。感謝してもし切れない」

先ずは礼を言わなくてはならない。

「いいえ。先日のこともありますし、最後は私も助けられました。お互いさまということの良いのではないのでしょうか」

「正直昨日の状況を考えると、全く釣り合っていないと思うけどな。オレとしては借りたつもりになっておく。それで、助けてくれた理由は教えてもらえるのかな？」

「詳細はお伝え出来ません。私個人としては、先日の恩に報いたものと思つています」

「そうか。ライダーにも事情があるよな」

「はい」

「それだけでいいの？もっと深掘りすべきところじゃないかしら？」

やり取りを聞いていたキャスターが呆れたように、指摘してくる。

「ライダーのマスターの思惑が絡んでいるんだろう。オレだって純粹

な親切で、助けてもらったなんて考えちゃいない。ただ、少なくとも今はオレを生かすことに利があるということなんだろう」

「あら？裏がある可能性もちゃんと考えているのね。流石というべきかしら」

「莫迦にされているようにも聞こえるけどな。とにかくライダーが口を閉ざしているんだ。問い詰めたところで困らせるだけだし、彼女はしっかり誠意をもって答えてくれた。それで構わない」

「お気遣い感謝します。士郎」

「それで、オレが意識を失った後のことを教えて欲しいんだけど」

「はい。あなたにとっては、辛い部分もあるかと思いますが」

と前置きして、ライダーが語り始めた。

「士郎が私を庇って倒れた時、セイバーもあの黒い影に取り込まれかけていました。その状況で、アサシンがおそらく宝具だったかと思いますが、攻撃を仕掛け、それをセイバーは迎撃したのです。その後、力尽きたように彼女は影に飲み込まれました」

ライダーは殊更に淡々と話す。

「.....」

セイバーが消えてしまったのは、やはり事実だったということだ。

一旦、蓋をしかけた絶望感が再び頭をもたげてくるのを感じた。

胃液がこみあげてくる。

「あの影はその後、忽然と消えました。私はアーチャーの動向を警戒していましたのでずっと影を注視できたわけではないですが、気がついたら消えていました」

あれは現れた時も、どこから来たかさっぱりわからなかった。

「アサシンはセイバーの迎撃で負傷したため、撤退したようでした」

「ところで、ライダーはあの白い仮面をアサシンとして話しているけど、オレ達は山門にいた侍がアサシンだと思っていた」

気になっていた点だった。

「それは私が召喚したアサシンなの。私も詳しい事情はわからないけど、おそらくあの白い仮面もアサシンでしょうね」

黙っていたキャスターが、ここで話に入ってきた。

しかし、語った内容は俄かに理解し難いものだ。

「サーヴァントであるキャスターがサーヴァントを召喚したってことか？」

「そうよ。でも、やはりイレギュラーな存在だったわ。山門から離れられなかったし。だから、おそらくあの白い仮面が正当なアサシンなのでしょう。誰が召喚したのかはわからないけど」

「そういうことか」

あの侍が最期に遺した言葉にも何となく合点がいった。

あれは、マスターであるキャスターを気遣つてのものだったのだ。

「宗一郎様に傷を負わせたのもアサシンよ。宗一郎様は既にあの黒い泥によって昏睡してただけだけど、あいつが止めを刺そうとしたの。私が迎え撃つただけで仕留められなくて、宗一郎様が大きな傷を負うことになってしまったわ」

「私はアサシンと黒い影が消えた後、凜の意向で堂内の様子を確認していたのです。そこに葛木の治療を終えたキャスターが現れ、私達に士郎の治療を提案してきたのです」

「坊やには宗一郎様の応急処置をしてもらったから」

「私もキャスターと士郎のやり取りは見ていましたし、彼女が士郎に手を出せないのはわかっていましたので、了承しました」

「それでうちに来たのか。さつきは失礼な対応をしてすまなかった。助けてくれたわけなんだから礼を言わなくちゃな」

ようやく、今の状況が理解できてきた。

「それはいいのだけれど。感謝しているなら、当面、宗一郎様と私をここに住まわせて欲しいわ」

「え?」

そういう話になるのか?

「ここは、魔術師の拠点だけあって、まずまずの地脈を有しているのよ。このあたりだと、遠坂のお嬢さんや間桐の家も良いのだけれど、彼らのところに住むわけにもいかないでしょう」

「いやいや。それならうちだって・・・」

当然、オレは反論しようとした。

「昨日言ったように私は宗一郎様の身さえ無事ならそれでいい。私自身はある意味、昨夜一度死んでいるわ。あの時、あなたとセイバーに出会った時点で絶望的だと思った。だけどあなたに助けられたわ」

真剣な面持ちでキャスターは語り続ける。

「私にはもはや聖杯に望みなどないの。宗一郎様が無事で、少しでも長くあの人との時間を過ごせればそれでいい」

戦いを放棄するということか。

だが、聖杯戦争が続いている限り、それは難しいだろう。

聖杯を手に入れるためには、他のサーヴァントを斃す必要があるのだ。自身に戦う意思がなくても、サーヴァントは常に襲われるリスクに晒されている。

「それなら、どこか遠い街にでも隠れたほうがいいんじゃないか？」

「サーヴァントはマスターからの魔力供給だけじゃなく、聖杯の力によって現界できている。冬木から離れてしまうと私は現界していらなくなるの。それでも私は構わないんだけど、宗一郎様はそれを許さなかった」

キャスターが溜息をつく。

「私に可能な限り生きているようにと言ってくれたわ。それは、すごく嬉しいことなんだけれどね・・・」

「だからと言って、この家に滞在するのはおかしいのではないでしょうか？あなたがいることで、士郎に害が及ぶ可能性もあると思います」

ライダーが反論する。

「まるで、本当に坊やがマスターみたいね」

キャスターはくすりと笑う。

ライダーは懺然として黙り込んだ。

「ええ。私はこちらの都合で勝手を言っている。でも、坊やは今、どう考えているのかしら？」

「それは、どういうことだ？」

彼女が言いたいことはよくわかっていた。

わかっているながらも敢えてわからないフリをした。

正直、今はそれを考えたくなくなつたのだ。それを考えるうえでの前提事項を、まだ認めたくない自分がいた。

「これからのことよ」

「キャスター。自分の都合だけで性急な問いを投げるのは止めてください」

ライダーがオレのことを案じてくれてるのがよくわかる。

正直嬉しかった。

「ライダー。ありがとう。でもオレは大丈夫だ」

「大したものね。じゃあ、続けるわ。サーヴァントを失つた今、坊やの当たり前の選択は教会に逃げ込むこと」

そのとおりだ。

セイバーという剣であり、盾でもあつた存在をオレは失つた。生き残つたマスターは命を狙われる危険がある。

「オレは、他の選択肢を選ぶ」

先程、セイバーを失つたことが確かになつた時点で心のどこかで決めたことだつた。オレはサーヴァントがいたから、セイバーがいたから聖杯戦争に参加したわけではない。

「であれば、私が力になれることも多いんじゃないかしら」

キャスターは真つ直ぐにオレを見つめて、そう言った。

気が付くと、オレは自分の部屋ではなくセイバーの部屋……いや、今となつてはセイバーが使つていた部屋に立つていた。

部屋の隅にある棚には、一昨日二人で買つてきたライオンのぬいぐるみが寂しそうに座つていた。

「……セイバー……」

ぽつかりと心に穴が開くというのはいかようなことかというのだろう。自分の半身として尽くしてくれたサーヴァント。そんな表現には止まらない存在。

彼女がいれば何とかなかる。彼女がいれば戦える。そう確信させてくれるパートナーだつた。それでいて、尊敬すべき人格者であり、しかし、ただの一人の少女でもあつた。

左手の甲に目を移すが、そこにはあるべきものがもうなかった。

「セイバー……すまない……」

もう一度呟き、そして涙を流した。

本当は一日中、泣いていたかった。

だが、そんなことは許されない。

おそらくセイバーもそんなことは望んでいない。

衛宮士郎は彼女がいなくても戦わなくてはいけない。

ぐちゃぐちゃになっている心に整理をつけたことにして、立ち上がるしかないのだ。

しばらくして居間に戻ると、キャスターだけが残っていた。

テレビを観てはいるが、先ほどと同様に、姿勢良く正座してお茶を飲んでいる。

「ライダーは？」

「少し外すと言っていたわ。大方、マスターのところにも戻ったのでしょう。彼女との関係も色々と深掘りしたいけど、それは今後のお楽しみと言ったところかしらね」

「できればほどほどにしてくれ。少し早いけど、昼食を作るから待っていてくれ」

料理をして、飯を食うことで、少しでも気持ちを切り替えたかった。

「あら、坊や料理できるの？」

「昔からオレがやるしかない環境だったからな」

「興味あるからいただくわ」

「意外だな。必要ないって言うのかと思ってた」

「私は宗一郎様と柳洞寺で暮らしていたのよ。食事も料理もするわ」

「それもそうか。キャスターの料理も食べてみたいな」

不思議とキャスターとの会話は心地良い。テンポがいいのだ。まあ、こういう所帯じみた話題だからかかもしれないが。

「そうね。居候の立場になるんだから、私も作らせてもらおうわ。まあ、料理以上に役に立てることもあると思うけど」

「そうか。だったら早速だけどそっこのほうで一つ頼みがある」

少し考えていたことがあった。

キャスターなら可能なのではないだろうか。

「私にできることならね」

オレはキャスターにある物の作成を依頼した。

「ベースになる物は、オレが後で買ってくる」

「問題ないわ。作ってあげる。でも、できれば工房になる部屋が欲しいわね。それに柳洞寺から道具も回収したいわ」

「それならオレがいつも使っている土蔵を使ってくれ。工房なんて立派なもんじゃないけどな」

「食事が終わったら見せてもらうわ。それから、私からも坊やにお願い・・・というより、提案があるの」

その提案は、オレにとつてもありがたい話だったので、二つ返事で了承した。

そうこうしているうちに、昼食が出来上がった。

「これは？」

「豚肉の生姜焼き定食だな。キャスターには少し重いかもしれないけど」

オレは朝食抜きだったので、しっかり食べたかったのだ。

「それは味付け次第かしら・・・」

生姜焼きを一口食べて、キャスターが目丸くするのがよくわかった。

「これは・・・」

続け様に、里芋の煮つ転がしと卵焼きにも箸を伸ばす。

「坊や、お料理上手なのね。豚肉の味付けは上品だし、全部丁寧。作る時の手際も良かったし」

「ありがとう。美味しく食べてもらえるのは、嬉しいぞ」

あまり自慢するところではないとオレ自身は思っているが、褒められるのは素直に嬉しい。

「坊やに料理教えてもらおうかしら。宗一郎様もこちらの食事のほうがいいだろうし。そもそも、この国の食は優れているわ」

流れるようにキャスターは完食した。言葉遣いもそうだが、彼女の

作法はとても上品で丁寧だった。見ていて気持ちいい。

きつと育ちがいいのだろう。

「ああ。これくらいならいくらでも」

「よろしくお願いするわ」

「落ち着いたら土蔵へ行くのか？」

「そうしましょう。お互いにこの後、出かけなければいけないものね」

昼食後、オレとキャスターは土蔵にやってきた。

先程のキャスターの話は、オレの魔術を見たいというものだった。そして、場合によっては手ほどきをしてくれると言う提案でもあった。

キャスターの英霊に魔術を教えてもらえるなんて、奇跡的な幸運だろう。オレの魔術は、なかなか・・・というか殆ど全く進歩しないので、きつかけが掴めるかもしれない。

オレは、少しでも強くならなければいけない。

これからのことを考えれば尚更だ。

「・・・何なの・・・これは・・・？」

そこいらに転がっているガラクタをキャスターは不思議そうに見回していた。

ほんと散らかっててすいません。正直、恥ずかしかった。

「これ、もしかして、全部坊やが投影したの？」

「ごく一部だけです。殆どは藤ねえ・・・藤村先生っていうオレの保護者代わりの教師の仕業です」

後ろめたさで思わず丁寧語になってしまった。

「ああ、今朝、宗一郎様と一緒に学校に向かった先生ね」

「と言いつつ、手近に転がっていたヤカン（仮）を手に取る。」

「それにしたって異常ね。昨夜見たから、免疫ができてるのだけれど」
「どうやら、この場の汚さに辟易したという反応ではなさそうだった。眉間に皺を寄せて真剣な表情で、手にしたヤカン（仮）を睨んでいる。」

「何が異常なんだ？」

「投影した対象物が、消えずに残っていることよ。普通はすぐに消えるものよ……」

「そうなのか？そもそもオレ以外の魔術師は切嗣……親父しか知らないから、他の投影を見たことがないんだ」

「そうなの……でも、昨日のナイフのほうが圧倒的に完成度が高かったわね」

「ああ、どういうわけか刃物が一番楽で、出来がいいんだ」

「……これ……投影じゃないみたいね」

「じゃあ、なんなんだ？」

「まだ、わからないわ。でも、坊やの起源に原因があるんじゃないかしら」

しばらくキャスターは自分の思考に没頭してしまい、オレはどんどん置いていかれていく気分になった。

彼女はだいぶ長い間考え込んでいたが、やがてオレのほうを見て言った。

「今から坊やに魔術回路の使い方を教えるわ。あなたが聖杯戦争にこれからも関わるつもりなら、一刻も早く戦う力が必要になるでしょう」

願ってもない話だった。

彼女はオレに何某かの可能性を感じたということなのかもしれない。

「是非とも頼む。キャスター」

オレに断る選択肢などなかった。

「まだ体が慣れていないはずだから、無理しないようにね。あなたのサポートになる道具も柳洞寺に戻って持ち出してくるわ」

そう言つてキャスターは柳洞寺に向かった。

オレは、新都方面にバスで移動する。桜が家に来る前に用事を済ませたかった。

つい先程までキャスターが教えてくれたのは、魔術回路の正しい起動方法だった。

今までのオレは、魔術回路を毎回一から作っていた。しかし、キャスターの話ではそれは無駄で、魔術回路は常にある状態にしておいて必要な時にだけ起動させればいいというのだ。

最初は戸惑ったが、徐々に慣れていくのを感じた。

もつともこれはキャスターがいたからできることだった。

「坊やの中身が外の皮を破って出てこないように、私が抑えるわ」と言っつて、フォローしてくれたのだ。

具体的に何をしているのかはよくわからなかったが。

今までまともに使われなかった回路を常時「ある」状態にする。そのうえで、オレの起源である「剣」を投影するとどうなるか。

今まで抑えられていたオレの本質が出口を求めて溢れ出てくる。

ということらしかった。

それを彼女が制御してくれたわけだ。

新都で目的の品を購入して、バスで戻る。

部活のある桜よりも早く帰宅できるだろう。

商店街近くのバス停で下車して、そこから我が家までは歩いて帰る。

すると、うちの正門にもたれるようにして立っている人物がいた。

最近あの赤いコートをよく見るようになってきた。

遠坂だ。

「遠坂。どうしたんだ？」

遠坂は制服ではなかった。

「どこかに出かけてたのね。てことは、体調は元どおりなのかしら。なんにせよ良かったわ。あなたと話がしたくてね」

ちらつとオレが手に持った紙袋に目をやる。

「さすがにここじゃあ何だから上がれよ」

「そうさせてもらうわ。長居をする気はないけどね」

オレと遠坂は居間に入る。

キャスターはまだ戻ってきてないようだ。

お茶か紅茶かで迷ったが、後者を用意することにした。

「ごめんなさいね。気を遣わせてしまつて」

遠坂にはいつもの歯切れの良さが欠けているようだった。

「どうしたんだ？いつもの元気がないぞ」

ティーカップを遠坂の前に置く。

「そりやそうよ。昨夜、あなたに酷いことしちゃつたんだもの。本当にごめんなさい。謝って済むことじゃないのはわかつてる。でも、ごめんなさい」

「酷いこと？なんのことだ？オレ気絶されてる間に遠坂に何かされたのか？」

全くピンとこなかった。

「何言つてるのよ。アーチャーがあなたを殺そうとしたことよ」

「ああ。そういうことか」

マスターとして責任を感じているということだろう。

「遠坂はあいつを止めてくれたじゃないか」

「それにしたつて私のミスよ。ライダーにも、アーチャー自身にも話を聞いたけど、普通ならあなた間違ひなく殺されてたわ。つまり私が殺したも同然よ」

「いや、だからオレは死んでないし、オレを治療してくれたのも遠坂だろ」

「殆どはキャスターが治療したわ。それにあの黒い泥によるあなたへのダメージは死に至るほどのものではなかったの」

そうなのか。

オレとしてはとんでもなくイヤな、なんとというか絶望的なモノをいきなりどんと押し付けられたように思えた。

根こそぎ魂ごと持っていかれる。

そんな感覚だった。

「私は、昨夜、教会に行つてたのよ。それで、約束の時刻に少し遅れそうだった。そんな時にあなたから連絡が来て、アーチャーを先に加勢に行かせたの。それがまさかあんな・・・」

「あいつ、理由は明かさなかつたらしいな」

「ええ。全くとんでもないヤツよね。あれだけのことをしでかしてい

ながら。『それは教えられない』の一点張り。ふぎけんなんて怒鳴ってやったけど、全く効果なし」

その場になくなくて良かったと、オレは密かに安堵する。

「でも、理由がないとは言っていないんだろ？ だったら、重要な意味があるんだろう」

「え？」

遠坂は目を丸くして驚いた。

「なんとなくだけど、オレとあいつとは合わないなって感じてる。だけど、あいつの戦いを昨日も含めて三度見た。あいつの戦いは妙に惹かれるんだ。何とか実直にコツコツと自分にできることを積み上げてきたって感じがする」

そう。天から才を授けられた輝かしい英雄達とは違う。

「セイバーや、ランサー、そしてあのバーサーカーなんかは、生まれた時から英雄になるべくしてなり、そして英霊として迎えられたんだと思う」

勿論、当人たちはそれぞれに血の滲むような努力や、過酷な体験をしてきたのは間違いないだろう。それでもだ。

「でも、アーチャーは違うんじゃないかな。普通の人間が目的を持って自分を削り、できることを磨いて、一步一步積み上げて、歩いて、英雄達の域に近づいた。そんな感じがする」

遠坂は身じろぎもせず、聞き入っている。

「そんなヤツがオレをあそこまで執拗に殺そうとしたってことは、間違いない大きな理由があるんだろう。少なくとも『あいつにとつては』なのかもしれないけど。根っからの悪人なわけでもないしな」

遠坂はテーブルの上の両拳をぐっと強く握り締めた。

「……ありがと……衛宮君」

「へ？」

今度はオレが驚く番だった。札を言われるような内容だったろうか。

「……それにしても、あなたやっぱりスゴイのね」

少し歪んだ笑顔で。

簡単に言えば泣きそうな笑顔で彼女は言った。

「自分を殺そうとした相手を本心で讃えられるんだもの」

彼女はそのまま、顔を伏せる。

そして、肩を震わせながら声を絞り出した。

「それに比べて、あたし、何やってるんだろ・・・」

その時、オレは初めて気付いた。

遠坂の右手の甲にあるべきものがないことを。

「・・・遠坂、まさか令呪を使ったのか？」

「何言ってるのよ。当たり前じゃない。共闘関係にあるあなたを襲つたのよ」

「だけど、お前・・・」

「そう。これで私はいざという時アーチャーを制御できなくなった。というか、もしかしたらすぐにでも殺されるかも」

「あいつは絶対そんなことしないぞ」

「そうね。私もその点に関しては、あいつを信頼してる」

うん。と頷いて彼女は顔をあげる。

「ごめんなさい。なんか、あなたと話してたら自分がとんでもなく小さい人間に思えてきちゃったのよ」

そんなわけないさ。遠坂。

そりゃ、今は本気で落ち込んだんだろう。

だけどほんのひと時だ。

それでお前は立ち直る。

実際、お前は立ち直ろうとしている。

そう。

だからお前は眩しい。

「でも、おしまい。よく考えたらそんなスゴい奴と私は今、手を組んでるんじゃない。それって、まだまだ捨てたもんじゃないってことでしょー」

「オレへの過大評価はともかくとして、やっぱり遠坂は遠坂だな」

彼女はぶつと笑う。

「何よそれ。でも、衛宮君もやっぱり衛宮君よね」

「何だその返し」

「私、衛宮君のこと実は結構前から知ってたのよね」

そう言って遠坂が話し出したのは、放課後の校庭で、一人走り高跳びをしていた変なヤツの話。

跳べるはずのない高さに無理とわかっていながら、本気で跳ぼうとし続けた莫迦な男子生徒の話だった。

そして、オレは最近この話を他の女の子から聞いたことがあることを思い出す。

「絶対無理だつてわかっていたのよ。そいつは。でも全部、本気で跳ぼうとした。あたしにはその行為は絶対に真似できないって思ったわ」

正直、オレは覚えていなかった。

その頃のオレは、莫迦なことばかりやっていたからだ。

その出来事もオレの中では日常に過ぎなかったのだろう。

「今、目の前にいるあなたもやっぱりそうなのよ。人間、絶対に自分とできないことをできる人間を眩しいと感じるのよね」

オレもそうだよ。遠坂。

第12話 5日目③ 「磨眼」

R t u r n

朝、士郎が無事に目を覚まし体調も問題ないということが確認できた後、私は桜の様子を見守るために霊体化して学校へと向かった。日中の学校。

しかも誰も桜がマスターだと分かっていないため、彼女に危害が及ぶ可能性は極めて低い。

とは言え、これまでもまさかということが頻繁に起きていただけに、私は気を抜かないよう注意している。

「兄さんは、今日も登校していないみたいね」

桜の言うとおりだった。

念のため、授業中に2年生のクラスの様子を確認したが、慎二は休みだった。

教会に逃げ込んでいるのだろうか。

「葛木先生はいつもどおりね」

葛木もまた、昨日の柳洞寺の事件に巻き込まれていたが、そんなことはおくびにも出さず、いつもどおり授業を行っているようだ。

「そして姉さんも登校していないのね」

凜は、早朝、桜と会わないように士郎の家を出て行った。学校に行くのかと思っていたが、そうではなかったようだ。

彼女なりに心の整理が必要だったのかもしれない。

「ねえ、ライダー。あなたは直接血を吸う以外にも、魔力を高める方法があるのよね？」

「え？はい。鮮血神殿ブラッドフォートという宝具を使えば、結界を張ってその人間の魔力を吸収できます」

無論、中の人間はただでは済まない。

「そう」

桜はそう呟いただけだった。

桜は、その後、普段どおり弓道部の活動をして帰路についた。

柳洞寺の昏睡事件でこの学校の生徒からも被害者が出たようだが、柳洞寺には近付かないようにという注意が呼びかけられるに止まったようだ。

衛宮邸の正門近くまで来たところで、私は桜から離れることにした。

「それでは桜。私はこの周辺で警戒することにします。いざという時には令呪を使ってください」

「ええ。ライダー。よろしくね」

と言って、彼女は正門をくぐっていった。

しかし暫くするとまた、正門を出てきた。

少し速足だった。

「どうしたのですか？」

「え？・・・あ・・・えっと、そうよ。夕食の材料を買わなくちゃいけないのを忘れていたの」

落ち着かない様子だった。

口調も歯切れが悪い。

「何でもないのでよ。ライダー。申し訳ないけれど、買い物を見られるのって何となく恥ずかしいから、少し離れて護衛をお願いしてもいいかしら？」

「それは、勿論構いませんが・・・」

大丈夫だろうか？

中で何かあったのではないか。

そのまま桜は、商店街の方向に早足のまま向かっていった。

私は桜が商店街で一通り買い物をしている様子を遠目に見守っていたが、ふと元来た交差点のほうを見やると凜が通り過ぎていくのが見えた。

衛宮邸の方向から来て、遠坂邸の方向に向かっていくようだった。

桜は買い物を通り済ませて、再度、衛宮邸に戻った。

さらに私が屋敷近くで警戒をしている間に、藤村大河、葛木も順次

帰宅して来た。

月明かりが煌々と住宅街を照らし、だいぶ夜が進んできたのを感じる。

そろそろ夕食が終わったただろうか。などと考えていたところで、桜が正門を出てきた。

「外出ですか？」

「ええ。少しだけ家に取りに行きたい物があるの」

「では、ご一緒します」

「大丈夫よライダー。うちには危険が迫ることもないでしょう。先輩のほうが心配だからここにいてあげて。キャスターさんの本心もよくわからないし」

桜と士郎のどちらが危険か判断が難しいところだった。

とは言え、私としてはセイバーを失った士郎が気掛かりだった。

「教会に逃げ込まなかったということは、やはり・・・」

「ええ。先輩は戦い続けるつもりみたい。勿論、そんな話は直接してないけれど」

「承知しました」

私が懸念したとおりになってしまった。彼の場合、サーヴァントがいなくても、夜毎、危険を求めて徘徊しそうだ。

桜とはパスが繋がっているのである程度のことには察知できるし、何かあれば令呪を使ってもらえばいい。

士郎のほうが危ういと言える。

「よろしくね。ライダー」

そう言つて、桜は間桐邸へと向かった。

桜を見送つてから、しばらくすると藤村大河が出てきて自宅に戻つていった。

それから間を置かずに士郎が外に出てきた。

早速行動するつもりかなのかと思つて実体化した。

だとしたら、止めなくてはならないだろう。

「やっぱりいたのかライダー」

士郎の足元を見ると、履いているのは草履だった。

流石にこの格好で戦うことはないだろう。

それでも、念のため確認する

「まさか、これから戦いに行こうというのですか？」

「あのなあライダー。オレを何だと思っているんだ？この恰好で戦いに行くわけないだろう。それに、今のオレ一人で何ができるっていうんだ？」

その言葉覚えておきましょう。きっとあなた自身に戻ってきますよ。

「それでも必要とあれば、行くのがあなたでしょう」

「少なくとも今は違う。とにかく中に入ってくれ。ライダーを呼びにきたんだから」

「そうなのですか？」

思いがけない話だった。

「まあ、近くにいなかった場合はどうしようもなかったんだけどな。今なら関係者しかいないから大丈夫だ。食事もしていつてくれ」

「え？」

「あらかた片付いてしまっているけど、ライダーの分を残しておいたんだ」

頑なに断るのも失礼になりそうだった。

士郎の料理は上手だと聞いているし、桜が手伝ったものかもしれない。

純粹に食べてみたかった。

「承知しました。お気遣い感謝します」

「ああ。それから、渡したいものがあるんだ」

士郎は手に持っていた小さな手提げ式の紙袋から、何かを取り出した。

それは、眼鏡ケースのように見える。

それが2つ。だいぶ大きさは違う。

「使ってみて欲しいんだ」

そう言って、紙袋ごと渡してきた。

「これは？」

試しに片方を開けてみると、やはり眼鏡だった。

「昨日言っていたよな？その目は魔眼だって。それを封じるために眼帯をしているんだらう？でも、それじゃあ外を普通に歩けないじゃないか」

またしても、この少年は私を戸惑わせる。

そもそも霊体化していれば、人目に付くこともない。

日中の街中を歩く必要などないのだ。

「そうだ。一つ謝らなくちゃいけないことがある。実は眼鏡自体はオレが用意して、それに魔眼封じの術式をキャスターに付与してもらったものなんだ」

「なるほど。それなら効果については、大丈夫そうですね。何を謝る必要があるのでしょうか？」

「いや、だから、結果的にキャスターにライダーの能力を教えることになってしまった。これは、キャスターに依頼してから気付いたんだが、その点は本当に申し訳ないと思っている」

なんともまあ。

またまた呆気にとられる。

「士郎。私の能力をあなたに教えたのは私自身です。その情報を、本来、敵同士であるあなたがどのように使おうとあなたの自由です」

「そ、そうかな・・・でも、そう言ってもらえると気が楽になるな。もう片方も開けてみてくれ。そっちは、ライダーの戦闘面でもプラスになると思ってたんだ」

促されるままにもう一つの箱を開けた。こちらは、通常の眼鏡ではなくスポーツ用のシャープなグラスバイザーだった。しっかりと頭部に固定できる作りになっていて、動き回っても支障がなさそうだ。

「気配を感じたりして周囲の状況を把握しているんだらうけど、直接見えるに越したことはないんだらう？」

「それは確かにそうです」

ほぼ心眼の領域なので今でも戦闘に支障はないのだが、視覚的情報もあるほうがいいに決まっている。

「ほんの僅かでも戦いに役立つかと思つてな」

この少年は本当に色々と考えているものだ。

ましてや、敵のサーヴァントである筈の私のことを。

「あなたとの戦いに使うかもしれないよ」

そんな彼に対してなのに、どうしても意地の悪い質問をしなくなつてしまった。

「う。それは困るな・・・」

この困った顔を見たかっただけかもしれない。

「・・・ふふ。このバイザーを使つているときには、あなたを傷つけないように出来る限りのことをすると誓いましょう」

「掛けてみてもらえるかな？」

ほつとしたように、少年の顔が綻んだ。

「そうですね。折角ですので」

士郎を視界に入れないように後ろを向いて、自己封印・暗黒神殿を外した。

取り敢えず普通の眼鏡のほうを掛けて、士郎に向き直る。

「・・・」

反応がない。

「士郎？」

士郎が石化した。

どうやら不良品だったらしい。

「・・・」

ひたすら沈黙が続く。

少年の目は見開かれたまま、口は真一文字に結ばれて、固まっていた。

「・・・士郎？大丈夫ですか？物理的に石化したようではないみたいですが・・・」

「・・・あ・・・や・・・いや・・・ヤバイ・・・」

「ヤバイを多用すると言語表現力が著しく落ちると聞いたことがあります」

「いや・・・すまない」

士郎は完全に平静さを失っているようだった。
本当にどうしたのだろうか？

特に変な暗示なども掛けていないのだが。

士郎は深呼吸を何度かして、やっとまともに喋ることができるようになったようだった。

「ライダーってとんでもない美人だったんだな……」

その言葉を聞いた私は心が浮き立ち、全身が熱くなるのを感じた。
思わず一歩踏み出すと。

そのまま、私は彼の頬に唇をほんの僅かに掠めるように触れた。

その後、また石化してしまった士郎が動けるようになるまで、その様子を楽しみながら待つことにしたのだが。

「……坊や。ライダーが見つからないからってあまり遠くへは……」
いつの世も、空気を読まない人間というのはいるものだ。

人間ではないけれど。

「……あらあらまあまあ。流石、他人の神殿で不埒な行為を働いて、島流しになった蛇女よねえ。こんな青いツバメも溶かしちやつたの？それともつまみ食い？」

紫色の魔女は、厭味しかない挑発をしてきた。

「なんのことでしよう？……こんな場面で現れるなんて、ベガサス天馬に蹴られて死んでしまったほうが良さそうですね」

「まさか、本気ってこと？……こんな性しょうわるおんな悪女に目を付けられるなんて、坊やもつくづく可哀そうな星の元に生まれたものね」

「あなたのほうこそ、なんのつもりで士郎に取り入ろうとしているのですか？隠しているつもりかもしれませんが、体中から腹黒さが滲みだしていますよ」

私は一体何の話をしているのでしょうか？

売り言葉に買い言葉で、キャスターの言葉に勢いで言い返しているけれど、おかしなことも口走ってるような気がしますね。

「ほんといやねえ。いつも人を騙そうとしている怪物は、他人もそういう目でしか見られないみたいね。私の厚意は純粹そのものよ。だ

いたいその眼鏡もバイザーも私が魔術を付与したのよ。お礼の一つも言えないなんて常識知らずもいいところよね」

「・・・あう・・・」

この眼鏡もバイザーも士郎の気遣いの賜物だ。

嬉しいし、ありがたい。

その贈り物に助力しているという事実を盾に取られると勝ち目が無かった。

「坊やもこんな女に付き纏われて迷惑ですってはつきり言わないと、干乾びるまで吸い尽くされるわよ」

と、キヤスターは士郎の様子を窺った。

士郎は目を白黒させながら、私とキヤスターのやり取りを聞いていた。

「・・・えつと・・・黙秘権を行使します」

彼は明後日あさっての方向を見ながら宣言した。

不思議な反応だ。

E t u r n

人間の脳には許容限度というものが明確にある。

それを今日、オレは思い知らされた。

ライダーの素顔を見た瞬間がそれだった。

勿論、眼帯をしていた時点でも、美人なのは想像していた。しかし、所詮オレ程度の浅い人生経験では限界というものがある。

素顔が露わになった彼女は、控えめに言っても絶世の美女であった。

想定していた（今となってはおこがましいにも程がある）「美人」という概念は所詮、真の「美人」という現物の破壊力の前には無力であった。

オレは無くなった。

その後、さらに第2波、第3波に襲われたオレの精神は崩壊した。もはや何が起きたのかをオレ自身には説明することはできない。

詳しく知りたい方は、前段をご参照いただきたい。

「衛宮、キャスター、あまり外に長居するのは感心しないぞ」

葛木先生という絶妙なアンカーの登場により、オレは何とか停泊地を見つけることができた。彼は恩人だ。

ぶれない男、動じないアダルトの強さを実感できた。

ついていくぜ。葛木先生。

「む……」

あれ？

今、一瞬ライダーを見た葛木が石になったぞ。

「宗一郎様。あれは目の毒です」

なんて言って、キャスターがその視線を遮った。

ライダーも連れ立って居間に戻り、彼女にはそのままご飯を食べてもらっていた。

今日のメインは桜が作ったシーフードグラタンだ。

「こんな美味しい食べ物私の生きた時代にはありませんでした。素晴らしいです」

と、ライダーは絶賛していた。

問題はこのライダーという【控えめに言って絶世の美女】をどう桜に紹介するかだった。

桜は遠からず帰ってくるだろう。

今日は一旦ライダーには霊体化してもらって、明日、落ち着いてから紹介しようか。などと思索していると、

「さてと、それじゃあ坊や。工房で昼間の続きをやりましょう」

キャスターが魔術指導の提案してきた。

「ああ。そうだな。頼む」

オレは、難題から逃げられる口実を見つけて飛びついた。

「私も少し様子を見させて貰ってもよろしいでしょうか？」

ライダーが同席を要望してきた。

「そのほうがいいか。昨日みたいな状況の時、オレが何ができるのかを把握してもらっていたほうがいいしな」

「坊やの言うとおりね」

と、キャスターも同意してくれた。

3人で連れだって、工房である土蔵に向かう。

葛木には、桜の帰りを居間で待ってもらうことにした。いきなり工房に入ってこられて、オレ達3人が怪しい魔術の特訓をしているのを見られるわけにはいかない。桜が帰ってきたら、こちらに合図を送ってもらおう手筈だ。

「鍛錬を始める前に、できれば当面の方針を話し合いたいと思ってる」

土蔵に入ったところで、オレは言った。

そう。昨日までとは大きく状況が変わっている。

「そうね。お互いの考え方も少し共有したほうがいいわね」

「先ず、オレから話そう。オレはセイバーを失った。だけど、聖杯戦争は見逃ごせないし、なによりあの黒い影が一番の問題だと考えている」

昨日、柳洞寺に現れた影はオレや葛木だけでなく、寺にいた数十人の門弟を昏睡させた。幸い皆、命に別条はないと聞いているが、人に対して害をもたらすものであることは間違いない。

「聖杯戦争との関連性はまだわからない。だが、セイバーが取り込まれてしまったことを考えると、人間よりもサーヴァントにとって、より脅威になる存在なのかもしれない」

「そうね。宗一郎様や坊やの治療をしたけれど、放っておいても時間が経てば回復する程度のもだったわ。それでも数日はかかるでしょうけど」

「あの影は、私とセイバーを狙って攻撃を仕掛けてきたようでした。優先順位としては、先にサーヴァントを狙ってくるのかもしれないですね」

「そう考えると、聖杯戦争との関連性があると想定したほうがいいと思う」

「その前提を置いたうえで、坊やはどうするつもりなのかしら？」

「影の発生原因を突き止めて対処する。そのためには、情報収集が必要だ。発生場所や時間、行動パターン以外にも、聖杯戦争に関する情報を集めようと思う」

「誰から情報を集めるつもりなのかしら？」

「遠坂を筆頭に、言峰神父、間桐臓硯、イリヤスフィールだ。前回の聖杯戦争や、聖杯戦争の歴史などについて確認する。もちろんキャスターも分かっていることを教えて欲しい。そして、一緒に考えて欲しいと思っている」

「凜はともかく、他の人物が素直に教えてくれるとは思えません
が・・・」

ライダーがもつともな懸念を口にした。

「それは、百も承知だ。ただ、この戦いが歪められる可能性を示唆すれば、ある程度の情報は引き出せると思う。対価を要求されれば、可能な範囲では応じていくつもりだ。いずれにせよ、彼らなりの利が何かを探りながら、交渉する」

「聖杯戦争はどうするのかしら？」

「まだ判明していないランサーとアサシンのマスターを突き止めた
い。対処方法にも繋がるし、情報収集の対象になり得るからな。あとは、基本的には専守防衛だな」

「動き回れば、狙われる危険が増すことになりましたが」

「活動はなるべく日中に行う。セイバーのいないオレでは、夜動けば
サーヴァントの餌食になる」

「日中だからと言って、必ずしも安全なわけではないことを忘れない
てください。可能であれば、私はあなたを守りますが」

「わかっている。基本的にライダーがオレを守ってくれることは、計
算には入れない。これは、ライダー自身を信頼していないという意味
じゃない」

わかっていると思うけど。と付け加えた。

ライダーは頷いてくれた。

彼女は本来のマスターを守ることを当然優先せざるを得ない筈だ。
常にオレの傍にいられるわけじゃない。

「その前提のほうがいいわ。あと、アーチャーのマスター……遠坂凜という名前だったわね。彼女との共闘関係は、どう捉えるのかしら？」

キヤスターは殆どオレの答えを察したうえで、敢えて確認してきているようだった。

「停戦協定のような意味合いで考えるほうがいい。オレは遠坂を信用しているけれど、遠坂自身はオレに対するアーチャーの制御について十分な保証ができない様子だ。となれば、積極的な共闘は難しいと考えるんじゃないかな」

「凜の性格からすると、この状況で共闘関係そのものを破ることもないでしょうから、結果的に共闘もできないが攻撃も仕掛けないという形に落ち着くということでしょうか」

ライダーは遠坂の性格も把握しているようだった。

直接話したのは昨日が初めての筈だが、慎二のサーヴァントだったから、あいつから話を聞いているのか、霊体化して学校内の状況を観察していたのかもしれない。

「そうだ。だからこそ大事なものは、オレ自身が強くなる事だと思っている。自分の身を自分で守れなければ話にならない。それに、黒い影に対してサーヴァントではむしろ不利ということであれば、人間の力が鍵を握るとも考えられる」

「坊やの考えは合理的ね。いいと思うわ。私としては、坊やに可能な限り助力するつもりよ。私は他の参加者から狙われる立場だし、坊やに対しては攻撃ができない。であれば、坊やに勝ち残って貰うのが一番いいもの」

「助かる」

オレは、頷いた。

キヤスターの目的は知っているし、基本的な立ち位置はわかってきた。

彼女にとっては、もう一つの見込みがあるのもわかっていたが、それはこの場では黙っていた。おそらく彼女も敢えて伏せているのだろう。

「でも、正直あまり期待しないで欲しいわ。柳洞寺を追い出されたから、魔力が乏しくなっているし、元々優位なクラスではないもの」

「ああ。今日みたいに魔術の指導を期待している」

「私については先程の士郎の話のとおりです。私の助力は、あれば幸い程度に考えていただけかないと危険だと思います。最悪の場合……」

「ライダー。それ以上は言わなくていい」

続けようとしたライダーの言葉は遮った。

彼女自身が辛そうだったからだ。

キャスターは軽くこちらを睨んできたが。

「話としては、こんなところか。先ず、明日学校で遠坂から話を聞き、それから教会に向かうつもりだ」

「それがいいわね」

「可能であれば、私もご一緒します」

「それじゃあキャスター。昼の続きを頼む。実は一つ試してみたいことがあるんだ」

話を終えたオレ達は、キャスターの魔術教室の時間に移行したのだった。

結果として、魔術の鍛錬に集中することになったオレは、桜が帰ってこないことに気付いていなかった。

Interlude in

「兄さん……戻ってきてたんですか……?」

二日ぶりに自宅に戻った間桐桜は、玄関で靴を脱ぎ、自分の部屋に向かう途中で兄と遭遇した。

「悪いかよ。ここは僕の家なんだ。なんの不思議もないだろ?」

「でも、教会にいたほうが安全なんじゃ?」

「ふん。教会には偵察に行っただけさ。安全のためなんかじゃあない。あの神父は怪しいからな」

プライドを傷付けられたように、顔を歪めて兄は言う。

「にしても、聞いたぜ。衛宮がサーヴァントを失ったってな」

「!?」

「あのサーヴァントはなかなかのもんだった。衛宮には勿体ないくらいにね。それなのにあっさりやられてしまうなんて、ほんと衛宮はどん臭いよな」

「誰から聞いたんですか?」

「は? そんなの爺さんに決まってるだろ。とにかくこれで衛宮は完全に無力になったわけだ」

「・・・先輩に何をするつもりなんですか?」

「ふん。決まってるだろ。この前の決着をつけてやるのさ」

「やめて下さい! 先輩がそんなことに応じる筈がないです」

「そんなのわからないだろ?」

「先輩は自分自身が犠牲になることを気にもかけない人です。他の人のためならともかく・・・」

「ふん。確かにそうかもな。とは言え、誰なら釣れるかっていうと・・・」

と言つて、兄は少し思案するような表情になった。

「私なんか先輩が気に留める筈がありません!」

「ん? ああ、そう言えば手近にちょうどいいのがいるじゃんか」

兄は初めて私の利用価値に気付いたようだった。

「兄さんのために協力してくれるよな?」

「そんなん?! 兄さん! 考え直して下さい。兄さんは優しい人です。そんなことができる筈がないのに!」

「そんなことができる筈がない?」

兄は肩を震わせた。私の言葉に屈辱を感じたのだろう。

「僕だってこれくらいのことではできるさ! 僕は魔道の家門の後継者だ! 必要とあれば、家族すら犠牲にできる! それが魔術師ってもんだろう!」

この人は、勉強もスポーツも人並み以上にこなせる。顔も悪くない。普通の学生として過ごすだけなら、不自由なく生きていくことができるのに。

『魔術師』という圧倒的に特別な存在に強く惹かれてしまっていた。

残酷なまでにその才がないにもかかわらずだ。

「ふふふ。明日、お前には衛宮を釣り出す餌になってもらうからな……」

「そんな……」

私は身を震わせる。

「さて、それじゃあまた偽臣の書を準備するんだ。そして、また僕はマスターに。そして、魔術師になるんだ」

兄は虚な目でそう呟いた。

「本当にかわいそうな兄さん……」

間桐家は洋館だが玄関では靴を脱ぐ。このあたりは、徐々に現地文化に定着しようとした間桐臓硯の意思の表れなのだろう。

その玄関には、間桐慎二が普段履いている靴が、桜が帰って来る前から確かにあったのだ。

I n t e r l u d e o u t

第13話 6日目① 「鮮血神殿」

E t u r n

昨夜遅くまでキャスターの指導の元、魔術の鍛錬に集中したオレはくたくたになって眠りについた。

目覚めた時刻は6時。いつもより遅い。

「重いな・・・」

濃密な鍛錬のせいか、少し頭と体が重いように感じた。

しかし無理矢理にでも起きて、確かめなければいけないことがあった。

玄関に着くと、並んでいる靴を確認する。

やはりというべきか桜の靴がない。

ということは、昨日は結局戻らなかったのだ。

念のためと思い、桜の部屋をノックしてみたが反応は無かった。

「戻ってないこと自体はおかしなことじゃないんだけどな・・・」

昨夜、桜は私物を家に取りに戻るついでに、祖父、つまり間桐臓硯と話をすると言っていた。

自分の家なのだ。少し遅くなったのでそのまま自宅で寝たと考えれば、何の不思議もない。

慎二の精神状態を危惧して、桜をうちに預かったのだが、慎二はここ数日、家に戻っていないようだし、そもそも出会ったところで必ずしも問題が起きるとは限らない。

そう思い込もうとしても不安は消えなかった。

「後で、電話してみよう」

それぐらいしか、やれることがなさそうだ。

藤ねえから聞いた話では、今日も教師は早朝から会議があるそうだ。そのため、藤ねえは直接学校に行くと言っていたし、葛木も早めに家を出ることになるだろう。

台所に立って朝食の準備を始めたところで、キャスターがやってき

た。

「おはよう、坊や。朝食の準備かしら？」

「おはよう、キャスター。昨日は色々教えてもらってありがとうございます。本当に為になったよ」

先ずは、礼を言う。

実際、いくら感謝してもし切れないくらいだ。たった一日、キャスターに魔術のことを教わり、鍛錬に付き合ってもらっただけで劇的な進歩を遂げたのがわかった。正直、今まで何をやっていたのかと愕然としたくらいだ。

「あれくらいどうということはないわよ。それより、食事を作るなら、私にも教えてもらえないかしら？宗一郎様のお弁当も作ってさしあげたいのよ。あまり時間がないのだけれど」

「わかった。レシピは教えるから二品はキャスターに作ってもらおうかな。とは言え、簡単なものになるぞ」

「それは仕方ないわよ。とにかくお願いするわ」

ちようど朝食の支度が終わる頃に、出掛ける準備を万全に整えた葛木が居間に現れた。

学校で見る時と同様に、カッチリとスーツに身を包んでいる。

「キャスター、衛宮。おはよう。朝食の準備をしてもらっているようだな。感謝する」

「おはようございます、宗一郎様！」

キャスターが語尾にハートマークが付きそうな声で挨拶を返す。

昨日の夜から体験しているので慣れてはきたが、それでもオレと話している時との変わりようは、驚きを通り越して少し引いてしまうほどだ。

「丁度、支度ができたところですね。衛宮君はとても料理が上手なので、私も教わりながら作りました。召し上がってみてください」
「……え……えみやくん……ですか……」

「そうか。衛宮、感謝するぞ。ただでさえ、部屋を貸してもらっているというのに」

「こつちも、キャスターには色々お手伝ってもらっている。お互い様

だ」

「うむ。それでは、折角なのでいただくでしょう」

「あれ？ライダーがまだ来ないな？」

「あら。そうね」

「ちよつと様子を見てくる。二人は先に食べていてくれ」

ライダーにあてがっていた部屋に様子を見に行く。

試しに襖を叩いてみるが反応がないので、そつと開けてみたが、中にはいなかった。

「マスターに呼び戻されたのかな・・・」

そう考えるのが自然だった。

止むを得ないことだ。

自分を納得させて、居間に戻ることにした。

登校は、二日ぶりということになる。

朝食後に間桐家に電話したところ、間桐臓硯が出たので桜と慎二の様子を聞いてみた。

すると、

「桜は結局遅くなっちゃったので自宅で寝ることになり、慎二は帰っていないようじゃのう」

との事だった。

そして桜は、既に登校したらしい。

昨夜、戻らなかったとしても、早朝もうちに来なかったことには疑念があった。以前のように、朝食時には来そうなものだ。

正直、嫌な予感がする。

キャスターにこの状況を話したところ、

「今日は気を付けなさい坊や。セイバーがいないだけでなく、ライダーの助けも期待できそうにないのだから」

そう忠告されて、一枚の短冊のような符を渡された。

「これを持っていきなさい。危険が迫ったら破るのよ」

遠坂の連絡用の宝石みたいなものらしい。

オレは、その符をポケットに入れて、学校に向かった。

ズ

校門を通り過ぎると、なんとも言えない甘ったるい霧の中に入ったような気がした。

「……………なんだ。これ？」

周りの様子を見回してもさして特別なことはない。

天気は至って快晴。

登校する生徒たちも何も違和感を覚えてはいないようだ。

だが、確かに何かが起きている。

警戒しながらも、いつもどおり教室に入り自席に着く。

机のスチール棚に教材を入れようとしたところで、中に便箋があるのに気がついた。

「このタイミングで女子からのラブレター……………なわけないよな」

真っ先に考えたのは、遠坂からの連絡という線だ。あり得なくはないが。

外見は素っ気ないただの茶封筒だ。

とにかく開封して読む。

「……………!?!」

読んだ瞬間、反射的に強く握りしめてしまったため、手の中で便箋がくしゃくしゃになる。

頭に血が昇ってしまい、しばらくの間、始まった授業の内容が全く耳に入ってこなかった。

だが、冷静にならなければいけない。

授業が終われば、ここに書かれた要求に従わざるを得ないのだ。

これを書いた相手は、こちらに時間を与えない腹づもりだろう。それなら今すぐにでも行動を起こし、相手の思惑から外れた動きをすべきだ。

すでに1限目が始まって、それなりの時間が経過していた。

「先生、すいません。やはりまだ体調が悪いようなので、早退させてください」

昨日休んでいるオレが早退するのは、不自然ではない。

すんなりと許可をもらい、教室を後にした。

教室を出て、まずは遠坂のクラスに向かうが、生憎ともぬけの殻だった。時間割を見ると一限目は美術。

生徒たちは美術室に行っているのだろう。やむなく、教室に忍び込んで遠坂の机の中に書き置きだけを残すことにした。

「気付いてくれ。遠坂」

次に1階に降りて、桜の教室に向かう。

端から見ると相当に怪しい動きになってしまうが、確認しておく必要がある。

「桜は……いないよな……」

廊下の角に隠れながら、桜の席がなんとか見えるが、やはり本人の姿はなかった。

そのまま職員室に行って、その場にいた教師に断って借りた電話で、うちに連絡し終わったところで

キーン……コーン……カーン……コーン……

1限目終了のチャイムが鳴った。

時間だ。

すぐにでも指定された場所に向かうしかない。

「行くぞ」

自分に言い聞かせるように呟いて、指定された場所である校舎裏の雑木林に急いで向かった。

雑木林に着いたが、相手の姿は見えなかった。

すると、きらきらと眩しい光がオレの顔を横切った。

「なんだ?」

どうやら、雑木林の奥から鏡のようなもので太陽の光を反射させてオレに当ててきているようだった。こちらに来いという意味だろう。

光の方向に進んでいくと、想定した通りの3人がいた。

「……先輩? どうして来てしまったんですか!」

桜の悲痛な声が木々に響く。

「やあ、衛宮。友人である僕の招待に快く応じてくれたってわけだ。

きつかり時間どおりだし、相変わらず律儀だねえ」

「慎二……お前、自分が何をやってるのかわかっているのか？」

事もあろうに、慎二は桜の首筋にナイフを突き付けていた。

小脇にはあの本を抱えている。

「桜を放すんだ。オレが言いたいのはそれだけだ」

本当なら罵声を浴びせたいくらい頭にきていたが、この状況で慎二を刺激するわけにはいかない。とにかく桜の安全が優先だ。

「衛宮あ。お前は本当にせっかちなあ。せっかく久しぶりに会えたんだ。まずは楽しくトークといこうぜ」

「何を話したいんだ？」

オレは極力余計なことは言わず、簡潔に話すことを意識する。

「ほら。この前、ライダーの油断で、お前のサーヴァントに苦戦したじゃん」

あの結果を苦戦と言い、あまつさえライダーの油断を原因にする神経がさっぱり理解できなかった。

「だから今回は油断もせず、それなりの準備をしてお前のサーヴァントと雌雄を決しようと思ったわけさ。正々堂々の戦いでね」

慎二の顔にはずっとニヤニヤした笑みが張り付いていた。それは、負ける筈がないという自信の表れだ。とうにオレがセイバーを失っていることを知っているのだろう。

だからこそ、このタイミングで仕掛けてきたのだ。

「なら、お前の狙いはオレなんだろう？そのオレがここにきた以上、桜はもう関係ない。離してやればいいじゃないか」

「そうはいかないさ。衛宮が逃げ出すかもしれないだろ？もつとも桜がこうなっているも、逃げ出すかもしれないけどな」

「先輩！私のことは構わず逃げてください！」

「桜を解放するまでは絶対に逃げない。必ず助ける」

「せ……先輩……」

そう。どんな形でも。どんな無様な姿を見せることになっても、だ。

改めて、桜と慎二の前にいるサーヴァントを見る。

そこには、昨日贈ったバイザーを着けたライダーが佇んでいた。その双眸がグラス越しにはつきり見える。

「さあ、始めようじゃないか。衛宮。早くお前のサーヴァントを出せよ」

こちらの状況を見透かして、なおも慎二はオレをなぶ翔ろうとしているようだった。

「いや。学生同士の喧嘩にセイバーを呼ぶのは申し訳ない。それはライダーにも言えることだ。だから正々堂々、オレ達自身の拳で決着を付けよう。慎二」

乗ってくる筈がないとは思いながらも、オレは当人同士による決着を提案した。

「ふん。聞こえのいいセリフだけど、結局は怖気付いているんじゃないか衛宮。ライダーと戦うのが恐いつて言っているのと同じだぜ」

こちらの意図は察しているのだろう。

こういうところは頭が回るんだよな、慎二は。

「これ以上の言葉を交わしても時間の無駄か。なら始めるか」

「そういうところが大っ嫌いなんだよ！衛宮！」

本当にそうなのか？慎二？

オレはお前の事を本当に大事な友達だとずっと思っていたんだけどな。

「衛宮をボロボロにしてやれ！ライダー！」

「兄さん！やめてー！」

桜の制止の叫びが逆に引き金になったかのように、ライダーが一瞬で間合いを詰めてくる。

さすがに速い。

だが、速過ぎはしない。

「トリス同調、オン開始」

オレは、小さく詠唱した。

ライダーの攻撃をオレがまともに食らえば、確実に死ぬ。

とにかくダメージを軽減しないと話にならない。

先ずは、長い脚による回し蹴りがオレの右肩に向けて放たれる。

何とか見切ることができるとの程度の攻撃だった。オレはギリギリのところ、後方に跳び退って躲した。

続け様に、胴に向けての蹴りが突き出されてくる。

これも何とか躲すことができた。

そのまま、間合いを詰めてきた彼女の左フックが弧を描いて、迫ってくる。

これを右腕でブロックするが、衝撃で大きく吹っ飛ばされた。

しかし、何とか倒れずに踏み止まる。

服を強化していたため、ブロックした腕は何とか無事だ。

この攻防で間合いが大きく開いたため、ライダーはこちらに一気に間合いを詰めてくる。

そのため、慎二たちとの距離がだいぶ開くことになった。

「ライダー。オレを派手にいたぶってくれ」

抑えた声でこちらの意図を伝える。

慎二までは届かない筈だ。

「申し訳ありません、士郎。何とか耐えてください。可能な限り加減しますので」

交わす言葉はこれだけでいい。

バイザー越しのライダーの眼は苦渋に満ちていた。最初から彼女の気持ちは充分に伝わってきている。

とにかく、ギリギリ死なないようにしながらライダーにいたぶられる。

というのがオレの考えだ。

それで、慎二は溜飲を下げるだろう。

「ハッ！」

ライダーが周囲の木を踏み台にして、反動をつけてオレに向けて蹴りを放ってくる。正直、充分速い。

彼女が意図的に反らしたのか、ただのまぐれで躲したのかわからないその蹴りの直後に襲ってきた拳を、先程と同様に強化した側の腕で受けて吹っ飛ばされる。

「があっ!!」

今度は踏ん張れなかった。

手加減してくれているので、打撃によるダメージは大きくないが、地面に叩きつけられるほうの衝撃がかなり応える。

サーヴァントというのはやはり破格の存在だ。

「ラ．．．兄さん！もう止めてください！充分でしょう!?!」

「くくく、まだまだだ。こんな無様な衛宮の姿はなかなか見られないからなあ」

「兄さん!!」

桜と慎二のやり取りが林に響く中、その後、何度もオレはライダーに殴られ、吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられた。

だが、いずれもオレが強化した部位で受けられるような攻撃をしてくれているので見た目より遥かにダメージは軽い。

「士郎。もう．．．」

ライダーが顔を歪めながら、小声で言う。

「ああ。最後に少しキツめなヤツを頼む」

頃合いだろう。

慎二の目にも、オレの情けない姿を充分焼き付けられた筈だ。

ライダーが少し顔を背けながら、大きめの右回し蹴りを放ってきた。

オレはこれまで通り、腕でブロックしながら自分でも少し飛んで大きく吹っ飛ばされた。

が、これまでと違い、その先には倒れた木が横たわっていた。

ガッツ!

オレは後頭部を強かにその木に打ち付けてしまった。

「があっ!?!」

混濁する意識の中で、ライダーの唇が「シロウ」という三音を描いたのを見たような気がした。

R t u r n

しまった!

そう思った時には、もう遅かった。
早く終わりにしたかった。

これ以上少年を傷つけるのは、耐えられなくなっていた。
だから、周囲の状況を確認するのを怠ってしまったのだ。

私の蹴りを受けた彼は、大きく飛ばされ、そしてその木に頭を打つて動かなくなってしまった。

「し……！」

思わず、彼の名を叫びそうになるのをなんとか堪える。

「先輩!!」

私の代わりのように桜が叫ぶ。

彼女からすれば、私が本気で士郎を痛めつけていたように見えていただろう。

とにかく、士郎の様子を確かめに行く。

駆け寄りたくなるのを何とか我慢して、私は極力平静を装って歩み寄る。冷徹な自分を演じ続けなければならない。

私が彼を必要以上に案じる素振りをすれば、慎二が妙な勘繰りをするかもしれないからだ。

折角、ここまで彼が我が身を犠牲にして演技を通したのだ。私の行動で詰めを誤ってはいけない。

近付いて、首筋に手を当てると脈は問題なかった。

「気絶したようですね」

ほっと安堵する気持ちを抑えて、努めて冷淡に慎二に伝える。
もう充分でしょう。

心の中だけで付け加える。

その時だった。

ゴウツ!!

風を切り裂いて、何かが高速で飛来した。

「っ!」

寸でのところで、その飛来物を避けた。

それは、一昨日散々見た【矢】だった。

「ちっ! 相変わらずの素早さだな」

「ライダー！あんた何やってんのよ!?衛宮君から離れなさい！」
凜とアーチャーだった。

正直、最悪のタイミングだ。

「……っていうか、慎二!?あんた何、莫迦なことやってんのよ!?」
ことこの場面では、彼女の言動は直截的過ぎてよろしくない。

慎二の神経を逆撫でしてしまう。

「……くくく。遠坂に、そしてそいつはアーチャーか。丁度いい。衛宮の次はお前たちだ。僕の凄さを思い知れよ」

慎二が偽臣の書をこちらに向けて命令してくる。

「ライダー。鮮血神殿ブラッドフォートを起動しろ」

「本当に良いのですか?校内には、あなたの友人もたくさんいるのでしよう?」

結界の中にいる者は、ただでは済まない。

桜も士郎も間違いなく悲しむ。

できれば避けたかった。

「あんなクズどものことなんて気にする必要ないさ」

感情が昂っているのだろう。

桜の首元のナイフに力が込められた。

「……承知しました」

呪刻を敷設していた以上、こうなることは予測されたが、こんなに早く起動することになるとは思っていなかった。

やむなく、他者封印ブラッドフォート・アンドロメダ・鮮血神殿を起動するための一節を唱えると、

俄かに血の色をした檻が空一面に出現した。

「なに!?」

「これは!?」

結界の境界線は、丁度私のいる場所と重なっていた。

校舎から離れている慎二、桜、士郎の3人は外、校舎側にいる凜とアーチャーは内にいる状態だ。

呪刻を敷設したのが、今日の未明なので準備時間としては不十分であり、完全には程遠い状態だ。この結界は中の人間を溶かし、その魔力を私が吸収するためのものだ。不完全ということは中の人間を溶

解するのに時間がかかるということでもある。

「くくく。この宝具は中の人間の魔力を吸い上げて、ライダーの力を高めることができるんだ。遠坂もアーチャーも苦しいだろう。僕はこの聖杯戦争を勝ち残っていかなきやいけないからね。学校の連中はそのための尊い犠牲つてわけさ。光栄つてもんだろう?」

「・・・ふざけないで・・・誰があんたなんかの犠牲になって喜ぶつてのよ」

凜は結界の圧力に耐えながら、言葉を発する。

そして、私のほうへと厳しい視線を送ってきた。

「それにしてもライダー。あなたこそ見損なつたわ。【偽臣の書】で従えられているとは言え、衛宮君を痛めつけ、あまつさえこんな醜悪な手段を唯々諾々と実行してしまうなんてね」

「・・・」

返す言葉もない。

そう。結局のところ、私は怪物に過ぎない。

『桜や士郎が悲しむ』という理由がない限り、校内の人間の生死は殆ど気にならないのだから。

私が僅かに俯いた時、

「結局のところ、根っこは外道に過ぎないということだろう!」

双剣を手にしたアーチャーが結界の圧力を振り払って、一気に間合いを詰めてきた。

私は杭剣を出して応戦する構えを取ろうとするが、反応が遅れていた。

「しまった・・・」

間に合わない。

「トレス投影、オン開始!」

唐突に私の背後から声が出た。

それは、少年の声だった。

「なにっ!?!」

アーチャーが驚愕する。

ガイイン!!

いつの間に意識を取り戻していたのか。

私の横を駆け抜けた士郎がアーチャーの双剣を受け止めていた。交差した白と黒の剣で。

それは、アーチャーのものと同じだった。

「え……衛宮君!?!…どういふこと!?!」

「衛宮、お前……」

「先輩……?」

凜、慎二、桜の3人も一様に驚いている。

その両手にアーチャーと同じ双剣が握られていること、そして私を庇ったこと、おそらくその両方に。

「ライダーは守る。彼女は敵じゃない」

私の目の前でアーチャーの剣を受け止めている士郎は、渾身の力で踏ん張りながらそう言った。

彼の言葉で私の全身に震えが走る。

「た……たわけがっ!この状況はどう見ても、その女怪の仕業だろうが!血迷ったか!?!衛宮士郎!」

「包丁は料理道具だが、使う人間次第で凶器にもなるだろう」

「こんな時に、一般論を持ち出すな!そもそもサーヴァントとはそういうものだ。こうしている間にも、校内の人間は倒れていくのだぞ!間違いなくこいつはお前が斃すべき明確な悪だろう!」

そうだ。

それは私が結界を解かない限り、どうしようもない事実だ。

そして桜を人質に取られている以上、私は結界を解けない。

私は桜を優先する。

「ライダーは違う」

そんな私の葛藤を余所に、至極落ち着いて、しかしはつきりと士郎が断言する。

「今、彼女は苦しんでいるからだ」

彼の発する全ての言葉に、私はただその場に立ち尽くすだけの存在になっていた。

「は!なに莫迦なことやってんだ衛宮。ほんと、お前は理解不能だよ」

慎二が近付いてきて、士郎に語りかける。

「だいたい、何でお前がいきなりそんな魔術使ってたよ。お前は魔術なんか使えなかった筈だろう！」

慎二が叫ぶ。

「アーチャー！離れて！」

凜は何事かを察したのでろうか。真意はわからなかったが、アーチャーに離れるよう指示を出す。

そもそもアーチャーは凜の令呪によって、士郎を攻撃できない。先程はたまたま私への攻撃の余勢で、士郎に攻撃する形になってしまっただけだ。

「もういいよ。ライダー。そのまま衛宮を殺せえ！」

慎二が当たり前のように私に命令する。

「やめて兄さん!!」

目の前には私に背を向けている士郎のうなじがある。殺すにはお誂え向きの状態だ。

慎二が殺すように指示するのも、自然な状況だった。

私は、手にした杭剣を振り上げた。

「ライダー」

彼が、こちらを振り返るのがはつきりと私の目に映る。

「いったい、私は何をしているのか？」

私に意思はないのか？

ただ、マスターの命令だからという理由で。

そうやって、思考を放棄し続けてきた結果がこれだ。

『衛宮士郎を殺す?』

何を言っている？

この少年を私が殺すことなど、もはやあり得ない。

強固な意思を秘めた士郎の視線と私の視線が交差した。

そんなことをするくらいなら。

ザグツツ!

鮮血が飛び散った。

その血は勿論、少年のものではない。

私自身のものだ。

私は私の腹を杭剣で深く突き刺していた。

「なっつ!?!」

「ラ・・・ライダー?」

慎二が、そして士郎もまた私の行動に呆気にとられていた。

「アーチャーッ!!」

そして、私のこの行動に驚かなかった凜とアーチャーが行動した。

先程、慎二が士郎に近付いてきたことで、僅かに慎二と桜の間には距離ができていた。

「弾ける!」

凜が慎二を目掛けて宝石を投げると、それは強烈な光を放った。

「うわっ!?!」

「きゃっ!」

慎二と桜はその光をまともに見てしまったようだ。

そして、その光が収まった時、小脇に桜を抱えたアーチャーが、凜の横に立っていた。

凜の宝石が光を放ち、慎二の眼が眩んでいる隙にアーチャーが桜を救い出していたのだ。

「なにをするんだ!遠坂!」

「あんた本当にいい加減にしなさいよね!」

凜の突き出した右腕の人差し指から黒い光弾が打ち出され、慎二が手にしていた偽臣の書を弾き飛ばした。

「ひっ!?!」

「おしまいね。間桐慎二君」

凜はさらにその光弾で、慎二の右足を狙い撃った。

「ぎゃあああ!!」

慎二は倒れ、その場で痛みにもたうち回った。

「兄さんっ!?!」

桜が叫ぶ。

私は腹からの出血を堪えながら慎二の元に駆け寄ると、その体を抱え上げた。

「凜、このまま慎二を殺させるわけにはいきません」
私は凜と対峙した。

「ライダー。あなたの献身は見上げたものね。衛宮君を守ったり、慎二を庇ったりで本当にご多忙よね」

凜は構えていた腕を下げながら言った。

「でも、やっぱり衛宮君は殺せなかったわね」

少女の表情には、悪戯っぽい笑みが浮かんでいた。

「あなたは先程、私が士郎を殺さないとわかっていたのですか？」
思わず疑問を口にした。

私自身、自分の行動が予見できなかったくらいなのだ。

にも拘らず、彼女はアーチャーに次の行動の準備を指示したのだ。
「当ったり前じゃない。衛宮君に庇われた時のあなたの顔を見ればね」

くすりと彼女は笑って言った。

「あれ、恋する乙女の顔ってやつ？」

「・・・そ・・・そんなわけ・・・」

私は自分の顔が一気に紅潮するのを感じた。

「昨日の質問の答えはもらったわ。何にせよ、そのバイザーのお陰であなたの眼が見えたことは、結構ポイントだったわ。『口ほどに物を言う』ってね」

「凜。その話が面白いのは分かるが、気付いているか？」

アーチャーが会話を遮って、校舎側に近付くよう促した。

凜がその言葉に従って歩いていくと、

「あれ？境界が解かれている」

境界の境界線を超えたところで、凜が言った。

「ライダー。あなたとつくに解除してくれてたのね」

どうやら鮮血神殿が解除されたようだが、

「え？・・・いいえ、私ではありません」

そう、私はまだ何もしていない。

この境界は、私以外の者が解除するのは極めて難しい筈なのだが、誰かが解除したらしい。

「多分、キャスターのお陰だ」

「こちらの疑問に答えるように、なぜか顔を真っ赤にした士郎が言った。

「衛宮君。とつくにキャスターに連絡済みだったのね？」

「とつくについてほどじゃないけどな。校内に何か仕掛けられたことと、慎二がオレに誘いを掛けて来たことについては、ここに来る前に電話で伝えたんだ」

「そうでしたか。確かに彼女なら解除できるでしょう」

私も合点がいった。

「そんなに長い時間じゃなかったから、あまり心配はないと思うけど校内の様子を見に行きましょう。もしかしたら、重傷者もいるかもしれないわ」

「ここでライダーとそのマスターを斃すという選択肢はないのかね？」

アーチャーが念のためという体で凜に確認する。

今ここで慎二と私を斃す。

ある意味、妥当な意見でもあった。

「無理よ。だって衛宮君がいるもの。彼にライダーを庇われたら、あなた勝ち目ないじゃない」

凜の答えは呆れるほどにさっぱりしていた。

「ああ、それは確かにな」

「それに彼女に本気で逃げられれば、追いつけないわ」

「ふむ。間桐兄妹はどうするのだ？」

気付けばアーチャーに抱えられた桜も、私に抱えられた慎二もいつの間にか気を失っていた。

「慎二は教会に、桜は士郎の家を送るのが良いと思いますが」

私は一応提案してみた。

「慎二と桜は接触しないようにしたいから、それでいいわ。問題は桜が今回、聖杯戦争について知ってしまったことね」

そう。今まで桜はあくまでも一般人で通している。この戦いの存在を知った以上、記憶を消すのが通常の処置だ。

「でも、私の見立てではこの子、知っていたと思うのよ。慎二の言動やアーチャーの存在とかへの反応が殆どなかったわ。あくまでも、衛宮君の身を案じていただけ」

形の良い顎を手で支えるようにして考えながら、凜は続ける。

「そりゃあ、想い人のピンチが一番の気掛かりなのは当たり前だけど、目の前であんな人外魔境なドンパチやってたら、多少はそつちに目を奪われるでしょう?」

「オレも初めてアーチャーとランサーの戦い見た時はとんでもなく驚いたな・・・じゃあ、桜は・・・」

「少なくとも、サーヴアントのことくらいは知っていたんでしよう。魔術のこともね。間桐家内のことだから、確かなことは言えないけど。だいたい慎二なら自慢するだけに喋っちゃいそうだし」

凜は元々、桜が間桐家に来た経緯も知っているのだから不思議ではない帰結だ。そう遠くないうちに、桜がマスターであることも露見するかもしれない。

あるいは既に・・・

「それもそうか。なんのかわるので同居してるわけだしな。でも、第三者には絶対喋れないよな。こんなこと」

「そりゃそうよ。この子の性格なら尚更ね」

「それにしても、遠坂は随分と桜のことを知ってるみたいだな」

「え?・・・あく・・・その・・・ちよつと話し込む機会があったのよ。何にせよ目が覚めて、落ち着いたところで本人に聞きましょう」

「本当に知ってて、黙ってたんだとしても、責めないようにしないと」

「な」

士郎が桜を気遣う発言をした。

「そろそろ行くぞ。凜。重症者がいた場合には、対処が必要になる」

アーチャーが少し苛立ったように次の行動を凜に促した。

「今さらですが、手を煩わすことになり申し訳ありません」

本来敵同士とは言え、このままでは礼を失するので謝罪する。

「まあ、この前はこつちがやらかしてるしね。とりあえず、慎二と桜をよろしくね」

凜の言葉をきっかけにして、アーチャーが桜をこちらに預けてくる。

私は一旦慎二をその場に降ろして、桜を両手に抱えた。

「そうだ。ついでに監督役の神父に、あなたの結界で学校に被害が出たことを報告してくれるかしら。あたし、あいつにこんなこと報告したくないし・・・これくらいのパナルティは甘んじて受け入れて頂戴ね」

凜が、意地の悪い笑みを浮かべながら言った。

「・・・承知しました」

そう答えるしかない。

凜は頷き、アーチャーと二人でそのまま校舎に向かおうとした。

「オレも遠坂達と一緒に行くぞ」

士郎が二人を追おうとする。

「衛宮君は無理しなくていいわよ。結構ライダーにやられたんでしよう？ だいたいあなた治療の魔術とかできるの？」

「あ・・・いや、できない・・・」

「でしょ？ 私達は先に行くわ。どうしても言うなら、回復したら後から来なさい。搬送とかで人手が必要になるかもしれないから。さしあたり、今は若いお二人の時間をお楽しみなさい」

おかしな口調で妙なセリフを言い残した凜は、アーチャーを伴って今度こそ走り去った。

「仕方ない。とりあえずキャストと合流するか・・・」

置き去りにされた形の士郎は、私のほうを見ようとせず独り言のように呟いた。

「士郎」

「は、はい。なんででしょう？」

士郎は相変わらずこちらを見ずに、おかしな口調で返してきた。

「まずは謝罪させてください。あなたをかなり痛めつけてしまいました」

「それは仕方ないって。慎二の命令だったんだから。だいぶ手加減してもらったし。オレの思惑どおり演技にも付き合ってくれたわけだ

し」

凜達の乱入により、結果的にうまくはいかなかったが。

「最後の一撃の時は完全に私の不注意でした。あなたを痛めつける時間を早く終わらせたくて・・・」

「あー・・・えー・・・そういうことだったのか」

士郎の顔がどんだん反対方向に向いていく。

「そして、庇ってもらってありがとうございます。また、あなたに救われました」

「あいや・・・あの時はオレもよくわかんなくて・・・そ・・・そう言えば傷。ライダーが自分で刺した傷は大丈夫なのか？」

「はい。霊核に影響するようなものではありませんので」

「そ、そうか。やっぱりサーヴァントってすごいんだな」

「士郎・・・」

私はもう一度呼びかけるが、ふと両手に抱えている桜を見て、我に帰る。

私は一体、今、何を言おうとしていたのか。

「今回の件はお礼を言いましたが、このようなことは今回限りにしてください。あなたが無茶をすればするだけ悲しむ人間もいます」

桜のサーヴァントとして、伝えるべき言葉を口にする。

「わかった。努力する」

「お願いします」

「だから、力をつけてなるべく無茶にならないようにライダーを守る」

「ついさつきまで赤面してこちらを向けなかった少年が、今は私の目を直視していた。」

「・・・な・・・?」

この少年に呆然とさせられるのは、もう数えるのも難しくなってきた。

ただの子どもの屁理屈だ。

そうわかっている、なお・・・

その真っ直ぐな気持ちのなんと心地良いことだろう。

「・・・そ・・・それでは、私はこれで失礼します」

私はおかしくなってしまったのだろうか。

昨日の段階では、まだ私は余裕があるつもりでいた。

しかし……

とにかく、今、この場に留まるのは極めて危うい。

私は、降ろしていた慎二を改めて抱え上げ、逃げるようにしてこの場を立ち去った。

第14話 6日目② 「躍動する槍兵」

Interlude in

彼女は少年からの電話を受けて、即座に行動を開始した。

必要になるであろう最低限の道具を持って居候している家を出る。

「油断したわ」

正直、油断があつた。

この日、衛宮士郎の仮の守り手であるライダーが不在であつたため、彼に対しては忠告と道具を授けた。

一方で、本来自身を守るべき葛木宗一郎に及ぶ害をやや軽視していたかもしれない。

日中の学校。

学内のマスターは遠坂凜のみ。

基本的には一般人に過ぎない葛木に対して、彼女が害を及ぼす可能性は皆無だ。

考慮の外にいたのは、ライダーのマスターだった間桐慎二だ。彼の存在は柳洞寺にいた時から把握していたうえ、衛宮士郎からも一通りの話を聞いていた。しかし、一旦、マスターとしての権利を失つていたことで、脱落したものと思ひ込んでしまった。

衛宮士郎の話は、その間桐慎二が罫を仕掛けてきたことと、学校に結界が張られていることを示唆するものだった。

ライダーの真名は既に察しが付いている。

美しい髪を持ち、天馬を使役する魔眼の保有者。自分と同じく、古代ギリシヤを起源とする怪物「メドゥーサ」に他ならない。

彼女の結界は、魔力を吸いあげるものだろう。

「例えマスターに命じられたところで、あの女が坊やに害をなすような行為を簡単にするとは思えないのだけれど」

一日しか観察していないが、ライダーが単にマスターの命令による義務として、少年を守っているわけではないことなど態度を見れば丸わかりだった。

「まあ、強制的に言うことを聞かせる手段なんていくらでもあるわよね」

足を強化して彼女は穂群原学園に急いだ。

本当は空中を浮遊して移動したかったのだが、人目に付きすぎらうえ、魔力はなるべく温存したかった。

柳洞寺に貯めこんでいた魔力を失った今の彼女には、魔力のマネジメントは死活問題だった。

「宗一郎様。どうぞご無事で・・・」

今はできる範囲で急ぐしかなかった。

学校に着くと、校庭の大半が発動した結界に覆われているのがすぐにわかった。

結界の性質は、ほぼ想定したとおりのものだ。

発動者であるライダーを探すよりも、ポイントになっている呪刻を解除するほうが早いだろう。

「あつたわ」

魔力の流れを感知しながら結界の外縁部を辿っていくと、程なくしてそれは見つかった。

持ってきた符を被せて、刻印の効果を中和する魔術を発動させると、その呪刻は忽ち効力を失っていく。

——スウ——

さらにその呪刻を基点として、結界の隅々に網を伝っていくように光が広がった。すると赤く濁っていた結界内の色彩が薄れ、空は元通りの澄み渡った色を取り戻した。

「これくらいであれば、少なくとも命に別状はない筈ね」

青くなつた空を見上げながら、キャスターは自身を落ち着かせるように呟いて校内に向かうことにした。

正面玄関に倒れている生徒たちを横目に、職員室を目指して廊下を進むと、視界の先に探していた人物、即ち葛木宗一郎が倒れていた。

「宗一郎様！」

堪らずに小さく叫んで、駆け寄る。

状態を確認すると、予想どおり多少生命力を吸われて衰弱しているものの、問題ない状態であることがわかった。

治癒の魔術を使うと、程なくして彼の目が開いた。

「・・・キヤスターか？私はどうしたのだ？」

「宗一郎様。ご無事で良かったです」

大きな安堵を覚えながら、心情を吐露する。

「問題ない。お前にまた手間をかけさせてしまったようだな」

葛木は倒れていた体を手を使つて起こし、ゆつくりと立ち上がった。

「そんなことは・・・」

「!?キヤスター!!」

突然、緊迫した声で叫ぶと同時に、葛木がキヤスターを背後に庇うように体の位置を入れ替えた。

「・・・これはまた随分と久しぶりだな」

玄関方向からゆつくりと歩いてくるのは、赫い長槍をダラリと手に下げた青い服の男だった。

「ちよつと派手な結界が張られたもんで、様子を見に来てみれば・・・あれはアンタの仕業かい？キヤスターさんよ」

「・・・ランサー・・・なんてこと・・・」

現れたのはキヤスターが葛木と出会うきっかけを作ったサーヴァントだった。

彼女はこの男に襲撃されて、瀕死の状態にまで追い込まれ、危ういところを葛木に助けられた。

先ほどまで、張られていたライダーの結界はかなり悪質で目立つものだ。このサーヴァントを引き寄せることになったのかもしれない。

「そんな感じじゃねえな。あんたならもつとマシなモノを作る気がするな」

「わかっているじゃない。私があれを解除したのよ」

「そうか・・・」

聞いたランサーは無感動に呟いた。

「まあ、それはそれ、これはこれだよなあ」

ランサーの声が剣呑なものに変わり、目は寧猛な光を帯びた。

「サーヴァント同士がここで遭遇しちまったんだ。幸い今回は七面倒くさい縛りもない。やり合わない道理はないよな」

ランサーの目が爛々と輝く。

ギラギラした殺気、というより熱気が周囲に充満していく。

戦いの高揚感に沸く戦士のものだ。

これまで強制的に抑制されてきた闘気を存分に解放できる機会にランサーは奮えていた。

対峙するキャスターは、戦いが避けられないことを悟る。

この手の男は生前散々見てきた。

この熱はどこかで発散しなければ治まらないものだ。

「宗一郎様。お逃げください。あれの狙いは私だけです」

無駄だとわかっていても、自身のマスターに逃亡を促す。

「それはできません、キャスター。お前が死んで、私のみが生き残ることに意味はない」

予想どおり葛木はあっさり拒んだ。

その言葉は身震いするほど嬉しいが、浸れる状況ではない。この場で即座に自害することも考えたが、その後で葛木がランサーと戦う場面が目に見えかぶ。

結局は葛木も自分の後を追うことになるだろう。

「キャスター。私に強化の魔術を」

止む無くその言葉に従って、葛木の両手、両足に強化の魔術を付与する。

彼女自身の魔力の貯蔵は心許ない。対魔力を持つランサー相手に、有効な攻撃は殆どできない状態だった。

希望は衛宮士郎とその近くにいる筈の遠坂凜だ。

キャスターは、密かにローブの内側で手にした符を破る。

「早く来てちょうだい。坊や」

キャスターは祈るように呟いた。

「キャスター。下がって支援に徹しろ」

葛木が一步前に出て、構える。

「これは・・・面白そうじゃねえか。あんたは魔術師じゃないみたいだが、オレとやり合う気だな。しかも、かなりの使い手と見た」

ランサーが笑みを浮かべる。

「正直、キヤスター相手じゃちよつと盛り上がりには欠けるかと思っただが、あるいはあんたなら・・・」

これまでは片手にぶら下げていた槍をランサーが両手に構える。

そして、一気に葛木の元へと間合いを詰める。

「楽しめそうだ!」

「そんな余裕は与えん」

高速でランサーが突き出した槍は、一直線に敵の腹目掛けて襲いかかる。正面に立つ相手には、なにが起きてるのか把握することも難しいほどだ。

だから葛木はランサーの槍ではなく、体の流れのみを見て動き、初撃を躲しながら懐へ入ろうとする。

ランサーはその動きを予想しており、槍を引くのではなくそのまま薙ぎ払う。

ガッツ!

だが、その槍は葛木の繰り出した拳と衝突して弾かれた。

「なにっ!?!」

葛木は、拳を当てることで槍を弾くという離れ技によりランサーの動きを止めると、さらに間合いを詰める。

突き出す腕はランサーの肩口を狙ったものだった。

先ずは、腕を壊す狙い。

そう判断して、ランサーは半身を捻ってその打突をやり過ごそうとした。

しかし、葛木の腕は途中で軌道を変え、一気にランサーの喉元を抉りに来た。

ジャツ!

ランサーは殆ど勘だけで、捻った体をそのまま加速させることで、葛木が伸ばしてきた手による直撃を辛うじて免れた。

シユウウウ——

しかし、完全には回避できていなかった。

致命的な一撃までには至らなかったものの、葛木の手はランサーの首の一部を剥ぎ取っており、ランサーの首元からは夥しい血が滴り落ちた。

「があああつー！」

ランサーは体を捻った勢いで、そのまま廊下を転がった。

これで葛木との間合いが大きく開く結果となった。

「宗一郎様！さすがですわ！」

ドンツ！ドンツ！

キヤスターがランサーに光弾を放って、追撃する。

ランサーはさらに地面を転がりながら、その攻撃を何とか躲した。

「はあつー！」

葛木も追い打ちをかけるが、これは却って単調な動きになったため、槍で迎撃して、ランサーは何とか間合いを広げることができた。

「いやあ……こりや本当にすげえ。凄まじい攻撃だったぜ。オレかセイバーじゃなければ一撃で終わってたんじゃねえか？」

首からの流血を意に介さず、ランサーは楽しげに笑う。

「攻撃が読めなかった。あんな動きは初めてだぜ」

「できれば、退いて欲しいのだけれど」

「莫迦言うな。こんなおもしろえ状況楽しまなくちゃ損だろうが」

全く、この類の男ときたら本当に処置なしだ。

戦うこと自体が目的化してしまっている。なぜ、こちらが相手の価値観に付き合わなくてはいけないのか。

キヤスターは陰鬱な気分になった。

「私達には何の得にもならないわ」

だが、こうやってランサーとの会話の時間を引き延ばすことには意味がある。

衛宮士郎達が合流する時間を稼げるだけ稼ぎたい。

「あなたのマスターは何を考えているの？各陣営の戦力を冷静に探るような真似をしていたかと思えば、こんな日中に無秩序に戦いを始め

るだなんて」

「あいつの考えなんて正直知りたくもないが、今回はさっきの結界を張った奴が標的だった。だが、オレとしては、折角暴れられる機会を無駄にしたくなくてな」

「とんだとばつちりじゃない・・・」

キャスターの悪態を聞き流し、ランサーが今度は一気に間合いを詰めることはせずに、ゆっくりと歩み寄ってくる。

背後にいるキャスターを守る葛木としては、下がるわけにもいかないが、先程のようにランサーが前に出てくる勢いを活かして中に入り込むことも難しい状態だった。

「はっー」

ほぼ止まった状態から最小限の動きで、ランサーが槍を突き出す。

葛木はそれを躲すが、ランサーの引きが早く中には入り込めない。

二撃目、三撃目、四撃目・・・、

連続で小さく繰り出される槍をその場でかわし切ることは難しく、

葛木はじりじりと下がらざるを得ない。

キャスターも葛木に合わせて後退する。

少しずつ槍が葛木の体に当り始めた。

「く・・・」

「宗一郎様！」

戦い方を変えてきた相手に対して、迎え撃つ葛木の不利を悟ったキャスターが悲鳴を上げる。

Interlude out

Et urn

ライダーが桜と慎二を抱えて去って行くのとほぼ同時に、ポケットの中が熱くなるのを感じた。

何事かと思ひポケットの中に手を入れると、キャスターに渡された符が熱を帯びているのがわかった。何かあったら、この符を破るよ

うにと言われて渡されたものだ。キャスターが同じ物を破ったと考
えるべきだ。

触れるとキャスターのいる場所が頭に流れ込んできた。

職員室近くの廊下だ。

結界を解いた後、彼女は真つ先に葛木の様子を確認しに行つたに違
いない。

「葛木の身に何かあつたのか？」

とにかく急がなくては。

単なる治療目的であれば、自分は役に立たない。

柳洞寺では葛木が裂傷を負つたから応急処置が役に立ったが、今回
の結界騒動は外傷が発生する事態ではない。

それなのに、オレに合図を送つてきたという事は、治療以外でオレ
を必要としているという事だ。

出てきた裏玄関から校舎に入る。

すぐ近くに階段があるため、遠坂達は先に2年生の教室がある2階
に上がったかもしれない。

階段を横目を通り過ぎて、職員室方向に向かうとすぐに状況がわ
かった。

「あれは・・・ランサー・・・」

既に二度見ている。

赫い槍に青い服。その槍捌き。後ろ姿だけだが、間違いなかった。

しかし、驚嘆すべきはランサーと対峙している男だった。

ランサーの槍を紙一重でかわし、素手で受け、あるいは流したりし
て対抗している。押されてはいるが、一撃で殺されないだけでも瞠目
に値するのだ。

その上、ランサーのほうが大きな傷を負っているのがわかった。

ランサーは首から出血している。

「葛木って、ほんと色んな意味で只者じゃないな・・・」

とは言え感嘆している場合ではなく、状況は切迫している。
そう長くはもたないことは明らかだ。

ポケットに入れた宝石を握り魔力を通す。

これで遠坂はすぐにも駆けつけてくれる筈だ。

「投影、開始」

両手に電流のようなものが伝わる感触を覚える。

気付けば、左手に黒い剣、右手には白い剣が作り出されていた。

「ぐ……」

今日2回目の投影はそれなりに体に応えるが、先ほどよりはスムーズにできた気がする。

二振りの剣は重過ぎず、軽過ぎず。

程よい存在感が不思議と手に馴染む。

ザッ！

投影が終わると、オレはランサー達のいる方へと駆け出した。

先ずキャスターがオレの存在に気付いた。

葛木は向きとしてはこちらを向いているが、ランサーと戦っているため、こちらに意識は向けられない。

背中を見せているランサーが気付いているかはわからないが、このまま背後から斬らせてもらえるような相手ではないだろう。

「まだ気付くなよ」

こちらとしては、ギリギリのタイミングで気付いてもらいたい、オレに意識を割かれた瞬間に、葛木が攻撃するのがベストだろう。

オレの剣術でランサーに大きなダメージを与えるのは難しい。これまでの戦いぶりから見ても、葛木のほうがオレより強いことは間違いないかった。

「宗一郎様！援護しますー！」

ドドンッ！

キャスターが光弾を放って、ランサーを牽制する。少しでも自分に注意を向けさせ、オレの存在を隠す意図だろう。

「はーどうした？その中途半端な攻撃は？」

ランサーは躲す事すらせず、当たるに任せたが無傷のようだった。

そうこうしているうちに、オレからランサーまでの距離はあと10歩。

いいところまで来られた！

「ランサー!!」

敢えて叫ぶことでこちらの存在を強調しながら、一気に間合いを詰める。

迎え撃ってくる筈のランサーの初撃を何とか抑えるつもりだった。

「へっ、残念だったな。坊主」

ザッ!

ランサーはこちらに背を向けた状態からバク宙のように大きく跳躍して、廊下の天井に足を付く。

「なっ?」

一瞬制止した時間の中で、天井のランサーと目があつた。

ヤツは笑っている。

とつくにオレの存在は気付かれていたのだ。

「それにしても!」

言いながら、反動を付けてこちらに槍を構えて突っ込んでくる。

オレは受けきれないと瞬間的に判断し、何も考えず大きく前方に転がる。

ダンッ!

ランサーは、こちらが躲す事も折り込み済だったのかもしれない。

そのまま、事も無げに着地してこちらを振り向いた。

オレも立ち上がる。

結果的に、ランサーはオレと葛木の二人と対峙する形になった。

「いや、驚かされることばかりだ」

ランサーはオレの手にある剣に目をやりながら言った。

「男子、三日会わざれば刮目して見ろ……ってか。どうやって手に入れたかわからねえが、そいつはアーチャーの剣じゃねえか。あいつを倒したってわけじゃねえよな?」

「そういうことにしといてくれ」

ここは、時間を稼ぎたい。

ヤツの軽口に敢えて乗る。

「ふん……言うじゃねえか。だが、あいつのそれもお前のそれも、な

んつうか本物じゃねえ感じなんだよな。魔術で編んだ造作物か」

魔術にも造詣があるのだろうか。ランサーの見解はかなり正解に近い。

「あんたのマスターは誰だ？」

敢えて直球で聞いてみた。

「ま、いけ好かねえヤツだ」

無回答で返ってくるかと思ったが、ほんの僅かだが情報があつた。

ランサーはオレと会話を続けたいのかもしれない

「なら、あんたはなぜ付き従う。何を目的にしているんだ？」

「は。好かないってのは、戦士が主に従わない理由にはなり得ねえよ。それじゃあ戦争は成り立たねえだろうが。発想が甘えんだよ」

少し癪に障ってしまったようだが、これも笑ってあつさり答えた。さすがに英雄として名を馳せた男だ。

歴戦の戦士として確たる芯があるということを実感させられる。

「ま、何にせよ、折角、古今東西の強者どもと会う機会を得たんだ。思う存分戦いたいわけだ。オレは、今までそういう生き方をしてきた」
『竹を割ったような』とはこういう男を指すのだろう。爽快だ。

だが、それだけにこの男が決めたことは、他者では絶対に変えられないということが伝わってきた。

「それにしても、セイバーがやられちまったのは残念だ。この前は一方的にやられたが、次はこっちも万全の状態で戦いたかったのにな」
「既にセイバーがいないことを知っているんだな」

「まあな。癪だが、情報収集がオレに与えられている基本的な仕事だからな。だが、坊主。お前はセイバーを失っても、聖杯戦争に参加し続けているわけだな？」

「ああ」

「大したもんだ。しかもあん時とはまるで別人だ。いや、あん時だった大したもんだったが、今は魔力量も上がってるみてえだな」

「いい先生がいるもんでな」

ちらつと後ろのキャスターに目をやる。

「なるほどな。坊主が何でキャスターと手を組むことになったかも興

味があるが……おっと、やっと来たな」

目線を僅かにずらして、オレと葛木の後方を確認したランサーはニヤリと笑った。

「え？」

一瞬オレは何のことだかわからなかったが、その答えはすぐにやって来た。

「衛宮君！」

遠坂の声がオレの後ろから聞こえてきたのだ。

「ごめんなさい。遅くなったわ。だけど、何とか無事みたいね」

廊下の奥からやってきた遠坂とアーチャーが隣に並んだ。

「ランサー相手に持ちこたえていたのか？」

アーチャーが感心するように問いかけてきた。

「いや、持ちこたえていたのは葛木だ。オレは来たばかりだし、役に立っていない」

「それは違う。衛宮が来なければ、私は終わっていた」

いつもどおりの冷静な口調で葛木がオレの言葉を否定した。

態度からはわかりにくいだが、葛木は確かにだいぶ疲弊しているようだ。傷はキャスターが全て塞いでいたが、疲労は別なのだろう。

「真打ち登場ってわけだな。待ってたぜ、アーチャー」

「光栄だな。クー・フリーン。アイルランドの大英雄に私は認められたということかな？」

「あたりめえだ。お前が使ったあの盾は、トロイア戦争でギリシアの英雄アイアスが使ったとされるものの筈だ。お前自身がアイアスとは思えないが、その縁者か、あるいはトロイア戦争に関与した英雄と見た」

「なるほど。合理的だ」

「その態度は気に食わねえが……あの剣技といい、存分に戦う相手として不足はない」

「だが、残念ながらキミ達が持つ英雄の矜持など私は持ち合わせてはいない。勝つために最善の策を採らせてもらうぞ」

「それは、構わんさ。こっちの都合を押し付ける気は毛頭ない」

現状、5対1。

まあ、オレが頭数に入るかわからないが、ランサーとしては明らかに不利なように思われた。

だが、ランサーはこのまま戦う気のようにだ。

この前、セイバーから逃げた時のことを考えると、ヤツが一番速いのだから、離脱することは容易な筈なのにだ。

「でも、地の利は向こうにあるわね」

オレの考えを見透かしたように遠坂が言った。

そう。ここは広くはない廊下。

ところどころに倒れている生徒はいるし、職員室には多くの教師も倒れている。

飛び道具や派手な魔術は使い辛い。

加えてこちらが多勢であることも活かし辛いため、少人数での白兵戦になりやすい。その場合、ランサーに押し切られる可能性が高い。

何より、ここからは、奴も先程までとは違って、死力を尽くしてくるだろう。

「さて、ここからは全力で殺りにいくぜ」

オレの考えを肯定するように、ランサーの闘気が膨れ上がる。

「凜、それに、衛宮士郎、葛木、キャスター。私抜きで30秒耐えてくれ」

アーチャーが囁くような小声で、オレ達に伝えてきた。

「え?」

「わかったわ。やるわよ衛宮君」

遠坂は躊躇なく言った。

「承知した」

葛木も瞬時に決断した。

オレも覚悟を決めた。

そして、死闘が始まった。

「I am the bone of my sword

」(体は剣で出来ている)

突如としてアーチャーの詠唱が始まった。

魔術を使うのか？

一瞬、疑問が頭を掠めたが、その思考に没頭できる余裕などない。戦端は開かれていた。

「キャスター。頼む」

「はい！」

キャスターは、一時解いていた葛木への強化を再度付与する。

「吹き飛ばせ！」

遠坂が二つの宝石をランサーに向けて投げる。

「――Steel is my body, and fire is my blood――」(血潮は鉄で、心は硝子)

「お生憎様！」

ランサーは飛んできた遠坂の宝石に対して、空中に何かを描くことで対処した。遠坂の宝石は何も効果を発揮することなく、その場に落ちてしまった。

「まさかルーン!?!」

「そういうこった！」

ランサーは余裕の笑みを浮かべた。

「――I have created over a thousand blades――」(幾たびの戦場を越えて不敗)

「充分だ」

だが、その一呼吸のうちに間合いを詰めた葛木が仕掛け、先手を取った。

自身の体勢を可能な限り低く屈みこむようにして、ランサーの足目掛けて蹴りを突き出すような動きをした。

「Unknown to Death——」(ただの一度も敗走はなく)

「ちいつー！」

ランサーはその蹴りを跳んで躲しながら、槍を繰り出すつもりだったのだろう。

「Nor known to Life——」(ただの一度も理解されない)

しかし、葛木の動きは違った。

蹴り出すかに見えた足をそのまま地面に立てて、ランサーの首目掛けて手刀を突き出す。

「ぐっつー！」

だが、ランサーは自身の槍を引き戻してその中心で葛木の攻撃を食い止めた。それだけでなく、止めた部分を支点にするように、槍を上から振り下ろす。

「っー！」

葛木はその動きを察知して、敢えて退かず、前への勢いのまま、走り抜けようとしたが、弧を描いたランサーの槍は葛木の背中を斬り裂いた。

葛木が声もなく、倒れる。

「Have withstood pain to create many weapons——」(彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う)

「止まちなさい！ランサーー！」

「爆ぜろー！」

ランサーに追い打ちを掛けさせるわけにはいかない。

瞬時に判断したキャスターと遠坂が魔術で攻撃する。

オレも双剣を手にランサーに斬りかかる。

再び二人の魔術は、ランサーの振った手により無効化されてしまった。

だが、その僅かな行動はオレに攻撃する時間を与えてくれる。

一方で、キャスターは葛木に治癒魔術を施す。

ガンツ!!

オレは、先ず正面から右手の白剣を振り下ろした。僅かに遅れて、左手の黒剣を横から薙ぐ。

ガガツ!

いずれもランサーの流れるようなランサーの槍に弾き飛ばされる。それで構わない。これで決まるとは思っていない。

「——Yet, those hands will never hold anything——」(故に、その生涯に意味はなく)

再び今度は白剣を横から薙ぐ。

だが、これはもはやランサーは受けてすらくれなかった。

「初めから弾かれることを意識してちゃあ、牽制にもならねえぜ!」
僅かに下がって、オレの剣を躲したランサーは、そのまま槍を繰り出してくる。

攻撃の直後だったため、体勢を立て直し切れていなかったオレは、左手の黒剣で辛うじて槍に当たたがとても勢いを殺し切れなかった。

「があああっ!!」

ランサーの槍が深くオレの右胸と肩の付け根あたりに突き刺さった。

「——So as I pray, ——」(その体はきつと)

のたうち回りたい程の痛みが全身を駆け巡る。

だが、そんなことをすればお終いだ。

ランサーはオレの体から槍を引き抜き、次の一撃を繰り出してく

る。

これをもう一度左手の黒剣で弾こうとするが、やはり叶わず槍は鳩尾に突き刺さった。

「ぐああああああああああああつ!!!」

焼けるような痛みが腹を滅茶苦茶にかき回す。

オレは、膝をつきそうになるのを必死に堪えた。

だが、ランサーが容赦なくオレに止めを刺そうとしたその時、

「UNLIMITED BLADE WORKS!」

その声とともに・・・

世界が突然切り替わった。

「なんだと?」

「なんだ?」

ランサーと葛木が訝りの声を出す。

オレもさっぱり状況はわからないが、痛みで飛んでいきそうになる意識を手放さないことのほうに必死だった。

「これってまさか・・・」

遠坂は何かがわかつているようだ。

辺り一面は、焼け野原になっていた。

周囲の景色は夕焼けに染まったように緋い。

最も異様だったのは空に大きな歯車がいくつも浮かんでおり、それらはゆっくりと回転していた。

離れた位置にある小高い丘には、アーチャーが佇んでおり、その周囲には無数の剣が突き立っていた。オレ達は概ね元の位置関係で、この異様な世界に放り出されていた。

「・・・固有結界・・・」

キャスターがはつきりと口にした。

こゆうけっかい?

聞いたことのない言葉だった。

「じゃあ、アーチャー……あなたは……」

「……魔術師なのね」

「ふ……さてな」

アーチャーはあくまでもはぐらかす。

「ここからは一気に閉幕へ向かうぞ。ランサー」

「はっ。本当にお前はわけがわからねえな。だが！」

ランサーの顔には歓喜の笑みが浮かんでいた。

この不可解な状況に放り込まれても、なお、泰然としている。

「最高に面白いぜ!!!」

ランサーから感じられる闘気と魔力が瞬時にして最高潮に達する。

これは、校庭で宝具を使った時と同じか、それ以上だ。

「その心臓、打ち抜かせて貰うぜ!!!」

ランサーとアーチャーの距離はかなりある。

一息で接近できるような間合いではないが、ランサーは駆け出す。

そして大きく跳躍すると、片手で槍を肩に乗せるようにして構えた。

校庭で見たあの宝具だ。

だが、あの時よりも魔力が収斂されているのがわかる。

「――突き穿つ――」

大きく、後ろに槍を引く。

アーチャー目掛けて空中から投擲するつもりだ。

だが。

アーチャーの周囲にはいつの間にか無数の剣が出現していた。

「え？」

あれは、全部宝具だ。

信じられなかった。

そして、それらは既に次々と射出されつつあり、空中のランサー目

掛けて殺到していた。

「――死翔のツ!!?」

ランサーの宝具が発動する寸前に。

数多の刀剣がその体をズタズタに斬り裂き、刺し貫いた。

「がはあつつつ!」

ランサーの体が受け身も取れずに、重力のままに落下する。

無数の武器のうち、幾らかはランサーは本能的に躲けていたようだが、それでも二桁近い数がランサーに届いていた。

「・・・ぐ・・・ちつくしよ・・・なんだそりゃあ?」

全身を斬り刻まれ、突き刺され、血まみれになって、片足がもがれている状態ながらもランサーは投じることのできなかつた槍にしがみついて立ち上がり、口を開いた。

とんでもないタフさだった。

だが、既に死に体だ。

いくらサーヴァントでも助からない。

「・・・叔父貴のカラドボルグもありやがった・・・何でテメエがそれを持って・・・?」

「私も本来なら、今際の際にいる戦士に対して答えてやりたいところだが・・・すまん。キミのマスターが聞いているかもしれない以上は答えられん」

「・・・ああ、そりゃそうだよな。本当に知りたいだけで他意はなかつたんだがな・・・」

「わかっているさ。私からも最後に聞かせてもらいたい」

「・・・好きにしま」

「なぜ、逃げなかつた? キミは決して不利な戦いを好むわけではない筈だ。勝てる戦の機会を得られるまで、足掻いて、生きようとする戦士だ。壮烈な死を求める騎士とは違うだろう」

「は。勝てると思った。ただ、それだけだ」

「そうか。ならば、単なる判断ミスということだな」

「そのとおりさ」

二人の会話が途切れる。

いつの間にか世界は元通りになっており、オレ達は学校の廊下になっていた。

「・・・行ってくれねえか? クー・フリーンは最期まで立ってなきやなんねえんだ。つまり他のヤツに見られている限り、座り込むこともできねえんだよ」

血塗れの顔で、ランサーは凄烈な笑みを浮かべた。

「ちったあ気を使えや」

「それくらいは了解しよう」

アーチャーが頷いた。

ランサーは既に霊核を砕かれて、消滅を待つだけなのは明らかだった。

「外に出ましよう」

遠坂もランサーの最後の意思を尊重した。

オレ達5人は無言で、その場を立ち去った。

正面玄関を出る時に、我慢できずに振り返る。

アイルランドの大英雄は先程までと全く変わらず、辛うじて、しかし雄々しくその場に立ち続けていた。

Interlude in

「・・・行きやがったか」

既に目が霞んでいた。

自分の体が極めて頑丈なことは知っているが、さすがにどうしようもないこともわかっていた。

回復の見込みがないのだから、むしろキツイ時間が長くなるのは損なだけだった。

「全くついてねえ・・・いや・・・そうでもないか・・・」

マスターには恵まれなかったというほどではない。

特に最初のマスターは手が掛かって面倒だったが、それ故の良さもあった。

その彼女を守れなかったのだから、いけ好かないマスターに変わってしまったのは、自分の落ち度でもあった。

「それにしてもアーチャー・・・あいつは一体・・・」

正直、これは心残りだった。

自分を殺した相手の名前がわからないというのは、思いのほか堪えるものだ。

だが、答えを得るための材料はある気がした。

そう・・・あの少年もまた、アーチャーと同じ武器を作り出して見せた。そして、あの緋い世界で、アーチャーは幾つもの武器を作り出した。

あれは、アーチャー自身の物ではないのではないか。

複製？

「まさか・・・そういうことなのか・・・」

答えらしきものが見えて、少しだけ満足できた。

「坊主・・・おめえは・・・」

と呟いたところで、殆ど役に立たなくなった目に、突如として奇妙なものが映りこんだ。

ただひたすら黒い何かだった。

「お迎えが来たみたいだな・・・」

アーチャーの最後の質問に対する答えは嘘ではなかった。しかし、全てを語ってもいなかった。

有利か不利かと言えば、先ほどの戦いが不利であることは百も承知していた。

しかし、最も良い選択をしたという自信もあった。

つまり、これ以降はこれ以下しかないという確信だ。

直感に過ぎなかったが、最良の選択はここで戦うことだと感じたのだ。

なぜなら、この後、この戦いを続けたとしても・・・

「ロクでもないことしか、起きない気がするんだよな・・・」

そしてその黒いモノに塗り潰されていく途中で、ランサーのサーヴァント、「クー・フーリン」は消えてなくなつた。

Interlude out

第15話 〳6日目③〳 「監督役の務め」

R t u r n

ギイ・・・

冬木教会の扉を開ける。

この教会の中にまで入るのは初めてだった。

開戦前に街の様子を確認していた時には、一周りして外観を把握する程度に留まったからだ。基本的にこの教会の敷地内での戦闘は禁じられているので、それで充分と判断していた。

既に桜は衛宮邸に連れて行っており、慎二をここに託した後は、学校に戻って士郎の様子を確認するつもりだった。先刻のやり取りを思い出すと面映いが、だいぶ時間も経過した。なんとか平静を保って士郎と接することができらう。

「なかなか興味深い訪問者だな。サーヴァントが己がマスターをこの教会に避難させに来るとは」

礼拝堂の高い天井に木霊する神父の声は、この場とその役割に相応しい荘厳さに満ちていた。

「話は二つだけですが、先ず要求を一つ。この間桐慎二を匿っていただきたいのです」

監督役である神父に余計な事を喋るつもりはなかった。

簡潔にこちらの要件だけを伝える。

「一応確認するが、キミはその少年のサーヴァントではないのかね？
その場合、キミが残っているのに彼が離脱するのは不可解なのだが」
どこまで話していいか悩むところではあるが、神父の言い分はもつともだ。目的を果たすためには、ある程度の情報を与えなくてはならないだろう。

「彼は私の代理マスターでした。しかし、その資格を失ったためここに連れて来たのです」

「なるほど。では、今は一般人ということだな。それでいて、命を狙われる理由があるとなれば断る理由はない」

「お願いします」

「ただし、彼自身が再度この戦いに身を投じる意思があれば、それは尊重せざるを得ない。その点は含んでおきたまえ」

「それは止むを得ないことです」

拒否することはできない話だった。

「実際に彼は一度同様の状況で、ここに保護を求めてきた。しかし、昨日、意を決して出て行ったのだ」

「そうでしたか」

やはり、慎二は私がセイバーに負かされた後もここに避難していたのだ。

そして、何らかの理由で士郎がセイバーを失ったことを知り、桜に強要して再度偽臣の書を手に入れ、私を従えた。

慎二に士郎がセイバーを失ったことを伝えたのも、この神父ではないか。そんな疑念も浮かんでくるが、推測の域を出ない。

第一、そんなことをする目的が思い浮かばない。

「さて、もう一つの話とは何かね？」

「はい。その・・・サーヴァントの張った結界により、穂群原学園でかなりの数の教師、生徒に被害が出ています。重症に至るようなものではない筈ですが・・・」

さすがに気まずいので、歯切れが悪くなってしまった。

「な・・・なんだと・・・」

鉄面皮だと思っていた神父の顔が若干青ざめたようだ。

「つい先日、柳洞寺でかなりの被害が出たばかりだというのに、今度は白昼の学校だと？」

少し震えている。

「・・・かなりの数の教師、生徒と言ったが、実際、何クラスくらいに被害が出たのかね？」

「・・・す・・・すいません。全校です」

気のせいかもしれないが、神父のこめかみからプチンという音が聞こえたような気がした。

「・・・下手人はわかっているのかね？」

士郎、桜・・・私はここで消えることになるかもしれませんが。
先立つ不孝をお許してください。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・私です」

消え入りそうになりそうな声で私は自白した。

「・・・・そうか・・・・」

沈黙。

「知つてのとおり、聖杯戦争の監督役を務めるということは、戦いに一定のルールを設け、運営することで無秩序な争いにならないよう進行するということ以外に、この戦争の秘匿に責務を負うということでもある。すなわち、聖杯戦争に関わる出来事で生じた一般社会への影響について、なるべく自然な形で処理し、隠さなければいけないということだ」

「・・・・はい・・・・知っています」

「言うは易し、行ふは難しの典型だ。いや、影響する一般人が単体または数える程度であれば、難しいことではない。記憶を消したり、傷の治療をしたりすれば良いのだからな。しかし、これほど大規模で、社会的に影響のある施設に被害が及ぶと途端に話は難しくなるのだ」

「・・・・ごめんなさい・・・・もうしません・・・・」

「いつそのこと、放置してしまおうか・・・・重傷者がいないというのであれば・・・・いや、意識を取り戻した教師が必ず警察に連絡するな・・・・集団食中毒・・・・落ち着け、そもそもまだ午前中だ。冬木市全域の地盤に毒性のガスが充満しており、いつそれが吹き出すかわからないということにしてはどうか・・・・ダメだ、地価が大暴落する・・・・」

「謎のカルト教団による連続毒ガス事件という事では如何でしょうか？」

このいたたまれない状況から脱したい一心で、私はそれっぽい筋立てを提案した。

「それだ！素晴らしい！これなら柳洞寺の昏睡事件や新都のガス漏れ事件にも結びつけられる！」

どうやら採用してもらえたようだ。

本当にこれで隠せるのかは謎だが・・・

しかし、神父はなんとか平静さを取り戻したようだった。

「すまなかつたな。そもそもこれは私の職務なのだというのに。問題のあまりの煩わしさに少々取り乱してしまったようだ」

「……いいえ。そもそも私のしてしまったことですから」

「いや、サーヴァントの所業は基本的にマスターの責任だ。キミに落ち度はない」

「お気遣い感謝します。それではこれで私は失礼します」

正直なところ、早くここから脱出したかった。

凜……恨みますよ……

「待ちたまえ」

出口に向かおうとしたところで、呼び止められてしまった。

さらなる説教を浴びせようというのだろうか。

それはそれで甘んじて受け入れなければいけない立場ではあるが。

「キミは今、極めて複雑な立場に置かれているようだな」

突然、神父はこちらの深奥に斬りこんできたような気がした。

いや、気のせいだ。

そもそも代理マスターの元で戦ってきたというだけでも、十分に複雑なのだ。その点から、類推しているに過ぎない筈だ。

私自身が今の立場に困惑しているからこそ、神父の一言が重く感じられたに過ぎない。

「何を言っているのですか？」

余計な情報を与えないように気を付ける必要がある。

それでいて、この神父の持っている情報を探りたかった。

「そもそもキミの出自からして数奇にして複雑だな。女神アテナの不興を買い、追放され、やがては怪物として討たれた女よ」

「!?」

「そんなキミが、英霊として召喚され、聖杯戦争などという血塗れの闘争に駆り出された挙句、ここでもまた数奇な運命を辿っている」

「あなたは一体……？」

思わず、そう問い掛けずにはいられなかった。

どこからどこまでこの神父は知っているのか。

「私は、興味を持っているのだ。怪物であるキミが、間桐家という魑魅魍魎の巢に放り込まれたにも拘わらず、本来なら敵であるはずの衛宮士郎というマスターにも密接に関与している。彼自身の目的からすれば、キミという存在は相容れないはずなのにだ」

神父の独白は続く。

なにを探ろうとしているのか。

いや、これはこの男の純粹な好奇心なのかもしれない。

「普通に考えれば破滅にしか至らない道程のように思われるが、そんなに単純でないのもまた人間だ。私はキミの矛盾に、そして衛宮士郎の行く末に惹かれる者だ。是非、またここを訪れて欲しい」

「失礼します」

私は、それ以上の会話は不要と判断し、今度こそ教会の重い扉を押し開けた。

この男は危険だ。しかし、ただの敵ではない。

彼が語った矛盾。

それは、あの神父自身が抱えているもののように感じた。

こんな一方的な話で、彼自身に利するものなど何もないのだから。

それにしても、

「私の敵とは一体何を指すのでしょうか・・・」

神父の言うとおり、私は矛盾だらけだ。

E t u r n

「それで話ってなんだ？遠坂」

ここは、遠坂邸のリビングだ。

屋敷の前を何度か通りかかったことはあったが、中に入るのは当然初めてだった。

かなりというか、滅茶苦茶緊張する。

アーチャーが壁際にもたれて腕を組んで立っているが、それも緊張する要因だった。先程はヤツのお陰で助かったが、一昨日は散々殺されそうになった相手だ。殆ど本能的に警戒してしまう。

遠坂邸は立派な洋館だが、その外観どおり中も完全に西洋風だった。

オレの目の前には遠坂が淹れてくれた紅茶が入った、高そうなティーカップが置かれていた。割ったら大変なので、慎重に飲むことにしよう。

「間桐家とライダーのことよ。それに、今後のことについてもね」

当然のことではあるが、授業は中止、学校は休校となった。

ランサーとの戦闘後、オレ達は校内の教師や生徒を一通り確認し、少し懸念のある者には念のため目を覚ました後に問題が起きない程度に、遠坂が処置をした。

ちなみに、ランサーにやられたオレの傷はキャスターが治療してくれている。

葛木は教師として事後対応のため学校に留まり、キャスターは葛木が心配なので、しばらく霊体化して学校に残るということだった。

キャスターと葛木を残して、オレが家に帰ろうとすると、遠坂から話があるので自分の家に来て欲しいと提案された。こちらとしても遠坂に話があったため、承諾して遠坂邸に初訪問となったわけである。

「私は、この前、ライダーの本当のマスターは間桐臓硯だろうって言ったわよね？」

「ああ。それが一番自然だ」

「衛宮君はそうだと思うだろうけど、私はもう一人の間桐家の人物が同じくらいの確率でライダーのマスターだと思ってる」

「つまり桜ということだな？」

「え？意外と驚かないのね？あなたは、この考えに至っていないか、あるいは無意識で避けているのかと思っただけ」

「いや、そうあって欲しくはないというのは確かだし、あまり考えたくはなかったけどな。その可能性はあるとは思っていたんだ」

「そう。相変わらず大したものね」

「遠坂の考えを聞きたいな。どうして、桜がマスターの可能性も高いと思っただんだ？」

オレは慎重に紅茶を口に含んだ。

「間桐臓硯がライダーにあなたを守れなんて命令するのは、不自然だからよ。アーチャーとの戦いでは、そのせいで一步間違えば、ライダー自身を失っていた。たとえ衛宮君に何らかの利用価値を見出していたとしても、そこまでするのは割に合わないわ」

「確かにそうだな」

「まあ、彼女自身の個人的な感情もあるのでしようけれど」

遠坂がにやりと笑う。

「だとすれば、純粋にマスターがあなたを守りたいと思っっているということでしょう。桜なら充分あり得るわ。あの子があなたに好意を持っていることも気付いているでしょう?」

「好意? まあ、仲のいい先輩というか家族に近い存在というか……それくらいには思ってくれていると嬉しいな」

遠坂の漠然とした質問に対して、オレは本心を伝えた。

「げ……そこはダメなのね。あなた」

遠坂がゲンナリとした顔をした。

オレ、変なこと言ったか?

「まあ、でも仕方ないか……意識のベクトルが他に向いちゃってるわけだしね」

「とにかく、遠坂の説はもつともだと思う。桜はいい子だ。親しい人間が聖杯戦争に巻き込まれたとなれば、できる限り守ろうとする可能性はある」

「う〜ん……」

遠坂は何故か眉間に皺を寄せて、目を瞑った。

簡単に言えば、困ったような顔になった。

「……あ……ちよつとあの子が不憫だけれど、好いた惚れたは他人が口挟めるようなことじゃないしね。マスターとサーヴァントが争うドロドロの三角関係とか、ほんと勘弁して欲しいわ……」

さつきから遠坂の独り言は理解不能だ。

いったいどうしてしまったのだろうか?

「一つ、疑問なんだが、それってつまり桜が魔術師だってことだよな?

オレは桜がマスターである可能性があるとは思っていても、限りなく低いと思っていたのは、桜が魔術師とは思えないからだ。1年半接してきたけど、そんな素振りが全く感じられなかった」

「まあ、必死で隠しているんでしょね。私も確証があるわけじゃないの。ただし、あなたが知らなくて、私が知っている事実が一つあるわ」

「何だ？」

「桜は間桐家に養子として入ったの。彼女の以前の姓は遠坂だった」
「え？」

完全に不意打ちだった。

「桜は魔道の血が廃れつつあった間桐家に魔道の血を残すために養子として入った。つまり、間違いなく魔術師としての素質が備わっているのよ」

いや、大事なのはそこじゃないだろう。

「つまり、桜は遠坂の・・・」

「そう。妹よ」

「桜もそのことは知っているのか？」

「知っているわ」

「だから、遠坂は桜のことに詳しくあったのか」

聞いてしまえば、合点がいく。

容姿も性格も全く違うが、そういう兄弟姉妹も少なくないだろう。

「ま、私たちが姉妹ってことは、他言無用よ。衛宮君だから教えたんだし」

「わかってるさ。決して他人に漏らしたりしない。とは言え、二人が接しているときに、オレとしてはどんな態度をとればいいのかは悩ましいな」

「私達の問題なのだから、余計な気を回さなくて大丈夫よ」

まあ、遠坂はそう言うだろうけどな。

「どこまでできるかはわからないが、了解した。普段どおりに接する。とにかく、桜がマスターである可能性も考慮して、桜やライダーと接すればいいってことだな？」

「そういうこと。要は心構えね。なんの備えもなく、不意打ちで桜がマスターでしたなんてことになったら、動揺するかと思ってるね」

「だけど、間桐臓硯がマスターという線も消えてはいないよな?」

「勿論よ」

「どんな人物か知っているのか?」

「私も詳しくは知らないけど、結構人望があるみたい。この辺では名士で通っているわ」

「オレも少しだけ話したけど、ちゃんとしたお爺さんって感じだったな。場合によっては、孫の友達を守るということもあるかもな」

電話で会話した時のことを思い出す。

「でも、慎二はあなたを殺そうとしていたわけだしね」

「あれは、慎二個人の暴走だろう」

「そうね。でも、間桐臓硯は生粋の魔術師として想定しておいたほうがいいわ。前々回の聖杯戦争には参戦している筈だし、前回も今回も代理とは言え、マスターを仕立ててきている。聖杯を欲しているのは間違いないわ」

「表の顔と裏の顔があるってことだな。そうすると、桜がマスターだとしても桜個人の意思が必ずしも尊重されるとは限らないな」

「そうね。いずれにせよ、桜とライダーの立場は常に不安定ということよ」

「そうだな・・・」

正直なところ、オレはライダーと敵対することなど想像もできないが、オレやライダー自身の思惑とは関係なく、今日のような事態が起こり得るということだ。

「それじゃ、衛宮君の話のほうを聞きましょうか?」

遠坂は、自分の話はお終いとばかりに、オレに話すことを促してきた。

「ああ。オレは、あの影を調べようと思っている」

オレは昨日キャスターに話した見解と、今後、オレがこの戦いに関与する目的を遠坂に伝えた。

「なるほどね。ただの偶然じゃなくて、あの影は聖杯戦争に関連していると考えたわけね」

遠坂はひとしきり考えていたが、やがて口を開いた。

「そうね。私もその考えには賛成よ。でも、私から話せることはそう多くはないかも。前回の聖杯戦争の時は別の町に移されていたし、参加していた綺礼とは折合いが悪くて殆どこの話題について話していないのよ」

「そうなのか・・・」

「ご免なさいね。私、聖杯にも聖杯戦争の背景にもあまり興味ないのよ」

なかなかの豪胆発言だった。

「すごく遠坂らしいセリフだな。人生最大の、命懸けのイベントだったのに」

「私、物にも名誉にも他人のことにもあまり興味ないもの。大事なものは自分が納得できるかだけよ」

ほんと、清々しいな。

「あ、でもお金は大事よ」

「・・・いきなり世知辛いな」

「魔術はお金がかかるのよ・・・それはさておき、聖杯戦争についてよね。もちろん、綺礼も間桐臓硯も私よりは詳しいでしょうけど、核心部分を一番知っているのは、イリヤスフィールでしょうね」

「バーサーカーのマスターか」

そして、オレの義理の妹でもある。

ここではその事は一旦伏せておくことにした。

「なぜイリヤスフィールなんだ？」

「アインツベルンのマスターだからよ。聖杯そのものを作ったのも、アインツベルンなの。彼らは千年も前から聖杯の完成を求め続けてきたのよ。遠坂も間桐も御三家と称しているけど、アインツベルンには及ばない」

「せ・・・千年・・・」

途方もない数字に圧倒される。

そんな長い時間、聖杯だけを求めてきたのか。

オレみたいなぼつと出が関与してもいいのだろうか、と改めて不安になってしまう。

「いきなり怖気づかないでよね。それでどうするの?」

「あ、ああ・・・そういうことなら、なるべく早くイリヤスフィールと話ししてみようと思う」

「あなた、彼女がどこにいるかわかっているの?それに、この前は思いつきり戦った相手じゃない。あの子、こつちを殺す気満々だったわよ」
「御三家というくらいだから、古くから縁があるんだろう?遠坂なら居場所を知ってるんじゃないか?」

「まあね。冬木ではアインツベルンは郊外の城に居を構えるの」

城、ですか・・・

また規格外な単語が出てくるな。

「遠いわよ」

「行くさ。日中であれば、あの子は仕掛けてこない気がするしな」

「曖昧ね」

「一応、考えもある」

「凜。キミはどうするつもりだ?」

これまでずっと黙っていたアーチャーが口を開いた。

「私?今回は衛宮君とは別に、アサシンのマスターを探ろうかと思っていたわ。今日、ランサーを倒したでしょ。マスターはわからず終いだっただけど、他にわからないのはアサシンだけじゃない」

「なるほど。キミらしい合理的な判断だ。だが、私は衛宮士郎とイリヤスフィールに会いに行こうと思っている」

「はあ!」

思いもかけない発言に、オレと遠坂の声がハモってしまった。

「あんたまたまたどういうつもり!?!」

「お前なんかと一緒に行くのはまっぴらご免だ!」

遠坂とオレの怒声が室内に響き渡る。

「凜。キミはあの影のことをどう思う?」

だが、こいつは動じない。

「そりゃあ厄介だなとは思うし、勿論どうにかしたいと思うわ。聖杯戦争どころじゃない気もする」

遠坂が顎に手を持っていて、深刻な表情になる。

「奇遇だな凜。私も同感だ」

「いやいや、そもそもあんたのせいなんだからね！衛宮君と同行しないのは、あんたを彼に近付けるのは避けたいと私が思っているからでもあるのよー！」

アーチャーは、にやりと口の端だけを上げる嫌みな笑みを浮かべやがった。

「その点は心配ない。私は、完全に衛宮士郎に興味を失った」

「ふざけんな!!」

再び、オレと遠坂の声がハモる。

「あれだけ人を親の仇のようにねちっこく殺そうとしておいて何様だ！」

「そうよ！あんたのせいで私の最後の令呪がなくなったのよ！」

「すまない。人違いだった」

しれっと赤い男は言つてのけやがった。

「殺す!!」

「キャスターさん。包丁の使い方お上手ですね」

「ありがとう。お料理を本格的に始めたのは、こちらに来てからだけで何とかね」

「最近は、キャスターさんが葛木先生のお食事を作っていたんですか？」

「ええ、そうよ。宗一郎様はいつも『美味しい』と言って食べてくださるわ。でも、宗一郎様はお優しいからそう言ってくれるけど、私は料理が得意ではないし、自分で食べるとそれほど美味しくない時は多いわ。だから、坊やに料理を習うことにしたの」

「そうなんですか。先輩は、私のお料理の先生でもあるんですよ。私も一年半前までは全然でしたから」

「そうなの？桜ちゃんすごく上手じゃない。やっぱり坊やは凄いの

ね」

「ええ。先輩は家事全般何でもお手のものなんですよ。お掃除も洗濯も全部先輩に教えてもらいましたから」

「坊やは何事にも丁寧だし、教え方も上手よね」

「そうなんです。でも、キャスターさんは本当に葛木先生のお好きなんです。婚約しちゃうなんて羨ましいです」

「当然よ。あんなに素晴らしい方はこの世のどこにもいないもの」

我が家の台所では、止めどなく華やいだ会話が続けられていた。

遠坂邸を後にして、家に戻ると既に桜は意識を取り戻していた。

オレと桜は二人で夕食の材料を買いに行き、帰ってきた頃にはキャスターも家に戻っていた。

もしかしたらライダーも戻っているのかもしれないが、姿は見えない。

今晩は、オレ、桜、キャスターの3人で食事の準備をすることになり、その最中にはこのようなガールズ(?)トークが展開されているわけだ。

内容は極めて気になるが、男子たる者このような会話に積極的に加わるわけにはいかない。というかできない。

ひたすら調理に勤しみながら、耳をそばだてるしかなかった。

「美味しいわ。流石ねえ、坊や」

キャスターが、オレが作った料理を味見して褒めてくれた。

晩御飯は上々の出来だった。

食卓には、鮭のちゃんちゃん焼き、スクランブルエッグ、シーザーサラダに豚汁という和洋折衷の料理が並んだ。

とは言え、振る舞う相手が帰ってこないのです、作った本人達で食べるしかないわけだが、3人いるので結構盛り上がる。

「うん。うまくできましたね」

「キャスターの作った豚汁もいいじゃないか」

「坊やに教えてもらったとおりに作ったんですもの」

だが、この和やかな会話をいつまでも続けてはもらえない。

桜に聖杯戦争についてどこまで知っているのか問いたただしておく

なくってはいけない。これは決して悪いことばかりではないのだ。

もし、桜が色々と隠して今のように振る舞っているのだとすれば、それはそれでストレスを感じている筈だからだ。

全てを曝け出せば、気持ちが悪くなることもあるだろう。

「桜。少しだけ聞きたいことがある」

オレは箸を置き、意を決して切り出した。

「え？なんですか先輩？」

「桜はオレが関わっている事件についてのくくらいまで知っているんだ？魔術についてもだ。今日、ライダーやアーチャーを見てもあまり驚いていなかったらどう？」

「え？・・・えつと・・・」

桜は箸とお茶碗を持ったまま、戸惑っていた。

「黙っていたことを責めるつもりは全くない。むしろ、桜にとっては、黙っているほうが辛いんじゃないかと思っている。だから、できれば正直に答えて欲しい」

頭を下げながら、こちらの本心を伝える。

「・・・先輩・・・」

「本当は桜も彼らのこと、つまりサーヴァントを知っているんじゃないか？そして、慎二やオレが何をしているかも」

「・・・はい。知っています。ごめんなさい。先輩。騙すような真似をして」

しばらく悩んだ末、掠れた声で桜は答えた。

「あ、いや、いいんだ。桜。この事を知っている事自体、基本的には隠すもんだからな。だからオレだって黙ってた。というか結構嘘も言っていた」

セイバーについては、切嗣を頼ってきたとか言っちゃってたしな。

「桜は魔術師についても、知っているんだな？」

「・・・はい。うちがそういう家系だって知っています」
やはりそうだったか。

と、

「たっだいま〜！しろく、お腹空いた〜！」

「お邪魔します」

玄関から、藤ねえと葛木が帰ってきた声がした。

「宗一郎様！」

キャスターが席を立った。

この話は一旦ここまでだろう。

第16話 6日目④ 「殺しと葉」

R t u r n

「ライダー。桜が聖杯戦争やサーヴァントの存在を知っていると打ち明けてくれたよ」

「そうなのですか？」

夕食後に士郎が屋敷の外に出てきて、桜との会話の内容を教えてくださいました。

教会から戻った私は、桜が意識を取り戻したことは確認したものの、その後は敷地外で待機していたのだ。

「ああ。桜にはライダーの事はオレを守ってくれるサーヴァントだと伝えておいた。藤ねえは帰ったから、うちに上がってくれ」

「お気遣い感謝します」

「近いうちに藤ねえにも上手く話しておくよ」

「どのように説明するのでしょうか？」

「そうだな・・・キャスターの親戚ということにするか。髪の色も似ているし」

「・・・まあ、私は構わないのですが・・・」

「当人が承諾するとはとても思えません・・・」

「この部屋を使ってくれ。和室だから慣れないかもしれないけど」

「充分です。ありがとうございます」

母屋の一室に案内され、一旦私は落ち着いた。

そして頃合いを見計らって桜の部屋に向かう。

桜は今日は早めに寝ると言って、自分の部屋に戻ったようだ。

彼女が私のマスターであることはまだ明らかになっただけで、士郎達には気付かれないように注意した。

「桜。起きていますか？今日は疲れたでしょう？」

扉越しに小声で確認すると、桜が起きている気配がしたので部屋に入った。

「ライダー？ええ。少し疲れたけど大丈夫よ」

ベッドに入っていた桜は上体だけを起こした。強がつて見せているが、顔色はあまり良くなかった。

「失礼しました。今日は色々あり過ぎました。しっかりと寝て疲れを取ってください」

桜の様子を見て、私は早々に立ち去ろうとした。

「いいえ・・・それより、今日はご免なさい。兄さんがまたおかしな真似をして。私がお人質みたいになっていたから、ライダーも兄さんの言いなりになるしかなかったわよね」

「それは、慎二の行動を読み切れなかった私の責任でもありません」

士郎に対する人質として、桜を使う。そこまで突き抜けた発想が慎二にできるとは思っていなかった。

「でも、先輩の行動にはちよつとびつくりしちゃった。良かったわね、ライダー。先輩が守ってくれて」

桜が微笑んだ。

「あ、はい。正直、アーチャーの攻撃の時は危うかったです。士郎は誰にでも優しいですから」

私は後ろめたい気持ちを隠して、努めて冷静に応じた。

「そうよね。それはそれで困りものなんだけど・・・でも、そこが先輩のいいところだものね」

少し俯きながらも、柔らかな口調で桜は言った。

「そう言えばあの人アーチャーさんなのね。前に先輩を殺そうとしたっていう」

「はい。凜に止められているせいもあるでしょうが、今日はそんな素振りは全くなかったですね」

「そうね・・・それにしてもあの人って・・・どことなく見覚えがある気がするのよね」

流石に桜は鋭かった。

「桜。近日中に士郎は、言峰神父、バーサーカーのマスター、そして臓硯と話をしようとしているようです。ですが、私は桜の身が心配ですので残ろうかと思えます」

「いいえ。ライダー、先輩についていつてあげて。今日は私や兄さんをあなたが送り届けている間に、先輩は危険な目にあってしまった。やっぱり先輩が心配だわ」

「……承知しました」

少し考えた後、眼鏡に手を添えて私は頷いた。今の関係から考えて、葛木やキャスターが桜に危害を加えたりはしないだろう。士郎のほうが危険なのは確かだ。

アサシンの動向は気掛かりだが、桜がマスターである事を知るはずもない。

「それにしてもライダー。あなた眼鏡を掛けるようになったのね。前の眼帯よりも全然素敵。やっぱり目が見えると表情も豊かに感じられるわ」

「ありがとうございます」

士郎に貰ったと言いき辛かった。

「……ごめんなさい。少し疲れたわ。そろそろ眠るわね」

「はい。桜。それではお休みなさい」

「ライダー……なんとなくわかっていたけれど、あなたって本当に綺麗ね」

最後のほうは消え入りそうな声で呟きながら、桜は静かに寝息をたて始めた。

桜の月影がちりちりと震えているような気がした。

ほんの少しだけ、私は自分の肌がさわつくのを感じた。

この屋敷は現代の一般人の住まいとしては、規格外の広さがある。晴れてこの屋敷内に滞在することができるようになったので、私は一通り様子を見て回ることにした。

「それにしてもこの屋敷は本当に手入れが行き届いていますね。庭木に至るまで完璧です。まさか士郎が一人でやっているのでしょうか……」

だとしたら殆ど彼は化け物だ、などと考えながら敷地内を徘徊していると、道場と称される剣術の修練場に明かりが点いていることに

気がついた。

「士郎でしようか？」

他に思い当たる人物もおらず、そう推測して道場に近付いた。

内格子が嵌っている窓から中の様子を覗いてみる。

「・・・アーチャー？」

何故か中にいたのはアーチャーだった。

丁度私が桜の部屋を出た頃に、家のチャイムが鳴っていたことを思い出す。何か用件があつて凜が士郎を訪ねて来ていたのかもしれない。

彼はいつもの外套は脱いでおり、上半身は袖なしのシャツのみだった。そのため逞しい腕が剥き出しになっている。

その手には、すっかり見慣れたあの双剣が握られていた。

私を襲い、そして私を守ってくれた白と黒の片刃剣だ。

彼はゆったりした動きで剣を振るっていた。自分の動きを一つ一つ確かめるような、目には見えない線をなぞるような丁寧な剣舞。

それは、美しかった。

聞こえる筈がないが、剣の流れそのものの音が聞こえてくるかのような錯覚を覚えた。

一昨日、そして今日と二度もこちらの命を狙ってきた相手だということに、不思議な程、今の彼に警戒心を抱く気にならない。

私はただ吸い寄せられるように、その流れる水のような動きを目で追っていた。

残念ながら、その剣舞は長くは続かなかつた。

彼は剣を消失させると、今度は道場内の壁に掛けられていた木刀を二つ外して、手に取った。

「覚えてなどいない筈だが・・・」

微かだが彼がそう呟くのを私は聞いてしまった。

何かいけないものを見てしまったような気がして、私は中を覗くのをやめて視線を地面に落とす。

私は速やかにこの場を立ち去ろうとした。

だが、

「覗きとはいい趣味だな。ライダー」

気がつくど、道場の扉を開けたアーチャーが外に出て、私のほうへと歩み寄ってきていた。

「アーチャー……やはりあなたは……」

不意を突かれた私は殆ど確信にまで至っている推測を、思わず口にしようとした。

「まだ、誰にも話すなよ」

アーチャーは抑えた声で、私の言葉を制止した。

「とは言え、勘の鋭い連中は気づき始めているがな」

少し困ったような表情を浮かべた。

深刻ではないがあまり触れられたくない、そんなニュアンスが感じられた。

「特にお前の主あつるじにはな」

桜に？

いや、そもそも私の主が誰だかももうわかっているという事だろうか？

「それにしても……」

アーチャーは一步踏み込んできて顔を近づけ、無遠慮に私の瞳を覗き込んできた。

「美しいものだ。小僧が骨抜きになるのも止むをえんか」

にやりと意地の悪い笑みが浮かぶ。

「固めますよ」

私は、目の前の精悍な顔を睨みつけた。

「男冥利に尽きるというものだ」

アーチャーはそう嘯くと、片手を軽く上げて立ち去っていく。

その広い背中が夜闇に消え、見えなくなったところで私は嘆息した。

「まったく、どこをどう間違えたらああなってしまうのでしょうか……」

私はここにはいない少年のことを思った。

「でも、本当に綺麗でした・・・」

アーチャーの剣舞は流麗だった。

思わず見惚れてしまうほどに。

この僅かな時間の出来事が全て幻だったかのようで、私は暫くその場に立ち尽くしていた。

E t u r n

夕食が終わり、藤ねえが帰るのと入れ違いのような形で遠坂がやってきた。明日の事で少し話があるということだったが、用件は30分程で終わり、すぐに帰っていった。

その後、風呂に入ってから、オレは土蔵に向かうことにした。

「今日は疲れたでしょう。鍛錬はお止めなさい・・・いいえ、言っても無駄ね。1時間だけにしておきなさい」

という具合にキャスター先生からは、許可を得ていた。

「どうせ止めても無駄って思われているわけだな・・・心外だ」

確かに今日は肉体的な疲労も、魔力の消費もかなりのものだった。

鍛錬は程々にするつもりだ。

「だけど、折角、馴染んできたんだからな」

そう。

今日は、アーチャーの剣を二度投影したが、二度目のほうがスムーズになっていた。

鍛錬の時は行使する魔術だけに集中できるが、実戦ではそうはいかない。

今日のように切羽詰まった状況で、他の動作や思考も交えながら投影せざるをえないことが殆どになるだろう。その経験が積めたのは大きい。

「それに、あの固有結界とかいう中であいつが生み出した武器はみんな凄かった」

そのうちのかんりの武器を覚えている。

それらも投影できるようになれば、戦い方も増やせるのではないか

と考えていたが、

ギイイ……

と、土蔵の扉が開く音がした。

「……衛宮。鍛錬中にすまない」

思わぬ来訪者が土蔵の扉を開けて、入って来た。

「葛木？」

それは確かに、葛木宗一郎だった。

「実は、お前に頼みがある」

ただでさえ驚いていたところに、思わぬ言葉が発せられた。

「こんな夜更けに申し訳ないと思っているが、二人だけで話したいのだ」

「……ああ。オレに可能な事なら引き受けるぞ」

戸惑いながらもオレは返答した。

葛木がオレに頼み事なんて、余程のことなのだろう。

「その代わりと言っちゃなんだが、一つ教えてくれないか？」

オレの方も、聞きたいことがある。

ある意味、いい機会だと思うことにした。

「無論だ。先にお前の問いを聞こう。私の頼みを受けるかは、その後で判断するがいい」

「わかった」

オレは頷いた。

「学校での戦い。あんたは本当に凄かった」

そう。

キャスターの魔術による援護があつたとは言え、凄まじいと言つていい戦いぶりだった。

何せ人間が、英霊と渡り合っていたのだ。

しかも白兵戦を得手とする槍兵を相手に、素手で対抗していたのだ。

「どうしてなんだ？」

「そうか。キャスターからは何も聞いていなかったのだな」

葛木は寧ろ意外そうだった。

「ああ」

「単純な話だ。私は殺人者だ」

「え？」

事も無げにぽんと放り投げられた答えは、衝撃的な単語が混じっていた。

「私は生まれた時から人を殺すための凶器として育てられたのだ」

それから葛木の語った内容は想像を絶するものだった。

人を殺す道具としての人を作る組織。そこで人生の大半を過ごした男の話だった。

全てを聞き終えたオレの感想はただ一言。

「とんだ与太話だな・・・」

「そういうことしておくがいい」

少し前のオレなら、この男を悪と断じていたのかもしれない。

だが、少なくとも葛木は今も真実な教師として生きている。

自身の意思を剥奪され、命じられるままに人を一人殺したという罪を今のオレに量ることはできなかった。

「余計な話をさせて悪かったな。それで、そっちの頼みというは何だ？」

「薬を作って欲しい」

「は？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

それほど突拍子のない頼みに思えた。

「ちよつと待て。オレは薬剤師じゃないぞ」

「無論、お前に直接作ってもらうわけではない」

そう前置きをして、葛木は具体的な【薬】の内容と、自身の目的をオレに語った。

「・・・なるほどな・・・」

「お前にとつても、あつて困る物ではあるまい」

「そうだな。なるべく早く手に入れよう」

オレは、葛木の頼みを引き受けた。

この男の意思は、充分にオレの心に響いてくるものだった。

「例のモノを回収してきましたぞ。魔術師殿」

白い髑髏の仮面が一冊の古びた本を携えて、杖をついた老人に伝えた。

「ふむ。つまらぬ手間をとらせたのう、アサシン」

その老人、間桐臓硯は、階段下に蠢く蟲達から視線を外して、振り返りながら己がサーヴァントを労った。

間桐家は冬木市内外に多くの物件を所有している。ここはそのうちのひとつで、市内にある別邸のようなものである。同時に臓硯にとって間桐邸以外の大事な蟲蔵の一つであった。

「これしきのご用命は全く苦にはなりません」

アサシンは律儀に応じながら、持っていた本を臓硯に差し出した。

「それにしてもお主の話、実に興味深いものであったのう」

「どうやら、些か魔術師殿の筋立てとは違う方向に進んでいる様子ですな」

「うむ。だが、寧ろ都合の良い方向に進んでいるとも考えられる。まさに、瓢箪から駒というやつじゃ」

本を受け取りながら、臓硯は醜悪な笑みを浮かべた。

「と、言いますと・・・?」

アサシンは首を傾げた。

「この流れを加速させることとしよう。お主にも少し働いてもらいたい」

老魔術師は、手にした本【偽臣の書】に視線を落とした。少し傷ついております、一時的に効力を失っているようだが、完全に使えなくなつたわけではない。

「それは無論。如何様にでも」

アサシンの返事に老魔術師は満足気に頷いた。

第17話 7日目① 「泰山」

R t u r n

昨日発生した集団昏睡事件の影響により、今日の学校は休校となった。張本人である私としてはかなり心苦しいところだ。

「まあ、結果的に一日自由に行動できると考えよう」

士郎達は例の黒い影の情報収集をするつもりだ。

重要な情報を握っているのはイリヤスフィールと推測しているが、彼女の居住する城に行くためにはかなりの時間と労力が必要だ。

「今日は事後処理のため休めないが、明日であれば休みを取れる。城の近くまで私が車を出すことも可能だ」

と葛木が提案してくれたので、イリヤスフィールに会うのは明日に回し、今日は言峰神父に話を聞くことになった。

「綺礼にアポの電話をしたら、深山町の中華料理店に11時に来いって指定されたわ」

早速、神父に凜が約束を取り付けてくれた。

そのため、士郎、凜、私の3人は衛宮邸を出て、指定された店に向かっている。ちなみにアーチャーは霊体化している。

私も霊体化するつもりだったが、士郎は実体化しての行動を望んだ。

「ライダー、その恰好じゃあ日常生活を送るには問題があるだろう。うちに入入りするにしてもその服じゃ藤ねえに会わせられないし、一緒に買い物にも行けない」

という士郎の発言により、今日は私の普段着を買うことになった。その時には試着が必要になるが、いきなり実体化したら大騒ぎになるだろうから、というのが理由だ。

士郎の意向となれば無下にはできない。それに、確かに戦闘時の服で往來を歩くのは憚られる。

「まあ、食事時はくもあの格好じゃあ、衛宮君が落ち着かないわよねえ」

凜が奇妙な笑みを浮かべながらそんなことも言っていました。何のことやらわかりませんね。

「でも、実体化して行動するなら、服を買うまでは何を着てもらおうのよ？」

という凜の言葉どおり新たな問題が生じるわけだ。

関係者の所持している服では、サイズの合う女物がない。

まあ、当たり前ですよね……

170cmを超える女性はそうそういませんから。

「藤村組に行つて、なんとか着られそうな服を借りてくる」

そう言つて出掛けた士郎が入手してきたのは、細身の男性向けのワイシャツとストラックスだった。

「これはこれでいけるわね。男装の麗人つてどこかしら。眼鏡掛けて知的だし、有能な美人秘書つて線もありか……かなり胸がきつそうだけど……」

そんなわけで何とか体裁は整えられた。

ちなみに下着は桜に借りて凌いでいる。

こちらも買いたいところだが、服も下着もとなると士郎に申し訳がなかった。お金は士郎に出してもらおうのだから。

神父との対話は順調に約束を取り付けられたが、一方の臓硯については桜を通じて所在を確認したところ、

「お爺様は、市外の管理物件を見に行くので、今日は一日不在にするみたいです」

という事だった。

この話の真偽は定かではなかったが、あまり詮索もできなかった。

本当に市外に出掛けるのか、単に会うつもりがないので口実を作ったのか。あの老人とすれば、士郎との会話に意義を見出すことはないだろう。

深山町の商店街に入つて暫く歩くと、【紅州宴歳館・泰山】というこじんまりとした店構えの中華料理店に到着した。

「ここが、神父が指定した店のようだ。

「すまない。ライダー。オレ自身が実体化を提案しておいてなんだが、ここでは食事をしないほうがいい」

店に着くなり、士郎が謝ってきた。

「どういうことでしょうか？」

料理店に入って、何も食べないというのはマナー違反ではないのだろうか？

士郎の性格からすると、不可思議な発言だった。

「この飯を食べばオレ達の聖杯戦争は終わる」

「そうね。悪いことは言わないわ。私も結構辛い物はいける口だけど、ここだけのだけはムリ」

凜も士郎の発言に同意する。

「どうやらこの店の料理はかなりの危険物らしい。」

「そうなのですか？ 気にはなりますが、二人がそこまで言うのなら控えます」

なにせ私はお金を持っていない。

出してもらおう側の私が、妙な好奇心で無駄なお金を使わせてしまうリスクは避けるべきだろう。

ガララ・・・

「イラッシャイ」

店に入ると神父が食事をしていた。

他に客はいない。

中華料理の名前など素の知識のままでは私にはわからないが、聖杯が与えてくれた情報によると、彼の食べているのは『激辛麻婆豆腐』というものらしい。

「む。来たか。すまないが、少し待っていてくれ」

顔中に汗を浮かべて、神父が言った。

私としては、士郎の身を守ることを優先したのだが、本心ではこの神父には会いたくなかった。

昨日逃げるように教会を後にしての今日だし、この神父には得体の知れない空気が纏わり付いている。

油断ならない相手として警戒する。

「それとも、お前達も食うかね？」

「食うか！」

「私も無理」

「そ、そうか・・・そこまで否定しなくても良いのではないかね・・・」
ちよつといじけたようですね。

この場面では、あまり警戒する必要はないのかもしれない。
「昨日の事件の事後処理が、いたく私の精神に負荷をもたらしたものでね。せめてもの慰みに、格別美味しいこの料理を味わいに来ただ」

私に視線を送りながら言ってきた。

この人、絶対にわざと言っていますよね。

士郎と凜の顔も強張っていた。

「いや、あれはライダーのせいじゃ・・・」

「そうよ。慎二が全部悪いのよ」

ありがとうございます。二人ともいい人です。

「柳洞寺もこの辺りでは、歴史的建造物と言っている。それが大きく損壊したのもこの街としてはかなりの痛手だった。ああ、私は何を言っているのだろうか・・・そろそろ心療内科にかかったほうがいいのかもしれんな」

三日前の話も持ち出してきて、こちらに揺さぶりをかけてきた。

「・・・あ、あれはアーチャーが悪いんだ・・・」

「え？それって私のせいってことじゃない・・・」

見事に更なる動揺と内紛の兆しが表れる。

「聖堂教会からは魔術師協会に対して事後処理に要した費用を請求できるのだ。そうなれば魔術師協会からは当然、直接の当事者にその補填を求めるだろうな」

「げ・・・」

凜の顔が蒼白になりました。

警戒不要と考えたのはあまりに浅薄だったことを思い知らされた。
やはりこの神父には、最大級の警戒を持って臨まなければならないの

だ。

「あの・・・私、その料理を少しいただいてもいいでしょうか？」

防戦一方になりつつあるこの流れは、サーヴァントである私が食い止めなければいけない気がした。

「む。食うかね？」

神父が笑みを浮かべた。

「ええ。食べたことがないので、興味があります」

嘘ではない。

「よからう。好奇心は大事だ。マスター。彼女にレンゲと取り皿を」

「アイヨー」

予想に反して若い女性の店主(?)が、間髪入れずにレンゲと取り皿を運んできた。

「綺礼：あんたまさか、ここで私たちを脱落させて、聖杯戦争をとつとと終わらせようって腹積もりなんじゃ・・・」

「何を言っているのだ、凜。ここの麻婆は絶品だぞ・・・いや、なるほど。あまりの美味さに至福を感じてしまえば、もはや聖杯に託す望みなどあまりに矮小になってしまふ。そうすれば、この戦いを続ける必要もなくなるということだな」

「いや、生物学的に終わるって話なんだけど・・・」

「それならそれで良いのではないかね。間接的にせよ聖杯により望みが叶ったということになる」

全く人の話を聞いていませんね。この人。

とにかくこの奇天烈な会話を早々に終わらせる必要があります。

目の前には既に取り皿に盛られた激辛麻婆豆腐が、鎮座していた。

私はそれを無言でじつと睨みつける。

眼鏡を外したら、石化してくれないだろうか？

「・・・・・・・・」

士郎、凜、私がここで力尽きたら、桜を頼みます。

ひよつとして、遺書を用意する必要があったでしょうか。

「それでは、いただきます」

料理に罪はない。

そして、おそらく料理人にも悪意はないはずだ。

であれば、この目の前にある赤い液体が、禍々しく感じるのは私自身の内面の反映に他ならない筈だ。

要は自分の心の中の問題なのだ。

意を決した私は、その赤い液体をすくったレンゲをゆつくりと口元に近付け、そのまま口の中に流し込んだ。

「す……すまない。ライダー……お前のことは絶対に忘れない……」
「終わったわ……なにもかも……」

士郎と凜は、もはや私を見ないようにしている。

私は口の中の液体を嚙下する。

「……」

しばし悩んだ末、私は正直に答えることにした。

「確かに美味しいですね」

初めて口にする味わいだった。ピリツとする辛さはなかなかのもので私の生前には味わえなかった刺激だ。

一昨日から何度か士郎の家で食事をいただいているが、それらも凄く美味しかった。勿論、作ってくれる士郎や桜の技量の賜物なのだろうが、この国、この時代の料理は総じて美味しいようだった。

「ふふふ。そうだろう、そうだろう。キミにもこの刺激の素晴らしさがわかるかね」

神父が満足そうに頷いて言った。

「……」

おや？ 士郎と凜は呆けた表情をしていますね。

まあ、あれだけ構えていたので仕方ないことかもしれませんが、おそらく二人はこの刺激が苦手ということでしょう。

「もう少し食べるかね？」

取り皿が空になったのを見た神父が、お替わりを勧めてきた。

「そうですね。ただし、申し訳ないのですが、私は持ち合わせがありませんので……」

「ふ、構うことはない。大変気分の良い時間を提供してくれたのだ。私が出そう」

「それでは、お言葉に甘えまして。あと、もしよろしければお酒もいただける嬉しいですね。この料理に合うものがあればですが」

「勿論あるとも。私も少し付き合おう。大人の特権だな」

士郎も凜も大人の筈ですが・・・

まあ、この件は禁忌中の禁忌ですね。

「それでは、よろしくお願いします」

「ライダー・・・そこまでして、オレ達のために・・・」

「いいえ、衛宮君。絶対に違うわ。この似非^{えせ}ミスコンクイーンはマイウェイを突っ走っているだけよ」

士郎と凜の眩きが流れる中、私は出されてきた『紹興酒』なる甘いお酒を賞味させていただきました。

ああ、これも美味しいですね。

「ふふふ。気分は爽快。腹は程よく満たされ、脳はアルコールにより活性化している。最高のコンディションになったところで、そろそろ本題に入るとするかね？」

「士郎、凜。少しお待たせしてすみませんでした」

20分程だろうか、食事とお酒に没頭してしまつて彼らを待たせてしまったので、謝らなくてはいけない。

「いや・・・いいんだ。ライダーが楽しそうだったから」

「そうね。会話の潤滑油は必要よね。ランチョンミーティングって形式があるのもそのためだし」

「聖杯戦争について詳しい話が聞きたいとのことだったな」

神父が居住まいを正して、こちらの要望を確認する。

「そうだ。根つこの目的は、柳洞寺で遭遇した影の正体を突き止めることだ。オレ達はあれが、聖杯戦争と関連していると考えている。あれは、極めて危険なものだ。何とかしたい」

気を取り直して、士郎は自身の目的をはっきりと神父に伝えた。

「特にあなたは前回の戦いにも参加していた。何がヒントになるかわからない。知っているだけのことを教えて欲しい」

「流石に全部というのは時間的にも立場的にも難しいところだが、可

能な限りは答えよう」

「あんたは10年前、父さんのサポートのために参加していたはずだけど、どんなサーヴァントを召喚して、どんなふうに最後まで生き残ったのかしら？」

「ふむ。私は前回、アサシンのサーヴァントを使役していた。主に情報収集が目的だったのだが、中盤で概ね任務を達成してな。最後は、強敵と睨んだライダーの宝具によって斃されたのだ」

「セイバーじゃなくて、ライダーが強敵だったのね」

「いいやセイバーも同じくらい強敵だった。ただ、セイバーの宝具はその時点で既に分かっていたのだ」

「なるほどね」

「セイバーの宝具はどんなものだったんだ？」

士郎にしてみれば、結局わからないまま消えてしまった自分のサーヴァントが何だったのか確認したいのだろう。

「ふむ。キミとすれば気になるところだろうな。」

【エクスされた勝利の剣リバー】だ」

「・・・やっぱりそうだったのか」

士郎は既に当たりをつけていたようだ。

「え？じゃあセイバーは、あのアーサー王だったってこと？でも、女の子じゃない」

「まあ、英霊という概念は曖昧なものだからな。例えば、彼女だってこの姿を見た者からすれば、正体はあの怪物だと言われてもすぐには納得できないだろう？」

私を見ながら神父は凜に問う。

「それは・・・そうかもね」

凜もちらつと私を見て、頷いた。

直接は伝えていないが、既に私の真名は察しがついているのだろう。

「ちよつと待て。あんた、何でライダーの正体まで知っているんだ？」

士郎は、神父の語った言葉から聞き捨てならない部分をしっかりと問い詰めた。

「私がランサーのマスターだったからだ」

「「は？」」

士郎、凜、私の声が完全に重なった。

「ランサーには基本的に情報収集をさせていた。柳洞寺での戦いもかなりの部分を把握している」

また、この人はこちらを置いてきぼりにして話を進めてますね。

「常時目を隠しており、柳洞寺では天馬を召喚し、学校では生命力を吸収するような神殿型の結界を張った。さらに美しい髪を持っている女性となれば、推測は容易だ」

「・・・えっと。あんたはこの戦いにも参加していたってことだな」

意外な暴露による衝撃から何とか立ち直り、士郎が確認する。

「そのとおりだ。とは言え、私は聖杯に望む願いなどない。この戦いを監督する以上、情報は欲しくてな。それでランサーを従えていたわけだ」

神父は意味ありげな笑みを浮かべた。

「誰がどのくらい施設を壊しそうかとか、人に迷惑をかけそうかとかだ」

「な・・・なるほどな・・・」

そう言われると、私達はこの話題で追及の矛先を向け辛いですね。

「昨日ランサーを学校に送ったのも、危険な結界が張られる兆候があったからだ。結果として彼は戦士としての本能を優先させてしまい、キミたちに斃される事態になってしまった」

なんかまた、私が悪いみたいなお話になっていませんか？

「ランサーが斃されたのは、キミたちの力によるものだが、どうやら最後はあの影が現れ、ランサーを取り込んだようだ」

「何だって？」

「もしかしたらと思っただけど、そうだったのね」

士郎と凜が違う反応を示した。

「昨日あの後、ランサーがいた付近の生徒を少しだけ見たんだけど、何人かにあの黒い泥がついていたのよ。だからね」

この話は凜の方が、推察していたようだ

「いずれにせよ、ランサーを失ったのは私としても痛手なのだ。結局、アサシンのマスターの正体を掴めていなかったのだからな」

「そう。私たちも目にしたのは、柳洞寺での1回だけだしね。まあ、アサシンなんだからそういうもんよね」

「あんたは前回、アサシンのマスターだったんだらう。どんな英霊だったんだ？」

「前回私が召喚したのは、複数人で一騎を構成する特殊なアサシンだった」

「それって滅茶苦茶強いんじゃないか」

「いや、彼ら一人一人の力は大了なことがなかったからな。アサシンのサーヴァントというのは、イスラム圏の暗殺教団の長が必ず召喚される。代々彼らは「ハサン・サツバーハ」という名を襲名するので、それが真名になるが、ハサンは複数いるので、これがわかっていても意味はない」

「てことは名前がわかるだけでは、特徴や宝具はわからないのか。結局、対峙するしかないわけだな。それから、やはりキャスターが召喚したアサシンはかなり例外だったんだな」

「そうだな。だが、柳洞寺の戦いにおいて、アサシンはセイバーに対し腕を伸ばすような動きをしていた。あれは、呪腕と呼ばれる能力かもしれないな」

「私も少しだけ見たわ。セイバーには迎撃されていたみたいけど」
「なるほどな。腕を警戒すべきなんだな」

士郎は、少しだけ考え込む素振りを見せた。

「そう言えば、オレはセイバーからあんたが最後まで残ったマスターだったとも聞いているし、前回の顛末も知っていた。さっきの話では中盤で脱落したような口振りだったけど、どういうことなんだ？」

「確かにな。私は一度脱落し、任務からも解放されて当時監督役だった父の保護下に入った。しかしその後、マスターを失ったサーヴァントが出たのだ。その時には、元々私が支援すべき対象だった遠坂時臣氏、即ち凜の父親は残念ながら既に亡くなってしまっていた」

凜の表情が少しだけ硬くなったが、神父はそのまま続けた。

「私はそのサーヴァントと再契約することになり、最終的に衛宮切嗣と争うことになったのだ」

「なるほどな・・・セイバーは、親父があんたを一番警戒していた。とも言うっていた」

「私とあの男は殆ど接点がなかったが、お互いの周辺情報を集めるうちに酷く憎みあうようになっていた。一言で言えば、近親憎悪に近かったのかもしれないな」

「親父とあんたが似ている?」

「方向性は違えど、人間として壊れているという点がな」

「親父は至ってまともな人間だったぞ」

「いずれにせよ、私は負けた。辛うじて生き残りはしたがな。私は見たわけではないが、衛宮切嗣はセイバーに聖杯を破壊させたようだ。そのため、前回の戦争は中途半端に終わり、今回の聖杯戦争が僅か10年で始まったというわけだ」

本来なら60年周期なのだがな、と続けた。

ここまで話しておいて、神父は首を横に振った。

「私と衛宮切嗣の話はもういいだろう。つまらない男同士の観念的な話に過ぎない。女性には退屈な話だ」

「そうだな」

士郎は、ちらりと凜を見やりながら頷いた。

「漠然としている質問だが、あの黒い影について、あんたはどう考えている」

「キミと同意見だ。あれは聖杯戦争に関係がある。おそらく聖杯の中にある呪いが漏れ出したものだろう」

「聖杯の中にある呪い?そんなものがあるのか?」

「どうしてあの影となって出てきているのかはわからないがな。いずれにせよ、この話を詳細に知りたければ、アインツベルンに聞くしかあるまい。彼らが一番、根本的なことを知っている。私の知る内容は監督役としての表面的なものと、私自身が見聞きしたものだけだ」

「わかった。元々、その予定だったしな。色々と教えてくれたことについては、礼を言う」

「そうね。思った以上に目ぼしい情報があったわ」

「それでは失礼します。料理とお酒、ご馳走様でした」

士郎と凜が席を立ったので、私も続いた。

丁度、私たち以外の客が入店してきたところだった。

「ふふふ。また、ご一緒したいものだ」

神父が私に向けて言ってきた。

「構いませんよ・・・あ、いえ、状況が許せばですね」

士郎と凜が少し非難の眼差しを向けてきたので、表現を改めた。

「最後に一つだけ。あんたは聖杯に託す望みはないと言った。それは本当か？」

士郎が立ち去ろうしていた足を止めて、最後の質問を投げかけた。

「ない。私は私自身に還る望みを持っていないのだ。それは、お前も同じだろう。衛宮士郎」

「何を言っているのかわからないな」

士郎はそう言って、暖簾を潜って外に出ていく。

凜と私もそれに続いて、店を出た。

第18話 〓7日目②〓 「遺産」

R t u r n

「それにしても美味でした。【紅州宴歳館・泰山】覚えておきましょう」
店を出てから、振り返って改めて名前を確認した。

「ライダー。あなたのキャラがよくわからなくなってきたわ」

凜が側頭部に拳を当てながら、顔をしかめていた。

「遠坂はこれからどうするんだ？」

「私は明日の準備もしたいし、お二人の邪魔をするつもりはないからから、一旦家に戻るわ。夕食時に衛宮君の家にお邪魔させてもらうから、そこで明日のことを少し話しましょう」

桜が聖杯戦争のことについて知っているということは、既に凜に伝えてある。

さらに、藤村大河はしばらく家（組？）の行事のため、土郎の家には来られないということなので、聖杯戦争のことを気兼ねなく話せる状況になっていた。

「あ、そうなのか・・・わかった。じゃあ、また後でな、遠坂」

去っていく凜を、少し残念そうに土郎は見送った。

「ちよつと心細いな」

土郎が小さく呟くのが聞こえた。

まあ、私の服選びの時に凜に頼りたかったのでしようね。

「それでは、土郎行きませうか」

「はい。行きませう」

土郎はおかしな口調で返事をした。

「新都に着いたら、先に食事をしましょう。今の店では土郎は何も食べられませんから」

「でも、ライダーは食べたじゃないか？」

「一皿だけですから。軽い物でしたら問題なくお付き合いできます」

「よし。それじゃあ喫茶店で軽食だな」

「はい」

バスで、新都まで行き、士郎と一緒に開放的な雰囲気のレストランに入る。

看板には「アーネンエルベ」と書かれていた。

士郎も私もサンドイッチと紅茶を頼み、さほど待たされることもなく、料理は運ばれてきた。

「サンドイッチも初めてだよな？」

「勿論です。この料理は、手軽に食べられていいですね。すごく機能的で、それでいて美味しい」

「喜んでくれて良かった」

なんと幸せな時間なのか。

この世界に召喚されてから約1か月。

私は、特に霊体化して慎二と同行することが多かった。

彼は女友達とこういった店に何度か入っており、内容はともかくお互い楽しそうに話をしていた。

勿論、それで羨ましいとは微塵も感じなかったわけだが、士郎とこうして二人で食事をしながら話をしていると本当に楽しい。

「服はどちらで探すのでしょうか？」

「近くに大きな百貨店があるから、そこで買うつもりだ」

「でも、本当に服などお気遣いいたただかなくても大丈夫なのですが……」

服自体に興味がないのは本心だ。

さらに、お金を出してもらおうことになるのも申し訳ない。

「ごめん。実際のところは、オレが嫌なんだ。オレがライダーにちやんとした服を着てもらいたいんだ。ていうか見たい。ここまで連れてきていながら今更だけど、本当に嫌ならそう言ってくれ」

「……嫌なわけないじゃないですか……」

その質問は卑怯ですよ。士郎。

「正直、服には興味ありません。ですが、士郎がそう言ってくれるのは嬉しいです」

「えっ？それってどういう……」

「ふふ。そろそろ行きましようか」

油断すると、こちらが逆に土郎の思いも寄らない答えに振り回されることになってしまふ。これまで何度もそういう経験をしているので、先手を取って振り回す立場をキープしたいところだ。

私は促すように先に席を立った。

土郎が慌てて、レシートを持って立ち上がる。

この百貨店には、慎二と同行して一度来たことがあった。

女性物のみの衣服店も入っているし、男性物も含む総合的な衣料品店もある。

土郎の立場からすると、後者を選ぶことになるだろう。

「買うお店も決めていたりするのでしようか？」

「そこまでは決めていないな」

「確か凛にアドバイスをもらっていたと思いますが」

「あいつのは全く参考にならなかった。赤い服を買えばいいのよ、なんてニヤニヤ笑いながら言いやがって」

「それは、たぶんアドバイスをする気がなかったのでしょうね」

「そうだな。自分で考えろってことなんだろう」

「桜や大河には聞かなかったのですか？」

答えは予想がついたが、念のため聞いてみる。

「桜に聞くのは何となく気まずかった。藤ねえに聞いても意味がない」

「正解でしょうね。」

「それではどうしましょうか？土郎がいつも購入している店に、女性物があればそれで充分だと思いますが」

「オレがいつも買っている【し●むら】はここには入っていない。とは言え、男物、女物問わず売っている【●ニクロ】や【コ●サ】はあるから、そこで買えばいいのはわかっている」

「では、そちらで」

「でも、嫌だ」

「どういうことでしょうっ？」

「ライダー。行こう」

そう言つて、士郎が私の手をとった。

「え？」

士郎の少し硬い掌の感触が直に伝わってきた。

一瞬、彼がその感触に戸惑つたように逡巡したが、それを振り払うようにしつかりと私の手を握つてエスカレーターのほうに向かった。毎度のことながら私の予想を覆したこの少年は、2階の女性物をメインとしたフロアに足を踏み入れた。

「士郎。ここは・・・」

ちよつとハードルが高いのではないのでしょうか？

と私も躊躇したが、士郎はそのままテナントの一つに私を連れて入った。

このフロアにあるテナントの中では広いほうで、女性店員が複数名いる。そのうちの二人はすぐに私達に気付き、少し驚いたような顔をしたが、すぐには近付いてこなかった。

士郎は一通り店内を見回すと、先ほど私達に気付いた店員の一人に近づいていった。

「こちらの女性に合う服を一式選んでもらいたいです」

話しかけられた若い店員は僅かに驚いたようだったが、すぐに自身の役割に忠実な表情を取り戻した。

「うわあ。近くで見ると、本当にモデルさんよりスタイルもいいし、綺麗・・・かしこまりました。うちは元々、海外ブランドですので、こちらの方に合うコーディネートをさせていただきます」

「お願いします」

士郎が顔を赤くしながら頷いた。

女性店員は嬉しそうに、店内を動いて上下、アウターを物色し始めた。

「士郎、無理をしなくても・・・」

私は思わず士郎に声を掛けた。

「いいんだ。オレが今日はちゃんとしたエスコートをするって決めたんだから。大丈夫。気軽に着られる服も総合店で買うから」

士郎は真剣な表情でそう言ってきた。

「・・・ありがとうございます」

それに応じる私は今、どんな顔をしているのだろうか。

店員は士郎の予算を確認したうえで、言葉どおり私に馴染みそうな服装を選んでくれた。上は白いシャツに、黒のジャケット、下はゆったりとした黒いロングパンツだった。かなり機能性や着心地を重視してくれており、私自身もこれなら変に気を張らずに済む。

「うん。自然な感じでカッコいいし、それでいて可愛らしいんじゃないか」

と士郎も言ってくれた。

「・・・あ・・・ありがとうございます」

「まあ、ライダーほどの美人ならなんでも似合ってしまうものなのかもしれないけどな」

士郎が頬をかきながら、照れたように視線を外した。

帰路に着く頃には、日はだいぶ傾いていた。

私達は、すぐにバスに乗ることはせず、しばらく歩くことにした。

新都のオフィス街のビル群を中央公園方面へと抜けていく。

私達の向かう先には工事中のビルもあり、防音シートに覆われているのが目に入った。

「士郎。今日は本当にありがとうございます」

「いいんだって。最初に言ったとおり、オレの我が儘だったんだから」
今の私の服装は、元々着てきた男物ではなく、一軒目の専門店の後に、別の総合衣料店で購入した黒のハイネックセーターにデニムのロングパンツという装いになっていた。

「ふふ。こんな我が儘なら大歓迎ですよ」

とにかく私は士郎の気遣いが嬉しかった。

「その服もライダーに似合っているな」

「ありがとうございます」

そんな和やかな会話を続けていた時だった。

ガゴツ・・・

左程大きくはないが重い音が響いた。

「なんだ？」

その不穏な音に士郎が反応する。

「危ない！」

言うが早いか士郎が駆け出した。

その先には、母親と思しき女性が幼児を乗せたベビーカーを押ししており、その真上には直前までクレーン車に吊り下げられていた鉄骨があつた。

その鉄骨は、重力の影響そのままに凶悪な鉄塊として、母親(仮)と赤子の命を奪うために落下した。

士郎が間に合うタイミングではなかった。

ザツ・・・

士郎に釣られるようにして駆け出した私はすぐに彼を追い越し、

「はっー！」

ゴツ!!

母親(仮)と赤子の上空1メートルまで迫っていた鉄骨を、蹴り飛ばしていた。

ゴオオンンン・・・

私の蹴りを喰らった鉄骨は、その先にあつた電柱に激突した。

「あ・・・」

電柱は鉄骨がぶつかった衝撃でひしゃげてしまった。

「逃げるぞ。ライダー」

「はっ」

跳び蹴りをして着地した私の手を引いて、士郎は駆け出した。

「あのーありがとうございました!!」

背中から、先程の母親のお礼の言葉が投げ掛けられた。

「ふう・・・まあ、ここまで来れば大丈夫だろう」

「そうですね」

事故(事件?) 現場を逃走した私達は、今は中央公園付近まで来て

いる。

また、神父の心労の種と私達への口撃の材料を与えることになってしまったかもしれない。

「少し喉が渴いたな」

そう言つて、士郎は近くの自動販売機で温かいお茶を2本買い、片方を渡してきた。

「ありがとうございます」

どちらからともなく、手近にあつたベンチに腰掛けて、落ち着いた。

士郎と私の間には、僅かに隙間が空いている。

士郎は真剣な面持ちで、こちらに顔を向ける。

僅かに赤面してはいるが、ここ数日で何度も目にしてきた凜々しい少年の顔。

真つ直ぐで、純粹で、一度決めたことに忠実な男性の顔だ。

きっと彼には、ここで何かを言わなければならないという義務感でいっぱいなのだろう。

「士郎。敢えて忠告しますが、先程のような場面で自分の身も顧みずに飛び込んでいこうとするのはやめてください」

私は士郎の緊張と思考を逸らす目的もあり、先程の件を話題にした。

「う．．．すまない。結果的にライダーに迷惑を掛けることになってしまった」

「そのようなことを非難しているわけではありません。もっと、自分の身を大事にしてくださいと言っているのです」

私は微笑みながら優しく返答した。

口調と表情によつては、冷たく取られかねないセリフだ。

努めて柔らかく応じているつもりだが、私はうまくできているだろうか？

「．．．．．」

士郎は困つたような表情になって、沈黙した。

「私は士郎を困らせたいわけではありません。あなたの身を按じているだけですよ」

「ありがとう、ライダー。そう言ってくれただけで、オレは嬉しいよ。さつきも、そしてこれまでもお前に何度も助けられた。本当にありがとう」

「先程の件はともかく以前のはお互い様ですから」

「あいや。ごめん。本当に伝えたかったのはこういうのじゃなくて」

私は、決して鈍い女ではない。

生前、それなりの人数の男と関係も持っている。

士郎が何を切り出すかとしているかは、容易に察しがつく。

「突然、こんなことを言うと言わせないと思うかと思われられるかもしれないけど、オレはライダーのことが・・・」

彼の唇に私の人差し指が押し当てられた。

私が士郎に最後まで言わせないようにしたのだ。

「士郎。そこまでにしましょう。あなたの気持ちはこの上なく嬉しい。私もあなたに同じ感情を抱いている」

士郎が目を瞬かせながら固まっている。

「それでいいのではないのでしょうか？無理に確定させる必要はない。この数日間、あまりにもお互いに切迫した状況にありました。その中で、私とあなたは何度も助け合った」

そう異常事態だったのだ。

聖杯戦争自体が、そもそも異常な状況そのものなのだ。

「いわゆる吊り橋効果というものでしょう。それに私はサーヴァントです。この戦いが終われば、消える身。ですが、あなたにはその先がきつとある」

この言葉はむしろ彼としては反論の材料になるかも知れない。

だが、言わずにはいられない。私のマスターである桜は、士郎に想いを寄せている。この戦いの後、士郎が彼女を選ばなかったとしても、私がおかしな影響を与えてはいけないのだ。

「それに私はあなたも知っているとおりの怪物です。昨日、結界を張って多くの人間を取り込もうとしたのは、慎二の命令でもありませんでしたが、私自身抵抗はありませんでした」

彼の唇に押し当てていた指をゆっくりと離す。

私に対して向けられる少年の真剣な目に、ともすれば吸い込まれそうになりながら言葉を連ねる。

「私は、人を殺すことに罪を感じないのです」

「わかっている」

士郎は解放されたその口で言葉を紡ぐ。

「わかっているさ。ライダー。でも、その心も、髪も眼も全て望まぬままにお前は変えられてしまったんだろう」

それは、確かに彼の言うとおりだ。

「それならまた変わればいい。きっとそれはできるはずなんだ」

「そうなのでしょうか？」

私は自分にそんな自信は持てない。

「さつきだって、オレだけを止めて母子を見捨てることもできた筈だ。だけど、ライダーはちゃんと助けた」

確かにそうかもしれない。

士郎を守るだけなら、士郎だけを止めればよかった。

「誰かを救いたい、オレはそう思ったことがなかったんだ」

「え？」

そんなわけがない。

この少年ほど、常にだれかを救おうとして行動してきた者などどこにもいないのではないか？

「そんな・・・あなた以上に誰かを救おうとしてきた人を私は知りません。先ほどだって・・・」

「違うんだ。ライダー。オレは救わなければいけないといつも思っていたんだ。」

士郎は自嘲気味の笑みを浮かべた。

「さつきだって、助けなくちゃいけないって思っただけなんだ」

そこには、少年の懊悩が垣間見えていた。彼の普段目にする捨て身ともいえる献身、それは強制されたものだと言っているようだ。

そして、それは自身の生を蔑ろにする歪みに他ならない。

「でも、ライダーにだけは違った。ぼろぼろになった姿を見た時は救いたいと、アーチャーに襲われた時は守りたいと。ただ、そう思えた

んだ」

私は何も口を挟めなくなった。

「オレの中にはこの上もなく綺麗な記憶があった。間違いなくそれが一番大切なものだった」

それが、少年を縛る鎖に他ならなかったのだろう。

「だけど、砕かれた」

少年が微笑む。

「ライダーを綺麗だと思ったんだ」

苦笑いしながら続けた。

「もしかしたら、単に男として……その……魅力的な女性に欲情してるだけかもしれない」

「……それでいいのですよ」

私は浅ましい。

この少年なら、私の空虚な抵抗など苦も無く突き抜けてくるだろうと期待していた。

最初からわかっていたのだ。

私ではこの少年に敵わないと。

「士郎……」

私は形だけの自制を解き、無駄な抵抗を止めて欲望のままに少年に抱きついた。

「私はどうしようもないくらいあなたが好きです」

そのまま貪るように彼の唇を求めた。

「!？」

彼の目が私の顔の数センチ先で、何度も瞬きしている。

道行く人々の何人かはこちらを見ていたようだが、今の私には全く気にならなかった。

第19話 7日目③ 「蛇神」

E t u r n

「お邪魔してるわよ。衛宮君」

日が落ち切る少し前にライダーと二人で家に帰ると、遠坂が玄関で出迎えてくれた。

「あら、いいじゃない。その服。ライダーのスタイルの良さが際立つわね」

と言いつつも、やや不満げなご様子だ。

今のライダーの服装はハイネックセーターに、ロングパンツである。

「でも、ちょっとシンプル過ぎるかしら。もっと攻めて欲しかったわね」

辛口の評価をいただきながら、居間に向かう。

最初の店で買った服を遠坂にはあまり見せたくないな。何を言われるかわからない。

とは言え、遠坂の口撃は思ったより穏便だった。もつとからかってくるかと構えていたのだが、おそらく桜もいることに配慮したのだろう。

「お帰りなさい。坊や」

「お帰りなさい。先輩」

居間に入ると、台所で夕食の準備をしていたキャスターと桜が挨拶をしてくる。

この二人がそこにいるのは、既に違和感がなくなっていた。

「ただいま・・・」

と返しながら、オレは固まってしまった。

「なんでお前がそこにいるんだ?」

「見てのとおり料理をしている。わからんのか?」

なぜかうちの台所にすんなりとアーチャーが収まって、桜とキャスターと一緒に夕食の準備をしていた。

「あ、私が是非ご一緒したいって言ったんです」

「私も面白そうだから、お手並み拝見しようと思って」

「でも、アーチャーさん、本当にお料理上手なんですよ」

「本当。すごく丁寧だし、全てにおいて滑らかで手際がいいわ」

「ふ。お褒めに預かり光栄だ。食事はあらゆることの潤滑油になる。サーヴァントとしても、できるに越したことはないからな。精進しているのだ」

「そんなわけではないでしょう。こつちに現界してから身に着くようなものじゃないわよね。あなた料理人の英霊なのかしら？」

「ふん。そうかもしれないし、そうでないかもしれないな。こういう時に、無粋な勘繰りは止めにした方がいいかね」

「それはそうね。失礼したわ。ごめんなさいね」

「キャスターさんの言葉遣いつてすごく上品で優雅ですよ。それが板についていてとっても羨ましい。素敵なお様で感じです」

「あら、ありがとう。そういうお世辞は素直に嬉しいわ。桜ちゃん」

入り込む余地は欠片もない。

めでたくオレの居場所が、居間になってしまったようだ。

「む、塩麴のストックがある。やるな小僧。これでムネ肉もいける。ナンプラーか・・・アジアンテイストも取り入れてみるか」

「ほんと、どんな英霊よ・・・」

「今度レシピ教えてくださいね」

「勿論だとも。小僧のレパートリーでは所詮限界があるだろう。弟子は師を越えるもの。遠慮なく藍より青くなるがいい」

「ふふ。私、実は早く先輩を追い越したいから、アーチャーさんに色々教えて貰います」

「了解だ。我が料理は無限に精製可能。いくらでも教えてあげよう」

「料理は精製するものじゃないでしょう」

「そうだったな。料理に対して失礼な表現だったかもしれない」

気になりすぎる会話が、向こうでは延々と続いている。

オレの聖域であるはずの厨房が、ヤツの固有結界で完全に侵蝕されてしまったようだ。

「アーチャーさんの料理、きつとすごく美味しいですよ」

準備が終わり、桜もこちらに料理を運んできた。

葛木も既に学校から帰ってきている。

「私ではないぞ。桜。私達三人で作った料理だ」

何か腹立たしいことを言っているヤツがいるな。

「でも本当に、私たちはレシピを教えてもらいがてら、少し手伝っただけよ」

座卓には、レタスと卵のサラダ、ゴーヤとツナの和え物、ジャーマンポテトに、鶏むね肉の塩麴焼き、砂肝のナンプラー炒め等々が所狭しと並べられていった。

7人分の料理となれば、大層なボリュームだ。

ゴーヤやパクチーなんてどこから出てきたのだろうか？

あいつ、食材も投影したんじゃないのか??

「今日は、時間の制約で簡単なものしか作れなかったが、次回はもっと下ごしらえからしっかりと準備して、じっくりと作りたいものだな」

「わあ。楽しみです」

「その時も一緒に一緒にさせてもらおうわ」

次回ってなんだよ……

「この料理には、酒が欲しいところだな」

葛木が大人の発言をした。

「ええ。早速ご用意いたしますわ、宗一郎様。私も是非一緒に」

キヤスターが目を輝かせながら、頷いた。

「坊や。お酒はあるかしら？」

「あるわけ……いや、藤ねえのストックがあるか……」

「私も一緒に与ろう」

アーチャーが乗っかって来た。

「小僧も飲むか？」

「む。衛宮。お前は成人していたか？」

葛木が教師らしく釘を刺してきた。

「えつとですね……黙秘権を行使します」

「・・・あの、私もいただいてよろしいでしょうか？」

ライダーがおずおずと手を挙げた。

中華料理店でも所望していたから、彼女はお酒がかなり好きなのだろう。

「本当に美味しかったです。アーチャーさん。また、一緒に作りましょうね」

「最高だったわ。アーチャー。いつもは洋食メインで作ってくれてるけど、こういうのもいいわね」

「凜はいつもアーチャーに料理を作ってもらっているのですね」

「本当に美味しいわ。簡単そうに作っていたけど、こんなにも味わい深いなんて」

「素晴らしい。酒の味も引き立つ」

ああ、はいはい。美味いですよほんと。

料理に罪はありませんから。

とは言え、気になっていることがあった。

普段、それなりに料理する者の勘なのだろうか・・・

「この味付けとか、手のかけ方とか、何か似ている気がするだよな・・・」
宴もたけなわという雰囲気か場を満たす中、オレは一人で考え込んでいた。

「少し、失礼します」

隣にいた桜が小さく断って席を立って、居間を出ようとした。

そこで敷居に少し躓き、

ドサツ

と、倒れた。

「桜!?!」

その場にいた何人かの声が重なったが、一番近くにいたアーチャーが素早く桜の体を抱え起こそうとした。

「む・・・少し熱いな」

「・・・あ、すいません。アーチャーさん。私、ドジで。すぐに自分で立ちますから大丈夫です」

少し上気した顔でそう言った桜だが、体に力が入らないのか、すぐには立ち上がれなさそうだった。

「桜、キミはどうやら体調が優れないようだな。無理をしないほうがいい」

桜の額に手を当てた。

「熱も少しあるな。寝室で休んだほうがいい」

そう言っつて、そのままごく自然な流れで桜の体を、自分の胸の高さまで両手で抱え上げた。

「え？・・・え？・・・今、私、お姫様抱っこされてますか・・・？」

桜が戸惑いの声を漏らす、アーチャーは構わず桜を抱えたまま廊下に出て、離れにある桜の部屋へと向かった。

あつという間の出来事だった。

「・・・」

その場にいた殆どの者が、一連の流れに置いてきぼりになってしまったようだった。

「あいつ、ああいうところが何か気障つたらしいというか、堂にいつているというのか、カッコいいというのか、わからないわよね」

遠坂が文句を言っているのか、賛辞を送っているのかわからない混乱したコメントを発した。

「ふむ。男子たる者ああいう振舞いができるのは重要だな」

葛木は少し酔っているようだ。

「・・・は、宗一郎様にお姫様抱っこ・・・」

「桜の容態が心配ですね・・・」

キャスター、ライダーが思い思いの発言をする。

何にせよ、桜の様子を後で確認しに行かなくてはならない。

それにしても・・・

「あいつ、桜の部屋の場所がわかるのか・・・」

その後、桜の様子を確認しにいったが、38度近い熱があったので、一旦、常備薬を飲んでもらい、ゆつくり休むよう促した。回復の状況が芳しくなければ、病院に行くことになる可能性もあるだろうか。

一方で、明日はアインツベルンの城に行き、イリヤスフィールと話を
する予定だ。展開次第では、最悪バーサーカーと戦闘になる可能性
もある。

こちらはライダーとアーチャーがいるが、セイバーとアーチャーの
二人がかりで互角だったことを考慮すると、不利と言えるだろう。

オレは少しでも投影をスムーズにできるようにしたかったので、土
蔵に籠ることにした。

「強くならなきゃな」

微力だとしても戦力になる必要がある。

昨日のランサーとの戦いでアーチャーは数十に及ぶ武器を投影し
てみせた。固有結界と呼ばれる特殊な空間だったからこそできたの
だろうが、オレとしてはそのうちの数本でも投影できるか試してみた
い。

きつと戦術の幅が広がるだろう。

「トレス、オン」
「投影、開始」

投影するのは、アーチャーが【フルンディング赤原猟犬】と呼んでいた敵を追尾す
る剣だ。

「ふう……」

オレの手の中には、それと思しき剣があった。うまくいったようだ
が、実際に使ってみないと確認できない。その一方で、そんなテスト
がここでできるはずもなかった。

「見事なものですね」

オレは突然の声に面食らった。

「ラ……ライダー!？」

投影に集中していたオレは、土蔵の中に入ってきたライダーに気付
かなかったのだ。

彼女は、夕食時まで着ていたシンブルな装いではなく、今日、一軒
目の専門店で買った女性らしさが際立つ服装に着替えていた。

とてつもなく似合っており、暗がりの中、月明かりに照らされた彼
女の姿は神々しささえ感じられた。

「ぐくり……」

自分の喉が鳴る音がやけに大きく聞こえた。

この世のものとは思えないほどの光景を前にして、いきなり夢の中に取り込まれたように、現実味が薄れていくのを感じた。

「この服は似合っていますか？ 土郎」

目の前の彼女が美しい声で問い掛けてきた。

「・・・あ・・・いや・・・えっと・・・」

初めて彼女の素顔を見た時に戻ってしまったかのようだった。

頭の中が真っ白過ぎて、何を聞かれたのかも理解できない。

今のオレは、とてつもなく間抜けに見えるだろう。

「?どうしましたか?」

かっこ悪い自分をこれ以上見せたくない。

なんとかか、言葉を紡がないといけない。

「えっと・・・ライダーさんは女神様のようです・・・」

「・・・」

今度は、ライダーが固まってしまった。

あれ?

オレ、今何て言った?

「・・・えっと、土郎。大変嬉しい言葉なのですが、私はこの服が似合っているか聞いたのですが・・・大丈夫ですか?」

大丈夫なわけない。

こんなの反則だ。

「・・・いや、ごめん。ダメだ。綺麗すぎて直視できない」

やっと、何とか少しはまともなことが言えた。

「好きな男性にそう言われると、本当に恥ずかしいですね。でも、素晴らしい嬉しいです」

ライダーが少しはにかむような微笑みを浮かべた。

「可愛い・・・」

その様は本当に可愛らしかった。

ライダーがたまに見せる戸惑いや、恥ずかしがる素振りには、普段の大人びた表情や振舞いとはギャップがあって、少し子供っぽい。

彼女には綺麗なだけではなく、こういう一面がある。

「そういう表現は私のような大女には似つかわしくない。凜や桜にこそ相応しい」

彼女は、背が高いことについてコンプレックスがあり、女性は小さくて可愛らしいほうが良いという思いが強いようだ。

それが、自己評価の低さに繋がっているのだろう。

オレからすればとんでもない勘違いだったが、彼女なりの背景があつてのことだろう。

「ライダーも意外と男心がわかっていない気がするな」

ライダーの戸惑った素振りを見たことで、少し落ち着いてきた。

「そうでしょうか？まあ、私が付き合ってきた男は、碌でもない男が多かった気はしますが」

「オレが碌でもない奴らの一人にならない保証はないけど・・・」

正直、自信などない。

女性経験などないのだ。

自分がどんな振舞いをしてかすのか見当もつかない。

「土郎。もう私は公園でしたような浅ましい抵抗をするつもりはありません」

ライダーは真剣な表情になって言った。

「浅ましい？」

どういふことだろうか。

その真意はわからなかったが、彼女なりの葛藤があつたということだろうか。

「あなたは、私を受け入れてくれる。それでも、伝えておく必要があると思うからお伝えします」

「ああ。ちゃんと聞くよ」

「ありがとうございます・・・先ほどお伝えしたとおり、私は生前、何人も男との経験がありますし、こちらに現界してからもあります。おそらくこの時代の貞操観念からすると、ふしだらと言えるでしょう」

「過去の事は構わない。でも、オレと好きあつている間は、そこは堪えて欲しい」

「その点については、お約束します」

「それなら、何の問題もない」

「そして、既にお察しかと思いますが、私の真名はメドゥーサです。サーヴァントとしては反英霊に該当する怪物です。士郎が綺麗だと言ってくれるこの姿は、怪物に変えられる前のものに過ぎません」

「この後、怪物に変貌してしまう可能性もあるのか？」

だとすれば、それを止める手段を模索するだけだ。

「いいえ。私に対して人為的な手が加えられない限り、大丈夫でしょう。でも、私の心はやはり本来の人のものからは逸脱しています。先ほどは、あなたの言葉で封じられた形になりましたが、この点については敢えて、もう一度、伝えさせていただきます」

「ライダーは、現界してから自分の心の在り方に何も変化がなかっただろうか？」

「え？・・・いいえ。決してそんなことはありません。大切なものがくつもできませんでした」

ライダーは即答してくれた。

「昨日、学校でも言ったが、オレはライダーがああ結界を張ったことに何の躊躇いもなかったとは思っていない。でも、現界した直後のお前だったら、本当に何の躊躇いもなかったんじゃないか？」

「それは・・・そうですね」

「であれば、これから変わることもできるってことだ。少なくとも、オレがお前に人を殺さないでくれと言え、考えてくれるだろう」

「ええ。勿論です」

「少しずつ、変わればいいんだ。何が人として正しいか。それはライダー自身が知っているんだろう？」

「はい」

ライダーは、ほっとしたような笑顔を浮かべて頷いた。

「それにしても、癩ですわね」

「は？」

突然、ライダーが形容し難い、なんとというか極悪な笑顔を浮かべた。女神は突然、邪神に変貌した。

「そもそもあなたは、私より遥かに人生経験のない少年に過ぎない。それなのに、毎度毎度、私はやられてばかりです」

「え？毎度やられているっ？」

何のことかさっぱりわからない。

「どうやら、言葉ではあなたに必ず負かされてしまうようですから、そろそろ、実力行使に訴えてもいいかもしれませんね」

「あ……いや……暴力反対……」

ライダーが距離をゆつくりと詰めてきた。

オレは、気圧されてじりじりと下がるが、ここは土蔵の中だ。すぐに壁際に追い詰められてしまった。

相変わらずの笑みを浮かべたまま、最高に綺麗な彼女の、途方もなく美しい瞳がオレの目を見つめていた。

「私は怪物ですから、我慢がきかないのです」

ゆつくりとその両腕が伸ばされ、オレの首に巻きついてきた。

そのまま、ぐいっと、抵抗できるわけもない力で顔を引き寄せられると、おれの口は呼吸ができなくなつた。

蛇のような舌がおれの舌に絡みつき、吸い尽くされていくと同時に首に回されていた腕の片方が、少しずつオレの下腹部に向かっていくのを感じる。

こうなつてしまえば、所詮一匹の雄オスに過ぎないオレは、これから起こるであろうことに、緊張しつつも胸躍らせていた。

「いただきます」

オレは成す術もなく、蛇となつた女神に絡め捕られた。

第20話　　8日目①　「アインツベルン城外の戦い」

E t u r n

「ちよつとライダー。あなたなんで霊体化しないのよ？アーチャーなんてボンネットの上よ」

ライダーを挟んでオレの反対側に座る遠坂がライダーを詰る^{なじ}。

「士郎がせっかくだから直接乗るように提案してくれたのです」

「だからって、なんであなたが真ん中なのよ？普通小柄なほうがそこに座るものよ」

「それでは、私が士郎と密着できな…いえ、私はサーヴァントです。犠牲になるのは当然かと」

「…欲望がダダ漏れじゃない。この似非^{えせ}パリコレモデルが…」
「うるさいわねえ。宗一郎様が運転に集中できないじゃない」

助手席に座るキャスターが振り返って二人を非難する。

「そもそもあなたは乗る必要がなかったのではないのですか？」

それに対してライダーが冷淡に反論する。

「何言ってるのよ。この車は宗一郎様の物よ。その助手席に私が座らないで誰が座るのよ」

「論点が伝わっていないようですね」

「あ、あの…オレが真ん中になれば丸く収まりそうな気がします
が…背丈も遠坂とそんなに変わらないし」

オレはおずおずと提案する。

「衛宮君は黙ってて！」

「士郎にそんなことはさせられません」

「はい…すいません…」

「車を出すぞ。キャスター、シートベルトを忘れるな。義務ではないが、後部座席の者も可能な限りするように」

葛木が女性陣の口論を意に介さず、淡々と注意事項を伝えてきた。

「はい」

4人の声が重なった。

一昨日の騒動について、学校では改めて現場の確認を行うことになってる。

生徒だけでなく教師側もごく一部の教師以外は出勤しないことになった。そのため、葛木は休暇をとることができた。

アインツベルンの城がある郊外の森は遠く広大だ。葛木に車を出してもらい、オレ達は城に近付けるギリギリまで送ってもらったことにした。

その後、葛木とキャスターは一旦うちに戻って、体調を崩している桜の看病も引き受けてくれることになっていた。

「どうやら車で近付けるのはここまでのようだな」

葛木が路肩に車を停車させた。

正面には鬱蒼とした森が広がっているが、ここを抜けていくしかないらしい。

「坊や、くれぐれも気をつけるのよ。危険を感じたらすぐに逃げなさいね」

「帰る時は、また迎えに来る。しっかりと情報を得てくるように」

今回、キャスターは使い魔の鳩をオレに託していた。こちらの様子もわかるし、帰るタイミングもわかるわけだ。

敢えて危地にまで赴きはしないが、こちらの様子は気にかけてくれているようだ。

「さて、ここからは自分の足を使うしかないわよ」

葛木とキャスターの車が元来た道を引き返していくのを見送ったオレ達は、森へと足を踏み入れた。

「抱えて行こうか？凜」

実体化したアーチャーが聞く。

先程までは霊体化して車の上に乗っていたのだ。

「緊急事態になればね。今は時間もあるし」

実は到着する凡^{おおよ}その時刻をイリヤスフィールには伝えてある。昨日、キヤスターが使い魔を使って今日訪問することを連絡しており、向こうも承諾していた。

順調に話が進んだのは意外だったが、イリヤスフィールとしても他のマスターと会話をしてみたいという好奇心があるのかもしれない。

かれこれ2時間程も歩いただろうか、鬱蒼とした森の中をオレ達4人が進んで行くと、ついに木々の向こうに目的の城が微かに見えてきた。

正直まだ遠い。よくもまあこんなところに居を構えようと思ったものだ。

時刻はそろそろ正午になる。

ふと上を見上げたオレは、奇妙なものを見た。

なんだあれは？

上空を奇妙な形をした小型の飛行機がオレ達を追い越すようにして飛び去って行った。

「この辺に飛行場なんてあったかしら？」

遠坂も不思議に感じたようで、疑問を口にした。

「ないだろ。個人使用の小型機なら、本格的な飛行場がなくても飛べるのかな？」

自家用機に関する実情なんて縁遠すぎるのでさっぱりわからない。

「アーチャーなんだったかわかる？」

「いや、ちょうど私は木陰に入っていたので見えなかったな」

気にはなつたが、オレ達はそのまま進むしかなかった。

もう少しで城に着くはずなのに、先へ進めば進むほど、森を形作る木々とその葉はますます深く、濃くなっていくようだった。

Interlude in

「ふん、久しぶりだな。この古臭い城に来るのは」

金色の鎧に身を包んだ英雄王ギルガメッシュは、乗っていた自身の

飛空艇から地上に降り立った。

目の前にはアインツベルンの城が聳え立っている。

「どうした？人形ども。天上天下にただ一人の真の王たる我がわざわざ出向いてやったのだ。丁寧に迎え、もてなすのが礼儀というものであるう」

正門に向けて、轟然と言い放った。

「何ですか？あなたは？」

「ここは、イリヤの城。無礼な客は通さない」

「下がっていないさい。セラ。リス。あの男は危険すぎるわ」

待ち構えていたかのように、門が開き、イリヤと彼女の従者であるセラとリスが外に出て、ギルガメッシュに相對する。

サーヴァントであるバーサーカーは3人の背後に片膝をついて控えていた。

「ふむ。さすがに我を待たせる無礼は弁えているようだな。その点は褒めてやろう。主人自らの出迎えご苦労だ」

「ええ。あなたほどの靈基を持つ英雄が客人であるなら、賓客として遇さなければアインツベルンの名が廃るといふもの」

イリヤが凜とした佇まいのまま、突然の招かれざる客にも動じずに対応した。

「ふふ、良いぞ人形。私の目的はお前ではなく、そこにいる神代の英雄ヘラクレスだったが、その態度に免じてしばし問答に付き合っとう」

「目的は何かしら？」

「ふん。知れたことよ。暇潰しだ」

「何ですって？」

「10年もの間、現世で過ごし、この時代の人間どものくだらなさに飽き飽きしてたところで、聖杯戦争が始まった。さて、どう退屈しのぎをしてやろうかと久しぶりに興を覚えていたのだが・・・」

ズズ

言葉を続ける英雄王の後方の空間に歪みが生じた。

「最も我の無聊を慰めるに足る存在のセイバーが、早々に消えるという不届き極まりないことをしでかしたのだ」

自分の言葉に怒りを覚えたのか、金色の王はその宝具【王の財宝】を展開して、空中に出現した剣をそのまま城に向けて放つ。

ドンツ!!

その一撃で頑丈なはずのアインツベルン城の壁には大穴が空いていた。

「!？」

イリヤは身じろぎもないが、セラとリズはその威力に息を呑んだ。

「あの騎士王が我の前に這いつくばり、みつともなくも許しを乞う姿ならば、我の心を満たせるものと思っていたのだがな」

「あなたはその腹いせにヘラクレスと戦おうと思っただけということかしら？ 聖杯を得るために、ここに来たわけではないの？」

「聖杯を得る？ 見識を疑うぞ人形の娘よ。聖杯は宝なのである。であれば、それはすなわちオレのもの。遍く世界の宝は我が宝物庫に由来するのだからな」

「なんという妄言！ 聖杯は我らアインツベルンの悲願！ 断じてあなたのような余所者の物ではありません！」

セラが悲鳴のような怒りを声にした瞬間だった。

ゴツ！

「・・・え？」

ギルガメッシュが王の蔵から出現させた斧が容赦なく襲いかかり、彼女の細い腰を両断していた。

ドサツ・・・

自分に何が起きたか知り得ない表情のまま、セラの上半身が地面に落ちた。

巻き上がった砂埃が彼女の白い顔を汚し、彼女の胴体から流れ出る夥しい量の血液が地面を赤く染めていく。

「・・・セ・・・セラ・・・」

イリヤが口元に手を当てながら、愕然とする。

「よくもセラを！」

怒りに我を忘れたリズが巨大な戦斧を構えて、ギルガメツシュに向けて飛び込んでいく。

「ふん。人形風情になまじ感情などを持たせるから、このような醜態を晒すのだ。何も感じなければ、短い命をこのようにさらに縮めることもなからうにな」

英雄王は陶然とした笑みを浮かべた顔を、右手で覆って嘲る。

「よしなさい、リズツ！バーサーカー！お願い！」

その声に応じて、イリヤの背後に控えていたバーサーカーが弾丸のようなスピードで、ギルガメツシュに飛びかかって行った。

「さあこい。大英雄！……ここからは、神話の世界の戦いの幕開けといこうぞ！」

英雄王ギルガメツシュは悦楽の色を顔に浮かべ、高らかに宣言した。

Interlude out

Et turn

先程の小型機らしきものを見てからさらに進むと、ずっと続いていた森がついに途切れた。視界が一気に開け、目指す城の全貌が明らかになる。

とは言え、まだ、距離は少しある。

「とんでもない場面に到着してしまったようだな」

アーチャーが呟いた。

「どうしたの？」

遠坂が問う。

「サーヴァント同士が戦っているな」

オレも何とか城の外に人がいることはわかるが、状況まではわからない。

アーチャーの視力は尋常ではないということだろう。

「バーサーカーとアサシンってことね？」

「いや・・・違うな」

「そんな筈ないじゃない。ここにあんたとライダーがいるのよ。キャスターは衛宮君の家だし」

遠坂の言うとおりだ。セイバーとランサーが消滅した今、残るはアサシンしかいない筈なのだ。

「私も戸惑っているところだ」

「ええい、まどろっこしい！もう少し近付きましょう。隠れるところはたくさんあるから、大丈夫よ」

遠坂が痺れを切らして、城に近付こうとする。慎重に行くべき場面なのだが、そうとばかりも言っていられない。

「こちらの目的からすると、イリヤスフィールの身柄は保護したいですね」

ライダーの言葉は的を射ている。

「そうだな。戦いで死なれるわけにはいかない」

「でも、バーサーカーを従えてるのよ。相手のサーヴァントがなんだから知らないけど、負けるとは思えないけど」

「いや、これはわからんぞ」

アーチャーの言葉は依然として曖昧なままだった。

身を隠しながら近付くと、オレ達にも状況がわかってきた。

「あれは・・・」

「なによ、あの金ぴかの奴は？」

「・・・バーサーカーがやられている!?!」

そう。信じられないことに、セイバーとアーチャーの二人がかりでも厳しい戦いを強いられたバーサーカーが、今はたった一人のサーヴァントを相手にして、明らかに劣勢を強いられていた。

遠坂の表現したとおり、金色に輝く鎧で全身を覆ったそいつは、金髪であることと、そして、何よりその悠然とした振舞いも相俟つてまさに『金色の王』と呼ぶに相応しい圧倒的な存在感を放っていた。

「ふん！それにしてもこれだけの演目に観客が不在というのも、いさ

はやバーサーカーの蘇生回数は残り少ないのかもしれない。

どうする？

このまま戦い続ければ、バーサーカーが負け、あの金色の王が残るだろう。

「バーサーカーが消え、あの男だけが残った時にどうなるか……私はバーサーカーには勝てる気がしないが、あの男には勝てるかもしれない」

オレと同様に戦況を見つめていたアーチャーが思わぬことを言った。

「は？あんた本気？」

「まあ、相性の問題でな。そのため、このまま戦況を見守り、バーサーカーが倒れるのを待つというのも戦略のうちだ」

「それは違う。オレ達の目的はイリヤスフィールと話をすることだ。その先にあるのは、影の正体の究明とその対処だ」

「ふん。そのとおりだな。当初の目的を忘れてはいなかったか」

おそらくアーチャーは敢えて別の選択肢を提示して、考えを整理させただけだろう。

「あんた達いつの間にか息ぴったりになってない？」

「そんなわけあるか！今のだって明らかにこっちを試す為の、底意地の悪い質問だったぞ」

「ふん。凜ともあろう者がとんだ見識違いだな」

「そうかしら？一昨日あたりから、私が置いてきぼりな気がするわ」

「……いずれにせよ気をつけてください」

ライダーが緊迫した声で注意を促した。

「あの男は、既にこちらにも気付いています」

「!!」

「どうやら、雑種どもが雁首揃えてやってきたようだが、好ましからざる輩やかたも紛れているな。見物客に徹するなら、見逃してやっても良かったのだが、折角の神代の演武を邪魔されるのは興覚めというもの」

目を向けると、前進しようとしたバーサーカーを再び無数の武器で串刺しにした金色の王は、その攻撃の矛先をこちらに向けようとして

いるところだった。

先程までと同様に、男の背後から数十に及ぶ武具が姿を現しつつあった。

驚くべきことにその全てが宝具だった。

一つでも受ければ、ただでは済まない。

「トリース投影、オン開始」

オレと、アーチャーがほぼ同時に詠唱する。

オレは両手に双剣を生み出す。これで、自分に向かってくる武具の一つでも迎撃できるだろうか？

「士郎、凜、下がってください。決して私の前に立たないように！」

ライダーがバイザーに手を掛けながら、オレと遠坂の前に出て、さらにアーチャーの斜め前の位置に立った。

「どうするの？」

遠坂が問う。

「魔眼を使います。完全には効かなくても、重圧をかけることはできます」

そう答えながら、ライダーはバイザーを外して放り投げた。

あいつがこちらを攻撃する意思を見せたのだから、一刻の猶予もならない。

目にはすることはできないが、ライダーの魔力が一気に膨れ上がり、魔眼の効力が発動したことが感じられた。

「ぬうう……!?なんだ、これは……？」

常に余裕を見せていた金色の王の態度に、僅かながら困惑の色が混じった。

だが、ライダーも半ば予想していたとおり、完全にはその効力を発揮できなかつたようで、石化する気配はない。金色の王は、ライダーを上回る魔力を持っているということだろう。

それでも、あいつの動きは鈍っている。

武具の出現速度が低下しており、出現した物も少しランクが落ちていくのがわかる。

その間に、アーチャーが次々と武具を投影し、空中に制止させてい

た。

それは、全て向こうにいる金色の王が出現させている武具と同じだった。

「小癩なっつっ!!^{オレ}私の行動を阻害したうえ、あまつさえ^{オレ}私の宝物の贋作を持ち出してくるとはっ!!」

金色の王は、激怒の咆哮とともに出現させた武具を射出した。

とてつもない圧迫感だ。もし、一人で対峙していれば、あれらが自分に到達する前に10回は心が死んでいてもおかしくないんじゃないだろうか。

だが、実際にはそうはならない。

なぜなら、今はヤツがいる。

「blade works!」

アーチャーが投影した武器を一齐に解き放つ。

——ガガガガガンンンン——!!!

それは、一つとして^{あやま}過たず、金色の王が射出した宝具の対になる武具を激突させ、中空で殆ど全てが相打ちになっていった。

僅かに数本の槍や斧が押し負けて、抜けてきたものもあつたが、それらはライダーが杭剣で弾くか鎖で絡めとっていた。

「……す……」

「す……いわ……」

芸術のような迎撃方法を成功させたことに、オレも遠坂も思わず感嘆の声を漏らした。

「く……」

だが、アーチャーは膝をついた。凄まじい数の宝具を投影したのだ。魔力をこっそり消費したのだろう。

「……雑種どもめ……現界してからの10年で、これほどの屈辱は初めてのことよ……」

全身を怒りに震わせながら、金色の王はその宝物庫から何かを取り出そうとしていた。

「最早この世にお前らが存在した証拠、その全てを消しつくしてくるわ!!!」

もしかしたら、オレ達は獅子を本気で怒らせてしまったのではないか。

そんな後悔がオレの頭を掠めた瞬間だった。

「やっっちゃえーバーサーカーツツ!!」

「!!」

バーサーカーが、猛然と襲いかかった。

金色の王の意識が完全にオレ達に向けられている間に、復活を遂げていたのだ。

「なにっ!？」

その顔に焦りの色を浮かべながら、あいつは僅かに後退する。

しかし、一度は虚空から何かを取り出そうとしていたその手を戻すと、前に突き出すような姿勢で叫ぶ。

「天の鎖よー」

突進してきたバーサーカーが間合いを詰め、手にした巨大な斧剣を振り下ろす寸前だった。

ジャリリリリツ!!

僅かに早く虚空から伸びた複数の鎖がバーサーカーの全身を絡めとり、動きを封じていた。

「!!」

バーサーカーが咆哮して動こうとするが、その鎖は強靱で引きちぎることはできなかった。

だが、あいつへの攻撃はまだ終わらない。

「^{ペル}騎英のツ——」

行つてきます士郎、と彼女は言った。

勝機はこの僅か数秒の時間にしかない。

金色の王が体勢を立て直し、再び落ち着いて宝具を連射することが可能になってしまえば、オレ達になす術はなくなる。

だから、ライダーは^{ベガサス}天馬を喚び出していた。

柳洞寺でアーチャーと戦った時と同様に凜々しく、黄金の手綱を握っている。

あの時と違うのは、その双眸が今は露わになっていることと、オレという荷物を抱えていないことだ。

「頼む。ライダー」

静かに彼女に声を掛けるしか、オレにできることはない。

「フフォン手綱ッ!!」

白く輝く彼女の後ろ姿を見送る。

「雑種どもめ!!」

バーサーカーに対処しながらも、こちらの動きに注意を払っていたのだろう。

ライダーが宝具を発動させた一瞬ののち後に、金色の王は自分の前方に、皮のような材質の大きな盾を出現させた。

驚くべき対応力だった。

ゴウツツツ!

その大盾はアーチャーの盾の宝具のように、受け流すというよりは純粹に頑丈さで押し返すような性質のようだった。

万全な状態で展開していれば、五分だったかもしれない。

しかし、防御の構えに入りきる前に天馬がそこに到達していたことが趨勢を決していた。

「があああああつ!?!」

猛烈な勢いでライダーの天馬は、その大盾に激突、突破して、金色の王を大きく弾き飛ばした。

「・・・お・・・おのれ・・・雑種どもの引き立て役に過ぎない怪物風情によもやここまで・・・」

纏っていた鎧は既に砕けていたが、悪態をつきながらも金色の王は立ち上がろうとしていた。

「あう・・・」

一方で、盾との衝突のダメージを受けたライダーも無傷とはいかない。

傷だらけになって、その場に崩れ落ちた。

「ライダー！」

オレは思わず叫び、彼女に駆け寄って行こうとした。

「ちよつと衛宮君！」

「待て小僧！」

その時だった。

ぞわッ

覚えのある悪寒にオレは、思わず全身を硬直させた。

ヤツだ・・・

あの黒い影が近くに来ている。

そう感じて、その感覚の発生源と思しき左前方の方角に目を向けた。

第21話 8日目② 「頂上決戦」

E t u r n

まさか・・・

オレは信じられないものを見た。

元の姿からは大きく変わってしまった。

直接的な表現としては、白が黒になっていた。

しかしそれでも紛れもなく、小さな身体に鎧を纏い一部の隙も無い凛とした佇まいは、オレの剣となると誓ってくれたサーヴァントのものであった。

「・・・・・・・・セイバー・・・・・・・・」

オレは、懐かしさに目頭が熱くなるのを感じた。

「そんなわけ・・・」

「どういうことだ・・・?」

遠坂とアーチャーが戸惑いを口にする。

「おお、セイバーよ。我^{オレ}のために冥界より舞い戻ったか」

金色の王もセイバーのことを知っているのか、歓喜の表情を浮かべていた。

「・・・・・・・・」

しかし、当人であるセイバーは無言だった。

以前とは、明らかに変質しており、異様な雰囲気纏っている。

そして、何より・・・

その足元から周囲にかけて、あの黒い影が広がっていた。

影は彼女とは別個のものようだが、セイバーは影響を受けていない。

一度、あの影に触れる体験をしたオレとしては、信じられなかった。

つまり、彼女はあの影に近い存在になっているということを示唆しているのではないか。

セイバーは無言のまま歩を進めた。

彼女の最も近くに位置していたのは、ライダーだった。

とてつもなく、嫌な予感がした。
黒く禍々しい剣が、セイバーの手にはある。

以前見た黄金の剣と同じでありながら、明らかに違うもの。

「・・・久しぶりですね。セイバー。あなたは私をさぞ恨んでいること
でしょう」

ライダーは、何を思ったのか。

膝をついたまま、目の前にまで近付いてきたセイバーにそんな言葉を
を投げかけた。

セイバーは、それに答えるかのように自然な動作で剣を振り上げ、
そのまま無造作に斜めに振り下ろした。

無音の世界で、血飛沫が舞っていた。

ゆっくりと崩れ落ちるライダーの姿が目には焼き付く。

美しい髪が虚空に広がり、やがて無残に地に落ちた。

アアアアアアアアツ!?

オレの口からは悲鳴なのか絶叫なのかわからない空気が、声として
の体裁を成さずに吐き出された。

同時に駆け出す。

「衛宮君!」

遠坂がオレを必死になって引き止めようと手を掛けて止めようと
するが、それを力任せに振り払った。

まだ、ライダーは生きている。

セイバーにどう対処すればいいかなんて考えもしなかった。

ただ、彼女を助け出す。

それしか頭にはなかった。

ファツツ・・・

突然、走っているオレの横合いに何かが見れるのを感じた。

ギンツ!!

反射的に右手に持っていた白剣で初撃を弾くことができたが、続け
様に振るわれた攻撃は止められなかった。

ザグツ！

「ぐあああつー！」

右足に短剣を深く突き立てられたオレは、もんどりうって地面に倒れこんだ。

だが、ここで止まるわけにはいかない。

右足の猛烈な痛みを無視して立ち上がる。

「ふっ。しづといな」

ゴツ！

立ち上がりざまに強烈な蹴りをまともに受けたオレは、10メートル近く吹っ飛ばされた。

「ぐっつ!!」

そのまま地面に叩きつけられて、一瞬呼吸ができなくなる。

それでも何とか立ち上がり顔を上げると、オレを攻撃してきたのが何だったのかがわかった。

「アサシンだどっ!?!」

アーチャーが叫ぶ。

確かにそこにはアサシンがいた。

オレを攻撃するまで霊体化していたのだろう。

アサシンはライダーに近付くと、血に塗れた彼女の体を抱え上げた。

「私は私の任務を果たさせてもらおう」

「好きにするがいい」

感情の籠らない声でセイバーが返答すると、アサシンはそのままセイバーが現れた方角へと走り去っていった。

あつという間の出来事だった。

オレにはどうすることもできなかった。

ライダーは、オレの目の前でどこかへと連れ去られてしまったのだ。

ザツ

セイバーは、自身が切り捨てたライダーにも、その体を運び去ったアサシンにも、そしてすぐ近くにいるこのオレにも全く興味を抱いて

いないかのようだった。

彼女は黒剣を手に下げたまま、その歩を今度は金色の王に向けた。オレは、すぐ傍を通り過ぎていくセイバーを呆然と見送ることしかできなかった。

「わかる。わかるぞ。セイバーよ。お前のことを理解できるのはこの我^{オレ}ただ一人。冥界の門を潜り、如何に貴様が変容しようともな」

金色の王は、ライダーの宝具を受けて回復しきっていない体を支えながらもなお、陶然とした笑みを浮かべて近付いてくるセイバーに語り続けた。

「お前は何も変わってなどいない。例え、その面貌にかつてのような^{あまた}数多の感情が表出していなかったところだな。だからこそ」

虚空から、赤い螺旋状の剣のようなものを金色の王は取り出した。

それは、剣というにはあまりにも特殊な形状であり、薄紙も切れそうになかったが、とてつもない代物であることが感じられた。

しかし、そう感じられるだけだ。

理解も解析も不可能な、ただただ凄い物としか表現できない。

「お前は^エこの乖離^ア剣を使うに値する。歡喜^アするが良いぞ」

なおも悠然と言い放つ男の眼前に、既にセイバーはいる。

手にした剣は既に魔力が込められているのか、黒い炎のようなものが纏わりついていた。

「最高の女には最高の手向けをくれてやろう！我が手にかかり、至高の死を迎えるが良い！セイバーよ！」

今こうしてセイバーと対峙している時が、あの男にとっては幸福な時間なのかもしれない。

楽しくて仕方がないという表情を浮かべて、手にした赤い剣を男は振り上げる。

「^エ天地乖離^マす……」

しかし、勿論遅過ぎる。

セイバーは手にした黒い剣を、あっさりと下から斜め上に切り上げるだけだった。

「貴公の話は長過ぎる」

上半身と下半身に分断された男の体から噴出する血飛沫を避ける素振りも見せず、セイバーは一言だけ告げた。

「ふはははははははははは！——そう無理に邪見な態度をとるな、セイバーよ。我を討ち斃すという至高の栄誉を得たのだ。もつと喜びに打ち震えるべきところであろう！」

死の間際に瀕してなお、金色の王の態度は何も変わらない。

だが、その言葉は微塵も彼女には届いていないようだった。

「貴公に引導を渡すモノは別にある」

そう言い捨てて、セイバーはその歩みを今度はバーサーカーに向けた。

「なに？」

セイバーの言葉に、一瞬、金色の王は虚を突かれたようだった。

崩れ落ちたその体には、あの黒い影が迫っていた。

それは、まるで死肉に群がるハイエナのように、ただただ食事を求めてやってきたかのようだった。

「忌々しい。興覚めな結末になったものだな」

金色の王は、己に向かつてくる影を見ながら心底つまらなそうに呟いた。

やがて、その体は黒い影にたかられるようにして、ゆっくりと消えていった。

圧倒的な強さと存在感を誇った規格外のサーヴァントも、その影にとっては捕食の対象でしかないようだった。

「な……何なのよ……あなた……」

イリヤスフィールは事態の変化に戸惑っているようだった。

そもそも金色の王との戦い自体が、完全に想定外だったはずだ。

そいつを切り捨て、しかも黒い影を従えるようにして、近付きつつある脅威。

即ち、黒いセイバーがゆっくりと迫りつつあった。

バーサーカーは威嚇するように咆哮した。

その姿は荒々しく・・・猛々しく・・・それでいて神々しかった。
「イリヤスフィールを確保して、撤退するわよ」

遠坂が眼前の戦いに気圧されながらも口にする。

「そうしよう。幸いセイバーはイリヤを攻撃する意図が感じられない」

アーチャーが同意する。

「確かにそうね。さっきの金ピカは結構狙ってたけど・・・って、衛宮君？大丈夫？」

何を言ってるんだ遠坂？

オレはいつもどおりさ。

「全然ダメね。いつもの衛宮君じゃないわ」

つかつかと歩み寄ってきた遠坂が、右手を上げた。

何をするつもり・・・

パンツ！

遠坂は躊躇いなく振り上げた手でオレの頬を打っていた。

「しつかりなさい！あなた、ここであつさり諦める程度の覚悟でこの戦いに臨んだわけじゃないでしょう！まだ、終わったわけじゃないのよ！」

ライダーがセイバーに斬られた瞬間からぼんやりしていた意識が、遠坂の平手打ちと言葉によって少し鮮明になった。

ああ。

すまない。遠坂。

いや、ありがとう。

そう、まだ終わったわけじゃない。

「遠坂。助かる」

希望を垣間見たオレは、思考にかかったままの靄もやを辛うじて振り払った。

「先ずは、この場を切り抜けなくちゃな」

そうしない限り次もないのだから。

「なんとか持ち直したみたいね。急ぎましょう。セイバーも脅威だけでなく、一番の問題はあのドロドロよ」

確かにセイバーとバーサーカーの戦場付近が今は泥のようにも見える黒い影にかなりの部分が覆われつつあった。

バーサーカーはほとんど本能的にそれを避けながら戦っているようだ。

今は2人の戦場とイリヤスフィールはだいぶ離れつつあった。

バーサーカーの動きが激しいため、戦場が刻一刻と移動している。

この場からイリヤスフィールを引き離すなら今が好機だった。

「イリヤ。ここを離れるぞ」

真つ先に動いたのは、アーチャーだった。

「な、何するのよ?! 私はバーサーカーのマスターよ。ここから離れるわけにはいかないわ!」

「バーサーカーの狙いがわからないのか? あいつはキミをなるべく敵から離そうとして戦っている」

「え?」

「セイバーも危険だが、あの黒い影も厄介だ。この場から離れるべきだ」

「そ、そんな・・・」

イリヤスフィールの抵抗が僅かに緩む。

そうやって心の隙間に入り込んだ瞬間に、アーチャーは少女の体を持ち上げて小脇に抱えた。

「な! 何するのよ!」

彼女はバタバタとアーチャーの腕の中で暴れるが、流石にサーヴァント相手ではどうにもならなかった。

イリヤスフィールができることは、自身の守護者に対して精一杯声援を送ることだけだった。

「負けないで!! バーサーカー!!」

戦いは一方的になりつつあった。

そもそも白兵戦においてすら優位に立てないうえ、セイバーは時に黒剣に魔力を付与して振るうことで、その力をまるでレーザーのように放出する。これにより、遠距離でも破壊力のある攻撃を繰り出していた。

対するバーサーカーは、離れた際には城の壁や木などを凄まじい速度で投げつけるが、これは牽制程度にしかなくておらず、セイバーには避けられるか弾かれるかで対処されていた。

このセイバーとの戦いでバーサーカーは既に4度斃された。

「????????」
「それも狂戦士は猛々しく咆哮する。」

理性はなくなるとも、英雄はただひたすらに守るべきものために立ち向かう。

「行くわよー!」

オレ達は、巨人の雄叫びを背中で聞きながら、森の方へと駆け出した。

その時、背中にとてつもない圧力を感じた。

「約束された」

だから振り向かずにはいられなかった。

アーチャーも遠坂も同様だった。

「勝利の剣」

黒く禍々しくも美しい光の奔流が曇天の空を裂いた。

その余波である風圧と、実際に飛んでくる木々や石がその圧倒的な破壊力を如実に物語っていた。

既に遠く離れていて確かなことは言えないが、その光の中にイリヤスフィールの不屈の守護者が消えていくのが見えた気がした。

「……バーサーカー……」

己が勇者の最期を見届けることすらできず、白銀の少女は涙を流していた。

第22話 ③ 「消えゆくモノ」

E t u r n

バーサーカーとの戦闘の後、セイバーは逃げるオレ達を追ってはこなかった。

「セイバーは淡々と仕事をこなしているっていう雰囲気だったわね」

という遠坂の言葉どおり、彼女の行動は充分に抑制されている印象だった。

オレ達を殺すことは、セイバーの仕事ではなかったのかもしれない。

長く陰鬱な森を抜けると、葛木とキャスターが車で迎えに来てくれていた。

「坊や、お疲れ様。話は後にして、とにかく先ずは傷の治療をしましよ
う」

使い魔を通じて二人は状況を把握しており、アサシンにやられたオレの足の傷は、そう言つてキャスターが治療してくれた。

イリヤスフィールは道中、終始無言だった。

まだ、状況を受け入れきれしていないのか、あるいはオレ達を警戒しているのかはわからない。

今日も当然のように、アーチャーは台所に立っていた。

桜とキャスターも自然な流れであるかのように、アーチャーの傍らで会話をしながら、夕食の準備を共にしている。

「桜、体はもう大丈夫なのか?」

アーチャーはいつの間にか桜を呼び捨てにしている。

オレとしては面白くない状況だが、変に突つかかっても心の狭い人間のようには見えてしまうので黙認するしかなかった。

「ええ。お昼過ぎまでずっと眠っていたら元気になりました」

「それは良かった」

「でも、眠っている間はかなりうなされていたのよ。だいぶ心配したわ」

「キャスターさんに看病してもらったおかげです」

「本当に見ていただけだよ。シーツの交換や着替えの手伝いくらいはいたけれど」

「いいえ。充分です。ありがとうございます」

桜の体調は無事回復したようでホツとした。でも、どこことなく無理をしているようにも見えるので少し注意しておかなければならない。「さて、そろそろ今日の出来事について、整理しましょう。思い出したくもないこともあると思うけど・・・」

台所の会話を気にしながらも、遠坂が発言した。

「そうだな」

オレは一も二もなく遠坂に同意した。

とは言え、状況からするとオレと遠坂だけの話し合いになりそうだった。

葛木とイリヤスフィールもいるが、積極的な発言は殆どないだろう。できればイリヤスフィールの意見も聞きたいところではあるが。

「まずは、あの金ピカね。あいつ一体何だったのかしら？」

「とんでもなく強かったな」

イリヤスフィールが少し反応したように見えた。

「そもそもアサシンが二人いた。ということも踏まえると、サーヴァントが7人しかいなくて、1クラス1騎という固定観念を捨てたほうがいいな」

「そのとおりね。だいぶ調子が戻ってきたみたいね衛宮君。良かったわ。あいつのクラスとしてはセイバーかアーチャーかライダーかしらね」

「戦い方はあいつに似てたな」

オレは厨房の篡奪者に目をやった。

「そうね。アーチャーという線が強いかしら。まあこの際クラスにはそこまで拘らなくていいから、仮に『偽アーチャー』にしときましよう」

「あいつはなぜあそこにおいて、なぜバーサーカーと戦っていたのかが問題だな」

オレは、再びイリヤスフィールに目をやる。

「あいつは暇潰しにバーサーカーと戦いたかっただけよ」

少し落ち着いたのだろうか。ようやくイリヤスフィールが口を開いた。

「あれが暇潰しなのか・・・」

「勿論、その先には何か目的があったのかもしれないけど、少なくとも今日はそれが本心だったみたい」

あの金色の王、いや偽アーチャーは、あらゆる言葉に唯我独尊という態度が溢れ出ていた。自身のしたいことを、気儘に実行せずにはいられないということであれば、暇潰しという理由もわからないでもない。

「本当はセイバーに会いたかったみたいだったけれど」

「ああ、セイバーとは顔見知りの様子だったものね。まあ、当のセイバーのほうは素っ気なかったけど」

「ということ、前回からの生き残りという可能性が高いな。セイバーも前回の戦いに参加したと言ってたし」

「前回の聖杯戦争は決着がつかずに、終わってしまった。だからこそ、僅か10年で今回が始まったわ。つまり、前回の生き残りがいてもおかしくないかもしれないわ。」

イリヤスフィールは自身の見解を補足した。

「なるほど。じゃあ、あいつは前回のアーチャーという推測が成り立つな」

「そうね。ずっと現界できてたのか、その場合、魔力はどうしてたのかとかは気になるし、綺礼に確認すればわかるかもしれないけど、大筋で間違いなさそうね」

遠坂は大きく頷いた。

「次はセイバーのことね」

遠坂が少し心配そうにオレの様子を窺った。

「セイバーは明確な目的があったみたいだな。やるべき事を淡々とこなしているようにも見えた」

「ええ。ライダーを無力化すること、偽アーチャーとバーサーカーを

斃すこと。これが彼女の仕事だったのでしようね」

「あの黒い影に囚われた結果として、あんな姿に変貌したんだろうな」
「そうね。明らかに前より強かったけれど、以前のマスターだった衛宮君が未熟だったから、今日の強さがある意味本当の彼女の力なのかもね」

「そうだろうな」

否定する材料はなかった。

「今回は、私達は眼中になかったみたいだけど。間違いなく、あのセイバーは黒い影と関係がある。つまり、彼女は明確に私達の敵だつてことね」

「ああ、そういうことになるな」

言いながらも、胸がズキリと痛んだ。

彼女を元に戻す方法はないのだろうか。

「最後に、ライダーのことね」

一番、わからない出来事だった。

なぜ、セイバーはライダーに止めを刺さなかったのか。

普通、サーヴァントは斃せる時に斃すはずだ。

さらに、なぜアサシンが現れ、そして彼女を連れ去ったのか。

「利用価値があるということなんだろうな」

「状況からしてセイバー、アサシン、黒い影。この三者には繋がりがあるってことよね。彼らが自分たちの陣営にライダーを取り込もうとしているのか、あるいは、彼女のマスターに対する交渉材料として利用しようつてどこかしら」

「アサシンは柳洞寺でも黒い影とほぼ同じタイミングで現れたわ」

料理を運んできたキャスターが、配膳しながら会話に参加してきた。
た。

「どうやら夕食の準備ができたようだ。」

「話は一度中断して食事にしましょう。坊やたちは昼食を摂っていないから、お腹が空いたでしょう」

キャスターはちらりと桜のほうを見ながら、提案してきた。

桜はライダーのマスターである可能性がある。

深入りした話は控えたほうがいいということ、キャスターは示唆してきたのだ。

「ああ。そうしよう。ありがとうキャスター」

「今日もアーチャーさんの料理、きつと美味しいですよ」

桜もこちらに料理を運んできた。

「昨日も言ったが、桜、私だけが作ったわけではないぞ」

アーチャーが困ったような顔で桜を注意した。

会話は賑やかとは言えなかったが、それでもキャスターや遠坂が率先して喋ってくれたお陰で、悪くない雰囲気夕食の時間は終わろうとしていた。

ライダーのことが気掛かりで、とても明るい気分にはなれなかったが、落ち込んででも事態は好転しない。

バーサーカーを失い、さらに世話をしてくれていたメイドを二人とも失ったらしいイリヤスフィールの心中のほうがオレよりももっと辛いかもしれない。

「……………」

ふと、桜に目をやると、顔が蒼白になっていることに気が付いた。

そう言えば、食事中、桜だけは無言だった。あまり箸も進んでいない様子だった。

調理中はあんなに楽しそうだったのに。

「桜? どうした?」

「…あ、いいえ。なんでもありません。アーチャーさん、今日の料理も本当に美味しかったです。また、教えてくださいね」

「ああ、勿論だ。だが、桜、キミはどうやらまだ体調が優れないようだな。無理をしないほうがいい」

アーチャーも桜の様子がおかしいことに気が付いていたようだ。

桜の傍まで来て、額に手を当てた。

「やはり、少し熱もあるようだな。休んだほうがいい」

「あ…はい。わかりました。ちよつと気分が悪いのは確かなので、部屋で休みますね。今日は、昨日みたいに運んでもらわなくても大丈夫

夫ですから」

そう言つて桜は少し頼りない足取りで、居間を出ていった。

昨日今日と続けての桜の体調不良は気になるところだったが、他人の家という慣れない環境。そして聖杯戦争に巻き込まれたという状況はかなりのストレスになっている筈だ。

止むを得ないのかもしれない。

「桜のことは気になるけれど、当初の目的を果たしましょう」

桜が居間から出て、暫く経つたところで、遠坂がおもむろに宣言した。

そう。今日、リスクを冒してアインツベルンの城まで赴いたのは、イリヤスファイルから聖杯戦争の核心に迫る話を聞くためだ。

「イリヤ。混乱もあるだろうし、我々に対して心中穏やかならぬものがあることを察してはいるが、少しは落ち着いてきただろうか？」

アーチャーが気遣うようにイリヤスファイルに声を掛ける。

「・・・ありがとう。アーチャー。それに、あなた達の作ってくれた料理、とても美味しかったわ」

イリヤスファイルはぎこちないながらも、笑顔を作つて、感謝の言葉を返した。

「アインツベルンのマスターがこれ以上無様な姿は晒せないわ。聞きたいことがあるのでしょうか？あの場から助けてくれたのもあなた達だし、可能な限りお答えするわ」

精一杯の気丈な態度で少女は言った。

「ありがとう。イリヤ」

アーチャーがイリヤのその態度に礼を返す。

「それじゃあ、早速聞くけれど、今日、あなたも見たあの黒い影や泥には心当たりはあるかしら？」

先ずは、遠坂が口火を切る。

「私も正確にはわからないけれど、おそらくあれの正体は、聖杯の中にある呪いだと思うわ」

「聖杯の呪い？」

昨日、神父も同じようなことを言っていた。

「どういうこと？聖杯は呪われたものなの？」

「最初からじゃないわ。前々回の聖杯戦争の時、私達アインツベルンが呼び出したサーヴァントが原因で、聖杯は呪われてしまったのよ」「さっぱりわからないわ・・・」

「落ち着いて聞いて頂戴ね」

そこから、イリヤスフィールが淡々と語った内容は、こうだった。

アインツベルンは70年前の戦いで、必勝のために特殊なクラスアヴェンジャーのサーヴァントとして「アンリマユ」という、「この世全ての悪」を体現する危険な英霊を召喚した。

ところが、「アンリマユ」の戦闘能力は非常に低く、早々に敗れ去ってしまう。しかし、戦いには役に立たなかったその英霊は、全ての人々が悪であれと願った存在であった。そのため、願望機である聖杯は「アンリマユ」を吸収したことで、内部でその呪いのような願いを実現してしまった。

「つまり、聖杯の中に他者に害をなす呪いのようなものが蓄積されているということか？」

「そういうことになるわ」

「色々とわからないことがあるが、聖杯は敗れた英霊を吸収するのか？」

オレも話についていくのがやっとだ。

「ええ。聖杯は、敗れた英霊の魂を受け止める器でもあるわ」

「英霊の魂を集めて、願いを実現するためのエネルギーにすると考えればいいのか？」

「そうよ。サーヴァントを斃すのはそのためよ」

「なるほどな」

他のサーヴァントを斃す必要があるのは、聖杯を手に入れられるのが一組のマスターとサーヴァントだけだからという理由だけではないのか。

「呪われてしまっても、聖杯で願いを叶えることはできるのかしら？」

遠坂が確認する。

そもそも願いを叶えるために参加者の多くは戦っている筈なのだから。

「できるわ。でも、その手段は聖杯の性質に沿ったものになるでしょうね」

「どういうこと?」

「例えば世界平和を願ったら、全人類を殺し尽くすかもしれないわ。誰もいなければ争いは起きないでしょう?」

「はあ!」

「何ですって!」

余りにも衝撃的な話に、オレも遠坂も、驚愕の声を上げた。

そんな碌でもないもののために、オレ達は命懸けで戦っていたというのか?

「待ってくれイリヤ。だとするなら、真実を知っているキミはなぜ事も無げに戦っていたのだ?それがアインツベルン当主の使命だからなのか?」

冷静に話を受け止めているアーチャーが問う。

「アインツベルンは願望機としての聖杯に興味はないわ。もっと別の目的のためにこの戦いに参加しているのよ。聖杯の使い方が違うから、目的を果たしたとしても世界に災厄をもたらしたりしないわ」

イリヤスフィールはあっさりと答えた。

「本来であれば、マキリも遠坂も私達アインツベルンとは違うけれど、崇高な目的のために参加していた筈なんだけど」

ちらりとイリヤスフィールは遠坂を見た。

「何にせよ聖杯は取扱注意物件なわけね」

「だとするならば、参加者にはそのことを告知すべきなんじゃないか?勝ち残ったヤツが善意で使おうとしても、そんな邪な解釈よこしまをされて実現されたんじゃない、本意じゃなくなってしまう」

「私達は元々勝つつもりだったし、負けた場合にどんな使われ方をして災厄がもたらされたとしても、あまり興味がないわ。そもそも極悪人が勝ち残ったら、他者に害のある望みを直接願う可能性もあるわけ

だし」

イリヤスフィールの言は正しいのかもしれないが、オレにはとても領ける話ではない。とはいえ、これが普通の魔術師の考え方なのかもしれない。

「まあ、ここにいる私達はこの話を聞いたのだから、問題ないか。私も別に聖杯に何も求めていなかったしね」

遠坂は一人で納得していた。
が、

「・・・とは言え、お金か宝石は欲しかったのよね・・・でも今の話じゃ、東京ドームいっぱい臓器を渡されて、これを売っ払えとか言われそうね・・・」

「・・・凜・・・聞こえているぞ」

アーチャーが眉間に手を当てながら、遠坂を注意する。

「監督役のコトミネは気付いていたと思うんだけど」

イリヤは呟くように補足する。

前回の戦争に参加したことで、気付く機会もあるということだろう。

「問題はアサシン陣営だな・・・」

目的もマスターもわかっていない。だが、ここでイリヤから聞いた内容について、アサシン陣営は認識済なのではないだろうか。

当初から黒い影を利用して見える動き。

黒い影。黒いセイバー。呪われた聖杯。

これらの要素と、アサシンは連動している。

まだ、これらを繋ぐ最後のピースがないが、マスターを突き止めて問い質せばはつきりするだろう。

「・・・そんなくだらない聖杯なんかのために、犠牲にしてたまるか・・・」

オレは、座卓の下で拳をきつく握りしめた。

そして、一言も発さず、静かにこの会話を聞いていた人物に目線を送る。

彼女はこちらの視線に気付いて、少し気遣わし気な表情を返してきた。

第23話

〜9日目①〜



E t u r n

朝になり、玄関を出たオレは正門脇の郵便受けを確認する。

可能性は高いと思っていたが、そこには一枚の便箋が入っていた。

宛名は衛宮士郎。

裏を確認すると差出人を記載する左下には、【穂群原学園弓道部】と書かれている。

切手は貼つてあるが、消印はない。

誰かが直接投函したものだつた。

「良かった」

心の底から安堵する。

ライダーを助けるチャンスがあるということだからだ。

逸る気持ちを抑えて、封を切り、中の便箋を取り出した。

そこには予想どおりの内容が書かれていた。

今日から学校は再開された。

まだ、体調の優れない生徒はいるようだが、無理のない範囲での登校が促されている。

オレは体調が優れないという理由で、休むことにした。

指定の時間まではだいぶ間があり登校することも可能だったが、今は登校する意味があるとは思えなかつたし、出来うる限りの準備をするつもりだつた。

勿論、誰にも手紙のことを伝えるつもりはない。

葛木も桜も学校に行っており、残っているのはオレとキャスターだけだ。

昨日は、聖杯戦争に纏わる話を聞いた後、イリヤスフィールを遠坂とアーチャーが教会に連れて行った。

「衛宮君。きつとライダーを取り返すチャンスは来るわ。その時のために今は心身を休めておきなさい」

去り際の遠坂の言葉は思いのほか、優しかった。

そう。チャンスはあるのだ。

このチャンスをオレは、万に一つも逃すつもりはなかった。

キャスターは工房で作業をしているようだ。その邪魔をしないように、オレは午前中、道場で鍛錬を続けた。キャスターはオレの体調が本当に悪いわけではないことは、勘付いているだろう。

その後、少し体調が戻ったことにして、キャスターと軽い昼食を一緒に作った。

オレはこの時人生で初めて、塩と砂糖を間違えるという大失態を演じた。

「落ち着いて、坊や。あなたは、私のお料理の先生なのだから」

キャスターが静かに嗜めてくれた。

いつもは滑らかに会話をするキャスターだが、今日は極端に口数が少なかった。

そうだ。落ち着かなくてはいけない。

その時刻が近づき、オレはキャスターの目を盗んで外に出た。

勿論、向かうのは手紙で指定された場所だ。

その場所は、間違っても迷ったりするような目的地ではない。

目的の屋敷に到着し、門柱にある呼び鈴を鳴らしたが、一向に返事はなかった。

そのまま門を押すと、抵抗なく開いたので敷地内へと入っていく。玄関にも鍵はかかっていなかった。

「勝手に入ってこいということか」

と自分勝手に解釈して、誰にもなく呟きながらドアを開き、中へと入る。

大きな屋敷内を彷徨うようにして、一つ一つ部屋の扉を開けて、中を確認するが誰もいなかった。

屋敷内は全般的に彩光には無頓着な作りになっており、日が傾きつ

つある時間帯であることと相俟って薄暗い。

さらに進んでいくと外に出る扉があつたので、そのまま押し開ける。敷地全体から想像すると、位置としては裏庭に該当するのではないか。そこは、様々な草木が生い茂っており、本格的な植物園と言ってもいい程だった。

あいつはそこにいた。

そして、その後ろには彼女がいた。

「慎二。来たぞ」

元々、大勢に好かれるようなタイプではなかった。

斜に構えた態度、人を小馬鹿にしたような言動も相俟って、友達は少ない。だが、ここまで非道な事をやってのけてしまえるような人間ではなかった。

そのはずだと思っていた。

「本当に衛宮は律儀だね。今まで生きてきて、約束の時間に遅れた事なんて一度もないんじゃないか？」

「そうかもな」

実際にはそんなことはない。しかし、先ずは肯定から入る。

先日、桜を人質に取った時と同様、下手に刺激しないことが重要だった。

「ふん。それにしても、今回は本当に来るのか半信半疑だったよ。まさか、こんなヤツのために身体を張るなんてね」

慎二は顎先で後方を示した。

そこには血塗れのライダーが両手、両足を縛られて、太い木に括り付けられていた。

おそらくライダーを縛っている縄も何らかの魔力を帯びたものだろうが、彼女の傷は、以前、オレと契約していたセイバーにやられた時と同等のかなりの深手であり、とても動くことはできそうにない。「女性が危険に晒されているとなれば、慎二だって助けに来るんじゃないか？」

「こんなヤツという言葉には怒りを覚えるが、そこは堪える。」

「馬鹿言うなよ。コイツらは人間じゃないんだ。人間の女と同じ括り

で考えるなんて、ナンセンスじゃないか。本当に衛宮の考えは常識外れもいいところだよな」

「オレが少し変わっているのは認めるさ」

「そもそもコイツは僕のサーヴァントなんだ。僕がどうしようも勝手だろう？この前の学校でもそうだったけど、なんで敵のはずの衛宮が庇うんだ？本当に意味がわからないよ」

ここまでの会話から、今回の件が慎二自身の考えで実行されたことでないことは明らかだった。

実行犯である慎二自身が不可解に感じていることがよくわかる。

「慎二。正直、何故なのかはわからないが、お前はオレが憎いんだろう？彼女はお前のサーヴァントなんだから、ここで消耗させるのは不利益なはずだ。オレだけを煮るなり焼くなりすればいい」

彼女の状態は深刻だ。一刻も早く解放してやりたかった。

一縷の望みに期待して、ライダーを解放することにメリットがあることを慎二に訴える。

「何言っているんだ。この前もそうだったけど、聞いた話じゃもうお前とコイツはデキてて、偽臣の書を使ってけしかけても、とても思い通りには動きはしないんだろ？」

聞いた話・・・か。

いつたい誰からだ？

「完全にマスターに対する裏切りだよな。そんなサーヴァントには制裁が必要だし、衛宮への抑止力になるなら使わない手はない。勿論、本来、僕がお前に負けるわけがないんだけど、魔術師としての実力には知謀も含まれるわけだしね」

「あのアサシンはお前の爺さんのサーヴァントだな？」

敢えて会話の流れとは違う質問を試してみた。

しかし、慎二はキョトンとした。

「は？アサシン？なんのことさ？」

素の反応が返ってきた。慎二はアサシンのことを全く知らないことは確かだ。

「・・・そうか。だが慎二、オレは今回の件について、お前以外の間桐

家の者が考えたと思つてここまで来たんだ。そいつと戦うつもりで来ただけで、お前と対峙するとは思つてなかつたし、ライダーがどうなろうと興味はない」

手紙に書かれていた内容は、ライダーを拘束していることと、午後3時に間桐邸に来いということだけだった。

「強いて言えば友人であるお前のサーヴァントが消えれば、お前自身の身が危うくなるから、それを回避したいという思いはある。前回、ライダーを庇つたのもそのためだ」

慎二はオレとライダーのことは、誰かから伝聞で断片的に聞いているに過ぎない。つまり、オレとライダーの関係が深いことについて、確証があるわけではないのだ。

なるべくライダーとオレに関係がないことを伝えて、彼女を慎二の意識から外したかった。

「白々しいね。衛宮は。今さら僕のことを友達呼ばわりなんて。まあ、本当にこの女に興味がないなら・・・」

そう言つて慎二は手にした偽臣の書を掲げた。

今にして思えば、三日前に慎二を無力化した時、あの本の消滅を最終的に確認したわけではなかつた。

今更ながら後悔する。

そしてこの後、起きるであろうことを想像したオレは戦慄した。

やめてくれ！

「こういうことをしても、澄ました顔でいられるはずだよね」

「!!」

ギチイイイイツ!

「あああああつっつ!」

偽臣の書による戒めの電撃が体を駆け巡り、堪らずライダーは悲鳴を上げた。

「やめろっ!!」

思わず、叫ばずにはいられなかつた。

このまま演技を続けるつもりだったが、目の前で彼女が苦しむ様を見せつけられては、感情を理性で抑えきれなかつた。

とても、冷静さを保つことなど不可能だ。

「はは、そら見たことか。興味がないなんてあり得ない反応だね」

オレを嘲りながら慎二はライダーに近づき、形の良い彼女の顎に指をかけてその顔を持ち上げた。

バイザー越しの双眸には辛うじて光があつたが、意識はかなり朦朧としていたようだった。

今すぐにも、オレが干乾びるまで血を吸わせてやりたかった。

「・・・し・・・士郎？」

先程までは気絶していたのだろう。初めて認識できたのか、ライダーが掠れた声でオレの名を呼んだ。

「はは、『士郎』だって？本当にこいつと衛宮はデキてるみたいだな。全くとんでもない女だよ。本当のマスターである僕のことには碌に守れもしないくせに、敵のマスターとイチャついてるんだもんな」

慎二はライダーの顔を持ち上げていた手を放して横に振るう。彼女の顔に慎二の拳が入り、そのまま美しい顔がうなだれる。

これ以上傷つけられれば、いつライダーが限界を迎えて力尽きるかわからない。偽臣の書の制御下では本来の状態と比べると、大きく能力が低下してしまう。今の状態から動けるようになるまで、回復するにはかなりの時間を要するだろう。

「まあ、衛宮の気持ちはわからないでもないよ。こいつは、サーヴァントとしては三流でも、顔と体は最高で、女としては一級品だ。興味が沸くのも無理ないよな」

ギリ・・・

「だけど、こいつの体を本当に味わったわけじゃないだろう。お前にそんな度胸があるわけないもんな」

ギリリ・・・

「僕は違う。とつくにこいつの体をいただいているのさ。本当に最高なんだぜ。まあ、もう飽きちゃったけどね」

ガチン！

食いしばっていた奥歯が砕けた。

怒りが込み上げてきて、想像の中で何回慎二を殴っていたかわから

ない。だが、それを現実にやろうとすれば、ライダーが本当に消されてしまうかもしれない。

それに、今回の件を考えたのが慎二でないということは、この状況を観察している者が他にもいる可能性が高いということだ。絶対に感情任せに動くわけにはいかない状況だった。

オレは地面に膝をついた。

そして、そのまま両手も地面に着いて、頭を下げた。

土下座の姿勢だった。

「頼む、慎二。どうしたらいいのか教えてくれ」

ここに来るまでに何百回と心に刻んだ。

何をしてても彼女を助けると。

相手の尻を舐めろと言われれば舐めるし、小便を飲めと言われれば飲む。指を落とせと言われれば落とす。

だが、今、オレには慎二が何を望んでいるのかが、全く読めなかった。あらゆる行動が、あいつの神経を逆撫でするような気がするし、逆に何もしなければ、それも逆上させるような気がした。

何もかもが、裏目に出るような予感しかなかった。

とにかく、譲歩を引き出すか、隙を見出すか、何らかの突破口を探りたかった。

「・・・わかったよ。じゃあ、僕の靴を舐めろ。立ち上がりずに、そのまま這いずってこっちまで来いよ」

意外なほどに慎二はあっさりと言った。

それでライダーが助かる可能性があるなら、迷う必要などなかった。

オレはゆっくりと膝をついた姿勢のまま慎二に近づいていった。

目の前には慎二の靴がある。

いつの間にか慎二の軽口が途絶えていた。

「・・・」

オレは、そこに顔を近づけていく。

「・・・だから、そういうところなんだよ・・・僕がお前を嫌いなのは・・・」
慎二は拳を握りしめて、体を震わせていた。

「なんで、そんなことができるんだよ！」
ガッ！

激昂した慎二がオレの顔を蹴り上げた。

その衝撃でオレはのけ反った。

少し唇が切れ、鉄錆のような味が口に広がる。

「おかしいだろ！自分の命乞いじゃなくて、他人のために！どんだけ偽善臭いんだよ！お前は！」

それは、理不尽極まりない怒りだった。

だが、こいつの抱いてきたオレに対する心情なのだろう。

一方でオレとしても反論したかった。

それは違う。と。

オレの行動は、ライダーのためだからこそ出来たのだ。

誰のためにでもできるわけじゃない。

今のオレには、彼女は唯一無二の存在だ。

だから、彼女以外の第三者のために、簡単にこの身を犠牲にできると問われれば、否と答えるだろう。

だが、それは慎二には伝わらない。

「お前を見ていると、イライラするんだよ！お前は、他人を、僕を見下しているんだ！どうしようもない奴だつてな！」

言っていることはこれっぽっちも理解できなかった。

オレは、自分とは性格は全く違うが、お前のことを大切な友達だと思っていた。

「自分是可以るけど、人にはできない。自分は違う人間だ。そう思っているからお前は他を憐れむように助けるんだ！」

だが、お前にとってはオレと共にした時間が辛かったということなんだらうな。

いずれにせよ、今、語られることはあいつの本心の吐露だ。

受け止めるしかない。

「おまけに何なんだよ！魔術が使えるなんてさ！どんだけ優越感に浸ってるんだよ！」

そうなのか。

この言葉を聞いて、慎二の思いがようやく少しわかった。たしか遠坂も言っていた。

慎二はきつと特別な人間になりたかったのだ。

そして、優越感を得たかった。

間桐という古くからの魔道の家に生まれたのは、本来なら特別なことだ。だが、魔術師としての素質を持たなかった慎二は、魔術の知見はありながら、魔術師でないという中途半端な状態に置かれた。

得られたはずの『特別』には、永遠に届かない。

「・・・オレに対する憤りは、羨ましかつたつてことの裏返しだったのか・・・」

思わず零れた言葉が、さらに慎二の感情に油を注いだ。

「羨ましい？ふざけるなっ！」

ガッ！

慎二の蹴りが再度オレの顔を打った。

「お前みたいな何も知らないまま偶然にマスターになったような奴に、正当な魔道の名家に生まれた僕が何で羨ましがらる必要があるんだよ！」

支離滅裂だった。

言っていることは、明らかにオレに対する嫉妬、劣等感に溢れたものだ。だが、慎二はそれを肯定することだけは絶対にできないのだろう。

それは、こいつの最後の砦なのだ。

「見せてやるよ。僕にも魔術が使えるつてことをな」

そう言つて、慎二は手にしていた偽臣の書を掲げる。

「切り刻んでやるよ！衛宮！」

その声と共に、三条の漆黒の刃がオレと慎二の僅かな空間を走つた。

ジャッ！

「なっ!？」

魔力でできたその刃で体を刻まれたのだ。
なす術もなかった。

予想外だったことと、慎二との距離も近かったため、躲しようがなかった。

「士郎っ!!」

ライダーが悲鳴に近い声を出した。

「は。どうだ衛宮。こんな魔術も僕は使えるのさ。衛宮にはできないだろう?」

「……ぐ……」

オレは、今の攻撃で倒れた体を何とか持ち上げるが、左肩から胸にかけて大きく傷を負い、血が滴っていた。

「さて、これで僕の力もその目に刻み付けてもらったし、そろそろ幕引きと行こうじゃないか」

再び慎二は後方で木に縛り付けられているライダーに歩み寄っていき、親指で指し示す。

「衛宮。こいつをお前が殺せ。そしたら、お前を殺さないで置いてやる」

そう言つて、オレの足元に一本の短剣を放ってきた。

「その短剣は礼装だ。サーヴァントも傷つけることができる。死に損ないのその女なら、急所を刺せば簡単に殺せるさ。僕はお前が自分の命惜しさにこの女を殺すところを見たいんだ」

慎二の妄言を一切耳には入れず、オレは足元の剣を拾い、重くなつた体を持ち上げて立つ。

そして、ライダーに向かってゆっくりと近付いていく。
やはりそう来たか。

そう。

どうするかは、ここに来る前からとうに決めていた。

「……し……士郎……」

ライダーはその双眸に涙を浮かべながら、オレの名前を口から紡ぎ出す。

「申し訳ありませんでした。私の不始末で、あなたをこんな目に遭わせてしまうなんて……」

「ライダー。傷に響く。何も言わなくていい」

「・・・私を刺してください。私はサーヴァントです。ここでの死は本当の死ではない」

「安心しろ。ライダー、オレはお前を愛している」

「・・・私もあなたを愛しています」

オレは彼女の甘美な言葉に、刹那、恍惚とした。

「ライダー、オレを信じてくれ」

「五月蠅いんだよお前ら！早くしろよ！」

ああ。

わかったよ。

「・・・慎二。あの始まりの夜・・・校庭でお前を助けたのは、オレとライダーだったよな」

あれは八日前になるのか。

あまりにも濃密で、長く、それでいてあつという間だったようにも感じる。

「あの時、お前を助けなければ、こんなことにならなかつたかと思うと・・・」

そう言いながら、オレは短剣を逆手に持って振り上げた。

「え？」

慎二が戸惑いの声を出す。

「・・・オレはあの時の自分をぶっ殺してやりたくなるよ」

振り上げた短剣を振り下ろす。

ッ！

オレの目の前が血飛沫で、埋め尽くされる。

もしかしたら、目の中に入ったものもあつたのかもしれない。

ゆっくりと膝を突く。

視線が段々と落ちていき、視界が地面の土色で埋め尽くされる。

ドサツ・・・

そのままオレはオレ自身から流れ出た血の池の中に、崩れ落ちていった。

「・・・な・・・？」

「・・・士郎・・・？」

「……………な……………何やってんだよ、衛宮!? 本当にお前つて奴は!!」

微かに残っている意識の中で、ライダーと慎二の音が耳朶を打つ。ここまでは予想どおりだ。

そう。

想定どおりだったのだ。

だが…………

「……………いやあああああつつつつつ!!!」

全く予想していなかった人物の悲鳴が、樹木に満ちたこの空間に響き渡った。

その直後、辺り一面に黒い幾つもの鋭い棘を持つ、小さな球体が浮かび上がる。

「……………桜?…何でここに?…」

戸惑いながらも、悲鳴の方向に慎二が問い掛ける。

そう、先ほどの声の主は桜に他ならなかった。

オレ自身は倒れたことが幸いして、近くに黒い球体は出現していなかったが、慎二のすぐそばには複数個の黒い球体が浮かび上がった。

そして…………

R t u r n

ザザツ…………

ノイズのような音が慎二の体から発せられた。

「え?…」

惚けたような声が静寂が支配した庭内に流れた。その体からは黒い棘のようなものが、突き出していた。

私達の周囲の至る所に、突如として現れた黒い球体は、鋭い棘を刺すのうちに伸ばした。

その一つが慎二の身体を貫いたのだ。

「え?…」

そして、もう一つの戸惑いの声が流れた。

それは、先ほど悲鳴をあげた桜のものだ。

彼女は、私から見ると左手の方向に立ち尽くしていた。

この庭内はどこでもそうだが、鬱蒼とした樹木に覆われている。

彼女はその陰に隠れて、おそらく士郎と慎二のやり取りの一部始終を見ていたのだろう。

「・・・なんで・・・僕が死ななくちゃいけない・・・」

ドッ

慎二が涙を浮かべながらその場に倒れた。

自分に何が起きたかもわからなかっただろう。

呆然としたような表情を浮かべながら前のめりになってゆっくと崩れ落ちた。

私の足元には、自分自身を刺した士郎が倒れており、そして今、慎二が倒れた。

私は、何より士郎の手当てを願うべく桜に呼びかけようとした。

「・・・さ・・・さくら・・・」

すんなりと動かない口を無理矢理動かそうとする。

だが、桜の様子を見た私は、それ以上喋ることが出来なくなってしまうった。

「・・・あは・・・」

なぜか桜が奇妙な笑みを浮かべたのだ。

「あは・・・あは・・・アは・・・アハハハ・・・」

「桜？」

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

桜の奇妙な、というよりも、もはや狂ったようなと表現するほうが近い嗤い声が延々と庭内の木々に木霊した。

ハハハハハハハハハハ

それは既に人の声ではなかった。

だが、突如としてその嗤いは止まり、静寂が訪れた。

「一体これは何なのよ？」

間桐桜のはずのその少女は、顔を俯かせたまま問うた。

誰に問いかけたのかは、私にはわからなかった。

「可哀想なくらいどうしようもなかった兄さんは、自分が何をしたいのかもわからないままに、先輩を傷つけるし……」

—— ザザザ ——

桜の影が木々の隙間を縫って注がれる夕日に照らされて、途方もなく長く伸びていた。

その影がざわめくように震えて、桜の体に少しずつ纏わりついていく。

「姉さんは姉さんで、何でも持つてくるくせに、私の大事な思い出を横取りして、先輩の同情と関心を引こうとするし……」

—— ザザザ ——

異様な光景だった。

桜の怨嗟の声が続く中、黒い影が桜を徐々に覆っていく。

「私のサーヴァントはマスターである私の気持ちを知っていないながら、その相手を……私の大事な先輩を、誑たぶらかかして掠め取っていくし……」

私には何も言えるはずもなかった。

反論の余地は微塵もない。

—— ザザザザザ ——

「そして先輩ときたら、私に思わせぶりな態度をとっていたくせに、次から次へ女が寄ってくるし、そいつらに節操なくいい顔するし、大事な家うちにも連れ込むし……」

桜を覆った影はやがて桜と一体になった。

「拳句の果てに、私のことは全くお構いなしに勝手に死んじゃうなんて……」

少しずつ上げた桜の顔の半分には赤黒い蛭ひるのような紋様が張り付いており、それは彼女の身体中を覆い尽くしていた。



「あなた達は私のことをいっただい何だと思ってるのよ！」

「何でこんなに好き放題やれるのよ!!
何で私ばかり我慢しなくちゃいけないのよ!!!」

聞く者の殆どいない虚ろな空間に、桜の嘆きが木霊する。

「あ」

桜であったものは突然呆けたような声を出した。

「・・・誰もいなくなっちゃったと思ってたけど、そう言えばあなただけには生きてたわね。ライダー」

桜の体からあの黒い影が伸びる。

「許さないわ。絶対に」

桜の変貌の原因はわからない。

しかし、私に責があることもよくわかった。

「・・・承知しました・・・さくら・・・」

でも、どうしようもなかったのです。

あなたのほうが、苦しんでいるとわかっていながら、それでも私だつて幸せが欲しかった。

ただ、それだけなのです。

「申し訳ありませんでした・・・」

桜には本当に申し訳ないけれど、ほんの僅かだったけれど、途方もない至福の時間を得られた。

私は、懺悔しながらも、後悔はなく。

最期の瞬間を受け入れようとした。

その時だった。

「トレス
投影、開始」

私の足元から、か細いが、しかし、力に満ちた声が湧き上がってきた。

「え？」

「・・・せ・・・先輩？」

そう。

血溜まりの中に沈んでいた少年は、ゆっくりと、白と黒の双剣をその手に携えて立ち上がった。

自身が刺した胸からも、慎二の魔術によって傷つけられた肩からも血が滴り落ちている。

致命的と思われるものだ。

「……し……しろう？」

「ライダー。オレは何があろうと、お前を助ける。たとえば……桜を敵に回しても」

ザグ……

そう言うと、士郎は私を拘束していた縄を剣で斬り裂いた。

体が自由になったが、とても自力で立つことはできず、士郎に抱き着くようにして、体を預ける。

「オレの血を飲め。今なら飲み放題だ」

「……いただきます」

言われるまでもなく、我慢できる状態ではなかった。

噛みつく必要もなく、士郎の体から流れる血をむしゃぶりつくようにして啜る。

少しずつだが、体に力が入るようになる。

「……先輩。生きてたんですね。てつきり死んじやったと思いましたよ」

桜が未だに啞然とした面持ちで、言葉を発する。

私とて桜と同様の思いだ。

即死というわけではなかったかもしれないが、明らかに出血が多過ぎた。

ここまで動けて、あまつさえ魔術も使えるなどとても信じられない。い。

「何とかな」

士郎はその理由は明かさず、簡潔に答えた。

「でも、いくら先輩でも勝手されちゃ困ります」

気を取り直した桜が敵意を示す。

あの黒い影が鎌首をもたげ、こちらに狙いを定めた。

「その女には私がお仕置きをいないといけないんですから！」

ジャッ

黒い影が一気に伸びて、私へと襲い来る。
今の私に避けられるものではなかった。
ギンツッ！

だが、士郎が私を庇うようにして、剣を振るい、影を弾き飛ばした。

「逃げるぞ。ライダー」

私に肩を貸しながら、士郎は言った。

「はい。士郎」

私は、私だけの士郎に頷いた。

第24話 　　く9日目②　　「弓兵は死なず」

E t u r n

生きてライダーとこの屋敷から脱出する。

今やるべきことは、それだけだ。

桜が変貌してしまったことについては、わからないことだらけだったが、それは後で考えるしかない。

今は桜が明らかにライダーに殺意を持って、攻撃してくるのだ。

これに対処しながら逃げる。

体が思うように動かなかったが、倒れていた時から桜の声は全て耳に入っていた。

桜の怒りの原因は理不尽な部分も多いように感じたが、理解はできなかった。

説得が通じる状態でないことはよくわかっている。

「邪魔をしないでください！先輩っ！」

再び桜が今度は2本の影を大きく外に広げてから、ライダーに向けて放ってくる。

オレがライダーを庇う恰好になっているので、オレには当たらないようにしながら、ライダーだけを狙うつもりなのだろう。

ジャッ！

ギギン！

ライダーと位置を入れ替えたオレは、再びその影を双剣で弾き返した。

かなりの速さがあるが、狙いがわかりやすく、単調な攻撃なので何とか対処できそうだ。

ライダーの足取りもだいぶしっかりしてきたので、桜に注意を払いながら出口に向かって少しずつ後退していく。

「何で、その女をそんなに庇うんですか？そんなにその女がいいんですか？・・・私とその女は似た者同士なのに・・・」

桜は俯いて、体を震わせた。

「髪の色だって似ているし……胸の大きさも殆ど変わらないし……私だって経験豊富だし……」

そのまま呪詛のような言葉を続ける。

「実は背が高いほうが好きなんですか？それとも年上のほうが好きなんですか？」

「あ……いや……そういうわけじゃ……」

桜の怨嗟に満ちた言葉に、思わず反応してしまう。

「そんなのどうにもならないじゃないですか!!」

内容はともかくとして、思いもよらない桜の感情の発露に気圧される。説明しても逆効果なことだけは、肌で感じられた。

フアツツ……

その時、突然、体中に鳥肌が立つような寒気を覚えた。

最近経験したばかりの感覚だった。

頭で意識するより早く、ライダーを抱えるようにしてその場を飛び退る。

ジャツ!

先程までオレ達がいた空間を黒塗りの短剣が、切り裂いた。

浮かび上がったその白い仮面を見るのは三度目だ。

「出会う度に動きがよくなるな」

相変わらずの落ち着いた声で、白い仮面の英霊、即ちアサシンが感心したような独白を漏らす。

「だが、お前達の役目は終わった。ここで消えるがいい」

「役目だって？」

オレ達はどんな役割を果たしたと言うのか？

アサシンの狙い、ひいてはアサシンのマスターの狙いは何なのか？

疑問が湧いてくるが、今は答えに行き着きそうもなかった。

いずれにせよこの状態で、アサシンと対峙するのは良くない。

ライダーを庇いながらでは、動きの速いアサシンから逃げ果せるのは難しい。

「あなたはなんなのかしらっ？」

桜が突如現れたアサシンに対して問う。

どうやら、彼女は全く知らないようだ。

「ここは、私に任せてもらっても良いかな？この二人を殺したいという目的は同じだろう」

「あなたに手伝って貰う必要はないわ」

「より確実に遂行したい仕事なのでな」

そう言うが早いかアサシンはこちらに襲いかかってきた。

ギンツ！

短剣による攻撃には、何とかついていける。

自分自身信じられないが、この双剣を使うとオレは本来の技量以上のものを発揮できるようだった。

だが、

「本当によくやるな」

そう言いながら、アサシンは大きく跳躍して横に生えている木に両足を付き、その反動で加速してライダーを襲ってきた。

「させるかっ！」

キギイインツツ!!

何とかライダーを庇いながら、アサシンが繰り出してきた2本の短剣を、双剣で受け止めて弾き飛ばす。

アサシンはなにかはこの流れを想定していたように、飛ばされながら体勢を整えて短剣を続け様に3本投擲してきた。

全ては弾けないと判断して、2本は弾き、1本は自分の腕に刺さるように防ぐ。

「があっ！」

「士郎！」

「よく持ち堪えているが、そろそろ詰めさせてもらおうぞ」
離れたアサシンはさらに短剣を投擲する構えになった。

まずい。このまま削られれば、対処しようがない。

「坊やっ!!」

その時、聞き覚えのある声と共に、二条の白い光弾がすぐ脇を通り過ぎていった。

ドドンツ！

「くっ!？」

自身が攻撃を仕掛ける間際に、想定外の攻撃を受けたアサシンは慌てて回避する。

しかし、挟み込むようにして襲ってきた光弾の片方を避けきれず、肩口に傷を負った。

ザ・・・

キャスターが駆け寄ってきて、オレの傍らに立つ。

「何とか無事なようね」

思えば、家を出てからそれほどの時間は経過していないはずなのに、やけに懐かしく、そして安心させられる声だった。

「まったくもう・・・警戒してはいたんだけど、気付いたら家のどこにもいないんだもの」

「よく、ここがわかったな。何かオレに細工をしてたのか?」

オレは、ここに行くことを誰にも話していないし、以前キャスターから預けられた居場所のわかる符も持ってこなかった。万に一つにも、彼女の同行を敵に気取られて、ライダーを助ける機会を逸したくなかったからだ。

「そんなことしないわ、女の勘よ。実際、少し考えればここが一番怪しいでしょう。あなたが何かしようとしていたのは、わかっていたんですもの」

「そうかもしれないな」

「それに、近くまで来てみれば、魔力がだいぶ感じられたわ」

「ありがとう。助かる」

何にせよ、キャスターの存在はこの場面では心強い。

「キャスターか。厄介だな」

肩口を押さえながら、対峙するアサシンは警戒を露わにする。

「キャスターさん。あなたも私の邪魔をするつもりですか?あなたとだけは、仲良くできそうな気がしていたのに」

「え?・・・さ・・・桜ちゃんなの?」

無理もないが、桜の変貌ぶりにキャスターも戸惑いを隠せないようだ。

「私、おかしくなっちゃったみたいです。元々狂っていただけかもしれないけれど」

「あなたは、狂ってなんかいなかったわ。一緒にお料理していたあなたは……!?!」

キヤスターはそれ以上の言葉を続けられなくなった。

桜が再び黒い影を自身の周囲に揺らめかせ始めたからだだった。

「もうお終いなんです。結局はみんな私を置いてきぼりにしていくんですわ!?!」

一条の黒い影が伸びて、キヤスターに襲いかかる。

「キヤスター!」

オレは、その影を途中で食い止めるべく、動こうとした。

だが、それは当のキヤスター本人に制される。

「動かなくていいわ。坊や」

フアサツツ

キヤスターはそう言うと、自身の目の前に薄い幕のような壁を紡ぎ出して、桜の黒い影を消失させた。

「え?」

桜が戸惑ったように驚いた。

実際はどうなのかわからないが、容易く対処されたように見えたからだろう。

「魔術的な攻撃なら、対処できるわ」

「そうか。では、物理的な攻撃ならどうかかな?」

一時、静観の構えを見せていたアサシンが短剣を放ってくる。

ギンツ!

何とかオレは左手の黒剣を振るって迎撃する。

だが、

ズン……

「がっ!?!」

オレは、突如として、猛烈な吐き気と激痛と虚脱感に襲われた。

油断すると意識が飛びそうだ。

事態の対処で精一杯だったが、時間切れが近いことに嫌でも気付か

された。

オレの体からは今も大量の出血が続いているのだ。

「そろそろか・・・」

オレは小さな声で呟いた。

だが、アサシンと桜にこちらの異変を悟られないようにしなければならぬ。

何とか倒れずに踏み止まる。

「坊や。もう限界よ。とにかくこの場を逃げましょう」

オレの事情を知っているキャスターが声を掛けてくる。

「士郎？大丈夫なのですか？」

ライダーも気遣ってくる。

正直、マズい。

「大丈夫なわけないわよ。ライダー、あなた、走るくらいでできるでしょう？」

「ええ。何とか」

「何の算段をしているか知らぬが、そろそろ幕引きとさせて貰おう」

小声で話していたので会話の内容までは聞き取れなかったアサシンが、膠着した状況を打破するつもりのようなようだった。

「キャスター。オレの腕を強化してくれ」

「わかったわ」

この状況で余計な問答は命取りだ。

それをよくわかつているキャスターは二つ返事で頷き、即座にオレの腕に強化の魔術を施した。

オレ自身の強化とは比べ物にならないほどに力が漲る。

流石としか言いようがなかった。

「気休めかもしれないけれど、治療もしておくわ」

心の中で感謝しつつも。オレはオレのやるべき工程を進める。

「トレース、
投影、開始」

右手の白剣をその場に捨てて、投影を開始する。

「させるか！」

ジャッ！

こちらの動きを警戒して、跳躍したアサシンは2本の短剣を放ってくる。1本はオレに、もう1本はライダーを狙ってきた。

「坊やは、自分のほうに集中して！」

言いながら、キャスターがライダーの前面に魔術の壁を展開して飛来した短剣を防ぐ。

オレはオレ自身への短剣を弾きながら、投影を完成させた。

生み出した槍状に加工した剣を右手に握りしめる。

「喰らえいっ！」

跳躍を終え、着地したアサシンは右腕を大きく振り被る体勢になった。

「螺旋剣！」
カラドボルグ

アサシンより刹那早く、オレは手にした剣を、強化した腕で狙いを定めて敵に向けて放った。

「ぬうっ!？」

アサシンは宝具を使おうとしていたのかもしれないが、自身のほうが僅かに遅いことを悟り、オレの投じた剣を躲そうとした。

ズシャアアア!

「がああああああああ!？」

黒衣がズタズタになり、その下の傷付いたであろう肉体から鮮血が撒き散らされた。

アサシンは確かに剣を躲し切っていた。

しかし、周囲の空間をも巻き込んで振り切るこの宝具の性質により、傷を負うことになったのだ。

「ぬうううううう……小僧……!よくも……」

「今しかないわよー！」

キャスターがアサシンに追い討ちの光弾を放つ。これで決まるとは思っておらず、あくまでも追撃を抑えるためだ。

「小癩なっ！」

痛みに苦しみながらも、アサシンはキャスターの光弾を躲すが、追撃する余力はないようだった。

オレ達3人は庭の出入口ではなく外縁に向けて走り出した。

そして、桜は・・・

「キャスターさん、ライダー、先輩・・・さようなら。今日はこれからやることがありますし」

感情の籠らない表情で、静かに呟いていた。

「桜・・・」

ライダーは苦悶の表情を浮かべている。

「本当にさようなら。先輩」

桜の離別の言葉を背に、庭を囲む壁を越えてオレ達はこの場を離脱した。

R t u r n

士郎の状態は酷いものだった。

間桐邸の庭園を脱出した士郎とキャスターと私の3人だったが、すぐに士郎は意識を失ってしまった。

キャスターが治療の魔術を施したが、意識は戻らず、私が士郎を抱えて2人で衛宮邸まで大急ぎで戻ってきたのだった。

今は工房でもある土蔵で、地面に描かれた魔法陣に士郎を寝かせて、本格的な治療を開始するところだ。

既に日が沈みかけており、土蔵に差し込む光はほとんどなかった。

「傷自体は内臓も含めて私が癒やしたけれど・・・とにかく血を流し過ぎたわね」

キャスターの言葉どおり傷自体は塞がっている。だが、自身を刺した時の傷口や、慎二の魔術を受けた傷口から、かなりの時間流血し続けていたのだ。

出血多量どころの話ではない。

「何とかしてください。キャスター。いいえ、お願いします。士郎さえ助かるなら、私の体を使ってもいいし、あなたの使い魔になってもいい」

私は、無我夢中でキャスターに懇願する。

「とにかく血が必要ね」

「それなら私の血を士郎に吸わせてください！」

「落ち着きなさい。坊やはあなたと違って吸血なんてできないのだから」

「では、どうすれば・・・」

地面に伏している士郎の体は、薄明かりで見ても、青白いのがわかるくらいだ。

「でも、確かにあなたの血も使えるわね。多少の流血は問題ないわけだし。それを私が魔術で浄化して、坊やに注ぎましょう」

「わかりました」

「やり過ぎないように気をつけなさい。アサシンが襲撃してくるかもしれない。その場合、戦わなくてはいけないのよ。あなたも私も斃れれば、結局坊やは助からないのだから」

キャスターの言葉を半ば聞き流して、私は自分の肩口を杭剣で貫いた。

「この大女、碌に人の話を聞いていないわね・・・まだ、こっちの準備ができていないのよ」

慌ててキャスターが硝子の器を持ち出してきて、私の血を貯めていく。

「・・・なぜ、士郎はあれだけの傷を負いながら、あんなにも動き続けられたのですか？」

私は血を絞り出しながらも、先刻からずっと抱き続けていた疑問を口にする。

「そもそも士郎が自分を刺した時の傷は致命傷に近かった。その上、あれだけの流血です。普通の人間では、絶対に動けないはずです」

「そうでしょうね」

「何かしたのですね？」

自然と詰問するような口調になる。

「私を責めるのはお門違いよ。坊やはあなたを助けるためだけに、私に頼んできたのよ」

「それは察しています。士郎は何を頼んだのですか？」

「そうね。平たく言えば、死にそうになってもしばらくは動き続けら

れる薬よ」

「な・・・!?!」

「坊やは昨日の夜、私に言ったのよ。あなたを攫^{さら}った行為には、自分への悪意が満ちている。とね」

「士郎への悪意・・・」

「そう。それは、あなたのマスターへの取引材料とも考えられたけど、坊やはそうは思わなかったみたいね。狙いは自分だと確信していた」
キヤスターは貯まった私の血に魔術を施しながら、言葉を続ける。
私の血を士郎の体に注いでも問題ないよう調整しているのだろう。

「だから、自分が死んだと思わせる。そう言ったのよ」

はあ・・・

と大きくキヤスターは溜め息を付いた。

「この坊やはとんでもないことを考えるものよね・・・そして、間違いなく本気で実行する気なのがよくわかったわ」

勘弁してほしいわよね。と裏切りの魔女は呟いた。

「ここで断つても絶対にもつと無茶なことをやるに決まってる。そう思ったわ。だから、作って渡したの」

「実際に作れるものなのですか?」

「何とかなるものなのよ。骸骨とか死体とかを動かす魔術の応用だね。要するに坊やは一時的に死^{ソウビ}霊になったようなものよ・・・
できたわ」

キヤスターが魔術を行使するのを止めた。

準備が整ったようだ。

「それじゃあ、坊やに血を補充するわよ。上半身の服を脱がせてちようだい」

言われるがままに、私は士郎の服を脱がせる。

今は傷跡はなく、べつたりと張り付いていた血も拭き取られて、綺麗な状態だ。よく鍛えられた胸筋が露わになり、私はその瑞々しい肉体について目を奪われる。

そんな私の小さな欲情をよそに、キヤスターは士郎の左胸、ちょうど心臓の位置に右手を当てる。

そして、左手に持った容器を傾けて、少しずつ中の血を右手に注ぐと、その血は土郎の胸の中へと浸透していく。

「土郎は、助かりますよね？」

治療は順調だということは感じられたが、それでも我慢できず、私はキヤスターに問いかける。

「そうね。これを繰り返せば問題ないはずよ。薬の効力は薄れているけどまだ効果を保っている。その間に、人間が生きられるだけの輸血をすれば大丈夫よ」

「そ・・・そうですか・・・」

私は安堵でその場にへたりこむようにして座り込んだ。

「あなたの血はまだまだ必要だけど、大丈夫よね？」

「はい」

それは全く問題ない。

この程度の量であれば、回復のほうが早い。

「それじゃ、また血を貯めてちょうだい」

私は既に傷口が塞がっていた肩口を先ほどと同じように貫いた。

サーヴァントである私には、この程度の傷であればすぐに自己回復する。

だが、土郎はそうはいかないのだ。

私は、改めて、土郎に途方もない負担を強いることになった自分自身を恨めしく思った。

私の流した血をキヤスターが土郎に合うように調整、変質させて注ぐ。

この作業を10回程繰り返しただろうか。

土郎の血色はかなり良くなった。

「これで、もう大丈夫でしょう。とは言え、本来自分の血でないものを少し強引に輸血したのだから、多少の反動があるかもしれないわ。念のために様子を看ておいてちょうだい」

「承知しました」

「治療を始める前に言った言葉、私は忘れてなくてよ」

キャスターはそう言って、土蔵の出口に向かう。

「暫くしたら宗一郎様が戻ってくるから、私は食事の支度をするわ」

「本当にありがとうございました。あなたが来なければ、私も士郎もあの場で、結局は斃されていたでしょう」

「・・・お礼なんていらないわ。だって、坊やは・・・」

キャスターが顔を歪めて何事かを呟いたが、その言葉は私には聞き取れなかった。

彼女が最後に何を言ったか気にはなったが、私の意識は目の前の士郎に自然と引き戻された。

「士郎・・・ありがとうございました・・・」

涙が止めどなく溢れてくるのも構わずに、横たわったままの少年にしがみつく。

それと同時に、自身のマスターである少女の変貌した姿を思い出す。

桜がなぜあなってしまったのか、全くわからない。

しかし、原因の一つが自分であることも間違いはない。

そして、私は桜があの子に似ていることも・・・時に不穏な気配があることも感じ取っていた。

それを、見ないフリをしてきたのも私だ。

「・・・桜・・・私はあなたを・・・」

心は決まっていた。

そして、私の愛する少年が、この後、どうするかも明白だった。

「・・・士郎・・・あなたを守ります。そして、二人で桜を救いましょう・・・」

Interlude in

「・・・さ・・・桜なの・・・?」

遠坂凜は自分の目を疑った。

目の前にいる少女は、間違いなく自分が良く知る妹であるにもかかわらず、決定的に違うものになっていたからだ。

ここは、遠坂邸。

遠坂凜は学校から帰宅して、これから衛宮士郎の様子を見に行こうか思案していたところに、思いもかけず間桐桜が訪ねてきたのだ。た。

「はい。姉さん。それは間違いありません」

笑みを浮かべて桜が肯定する。

桜は、普段そもそも笑顔を見せること自体が少ない。

だが、二日ほど衛宮士郎の家と一緒に食事をした時には、よく笑っていた。その時の顔は、優しく、朗らかな微笑みだった。

しかし、今、彼女が見せる笑顔は全く別物だった。

嘲笑とも言うべき、相手の神経を逆撫でするための笑いだった。

「私は変わりました。もう、弱くて、ちっぽけで、無価値だった私はいません」

「何を言う、桜。以前のキミはそんな存在ではなかった。キミは十分に可憐で、料理が上手で、素晴らしい女性だった。自分を貶めるのは止めるべきだ」

事態を受け止めきれない主人を庇うようにして前に出たアーチャーが、桜の言葉に反駁する。

「ありがとうございます。本心からそう言ってくれるのはアーチャーさんだけ」

今度は、変貌する前の優しい笑顔を桜はアーチャーに向けた。

「そんなことはない。凜も衛宮士郎もきつと同じことを言うはずだ」

自分に見せる桜の表情の変化に、戸惑いながらもアーチャーは再び桜の言葉を否定する。

「いいえ。みんな酷いんですよ。先輩は親切なふりをしてても実際には私になんて興味はなかったんです。そして、姉さんは、何でも手に入るくせに、先輩しかいない私からその先輩を取り上げようとしたんです」

「そんなことしていないわ！私がいつそんなこと？」

凜は、まだ驚きから立ち直ってはいなかったが、桜の話は身に憶えがなかったため、反射的に否定した。

桜が衛宮士郎に想いを寄せていることは充分に分かっていた。だから、自分は彼を異性としては見ないように意識してきたし、二人きりの状態は桜には見せないようにしてきたのだ。

「嘘ばかりですね。夕方に先輩とあの家の居間で二人きりで話し込んでいたことも、走り高跳びの思い出を掠め取ったことも知っていますから。あれだけは、私だけのものだったはずなのに……」
「!?……走り高跳び……え?」

「だいたい、何で先輩と一緒に戦うことにしたんですか? 姉さんはそんな必要はなかった筈です。先輩と親しくなるチャンスだと思って思っただけじゃないですか? そして、私の知らないところでも散々先輩と二人きりで会って、仲良くお話ししてたんではないでしょうか?」

「……あ……いや……そんなことは……」

全てではないにせよ、一部は正しい指摘であるため、凛はきっぱりと否定することができなくなってしまった。

「ほら。やっぱり」

「つまり、桜。キミは周りの全てが憎くて仕方がないということだな? だから今、そうやって暴走している」と

「いいえ、違います……言っただじやないですか」

そう言いながら、桜は触手のような黒い影を足元から生み出した。

「まさかキミがその影の!?!」

影がアーチャーに襲い掛かった。

「アーチャーさんだけは違うって」

ジャツ!

「くっ!」

アーチャーは辛うじてその影を避けた。

サーヴァントにとっては触れるだけでも危険なことはわかっているだけに、かなり注意を要する攻撃だ。

「うくん。やっぱり不意をつけないと、なかなかサーヴァント相手には当たらないですね。それじゃあ……」

あくまでも朗らかに言葉を連ねて、桜は狙いを変えることにした。
黒い影をさらに二つ生み出す。

「姉さんを狙わせてもらいますね♪」

「凜っ！」

桜は2本の影を凜に向けて放った。

「アーチャー!?!」

ドスツ!

2本の影にアーチャーの体が貫かれていた。

「予想はしていましたが、そこまでして姉さんを守ろうとするなんて。ちよつと妬いちゃいます」

桜が伸ばした影は、凜を狙うかのように見えた。そのため、アーチャーは咄嗟に凜を助けるために彼女に駆け寄ろうとしたのだが、元から狙いはアーチャー自身だったのだ。

「ぬううううううう……」

アーチャーの足は既に床から離れていた。

胴体を貫通した影により、体を持ち上げられている。

「大丈夫ですよ。アーチャーさん。あなたを殺したりはしません。姉さんから大事なものを奪うということに意義がありますしね。それにあなたはきつと……」

「……凜……逃げろ……」

アーチャーは、苦悶の表情を浮かべながらも、己が主の身を按じて逃亡を促す。

「あ、姉さんは逃がしませんよ。これまで散々私を虚仮こけにしたんですから」

桜は、またしても黒い影を生み出す。

「私、ずっと待っていたんですよ。あの地獄のような間桐家から、姉さんが救い出してくれるのを。姉さんは格好良くて、何でもできる私のヒーローだったから」

「……桜……私は……」

凜は、いつもの果断さを完全に損なってしまっていた。

桜との問答と、アーチャーの惨状を目の当たりにして、心が追い付いていない。

「その程度なんですか、姉さん。本当にかっかりです」

「・・・桜。凜を逃がしてやってくれ」

アーチャーが必死の思いで交渉を持ち掛ける。

だが、圧倒的に桜が優位なこの状況からすれば、虫がいい話でしかなかった。

「何を言うんですか、アーチャーさん。いくらあなたの頼みでもそんな我が儘は許されませんよ」

桜は当然のように即座に拒絶する。

だが、

「ならば、私はこの場で霊核を貫いて自決しよう」

アーチャーはその手に白剣【干将】を投影して、自身の心臓に突き立てる素振りを見せた。

「え？」

「理由は把握できないが、キミの目的は、初めから私だったのだろうか？」

アーチャーは己がマスターを守るため、一縷の望みを託して桜に問う。

桜は瞠目した。

「・・・英霊に言うのはおこがましいですが、こんな土壇場でよくそこまで頭が回るものですね」

「・・・お褒めに与り光栄だ・・・」

既にかなり消耗しているアーチャーだが、それでも平静を装いながら嘯いた。

「わかりました。今だけは見逃します。私の気が変わらないうちに早く行つてください。姉さん」

「アーチャー・・・」

凜はそれでも決心が着かない。

アーチャーを見捨てるという行為に、途方もない罪悪感を抱いていたからだ。それだけ、この英霊をサーヴァントとして、そして相棒パートナーとして信頼していたということでもあった。

「早く行け。凜・・・」

アーチャーが必死でこの場を去るよう促す。

「何もしてあげられなくてごめんなさい。アーチャー」

凜は自身の無力さを痛感し、謝りながらも駆け出した。

アーチャーと桜の脇を抜けて、扉に向かう。

「さよなら。召喚したのがあなたで本当に良かったわ」

「それはこちらのセリフだ」

アーチャーがニヤリと笑って返した。

「達者でな。遠坂……」

去り行く遠坂凜の背中に、赤い弓兵の英霊は薄れつつある意識の中で別れを告げた。

第25話 　　く10日目①　　「黒幕の焦り」

Interlude in

「間桐臓硯か？」

言峰綺礼は、思わぬ来訪者に向けて問い掛けた。

礼拝堂の中の光は僅かな明かりのみだったが、見間違えるわけはない。

実際には『誰か』ということよりも、『何故か』を問おうとした言葉であった。

「そうじゃ。久方ぶりじゃのう。綺礼よ」

礼拝堂内に配された固定座席の間を通って、その老人、間桐臓硯はゆつくりと歩みを進めた。

「こんな夜更けに何の用かね？」

丁度日付が変わった刻限だった。

「ここに、小さいほうの聖杯が逃げ込んでいるであろう？それを受け取りにきたのだ」

「何の事かわかり兼ねるな」

「ふおふおふお。このような問答は時間の無駄というものではないかな？アインツベルンの娘がここに匿われていることは、調べがついておる」

「そもそもご老体は、何の権利もない。マスター登録もされていない以上、聖杯戦争の関係者とはみなせない。であるならば、如何なる要求も通用しないのが道理というものだが」

「外に車を待たせておる。そこに慎二がおるのだ」

「何だど？」

意外な言葉に、綺礼は訝った。

「誠に遺憾ながら、マスターであった孫の慎二は半身不随となってしまつてのう。そのため、肉親である私が代弁して、慎二の要求を伝えておるのだ」

「ほう」

「残るサーヴァントは、あと僅か。聖杯の在処を知っているということも勝者にとって大事な要素とは思わぬか？」

「成程。ご老体の仰ることに一理ある。だが、私の知る限り、まだ英霊は3騎残っている。勝利宣言をするには尚早と思料するが如何か？」

残っているのは、ライダー、キャスター、アサシンだ。

「ふむ」

「この状況では、アインツベルンのマスター、即ちイリヤスフィール・フォン・アインツベルンがここに逃げ込んできたとする、現状では脱落したマスターとして保護しないわけにはいかないということは、ご理解いただけるのでは？あくまでも仮の話ではあるがね」

実際に昨日、凜に伴われてイリヤスフィールはこの教会に保護されていた。

消滅したバーサーカーのマスターであるという名目でだ。

凜はまだ、イリヤスフィール自身が聖杯であるという認識はないようだった。

「ということは、サーヴァントが残り1騎となれば、引き渡すということじゃな？」

「それは道理というものだ」

最後まで勝ち残り正当な権利を有する者には、イリヤスフィールを『聖杯』として贈る必要がある。

「その言葉しかと聞いたぞ。監督者よ」

そう言つて、間桐臓硯は、踵を返した。

「綺礼よ。先ほど言ったとおり、慎二は最早ともに動けぬ体となった。相応の治療と、今後の身の安全を保障してもらいたいものだろう」

「是非もない。承ろう」

「うむ。それでは、さらばじゃ。綺礼よ」

そう言つて、間桐臓硯は扉を抜けて、夜の闇に消えていった。

それを見届けた後に、言峰綺礼は独り言ちる。

「なぜ、姿を晒したのだ？」

これまで、間桐臓硯はずっと黒子に徹してきた。おそらくアサシンのマスターは、あの老人であろう。そう疑ってはいたが、あの老人がマスターであるという確証を得ることができなかった。

あくまでも推測に過ぎず、証拠はない。

それだけ、あの老人は慎重に姿を隠してきたのだ。

「罫とも考えられるが・・・」

だが、何があるというのか？

「間桐慎二に爆弾でも仕込んだか？ふふ」

自らの冗談に少し笑いを漏らす。

思い返すと、先ほどの交渉は性急に過ぎた。

「あわよくば・・・を狙ったものに過ぎなかった・・・？」

今ここでイリヤスフィールを奪うために実力行使に出なかつたということは、そもそもサーヴァントを連れずに来ていたとうことだろう。

「それだけ、焦っているということか？」

先日、言峰自身のサーヴァントであったギルガメッシュと、そして、今回召喚された中では最強と思われたバーサーカーも斃れている。

アサシンを役役している筈の間桐臓硯からすれば願ってもない展開である。残り3騎の英霊のうち、ライダーも含めれば2騎を従えており、相手がキャスターであればさほどの脅威ではないだろう。

しかし一方で、間桐慎二のサーヴァントである筈のライダーは衛宮士郎と親密な関係にあるという複雑な状況でもある。

そして、その間桐慎二は重症を負つたらしい。

「間桐家内で何かが起きているのか？」

綺礼は考える。

ランサーとギルガメッシュという手駒を失つたが、折角の聖杯戦争だ。

これまでは衛宮士郎をはじめとした参加者達の織り成す、歪で複雑な人間模様や業を観察するに止まっていた。

だが、その渦中に自ら飛び込み、戦いに直接関与するのも面白いか

もしれない。

そして、何よりあの黒い影……

「あれこそ、私の探すものなのかもしれない」

枯れていた欲求が体の底から湧き上がってくるのを感じる。

自身の口元が歪んだような気がした。

「……さて、それでは間桐慎二の様子を確認するのでしょうか。ここに匿うのは三度目だな。彼の衛宮士郎に対する妄執もなかなか興味深いものではあったがな」

過去二度はいずれも程なくして教会を抜け出していたが、半身不随になったとあればもはや再起は叶わないだろう。

I n t e r l u d e o u t

R t u r n

「落ち着きましたか？凜？」

凜は昨夜、桜に自宅を襲撃されてこの家に逃げ込んできたのだ。

その時にはだいたい混乱し、取り乱していた。

あの大人しかった少女が悪鬼のようになって襲ってきたのだから、混乱するのも止むを得ないだろう。

「お陰様で一晩眠ってなんとか……って感じかしら。ありがとう。ライダー」

凜は、目の前に置かれた湯飲み茶碗を両手のひらで抱えている。自分自身を改めて落ち着かせようとしているかのようだ。

「衣服や日用品などは、桜が残していったものを使えば良いでしょう」

「当面はそうね。桜が私の家に留まるのでなければ、一度、戻りたいところだけど」

「教会に匿われるつもりはないということですね？」

彼女は、アーチャーを失った。

マスターではなくなったのだから、教会を頼ることも選択肢としてはある。

だが、そんなつもりは毛頭ないだろう。

「勿論よ。衛宮君だって、サーヴァントなしで戦い続けているわ……あ……正式に契約しているサーヴァントはいないって意味よ」

ちらりと私を見て、慌てて彼女は言い直した。

「お氣遣いいただかなくても、大丈夫ですよ」

そんな言い回し一つに私は頓着しないが、こういう点に氣遣いができくらいいには、落ち着いたということだろう。

「とにかく、私の戦いは何も終わっていないわ。だいたい、綺礼に保護されるなんて真つ平ご免だしね」

「とは言え、これからどうするつもりですか？」

「衛宮君が起きたら、改めて一緒に考えたいところだけど……」

凜は、ちらりと居間の先にある士郎の部屋のほうへと目線をやった。当の士郎は、昨日治療をしていた土蔵からその身を移して、部屋に布団を敷いて寝かせている。

あれだけの無茶をしたのだ。暫くはまともに動けないだろうと、キヤスターは言っていた。

彼女は台所で朝食の準備をしながら、こちらの会話を聞いている様子だ。

「間桐桜がああ黒い影の正体だったということだな」

葛木が居間に入って来て、会話に加わった。

普段、あまり聖杯戦争に関与する素振りを見せない彼がこの話題に言及してきたということは、それだけこの事実が意外だったということとかもしれない。

「私は桜が変貌する様も見ましたし、桜の憤りも全て聞きました。一番大きかったのは士郎と私への怒りでした……」

改めて、昨日の桜の様子を思い出した。

あらゆる負の感情を曝け出した少女はその在り方から大きく変わってしまったのだ。

「私に対する怒りも強烈だったわ。でも、今でも昨日起きたことは、現実感がないくらいなの。ほんとに、夢だったんじゃないかってくらい」

無理もないだろう。凜には何の予兆も感じられなかったはずだ。

だが、私は違う。

「申し訳ありません。私は不穏なものを感じていました。マスターである桜の言動は時として、私を戸惑わせるものがありました。それに、直感的なものに過ぎませんでした。あの影が桜に少し似ているとも感じていました」

私が桜のサーヴァントであつたことは、昨夜のうちにここにいる全員に伝えていた。

この点については、左程、意外なこととして受け取られなかった。キヤスターなどは、『十中八九そうだろうと思っていたわ』と言つていた。

「それくらいは確度じゃあ、どうしようもないわよ。でも、不穏な言動つて例えばどんなものだったの？」

「そうですね。アーチャーが士郎を襲つた時などは、次は積極的に斃してしまふように示唆されました。その時には既に凜の令呪によつて、アーチャーが士郎を襲うことはできなくなつていたにも関わらずです」

あの時は純粋に士郎の身を按じてのものだと思つたが、違つたのかもしれない。

「ああ。なんかそれわかつちやうかも」

凜が唇を湿らすように少しだけお茶を口にした。

「多分、自分のサーヴァントで、私のサーヴァントを斃したかつたのよ」

「ええ。おそらくあなたに勝ちたかつたのでしよう。姉であるあなたに対して複雑な感情を抱いていたようです」

「だから、結果的に私が衛宮君と親密になつたのも、鬱屈した感情を貯める要因になつたわけね」

「結果的にですか？」

思わず、少しだけ棘を含んだ言葉を凜に投げ掛けてしまった。

私は、士郎が彼女を異性として意識していたことを知っている。

さらに、彼女が士郎に対して、ただの共闘者として以上の感情を抱

いているとも感じていた。

「何だつて言うのよ？」

その棘に気付いたのか、凧が険しい声で訊き返してくる。

「はいはい。宗一郎様の前で、女同士の醜い争いなんておよしなさいな」

キャスターが朝食を運んできて、險悪になりそうな私達の会話を制した。

「見事な仲裁だ。キャスター」

葛木がほんの少しだけ安堵したようにキャスターを称えた。

「いいえ、宗一郎様。私達のように深い信頼で結ばれていれば、不安定で哀れな彼女たちの心中を察して、優しく窘めるのは造作もないことですわ」

このキャスターの言には不愉快な成分も多かったが、よくよく考えれば重要な点は領けたので、私は気持ちを切り替えることにした。

「そうですね。持たざる者の心中を慮おもんばかるべきでした。余計な波風を立てるような言をして申し訳ありませんでした。凧」
そう。

今の士郎と私はお互いに想い合い、信頼し合っている。

凧に突つかかる必要などないのだ。

「・・・ぐ・・・こいつらなんかムカつく・・・」

遠坂凧は自棄やけになったように、並べられた食事を性急に食べ始めた。

この様子を現代風に言うと、がつつくと言うのだろう。

「あらあら、本当にはしたないわねえ。あなたにもきつといい人がみつかるわよ」

「うっさいー！」

「だいたい、あなたなら不自由しないと思うのですが？」

思わず聞いてしまった。

遠坂凧という女性が魅力的なことは間違いない。

美人で社交的でもあり、寄ってくる男性などごまんといえるだろう。

「そうだな。学校には学業優秀で、スポーツに秀でた者もいる」

意外なことに葛木がこの話題に加わってきた。

「中身があればいいんだけどねえ。衛宮君やあんたみたいなのが、そんなじよそこらにいるわけじゃないでしょうが・・・」

別に、その二人と比較しなくてもいいと思いますが。

士郎のことは当然としても、どうやら凜は葛木のこともかなり評価しているようだ。

彼女の評価基準の歪いびつさが露わになった気がした。

「結局、あなたも異常者ということですね」

「不毛ねえ。まあ宗一郎様が素敵だというのは当然なのだけれど」

「だから、うっさい！既得権益者なんて滅んでしまえ！」

心地いい遠吠えを聞きながら、キャスターの用意した朝食をいただく。味は至って普通だ。

・・・やはり、士郎や桜の作った食事のほうが美味しいですね。

「話を本題に戻しましょう」

朝食が済んだところで、私は話を進めようとした。

「あんたが喧嘩売ってきたんでしようが・・・この似非えせ世界三大美女め・・・」

「全然、けなせていないわよ」

呆れたように、キャスターが凜の発言に対して指摘する。

「引き金となったのが、蓄積した感情だったとしても、それで人間が皆魔物に変貌するわけもない。間桐には、あの影と同質化する根本的な要因があったということだ」

前置きもなく、葛木が要点を突いてきた。

「あの子は、間桐家が地獄だったって言ってたわ。魔術的に体をいじられていたのかも。その辺、どうなのライダー？」

「・・・はい。あの家の魔術は虫を媒介にするものです。桜は日常的に虫に体を嬲なやられていました」

「なんですって!?!」

凜が口に手を当てて、驚愕する。

「身中にも虫を埋め込まれていたようです」

桜の異常な境遇は、それでいながらあまりにも日常的に過ぎた。桜

はそれを淡々と受け入れているように見えだし、私としてもそこだけを切り出して、大きな異常とは感じなかった。

「その虫による副作用のようなものでしょうか？」

私は努めて感情を込めずに伝え、問いを投げる。

「そんなことって……」

凜は問い掛けのほうは耳に入っていないらしく、怒りに震えているようだ。彼女がそれだけ、真つ当な倫理観や価値観を持っているということだろう。

「……桜ちゃん……そんな日常を過ごしていたにも拘らず、よくあんなにも普通に振る舞っていたものね……」

キャスターも俯いて震えていた。

彼女も最近は、桜と一緒に料理をすることが多かったため、だいぶ感情移入しているようだ。

「でも、虫は所詮、媒介物に過ぎないわ。前にも話し合ったことだけど、あの黒い影の動きは聖杯と関連している。つまり、『虫を使って植え付けられた何か』によつて、彼女は聖杯と紐付けられたと考えるのが自然ではないかしら」

感情の揺らぎを抑え込み、キャスターは見解を示す。

生前、数多くの残酷な場面を体験してきただけに耐性はあるのだろう。

「そしてそれは桜ちゃんの意味によつて抑制されていた。だけれども、ついにそのダムが決壊してしまったということかしらね。彼女の魔術がどんな属性かわかるかしら？」

キャスターは、私と凜を交互に見た。

「桜の魔術属性は極めて特殊なものだと父さんから聞いたことがあるわ」

何とか落ち着いたのか、凜が答える。

「成程ね。すると、あれは虚数魔術かもしれないわね。影や負マイナスなんかを使役する性質があるもの」

「虚数属性か……そうかもしれない。特殊過ぎて、父さんも教えるのが難しかったから、私に後を継がせたのかもしれないわね……」

「間桐家の魔術については、何かわかるかしら？ライダー」

「主に、蟲を使役することで他者から力を吸収するものだと聞いたことがありません」

以前、桜が極めて否定的な感情を込めて語っていたことを思い出しながら伝えた。

「あの黒い影の性質に合致するわね」

「イリヤスフィールの話と合わせて考えると、聖杯の中にある呪い『人々への怨嗟』と、桜の『虚数魔術』、間桐の『吸収魔術』という性質が一緒になったのがあの黒い影なのね」

「さらに昨日、あの屋敷で坊や、ライダー、間桐慎二という三者による遣り取りの一部始終を見たことで、桜ちゃんの負の感情が増幅し、聖杯と繋がりがあった彼女はその呪いを吸収して浸食されてしまった。その結果としてあの姿に変貌したというところかしら」

「でも、『聖杯と繋がりのある何か』って何なのかしら？」
凜が疑問を呈する。

確かに、まだ聖杯と桜を直接結び付けるものが見えていない。

「前回、聖杯は坊やのお父さんに破壊されたんでしょう？」

たしか神父の話では、衛宮切嗣がセイバーに壊させたということだった。

「間桐臓硯は、前回の聖杯戦争の一部始終を見ていたんじゃないかしら？」

「そうね。前回も代理を参加させたということだったけれど、状況は観察していたはず」

キヤスターの言葉に、凜が同意する。

「その破壊された聖杯の一部か、もしくははその中のものを回収し、蟲を媒介にして桜に植え付けたということでしょうか？」

口に出してみると、かなり正解に近付いていることを私も感じた。
「桜ちゃんをどうこうできるのは、間桐家の者でしょう。そして、間桐臓硯には、その手段も、機会もあった」

「当然、慎二を操るのはあの老人からすれば、簡単です。昨日の状況を作り出したのも、間桐臓硯でしょう」

「桜をあんな姿にすることが目的ということになるけれど、それって何の意味があるのかしら？」

「自身の手駒として引き入れるという意味があるのでしよう。桜はこの戦いには極めて消極的でしたから。変貌したことで、桜は人が変わったように我々に対して攻撃的になりました」

「そうね。ライダーを失ったとしても、桜をその気にさせるほうを優先したのかしらね」

桜を戦力化し、アーチャーを手に入れば私を捨て駒にしたとしても、充分にお釣りがくるといふ計算をしたのかもしれない。

「この状況だと、アサシンのマスターは間違いなく間桐臓硯ということになるかしら。そして、セイバーとアーチャーも桜ちゃんが使役している状態と考えたほうがいいでしょうね」

「ランサーや、金ぴか……偽アーチャーやバーサーカーも向こうにいたらゲームセットよね」

凜の言う事はもつともだ。アサシンも含めた6騎を相手にしたら、私達に勝ち目など方に一つもないだろう。

「どうかしら……特にあなたから聞いた昨日のやり取りから考えると、霊核を潰される前に取り込んだ場合にのみ使役が可能になるのではないかしら」

アーチャーが自害しようとした際には桜が焦っていたと聞いている。

キャスターの推測は妥当と思われた。

「推測に過ぎないから、何とも言えないけれど。実際にランサー、バーサーカー、偽アーチャーも取り込まれていたら、本当にお手上げでしょうね」

「……キャスターの推測どおりだとしても、セイバー、アーチャーの二人だけでも滅茶苦茶強力よね……昨日、アーチャーは自分を犠牲にして私を庇ってくれたけど、結果的に全然釣り合いが取れていないわ……」

凜は、昨日の出来事を悔やんでいた。

それに、これからアーチャーと対峙するかもしれないと思うと、気

が気ではいられないだろう。

「彼も強力でしたから。サーヴァントの戦力だけ見ても、セイバー、アーチャー、アサシンに対して、私とキャスターでは明らかに劣勢でしょう」

さらに桜の特性がサーヴァントに対して極めて優位であることを考えると、こちらはさらに不利になる。

「あれ？」

ふと、凜が何かに対して疑問を抱いたようだった。

「ところで、ライダー。あなたそもそも桜のサーヴァントでしょう？当然のようにこちら側に味方できるのは何故なの？」

「微妙に不満げな口調なのが気になりますが・・・」

とは言え、当然の疑問だろう。

「あ・・・いや、勿論、あなたが衛宮君を守るのはわかるんだけど、桜との契約はどうなるのよ？まさか愛の力ってやつ？」

凜は、ちよつと本気混じりの口調で訊いてきた。

「そうです。と言いたいところですが、残念ながら違います。私は今も、桜から魔力供給を受けています。ですが、桜にはもう令呪が残っていません。ですから、私は自身の意思で動くことができます」

「ああ。そうか。私に令呪がなくても従ってくれていたのはアーチャーの意思だし、キャスターと葛木なんて最初から契約も令呪もないんだものね」

「桜が私とのパスを絶ってしまえば、私は消滅するしかありませんが、今のところその気配はありません。おそらく、桜にはその方法がわからないのでしよう」

「多分、あの子は魔術の使い方とかちゃんと習っていないんだと思うわ」

「あとは、桜が私をセイバー達のように取り込んでしまわない限り、士郎に対して敵対することはありません。もし、そんな事態に直面したら、私は躊躇いなく自決しますのでご心配なく」

本心をありのままに伝える。

今の私は、士郎を害する可能性が万に一つでもあるなら、それを排

除する。

「はいはい。あなたの気持ちはよくわかったわ。でもその時はギリギリまで諦めないでね。間違いなく、今の私達の最大戦力はあなただし、衛宮君もそんなこと望まないわ」

こういうところが、彼女の優れたところだ。

私に対してわだかまりはあるはずだが、気遣うべきところは本心から気遣うことができる。

こうなると、凜に何かと強く当たってしまう私自身の矮小さが強調される。どうしても、以前の士郎の想い人が彼女だったということが、頭の片隅から消えないのだ。

同時にこういうところが、私や・・・そして、桜の劣等感を刺激するのかもしれない。

端的に言えば、女として・・・と言うより、人間としての器が違っていると直感的にわかるのだ。何とか彼女に負けないようにしなければ、いつ士郎を奪われるかわからないと思ってしまう。

「わかりました。ありがとう。凜」

私は彼女に対して素直に敬意と謝意を表した。

何とか取り繕えただろうか。

「問題は、間桐にどうやって対応するかだな」

ずつと黙っていた葛木が再度、問題提起をする。

彼は、的確に要点を押さえてくるようだ。

セイバーも、アーチャーも勿論、強力だ。だが、こちらが戦力を集中して各個撃破すれば勝機はある。

一方、桜への対応は難しい。

サーヴァントでは、取り込まれて相手方になってしまふ懸念がある。そして士郎達ではそもそも力に差があり過ぎるうえ、矛先が鈍る可能性もある。

「私に一つ考えがあるわ」

凜が決意を秘めた顔で私達を見回した。

第26話 10日目② 「造反者たち」

Interlude in

新都の繁華街。

冬木市のような地方都市では夜の10時を過ぎるような時刻になれば、ほぼ人の気配はなくなるものだが、この辺りだけは飲食店、風俗店をはしごする者が一定数いる。

「そもそもいくら下期の成績が悪いからって、休日出勤とか支店長も酷すぎるよな〜」

「全くだよな。そういや、そろそろ異動が内示される時期が近付いてきたな」

「そうだな。俺なんかこの支店に配属されて4年になるんだぜ。そろそろ東京に戻りたいよ」

「悪いけど、お前には残って欲しいなく。それより、支店長にとっと出ていってもらいたいわ〜」

「とにかく、もう一軒行こうぜ」

などと、当人たちには重要なのだろうが、取り留めのない会話を行っている5人のビジネスマンが路地にたむろしていた。

「あれ?」

そのうちの一人が髪にリボンを結わえた女が近付いてくるのに気付いた。女と言っても、高校生くらいだろうか?少女と言っても差し支えない年齢のように思えた。

少女は、黒と赤のストライプという奇妙な色合いのワンピースのような服装だった。

体の線がくつきり出るようなデザインになっているようで、かなり艶めかしい。

「お嬢さん。こんな時間に女の子がこんな場所を歩かないほうがいいよ」

その少女に気付いたビジネスマンは、集団の中では比較的酔いが浅

く、あくまでも親切心からそう声を掛けた。

「ふふ……ご忠告ありがとうございます。おじさんたちこそ、こんな時間に出歩くのはお勧めしませんよ」

「なんだって?」

「小さい頃、夜遊びはいけませんって教えてもらわなかったですか?」

少女には周りの店から漏れる明かりや、街灯の光で影ができていた。

「だから、こんな酷いことになっちゃうんですよ」

——ザザ——

少女の影はゆっくりと延びて、忠告してきた男の傍らを通り過ぎていった。

そして後ろで酔いに任せて、呂律の回らない口調で会話を続ける仕事仲間達に近付いていく。

少女に話しかけた男が無意識のうちに、その影を追うように後ろを振り向くと、その影はゆっくりと仲間たちの足元から絡みつき……

「え?何だ?この黒いの……?」

「あれ?オレの足がなんか変……」

「ぎゃああああああああ……」

——フ——

男の目の前で、4人いた仲間たちはほぼ同時に悲鳴を上げて、消えていった。

「……………は?」

呆然としたまま男が向き直ると、先ほどの少女は薄く笑っていた。

「ね?」

少女は服装と相俟って、年不相応なほどに妖艶に見える仕草で小首を傾げた。

「いったい……何が……?」

後ろで見た光景と、眼前の少女とのあまりのギャップに、思考がつかない。

「もつとも、私もあの家うちでそんな注意をされたことはないんですけどね」

少女の白い手が伸びてくる。

その手に絡みつくように、袖口から黒いモノが伸びて、男の頬に触れた少女の指を伝ってくる。

やがてその黒は男の顔を全て覆い尽くしていった。

!?

恐怖なのか、驚愕なのか、あるいは興奮なのかもよくわからず、男は声にならない悲鳴を上げる。

その悲鳴に意味はなく、その顔が黒く塗り潰されたときには、男の頭部は消えていた。

ドッ

鮮血を吹き出しながら、首から上がなくなった体が地面に倒れた。

「あ……そもそも支店長さんが悪いんでしたっけ？」

少女は少し申し訳なさそうに呟いた。

「いや、仕事が終わった後に、ここに飲みに来たのはこいつらの選択だな」

傍らにやって来た長身の男が、少女の呟きに一言返した。

男は白髪で褐色の肌をしており、全身黒で統一された服を着ている。

「それもそうですよね。だから自業自得ってことで合ってますよね？」

「アーチャー」

「そうだな。はしごするつもりのようなようだったしな」

「そもそも酒に呑まれるなど言語道断だな」

もう一人どこからともなく現れた小柄な少女が、切り捨てるような言い方で断じた。

こちらは透き通るといふよりは、少し病的な白い肌をしており、白金色の髪を後ろで纏めている。

彼女も黒い服に身を包んでいた。

「私に忠告してくれた人は、概ね素面でしたよ。セイバー」

リボンの少女が窘める。

凄惨な出来事があったことなど気に留める素振りもなく、そんな会話をしていた3人に小さな影が近付いてきた。

カツン

その影はだいぶ老齡なのか、杖をついている。

「……こんなところで何を油を売っておるのじゃ。桜よ」

歩み寄って来たのは杖をついた小柄な老人、即ち間桐臓硯だった。「あら？お爺様。どうしたんです？こんなところまでいらっしやるなんて。お爺様もこの辺りでお酒を召し上がるんですか？」

臓硯の姿を認めて、少女、即ち間桐桜は無邪気な口調で問い返した。「お主には、アインツベルンの聖杯を奪うように言い含めたはずじゃが、なぜこのような無意味な殺戮をしているのかと聞いたのじゃ？」
改めて問われた桜は、くすりと嗤った。

「勿論、お爺様のお言いつけは覚えています。でも、私ちよっとお腹が空きやすい体質になっていまして、食事を先に済ませようと思ったのです」

「それでは、この後、わしの言いつけを守るといふことじゃな？」

「ええ。勿論……」

ジャツ！

「なっ!？」

桜の返答の途中で、突然、小柄な少女、即ちセイバーが臓硯を一瞬のうちに袈裟切りにしていた。

普通の人間ならまず助からないような深手だった。

ザザ！

が、老人の体は分裂し、夥しい数の蟲に変じて霧散していく。

「やはり、剣ではどうにもならないか……」

手応えのなさに独白しながらも、再度、セイバーは分裂した蟲に対して剣を横薙ぎに振るう。

それにより、数十の蟲が切り裂かれて地に落ちるが、全体から見ればごく限られた数に過ぎなかった。

分裂した蟲達が集まり、再び老人の姿を形作る。

「何をするか、桜っ!？」

先程迄よりも少し体の一部が何か所か欠けた状態になった間桐臓硯が、突然攻撃を仕掛けてきたことに対して詰問する。

「ごめんなさい。お爺様。でも、この二人はなかなか私の言うことを聞かないんです。ですから、お爺様から直接お灸を据えてあげてください」

桜は自分の意思ではないという主張をする。

「そうだな。きついお灸を据えて欲しいものだ。そうすれば、我々も反省するだろう！」

ゴツツ！

そう言いながら、今度は長身の男、即ちアーチャーが手にした双剣で臓硯の顔を刺し貫いていた。

「ぬうつ!？」

だが、先ほどセイバーが斬りつけた時と同様に、臓硯の体は蟲に変じて霧散した。

「潰す部位の問題でもないか・・・面倒だな」

アーチャーは忌々し気に吐き捨てた。

「桜っ!! 貴様、儂を裏切る気か!? これまで育ててきてやった恩を忘れておって!!」

上半身だけを形作った臓硯が怒りを露わにする。

「だから、先ほども言ったじゃありませんか。あくまでもその二人の暴走です。裏切るだなんて滅相ありません」

桜は少なくとも表面上はしおらしい態度を保っていた。

「そのとおりだ。現状、我々は少々抑えが効かない状態になっている。目にしたものに手あたり次第に攻撃してしまうかもしれない。アサシンを呼んで、我々の抑えにしたほうが良いのではないか？」

アーチャーは嘲るような笑みを浮かべた。

「もつとも、あの三流が我々の目の前に現れば、瞬く間になます切りにされるだろうがな。そうなれば、貴様の手足はもがれたようなものだ」

そう言いながらも、アーチャーはまたも臓硯に襲い掛かる素振りを見せた。

「魔術師殿!」

主の窮地を察したか、あるいはアーチャーの煽りに触発されたのか

定かではないが、白い髑髏の仮面を付けた黒衣のサーヴァント、即ちアサシンが臓硯の前に現れた。

「これ以上、好き放題させるか!」

ジャジャッ!

アサシンが立て続けに3本の短剣を投じる。

ギギギンツ!

それらを剣の一振りですべて弾き飛ばしたのは、アーチャーを追い越して駆け寄ってきたセイバーだった。

「はっ!」

セイバーは剣を左手に持つと、籠手をつけた右腕の拳でアサシンに殴りかかった。

「なに!?!」

虚をつかれた形になったアサシンだが、咄嗟にその拳を防ごうとアサシンは短剣を立てた。

ゴツ!

しかし、短剣で防いだアサシンは、大きく弾き飛ばされ、

ザザザ・・・

地面を転がって行った。

「ぐ・・・」

セイバーの拳の一撃を受けたことにより、アサシンの持っていた黒塗りの短剣は砕けていた。

それでも、なんとか体勢を立て直す。

「アサシン! 儂は逃げられる。お主も離脱するのだ!」

「・・・面目ありませぬ、魔術師殿」

——スウ——

マスターの言葉に従い、アサシンはその姿と気配を完全にこの場から消失させた。

「いい心構えだ。間桐臓硯。貴様は何千回でも斬り刻んでやろう」

元々アサシンなど眼中になかったとばかりに、黒剣を構えたセイバーが臓硯へと一息で駆け寄っていく。

「く!? 覚えておるがいい・・・」

ザアアアア

セイバーの攻撃の気配を察知して、臓硯は自ら無数の蟲に分裂して、この場から離れていった。

「・・・全く便利な芸当ですね」

セイバーが去ってゆく蟲達を見送りながら、忌々し気に吐き捨てた。

「想定はしていたが、あの妖物を片付けるのはだいぶ手間がかかりそうだな」

アーチャーも肩をすくめた。

「それはそうよ。人間じゃないんだもの」

桜が二人に近寄ってきた。

「如何でしたか？桜？」

セイバーが桜に問い掛ける。

それに対して桜は口では何も答えず、自らの胸に手を当てながら軽く頷いた。

「そうですね。我々の考えは正しそうですね」

セイバーは桜の様子を見て頷いた。

「では、予定どおりに動くとしよう」

アーチャーがそう言うと、三人は領きあつて夜の闇に消えていく。

「お爺様・・・そして、姉さん、ライダー、先輩・・・私、やりたいようにやらせていただきますから・・・」

一人の少女の呪いがある場にしばらくの間たゆたい、やがて、消えていった。

第27話 　　～11日目①～ 「兄妹あるいは姉弟」

R t u r n

士郎は依然として、眠り続けていた。

キャスターの話では今日中には目覚めるだろうということだ。

「できれば衛宮君の回復を待ってからにしたかったけど、イリヤスファイルをこっちに一旦連れてくるわ。衛宮君が目覚めた後の行動が早くなるしね」

昨日、凜が提案してきた内容、即ち『桜への対抗案』を実現するにはイリヤスファイルが必要である。

「この状況で、一人で行動させるわけにはいかないわね」

とは、キャスターの言であり、私も同意見だった。

かといって全員で教会に向かっている間、万一屋敷を襲撃されれば士郎を守ることができなくなる。

最終的に、私と凜が教会に向かい、葛木とキャスターは家で待つことにした。

本当は私が士郎の傍にいたかったが、屋敷に防衛用の結界を張っているのはキャスターだ。

彼女が衛宮邸を守るほうが、理に適っており、私自身も広いフィールドのほうが立ち回り易いというお互いの特徴もあり、この分担となった。

そのため、今、私は凜と共に教会に向かっている。

一般人とも擦れ違うので、私は眼鏡とセーター、ジーンズという服装である。

「お互いに何かあったら、相手に報せるようにしましょう」

キャスターが作った連絡用の符をお互いに持つことにした。

士郎が以前、学校で慎二に呼び出された時に使ったもので、破ればお互いへの合図になると同時に位置もわかるものだ。

状況は切迫しつつある。

凜は、今日、登校していない。

これまで極力普段どおりの生活を是としていた葛木ですら、学校を休むことにしていた。

「着いたわね」

教会に到着した私達は、重厚な扉を開いて中に入った。

「自らこの教会を訪れるようになってくれたのは嬉しいぞ、凜。そしてライダーも歓迎しよう。残念ながら、ここでは酒を飲むわけにもいかないがな」

神父はそう言って、いつもどおりの服装と態度で私達を迎え入れた。

「本日は、そういった用向きではありません」

「ふむ。まあ、そうだろうな」

悠然と応じながらも、神父は僅かに残念そうな顔をする。

「綺礼、悪いんだけど預けたイリヤスフィールを連れて帰りたいの」

こちらの要望を凜は伝える。

おそらく、ここではイリヤスフィールの意思が重要になるだろう。

あくまでもイリヤスフィールは、聖杯戦争に参加していたマスターだ。元々、こちらが教会に預けた身ではあるが、本人が衛宮邸に戻りたくないと言えば、神父の立場からするとこちらの要望を断らざるを得ないだろう。

最悪の場合、実力行使に出ることになるかもしれない。

「残念ながら、イリヤスフィールはここにはいない」

「え?」

想定を大きく外れる答えが返ってきた。

「どういうことなの? 綺礼」

凜が尋ねる。

「うむ、実は単純な話だ。イリヤスフィールは先ほどこの教会を立ち去ったのだ。自分の意思でな。15分程前だろうか」

「どうやら入れ違いになってしまったようだった。」

「えっと・・・何か理由とか行き先とかは告げていったかしら?」

少し戸惑った凜だったが、すぐに質問を投げる。

「理由はわからないが、衛宮邸に行くということだった。そういうわ

けだから、完全に行き違いだな」

「うちに？」

もはや、凜にとつても士郎の家が自宅という認識になりつつあるようだった。

それにしても、どういうことだろうか？

我々としては都合の良い話だが、イリヤスフィールの意図が掴めなかった。

「気になりますね。急いで戻りましょう。凜」

「そうね。ちよつと嫌な予感がするわ」

すぐさま、私と凜は踵きびすを返して出口へと向かう。

「それにしても、この段階に至ってイリヤスフィールの身柄が重要になりつつあるようだな」

と、私達の背中に神父の声が投げ掛けられた。

段々わかってきたが、この神父はこういう終わり際のタイミングで相手が気になることを言うのが好きなようだった。

「どういうこと？他にも誰かが来て、イリヤスフィールの引き渡しを要求したってことよね？」

「そのとおりだ。察しがいいな」

「誰？」

凜が間髪入れずに問う。

「間桐臓硯だ。あの老人は聖杯戦争の参加者ではないから、名前を明かしても問題あるまい」

つまり聖杯戦争参加者に関する情報は、他の参加者には漏らせないというのが、仮にも監督者としてのこの男なりのルールということなのだろう。

逆に言えば、臓硯は正式なマスターではないので、私達に伝えるのは問題ないという理屈だ。

「情報提供に感謝するわ」

極めて重要な話だった。

あの老人が狙っているということは、最悪の場合、道中でイリヤスフィールが襲われる可能性がある。

「ふふ。関係のない情報だ。感謝されるいわれはないな」

「それならそれでいいけどね」

「今度こそ、私達は教会を後にしようとした。が、

「もう一つだけ大事な情報がある」

神父が再度、声を掛けてきた。

「何よ？」

凜が苛立たし気に振り向いた。

流石にしつこいと感じたのだろう。

「これは、完全に善意で伝えるのだが・・・若干言い辛くてな・・・」

「だから何よ？あんたが言い淀むなんて珍しいわね」

「・・・うむ・・・イリヤスフィールはタクシーを使ったぞ」

「・・・え？」

私と凜の声が重なり、私は頬を一滴の汗が伝わっていくのを感じた。

それっでもう絶対に追いつけませんよね・・・

Interlude in

キャスターはライダーの符が破られたことを探知した。

ライダーと凜の二人が教会に行くときに、渡しておいたもので、破られることでお互いの合図になるし、居場所がわかる。

ただし、ライダー達に渡したのは、あくまでも彼女らが何がしかの危険を感じたことを伝えるためだけのものだ。何故なら、この家には衛宮士郎が眠っており、彼女達に危機が迫ってもキャスターと葛木はここを大きく離れるわけにはいかないからだ。

逆に言えば符を破ったということは、こちらに警戒するよう伝えてきたということである。

「宗一郎様。向こうで何かあったようです。警戒しましょう」

キャスターとしては、葛木を巻き込むのは本意ではないが、彼のほうではキャスターを守る意思を持っている。

戦いになるようであれば、積極的に前線に出るだろう。

「わかった」

葛木が立ち上がる。

「周辺を確認いたしますわ」

キヤスターは水晶球を取り出し、この屋敷近辺の状況を確認する。周囲には使い魔である鳩を放っている。それらの視覚から送られてくる映像を、その表面に映し出して切り替えていく。

しかし、少なくとも付近には何も異常はないため、さらに範囲を拡大してみる。

「あら？」

水晶球に、この家に向かう交差点手前でタクシーを降りるイリヤスフィールの姿が映し出された。

彼女は交差点で少し迷ったように周囲を見回していた。

「どうやら、遠坂達とは行き違いになってしまったようだな」

一緒に映像を見ていた葛木が言った。

「そのようですわね。ライダーもこのことを伝えたかったのですでしょう」

「だが、それだけであれば、符を破る必要まではないな」

ジリリリリ！

その時、廊下の電話が鳴った。

「おそらく、遠坂達だな。私が出よう。キヤスターはイリヤスフィールを捕捉しておくように」

「かしこまりましたわ」

キヤスターに指示をしながら、電話に向かった葛木が受話器を取り上げ、耳に当てると何度か頷いた。

「………わかった」

最後にそう応えて受話器を置いた葛木は、すぐさま玄関へと向かいながらキヤスターに告げる。

「出るぞ、キヤスター。イリヤスフィールが狙われる可能性がある」

「あ、はい！宗一郎様！……一緒にします！」

キヤスターは慌てて、葛木の後を追った。

「イリヤスフィールを保護次第、すぐに戻る。この家を空ける時間を少しでも短くするぞ」

「かしこまりましたわ」

二人は正門から屋敷を出ると、全速力で交差点に向かった。

交差点までは左程の距離ではない。

だが、葛木が付近に到着して見回したところ、イリヤスフィールの姿は見当たらなかった。

「宗一郎様！あちらです」

キヤスターが示した方向には、2区画ほどの空き地があった。日当たりが悪いため、かなり薄暗い。

そこにイリヤスフィールと白い仮面をつけた黒衣の男がいた。

キヤスターにとって一昨日対峙したばかりのその姿は、紛れもなくアサシンのものであった。

「あれが、アサシンだな」

「はい」

葛木自身はアサシンの姿を見たことがないため、キヤスターに確認しながら一気に距離を詰めていく。その拳と足はキヤスターの魔術によって既に強化されている。

「アサシン以外いないのなら！」

キヤスターが葛木の後を追い掛けながら3発の光弾を一気に放つ。
「!?」

アサシンに対して、イリヤスフィールも魔術で編み上げた短剣を飛ばして抵抗していた。

その最中にキヤスターからの攻撃を受けたアサシンは、慌てて光弾を躲す。

標的に着弾することのなかった光弾は音もなく消える。

「はっ！」

だが、慌てて躲したことにより体勢を崩したアサシンに対して、既に間合いを詰め切っていた葛木が裂ぱくの気合いと共に拳を突き出す。

「舐めるなっ！」

言いながら、アサシンは葛木の拳を持っていた短剣で受けようとする。

だが。

ドツツ!!

鈍い音が響き、葛木の蹴りがアサシンの腹部にめり込んでいた。

葛木は拳による攻撃をフェイントとして用いて、トリツキーな動きで蹴りを繰り出していった。

「がはあっ!?!」

アサシンは、衝撃で後方に大きく飛ばされた。

「逃がさん」

葛木は間髪入れずにそれを追う。

「くっ!やはり厳しいか・・・」

アサシンは何とか体勢を立て直すと、黒い短剣を2本投じてきた。

葛木はそれを2本とも拳で叩き落すが、僅かに追い足が鈍った。

短剣を投じたのは、あくまでも牽制のためだったのだろう。

アサシンはその隙に、住宅の扉を縫うようにして姿を晦ましながらかけていった。

こうなってしまうと葛木も追う術がないため、諦めざるを得なかった。

「できれば、戦力を削ぎたかったが・・・」

とは言え、早く衛宮邸に戻る必要がある。イリヤスフィールを保護することが当初の目的であるため、戦果としては充分と考えられた。

「宗一郎様!凛々しいお姿でしたわ!」

キャスターが駆け寄ってくる。

「お前の助力によるものだ。感謝するぞ。キャスター」

「勿体ないお言葉ですわ」

キャスターは恍惚とした表情になった。

葛木はその言葉を聞きながらも、傍らにいる銀髪の少女に目を向ける。

「衛宮の家に向かおうとしていたのだろう。案内しよう」

「お願いするわ。この辺りまではわかったのだけれど」

先日、衛宮邸で食事を共にはしたが、イリヤスフィールは葛木とは会話をしていないため、話しかけられて一瞬戸惑ったがすぐに返事をした。

「それから、ありがとう。助けてくれたことには感謝するわ」

「・・・お兄ちゃん・・・衛宮士郎はどうしているの?」

衛宮邸に戻り、居間に案内されると同時に、イリヤスフィールは周囲を不思議そうに見回して、キヤスターに問い掛けた。

「二昨日、だいぶ無茶をしたのよ。だから、今は自分の部屋で寝ているわ」

キヤスターは居間を出たところにある士郎の部屋を指差した。

「そう・・・ちよつと様子を見てもいいかしら?」

「お好きなようにどうぞ。でも、無理に起こさないようにして頂戴ね。」

こういう時は、自然に目覚めてもらうほうがいいから」

「わかったわ」

少女は応えて、教えられた部屋に向かった。

「それでは、宗一郎様。そろそろ昼食を準備いたしますわ」

キヤスターはイリヤスフィールの後姿を見送りながら、明るく葛木に言った。

「イリヤスフィールの分もよろしく頼む。じきに遠坂達も戻るだろうから、結構な量が必要になるだろうが」

「問題ございませんわ」

葛木にそう答えながら、キヤスターは少女の後を追った。

目の前には布団に横たわる少年、衛宮士郎がいた。

父親でありながら、自分たちを裏切り、そして捨てた衛宮切嗣の養子。

彼女の手には、銀色に輝く短剣が握られている。

「アインツベルンの聖杯戦争は終わった・・・私達は負けた。でも、せめて私の目的だけでも果たさせてもらおうわ・・・」

銀髪の少女は小さく呟いた。

彼を殺した後に、どうするかなど今は気にする必要がなかった。ただ、殺せば良い。

そうすれば、少しだけ気持ち晴れる。

そう思い込もうとしていた。

短剣を振り上げる。

「……さよう……なら、お……に……」

だが、少女は唐突に意識が希薄になっていくのを自覚した。

自分の周囲だけが、薄い靄もやに包まれていくようだ。

体から力が抜けていく。

「……い……ちや……」

トンツ

手にしていた短剣が畳の上に落ちて、その場に浅く刺さる。

ドサツ……

そのまま猛烈な睡魔に襲われて、イリヤスフィール・フォン・アイ
ンツベルンは、布団に覆いかぶさるようにして、眠りに落ちた。

ザツ

「……全く手間のかかる子ばかりね」

部屋の障子が開き、キャスターが姿を現した。

彼女は足元で眠りについた銀髪の少女と、その向こうで眠り続ける
少年に交互に視線をやりながら呟いた。

「私の目の前で、きょうだい殺しなんてさせるわけがないじゃない
の……兄殺しなのか……それとも弟殺しなのか知らないけれど」

その目は、憂いの色を帯びていた。

「ましてや本来必要のないものなら………尚更ね」

Interlude out

第28話 11日目② 「前世のルール」

E t u r n

これは夢だ。

夢の中で古い記憶が無理やり引つ張り出されている。

そんなことが何故だかわかる。

遠くて、しかし、大事な記憶。

衛宮切嗣、すなわち自分の父親に関する記憶だ。

最初に目にした光景は、鮮烈に心に刻み込まれたものだった。

「良かった・・・生きている・・・生きていてくれて・・・ありがとう・・・」

オレ【衛宮士郎】を助けて、自分【衛宮切嗣】が助けられたという顔。オレ自身がついこの間まで、一番大切にしてきたこの上もなく綺麗で、憧れた最高の表情だ。

さらに続くのは、この家の縁側でした何気ない会話。

「正義の味方は期間限定で、大人になると名乗るのが難しくなるんだ・・・」

「なら、オレが爺さんの代わりに正義の味方になってやる」

それは、オレが決意を固めた決定的な言葉だった。

今なら、この時の自分が如何に無邪気だったかがよくわかる。そう、今のオレのように誰かの絶対的な味方になってしまえば、大事だったはずの誰かの敵になることもあるのだ。

こんな具合に、記憶の連鎖が映画のフィルムが流れるようにして、自分の横を通り過ぎていく。

そんな中で、ふと、忘れていた映像を見る。

何年前になるのだろうか？

今よりも断然若い藤ねえと幼いオレが横に並んで、波止場に立っている。

二人とも遠ざかっていく船を見送っているようだった。

「切嗣さん。また、行っちゃったね。本当にどこに何をしに行ってるんだろ?」

藤ねえはその船から目を外すことができないようだった。

いつも明るい彼女からは想像できない程、憂いに満ちた表情だ。

「遠い外国なんだろう?」

「うん。大事な人がいるんだって。でも、その相手にはいつも会えないんだって」

「何でなんだろうな?」

「わからないわ。教えてくれないんだもの。でも、いつも帰ってくるときはボロボロなんだよね。死んじゃうんじゃないかってくらい」

藤ねえは、さらに遠くを見るようにして潤んだ目を細めた。

「オレ達切嗣の家族なのにな。それをほっぽり出して行って、それでボロボロになるなんてな」

「きつと家族と同じくらい大事な誰かなんじゃないかな。もしかしたら、本当の家族なのかもね」

「何を言うんだ、藤ねえ。オレ達だって本当の家族だぜ」

「うん。そうだよね、土郎」

彼女の冷たい手がオレの頭を撫でていた。

目が覚めると、銀髪の少女がオレの布団に突っ伏すようにして寝ているのが視界に入った。掛布団の上に彼女の上半身が乗っており、さながら看病していた家族がそのまま眠ってしまったという具合に見えるもなくもなかった。

ぼんやりした頭で、なぜこの状況になっているのかを考えたが、よくわからなかった。

「士郎、目が覚めたようですね。体の具合はいかがですか？」

女性にしては少し低めの落ち着いた声音が、耳に心地よく響いた。

その声の主は、自らの命を賭して助けた相手であることをすぐに思い出す。

「・・・ああ、ライダー・・・良かった・・・無事だったんだな・・・」

布団に入っているオレを挟んで、銀髪の少女とは反対側に彼女は綺麗に正座していた。ハイネックセーターにロングパンツというシンプルな装いであり、薄紫色の長い髪は後ろで結わえられている。

「それはこちらのセリフです。あなたは自分がどれだけ無茶をしたかわかっているのですか？」

ライダーは、眼鏡の奥の双眸から涙を流しながら、震える声で詰ってきた。

「えつと・・・ああ・・・そうか。血を流し過ぎたんだな。まあ、なんとかなったんだし、ライダーも助けられたし・・・本当に良かった」
パンツ！

乾いた音が室内に木霊した。

「っ!？」

その音は、オレの頬と彼女の手の平が奏でたものだった。

「・・・いいわけではないでしょう・・・いいわけ・・・」

正座を解いたライダーがオレの胸に縋りついてきた。

オレの服を固く握りながら、胸元に縋り付くようにして嗚咽した。
「すまない。ライダー。めちゃくちゃ心配してくれたんだな。ありがとう」

こういう場面でどうすればいいかオレにはわからなかったが、自然と彼女の頭に手を乗せて言った。

「・・・はい」

「でも、オレはライダーも自分も大事だと思っている。あの場面では二人とも助かる最善の方法を選んだつもりなんだ。ギリギリではあったけどな」

「・・・そうですね。確かに無茶ではありましたが、無謀ではなかった」
ライダーは何とか居住まいを正した。

「私が敵の手に落ちたことがそもそもの問題だったわけですし
彼女が顔を伏せる。」

「ライダー、今おかしな事を考えているだろうか？」

「え？いいえ……」

ライダーは驚いたように再び顔を上げた。

明らかに凶星を刺された表情だった。

「いいやわかる。次に同じ状況になりそうだったら、その前に死ぬつもりだろうか？」

「……」

「それはダメだ。それじゃあ、前のオレと変わらない。いいか。お前もオレも生き残るんだ。そのための方法を考えるのを最後まで諦めないでくれ。生き残るためにとことん足掻いてくれ」

「……はい。士郎」

彼女は頷いて、涙を溜めた双眸を細めて微かに微笑んだ。

「……お取込み中のところ悪いんですけど……」

突然、ライダーとは反対の方向から声が届いてきた。

そちらに首を捻ると、寝ていたイリヤスフィールがいつの間にか起きており、少し非難するように目を細めていた。

「それを間近で見せつけられる身にもなって欲しいわ」

うつ伏せになっていた布団から少し顔を上げて不服そうに続ける。

「イリヤスフィール!?いつから起きていたのですか？」

ライダーが慌てて目に溜まった涙を拭きながら聞いた。

「綺麗な平手打ちの音がしたところからかしら。こういうのを日本の言葉で濡れ場って言うんでしょう？」

「ぬ……濡れ……」

オレは真つ赤になりながら、返す言葉を失ってしまった。

ライダーはキョトンとしている。どうやら全く意味がわからないようだ。

ザッ

「全然違うわ。こんなのただの痴話喧嘩よ。もしくはノロケの類かしら」

そう言いながら障子を開けて入ってきたのはキャスターだった。眉間を片手で押さえながら、呆れたような目でオレ、ライダー、イリヤスフィールの三人を順に見回していく。

「やっと目が覚めたようね、坊や。とにもかくにも無事で何よりだったわ」

だいぶ、記憶がはつきりしてきた。

オレは、自分で自分を刺した後、キャスターの助けもあって、なんとか間桐邸からライダーを救い出してきたのだ。

だが、この家に戻る途中で力尽きて意識を失ったはずだ。だとすると、

「たぶん、キャスターに治療してもらったんだろうな。ありがとう。先に礼を言っておく」

治療にはかなりの労力と時間を要した事は想像に難くない。先程のライダーの様子から想像すると、瀕死に近い状態、というか、まあ概ね死んでいたんだろう……

「色々と聞きたいんだけど、なぜここにイリヤスフィールがいるんだ？教会に保護してもらった筈だろう？」

「それは、直接本人に聞いてもらいたいところだけれど、もう少し心の整理が必要なんじゃないかしら」

キャスターがちらりとイリヤスフィールに視線を送る。

「お気遣いいただきなくて大丈夫よ。とりあえず、さっきの甘い濡れ場を見せつけられて、毒気を抜かれてしまったわ」

「相変わらず言葉の使い方を間違えているけれど、そういうことならいいわ。嘘は言っていないようだし。夕食の準備ができているから、いらっしやい」

あっさりとそう告げて、キャスターは廊下へと出て行った。

R t u r n

私と士郎のほか、キャスター、葛木、凜、イリヤスフィールの6人が卓を囲んで夕食をとった。

概ね和やかな食事になったが、途中でイリヤスフィールが、

「前に食べた時より味が落ちてるわね」

と評した時には、キャスターのこめかみからプチツという音がして、険悪な空気が流れたが・・・

食事中の会話で、士郎には彼が眠り続けていた昨日から今日にかけての出来事を概ね共有している。

風呂から上がった私は、士郎がいるはずの土蔵に向かおうとしていた。

「・・・そう言えば、結局、イリヤスフィールがこの家に自ら向かった理由を確認していませんでしたね」

夕食時にその事が話題にならなかつたのを思い出しながら廊下を進むと、縁側にキャスターとイリヤスフィールが腰掛けているのを見つけた。

二人は私には気付かない様子で、月を眺めながら何事かをポツポツと話しているようだった。

「・・・そう・・・桜は変わってしまったのね。やっぱり人間ではとても耐えられなかつたのでしょうね」

気になる内容だったので、私は廊下の曲がり角に留まり、二人の会話を聞き続けることとした。

「あなたは、気付いていたのね？彼女が聖杯であることを」

「ええ。はつきりではないけれど最初見た時にね。ああ、同類だなんてわかつたわ」

イリヤスフィールは縁側から出した足をぶらぶらと揺らしながら溜息をついた。

「そう」

イリヤスフィールの言葉に大きな反応を示さず、キャスターは小さく応える。

「そもそもランサーが消えた時、私に魂が流れてこなかつたのよ。それで、おかしいなって思っていたわ」

「あなた・・・いいえ、あなた達なのかしら。英霊の魂を集める役割があるのよね」

「ええ。だけれど私が取り込んだのは、バーサーカーだけ。今のところ他に消滅したのは、ランサーとあの金色のサーヴァントだと思うけど、桜はその二騎を取り込んでいるはずよ」

「そうするとあなた達には相当な負担がかかりそうね」

「そうね。私はそのためになられた存在だけど、桜はそうではない筈。英霊を取り込めば、少しずつ人としては壊れていくでしょうね」

「だとすると、桜ちゃんが体調を崩すようになったのはそのせいでもあるのかしら」

キヤスターのその言葉で、ランサーが消えた日から桜が熱を出すことが多くなっていたことを私は思い出す。

「そうかもしれないわね」

「彼女はもう元には戻らない?」

「桜の変貌に関するあなた達の推測は概ね正しいと思うの。今、彼女は生まれようとしているアンリマユの影響を強く受けているのでしよう。それを断ち切れれば、可能性がないわけじゃないと思うわ」

「坊やは、間違いなく彼女を救おうとするでしょうね」

「なぜかしら? 士郎はライダーが好きなんでしょう?」

その言葉にちよつと面映ゆい気持ちになる。

他人が自分のことを話しているのを聞くのは、少し恥ずかしかった。

「そうね。でも、その『好き』とは少し別の感情があると思うわ」

「それはなに?」

「坊やにとっては、彼女は家族みたいなものなのよ。妹のように思っているわ」

「妹・・・」

「あなたも坊やの妹になるのかしら? それとも姉?」

「生まれたのは、たぶん私が先。だから、私が姉になるわ」

「なぜ、殺そうとしたの?」

「それが私がこの冬木に来た理由の一つだもの。衛宮切嗣と衛宮士郎を殺すことがね」

この言葉で初めて私はイリヤスフィールがこの家に向かっていた

のは、士郎を殺す為だったことを知った。

「それはなぜ？」

「私達アインツベルンを衛宮切嗣は裏切った。そして、衛宮士郎はその子供だからよ。そう教わって私は育ったわ」

「なるほどね」

少女が士郎を殺そうとした理由を聞いたキャスターが、ふわりと立ち上がり外に出た。

月明かりに照らされた彼女の、私よりも青みの強い紫色の髪が夜風になびく。

「私は弟を殺したわ」

彼女は振り向く。

「本当に大事なものが何なのかなど、わからないままに」

女の私から見ても充分に美しいその顔には、うっすらと笑みが浮かんでいた。

「あの時の私は熱にうかされていたようなものだったわ。その熱が冷め、そして目が覚めた時、私はもう取り戻す権利がないことを思い知った」

裏切りの魔女と呼ばれた彼女の^{メディーア}の伝承は私も知っている。

「私にあの夢を見せたのは、あなたね？」

「ええ、そうよ。でも、何を見たのかは知らないわ。坊やの古い記憶を、夢であなたと繋げただけ。私、眠りの魔術が得意なのよ」

「・・・そう。後悔してるのね。だから、私を止めるだけじゃなくて、夢を見せたり、こんな話をするのね？」

「言っただでしょう。後悔する権利も私にはないわ。狂っていても自分の意思でしたことなの。だから、狂い続けるしかなかったわ。私はもう魔女としてしか生きられなくなっていた」

「衛宮士郎に肩入れしているのは、そのせいなのかしら？」

その問いにキャスターは考え込んだ。

「・・・そのつもりはなかったわ。私は坊やに賭けたの。だから、助けてきた」

けれど、と小さく呟いた。

「あなたが坊やを殺そうとしているのを止めた時、少しだけ殺した弟と坊やを重ねていたのかもしれないと思っただわ」

自嘲気味に彼女は笑って続けた。

「・・・全然似ていないけれどね」

だから、これはただの自分勝手な贖あがないに過ぎないわと、もう一度彼女は笑う。

「ねえ、あなたは聖杯として誰かの願いを叶えるとどうなってしまうのかしら？」

「想像はついているのでしょうか？私は道具に過ぎないのよ・・・」

二人の会話は続く。

私は、静かにこの場を離れることにした。

キャスターは弟を殺した。

イリヤスフィールは弟を殺そうとした。

「私も姉を殺しました・・・」

私もまた、狂って姉達を殺し、そして狂い続けたまま怪物として殺された。

身内殺しなんて決して珍しくはない世界だったけれど、だからと言って傷が浅くなるわけではない。

士郎にそんなことをさせるつもりはない。

「・・・それにしても・・・」

イリヤスフィールは士郎を殺そうとして、それをキャスターが止めたということだった。確かに教会から急いで戻ってきた時、士郎が寝ている布団にイリヤスフィールが突っ伏している状態だったことを思い出す。

「士郎は危うく殺されるところだったんじゃないですか・・・」

結果的に無事だったとは言え、その点はキャスターを責めたいところだった。

Interlude in

ビチッ！

窓の無い一室に有機物を潰した音が響き渡る。

「ふん。外見がグロテスクな食材は美味しいというが、これを調理する気にはならないな」

闇の中で黒いアーチャーは、その手で握り潰した蟲を放り投げる。「これで、あの妖怪の蟲蔵を一つ潰したわけか。呆気ないものだな」

黒いセイバーがつまらなそうに独白した。

「桜が待っている店まで戻るとしよう。セイバーも何か食べるなら私が腕を振るうぞ。ジャンクフードが好きなのだろう？絶妙なハンバーガーを作つてやるぞ」

「余計な気遣いは無用です。お二人だけでどうぞ」

そう言つて、部屋のドアを開けたセイバーは闇へと消えていった。

「つれないな」

取り残されたアーチャーは、無表情のまま嘆息した。

「アーチャー。お帰りなさい。ご飯できていますよ」

落ち着いた雰囲気の小ぢんまりとしたイタリアンレストラン。

その厨房に桜がいた。

「あれ？セイバーと一緒に戻ってきてないんですか？」

「桜でもどこに行つたかわからないのか・・・食事に誘つたが断られた。どこかへ消えてしまったよ」

「気を遣つてくれたのかもしれないですよ・・・先輩」

「どうだかな。あれは、単に関与したくないという態度にしか見えなかったが・・・」

そう応えながらアーチャーは厨房内を見回すと、手近にあつた業務用冷蔵庫のドアを開けた。

「さすがに小さいとは言えレストランだ。食材が揃っているな」

「ええ。腕によりをかけちゃいました」

桜は業務用キッチンの上に置かれた料理の数々を披露するように、その手で指し示した。

「掃除してもらつた上、食事まで作つてもらえるところは光栄の極みだ」「適材適所つてやつです。特に掃除は断然私向きですからね」

「そうだな。ここを無人にするのは私よりも、桜のほうが断然向いている」

「そう言いながらアーチャーはキッチンに置かれた料理を手に取りうとした。」

「あ、つまみ食いはダメです。私が運びますから、先輩は席で待っていてください」

「そのうえ、給仕までしてもらえらるとは。普通は逆なのだがな。今は桜が私のマスターなのだから」

「そう言いながらも厨房を出たアーチャーは店内へと移動した。そして近くの椅子に座るとテーブルの上で手を組んだ。」

「それでは、先生として弟子の腕前を品評させてもらおうとしようか」

「あ、そういう態度とるのは良くないですよ」

「アーチャーの後に続いた桜は料理を並べていく。サーモンのマリネ、シーフードグラタン、ポタージュといった品々である。」

「どうですか？」

「アーチャーは並べられた料理に一通り手をつける。」

「うん。やはり桜の洋食は安定感があるな。合格だ」

「ふふ。ありがとうございます。先輩」

「私だけが食事をするのは、恐縮だ。キミ自身も食べるがいい」

「その言葉に桜は僅かに身じろぎし、顔を俯かせた。」

「・・・ダメなんです。先輩」

「どういうことだ？」

「・・・もう味を感じないんです、私。実は、三日前からです」
それは、まだ桜が今のように変貌する前からということだった。

「そうだったのか。ではあの時、私達が作った料理も味を感じられなかったわけか」

「アーチャーが言っているのは、衛宮邸で過ごした最後の日にキャスターも含む三人で作った料理の事だった。」

「アーチャーはあの時の桜の蒼白い顔色を思い出した。」

「はっ」

「・・・そうか。配慮が足りず済まなかったなマスター」

「いいえ。いいんです」

そう言つて桜はにこりと笑つた。

「先輩の料理を美味しく食べられないのは本当に残念だけど、おかげで私は先輩を手に入れられました。その代償だと思えば我慢できます」

アーチャーは席から立ちあがると、桜の肩に手を乗せた。

「桜。思う存分、この世界に復讐してやるといい。私はお前の望むように振る舞い、望みを叶えるのに全力を尽くそう」

「ありがとうございます。先輩」

桜はアーチャーを見上げると、少し目を潤ませた。

「私もまた、この世界にも、自分にも、自分の任務にもうんざりしていたところだった。お前によつて解放されたこの機会、存分に活かさせてもらうさ」

「・・・それじゃあ、先輩。早速ですけど、一つお願いしてもいいですか?」

「勿論だ」

「・・・」

桜は俯き、しばし沈黙した。

「・・・抱いてください」

「・・・」

微かにアーチャーが身じろぎした。

「それが、私の夢だったんです」

少女のある種、ありふれた小さな願い。

その意味と、それを叶えることの意義を、男はほんの僅かな時間だけ考えた。

「・・・桜。今では廃れてしまったが、私のいた世界では大事な教えがあつてな」

身を固くして返答を待つ少女に、男は唇の片端を吊り上げてにやりと笑つて見せた。

「え?・・・それはどういう・・・??」

「略すと『据え膳』と呼ばれる戒律だ。これに背くと男として使い物にならないと見做される極めて危険なしきたりなのだ」

私はそれに忠実に従うとしよう、とアーチャーは続けた。

「オレもお前が欲しかった」

未だにその言葉の意味を理解できないままキョトンとしている少女の頭に、男はぼんとその手を乗せる。

その手は、やがて少女の背中へと回されていき……そして、主のいない空間の中で二人の影が重なっていった。

I n t e r l u d e o u t

第29話 12日目① 「魔術師の死」

E t u r n

朝食後、落ち着いたところでオレ達は行動を開始することにした。「それじゃあ、行ってくる。お互い何かあるかわからないからな。気を付けよう」

玄関の引き戸を開けて外に出る直前に、見送るキャスターと葛木に告げた。

遠坂とイリヤは既に玄関から外に出て、正門へと向かっている。

「坊や達のほうが何か起きる可能性は高いわ。敵は、こちらが屋敷を離れる時を狙っているかもしれないのだから」

「わかっている。とは言え、遠坂の言う「宝石剣」ってやつを投影する時には、遠坂とライダーに守ってもらえないけどな」

「勿論、私が全力で士郎を守ります」

オレが出てくるのを待っていたライダーが真剣な面持ちで口にする。

「まあ、なるようにしかならないわよ。この家だっけいつ襲われるかなんてもうわからないわ。私の家だっけ、襲われたわけだし。何かあったら教えて頂戴。その時の状況で、できる限りのことはするから」

遠坂も残るキャスターと葛木にも警戒を怠らないよう念を押す。

遠坂の発案で、桜に対抗するための武器として、遠坂家に伝わる強力な礼装「宝石剣」をオレが投影することになっていた。

当然ながら、オレ自身はその剣を見たことがない。

そこで、遠坂邸の敷地内で霊脈の濃い地点に行き、その土地の記憶とイリヤスフィールに受け継がれているアインツベルンの記憶の断片から、実際にその剣が用いられている場面を再現する。

ということらしい。

正直、オレは説明を聞いても、ピンとこないし、そんなことが可能

なのかわからないが、遠坂やキャスターは充分に可能と判断しているようだ。

であれば、オレとしては、自分の役割に集中して、全力を尽くすだけだった。

「問題は道中、または私の家に着いてからの襲撃よね」

オレ、ライダー、遠坂、イリヤの4人で遠坂邸に向かう道すがら遠坂が言った。

「昨日は、アサシンだけがイリヤを襲って来たんだったな」

「そうよ。士郎。他のサーヴァントやマスターの気配は最後までなかったわ」

イリヤが応じた。

実は朝食時にイリヤが提案してきたことがあった。

『士郎。私のことはこれからイリヤと呼んでちょうだい。私も士郎って呼ぶことにするわ』

オレにとつては嬉しい提案ではあったが、少し戸惑いもあった。

『え？突然どうしたんだ？』

最初に出会った時は、バーサーカーとの戦いで、殺るか殺られるかという関係だったし、城で助けた後も、どことなく精神的な壁を感じていたからだ。聞いたことには答えてくれるが、それ以上には打ち解ける必要はないという態度だった。オレとしては、彼女が切嗣の子であり、実質的なオレの妹だということはわかっていたから、正直、もどかしく感じていた。

『だって、私達きょうだいでしょうっ。』

昨夜、だいぶ長いことキャスターと縁側で会話していたことは知っていた。彼女の中で心境の変化があったのかもしれない。

そんなわけで、彼女とは【士郎】と【イリヤ】で呼び合うことにしていた。

「ちよつとおかしいわよね。向こうは、他にもセイバーとアーチャーは確実にいるはず。なのに、アサシンだけなんて」

「まあ、単純にイリヤを攫うだけなら、アサシンだけで充分という考え方もわからなくはないけどな」

実際、昨日だつてライダー達が教会に向かつていなければ、葛木達がイリヤを保護するチャンスはなかった筈なのだ。

「別行動を取っているのかもしれないし、向こうが一枚岩ではないという事かもしれないわね」

「そうだとすれば、できれば各個撃破していききたいところだけどな」

「というよりも、マスターである間桐臓硯と・・・桜をどうにかできればいいのよね」

「・・・」

オレもライダーも遠坂の言葉に黙り込んでしまう。

『桜を』か・・・

遠坂は、対応方法として『殺す』という選択肢も考えているのだろう。

オレとライダーは、桜を何とか元に戻す方法を模索するつもりだった。

オレは、家族のように思っている桜を殺したくないし、ライダーもマスターである桜の身を按じている。

また、イリヤの見解では、アンリマユと桜の繋がりを絶つことができれば元に戻せる可能性もあるということだ。具体的な方法が思いつくわけではないが、オレとライダーの希望を完全に否定するものはなかった。

「着いたわ」

考え込んでいるうちに、目的地である遠坂邸に到着した。

とにかく先ずは、桜への対抗手段を手に入れなければいけない。そうしなければ、桜に近付くこともできないのだから。

「最悪の場合、向こうに占拠されているかもしれないと思っただけで、それはなさそうね」

「そうだな。それじゃあ入ろう」

オレ達4人は遠坂家の敷地へと足を踏み入れた。

「・・・あなたは・・・アーチャー・・・」

キャスターは、現れたサーヴァントを信じられない思いで凝視した。

十分に警戒していたのだ。

しかし、屋敷に張られていた探知の結界は反応せず、易々と彼の侵入を許してしまった。それが原因で今の窮地に陥ってしまった。

「・・・ぐ・・・キャスター・・・すまん・・・」

「・・・宗一郎様・・・」

アーチャーとキャスターの間には、葛木宗一郎が倒れていた。

この屋敷の中庭から侵入したアーチャーは、それに気付いて迎え撃とうとした葛木に接近を許さず、遠距離からの弓による射撃で足と、胸部を打ち抜いたのだ。

侵入に気付くのが遅れたキャスターは、たった今、この状況を目の当たりにしたところだ。

「随分と、久し振りのような感覚だが・・・たかだが三日ぶりというところか」

アーチャーは淡々と独白した。

以前と変わらない落ち着いた声はその口から紡がれる。

とは言え、容姿の印象は大きく変わっていた。元々浅黒かった肌は、完全に黒色に染まっており、来ていた赤い外套もまた黒く変じている。

一番、大きく変わっているのは醸し出す雰囲気であり、禍々しい気配が全身から滲み出していた。

「変わったわね。アーチャー・・・」

キャスターは、倒れている葛木の様子が気になって仕方がなかったが、迂闊には動けない。

アーチャーは弓を手にしている。それがもう一度葛木に向けられれば、それで終わりだ。

葛木の傷はかなりの深手だが、少なくとも致命的なものではないは

ずだ。

何とか、会話の中から活路を見出したかった。

「止むを得るところだな。凜を助けるための行動の結果がこの姿だが、なつてしまえばこれはこれで悪くない。勧誘は極めて強引だったかな」

軽く手を広げながら、アーチャーはそう答えた。

雰囲気は大きく変わったが、こういう斜に構えた態度や仕種は以前と殆ど変わっていない。

「・・・なぜ、結界が反応しなかったのかしら？」

「私が誰かを考えればすぐにわかるだろう。私の正体には既に気付いているのだろうか？ 魔女よ」

「・・・そう・・・そういうことね・・・今頃になって気付くなんて・・・」
キャスターは、アーチャーの言葉で自分の盲点に気付いた。

「・・・私が間抜けだったわ・・・あなたはこの屋敷の主ですものね」
「ご名答だ。とは言え、貴様の仕掛けた防御結界には多少の抵抗を受けたがな」

この屋敷には元から張られていた探知の結界と、キャスターが新たに張った防御の結界がある。

前者は全く役に立たず、後者は僅かながら効力を発揮したということだろう。

「何が目的なのかしら？ 完全に不意をついたのよ。単に私達を殺してこの屋敷を占拠するだけなら、こんな会話をする必要もないでしょう」

「話が早くて結構なことだ、キャスター」

黒いアーチャーはニヤリと笑みを浮かべた。

「交渉だ」

「聞きましよう。わかっているのでしょうか、私の要求は宗一郎様の身の安全よ」

「それは聞かずもがなだな。こちらの要求も一つだけだ」

アーチャーは一呼吸だけ話を区切る。

「魔術師としての遠坂凜を殺せ」

先程までの斜に構えた態度が消え、殊更に冷たくそう告げてくる。
「・・・含みのある言い方ね。単純にあのお嬢さんを殺せというわけではないのね?。」

「そうだ。簡単に言えば、魔術回路を消せということだ」

「なぜそんな回りくどいことを望むのかしら?。」

「それが私の今の主の望みだからだ」

「桜ちゃんということね?。」

桜の立場に立ってみれば、優秀でずっと自分が劣等感を味わってきた姉を単に殺すのではなく、魔術師から一般人へと貶めるというのは、あり得るようにも思えた。

「さあな。そこまで答えてやる義理はない」

「そう。とは言え、それはいくら私でも簡単ではないわ。少なくとも相手側が私を受け入れる状態を作る必要がある。彼女は私に対して、一定の信頼を寄せてくれてはいるけれど、露骨に怪しい真似をすれば、抵抗されるでしょう。時間を掛けて機会を窺う必要があるわ」

これは、駆け引きではなく事実だ。

「余計な時間を掛けさせるつもりはない。葛木をこちらが拘束している時間が長くなれば、いくら貴様を取り繕っても、小僧や凜は不審に思うだろう」

「では、どうしろと?周到に機会を窺っていたのでしよう?あなたは既に答えを用意しているのではなくて?。」

アーチャーの行動は計算され尽くしている。

その目的が遠坂凜の魔術回路を消す事であれば、彼女を一人だけで誘き出す方法も検討済の筈だった。

「そうだな、簡単な話だ。例の符を破るがいい。そうすれば、凜がここに駆け付ける。あとは、貴様と私で一芝居打てばいい」

「何ですって?。」

キャスターにはアーチャーの思考を読み切れなかった。

確かに符を破っても、士郎達の護衛である凜とライダーの二人が一度に戻ってくることはないだろう。だが、凜が駆けつけるとは限らない。ライダーが戻って来る可能性もある。そして、仮に思惑どおり、

凜が駆けつけることになったとしてもどうするといふのか？

「貴様に選択の余地はない。大人しく私の言うとおりにするんだな」

アーチャーは、そう言っただけで持っている弓を構える素振りをした。

その先には葛木が倒れている。

残念ながらアーチャーの言うとおりであった。葛木の命が掛かっている以上、自分に選択の余地がないことは自覚している。

「・・・わかったわ・・・」

抵抗を諦めたキャスターは歯噛みしながらも同意し、符を取り出して破り捨てた。

今は、アーチャーの言う事に素直に従うしかなかった。

「これでいいかしら？」

「ああ」

I n t e r l u d e o u t

R t u r n

遠坂邸の敷地に入った後、私達4人は、凜に導かれて屋敷の裏手にある林へと分け入った。

暫く歩くと地下へと続く小さな風穴があり、そこに入っていく。その中には魔法陣が刻まれた開けた空間があった。

冬木の霊脈と繋がったポイントであり、かつて【宝石剣】がこの地で使われた時の情景をイリヤスフィールの導きで、士郎に見せるということだった。

「じゃあ、私たちは衛宮君達の雑念ノイズになるかもしれないから、一旦、入口に戻りましょう」

士郎とイリヤスフィールをその場に残して、私と凜は風穴の入り口で、襲撃者が万一現れた場合に備えることにした。

二人は今、完全に無防備だ。

絶対に敵を近付けるわけにはいかない。

「【宝石剣】というのは、魔力をほぼ無尽蔵に供給可能なのですね？」

「そうよ。無数にある平行世界から魔力を引っ張ってくるの。数少ない本物の魔法使いであるゼルレッチが創造した礼装よ。うちの家系は、そのゼルレッチの弟子だからその存在を知っているし、私も使えるはず」

「桜と渡り合えるの？」

「ええ。桜は聖杯と繋がっていて、殆ど無限に魔力を引っ張ってくることができる。でも、私も【宝石剣】があれば、それに迫ることはできるわ」

「あくまでも、迫るところまでなのですね？」

「そうね。私の肉体に負担が掛かるから、我慢比べになるわ。だからこそ精神的な駆け引きで勝負するつも．．!?」

「!？」

凜と私がついていた連絡用の符が突然熱を帯びた。

私と凜は顔を見合わせた。

「向こうで何かが起きたみたいね」

「どうでしょう？二人でここを離れるわけにはいきません」

そう言いながらも、正直なところ私は士郎を守るためにここに残りたいという気持ちが強かった。

「私が行くわ。衛宮君達に戻ったら、ライダーならすぐに二人を抱えて駆け付けられるでしょう」

凜が私の心中を見透かしたように、自分が行くことを提案してくれた。

「承知しました。士郎達が出てきたら、すぐに戻ります」

「よろしくね。それまで、何とか持ちこたえるから」

そう言っつて、凜は通つて来た林道を走って引き返した。

Interlude in

凜は衛宮邸に戻りながら、嫌な予感をどうしても拭えなかった。この状況には作威的なものを感じる。

敵が自分達を分断しようとしていると考えるのが自然なのだ。

「とは言え、それでも助けに行くしかないのよね」

衛宮邸はキャスターが陣を張ったことで、かなり強力な防衛拠点となっている。キャスターと葛木の戦力も加味して考えると、失うことは大きな痛手になる。現在の相手方との戦力差を考えれば、ほぼ致命的だ。だからこそ、今回もキャスター達には残ってもらったのだ。

例え、罠だとしても加勢に行くしかない。

「着いたけど、特に異常は感じられないわね」

衛宮邸が見えるところまで辿り着いた。

しかし、外からでは何が起きているかはわからない。

凜は正門からではなく、塀を飛び越えて敷地内へと足を踏み入れた。

するとそこにいたのは、彼女が敵としては一番出会いたくないと思っていた男だった。

「……ア……アーチャー……!?!」

肌の色や、服装、雰囲気まで変わってしまったのはいたが、紛れもなくつい先日まで自分と共に戦ってくれたサーヴァントだった、

自分を庇って、桜の黒い影に取り込まれてしまった彼は、予想どおり、セイバーと同様に変質し自分の敵対者として目の前に現れたのだ。

「久しいな。凜。再び見えることができ、感無量だ」

背中を見せていたアーチャーは顔だけを軽くこちらに向けて、口を開いた。

「私は正直、会いたくなかったけどね……」

唇を噛みながら、凜は返答した。

「お嬢さん……アーチャーはもう敵よ!」

アーチャーと対峙する形になっていたキャスターが凜に対して警告を発する。

位置関係としては、凜とキャスターでアーチャーを挟み込む形となっていた。だが、キャスターは既に負傷しているようで、右肩を押さえている。

アーチャーはその手に弓を持っていた。

「百も承知よ、キヤスター。取り敢えずあなたが無事それで何よりよ」
「でも、宗一郎様はかなり危険な状態なの」

葛木の姿は見当たらなかったが、邸内か中庭にいるのだろう。

「そう。とにかく私達でこいつを何とかしないとね」

「甘く見ないことだな」

ザツ！

言うが早いのか、アーチャーは負傷しているキヤスターに背を向けて、凜へと接近してきた。

弓を投げ捨て、手には双剣を手にしていた。

「なっ!？」

凜としては、場の状況から遠距離戦になることを無意識のうちに想定していたため、不意を突かれる形になった。

間合いを詰めてきたアーチャーに対して、凜は咄嗟に手にした宝石を投げつけるが、アーチャーはその反応を完全に読んでいた。

軽く横に動くことで回避し、双剣の届く間合いに入ってきた。

「くっ!」

聖杯戦争が始まってから共に戦ってきた相手だ。凜は、自分の行動が見透かされているような感覚を拭えなかった。

それでも強化した足で間合いを取ろうとするが、遅かった。

ザグッ

アーチャーは両手の双剣を突き出して、凜の両肩を刺す。

「あぐっ!!」

貫通するまでは、至らなかつたもののかかなり深く抉られ、殆ど両腕が使えなくなってしまう。僅かな時間の攻防で凜は無力化されてしまっていた。

「やっらばだ」

寸毫の躊躇も感情もなく、アーチャーが止めを刺そうと右手の剣を振り上げた。

その時、凜が叫んだ。

「輝けっ!」

カツ!

後退するしかなかった少女の足元で、一粒の宝石が眩い光を放つ。「なにっ!？」

不意を突かれたアーチャーは至近距離でその光を直接見てしまい、反射的に目を覆った。

「お願い! キヤスター!」

「よくやったわ! お嬢さん!」

ドドツ!

キヤスターが渾身の光弾を放ち、無防備になったアーチャーの背中を直撃した。

「ちいっ!」

前のめりに倒れそうになるのを辛うじてアーチャーは踏み止まったが、堪らずアーチャーは屋敷を囲む塀の方へと、駆け出した。

「逃すものですか!」

キヤスターは、追い討ちの光弾を数発放つが、アーチャーは素早く塀を乗り越えて、遁走していた。

負傷した凜はそれを追うだけの余力はなかった。

「・・・意外とあいつ逃げ足早いよね。・・・つうつ・・・」

逃げ去ったアーチャーの残像を追うようにして凜は塀のほうを見ていたが、すぐに痛みで顔を顰めた。

「大丈夫!?! なわけないわね。でも、本当にありがとう。あなたのおかげで本当に助かったわ」

キヤスターが慌てた様子で駆け寄ってくる。

「・・・あいつが単独で乗り込んできたの? 結界は突破されたのかしら?」

凜は痛みを堪えながら、状況を確認する。

「ええ。彼には、結界が効力を発揮しなかったのよ。少し考えれば、あなたならわかるでしょう?」

「え?・・・あ、そりやそうか・・・」

凜は合点が入って頷いた。

彼女もアーチャーの正体には既に気付いていた。

「とにかく、治療が先ね。かなりの深手よ。力を抜いて、私の魔術を受

け入れて頂戴」

そう言つて、キヤスターは凜に近付き、負傷した両肩に手を当てた。「あ、ありがとう。よろしく頼むわ。あなたの魔術ならこの傷でも治せるわよね」

「勿論よ」

キヤスターが凜の傷口に対して魔術を行使し始める。

凜は完全に身を委ねる状態になっていた。

「……ふう………ツツ?!?!」

しばらく脱力していた凜だったが、本能的に異常に気付いた。

本来なら、キヤスターの魔術を以つてすれば、そう時間は掛からずに自分の傷は癒えるはずだ。

しかし、その気配は一向にない。

そして、尋常ではない違和感を体を感じ取り始めていた。

「……キヤスター!? あなた何を!」

凜は、咄嗟にキヤスターを振り払おうとしたが、その腕はとても動く状態ではなかった。

満足に抵抗もできない凜を無表情に見つめながら、キヤスターは目的のために凜に浸透させる魔術を加速させていく。

「………くう………これって………そんな………私のまじゆつかい……ろが……」

凜は徐々に自分の中にある力、すなわち魔力が薄れていくのと同時に、意識が希薄になっていくのを感じていた。

単純に出血で意識が遠のくのは明らかに違う感覚だった。

自分が自分でなくなる恐怖。

それを味わっていた。

遠坂凜は生まれながらにして魔術師である。自らの直感が告げているのは、自分がそうではなくなるということだ。

「……そ……そんなこと………が………」

少女は、もはや止めようがないことをどうしようもないくらいわかってしまっていた。

目の前の相手を睨むこともできない。

「・・・や・・・やめて・・・キャスター・・・」

力の籠らない瞳で、凜は懸命に懇願する。

「・・・結局・・・どこまで行っても、私は裏切りの魔女に過ぎないということね・・・」

美しい顔は無表情で塗り固めて、神代の魔女が諦めたように呟く。

「ごめんなさい・・・お嬢さん・・・」

瞳にはもはや感情の色もないままに、キャスターは謝罪した。

その向こう側に、先程対峙した黒色の男が現れた。

「終わったな」

聞き慣れた低い声。

「・・・ア・・・アーチャー・・・アーチャー・・・?」

凜はその声を聞いて、消えかけた意識を蜘蛛の糸を使って引き寄せるように引つ張り上げた。

紆余曲折はあったものの、自分がこの上もなく頼りにした相棒の声だ。

「ええ。これで満足かしら?」

「流石、神代の魔術師だな。本当にこんなことができるとは」

斜に構えた態度も今となっては、懐かしい。

「凜。これがお前の妹が望んだ結末だ。これからのお前の人生は生き地獄に等しいものとなるだろう」

見慣れた少し皮肉交じりの苦笑。

「・・・アー・・・チャー・・・」

呼び慣れたその男の名をもう一度だけ口にして、凜の意識は消えていった。

混濁した頭の中で数多の感情が弾けて消えたが、最後に残ったのは、それでももう一度出会えて良かった、という思いだった。

E t u r n

無事に目的だった【宝石剣】を見ることができ、イリヤとともに風穴を出ると緊迫した面持ちで、ライダーが待っていた。

「キャスター達の身に何かあったようです。先ほど凜が救援に向かいました。少し疲れているかと思いますが、急いで私達も戻りましょう」

「わかった。急ぐ」

選択の余地はない。ライダーは即座にオレとイリヤを両脇に抱えた。かなり情けない格好ではあるが、これが一番速いことは間違いない。

屋敷の近くまで来たところでライダーは、オレとイリヤを降ろした。

「イリヤはここで一旦待機してくれ。問題なさそうなら、すぐに呼ぶ。もし、しばらく待ってもオレ達が出てこないようなら、教会に逃げ込むんだ」

「そんなことにならないように祈ってあげるわ。お兄ちゃん。気をつけてね」

「ああ」

安心させるようにイリヤの頭を軽く叩いて、屋敷に向かう。

「行こう。ライダー」

「はい。士郎」

屋敷を囲む塀まで来たところで、ライダーが中の様子を窺うが、「ここからでは、何も見えませんね。ですが、少し戦闘の跡がありません。敷地内へ入ってみましょう」

「狙撃されないように素早く移動しよう」

オレはアーチャーがいる可能性を考慮して、ライダーに注意を促す。

敷地内に入ると、ライダーの言っていたとおり、戦いがあった痕跡が残っていた。

「かなりの出血量ですね」

地面には広範囲に、血の跡と思しき赤黒い染みが残っていた。

あまり想像したくないが、この屋敷に正門以外から入るなら今オレ達が来たルートを辿ることになるだろう。先に屋敷に戻ってきた遠

坂も同じルートを辿ったことは想像に難くない。

「遠坂、キャスター・・・無事でいてくれよ」

オレは祈る思いで呟いた。

「とは言え、敷地内で今現在、何か起きていているような気配はありません」

ライダーが周囲を見回しながら状況を分析する。

他に戦いがあったことを示すものとしては、地面に僅かながら焦げ跡のようなものがあるのと、塀が少し壊れていることだ。

「戦い自体は終わっている可能性が高いな。急いで家の中と中庭側も確認しよう」

「はい」

ライダーはそう応じると、すぐに母屋の屋根に跳び乗った。

「中庭は異常が見当たりません・・・詳しく確認しないと正確にはわかりませんが」

「そうか。じゃあ家の中を確認していこう」

「・・・と・・・遠坂・・・」

家に入っても念のため待ち伏せを警戒しながら、各部屋を確認していくと、遠坂が布団で寝ているのを発見した。三日前に彼女が泊まった時に使ってもらった部屋だ。

「普通に寝ているだけのように見えますね」

隣にいるライダーが不思議そうに言った。

彼女の言うとおり、見えている部位で外傷らしきものはなく、呼吸も落ち着いていた。

「特に異常はなさそうだけど・・・ライダー、ちょっと掛け布団をどかしてもらえるか？」

自分でやるのは心理的に抵抗感があつたので、ライダーに掛布団を持ち上げてもらう。

横たわっている遠坂はいつもの赤いカットソーを着ていたが、その両肩の部分が破れているのがすぐにわかった。

しかし、その下の体には傷一つないようだ。

「明らかに武器で刺された跡ですね」

「ああ。しかも、この武器は・・・」

破れた部位は少し広い。

幅広の剣で刺されたものと推測でき、さらに、両肩を平行に刺されているところを見ると、2本の剣で同時に刺されたように思えた。

「アーチャーでしょうか？」

ライダーも同じ結論に至ったようだ。

「推測の域を出ないけどな」

遠坂が起きたら、確認すればいいことだった。

「キヤスターが治療して、ここに寝かせたということは確実にしよう。それだけのことのできたということは、襲撃者を退けたと考えられます。ですが・・・」

「キヤスターと葛木の姿が見当たらないことが気になるな」

「他の部屋も確認してきます」

ライダーがそう言つて、一旦、この場を立ち去る。

屋敷の中には、人の気配がなかった。キヤスターと葛木がどこに行ってしまったか気になる。

「やはり、二人ともどこにもいませんね」

屋敷内の全ての棟を確認してくれたのだろう。

暫くして戻つて来たライダーが首を振りながら報告してくれた。

「敵を追撃したとは考えにくいですよね？」

「ああ。ここは大事な防衛拠点だ。敵を追うにしても、オレ達の合流を待つてからというのが定石だと思う」

「書き置きもないですし、位置を知らせるために符を破った様子もありませんね」

「遠坂を治療することはできたけど、ここには残れない状況になったということか・・・」

「凜が起きるのを待つしかないですね」

二人を探そうにも手掛かりがなさ過ぎた。

「ああ。イリヤにも中に入ってもらおう」

外に待たせているイリヤは、オレ達が戻つてこないことで不安に

なっているだろう。

だいぶ、時間も経っている。

「士郎……一つ気になることがあるのですが……」

ライダーが少し落ち着きのない声を出した。

彼女にしては珍しい。

「どうしたんだ？」

その声に不安を感じてオレは聞き返した。

「凜の様子が変です……」

「なんだって？」

「彼女から一切魔力が感じられません」

「……え？」

その言葉の意味を理解できなかつたオレは、刹那の間戸惑った後、改めて遠坂の様子を確認した。

「……」

ライダーの言ったことは、確かだった。

オレの背中を生温かい汗がゆつくりと伝っていくのを感じた。

第30話 　　く12日目②　　「神父と教師」

E t u r n

「おはよう、衛宮君、ライダー。それにイリヤスフィール。ちよつと心配かけちゃったかしら？ごめんなさいね」

オレ達がこの家に戻ってきてから4時間ほど経過しただろうか。遠坂が目を覚まして開口一番、事も無げにそんな挨拶をしてきた。

「……………遠坂……………」

既に事態の深刻さに気付いてしまったオレは、なんて声を掛けたいかわからなかった。

オレ達が戻る前に何が起きたかを聞きたいという思いよりも、とにかく遠坂の今の状態が気になって仕方がなかった。

「どうしたのよ？衛宮君？」

まるで、何も気付いていないかのような口調で彼女は続ける。

もしかしたら、本人は気付いていないのだろうか、とも思えてくるほどだった。

「……………あいや、遠坂……………その……………体は大丈夫なのか？おかしいところははないか？」

オレには、腫物に触るような聞き方しかできなかった。

「……………ああ……………バレちゃってる……………わよね」

遠坂が察したようだった。

ライダーやイリヤも含めたオレ達が、遠坂の異変に気付いているという事。

それに気付いたということは、すなわち本人も自身のことが把握できているということに他ならない。

「まあ、あなた達に隠せるわけもないわよね。隠しても仕方ないし……………」

遠坂が声を詰まらせた。

小刻みに体が震えている。

「……………ええ……………ええ……………そう……………」

私……わたし……わたし……」

聖杯戦争が始まって、2週間足らず。

オレは、遠坂とこうやって親しく接するようになり、彼女が動揺する場面には何度か出くわしていた。

アーチャーがオレを殺そうとしたことが原因で令呪を使い切ってしまった時。そして、そのアーチャーを失った時。

だが、今回の出来事は、彼女にとってそれらを上回るものに違いがない。

彼女のこれまでの人生を無にするかのような事態だった。

「……わたし……魔術師じゃなくなっちゃった……」

「お茶をお持ちしました。少しでも飲んで落ち着いてください」

遠坂が嗚咽を漏らしている間、オレは掛けられる言葉もなく、いたたまれずにいたが、ライダーが紅茶を淹れて運んできてくれた。

「……ありがとう……」

遠坂は何とか礼を言つて、紅茶に口をつけた。

「凜。非常に辛いであろうことは承知してはいますが、今は聖杯戦争中……しかも佳境に入ってきている。私達としては、必要な情報を得て、これからのことを考えなければいけません」

言葉を掛けられずにいるオレの代わりに、ライダーが今言うべきことを言ってくれた。

遠坂もライダーの言うことは十二分に理解しているので、何とか顔を上げる。

「……わかっているわ、ライダー。何が起きたか、それを話さなきゃね」

そう言つて、遠坂はぽつぽつとオレ達が来る前に起きたことを話し始めた。

「そうか。やっぱりアーチャーに襲われたのか。そして、キャスターが……」

遠坂が話してくれた内容は、一部はオレとライダーが推測したこと

でもあったし、予想外のものもあった。

遠坂がこの屋敷に駆けつけた時、アーチャーとキャスターが戦っているように見える状態だったこと。

アーチャーと戦い、両肩を剣で刺されたこと。

そして、アーチャーをキャスターが退けた後、遠坂の治療を装ってキャスターが魔術回路を壊したこと。

「僅かな時間の出来事よ。10分足らずだったんじゃないかしら。そして、最後にアーチャーの声を聞いたわ。これが桜の望んだ事だつて」

「桜の？」

間桐家から救い出してくれなかった姉に対する復讐ということだろうか。

「凜は手当てを受けた状態でここに寝ていました。傷はキャスターが治療したと見るべきでしょうね」

「キャスターとしても本意ではなかったということか」

本当に裏切ったのなら、治療などする筈がなかった。

「そうでしょうね。終始、葛木が見当たらなかったから、おそらく人質にでもされていたんでしょうね」

遠坂が、記憶を探るように応えた。

「なぜ、二人から連絡がないのでしょうか？」

ライダーは自然な疑問を口にした。

この点については、結論を見出し辛いところだ。

「葛木の治療や、身柄を引き取るために一時的にここを離れているだけならば、連絡がない理由にはならないな」

「向こう側に引き入れられたのかもしれないですね。その代わりに凜の治療だけは許された」

「あり得る話だな」

もしそうだとすれば、戦力差は絶望的なほどに開くことになる。

「ごめんなさい。私の不注意で・・・」

遠坂が布団の上に突っ伏すようにして項垂れた。

「凜の不注意ということはないでしょう。もし、駆け付けたのが私だ

としてもアーチャーとキャスターが組んでいるなどとは、夢にも思わない」

ライダーが反論するが、遠坂は首を振る。

「元はと言えば、私を助けるためにアーチャーは向こう側の手に落ちたのよ。そして、私はまんまとそのアーチャーの策にやられたのよ。自業自得もいいところ。全て私の蒔いた種」

遠坂は目に涙を浮かべながらも、顔を上げて続ける。

「キャスターや葛木にも、私が迷惑を掛けたってことよ……………」
私、決めたの」

毅然とした瞳でオレ達を見据えて、彼女はその決意を口にした。

「聖杯戦争を降りるわ」

I n t e r l u d e i n

葛木宗一郎は、輸送機械特有の心地良い振動を感じながら、目を覚ました。

「・・・車か？」

推測どおり自分は乗用車の後部座席に乗っていた。

車窓から外を見ると、夜の帳が降りつつある薄闇の中、まばらに一軒家がある程度の郊外の道を走っているようだった。

既に冬木市を出ているのではないだろうか。

「うん？もう起きたのか？話が違うな・・・」

運転席でハンドルを握る男はルームミラーでこちらを確認すると、独特のよく通る低い声で独白した。

こちらからもルームミラーで男の姿を確認すると、その胸には十字架を下げているのがわかった。

男からは害意は全く感じられなかった。

「神父か？」

キャスターや衛宮士郎、遠坂凜の会話でよく出てきた言峰綺礼という神父だろう。特徴も合致する。

「そうだ。私は言峰綺礼という。名前ぐらいは知っているかな？葛木

宗一郎」

「これは、キャスターの頼みによるものか？」

葛木としては、とにかく自身の現状を確認したかった。

「ふむ。察しがいいな。そのとおりだ。キャスターもなかなか人遣いが荒くてな。他にも元マスターがいるようなところでは、巻き添えになって、お前が殺されるかもしれないから隣町に避難させろと要求してきたのだ」

葛木が推測したとおりの話だった。

「一応筋は通っているので、止むを得ずこうして運んでいたのだ。もつともお前にかけて眠りの魔術は、三日は解けないと断言していたのだがな」

それだけの日数が経過すれば、おそらく聖杯戦争は終わる。

それまで、自分を遠ざけておけば安全だという意図だったのだろう。

そんなことを葛木は望んでいなかった。

しかし、今日、自分は役に立たなかった。

それどころか、交渉の材料として使われた。

「僅か半日足らずで解けてしまうとは、神代の魔女も口ほどにもないということか。あるいは、お前の抵抗力が強かったのか・・・」

神父の言葉に、葛木は自身の背広の内ポケットに入れていた小瓶を取り出した。

既に空となっているそれは、衛宮士郎を通じて手に入れたものだ。

これによって眠りの魔術への耐性を一時的に強めることができた。

葛木はキャスターが自分を案じて遠ざけようとする時が来ることを、想定していた。

「車を戻してくれ」

「どうしたものか。一応、聖杯戦争の参加者から丁重に、無力な一般人を保護してくれと頼まれたのだ。私はこう見えて、職務はしっかりと果たす主義でな」

そう、自分は無力な一般人以下だったのだ。

「では、車を停めて私を降ろすがいい。既に隣町に入っている。お前

は冬木市の外まで私を届けるよう頼まれたのだろうか？責務はもう果たしている」

「ごもつともだ」

頷いた神父はスピードを落とし、車を左に寄せるとハザードを点灯させて路側帯に停車させた。

「話のツボを押さえられる人物というのは、有難いものだな」

葛木は神父の話聞き流して、ドアを開けると地面に降り立った。すると、

「その御仁。私は冬木市に帰るところだが、乗っていくかね？」

神父はたった今車を降りた葛木に対して、間髪入れずに車に乗るよう促してきた。

葛木を一度降ろしたことで、キャスターからの依頼事項は完了したため、あとは自分の好きなようにするということだろう。

迂遠な男だという感想を抱いたが、冬木に戻るつもりで葛木としては、特に拒絶する理由もないので再び神父の車に乗り込んだ。

今度は助手席に座る事になった。

「私自身、お前に興味があつてな。葛木宗一郎」

言峰綺礼は次の信号で、車をUターンさせて、冬木に向かい始めた。

「私はそちらを殆ど知らないのだが」

「知っているのだろうか？私はランサーのマスターでもあつた」

「それは確かに聞いている」

ランサーと戦った翌日に、衛宮達が神父と出会い、ランサーのマスターだったと告げられたことは葛木にも共有されている。

「私は視覚をランサーと共有していたのだ。英霊であるクー・フリーンと互角に渡り合える人間など規格外もいところだ」

「互角などではなかった」

葛木の偽らざる評価だった。

ランサーが本気でなかったことやキャスターの援護もあつて、辛うじて凌いでいたに過ぎない。

「謙遜するな。初手で大きなダメージを与えていたではないか。仮に対峙していた英霊がランサーでなければ、あれで終わっていた可能性

もある」

「無意味な仮定だな」

葛木は言峰という男と話しながら、疑念が湧いてきた。

相手の都合などお構いなしに、深奥に押し入ってきていながら、どこまでも虚ろだ。もちろん興味はあるのだろう。だが、それもどうでもいいと思っっている。

「お前は何がしたいのだ？」

「この男は一体何を求めているのか？」

「と言うと？」

「確かにお前は私に興味があるのだろう。本心から話をしたいと思っっている。それなのに、自分自身にとってはどうでもいいことだともわかってるようだ」

洞察力があり、人に対する関心も強い。人の神経を逆撫でして、その反応も楽しんでいる。

だが、ただそれだけだ。

葛木は自分が感じているのは、疑念や違和感ではないと気付き始めていた。

「これはまた」

言峰は少しだけ、葛木を見て口角を上げた。

「お前には全てがどうでもいいのではないか？」

「ふむ。正しいのかもしれない。普通、人間は自分が何かを得るために他の何かに干渉するのだから。私は自分自身に対する望みが何もない」

「それでは、何のために聖杯戦争に関与している？」

「それは無論・・・」

「監督役だからという話ではない。お前はランサーのマスターだったのだろう」

葛木は、言峰のやり過ぎのような返答を先回りして封じた。

「ふふふ。いや、面白いな。葛木宗一郎。初対面でここまで私に斬りこんでくる人間がいようとは」

「お前は間違いなく、この戦いに参加する意義のある男だ」

「そうだな。私自身が得たいものはない。だが、私は出現したらいいと思っっている物がある。それはおそらく無辜の人々にとっては、はた迷惑なものではあるだろう」

「そうか」

つい先ほどまでの葛木は、冬木に戻り、目的を果たして帰還するキャスターを待つか、それを果たせずに消えるキャスターの後を追うつもりだった。

しかし、今、目的が変わったことを自覚した。

そう。

この男は……

「ここまでいい。送ってもらったことには礼を言おう」

既に車は冬木市に戻ってきていた。

外の景色も、市街地に入ってきたことを示している。

「お前と話すのは楽しい。また、会いたいものだ」

「私もだ」

葛木宗一郎は、言峰綺礼の車を降りた。

I n t e r l u d e O u t

R t u r n

「今の私は無力よ。衛宮君は、近くにいる人間を必ず守ろうとするわ。私は役に立たないどころか、足手纏いになるだけ」

凜は、極めて冷静に断定した。

「明朝、教会に向かうわ。本当は今すぐにもと思うけど、ちょっと、体が動きそうにないの」

士郎はその意思を尊重するしかなかった。

その後、夕食を共にして、彼女はあてがわれた部屋へと戻っていった。

私は頃合いを見計らって彼女の部屋を訪れた。

「凜。少しだけよろしいでしょうか？」

障子を軽く叩きながら、確認する。

「珍しいわね。あなたが私に用なんて」

凜が障子を開けて、中に招き入れてくれた。

「私がこのようなことを言っても、詮無いことかとは思いましたが、敢えてお話ししたいと思いました」

凜に促されて、中央付近に据えられた小さな座卓に腰を下ろす。

「何かしら？」

凜も座卓を挟んで向かい側に腰を下ろした。

「私は聖杯戦争が始まる1か月ほど前に召喚されましたが、知つてのとおり、その後は基本的に霊体化して慎二に同行していました」

「ええ」

「ですから、学校内などであなたの姿を目にしたり、慎二とのやり取りも見っていました」

「あ、確かにそういうことになるのか。ちょっと恥ずかしいわね」

彼女は少しだけ顔を赤らめる。

だが、私の知る限り学校内での彼女には隙は無く、恥ずかしい場面などお目にかかったことはなかった。

「勿論、士郎と共闘するようになってからの状況も色々見してきました。

あなたという人がどういう人なのか、わかっているつもりです」

「そう。折角だから聞かせて欲しいわ。あなたから見た私を」

「同じ女性として、あるいは人間として私はあなたを眩しいと思っていました」

「え？」

彼女はキョトンとした。

彼女は他人を眩しいなどと思うことは殆どないのだろう。

「その姿、生き様に。私は結果的にはこのような形で、反英霊とはいえサーヴァントとなりましたが、所詮はただのつまらない女に過ぎません」

「いや、そんなことは・・・」

「あなたは鮮やかです。それは、魔術師でなくなったとしても、そうだと思います。遠坂凜は、魔術師でなくても遠坂凜である」と

「……………」

「すいません。差し出がましいことを申しまして。あなたの失ったものの大きさは他人の私では絶対に測れないというのに」

「うん。ありがとう、ライダー。あなたの気遣いは充分に感じられたわ」

凜は優しく微笑んだ。

これは気遣いなのだろうか？

私はこうすることで、少しでも遠坂凜という少女に近付くことができるかもしれないと、そう思っただけのような気がするのだ。

「ふふ……それにしても何なのかしらね。ライダー。あの難儀だった女性が……こんなにも変わるなんて。やっぱり衛宮君は凄いわね」

「そう言ってもらえるのは嬉しいのですが、凜、それはつまり私は男次第で変わってしまうような女だということでもあります。士郎の陰でこうなりましたが、相手次第では逆にもなってしまう。碌でもない男に引っ掛かれば、碌でもない女になるでしょう」

生前から他人に引き摺られることが多かった。

その本質は、今でも大きくは変わらないと感じている。

「そうかしら？」

大空を飛ばたく鳥には、ピンとこない話かもしれない。

「桜やキャスターも同じかもしれません」

断定するような言い方は避けたが、あの二人も私と同様だろう。

桜は私に似ているし、キャスターなどは生前も現界後もある意味一貫している。

「でも、あなたは違う。そもそもそんな相手に引っ掛かったりしないし、万一そうなったとしても、あなたはあなたのままでしょう」

「何か酷いことを言われているのかもしれないわね。要するに頑固なことかしら」

「ある意味、そうなのかもしれませんね。遠坂凜の芯は絶対に変わらない。あなたの聖杯戦争はこれで終わりかもしれません。でも、それが何だというのでしょうか？」

魔術師である遠坂家の当主として、彼女が殆どこれまでの人生を投

じて、この戦いに臨んでいることは百も承知だ。

それでも敢えてこう問い掛ける。

問い掛けた時に、彼女がどんな答えに辿り着くか。

私には自信があるからだ。

「そうね。私は私の存在全部を注ぎ込んで戦い、そして負けたわ。でも、私はまだ生きています」

「ええ。生きていますということは、あなたの戦いは終わっていないという事です」

「ありがとう。ライダー。あなたの言葉をこれからの支えにさせてもらおう」

彼女の瞳に少しだけ力が漲ったように感じられた。

「いいえ。誰もが当然のように理解している事実をお伝えしたに過ぎません。偶然、それが私だったというだけのことでしよう」

心の赴くままに伝えたいことを伝え終えることができた。

勿論、完全に吹っ切ることなど簡単にできるはずもない。

それでも、彼女は立ち上がるはずだ。

今、私はきつと微笑んでいるだろう。

「それでは、おやすみなさい」

「ええ・・・」

そのまま就寝の挨拶を返してくるかと思っただが、凜は、何事かを考え込んでいたようだった。

「ライダー。衛宮君と・・・」

そう言い掛けて口を噤んだ。

「いいえ、衛宮君をよろしくね・・・」

「はい。任せてください」

私は凜の言葉に頷いた。

私は立ち上がり、凜の部屋を後にした。

廊下に出ると、ガラス越しに綺麗な月が眩しく輝いて見える。

「桜とアーチャーだったのでしょうね」

彼女の飲み込んだ言葉には、きつとその二人の名前が含まれていたのだろう。

だが、その二人を救う術は今のところない。
凜もそれをわかっていたからこそ、口にすることができなかったの
だ。

Interlude in

言峰綺礼の眼前には、知った男の背中があった。

その男はかつて従えていたランサーが二度対峙したサーヴァント
だ。

だが、その頃とは在り方が大きく変貌しており、服装も雰囲気も変
わっていた。

「・・・アーチャーだな？」

「ふん。誰かと思えば言峰綺礼か。直接話すのは・・・まあ・・・初
めてということにしておこうか」

振り返ったアーチャーの手には一振りの剣が握られていた。

長さとしては一般的な長剣よりやや短く、刃には龍が巻き付いたよ
うな意匠が凝らされていた。この造形では、剣としてはあまり役に立
ちそうもない。

「何をしているのかな？」

綺礼は、問い掛けながらも、アーチャーの向こうの光景を眺めた。

そこは火の海と化していた。

熱気が、露出した顔の肌を容赦なく炙る。

「それはこちらのセリフだ。監督役がこんな聖杯戦争参加者の拠点内
部にまで入り込んでいいのか？」

アーチャーと、言峰の立っている場所は、石造りの地下室の入り口
であり、その下には階段が続いている。

「私は見てのとおり、ゴミ処理をしていたただけだがな」

燃えているのは、階段下の空間。

より正確には、そこで蠢いている何百、何千というグロテスクな蟲
達だった。それらは、この屋敷の主である間桐家が飼っている淫虫や
刻印虫と呼ばれる魔術の媒介物である。

「なに。監督役として、保護しているマスターの自宅に空き巣が侵入していないか巡回に来たら、まんまと空き巣に出くわしたというだけの事だ」

綺礼は間桐臓硯を中心とした間桐家がこの歪んだ聖杯戦争の主導権を握っているものの、その内情は複雑なものになっていることを感じていた。

何か手掛かりになるものを期待してこの屋敷を訪れたが、住人が不在というだけでなく、内部への侵入者がいることに気付き、ここまで行き着いたのだった。

「物は言いようだな」

「だいぶ忙しく立ち回っているようだな、アーチャー。先ほど私の教会をキャスターが訪れたが、それもお前が原因だったようだったがな」

「私は、マスターの使いっ走りだ。振られる仕事が多いというだけに過ぎん」

「そうであれば、この仕事は間桐臓硯への嫌がらせというところかな？」

「言っただろう。ただのゴミ処理だと。不要な物を焼却しただけだ。ついでに……」

禍々しいものになっているアーチャーの気配が、さらに剣呑な気配を帯びる。

「お前も処分してやろうか？ どうせこの後、茶々を入れてくるつもりだろう」

「何を言う。私はあくまでも公正な監督役に過ぎん」

綺礼は自分が殆ど不感症に近いくらい、この手の圧力に動じないという自覚があったが、それでもこのアーチャーの言葉に僅かに自分が気圧されたのを感じた。

「……まあいい。万一の場合の次善策としての価値がお前にはある」その言葉と同時に、アーチャーの気配が元に戻る。

そして、綺礼の横を通って、部屋の出口へと向かっていく。

「……それに、お前には大したことはできないからな……」

そう言い残して、アーチャーの背中は綺礼の視界から消えていった。

当人が去つてもなお、濃厚な存在感がいつまでも残っているかのようだ。

「・・・まったく・・・という過程を経たら、人間はああも変わるのか・・・」

綺礼は自身の神父服の襟を少し正すようにして、両手で服の内部に空気を送った。

「まあ、私も他人の事を言えた筋合いではないがな・・・」

綺礼は暫く燃え続ける火の海を見ていたが、その炎は程なくして全ての対象を燃やし尽くすと、やがて自然と鎮まっていた。

後に残ったのは、蟲達だったものの消し炭だけになっていた。

「さて、私もこの場を去るとするか」

綺礼も踵を返して、階段を上って地下室を出た。

「ん？」

「なぜお前がここにいる？神父よ」

玄関へと向かう廊下で問い掛けてきたのは、黒い衣を身に纏った髑髏のような白い仮面をつけた男だった。

綺礼にはどこことなく、10年前に自分が従えていたサーヴァントに似ているように思えた。

「アサシンだな？」

「何をしていた？」

綺礼の反応を無視して、苛立たし気にアサシンと思しきサーヴァントは再度問い質してきた。

「予め言うておくが、この先の地下室を台無しにしたのは、私ではなくアーチャーだ。ちようど入れ違いになったようだな」

綺礼は後方を親指で示しながら言った。

「実際のところ、私はただの通りすがりに過ぎん」

誤解を受けて、目の敵にされるのは避けたかった。

「アーチャーだと？」

「どうやら、お前の主はこの戦いをうまく操ってきたが、ここにきて制

御できなくなりつつあるようだな」

「貴様に何がわかるというのか」

綺礼の言葉には応じずにアサシンは地下室へと降りて行き、そしてすぐに戻って来た。

「あれは、アーチャーの仕業というわけか・・・」

「おそらく他にも蟲蔵はあるのだろうが、それでもあのご老人にとつては愉快ではないだろうか」

綺礼は口元を歪めた。

「ふん。私から何か情報を得ようと思っても無駄だぞ」

「どうかね？アサシンよ」

綺礼はその手を前に出し、あたかもアサシンを手招きするような姿勢になった。

「そもそも間桐臓硯の最終目的を果たすには、全てのサーヴァントを生贄として聖杯に捧げる必要がある」

「何だと？」

「そこには当然、お前も含まれるというわけだ。それを知っていて協力しているのかね？」

「妄言だな」

「どうかね？私と契約しないか？私には聖杯に願う望みなどない。聖杯はお前の望みを叶える為だけに使えば良い」

綺礼は笑みを浮かべながら続けた。

「間桐臓硯は追い詰められつつある。それは、お前も薄々察しているのではないか？勝算も薄く、真実も明かさない主に忠義立てする事はあるまい」

その言葉に対して、アサシンは嘲りの感情を見せた。

「見損なうなよ、紛い物の神父よ。私が見るところ、貴様の中身はがらんどんだ。必ずどこかで、他者には全く理解できないような理由で裏切るだろう」

「ほう。では、間桐臓硯は裏切らないと？」

「そのような保証を求めること自体が無意味だ。この戦いに限らず、誰もが心の深奥に秘匿するものがある。私の拠り所は、相手の持つ

宿業だ。それが、私にとって納得のできるものかに尽きる」

「成程。言わば魂の色ということか」

アサシンの姿が音もなく消え始める。

「そうだ。我が主の妄執は私に馴染むものだ。間違っても貴様のよう
な空っぽの人間に私の宿願を託すことなどできんな・・・」

その言葉とともに、アサシンは完全に姿を消していた。

「ふむ。なかなか律儀なことだが・・・要するに私よりも妖怪のほうが
まだマシということかな」

そう独り言ちて、綺礼は間桐邸を後にした。

I n t e r l u d e o u t

第31話 13日目① 「夜襲」

R t u r n

感じたのは、ほんの僅かなさざめき。気のせいかとも思えるくらい微かな空気の揺らぎだった。

「士郎！敵襲です！」

元々起きていた私は、傍らで寝ていた士郎を強く揺さぶって起きます。

「・・・ライダー・・・!?!」

士郎は瞬時に覚醒するとまでいかないが、それでも構わない。ダンッ!

「起きて下さい！イリヤスフィール！」

私はすぐに立ち上がると、敢えて大きな音を立てて障子戸を開け、廊下からイリヤスフィールの部屋に向かおうとする。

今夜、この屋敷に敵が襲ってくる可能性については、警戒していた。

「・・・イリヤを頼む！」

起き抜けの士郎の声が私の後ろから届く。

そう、敵の狙いは彼女のはずだ。

バリッ!!

ガラス戸が割れ、白い仮面が廊下に侵入してくる。

イリヤスフィールの寝ている部屋との間には、障子戸一枚を隔てるのみだ。

「させません！」

ジャラララ!

私は走りながらアサシンの側面から、杭剣の鎖を投じる。

「かかったな！」

だが、アサシンは不敵な声を漏らすと、私の鎖を飛び上がって躲し、天井を伝うようにして私の背面に回りこむ動きをした。

「なっ!?!」

この動きに私は不意を突かれた。

イリヤスフィールを狙ってくるものと考えていたが、この反応は……

「そう。狙いはお前だ」

ザッ！

「あうっ！」

振り向くより一瞬早く、2本の短剣が私の背中に突き立てられた。

生暖かい液体が背中を流れる

「くっ！」

何とか堪えて、杭剣を横薙ぎに振るい、アサシンを引き？がす。

バリントッ！

アサシンはガラス戸を割って、中庭に跳び退った。

「ライダーー！」

左手にいつもの黒剣、右手に紅い剣を構えた士郎が部屋から出てくると私を庇うようにして前に立つ。

「つつ！」

一方で、私は背中痛みで、片膝を突いてしまった。

——ガラガラガラガラガラガラ——

その時、屋敷の結界の警報音が鳴り響いた。

新たに敵が侵入してきたことを示している。

「ふおふおふお……キャスターが不在になれば、奇襲が成功するかと思っただがのう」

アサシンの後ろから、以前は私がよく目にしていた老人が姿を現した。その老人は杖をつき、中庭の奥からゆっくりとこちらに歩いている。

この屋敷の結界は、探知用としては優れているとキャスターは言っていた。本来なら、この老人、間桐臓硯が侵入した時のような音が警告音として鳴り響くのだが、アサシンの気配遮断スキルが強力で、僅かにしか反応しなかったようだ。

その僅かな警告音を私は感じ取って迎え撃つことができたが、結果的には向こうの術中に嵌っていたようだ。

「・・・間桐・・・臓硯か・・・」

士郎の眩きには若干の驚きと戸惑いが含まれていた。

実際のところ、殆ど士郎はこの老人との面識はないはずだが、風体で察しているのだろう。

「だが、策は用意しておくものよ。今宵、ライダーを殺れば、充分な戦果じゃ。アインツベルンの聖杯は、その後でじっくり回収すれば良い」

老人の顔に、酷薄な笑みが浮かぶ。

「衛宮の小倅、そして、ライダー。お主らは桜の覚醒にとって、想像を遥かに超える働きをしてくれた。感謝しておるぞ」

感謝されたくはなかったが、私達がこの妖怪の掌中で踊らされていたというのは確かなのだろう。

「特にライダー、お主は真まことに掘り出し物じゃった。まさか、主の想い人を掠め取るとはのう・・・」

「臓硯・・・お前・・・！」

士郎の顔が怒りに歪む。

「魔術師殿。ここは勝負所。くれぐれも気を抜かれますな」

沈黙していたアサシンが臓硯に注意を促す。

「わかつておる。アサシンよ。小僧は儂が抑える。お主はライダーを確実に仕留めよ」

臓硯の手にした杖が地面を叩き、カツンツと音を立てた。

E t u r n

ライダーが負傷したことで、戦況は不利になったように見える。

単純な白兵戦なら、この状態でもライダーならアサシンと互角以上に戦える。

しかし、この屋敷ではライダーの宝具である天馬ヘガサスは周囲に与える被害も大きいため使用が難しく、一方で、アサシンの宝具はおそらく対人戦闘に特化しており、存分に発動できるだろう。

そのうえ、屋敷内にはイリヤだけでなく、今は完全に無力になって

いる遠坂もいる。彼女達を狙われるような動きをされると、助けに入らざるを得ないため圧倒的に不利になる。

だからオレ達は、この場面になった時には短時間でケリをつけるための方策を予め考えていた。

「ライダー！頼む！」

オレは、合図を送る。

「はい！士郎！」

右後方で空気が動く。

オレのほうが前にいるので、当然見えはしない。

だが、何をしたのかはよくわかっていた。

彼女がその眼を覆うバイザーを外したのだ。

「同調、開始！」

一方でオレは右腕を強化するために詠唱する。

キャスターの強化魔術に比べればささやかな効果に過ぎないが、ないよりはマシだ。

「なにっ!？」

「なんじゃと!？」

対峙していたアサシンと臓硯が驚愕する。

自分たちが石化しつつあることに。

そしておそらく、この場面でこちらがライダーの魔眼を解放したことに。

なぜなら、今、彼女の視界の範囲内にはオレもいるからだ。

「莫迦な！それでは、小僧も石化するぞ!？」

臓硯の言うとおり、オレも足元から石化が始まっていた。

「ちっ！貴様を殺して、呪いを解けば良いだけのこと！」

驚いたのも束の間、流石にアサシンの判断は早かった。

「その心臓を我が掌中に！………宝具！」

だが、その動きも計算のうちだった。

オレは強化した右腕を大きく後ろに引いた。その手には紅い剣がしっかりと握られている。

オレもアサシンも足元は石化しつつあり、お互いに動かせるのは上

半身だけだ。

ザバーニークヤ
「妄想心音！」

フルンディング
「赤原猟犬！」

オレとアサシンはほぼ同時に宝具の真名を叫んでいた。

アサシンは、オレが剣を投じると同時に上半身だけは捻るようにして躲す動きをする。その動きにより、オレの剣の軌道は外された。一方で瘴気を帯びたような暗殺者の黒い右腕が、ライダーの心臓を目掛けて伸びる。

だが、

ザンツツツ！

「がああああああああ!?」

絶叫したのはアサシンだった。

確かにオレの投じた剣はアサシンの伸ばした右腕の軌道からはズレていた。しかし、目標物を追尾するその剣は、狙い変わらずアサシンの右腕を切り裂いていた。

オレとしては、アサシン本人を狙うこともできたが、相打ちになつては意味がないため、明らかに敵の決め手である右腕を狙ったのだ。アサシンとすればこちらの剣の軌道を外して腕を放っていたので、当たるとは思っていなかったはずだ。

「ぬうううううう・・・小僧・・・！一度ならず二度までも・・・」

アサシンは苦し紛れに残った左腕で短剣を投じてくる。
ギンツツ！

だが、すかさずライダーがオレの前に出て、短剣を叩き落としてくれた。

「お終いですね」

オレを庇うように立ったライダーが終戦を宣告した。

彼女の視界から外れたオレの石化は止まったが、アサシンと臓硯のそれは進行し続けていた。

臓硯は既に首まで、アサシンも胴体まで石になっていた。

「むう・・・そのようだな」

アサシンは従容として状況を受け入れつつあった。

ほぼ動けなくなった自身の有り様を淡々と眺める。

「何ということじゃ！こんなにもあつさりと！！無様にやられるとは！！」

臓硯は対照的だった。

「この役立たずめが！！サーヴァントなら、マスターのために最後まで死力を尽くすのだ！！」

あろうことか、アサシンを罵倒し始めた。

「魔術師殿。早く残った個体だけでも逃げるが良からう。少しでも残したほうが後々のためになる」

当のアサシンは、冷静に臓硯に提言する。

「ちいー！言われずともわかっておるわー！」

ブワアアアツツツ――

「なっ?！」

石化せずに残っていた臓硯の頭部が突如として、大量の蟲に分裂して飛び去って行った。途中で数匹は石化して落下したが、残りは何処へともなく闇の彼方へと消えていった。

「臓硯の体は蟲でできてたってことか・・・」

「そのようですね。逃げられたということでしょう」

「さらばだ魔術師殿。今際の際まで貴殿らしく、生にしがみつき、醜く、藻掻き足掻き続けていたいただきたいものだ」

アサシンも首までが石と化した。

これまで、どんな時も固定されていたその白い仮面が僅かにズレた。

「仮面を元に戻してもらえぬかな？素顔を晒すのは、名前を取り戻した時と決めているのだ」

既に腕を動かさなくなっているアサシンは、顔を隠してもらいたいという要望をしてきた。

「それはできません。あなたはアサシンです。この土壇場でもあなたに近付くことは危険です」

オレが応えるよりも早く、ライダーが拒絶する。

「ですが、ご安心なさい」

ライダーは横に移動して、アサシンの側面に立つような恰好になった。

オレもその意図を察して、ライダーと同様の動きをした。

「あなたの素顔に私は興味がありません」

「配慮に感謝する」

カランツ

と、髑髏のような仮面が落ちた。

ほぼ全身が石と化した古の暗殺者が天を仰ぐ。

「当代随一の妄念と共に、宿願を求めて戦えたことに悔いは無い」

黒衣のサーヴァントの全身は、灰色の石像となった。

今日未明、また、一人の英霊が消えた。

「二人とも大丈夫？」

部屋から出てきたイリヤが割れたガラス戸を魔術で直しながら、心配そうに尋ねてきた。

「ああ。オレはもう大丈夫だ」

既にライダーに石化を解いてもらっていた。

「私もじきに回復しますので」

その言葉どおり、ライダーが背中に受けた傷は八割方治っているようだ。

「隙間から覗かしてもらったけど、あんなことよく考えるわね。『肉を食べつくして骨までしゃぶる』ってやつでしょ？」

イリヤが謎のことわざを持ち出した。

「なんだそりゃ？強いて言うなら『肉を切らせて骨を断つ』だろ」

「今夜、襲撃があることは想定されましたので、士郎と話し合っておいたのです。少し驚きましたが、士郎の場合、これくらいなら無茶の範疇に入らない気がしてきました」

ライダーは詰るような視線をオレに送ってくる。

彼女は既にバイザーを装着済なので、固まったりはしない。

「私も感覚が麻痺してきているのでしょうか」

「うまくいったんだから、正解だったってことじゃないか」

「そうですね。向こうは私の能力をほぼわかっていますから、それが逆に思い込みに繋がったのでしよう。私も多少の調整はできますので、士郎の石化は緩やかだったはずです」

ライダーは、いわば間桐家が召喚したのだから、その能力は知られている。彼女の魔眼が視界に入るもの全てを対象としていることも。であるが故に、味方であるオレが前にいる状態で、魔眼を使うことはあり得ないと思っていたのだろう。

「終わったみたいね。私は何もできなくて、申し訳なかったけど……」
戦いが終わったことを察したのだろう。遠坂が廊下の奥からやってきた。

「ほんと情けないわ。隠れていることしかできないなんてね」

これまで颯爽と自ら戦ってきた遠坂からすれば、忸怩たる思いがあるだろう。

「……うん。でも、今回は足手纏いにならないって役目を果たしたと思うことにするわ」

それでも、何とか気持ちを切り替えるところが遠坂らしい。

「アーチャー達もいますから油断はできませんが、奇襲を得手とするアサシンを斃せたことは大きい。私が警戒していますので、士郎達はしっかりと寝てください」

「そうだな。起きたら、遠坂とイリヤを教会に送らないといけないしな」

明日……じゃなくて、もう日付が変わっているから今日だが、朝食後には教会に二人を送っていくつもりだった。

「……は？なんで送ってもらう必要があるのよ？」

そう言えば、この点については擦り合わせができていなかったな。

遠坂が拒絶反応を示した。

「だって、道中危険だろう」

「あなたに迷惑を掛けたくないって言ったじゃない」

「ダメだ。これだけは譲れない」

「襲われたらその時はその時。私の運がなかったってことでいいわよ」

「そんなことオレが我慢できるわけないだろう」

アサシンが消えたとはいえ、臓硯は生きている。

遠坂が途中で襲われたいとはいえない切れない。

「・・・そうだ。いいこと考えた」

オレはライダーをチラリと見て、ニヤリと笑った。

「ライダーさん。バイザーを外して遠坂さんを睨みなさい」

「え？？」

「承知しました」

ライダーがバイザーに手を掛ける。

オレとイリヤは、すかさずライダーの背後に逃げ込んだ。

「げ・・・」

ライダーがバイザーを徐々に上へとずらしていくと、美しいが危険な瞳が露わになる。魔力を失っている遠坂は全く抵抗力がないため、一溜りもない。

すぐに足元から石化が始まった。

「ちよ・・・うそ・・・まぢ？英霊だつて斃しちゃう伝家の宝刀を今のあたしみたいな一般人相手に抜いちやうわけ？」

「大人しく士郎の言うことを聞きますか？」

「わ！わかったわよ！だから、ストップ！ストップ！！」

「本当ですか？」

ライダーは根が結構サディスティックなので、こういうときには、傘にかかって追い詰める。

恐い・・・

オレも気をつけなくてはいけないと肝に銘じる。

「だから、衛宮君達と一緒に教会に行けばいいんでしょ！わかったから、固めるのやめて！！」

「二言はありませんね？」

「もうイヤ・・・この似非^{えせ}ハリウッド女優め・・・全米が泣くわ・・・」
遠坂が半べそになって、悪態をついた。
と、

今夜、二度目の警告音が鳴り響いた。
またも侵入者が現れたという事だ。

オレ達の間について先ほどもまでは、全く違う緊迫した空気が流れる。

「士郎は、二人をお願いします」

ライダーが周囲を警戒しながら、オレに下がるよう促す。

「わかっている」

アーチャーには結界が反応しない。この短時間で臓硯が再度襲ってくる可能性は殆どないため、結界が機能したということは、桜かセイバーが侵入したということになるだろう。

「何あれ？」

イリヤが中庭の一点を指さす。

黒点が一気に広がり、大きな影を作り出していた。

そこから現れたのは、

「・・・セイバー・・・」

漆黒の鎧と剣。何より冷たい眼差し。

オレとともに戦ったセイバーと同じなのに、明らかに違うセイバー。

アインツベルンの城外で見た時と同じ姿だった。

「アサシンを斃したようですね」

変わり果てた雰囲気と同様に、以前とは全く違う冷たい口調だった。

それでも、声は同じ。確かにセイバーの声だ。

言葉の最後には、あの『シロウ』という独特のイントネーションでオレに呼びかけてきているような錯覚を覚えた。

「疲弊しているところを、襲撃しようという意図でしょうか？」

ライダーが杭剣を構えて、一歩前出る。

「桜からの言伝ことづてです」

ライダーを一顧だにせず、セイバーは口を開いた。

「何だって？」

「今日の夜10時に、教会に来るようにとのことです。面白いものが

見られるから、と」

「面白いもの？」

オレは、セイバーの言葉を訝いぶかった。
どういう意味なのだろうか。

「それから、『それまでは手を出さないからゆつくり休んでくださいね、先輩』とも言っていました」

セイバーはオレに背を向ける。

「確かに伝えました。それでは」

あくまでも無感情に、用件だけを伝えて黒いセイバーは立ち去ろうとした。

「待ってくれ！セイバー！」

オレは、思わず呼び止める。

このまま何も話さずに終わりたくなかった。

「お前は、もうオレと一緒に戦ったセイバーじゃないのか？あの時の記憶も全て失くしてしまったのか？」

異質な存在に変わってしまったセイバー。

それでも、オレは一縷の望みを持ちたかった。

彼女を元に戻すことは絶対にできないのか。

以前の事を覚えているなら、希望があるかもしれない。

「……………」

しかし、セイバーは体を半身だけこちらに向けたが、沈黙で応えた。
彼女は僅かの間オレの顔を見詰め、そして、オレの後方へと暫く視線を固定した。

その時間もそう長くはなかった。

「……失礼します……」

彼女は、そのまま闇の向こうへと消えていった。

「くそ……」

何も言葉を交わせなかった。

自分の問い掛けは虚空に霧散しただけだった。

オレは、ゆつくりと後方を振り返った。

最後にセイバーが視線を送った先を、無意識のうちに確かめようと

したのかもしれない。

開け放たれたガラス戸の向こうには、同じく障子戸が開いたままになっっている部屋がある。

「あれは……」

そこは今はイリヤが使っている部屋だ。

そして、以前はセイバーが使っていた部屋でもある。

そこにある小さな飾り棚には、落ち着いた部屋の雰囲気には些かそぐわない愛らしいライオンのぬいぐるみが置かれていた。

第32話 　　13日目②　「FD」

E t u r n

「衛宮君の作るご飯もこれで当面お預けね」

「そういうことになるわね。残念だわ、お兄ちゃん」

この後、遠坂とイリヤを送るために教会に向かうが、今はオレとライダーを含めて4人で朝食兼昼食を食べている。

セイバーが伝えてきた内容を全面的に信じているわけではないが、一定の信憑性はあるように感じられた。

アサシンとの戦いでライダーも疲弊していた。

万全の状態で教会には向かいたかったため、食事の後に行動することにしたのだ。

料理を作ったのはオレだけだ。

昨日まではキャスターがいたし、その前は桜もいた。アーチャーは頭数に入れないとしても、うちの料理人が随分と減ってしまったものだ。

「本当に色々とお世話になったわ。あなたと一緒に戦った私の判断は間違っていないかったって自信を持って言える」

食べ終えた遠坂が真剣な表情でオレを見詰めてくる。

「寂しくなりますね。士郎」

「そうだな。だけど、必ずまたみんなで一緒に食事をしたいな。その時は、4人で作るのもいいかもしれないな」

「そうね。私の料理の腕を見せてあげるわ」

「私もシロウが教えてくれるなら頑張るわよ」

「私にもできるでしょうか・・・」

三者三様の反応が返ってくる。

本当にこの戦いの後、無事に再会できるのか、正直なところオレは不安に思っている。

だが、それを口に出してしまえば、現実が侵蝕されてしまいそうだ。

「ねえ、シロウ。これ観て」

ちらちらとテレビを気にしていたイリヤが声を掛けてきた。

画面を見ると、ビルの入り口から出てきた担架に乗せられた人々が、救急車に乗せられていく映像が流れていた。

『本日の朝、新都のオフィスビルで30名程の従業員が意識を失っているのが発見されました。全員、命に別状はないようですが、病院に搬送されたという事です』

「昏睡事件か？」

嫌な予感がした。

「これ、前にキャスターが魔力を集めるためにやっていた時と同じかもしれないわね・・・」

経緯は、この家に来た最初の頃にキャスター本人から聞いていた。

オレはその時、この屋敷に滞在する以上、一般人に危害を及ぼすような魔力集めは止めるように要求しており、彼女は大人しく頷いてくれた。

実際のところ、完全に止めていたのかは疑念を抱いていたが、少なくとも、昏睡事件としてニュースになるほどの『おいた』はしていなかった筈だ。

「再びこれをやり始めたってことは・・・」

「ええ。キャスターは自分で何かをしようとしているのでしよう」

ライダーの言葉はおそらく正しいだろう。

だが、考えようによっては、これは朗報なのかもしれない。

いや、勿論、一般人を昏睡させているのは大問題だが。

「キャスターが自分で魔力集めをしているってことは、桜に取り込まれていないってことでもあるな」

「ああ・・・それは確かにそうですね」

ライダーは虚を突かれたようだった。

「何とかキャスターと接触したいな」

昨日、キャスターが遠坂の治療をした点については、向こうがそもそも彼女を敢えて殺さないことを目的としていたと考えれば合点がいく。遠坂に魔術を使えなくさせ、精神的な苦痛を与えることが重要

だったのだ。簡単に死んでもらっては困るということだろう。

しかし、オレやライダーに対して何も手出しをしてこなかったというのは、敵陣営に取り込まれていないことの証左とも考えられる。

このニュースもそれを裏付けていた。

「楽観的な見方なのかもしれないけど、それで状況を変えることができると思っっている」

「承知しました。士郎は、キャスターを信じているのですね」「ああ」

そのためには、キャスターの居所を掴む必要がある。

「遠坂とイリヤを教会に送ってからでも、桜が指定してきた時刻までは時間がある。新都側でキャスターの行方を追ってみよう」

「承知しました。士郎」

ライダーが頷く。

「それから遠坂、悪いんだけど後で教えて欲しいことがある」「何かしら?」

オレはその内容を遠坂に告げた。

真つ当に英霊を召喚したマスターなら、必ず知っていることを遠坂に教えてもらいたかったのだ。

必要になるかはわからないが・・・

「わかったわ。道すがら仕込んであげる」

遠坂は快諾してくれた。

「ところで、桜の誘いに応じるわけね? 罠の可能性が高いと思うけど?」

「接触の機会があるなら、それは逃せない。桜と直接話すチャンスでもあるし、見せたいと言っているものを確認することで、意図や目的を探る材料にもなる」

「そうね。あなたらしいわ。明確で合理的だわ。それについては、私からは何も言うつもりはないけど・・・」

遠坂がオレとライダーを交互にジロジロと見た。

「何だよ?」

「何でしよう?」

オレとライダーは戸惑いながら、問う。

その反応に対して、遠坂は、はあ、と大きくため息をついた。

「あんた達、少しは恋人らしいことをしたらどう？」

「あいつ、近所のお節介おばさんみたいになつてきたな・・・」

本人が聞いたら殺されそうな、というか間違いなく最低10回は殺される内容だったので、慌てて口を噤んでオレは周りをキョロキョロ見てしまった。

今、オレとライダーは教会の門を出たところだ。

当然、隣にライダーがいる以外、人影はない。

「やはり昏睡事件の犯人はキャスターということで、間違いないようですね」

「そうだな。そのこと自体はともかくとして、確証を得られたことは悪くない」

遠坂とイリヤを教会まで送ってきたが、道中は襲撃を受けることもなく、すんなりと到着した。

そのまま立ち去って、新都の中心街に向かおうと考えていたが、昨日起きた昏睡事件の情報を言峰なら知っているのではないかと思つて確認してみたところ、

『お前の推測どおり、あれはキャスターの仕業だろう。以前と遣り口が同じだからな。ただし、程度という点では少し変化がある』

『変化？』

『被害者の容態は以前よりも軽くなっている。まあ、元々キャスターの魔力集めは、採血のように丁寧な仕事だった。そちらの御仁と比べればな』

などと言いながら、ライダーを見てニヤリとしていたわけだ。

「無駄になるかもしれないけど、現場に行こう」

「そうですね」

テレビで放送されていた昏睡事件現場のビルに行き、周囲も含めて魔力の残滓を追ってみたが、残念ながら追跡の手掛かりになりそうな

ものは発見できなかつた。

「申し訳ありませんが、わかりません。やはりキャスターが本気で隠そうと思えば私程度が探ったところでもどうにもならないということでしょう」

と、ライダーもお手上げ状態であつた。

「ですが、一般人30名程度の魔力では、彼女にとっては、まだまだ物足りないでしょう」

「何か本気で行動を起こすための準備をしているのなら、今晚も動く可能性が高いつてことだな」

「そうですね」

夜間でも人が密集しているような場所を警戒していれば、運良く鉢合わせになる可能性があるかもしれない。

現在は、夕方。

薄暗くなりつつある時間帯だ。

ライダーと話し合った結果、もう少し時間が経ったところで、本格的に巡回してみることになった。

「それでは、士郎。少しだけ、離れますので、そのベンチでお待ちください。すぐに戻ってきますので」

と言い残して、ライダーはオレをベンチに残して、路地を曲がっていった。

唐突な行動だつた。

「？」

オレは、ライダーが何をしようとしているか全くわからなかつた。言われるがままにベンチに向かつたが、ふと思いなおして、近くに設置されていた自動販売機でコーヒーを2本買った。

「コーヒーはどっち派なんだろうか？」

ライダーは紅茶を飲む時には砂糖を入れていたので、砂糖入りのほうが好きな気がしたが、念のためブラックも購入した。オレはどっちかと言うと砂糖入りのほうが好きだが、ライダーの好みに合わせるつもりだ。

彼女がブラックを飲むのは、それはそれで似合っている気がした。

「土郎、お待たせしました」

ベンチに座って、ぼんやりとコーヒー缶を弄びながら待っていると、ライダーの声が聞こえた。

だが、顔を上げてても彼女の姿は見当たらなかった。

「あ、土郎、申し訳ありません。こちらです」

改めてその声のほうを見ると、車の運転席に乗ったライダーが助手席側の窓を開けて、呼びかけてきていた。

「はっ？」

想定の遙か斜め上をいく状況に、オレは間抜けな声を出してしまっていた。

どういうことでしょうか？ライダーさん。

「失礼しました」

そう言うと、ライダーはハザードを点けたまま、運転席を降りてこちらに歩いて来ると、そのままオレの肘を取って、助手席へと誘った。「えっ？えっ？」

全く状況についていけないオレは、戸惑うままに、抵抗することを考えることすらできず、助手席に収容された。

説明ぷりーず……

車種など全くわからないが、外観は、フロントの長い黒いスポーツカータイプ。

振り返ってみると、リアシートは申し訳程度のスペースしかなく、明らかに走りを楽しむための車ということがオレでもわかる。

「……あの……ライダーさん。この車は？」

「先ほど偶然見かけまして、格好いいなあと」

「レンタカーということかな？」

「そうですね。借り物という意味では同じかと」

オレは、この車の出所をこれ以上追求しないと決めた。

真実に辿り着くことが、常に正しいとは限らない。

「これだけは確認するけど、人を殺めてはいないですよね？」

「土郎。私をそこまで信用していないのは心外です。ご安心ください

い。ちよつといい夢を見てもらっているだけです。この車だってちゃんと返しますよ」

「そうですか。それならいいです」

もうどうでも『いい』という意味かもしれないなかつた。

「で、これってひよつとして?」

聞くまでもないが、確認する。

「ええ。ドライブレートと呼称されているものです」

「ですよね」

できればハンドルを握るのは、オレでありたいところだったが、現実に運転できるわけもない。

ライダー本人も運転しなかったのだろう。

餅は餅屋とはこのことだ。

「凜に言われたことに触発されたというわけではないのですが。一度、土郎と一緒にドライブしてみたいと思っていました」

「うん。わかった。そう思ってくれるのは嬉しいよ」

オレは、開き直りという名の魔術で自我を保つことに成功した。

オレも一人前の魔術師になりつつあるということだろう。

ライダーがアクセルを踏む。

正直、スピードメーターが振り切れることを覚悟していたが、意外にも安全運転だった。

「ライダー……ちゃんと交通ルール守るんだな。良かった」

「当然です。免許がありませんので、捕まったら一巻の終わりです」

矛盾の塊のような問答だ。

「そうだな。免許を持っている筈がないもんな」

まあ、パトカーとカーチェイスになって、ライダーが捕まるわけはないのだが。

ライダーが、現代の乗り物であろうと、普通の人間を遥かに超える技量で乗りこなせることは知っている。

当然ですが、これは英霊だから許される(?)のであって、良い子の皆さんはちゃんと免許を取ってから、運転しましょうね。と、なんとなく心の中で呟いてみる。

「どこに行くんだ？」

「特に決めていません。ただ、信号が多いところだと、全く爽快感がありませんね」

「じゃあ、郊外に向かおう。アインツベルンの城の方向だ」

「はい」

ライダーが嬉しそうに返事をして、少しだけアクセルを強く踏みこみ、ギアを上げた。

オレにはよくわからないが、クラッチ操作というやつも極めてスムーズなように思われた。

「そうだ・・・」

オレは、自分の手元を改めて思い出した。

自動販売機で買った缶コーヒーが2本ある。

「ライダー。コーヒーはブラックと砂糖入りどっちがいい？」

「ありがとうございます。まずは一郎が好きなほうをお取りください。私は残りで大丈夫ですよ」

ライダーが微笑んだ。

「むむ・・・」

オレは少し考え込んだ。

先程も悩んだが、ライダーがコーヒーを飲んでいるのを見たことがなかった。紅茶の時は砂糖を入れるが、コーヒーでは違うということもあるかもしれない。

考えている間、彼女がチラチラとこちらを気にしているのがわかった。

こんなことでいちいち悩む男は、優柔不断な気がしたので、オレは砂糖入りのほうをライダーに渡そうとした。

「ふふ」

するとライダーは、手を伸ばしてきて、ひよいとブラックのほうをオレの手から抜き取っていった。

そのまま彼女はハンドルを右手で握りながら、左手だけでプルトップを開けるとコーヒーを飲む。

実に様になっている。

と、見惚れたいところだが、オレはかなり慌てた。
「え？あれ？」

なんか気に障ることをしてしまっただろうか？
渡そうとした缶とは、逆を持っていかれてしまった。

「士郎。あなたは、砂糖入りのほうが好きでしょう？」
ちらりとライダーが流し目をくれる。

「・・・あ・・・いや・・・」
確かにそうだ。

「あなたの好みを優先するように言ったのに・・・」
ちよつと非難するような目だ。

「ごめん」
確かに、これでは彼女の話を聞いていなかったように思われたかも
しれない。

「ふふ」
ライダーがふわりと穏やかに笑う。

一瞬、目を閉じながらハンドルを握る彼女もまた綺麗だ。
「仕方ありませんね。それがあなたなのですから」

でも、と続けた。

「私に対しては、自分を優先するようになってください。いつかで構
いませんから」

「・・・えっ？」
いつか？

つまりこの戦いが終わった後でも構わない、ということだろうか？
それは、オレ達には許されない言葉の筈だった。

「ここからだ、冬木の街が一望できますね」

郊外に出て車を暫く走らせると、ダラダラと登りが続く道になって
おり、左手に冬木の街並みの全貌が見えるようになってきた。

陽が殆ど沈み、僅かにその光の残滓が街を浮かび上がらせており、
建物や車は人工の明かりを灯し始めている。

「停めますね」

ちよūdいいい具合に、展望用に車を停められるパーキングがあったので、ライダーはそこに車を入れた。

「こんなところがあるんだな」

車を運転しないオレには縁のない場所だ。

外に出ると少し風があり、冷えた。

「気持ちいいですね」

ライダーが運転席を降りて、オレの隣に立つ。

薄紫色の髪が風に揺れる。

彼女はいつものハイネックセーターだけで、上着を着ていないが寒さを感じないのだろうか？

戦闘時の服はとても寒そうだが、平気みたいだし。

それでも、オレは自分のコートを脱いで、彼女に着せた。

「ありがとうございます」

また、自分を優先してくれと断られるかと思ったが。

「男性の心遣いは、素直に受け取るものですよね」

オレの心のうちを見透かしたように、彼女が微笑んだ。

「ああ。くだらない男の見栄ってやつだな」

「くだらなくなどありませんよ。いいえ、表面だけの男の場合は、そうかもしれません。士郎が私を本心から気遣っているのはよくわかりますから」

男ならみんな本心で女性を気遣うのではないのだろうか？

オレにはよくわからなかった。

きつと彼女は、オレには想像もつかないような経験を既に行っているのだろう。

それを掘り下げるのは失礼というものだ。

「ライダー……」

オレは、車中での彼女の言葉の意図を確認したかった。

あれは『今後』がある、少なくともあり得るような口ぶりだった。

それは、オレだって死ぬほど欲しい。

彼女との未来が。

だが、聖杯は汚染されている。

ライダーが現世に残れるよう聖杯に願えばどんな災厄がもたらされるかわからないし、歪んだ解釈をされてオレ達がオレ達でなくなってしまうかもしれない。

それでは意味がない。

この戦いがどんな結末を迎えようとも、彼女は消えてしまう・・・その筈だ。

堪えきれず、オレは口を開く。

「さっきの話なんだが・・・」

しかし、オレはそれ以上の言葉を紡ぐことができなくなった。

気が付けば、彼女の閉じられた目がオレの目にくつつきそうなくらいの距離にあった。

眼鏡のレンズに、オレの睫毛が当たる。

唇には柔らかい感触が一瞬だけ残った。

穏やかな、ただ、触れるだけのようなキスだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女はゆつくりと目を開いた。

露わになった双眸は何かを訴えているかのようだ。

「・・・・・・・・・・士郎、この話は止めましょう」

ライダーは唇を離し、僅かに下がる。

「・・・ですが・・・信じてください。私は、あなたと私の未来のために行動します。もちろん、それは決して歪んだ未来などではない」

彼女の目はどこまでも澄んで。

透き通って・・・

そして、真っ直ぐだった。

「ああ。信じるよ」

彼女が未来に目を向けていることがわかった。

オレは、この戦いを何としても生き残る決意を固めた。

I n t e r l u d e i n

「遠坂？・・・お前もここに保護されたのか？」

「・・・慎二・・・？・・・あんだ・・・生きていたの？」

凜は驚いた。

士郎やライダーからは、慎二は死んだという話を聞いていたからだ。

とは言え、彼の今の姿を見れば、死にかけたことは確かなのだろう。「ああ。衛宮達からはそう聞いていたのか。まあ、無理もないよな。あの時、僕はずっと気を失っていたし、これだけの怪我をしたわけだしね」

そう言つて、両手で駆動輪を回すと、礼拝者用の座席を縫つて慎二を載せた車椅子が滑らかに凜に近付いてきた。

「サーヴァントを失つて、マスター失格になつたつてわけかい？」

一瞬、凜は無視しようかとも思ったが、思い直した。

これからの自分の人生の中で、何度も自分が魔術師ではなくなつたということ認識させられる瞬間がある筈だ。

その度に目を反らしては、これからの自分の先行きも多寡が知られているというものだ。

正面から向き合つていかなくはいけない。

「そうね。それもあつたけれど、私が負けを認めたのは、私が魔術師でなくなつたからよ」

「は？何だつて？」

「私は魔術回路を消されたのよ。だから、今の私は魔術師じゃないわ。つまり一般人なのよ」

凜は、堂々と言い放つた。

それ自体は卑下するようなものではない。

本来、魔術師だから上とか、魔術師じゃないから下とかそういうものではない。

この点については、魔術を使った時から、何ら変わつてはいない。だが、目の前の人物はそうではない。

「は・・・ははは・・・これは傑作だな。あんなに魔術師であることを笠に着て、他人を見下してきたお前が・・・自分自身が、魔術師ではない下らない一般人なんか身を落とすなんてね」

考え違いも甚だしかった。

だが、止むを得ないのかもしれない。

慎二は、明確に魔術師が特別で即ち『上』、そうでない人間は普通で『下』という価値観で固まっている人間だ。

「あなたを私が見下していたとすれば、単にあなたの人間性を見下していただけだと思うけれど・・・」

凜は、でも、と続けた。

「こうなってみると、逆にあなたって凄かったのかもしれないって思えるわ。どんな動機であつたにせよ、魔術師でもない身でこの戦いに身を投じることができたなんてね。魔術師相手に戦うのに魔術が使えないなんて、無防備もいいところだわ」

凜は本心からそう思っていた。

これは、嘲りでも皮肉でもない。

「はは・・・」

慎二が渴いた唾いを漏らした。

「その結果が、このザマさ。僕はこれで魔術師としてどころか、一般人としても落伍者として、生きていかけりやいけな。こんな理不尽な戦いに巻き込まれたばかりにね」

「あんた、何を今さら・・・」

それは、あまりにも滑稽な嘆きに聞こえた。

間違いなく間桐慎二は、巻き込まれたのではなく、自分の意思で自分の目的のためにこの戦いに参加していた。利用されていた場面もあるのだろうが、それは参加した後のことだ。

だが、凜はそれ以上言葉を発することができなくなった。

「・・・ハハ・・・ハハハ・・・」

礼拝堂の高い天井を見上げながら、慎二が嗤い始めたのだ。

「・・・そうさ・・・優秀だった僕がとんでもないハンデを背負わされてしまった・・・これからの僕は、下らない連中から見下されながら生きていくことになるんだ・・・」

「・・・慎二・・・」

「・・・何でこうなったんだ？誰が悪い？・・・僕じゃない・・・僕は

優秀で、特別だったのに・・・誰が僕をこんな目に・・・」
既にこの男は壊れかけているのだと理解した凜は、足早にその場を
後にした。

礼拝堂内は、空虚な呪いの言葉が漂い続けることになった。

I n t e r l u d e o u t

第33話 　　く13日目③　　「マキリの夢の跡」

E t u r n

「お前達か」

教会の重い扉を開けて中に入ると、すっかり聞き慣れた神父の低い声が礼拝堂内に響いた。

「キャスターの足取りについては、手掛かりを掴めたかね？」

「いや。結局わからなかった。夜になってから新都を巡ってみたが、今日はまだ動きがないようだし」

ライダーとのドライブの後に街へと戻ったが、残念ながらキャスターと出会うことはなかった。セイバーから告げられた時刻が近付いたため、この教会に向かったのだ。

「そうか。やはり行動している時でないと、捕捉するのは難しいようだな。私も使い魔を放っている。情報が入ったら教えてやろう」
「やけに協力的なんだな」

「仕事だ。これ以上一般社会を混乱させるようなことは、許容できん。さりとて、私にどうこうできる力はないからな。お前達の目的が彼女を止める事だというなら、手を貸すのも吝かではない」
「成程な」

利害は一致しているわけだ。

「その一方で・・・」

と言峰は続けた。

「お前達が来た経緯は凜から聞いている。とは言え、ここは本来不可侵領域だ。荒事は困るのだがね」

「それは、オレには何とも言えない。一方的にここに来いって指定されたんだから・・・」

と、話している。

「土郎。後ろを見てください」

隣にいたライダーが開いたままの扉の外を振り返るように、オレに

促した。

ザワワワワワ・・・

教会の正門からこの礼拝堂へと続く石畳。

その中心に黒い影が発生し、さらに、二次元だったそれは膨れ上がると球体を形作った。

以前に柳洞寺で見た直立した影を太らせたような形だ。

ザ

それが頂点から分裂して、黒い帯となり地面へと広がった。

「約束どおり来てくれたんですね。先輩」

その中から現れたのは桜だった。

以前見た時はこちらが満身創痍の状態だったが、まともな状態で見ても桜は以前とは全く変わってしまったことを再認識させられた。

その顔には酷薄な笑みが浮かんでいる。

こうして変貌する前には、決して見せることのなかった表情だ。

「桜・・・どうしてそんな姿に・・・」

理由は既に推測できている。それでもオレは桜本人から聞きたかった。少しでも話したかった。

しかし、

「兄さんが生きているって聞きました。だから、ここに来たんです」

桜はオレの質問には答えずに自分の聞きたいことを口にしながら、礼拝堂に向かって歩を進めてきた。

「む。彼を殺そうというのかね？」

様子を見ていた言峰が対峙するように前に出ながら尋ねる。

「違いますよ。神父さん。むしろ兄さんにはプレゼントを持ってきました」

「なんだと？」

「入れてもらえませんか？まあ、邪魔をするなら殺すだけですけどね。あなたでは私には勝てないこと、わかってるんでしょ？」

その言葉を聞き、言峰は止むを得ずという体で道を空けた。

桜はオレとライダーの横を通り抜け、礼拝堂に入っていく。

オレは何もできない。

場の空気を桜が完全に掌握していた。

「兄さんも、そして姉さんもいるんでしょう？せつかくですから、出てきてください。観客が多い方が盛り上がるというものでしょう？」

「桜……あんた……何が目的で……」

桜の声が届いたのだろう。

遠坂が祭壇の裏手から姿を現した。

「ふふふ。姉さん。如何ですか？魔術師でなくなった気分は？つまりないでしょう？苦しいでしょう？これまで散々偉そうにしてきたのに、ありふれた存在になっちゃってしまっただけ」

「つまらないかどうかはこれからの行動で、私自身が決めるわ。ありふれた存在だって、それを卑下する理由なんてない」

遠坂は堂々と言い放った。

「ふん。強がりばかり」

桜は少し苛立たし気に吐き捨てた。

「それにしても、兄さんが出てこないですね？早くしてくれませんか？」

桜が呼びかけるが、慎二は現れない。

「世話の焼ける兄さんですね」

桜は遠坂が出てきた祭壇裏の扉に入っていった。

そしてしばらくすると、慎二の車椅子を押して礼拝堂に戻ってきた。

「た……頼む！桜！殺さないでくれ。頼むから命だけは！」

慎二の顔は恐怖と涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっていた。

「少し静かにしてください。兄さん」

ブン……

桜が五月蠅そうに呟くと、黒い棘が空中に現れたかと思うより早く、その棘が伸びて、慎二の手の甲を貫いていた。

「ぎゃああああああ〜！」

血塗れになった慎二が車椅子の上でのたうつ。

下半身が動かないので、倒れようがないのかもしれない。

「あく、もう、めんどくさい人ですね。余計、うるさくなっちゃった

じゃないですか」

自分でしておきながら、まるで他人事のように桜が嘆息しながら肩をすくめた。

「話を進めたほうがいいんじゃないかしら？」

ここに保護されている最後の一人。

銀髪の少女、イリヤが現れた。

彼女は落ち着いた口調で桜に促しながら、そのまま、慎二の傍まで来ると、詠唱を始める。

治療するつもりなのだろう。

「あああああゝ．．．頼むゝ．．．早く、早く傷を塞いでくれゝ．．．今度こそ死んじまうゝ．．．」

慎二が救いの主を見つけたように、イリヤに縋りつく。

「大丈夫よ。これくらいでは死なないわ」

イリヤは冷たく突き放して、治療に専念した。

「そうですね。この人の相手をしていると、夜が明けてしまいます」

桜はそう言って、慎二の元から離れた。

そして、この場にいる全員を見渡す。

オレ、ライダー、遠坂、言峰、それに慎二とイリヤがこの場にはいる。

「ふふ。7人もお客様がいますね。これだけいけば、いい晩餐会になりそうです」

7人？

ここには6人しかないない。

単なる数え間違いとも思えないが．．．

「私はこの姿になってから、ずっとある人を探していました。まあ、もしかしたら人じゃないかもですけど」

「人じゃないかも？」

オレは桜がこちらの想像の埒外の話を始めたことに面食らいながらも、矛盾に満ちた部分に思わず反応した。

「ええ。先輩も今日見たばかりじゃないですか」

「今日．．．」

思い当たる人物が確かにいる。

「……臓硯か？」

「流石、先輩ですね。話が早くて助かります」

人であつて、人ではない。

確かにあれは、蟲だつた。

「そうです。私はずっとお爺様を探してきました。より正確に言うなら、お爺様の本体です。お爺様の体は蟲の集合体に過ぎない。それが殺されようと痛くも痒くもない。なぜなら本体は別にいるのですから」

桜は自身の左胸に手を当てた。

まるで、自分の鼓動を測ろうとしているかのようだ。

「でも、私はお爺様がいつも近くにいると感じていました。私はお爺様に見張られていると。だから、私は常にあの人には抗い難いものを感じていました」

「見張られていたつて？」

それは、うちの中での出来事も全て間桐臓硯に知られていたという事だろうか？

「だから、探っていたんです。お爺様の反応を」

「ずぶり……」

「!?!」

オレ達は息を呑んだ。

桜は自分の手をそのまま胸の中へと突っ込んだのだ。

当然、血が溢れてくるが桜は気にも留めない。

しばらく、胸の中をまさぐるようにしていると、

「……見つけた♪」

桜が胸から腕を引き抜いた。

キイイイ!

人間のものではない甲高い音が堂内に響き渡る。

桜の手には、手の平程度の大きさのグロテスクな蟲が握られていた。

『……な……何をする桜?!』

おそらく魔術による念話なのだろう。

その蟲は狼狽して声を発した。

それは、確かに今日聞いた間桐臓硯の声と同じだった。

「うふふ、お爺様。初めまして、というのも変でしょうか？」

桜は自分の目線の高さまで、蟲をつまみ上げる。

『桜！貴様、儂をどうする気だ!?!』

なす術もない蟲が桜の手の中でびちびちと悶えていた。

「わかっているんでしょう？この数日間アーチャー達がしてきた行動は、お爺様を追い詰めるためのものだったことくらい・・・そう言えば、神父さんも見たんでしたっけ？」

桜が言峰をチラリと見る。

「うん？・・・ああ、確かに昨夜な。アーチャーの目的は間桐臓硯の補給を絶つことで、焦りを誘うことだったわけだな」

言峰は、少し考えるように顎に手を当てて応じた。

「ええ。お爺様がいくら蟲で出来ているとは言え、それは無尽蔵というわけではありません。もちろん蟲蔵は、うちの地下だけではありませんので点在している管理地を虱潰しにしていたわけですよ」

『儂の長年の苦勞を、台無しにしおって・・・!』

「もちろん、全部を潰せたわけではなかった筈ですが、私の中でお爺様の焦燥を感じていました。もしかしたら、お引越しも考えていましたか?？」

『く・・・』

「体を再構成するにも魔力を使いますしね。今日になって、先輩達がお爺様の体の殆どを潰したことも大きかったです。邪魔なアサシンもこちらに都合よく斃してくれましたし。その点は感謝していますよ、先輩」

都合よく?？」

アサシンを斃すのは、戦力から考えれば桜達にとって難しくなかったはずだが。

『この小娘が！これまで育ててきた恩を忘れおって!』

「そうですね。結果的にこうなれたのは、お爺様のお陰と言えなくも

ないですね。私、こんなに自由で、解放された気分になれたのは本当に初めてです」

でも、と桜は続ける。

「そもそも、あんな地獄に閉じ込めたのは、あなたじゃないですか？ 聖杯の欠片を埋め込み、下らない欲望のためにネチネチと私の体を弄び、私がこうなるように育てたのもあなたです。間違いなく主犯ですよ」

オレがずっと寝ている間に、ライダー達が推測したことはほぼ正しかったようだ。

桜は、臓硯に聖杯の欠片を埋め込まれて育てられた。

「自業自得ってやつですよね？」

『いい気になるな！桜あー！』

ザアアアアアアアア

開いたままの扉の向こうに、夥しい数の蟲が集まってきた。

地面を這いずる芋虫のような蟲が大半を占めていた。

それらはやがて折り重なるようにして集まり、人間の姿を形作っていく。

「所詮は、お前が儂の人形に過ぎんことを思い知らせてやるわー！」

間桐臓硯となった蟲達が吠える。

しかし、その体の所々が欠損しているのが見て取れた。

片耳がなく、右腕の途中、左手の親指など本来あるべきものがない。

「お爺様。お体が足りていませんよ」

そう言つて桜が右腕を突き出すと、僅かな時間の後、間桐臓硯の形をした蟲達を黒く丸い檻が包み込む。

「なんだと!？」

その檻が突然縮小すると、蟲達を圧迫した。

「ぎゃあああああああああ！」

殆どの蟲達が消失した。

僅かに残った衰弱した蟲達はそれぞれが逃げ出そうとするが、全て、黒い影に襲われ消えていった。

「もう少しマシな抵抗をしてもらわないと、折角集まっていただいた

お客様方が退屈してしまいますよ。お爺様」

『ばかな・・・こんな一瞬で・・・』

臓硯は桜の相手にまるでならなかった。

「儂の不老不死の宿願が・・・」

「あなたの本当の望みはそんなものじゃなかった筈よ。マキリ」

黙っていたイリヤが、唐突に疑義を呈した。

マキリ？

アインツベルンの当主であるイリヤは、オレが知らないことをしているということだろうが。

『・・・ふん・・・とうに忘れたわ・・・儂の唯一の望みは死なぬことじゃ・・・』

「・・・そう・・・」

『そのために、アンリマユのマスターとなり、同化しつつある桜を永遠の器とするために、事を運んできたというのに・・・』

マスター？

つまり桜とアンリマユの関係は、マスターとサーヴァントということなのか・・・

「・・・あなたのような普通の人間が500年生きるという事は、それだけ魂を摩耗させてしまうということなのかもしれないわね」

『ユステイーツアの紛い物の分際で・・・知ったふうな口を利きおるわ』

「あなたと語るべき事はもうないわ」

それだけを告げると、イリヤはついと顔を背けた。

それでも、蟲の呪詛は続く。

『あんなにも順調に事が進み、桜の覚醒にまで至ったというのに・・・』

「そうですね。私もびっくりしましたよ。この人達の裏切りには」

桜が表情を消して、オレとライダーを見たが、それも一瞬だった。

「でも、今日のメインディッシュはお爺様です♪」

弾むような口調で歌うように告げる。

「考えていたんですよ。どんな風にお料理したら美味しいかを」

桜は、周りにある顔を一通り見回すと、

「はい。今日の大当たりは兄さんですよ」

慎二の顔を見詰めて、嬉し気に微笑んだ。

「な?・・・ぼ・・・僕だつて?」

「兄さんはどう思ってたんですか?お爺様のことを。物凄く怖がっていたんじゃないですか?」

「そんな・・・そんなわけあるもんか!」

言葉とは裏腹に、その体は震えていた。

臓硯に対する恐怖なのか、桜に対するものなのかは定かではなかったが。

「そんなお爺様が、『これ』なんですよ。笑っちゃいますよね?」

桜は掴んでいた蟲を慎二の足元に放り投げた。

びちっ

『ひいっ!?!』

慎二は悲鳴を漏らした足元の蟲をじつくりと見詰めた。

「・・・これが・・・あの爺さん・・・こんな虫けらが・・・」

「そうですよ。それが本物のお爺様です」

桜が嗤いながら、胸の前で両手の指を組んだ。

「兄さんの自由にしていいですよ」

「・・・僕の・・・自由に?」

「はい」

桜に促された慎二は、徐々にその顔に笑みを浮かべていった。

「はは・・・ははは・・・これが、僕を支配してきたあのジジイだって言うのか・・・」

車椅子を僅かに動かす。

そのタイヤの先には放り出された蟲がいる。

びち

『ぎゃあああああ!』

尻尾のような部分に車椅子のタイヤが乗ると、蟲は耳障りな悲鳴をあげた。

「・・・お前のせいだ・・・お前のせいだ・・・お前のせいだ!」

『ぎゃあああああ!シンジイ・・・!やめろおとおお!』

「僕が魔術回路がなかったのはあんたのせいだ!あんたが出来損ない

の魔術師だったからだ！僕がこんな体になったのもあんたのせいだ！僕をこんな戦いに巻き込みやがって！それもこれも全部、あんたの不老不死のためだって!？」

慎二はタイヤを小刻みに動かすことで、蟲に苦痛を与え続けた。

「ふざけんなー！」

タイヤに踏みにじられた蟲は動かなくなった。

「おしまいにしてやるよ……」

慎二は上体を屈めると、蟲をつまみ上げた。

『……やめろ……なんで500年生きた儂が貴様のような出来損ないに、こんな目に合わなくてはいかんのじゃあ……』

「僕は出来損ないなんかじゃないー！」

慎二の腕に力がこもる。

「やめろ、慎二！」

自分がなぜ、制止の声を発したのかは全くわからなかった。

間桐臓硯に同情の余地など微塵もない。

自らの欲望のためだけに、桜を弄び、ライダーを罠に嵌めた。

間違はなく、殺すしかない相手だ。

「……ハハ……衛宮……こんな時でも僕を止めようとするんだな……

だから、僕はお前が嫌いなんだ！」

『誰か！誰か助けてくれ〜！』

誰も蟲の言葉に動く者はいなかった。

オレは半歩だけ足を前に出したが、そこまでだった。

—————
ブチュツツ

有機物が潰れた音が、高い礼拝堂の天井にまで響いた。

それが、500年を生きの間桐臓硯という魔物の最期だった。

「……………」

束の間の静寂が、暗い礼拝堂内を支配する。

「……楽しかったですか？兄さん。なかなかの名演でしたよ。これだけのお客さんに集まっていたいただいた甲斐があったというものです」

「は……はは……ハハハハハハ……これで終わり？あの爺さんが
終わり……？」

「そうです。私達を支配してきたあのお爺様がこれで終わりなんです。呆気ないでしょう?」

くすりと桜は嗤って、踵を返した。

「さようなら。兄さん。そしてお爺様。本当にあなた達間桐家の人々は救いようがなかったです」

そのまま礼拝堂の出口へと向かう。

オレは呆然としたまま桜を見詰めていることしかできなかつた。

「桜。あんたこれ以上何をやる気なの?」

遠坂が張りつめたままの場の空気を、無理やり引き裂くように問い掛けた。

「決まっているじゃないですか。そこの二人が本当のメインディッシュです」

桜はオレとライダーを交互に指差した。

「先輩、ライダー。あなた達とは明日の夜、決着をつけてあげますから柳洞寺まで来てください。お待ちしています」

「柳洞寺?」

「万全の状態で来てくださいね。でも、あまり遅くなるとアンリマユが溢れてきちゃうかもしれません。私も抑えきれなくなってきました。逃げようなんて考えないほうがいいですよ」

そう言い残して、桜は去っていった。

オレは闇夜に消える彼女の背中をただただ見送ることしかできなかった。

R t u r n

「はは・・・ははは・・・爺さんが死んだけど、だからって何が変わるわけでもないじゃないか・・・僕の体が治るわけじゃないし・・・」

慎二が頭を抱える。

「当たり前じゃない。何を今さら・・・」

凜が呆れたように慎二に対して険しい目線を向けた。

「だからって、どうしようもないじゃないか?あの桜に逆らったら、何

をされるかわかったもんじやない」

「ふん。どうだか」

凜は顔を背けた。

もはや見るに堪えないというところだろう。

「さて、それで衛宮君。私が言うのも申し訳ないんだけど、桜達に挑むのね？あつちにはセイバーも、アーチャーもいる。戦力的には相当厳しいと思うけど」

「ああ。勿論、準備を整えてからということになるけどな」

士郎が私に視線を送りながら、応えた。

私も同意を示すために頷く。

「そんなの無理に決まってるじゃないか！」

慎二が余計な口を挟んできた。

「勝てるわけないだろ。こいつじゃあ！」

言いながら、私を指差してきた。

「セイバーには一撃でやられたんだ。まるで相手にならなかつた」

その認識を持つていたことに少しだけ驚いた。

「衛宮君、ライダー、イリヤ。場所を変えましょう。話したいことがあるの。こいつがいると、まともな会話ができないわ」

凜が私達に外に出るよう促してきた。

「そうだ。ライダー。また僕のサーヴァントになれよ」

不可解極まりないセリフが慎二の口から出てきた。

私は思わず、彼の方を向いてしまった。

「何を言っているのですか？」

妄言を通り越して、暴言としか言いようがない。

「どうせ、もうお終いなんだろう？だったら、僕と最後はいいことしようぜ。前みたいにな」

「慎二。お前……」

士郎が顔を歪めた。

「お前だって、気持ち良さそうにしてたじゃないか。満更でもなかつたんだろ？」

慎二の顔はだらしなく弛緩している。

「いい加減に……!」

隣で士郎が怒りのままに、慎二に殴りかかりそうになるのを私は彼の肩に手を置いて制した。

「ライダー?」

私は無言でこくりと頷き、目で士郎に意思を伝える。

「……信じているよ、ライダー。お終いにしてくるといい」

少年の有難い返事を背に、私は慎二に歩み寄る。

私の手には杭剣が握られている。

「待ちたまえ。彼は仮にも私の保護下にある。危害を加えることは……」

神父が私と慎二の間に立ち塞がるようにして、体を入れてくる。

だが、私が神父の耳元である事を囁くと、彼はすぐに道を譲った。

「……ふむ。そういうことであれば」

私は桜の令呪により、慎二には危害を加えられない。神父にはその事を伝えたのだ。

「な、なんだよ。コイツ……武器を持つてるぞ。僕を攻撃しようとしてるんじゃないか? 何で止めないんだよ。言峰え!」

慎二が怯えながら車椅子を後退させていく。

私は無言でそのままゆっくりと歩を進める。

「なんだよ!? ライダー! お前は僕のサーヴァントだった。僕のしもべだった。僕の物だった……なのに何でそんな目をして近寄ってくるんだよ!」

じりじりと下がっていた慎二は、遂に壁際で行き止まりとなった。

私は彼との距離を詰め切った。

恐怖で醜く歪んだ青い髪の少年の顔。

これが私の最初のマスターの顔だ。

この世界に現界したあの日。私を従えた男。

それを間近に見下ろす。

「どうしたのですか、慎二。いいことしようって言ったのはあなたじゃないですか?」

ダンッ

私が手にしていた杭剣を落とすと、慎二の足から僅かに離れた床板に刺さった。

「ヒィヒィ・・・」

「ご安心ください。慎二。私はあなたになど何の感情も抱いていない」

依然としてこのどうしようもない男を見下ろしながら、私は冷やかに告げる。

「何度かあなたにこの体を与えましたが、私にとってはなめくじ蛞蝓が這いずったようなもの」

士郎は今どんな顔をして、私を見ているのだろうか？

気にはなつたが、目線は動かさない。

彼は私を信じると言ってくれた。

「蛞蝓？僕が蛞蝓だって言うのか？」

「そうです。虫ケラです。結局は、あなたもあの老人も同じです」
ダン！

今度は杭剣を慎二の頭の上の壁に突き立てた。

「でも、あなたは虫ケラでありながら、常に大事なところにいた」

そう。この男は自身の矮小さと比べ物にならないくらい重要なところにいたのだ。

それが、当人にも周囲にも不幸の極みだった。

「だからと言って同情の余地ありませんが・・・ただ一つだけ・・・」

そうたった一つだけ、この少年に価値を見出すことができる**とすれば、**

「士郎との出会いを与えてくれたことだけは、感謝しています。あの日、掃除を押し付けた彼の様子を僅かなりと気に掛け、弓道場に戻ろうとしたこと」

2週間前のあの夜が始まりだった。

「あの時のあなたにはまだ価値があった。しかし、そこまででした。それ以降、そして今、あなたには何もない」

私は、告げるべき最後の言葉を突きつけた。

「・・・僕には・・・僕にはなにも・・・？」

「あなたは存在しない人間です」

私はそう宣言すると、目を閉じた。

「・・・ハハ・・・ハハハハハハ」

この男に費やす言葉も時間も、これ以上は無駄でしかなかった。
言葉どおり、私は自分の中から間桐慎二の存在を消し去る。

「・・・ふう・・・」

疲れた・・・

あまりに無意味なモノに時間を割いてしまったことで暗澹とした
気持ちに苛まれた。

「お疲れ様、ライダー」

振り返ると、そこには士郎が立っていた。

「外に出て気分を変えよう」

そして、いたわるような笑顔を私に向けてくれた。

「はい。士郎」

私はほっとして、全身の力が抜けていくのを感じた。

そして赤毛の少年は、私の背中に手を添えると優しく外の世界へと
導いてくれた。

第34話 　　14日目①　「告げる」

R t u r n

『使い魔から情報が得られた。キャスターの動きをようやく掴めたぞ』

礼拝堂の外に出た私達は、伝えたいことがあるという凜の話を聞こうとしていた。

しかし、神父からキャスターが例の魔力集めを始めたという情報を聞き、私と士郎はすぐに新都中心街に向かうことにした。

キャスターと接触できる最後のチャンスかもしれないのだ。

『キャスターと一緒に、ここにもう一度戻って来るのよ』

凜が真剣な表情で士郎に言った。

それにしても、凜は魔術回路を壊した直接の相手であるキャスターには、本当に何のわだかまりも感じていないようだった。

『やっぱり、遠坂は凄いな』

士郎は、そんな感想を漏らしていた。

私も同感だ。

理屈ではわかっていても、受け入れられないのが普通だろう。

新都方面へと向かう道中。

「こういうのに、段々と違和感がなくなってきているな・・・」

私の小脇に抱えられた士郎がちよつと不服そうにしている。

彼としてみればこの状態は少し情けないと思っっているのだろうが、これが一番速いのだから仕方ない。

「申し訳ありません、士郎。少しの間です。辛抱してください」

「いや・・・ライダーが謝るところじゃない。オレがもつと速く走れればいいんだから。申し訳ないのはこっちなんだ」

士郎が頬を軽くかきながら、謝り返してきた。

とは言え、人間が私の速度に合わせるのは無茶というものだろう。

「キャスターにはどう対処しますか？」

士郎が不憫なので、この後のことに話題を変えることにした。

この少年の事だ。どうするかは、既に考えているだろう。

「キャスターとはオレが話し合うから、ライダーは手を出さないでくれ。どちらにしろ向こうはオレには攻撃できないからな」

「承知しました」

「策と言えるかはわからないが・・・」

と前置きした士郎は、キャスターへの対応策を聞かせてくれた。

「・・・そうですか。個人的には少し思うところもありますが、士郎の決めたことです。キャスターには・・・そうですね。かなり効果的だと思います」

士郎の考えている内容には驚いたし、私としては心情的に複雑なものだったが有効なのは間違いないだろう。

「すまないな」

士郎が私の心のさざ波を汲み取ったように謝ってきた。

「いいえ。あなたを信じていますから」

偽りのない思いを返す。

「ありがとう」

少年のその言葉で、私の心はいつものように満たされた。

神父から伝えられた情報では、キャスターは新都オフィス街に建つこの街で最も大きいホテルに現れたようだ。宿泊客から魔力を吸収しようとしているのだろう。

ホテルの入口に着いた私達が自動ドアを通ると、フロントのホテルマンがカウンターに突っ伏しているのが目に入った。

「どうやら間違いないようですね」

「ああ」

その他にも初老の男性がロビーの奥のエレベーター付近に倒れている。

おそらく宿泊客なのだろう。

ロビーはかなり広く、多くのテーブルやソファが設えられていた。「死んでいないよな・・・」

士郎が倒れているホテルマンに近付き、念のため脈を確認した。「相当、生気を吸われているみたいだな……ここまでやるなんて……」士郎がぐっと拳を握りしめて、こちらに戻ってこようとした時だった。

ドン！

「くっ!？」

突然、私の足元に光弾が撃ち込まれた。

「キャスターですか!？」

叫びながら、私が光弾の飛んできた方向を見ると、案の定そこには紫色のローブを纏ったキャスターがいた。

ロビーの奥。初老の男が倒れている傍に彼女は立っている。

背後には複数の光弾が浮かんでおり、今にもこちらに向けて放たれそうだった。

「何の用かしら?ライダー。それに坊や」

冷たい口調で、キャスターが問いかけてきた。

被ったフードに隠れて、その表情はわからない。

「何の用も何もない。キャスター。一体どうしたって言うんだ?なぜこんな事をしているか教えてくれ」

士郎の口調は、怒りと戸惑いが混ざっていった。

「こんな事?おかしな事を言うのね。私達は聖杯戦争をしているのよ。魔力を集め、力を蓄え、この戦いを勝ち抜き、そして願いを叶える。そのどこがおかしいと言うの?」

不要な感情を交えまいとするかのように、キャスターの口調は不自然なほどに冷淡だ。

「だけどお前はそれを諦め、オレ達を何度も助けてくれたじゃないか」士郎は両手を広げて、訴えかける。

「諦めた……そうね。あの日、坊やに助けられた時、私の聖杯戦争は終わった。あとは宗一郎様と少しでも一緒にいられればいいと思っただわ」

実際に、キャスターの望みはそう変わったはずだ。

「それに坊やには可能性を感じた。あの投影を見た時の驚きは今でも

忘れられないわ。それにセイバーを失ったけど、ライダーがあなたにベタ惚れなのは、一目で分かったわ」

「な・・・なにを言って・・・」

私は自分の顔が熱く火照るのを自覚する。

「私は坊やに賭けたわ」

キヤスターは私に構わず、続ける。

「もう一つの選択肢もあったはずだ。それでも、お前はそうはしなかった」

士郎も少し顔を赤くしながらも、言葉を紡ぐ。

直接、間接問わず士郎に危害を加えられないという制約ギアスにキヤスターは縛られている。士郎が戦いを勝ち抜くということは、彼女にとっては自分が絶対に斃せない相手が生き残るという事でもある。それは、彼女自身は最終的な勝者になり得ないことにもなる。

「ええ。坊やが誰かに殺されれば、私は自由になれた。でも、私自身がそう仕向けることはできないし、柳洞寺に貯蔵した魔力を失った私には、その後、勝ち残るシナリオは描けなかったわ」

彼女とすれば、手詰まりだったのだろう。

「それに、坊やには何も聖杯に託す望みがなかった。そして、ライダーにも。であれば、私が手を貸すことで、あわよくば、私の望みを叶えさせてくれるかもしれないと考えたのよ」

そうでしょうね。

彼女のこの考えには、私は概ね気付いていた。

キヤスターの望みは現世での受肉に他ならない。

葛木と共に歩む人生を夢見た筈だ。

これには、士郎も気付いていたのではないだろうか。

「卑しい思いでしょう？坊やを助けたのは全て打算に基づくものよ」
「確かにそういった計算はあったのでしよう。でも、あなたは純粹に士郎を憎からず思ってもいたはずですよ。それに、助けられた恩も踏みこじめるようなことはできなかった」

この点については、確信があった。

私が士郎に向けるものとは方向性が違うとしても、彼女自身、この

少年に好意を持っていたはずだ。

「そうね。多分、純粹に協力してあげたいという気持ちもあったわ。危なっかしくて見ていられなかったし」

「であれば、なぜ今さら裏切るような真似を？」

「わかつているんでしょう？お嬢さんの魔術回路を消したのは私なのよ。私は坊やの仲間を壊してしまった！魔術師が魔術師でなくなることの残酷さは充分にわかっているながら・・・結局、私はそういう女なのよ！」

叫んだキャスターが腕を振るうと、浮かんでいた光弾が次々に私に迫る。

「くっ！完全に八つ当たりですね！」

ドン！ドン！ドン！

慌てて躲すが、一発でもくらうとかなりの傷を負いそうな威力だ。

以前は、魔力が乏しかったため、だいぶ加減しながら撃っていたのだろうが、今は十分な魔力量を確保しているということだろう。

「やめてくれ！キャスター！」

士郎が制止しようとするが、今の彼女はほとんど自棄だ。

とても、止まらないだろう。

私も士郎が巻き添えを食らわないように、彼から離れるようにして攻撃を躲していく。

もしかしたら、私が士郎に近づくことでキャスターは制約ギアスの影響で攻撃ができなくなるのかもしれないが、そんな賭けをするつもりはなかった。

「所詮、私は裏切りの魔女に過ぎないのよ！それをまざまざと思い知らされたわ！」

「だから、オレ達との手を切って、魔力を集めて一人で戦うつもりだったのか？」

「そうよ。セイバーやアーチャーに勝てる気はしないけれど、やるしかないわ！」

「葛木は？あいつはどうしたんだ!？」

士郎が私も気になっていたことを問い掛ける。

葛木は少なくとも今この場にはいない。

彼がいれば、キャスターのこの暴走も止められたかもしれないのだ。

「宗一郎様は、魔術で眠らせてこの街から遠ざけたわ。アーチャーの襲撃で、あの人は死にかけた。もうこれ以上、危険に曝したくないのよ」

その言葉を聞いた士郎は、束の間、考え込むような素振りを見せた。「眠らせた……か。だとすると……」

なんだろうか？

私には士郎が考えていることが全くわからなかった。葛木について、士郎だけが知っている何かがあるのかもしれない。

「なににせよ、最愛の相手と別れた反動もあってヒステリーを起こしているわけですか？」

士郎の様子を気にしながらも、私は思わず煽ってしまう。

「うるさいわね！あんたに何がわかるのよ、この大女！愛しい人の隣で最後まで戦えるあんたなんかには！」

ドン！ドン！

キャスターが再び光弾を打ち込んでくるが、かなり出鱈目な狙いになっっているので、私は余裕を持って躲す。

「あなたがそれをできないのは、あなた自身が決めたことでしょうに」
「お黙りなさい！……そのうえ……私は……！」

そう。

彼女がこの暴挙に出た要因は、自分自身への不信、凜を壊したこと、葛木との別離。それらのほかに、もう一つあると私は考えていた。

だけど、私はそれを士郎に聞かせるつもりはなかった。

「それ以上はやめなさい！」

私は叫ぶと、バイザーを外した。

魔眼を解放したのだが、圧倒的な魔力を持つキャスターは石化したりはしない。

「無駄に決まってるでしょう！そもそもそのバイザーを作ったのは誰だと思っているの！」

勿論、わかっている。だが、ある程度の重圧をかけることと、私に注意を引き付けることだけが目的だ。

目論見どおり、キャスターは先ほどの話を中断することになった。「キャスター。お前の苦しみはわかった。でも、お前をこのまま暴走させるつもりはない」

しばらく沈黙していた士郎がきっぱりと告げる。

「お前は本来、裏切りの魔女なんかじゃない。他人から押し付けられた歪んだ役割に縛られて、無理やり仮面を被る必要なんてない」

少年はゆつくりと、キャスターに歩み寄っていく。

この場面で彼を石化させるわけにはいかないので、私は外したバイザーを戻した。

「遠坂は大丈夫だ。お前に戻って来いって言っていた。魔術師じゃなくたって、遠坂は遠坂だ」

「何ですって?」

キャスターが驚く。

その間も、士郎はキャスターへの歩みを止めない。

「止まらなさい、坊や!」

「止まらない。お前を連れ戻す」

士郎は止まらない。

「それ以上近付くと、この男を殺すわよ!」

キャスターが、近くに倒れていた初老の男にその手を向ける。

その手には既に魔力が充填されて、淡く光っていた。

その気になれば、すぐにでも男を殺せるだろう。

「告げる」

「え?」

士郎の口から紡がれた音節フレーズに、キャスターは虚を突かれた。

「……汝の身は我が下に、我が命運は汝の賢に……」

「……坊や、まさか……」

「……聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うのなら我に従え……」

「……私と契約を……?」

キャスターが僅かに後ずさるが、士郎は構わず前に進む。

「……ならばこの命運、汝が賢に預けよう」

士郎がキャスターの前で歩みを止める。

既に二人の間に距離はなかった。

「……令呪もないのに……？」

「オレの魔力を持つていけ。キャスター」

「……坊や……あなたって人は……」

「オレはお前を助けたい。信じてくれ。キャスター」

士郎の揺るぎのない瞳がキャスターの目を捉えた。

「……」

かなりの時間、沈黙がその場を支配した。

少年はその間、全く目を反らさず、瞬きもしない。

私は知っている。

こうなってしまうえば、少年の勝ちだ。

「……キャスターの名に懸け、誓いを受けましょう」

キャスターは被っていたフードを外すと、目尻を下げる。

あらゆる重さから解放された女の顔だった。

「……あなたを私の主として認めるわ。坊や」

ふっと呆れたような笑いを漏らしながら、キャスターはそう応えた。

「あなたに賭けた私は間違っていたのかもしれないわね……こんなにも底無しのお莫迦さんだったなんて……」

「オレ、色んな奴に莫迦だ莫迦だって言われるな。心外なんだけど」

士郎がキャスターに右手を差し出す。

「断っておくけど、あなたの魔力じゃ全然足りないわよ」

そう言っつて、キャスターも右手を差し出し、差し伸べられた士郎の手をゆっくりと握り返した。

彼女はしばらくして、もう片方の手を上に重ねた。

「……ああ……温かいわね……」

裏切りの魔女と呼ばれた女は、少年の手を両手で握りしめながら俯く。

やがて、嗚咽を漏らし始めた。

「……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……本当にごめんなさい……」

零れ落ちた雫が二人の手を濡らしては、消えていく。
ひたすら子供ののように泣きじやくる彼女の頭に、そつと少年の手が乗せられた。

「お帰り。キャスター」

そこにあるのは、士郎の笑顔。

家族の帰りを心待ちにしていた少年のそれだった。

E t u r n

「いつまで、士郎に甘えているつもりですか？」

永遠とも思えるくらい長い間、キャスターが泣き続けたので、オレは彼女の頭に置いた手を外す機会を失ってしまった。

さらに言うなら、うっかり間違えると流れで彼女を抱きしめてしまいうそになるので、理性の力で堪えていたわけだが、横合いからのライダーの冷ややかな声で我に返る。

「せつかくだから、このまま抱きしめて貰おうと思っていたのに……本当に無粋な女ね」

キャスターは、さつきまであれだけ泣いていたのが嘘のように、冷ややかな視線をライダーに送った。

「士郎諸共、宇宙の塵にしますよ」

オレもですか？ライダーさん。

「冗談に決まっているじゃない。私を抱いていいのは、宗一郎様だけよ。坊やがそんな素振りを見せたら、燃やしてあげるわ」

オレ、今、この聖杯戦争中で一番やばい場面だったわけですか？

「本当でしょうか？実は満更でもなかつたんじゃないですか？」

それでもライダーは追及の手を緩めない。

「……えっと……確かにだいたいぶクラツと……いえ……まあ、この話はこれくらいにしときましょう」

珍しくキャスターのほうが、逃げを打つ形で幕引きとなった。

オレも早くこの話題から逃れたい。

ライダーの不快指数が急上昇しているのを、ひしひしと感じる。

「だいたい、士郎に契約してもらうなんてなんて羨ましい。こうなるように仕向けたんじゃないかと本気で私は疑ってますから」

それは穿ちすぎというものだろうに。と思うが、今、口を挟むのは怖すぎるので止めておく。

「さっきも言ったけれど、坊やの魔力じゃ多寡が知れているわよ。むしろ、坊やが私に魔力を送る分負荷がかかるから、戦闘時にキツくなるわ」

少し危惧していたが、やはりそうなってしまうのか。

「正直なところ、セイバーやアーチャーは対魔力があるから、私の魔術はあまり効かないの。だから、彼らとの戦闘では私は大して役には立たないわ。坊やのほうがよくぼど決め手になるのよ」

買い被られている気もするが、キャスターの言うことを信じるなら、止めたほうがいいのだろうか。

「とは言え、一度結んだ契約の破棄の仕方なんて全くわからないな」

「私はその手段を持っているわ」

「そうなのか？流石だな」

実際、どういう手段なのか興味がある。

「確かに可能なんだけれど・・・でも、ごめんなさい。ちよつと意地が悪かったわ」

キャスターが少し態度を変えた。

「どういう事だ？」

「この契約を続けましょう。充分に意義があるわ。だからこそ、私は坊やのサーヴァントになることを受け入れたの。まあ、根負けしたつていうのも正直あるけれど」

「このままいくつてことだな？それは、これからの戦いに有効でもあるってことか」

「ええ」

「具体的にはどう有効なのでしょう？」

ライダーは相変わらず喧嘩腰だ。

納得できない内容だったら、本気でキャスターを攻撃しそうだ。

「魔力を坊やから私ではなく、私から坊やに送るわ」

成程。キャスターならそんな芸当も可能なのか。

有効な攻撃手段を持っているのは、オレだけど、オレにはそのための魔力がない。

それをキャスターが供給するということだが、一つ疑問がある。

「それができるといふなら確かに有効だと思うけど、キャスターには充分な魔力の貯蔵があるのか？」

この問いに対して、キャスターはバツの悪そうな表情になった。

「坊やもよくよく痛いところを突いてくるわよね」

正直に言うけれど、とキャスターは前置きして続けた。

「昨日、今日でだいたい魔力を蓄えられたのよ。特に今日はホテル内の人間も多かったから。抵抗はあると思うけど、この点は受け入れて頂戴」

つまり、多くの一般人を犠牲にして戦うということになるということだ。

「勿論、潤沢というわけじゃないけれど、あなたの魔術は、比較的、魔力消費が少ないからかなりの数の投影が可能よ」

すんなりと受け入れられるものではなかった。先ほど確認したホテルマンにしても、だいぶ衰弱していた。

だが、後遺症が残るようなものではなさそうだった。

このあたりは、キャスターの生来の気性なのだろう。

だからと言って許されるものではないが・・・

「・・・わかった。この償いは、全てが終わった後にするしかない」

キャスターは溜息をついた。

「坊やが背負うものじゃないでしょうに・・・」

「オレは、キャスターを救うと決めて契約した。お前の過ちはオレの過ちだ」

「本気で言っているから困るのよね。この坊やは」

「勿論、士郎は本気です。ですが、とにかく生き残らないと話になりま

せん」

「ええ。私も生き残ることができたら、しっかりと償うわ」

「そうしてくれ。念のため聞くが、命に関わったり、後遺症が遺るような人はいないだろうか？」

この点だけは、確認しなくてはいけない。

そういった人がいる場合には、最低限の治療はすぐにしなければならぬからだ。

「それは、絶対に大丈夫よ。十分に注意したもの。逆に言えば、本気で勝ち残るつもりなら、私のやり方は中途半端だったとも言えるわ」
そう。

キャスターはもつと徹底的に魔力集めをすることもできた筈だ。

「結局のところ、私も坊やに感化されていたってことでしょうね」

それはどうだろうか？

オレと会う前の昏睡事件も、死者や後遺症が残るような人はいなかったと聞いている。

彼女の生来の気質としては、荒事を好まないのだろう。普段、無理に悪ぶっていても、簡単に一線を越えられるわけではないのだ。

「本当は、キャスターは戦いに向いていないんだらうな」

オレはぼつりと呟いた。

「この惨状を見ると、その見解は疑わしいと思いますが・・・」

ライダーが少し呆れたように突っ込んできた。

広いロビーの床や壁には無数の穴が開いており、テーブルやソファなどが破壊され、散乱していた。

人的、物的被害は甚大だ。また、言峰が頭を抱えるだらう。

「・・・ライダーが煽るからいけないのよ」

キャスターが明後日の方向に目をやりながら、小声で反論した。

「急いで教会に戻ろう。早くこの事を言峰に報せる必要があるし、遠坂の話も聞かないといけない」

オレ達は、ホテルを後にした。

教会に戻ると、言峰は既に事後処理に奔走していて、不在だった。

「既に使い魔からの情報で、あいつは状況を掴んでいたわ。かなり大事になるって、焦ってたわよ」

と、遠坂が教えてくれた。

「そうか。言峰には世話になりっ放しだな。申し訳ないが、本当に助かる」

おそらく、この聖杯戦争中で最も大きな一般社会への被害だろう。

「衛宮君が気にしなくてもいいのよ。あいつの仕事なんだから。それにこの後の展開次第では、今回の事件なんてニュースにならないくらいとんでもない大惨事になるかもしれないわけだし」

確かに、桜達に願望機としての聖杯を使われても、アンリマユが生まれても、この街だけに留まらない大惨事が起きるだろう。

結果的には、今回の事件など大事の前の小事ということにもなりかねない。

「そんなことにはさせない。あのホテルでの被害がこの聖杯戦争の最大の被害ということにしてみせる」

「そうね。希望はあなた達よ。私は信じているわ」

遠坂は強く頷いてくれた。

「・・・あの・・・お嬢さん・・・」

キャスターが普段の態度からすると、ひどく落ち着きのない様子で、遠坂に近付いた。

端的に言えば、オドオドしている。

相手が最も大切にしていたはずのものを奪ったのだ。無理もないだろう。

「あら、キャスター。お帰りなさい。元鞘に収まったようでは何よりよ。最後の戦いで、あなたの存在は絶対に必要なんだから」

だが、キャスターの態度を余所に、遠坂の反応はそれだけだった。

素っ気ないわけではない。

本当にもう気にしていないのだ。

遠坂がなんのわだかまりも抱いていないことは、本人から聞いていたし、理解もしていた。しかし、こうやって面前で見せられると改めて感心させられてしまう。

鮮やかなものだった。

「え？」

加害者側のキャスターは、思いつきり面食らうしかない。オレからは遠坂が気にしていないことを伝えてはいたが、丸々信じていたわけではないだろう。

特に生粋の魔術師であるキャスターからすれば、魔術師でなくなることの重みをオレなんかより遥かに理解している筈だ。

「だいたい、あなた脅されてやっただけでしょう？包丁で刺されたからって、包丁を恨む奴がいるわけないじゃない」

「一般論で片付けたな」

それにしても、どこかで聞いたことのある話だな。

「何よ？あなたも前に同じようなこと言ってたじゃない？」

「そうだったか？」

「だいたい私の場合、キャスターを脅した相手が私の落ち度であっち側になっちゃった奴だもの。前も言ったけど、自業自得なのよ」

「・・・そ・・・そう・・・だとしても私は間違はなくあなたにとつて取返しのつかないことをしたわ。心からお詫びするわ」

会話に全くついていけなくなっていたキャスターだったが、なんとか気を取り直して、伝えるべきことを伝えた。

態度には表していないが、安堵していることだろう。

「わかったわ。あなたの気持ちはしっかり頂戴しておくから安心して。ま、取り返せなくなつて、他の事をすればいいだけよね」

「普通は、自分が積み上げてきたものにしがみつくんだけどな」

「無駄なんだから仕方ないわよ」

遠坂凜は過去の研鑽を、一言であっさりと放り投げた。

「あ、そう言えば、衛宮君。昨日、教えたことは役にたったのかしら？」

「ああ。ばっちりだ。助かったぞ」

遠坂には、英霊と契約するときの詠唱を教えてもらっていたのだ。

「そう。なら良かったわ。キャスターと契約できたのね。何せ今の私じゃそれすら感じ取れないから」

自嘲気味に遠坂は呟いた。

「そろそろ、本題に入りましょう」

遠坂が自分に関わる話をバツサリ終わらせて、オレ達を見回した。「私からは、柳洞寺から大聖杯に至る道について、伝えさせてもらわ」

遠坂の話は、柳洞寺と円蔵山、そして大聖杯が敷設された地下大空洞の構造や、そこに至る為のルートの詳細についてだった。

遠坂家は代々この冬木市の霊脈を管理する家柄で、そもそも大聖杯を敷設するための霊地を提供していたため、この辺りの事情に詳しくあったということだった。

「桜達は、大聖杯を守るような配置で待ち構えていると思うけど、向こうが知らないルートもあるわ」

「ありがとう遠坂。教えてもらった道も有効活用させてもらう」

「まあ、これくらいしかできないんだよね。で、一旦、衛宮君の家に戻るのかしら？」

「ああ。まずはオレの家に戻って準備を整えるつもりだ」

「そう。確かに自分の家の布団で寝たほうが、ぐっすり眠れるだろうしね」

勿論それもあるが、最後の戦いのために工房からキャスターが作った道具アイテムなどを持ち出す必要がある。

「私も士郎達と同行するわ。この状況ならその方がいいと思う」
イリヤが同行を申し出てきた。

オレとしては、ここに残ってもらったほうが安全な気がしていた。一方で、桜は柳洞寺で待つと言っていたが、その言葉を翻して教会を襲ってくる可能性もある。

例えばアーチャーに襲撃されたら、言峰が対処できるとは思えなかった。

「キャスターが戻ってきた今となつては、オレ達というほうが安全かもな」

「私もそう思うわ」

とキャスターも同意したので、イリヤの申し出を受け入れることに

した。

「ライダー。少しだけ、衛宮君をお借りしてもいいかしら？」

少し唐突に遠坂がライダーに声を掛けてきた。

「ええ。どうぞ。凜」

いつの間にか、二人の間ではオレの所有権がライダーにあることになっっているようだ。

「衛宮君。ちよつとだけ二人で話をしたいの」

「ああ」

なんとなく話の内容を想像しながら、遠坂の後に続く。

ライダー達三人から少し離れたところで、遠坂が止まった。

「あなたはとつくに気付いてるのよね？」

「アーチャーのことだな？」

「ええ」

遠坂はあいつのマスターだった。

あいつ自身が明かさなかったとしても、かなり早いうちから気付いていたのだろう。

アーチャーが、衛宮士郎オレの行き着いた一つの到達点である事に。

「勝ち目はあるのかしら？」

遠坂は少し探るような目をした。

その目は、少し矛盾した感情を孕んでいるように思えた。

オレに勝って欲しいという思いと、そうでない思い。

「ああ」

オレははつきりと頷く。

勝てるなどと断言はできないが、可能性は確かにある。

人間が何かを学ぶ時、そこにゴールがあると確信して学ぶのと、疑念を抱いて学ぶのでは習熟の度合いに大きな差が出る。

オレはあいつというゴールを見据えて、その技術を学ぶことができた。

「オレは真似っこが得意だからな」

くどい説明は省いて、敢えて茶化して笑って見せた。

今の遠坂は、オレがアーチャーに勝つ方法を詳しく聞きたいわけで

はない。

「そうよね。あなたのことだもの。勝つための算段はあるわよね。それにライダー達もいるんだし、一人で戦うってわけじゃないものね」

「ああ」

オレは頷いて見せた。

きっと遠坂はオレと二人きりになって話そうと思っていたことを何も話せないままに終わるだろう。

そもそも、自分が何を話そうとしたのかすらわかっていないに違いない。

「衛宮君。あいつの今の在り様ようをしつかりと見届けてきて頂戴」

絞り出すようにして、遠坂はそれだけをオレに頼んだ。

「ああ。任せてくれ。遠坂」

「頑張ってきてね、衛宮君。世界を救ってちゃんと生きて帰ってくるのよ」

遠坂は手を差し出してきた。

彼女はそれ以上の事は言っではいけないと判断したのだろう。

「ああ」

オレはその手を握り返した。

遠坂だって、それがどんなに困難かわかっている。自分が何もできないことに憤りもあるかもしれない。

「行ってくるよ。遠坂」

今はこの言葉だけで充分だ。

無責任な約束も、過剰な決意もいらぬ。

オレは遠坂に手を振って、ライダー達の元へと戻っていく。

遠坂はアーチャーの事で沢山思うところがある筈だ。

迷惑をかけられることもあったとは言え、頼りになる相棒だった。オレから見ても恰好いいと見惚れてしまう場面も沢山あった。

遠坂はあいつに命を救われ、そして、あいつに魔術師としての人生を奪われた。

【魔術師】 遠坂凜の死か……

「あいつはそれを……どう捉えていたんだろうな」

オレは何気なくその疑問を声に出してみた。

アーチャーの考えなど全くわからない。

桜に取り込まれる前から、あいつの行動はわけがわからなかった。だが、決戦の場に辿り着く時、桜の隣には必ずあいつがいる。

それだけははつきりとわかる。

「きつと、ケリってやつをつけなくちやいけないんだろうな」

オレ、ライダー、キャスター、イリヤの4人は教会の門を開けて、外に出た。

それを遠坂が見送る。

この戦いの最後の時が近付いている。

第35話 14日目② 「綺礼VS葛木」

Interlude in

「さて、ようやくあの妖物を退治することができたな。流石に手間を掛けさせてくれたものだ」

柳洞寺本堂の階段に腰掛けたアーチャーは、うっすらと笑った。

「桜は大丈夫なのか？」

本堂内に佇む桜に、階段下で直立不動の姿勢を保っているセイバーが問い掛けた。

「ええ。あと1日くらいなら問題なさそう。先輩もセイバーも、害虫駆除のお仕事、お疲れ様」

「私は殆ど何もしていない。アーチャーばかりが働いていた。私には向いていない仕事ばかりだったからな」

セイバーが生真面目に反論した。

「そんなことないわよ。それに、その間ずっと我慢してくれてたじゃない」

「ああ、本当はライダーを真っ先に殺したかっただろうに。マスターにこれ以上サーヴァントを取り込ませてしまうと、危険だったからな」

アーチャーも桜の言葉に同意した。

「でも、それもここまでよ」

「では、予定通りここから先は自由行動ということで良いかな」

アーチャーが桜に確認する。

「ええ」

桜はセイバーに向けて微笑みかけた。

「セイバー。あなたはどうしたいのかしら？遠慮なく言って頂戴」

「私も桜も、今までだって自分の思うがままに行動してきたし、これからは一層そうなる。お前にも、やりたいことがあるだろう。自分の好きなようにしていいのだ」

アーチャーが桜の言葉を補足するようにして、セイバーの意思を確

認する。

「……………」

セイバーは目を閉じてしばらくの間沈黙した。

「では、お言葉に甘えるでしょう。ライダーと……そして士郎と戦いたい。ケリをつける」

「わかったわ」

「では、我々は手出しをしない。場所も時間も自由にすればいい。今から奇襲しても構わないぞ」

「ふん。主の約定を違えたりはしない。ここで迎え撃つだけだ」

セイバーは薄目を開けて、アーチャーの言葉に反駁する。

「決まりだな」

「少し暇をいただこう」

「であれば、我々がここを去ろう。ゆつくりと月でも眺めるがいい」

「そんなことはしない。一人になりたいだけだ。神経を研ぎ澄ませるためにな」

「行きましょう。アーチャー」

「ああ」

セイバーをその場に残した桜とアーチャーは、境内の裏手に向かった。

「いいの？本当は先輩が……ふふ……先輩と戦いたいでしょ？」

「どうだろうな。何にせよセイバーの自由にさせてやるさ。ここまでは我慢してもらっていたのだからな」

「……………そうね」

「キミの方こそあの二人を自分の手で殺したいのだろうか？」

「そうですね」

桜は足を止めた。

「八つ裂きにしてあげたいわ」

振り返って、桜はアーチャーに微笑みかけた。

R t u r n

家に戻る頃には、空が僅かに白み始めていた。

「坊やはしつかりと寝ておきなさい」

キャスターが戻るなり、士郎に忠告する。

「そうですね。完全に徹夜状態ですから。まずは体を休めてください」

私もそれには同意見だ。

直接的な戦闘に士郎は関わっていないが、緊張を強いられる場面が続いたのは間違いない。

「イリヤもよ」

キャスターはイリヤスファイルも気遣った。

「はいはい、わかったわよ。まったく、キャスターったらまるでこの家のお母さんみたいね」

「!?・・・お・・・おかあさん・・・ですつて・・・」

キャスターが固まった。

口をあんぐりと開けたままで、怒ることすらできないようだった。

「どうせ寝ないんでしょうけど、あなた達もお風呂くらい入っておきなさい。ホテルでだいぶ暴れたんでしょう? 埃っぽいし汗臭いわよ」

「あ・・・あせくさい・・・!?!」

私も思わず絶句する。

ちらりと士郎を見て、フォローの意見を求めようとするが、

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて先に寝させてもらうな」

と言つて、自分の部屋に引っ込んでしまった。

「・・・意外と薄情なのですね」

と嘆息する。

だが、この状況は都合がいいように思えた。

私が話をしたいと思つていた三人だけの状態になったのだ。

「今のイリヤスファイルの発言を聞き流すのは、極めて遺憾ですが、私達は話し合う必要があると思いませんか?」

私はキャスターとイリヤスファイルに目配せをして、話を切り出すことにした。

「そうね。士郎がいなくなったしね」

イリヤスファイルが何かを悟ったのかあつさりと同意する。その様子を見て、キャスターは少し顔を背けた。

「……………ええ。そうね」

そう。

私達は共犯者になるのだ。

E t u r n

「士郎のご飯、昨日でお仕舞いだと思ってたけど、今日も食べられて幸せだったわ」

夕食を終え、イリヤは食器を片付けながら満面の笑みを浮かべていた。

「いつも以上に気合いが入っていて、美味しかったです。それに、キャスターもだいぶ腕を上げたのではないでしょうか?」

ライダーも食器を下げる係だ。

「いつもどおり、坊やの手伝いをしただけよ」

下げられた食器を洗っているキャスターは素気なく返したが、満更でもなさそうな顔をしている。

「実際、だいぶ上達したと思うぞ。手慣れてきたし、調味料の分量とかも感覚を掴んできたんじゃないか」

オレは食器や調理器具を片付けている。

「ありがとう。坊やのおかげよ」

この後は、いよいよ桜達の待つ柳洞寺、正確にはその地下へと向かう。

おそらくそこで全ての決着がつくだろう。

みんな無事でいられるかはわからない。

今、この瞬間は、かけがえのない時間だ。

「キャスター自身がすごく真剣だったからだろう」

そんな思いをオレは抱いているし、みんなもそうだろう。

既に準備は済ませている。

どのようにその場に臨むのか、どのように戦うのか。

勿論、相手の出方によっては臨機応変に対応しなければならぬが、基本方針は共有している。

「ここにいると家族になったみたいで、すごく楽しかったわ。お兄ちゃん」

イリヤが微笑みかけてくる。

家族か。

その言葉を聞いて、この居間に集い、この座卓を囲んだ面々を思い浮かべた。

以前は、藤ねえと桜だけだったが、聖杯戦争が始まってからは全く様相が変わったものだ。

「桜と藤ねえ以外に、ライダー、セイバー、キャスター、葛木、遠坂、アーチャー・・・そしてイリヤか」

この居間の卓を囲んだ顔ぶれの中で、遠坂と葛木は戦いの渦中から去ることになり、桜とセイバー、アーチャーは敵対することになった。

ここで彼らと賑やかに会話をしていた時には、そんなこと想像できるわけもなかった。

「母親はキャスターだな」

オレはうつかり口を滑らせた。

「ぼくうやくやく・・・」

キャスターの全身から禍々しい妖気が溢れ出し、居間にはささやかな笑いが満ちる。

やがて食事の後片付けが終わると、それぞれの部屋に戻って支度をすする。

オレ達は桜を取り戻し、アンリマユの誕生を阻止し、黒い聖杯による願いの実現を食い止める。

そして、みんなで生きてこの家に帰ってくる。

「大丈夫だ」

自分の部屋に戻り、支度を終えたオレは自分に言い聞かせるように呟いて、後ろ手に障子を閉めた。

廊下に出て、玄関へと向かう。

戦うために家を出る。そんなことは、これが最後になるのだ。

「さて、私もそろそろ自由に行動するのでしょうか。これだけ職務に忠実だったのだ。多少の我儘は許されるといふものだろう」

この教会の主の声が、暗い礼拝堂内に響き渡る。

堂内には神父以外には誰もいない。

従って誰かに向けられたものではない。

ただの独り言だったはずだ。

ギイイイイ・・・

重い扉を押し開けて、夜の帳が降りきった世界へと歩み出す。

門へと続く長い石畳みの歩道に、冬の済んだ空気を通して満月が煌々とした光を注いでいた。

その光の先には、一人の男が立っている。

「それで、何の用かね？昨日の夜も堂内の会話に聞き耳を立てていたようだが。あまりいい趣味とは言えないな」

神父は唇の片方だけを持ち上げて、軽く笑った。

「どこへ行く？言峰綺礼」

そこに立つスーツ姿の男、葛木宗一郎は、いつものように感情の籠らない声で、淡々と問い掛ける。

「答える義務があるとも思えんが、つい先日ドライブを楽しんだ仲だ。サービスしよう」

そう言いながら綺礼は葛木に近付いていく。

「私は柳洞寺に向かう」

「何のために？」

「私の求めてきた、『答えを生み出せるモノ』の誕生を祝うためだ」
「その過程で何を？」

「無論、邪魔する者を排除する」

綺礼は、神父服の内側に両手を差し入れ、黒鍵と呼ばれる代行者特有の細身の剣を、両手の指に3本ずつ挟み込む。

「お前が誕生を祝福するモノとは一体何だ？そして、お前が排除する

対象は誰だ？」

葛木は足元を踏み締め、両の拳を構えた。

「・・・知れたこと」

二人の距離があと五歩ずつでゼロになる。

「アンリマユと・・・」

ジャツ！

「衛宮士郎だ!!」

一息で間合いを詰めた綺礼が右手の黒鍵を逆袈裟で切り上げるのと、そう叫ぶのが同時だった。

「そうか。お前は最後には必ず敵になる男だと思っていた」

葛木はそれを大きく飛び退って避けながら、そのまま後退した勢いの反動を利用して、大きく横に動いた。

「お陰で、果たすべき仕事が見つけられた。無職では、許嫁いいなすけに顔向けできないから、お前には感謝しなければならぬのかもしれない」

その動きを読んでいたかのようになり、綺礼は殆ど先回りをするようにして、左手に持つ黒鍵を突き出した。

「ぬ!？」

虚を突かれた葛木はそれを体を捻って躲すが、僅かに右腕を掠めており、流血する。

「・・・どうやら見切られているようだな」

葛木はちらりと血が滴る腕を見て、呟いた。

「ランサーとの戦いを見ているからな」

綺礼は嘲るような笑いを浮かべて続ける。

「大人しく隣町でキャスターの帰りを待つていれば良かったのではな
いかね。そもそも、私ごときの邪魔をしたところで、戦果にはなるま
い。私自身、今、あの人外どもの戦いに赴いたところで、大したこと
ができるとは思っていないのだ」

「いや、お前は危険だ。きつと、状況を歪めてしまうだろう。それ
に・・・」

葛木は、スーツの内ポケットから小瓶を取り出し、中の液体を飲み
干した。

キンツ

投げ捨てた瓶が石畳にあたり、甲高い音を奏でる。

そして、葛木は再び両拳を持ち上げる。

「これは私の男としての矜持でもある。明日、キャスターに会う時に、私も戦ったと胸の中に秘めて・・・」

ダンツ！

防戦のみだった葛木が石畳を蹴って、一気に前に出る。

先程までとは比較にならない速さだった。

「誇りたいのだ！」

一気に間合いを詰め、綺礼の眼前で上体を屈めると、掌底で顎を打ち抜くように右腕を突き出す。

ゴツ！

綺礼は辛うじて両手の黒鍵を盾にして掌底を食い止めるが・・・
バギイイイ！！

持っていた6本のうち、4本の黒鍵の刀身が砕け散り、残った勢いで体が弾き飛ばされてしまう。

「ぐううつつ！」

倒れずに何とか着地した綺礼に、葛木は間合いをとらせることを許さずに、一気に攻勢に出る。

「ハッ！」

葛木の武術は、元々相手の虚を突くことを得意としており、変則的だった。だが、初見の相手にこそ有効なその戦法は、ランサーを通じて戦いを見ていた神父には通用しない。

ガツ！ドツ！ドンツ！

「ぐー・・・さつき飲んだのは強化の薬か・・・」

それを悟った葛木は、鍛錬と薬で強化された肉体、そして身に着けた格闘術に裏打ちされたシンプルな打突を中心とした攻撃に切り替えて攻撃を続けた。

逆に虚を突かれた綺礼は防戦に追い込まれる。

「そうだ。お前はここで朽ちるがいい」

葛木は攻撃の手を緩めない。

あの細剣は、投擲にも使えるものと予測していた。大きく間合いを取られれば、立場は簡単に入れ替わるだろう。

「・・・たかが暗殺者風情が、舐めるな！」

ガッツ！

そう叫んだ綺礼が、葛木の放った胴体への蹴りに、自分の蹴りをぶつけると、さらに力を加えてねじ込むようにして力を乗せた。踏ん張る足と、蹴り足の両方がうっすらと輝いている。

「なにっ!？」

力負けする形になった葛木は、たたらを踏んで大きく後退した。

強化魔術が込められた薬を飲んだ葛木の身体能力は通常の間人を遥かに凌駕するものになっている。それを上回るということは、神父も魔術を使ったということだろう。

「ふふ。あまり得意ではないが、多少の魔術の心得はある。それに」

綺礼は左袖を捲り上げた。

そこには無数の魔術刻印が刻まれていた。

「魔力の貯蔵も潤沢なのでな」

にやりと綺礼が笑った。

「貯蔵^{ストック}だけあっても、使う場面がなければ意味はない」

葛木は三度目の戦闘体勢をとる。

「それにしても、こんなに面白いとはな。この戦いがではない。葛木宗一郎という存在そのものがだ。そもそも車中であのような話をしたこと自体、私自身も意外だったのだがな」

「あの時、お前が気紛れで車に乗せて帰らなければ、私はお前を危険視することもなかったし、こうして立ち塞がることもなかった。その事を悔いることはないのか？」

「愚問だな。私はその時、したいと思ったとおりの行動をしたまでだ。自身のその時の選択に後から難癖をつけるような脆弱な精神では、この戦いに身を投じる資格もないし、どのみち生き残れん」

「そうか、どうやら我々は気が合うようだな」

葛木もまた、自ら選択した行動に一片の悔いもなかった。

「そういうことだな。私は生まれた時から何も持たず、お前は生まれ

た直後から何も持たせられなかった。お互い朽ち果てた殺人者同士だ」

「どうやって調べたのかはわからないが、神父は葛木の生い立ちも把握しているようだった。」

「そして、この男の言う事は正しかったのだろう。」

「・・・だが、今は違う。」

「折角の友人を今日失ってしまうかと思うと、堪らない幸福を感じるな」

「生憎と私はそういう歪みは持ち合わせていない。そして・・・私はまだ朽ちていない」

「ザッ」

石畳に地を蹴る音が残り、葛木が少し弧を描くように間合いを詰める。

「それをキャスターとの出会いで気付かされた!」

「確かにそうだな。お前は充分にお盛んだ!」

「一時、後退させられた葛木だったが動じなかった。」

「接近して戦うしかないという選択肢の狭さは、迷う余地がないというところでもある。」

「たとえ神父も自身を強化することができても、自分はキャスターによる強化を信じて戦うしかないし、神父の魔術がキャスターの魔術を上回るとは思えない。」

「はっ!!」

裂帛の気合を込めた正拳突き。

「ガッ!」

「綺礼は黒鍵を取り出そうとしていたが、それが間に合わないことを悟り、結果的に両腕を交差させて防がざるを得なかった。」

「ぐっ・・・」

「たたらを踏む神父に対して、葛木は続け様に拳や蹴りを繰り出していく。意識して、一撃一撃に重みを持たせることで、力と力のぶつかり合いになるようにする。」

「ゴッ!ガッ!」

正面からの衝突であれば、強化魔術の質の分、自分に分があると踏んでいた。

だが、

スウ・・・

突然、視界の中にいた筈の神父を見失ったような感覚に襲われた。ドツツ!!

気が付いた時には葛木は大きく弾き飛ばされていた。

ザザアア・・・

葛木の体が石畳の上を滑るように転がったが、何とかすぐに立ち上がり体勢を立て直す。

殆ど本能で片腕を防御に回したため、大きなダメージを負うことは避けることができた。

「肩か・・・」

見ると神父は葛木に反撃した体勢のままだった。

両足を大きく開き、腰を落として体を捻っており、肩から背中がこちらを向いていた。

体を捻ることで葛木の拳を躲しながら懐に入り、肩で弾き飛ばしたものと推測できた。

「そちらの攻撃が少し単調になったのでな」

顔の半分だけをこちらに見せて、神父は笑った。

いずれにせよ、決定的な間合いができた。

「ここからは、私が攻める番だな」

ジャツ!

神父が黒鍵を左右1本ずつの計2本投じてくる。

案の定というべきか。

やはり投擲用としても使える武器だったのだ。

アサシンが投げる短剣に近い速度があるだろう。

「ぬうううー!」

ギン!ギンツ!

葛木は強化されている拳で、1本弾き、1本を辛うじて躲す。だが、間合いを詰められない。

「使い尽くすまで、耐えられるか？」

先程の攻撃の質から推測すると、神父もまた特殊な武術の使い手と知れた。徒手での戦闘も五分だろう。

投擲による攻撃で消耗した状態で、肉弾戦になるのはかなり分が悪いと思われた。

「遠慮なく外から削らせてもらおうぞ。衛宮切嗣との戦いとは違って、こちらに距離の分があるからな」

神父が両手に4本ずつの細剣を構えた。

衛宮切嗣？

そうか、衛宮の父親とこの男は戦ったという話だったか。

葛木はそんなことを思い出しながらも、狙いを定めさせないために、神父を中心に円を描くように駆け出す。

「お前の衛宮士郎への拘りは、衛宮切嗣への執着から来ているのか？」
戦いの最中ではあったが、問い掛けずにはいられなかった。

「そうでもあるし、それだけでもない」

神父は葛木の動きを冷静に目で追っている。

「衛宮切嗣と私の共通項は、自己というものが決定的に欠けていた点だった。それは、確かに衛宮士郎も同様だろう」

「衛宮は確かに、自分に対する意識が希薄だ。だが、今は違う。それはお前も分かっているのだろうか？」

葛木もまた、衛宮士郎という自分の生徒が学校生活を過ごしていた時に感じた性質と、この戦いが始まってからの変化を感じ取っていた。

「そうだ。奴は、衛宮切嗣に埋め込まれた『正義の味方』という空想を核としていただけのロボットだった。だが、変わった」

綺礼の周囲を大きく回った葛木は、丁度90度立ち位置を変えていた。元々は、綺礼が教会を背にし、葛木が正面に教会を見ていたが、今は二人の横に教会がある。

「では、もはや、お前が執着する衛宮士郎ではないのではないか？」

葛木は当然の疑問を口にする。

「そうかもしれない。だが、ここにはもう一人の衛宮士郎がいた。私

はあれこそが衛宮切嗣のなれの果てだと感じている」

綺礼の言う男は、アーチャーのことだと葛木は察した。

「その男も、今となつては変わり果ててしまったのではないか？」

「それはまだわからん。だから、確かめたいのだ。だが、私の優先事項はアンリマユの生誕。それは、私が抱いてきた疑問を解消する答えを示してくれるだろう。それを阻害する者は排除するだけだ」

「よくわかった」

神父は、葛木の回り込む動きに対して警戒はしていたものの、攻撃を仕掛けては来なかった。あの剣の残数はそれほどあるわけではないと推測する。

「お前が本当に何も持ち合わせていない男だということをな！」

葛木は神父に向けて、駆け出した。

「そのとおりだ！私は何も持っていない。だから、お前たちが羨ましいー！」

綺礼はその動きを待っていたように、黒鍵を先ず2本投じた。

ギギンッ！

この投擲を予測していた葛木はいずれも拳で撃ち落として、なおも接近する。

「ちっ!?!」

神父は後退しながら、葛木の接近を食い止めるべく、さらに4本の細剣を投じてくる。

接近するかのように見せた葛木だったが、一旦その場に止まり、落ち着いてそれらを捌いた。

神父が手にしている剣は2本のみ。残数は精々数本と見込んでいた。

「ふふ」

ジャッ

だが、神父はあっさりと残りの2本を投げると、さらに両手に4本ずつ。計8本の剣を間髪置かずに放ってきた。

「なにっ!?!」

都合10本を捌かなくてはいけなくなった葛木だったが、流石に対

処しきれなかった。

ズンッ!

1本の剣が葛木の腹を貫いていた。

「ぬう……」

痛みだけでなく、体全体が固まる感覚になり、思わず膝が折れそうになるのを、葛木は辛うじて耐えた。

しかし、決定的な傷を負ったことは間違いない。

「決めさせて貰うぞ」

今度は、神父が一気に間合いを詰めてくる。

その手には再び4本の剣が握られていた。

「くっ……」

万時窮すに近かったが、それでも葛木は諦めるつもりはない。

何とか神父の攻撃の中に反撃の余地を見出そうと、敵の動きだけに集中する。

その時だった。

「何やってるのよ、あんた達!?!」

「!?!」

葛木も綺礼もその闖入者に気が付いた。

しかし、葛木宗一郎は、意に介さなかった。

眼前の敵である神父への集中を途切らせることなく、注視し続けた。

しかし、綺礼はそうではなかった。

「凜!?!」

葛木は好機を得た。

深手を負い、圧倒的に不利な状況になってはいたが、垣間見えた勝機を見逃すような真似はしない。

「はああっ!!」

約10歩の間合いを一気に詰める。

「しまったっ!?!」

神父は、咄嗟に両手の黒鍵で迎え撃とうとするが、葛木のほうが先んじていた。

反撃のために動いた神父の両手首を拳の打突で潰す。

カランツ

細剣が落ちる音が響き、

ガッ！

左の掌底で神父の顎を、

ゴッ！

右の拳でその顔面を打ち抜いた。

「がああああっ！」

衝撃で神父の体は大きく飛ばされて石畳に打ち付けられた。

殆ど致命傷に近いダメージを与えた手応えが葛木の手には残る。

だが、この程度で終わる相手ではない。

「ぐっ……」

葛木は、腹に刺さったままの細剣を抜いた。刺さっていたことによつて止まっていた血が溢れてくる。

それに構わず、葛木は細剣を構えて倒れた神父の元に走り、馬乗りになった。

「私は己^{おの}が為の最初で最後の殺人を犯そう!!」

「ふ。空っぽの人間では勝てんということか……」

葛木宗一郎はその剣を、全身全霊の力を込めて振り下ろした。

神父の武器であった黒鍵が、その主の心臓に音も無く突き立てられた。

第36話 　　14日目③　「Battle of
Knights」

Interlude in

「綺礼っ!!!」

倒れている綺礼を目掛けて凜が駆け寄ってくる。

葛木は、持っていたハンカチとベルトで自身の止血をしながら、自分が心臓に剣を突き立てた神父の傍らに立っていた。

「何だって、こんなこと!?!」

凜は綺礼の頭を抱えて、双方に問い掛けた。

「・・・ふ・・・私は、衛宮士郎達を殺し、アンリマユを誕生させるために、柳洞寺に向かおうとしたのだ」

驚異的な忍耐力で辛うじて意識を保っていた綺礼が答えた。

「ぼ・・・」

喋れば喋っただけ吐血する。

「何ですって?何だってそんなことを・・・て言うか、あんた何でこの状態で喋れんのよ・・・救急車・・・救急車を・・・」

「・・・無理やり喋らせているのはお前のほうだぞ、凜。まあいい。どのみちもはや助かるわけもない。救急車は・・・そっちの男に使わせたほうがいいな」

綺礼は葛木に目を向けた。

「なぜだ?・・・なぜ・・・遠坂の出現に、お前ほどの男が戦いの最中で注意を削がれたのだ?遠坂はお前にとって不利になる要素ではなかったはずだ」

葛木とすれば、綺礼程の手練れがあんな隙を見せたことが信じられなかった。

「・・・ふ。敵が現れたと認識したのだ。私は凜の父親を殺した。だから、凜はいずれ必ず私の敵になるという意識があったのだろう」

「はっ。」

凜の混乱は拍車がかかるばかりだった。

「……あ……あんたが父さんを……？そんなこと今さら言われたつて……」

綺礼は、砕かれて動かない手を持ち上げて、凜の頬に触れた。

「……事後処理は、お前がこの土地の管理者として上手くやれ。下手するとその男が殺人者として捕まるぞ」

この男がよく見せる片頬だけを持ち上げる皮肉っぽい笑いを浮かべた。

程なくして、凜の頬に触れていた手がゆっくりと地に落ちる。

「……全く……道化以外の何物でもなかったな……」

そう自嘲して目を瞑ると、冬木教会の神父は事切れた。

「……もう何が何だか、わけがわかんないわよ……」

遠坂凜の腕の中で、言峰綺礼は息絶えた。

凜の父親を殺したこと、衛宮士郎達を殺そうとしたこと、アンリマユが出てくることを求めたこと。全て悪事と言ってよかった。

だが、凜はまだ事態を受け止め切れていなかった。

「遠坂。この男は、お前の保護者代わりだったか……お前には負担をかけることになってしまったな」

貫かれた腹を押さえながら、葛木は詫びる。

「そんなことは別にいいのよ。こいつには、殺されるだけの理由が間違いない。父さんの仇だったこともわかった。そして、あなたがキャスターや衛宮君のために戦ったこともわかっている」

実感なんて全然ないけどね。

と、空虚な笑いを浮かべて凜は呟いた。

「あなたのほうこそ大丈夫……なわけないわね。救急車を呼ぶから、さっさと病院に行きなさい。後のことは私がなんとかするわ」

凜は綺礼の遺体を抱えあげて、礼拝堂へと歩を進める。

「遠坂。泣きたいときには泣いてもいいのだぞ。お前の年齢で、人間はそこまで強くなくてもいい」

どこまでも己の責任を果たそうとする少女に、余計なことだわかっていながらも葛木は思わずそう声を掛けた。

「……………」

少女は何も言うことなく、唇を噛みしめて堂内に入ると、さらに奥に進んでいく。

電話の元へと向かっているのだろう。

「……遠坂……すまない。救急車を呼ぶのは待ってくれ」

ふと何事かを思い立ったか、葛木は凜の背中に声を掛けた。

Interlude out

Return

「久しぶりにこの階段を登ることになるわね」

キャスターが少し感慨深そうに言った。

彼女は十日前までは、この上の柳洞寺に住んでいたので始終この階段を使っていたのだろう。

柳洞寺に向かう途上の私達は、長い石段の下まで辿り着いていた。

「状況は把握できていますが、万が一ということもあります。私が先行しますので士郎は続いてください」

「ああ」

私が少し先行し、士郎が続く。

キャスターとイリヤスフィールは少し離れて後をついて来る。このあたりは事前に打ち合わせていたとおりだ。

長い石段を登りきり、山門を潜ると視界が開ける。

「士郎。敵がいます」

その敵はこの寺の本堂を背後にして、凜として立っていた。

視線の先にいる彼女を見据えたまま、私は士郎に状況を伝える。

「そうか」

私達としては、開けた境内では戦いたくはなかった。

セイバーの強力な宝具を存分に振るわれると対処は難しい。さら

にアーチャーに狙撃されれば、殆ど勝ち目がなくなる。

しかし、私達はキャスターの遠見の魔術でこの山の状況は、予め把握できていた。

「やはり一人だけですね」

そう。

境内で待ち構えているのは、セイバーだけであり、アーチャーや桜は山の地下洞内にいる。

普通に考えれば戦力を割く意義は薄いように思われるが、私はこの配置については直感的に納得していた。

「・・・きつと、彼女の意思なのでしょう」

その少女は黒い剣を地面に突き立て、柄の上に両手を重ねている。

直立して、真つすぐ正面を見据えた瞳に揺らぎはない。

私よりもかなり小柄で、可憐と言ってもおかしくない容貌でありながら、威風堂々としている。

そして、闇に吞まれてもなお、美しく清廉だ。

「よし、予定どおりキャスター達はここから別行動だ。頼むぞ」

後方で士郎が、キャスターとイリヤスフィールに合図を送る。

「ええ。坊や達もしっかりね」

「行ってくるわ。頑張ってるね。シロウ」

キャスターもイリヤスフィールも、それだけを告げて、石造りの道を外れ、森の中へと分け入った。

それを士郎が少し心配そうに見送った。

「・・・向こうも心配だけど、こつちも大変なんだよな・・・」

士郎が山門を潜り、私の横に並びかけながら、セイバーを見据えた。きつと複雑な思いを抱えているだろう。

「士郎。それにライダー」

セイバーの落ち着いた声が境内に響く。

「ここには、私しかいない。決着をつけましょう」

その言葉に偽りはないだろう。

変貌したセイバーを見るのは、三度目だ。

過去二度は殆ど感情というものを感じさせなかったが、今の言葉か

らは明らかに彼女なりの意思が伝わってきた。

言うなれば、『拘り』^{こたわ}というものだろう。

「セイバー。そこを退いてくれ。オレ達は桜を救いたい」

士郎が一步踏み出して、彼女に訴える。

「聡明なあなたらしくないですね」

セイバーの反応には僅かながら苛立ちが見て取れた。

「それはもはや叶わない。あなたはそういう選択をしたはずだ！」

そう叫んで、セイバーは剣を構える。

「士郎」

私は臨戦体勢に入ったセイバーに応じて杭剣を構えながら、少年の表情を確認する。

「ああ。わかっているさ。オレはお前と生き残ると決めた」

そこには私が信じる男がいた。

「セイバー。あなたは私達にとって邪魔な存在です。それ以外の何物でもない」

私はバイザーに手を掛ける。

「今、ここで斃します！」

カラントツ・・・

放り投げたバイザーが地に落ち、軽い音を奏でるとともに、私はセイバーに向けて駆け出した。

解き放たれた魔眼の魔力がセイバーを包む。

「・・・む・・・」

刹那、石化の兆しが見えたものの、

「・・・この程度の呪いが通用すると思うなっ！」

セイバーが自身に纏わりつこうとする呪縛を振り払うように、剣を一振りするとその呪いは霧散する。

だが、それは靄のように依然として、セイバーの周囲を覆う。

「思った以上に厄介な・・・」

私の魔眼の呪いは、完全に石化できなかつたとしても相手に重圧をかけ続け、あらゆる行動に負の影響をもたらすことができる。

「とは言え、この状態に持ち込んでも、白兵戦で勝てるとは思っていま

せんが・・・」

「投影、開始！」

後方では、士郎が武器を投影している。

「はあっ！」

呪いの影響で、一瞬反応が遅れたセイバーに対して、私が初撃として選択したのは強化した足での蹴りだった。

先ず、彼女を弾き飛ばして次の攻撃に繋がらなかった。

ドンツ！

だが、私の狙いとは裏腹に、セイバーはその場で踏ん張って私の蹴りを両籠手で食い止めた。

それだけでなく、私を逆に弾き飛ばしていた。

「くうっ!?!」

私は飛ばされながらも辛うじて体勢を立て直し、彼女の次の攻撃に備える。

とは言え、改めて彼女の規格外の強さに瞠目させられる。

魔眼の呪いの影響があつてなお、あの反応と防御力、そして膂力ですか。

「ライダー・・・あなたさえいなければ・・・いいえ、今となっては詮無いこと・・・」

眩きながらセイバーは、その場で剣を脇に構える。

間合いを詰めることすらしない。

しかし、その剣には強烈な魔力が宿っていた。

宝具ではないにせよ、十分な破壊力を宿した剣を振るうことによる魔力の放出。

私も士郎もあれをともに受ければ一溜りもないだろう。

彼女にはこれがある。

だが、

「む!?!」

ゴウツ!

想定外の攻撃を肩口に受けたセイバーは、溜めていた魔力を霧散させた。

「弓道の経験がこんなところで生きてくるなんてな・・・」

セイバーの攻撃を妨害したのは、士郎の放った一撃だった。彼女の肩口に突き立ったのは、弓から放たれた矢であり、そしてその弓を構えているのは士郎だ。

弓も矢もアーチャーの使っていたものを模倣したものだ。

「はっ！」

士郎の攻撃で僅かに生じたセイバーの隙を狙って、私は弧を描くようにして跳び上がり、セイバーに向けて杭剣を振り下ろす。

「甘い！」

だが、この攻撃に対してもセイバーの反応は早かった。

受けに回るところか、私の攻撃を迎え撃つようにして、剣を横薙ぎに払いにきた。

「!?」

ギイイインツッ!

防御しないと危険だと判断した私は、咄嗟に両手の杭剣を盾にしてセイバーの攻撃を防いだ。

これにより再び弾き飛ばされた私は、今度は間合いを詰めてくるセイバーから距離を取る為に大きく横へと跳んだ。

幸い速さでは、私のほうに圧倒的な分がある。

ゴツ!

なおも私を追おうとするセイバーに再度士郎の矢が襲うが、予測されていたこともあり、あっさり彼女に躲されていた。

「士郎の援護がなければ、何もできないのですか？」

セイバーが私を揶揄してくる。

私に対して嘲ったり、煽ったりしようという意図は感じない。むしろ、苛立ちを覚えているかのようだ。

私は、『そのとおりです』という本音を押し殺して、違う言葉を投げ掛ける。

「羨ましいのですか？」

一旦距離を取った後、再び私は彼女に接近しながら、騎士王たる少女に問い掛ける。

少女の白い顔が僅かに朱く染まる。

「あなたは、結局一度も彼に助けてもらえませんでしたね」
当たり前だ。

彼女にはそんな必要がなかったのだから。

それだけ彼女は強かつたし、今も充分に強い。

私のような二流のサーヴァントでは太刀打ちできないほどに。

今、私が士郎に助けられているのは、私が弱いからに他ならない。

それでも、私はこの言葉を敢えて彼女に投げ掛けた。

「当然だろう！英霊が主マスターに助けられるなど、もつてのほか。己が役割を果たせていないということではないか！」

私は先ほどもどまどとは違い、彼女を攻撃するように見せ掛けて、横を擦り抜ける。

ザッ！

セイバーの黒い剣が私を追って振られるが、空を切った。

「そんなだから、あなたは士郎を私に盗られたのですよ」

ガッ！

士郎の放った矢がセイバーに命中するが、セイバーは左の籠手を振るっただけで、弾かれる。

初撃は意表を突けたが、もはや有効打にはならないだろう。

「何の話をしているのだ！」

再び腰だめに構えたセイバーが、剣に魔力を纏わせる。

士郎の矢では、次の攻撃を妨げることにはできない。

「男女関係の纏もつれについてでしようか」

私は彼女の剣から繰り出される強烈な魔力放出に備える。

「戯言たわごとを！」

——コウ——

横薙ぎに振るわれた黒い閃光は、かなりの熱量と破壊力を伴って、私の元へと迫る。

だが、タイミングは私の思惑どおりだ。

「ふっ！」

すんでのところまで跳び上がって回避する。

そして、そのまま本堂の軒先に魔力で強化した足をつくると、一蹴りでセイバーへと躍りかかる。

ガッ！

両手の杭剣を交差させて突っ込んだ私に対してセイバーは剣を盾にして押し止めようとした。しかし、魔力放出直後の状態で僅かに体勢が崩れていたこともあり、踵で地面を削りながら後退する。

この戦い……いや、この聖杯戦争全体を通して、初めて私は彼女を押し込んでいた。

「む……！」

「はあああっつー！」

その勢いのまま、間合いを開けさせることなく、左右の杭剣を連続して叩きつけていく。

ガッ！ギンツッ！ギンツッ！

しかし、それも長くは続かなかった。

私の攻撃を捌きながらも、セイバーは徐々に体勢を立て直していき、後退する距離が短くなっていく。

そして、

ガンツッ！

私の杭剣が彼女の胴に直撃した。

しかし、黒い鎧を貫き中の体を傷つけたものの、それは軽微なものでしかなかった。

「やはりその程度ですか」

セイバーは、自身の傷を物ともせず、私の体を袈裟切りに斬り下げた。それは、あのアインツベルンの城で私に振るわれた剣の軌道と同じだった。

シユウウ——

血飛沫が空を舞う。

「くううっ……」

すんでのところで、跳び退った私だったが、躲し切れなかった。体には振るわれた剣の軌道どおりの傷跡が残った。

かなりの深手だ。

セイバーは、こちらの攻撃が直撃しても鎧で軽減すればさほど大きなダメージにはならないことを察して、相打ち狙いに切り替えてきたのだ。

さらに踏み込んでくるセイバーに対して、私は防戦一方になった。だが、受けに回ると力の差はより歴然とする。

私は体の至る所に無数の傷を負っていく。

「……まずいですね」

私としては、唯一勝っている速さを活かして翻弄し、徹底的にヒット&アウェイで攻勢に回リたかったが、既にその状態を覆されてしまっていた。

「ライダーー！」

ドンツ！

私の窮地を察した士郎が、咄嗟の判断でセイバーの足元の地面に向けて矢を放った。

これにより地面が抉れ、ほんの僅かにセイバーの攻勢が緩んだ。

私は、大きく後退してセイバーと距離をとる。

だが、それは彼女がああ魔力放出を存分に揮えるということでもある。

「投影、開始！」
トレス オン

士郎が詠唱を始めた。

私も次の展開への準備に入る。

一方、セイバーは剣に魔力を収斂させていく。

「いけー干将ー莫邪ー！」

士郎の行動は早かった。

投影し慣れた武器である二振りの夫婦剣。

それを矢として変成し、手にしていた弓で放ったのだ。

二条の白と黒の矢は寄り添うようにして、一直線にセイバーに迫る。

「なにっ!？」

セイバーは咄嗟に魔力を纏った黒剣を振るった。

ズンツ・・・!!!

「くっ……」

残ったのは、両の籠手を盾のようにして立ち尽くすセイバーだった。

黒と白の矢は、セイバーの黒い閃光を消滅させ、彼女にまで届いたようだが、最終的には彼女の鎧によって防がれていたようだ。

だが、それで構わない。

この攻防は、次の行動への布石なのだから。

「――宝具！」

士郎が作り出した僅かな時間で、既に彼の傍まで駆け寄っていた私は、地面に手を付いて眼前に召喚陣を出現させる。

「……でくるかっ!？」

宝具の準備に入った私の様子を見て、セイバーが一気に魔力を収斂させていく。今度のそれは、これまでとは桁違いの魔力だった。

私の宝具に対しては、彼女も宝具をもってしてしか対抗し得ないことをわかつている筈だ。

そして、勿論、単純にぶつかり合えば私が負け、消滅するしかない。

「トレス、
投影、開始！」

士郎が私と並ぶようにして傍らに立つ気配を感じた。

「信じています」

私は必ず少年が守ってくれると信じるだけだ。

「熾天覆う――」

少年は突き出した自分の右手を左手で支える。

「――約束された――」

少女は膨大な魔力を纏った黒い聖剣を上段に振りかぶる。

「――七つの円環ツツ!!!」

少年と、そして私の前方に美しい4枚の花弁が咲いた。

それは私と士郎を守る大事な盾であり、命綱だ。

「――勝利の剣ツツ!!!」

少女が振り下ろした剣から、黒い閃光が放たれた。

それは荒れ狂う奔流となって、凄まじい勢いで行く手を遮る花弁に襲い掛かった。

ズシャアアアアアア——

その閃光は圧倒的な破壊力で花卉に喰らいつく。
美しかった花卉は1枚また1枚と無残に散っていく。

「ぐあああああつっつ！」

士郎が必死に私たちの盾を維持しようとするが、堪えきれなくなる。

猶予はない。

「^{ベルレ}騎英の——！」

私は召喚陣に飛び込むようにして天馬を喚び出しながら、その背に跨った。

黄金の手綱を私は固く握りこむ。

「^{フォン}手綱ツツ——!!!」

渾身の魔力と、そして思いを込めて真名を解放すると、呼応するようにして天馬が大きく一啼きした。

「頼むっ！ライダーッ！」

私の背中に少年の声が届く。

「はい。士郎」

口の中で噛み締めるように返事をして、私達は一条の光となって黒い閃光に真正面から突っ込んでいき……

ゴウツツ!!

そして、眼前の黒い奔流とぶつかり合う。

ザアアアアアアア……

自分の周りだけが白く、周囲は完全に闇に閉ざされていた。

滝の中に飛び込んで轟音の世界に永遠に飲み込まれたような感覚を覚える。

だが、それは刹那のことだったのだろう。

世界が開けた時、眼前には驚きに目を見開いた騎士王の顔があった。

ドンツツツ
!!!!!!

凄まじい速度と破壊力を持って、私とペガサス白い彗星はセイバーに直撃した。

Interlude in

「ここを確認してみろ、桜。空気が通っているのがわかるだろう?」

アーチャーが一見何の変哲もないように見える洞窟の岩肌に手を翳した。

「え?ああ本当ですね。魔術的にカムフラージュされているだけなんだ」

アーチャーに倣って手を翳すと、桜にも風が抜けているのを感じられる。アーチャーと桜は、そのままその岩に近づくとスルリと通り抜けることができた。

「ここを抜けてくると、大聖杯にもかなり近い。正面から来ると思い込んで待ち構えているとどうなる?」

「気付いたら大聖杯を壊されてるなんてこともあるかも知れませんがね」

「そうだな。凜ならばこのルートを知っているかもしれない」

だとすれば、士郎達に伝えられている可能性があるだろうと続けた。

「一応、注意しておいたほうがいいですね」

「そうだな。まあ、奴らのほうから戦力を分散するとは考え辛いが、アソリマユの誕生阻止を最優先と考えてるなら有り得なくはない」

「だけど、よくこんなの気付きましたね。洞窟の構造から推測したんですか」

少し呆れたように桜が尋ねる。

「そんなわけがないだろう。人工的な建造物ならわかるかもしれないが。単に空気の流れがおかしいことに気付いて、地道に調べただけだ」

「そういうところも先輩らしいですね」

クスリと桜が笑う。

それは、普通の女の子の仕草のようだった。

「ん？」

ガチャガチャ・・・

細い洞窟の先から微かに何か近付いてくる音がした。

「あ、当たり前ですかね？」

ここを通って士郎達が来るという先程の仮説が的中したのかと、桜は考えた。

「どうだろうな・・・」

弓兵の目は遙か遠くまで見渡せるが、曲がりくねった洞窟内ではそうもいかなかった。

「あれ、骸骨ですか？」

二人の視界の先に現れたのは、鎧を纏い、剣を手にした骸骨だった。それが、一体、また、一体と増えていく。

「そうだな。キャスターの竜牙兵だろう」

アーチャーはそう推測した。

コルキスの魔女たるメディアは、竜の牙から数多の骸骨兵を生み出したという伝承がある。

「気味悪いですね」

桜が不快そうに顔を歪めた。

「本当にキャスターが率いてきているかは怪しいが、どちらにせよ片付ける必要があるな」

「じゃあお願いしますね。先輩。カッコいいところを見せてください」

「ああ、そうか。私がまともに戦っているところは見たことがないんだったな」

「ええ」

「了解した。マスター。とは言え、ここではあまり派手なことではできませんな」

空洞内の他の箇所ならともかく、ここは狭い通路だ。

強力な宝具を使えば、忽ち崩壊するだろう。

「準備運動がてら地道に潰すのでしょうか」

アーチャーは、白と黒の双剣を生み出し、眼前に迫り来る異形の兵に対峙した。

Interlude out

Return

ガラ・・・

私は体に積み重なって乗っていた木々を払いのけて這い出すと、何とか自由を取り戻した。

「・・・セイバーは・・・？」

ボロボロの体に鞭打って立ち上がり、周囲を見回した。

私の宝具【ベルレフオーン騎英の手綱】は、士郎の助けにより、【エックス約束された勝利の剣】を突破することに成功してセイバーに直撃した。

勢いはだいぶ減衰させられていたが、私と彼女は一塊りになって、柳洞寺の本堂から居住棟を貫き、山林に立つ数多の木々を薙ぎ倒したところで止まった。

私自身も元々傷を受けていたことで、数々の衝撃に耐えられず天馬から投げ出されて、森の中に転がることになった。

「・・・この先にいるはず・・・」

倒れた木々が森の中にあたかも通路を作り出したかのようになっていた。

ずるずると殆ど動かない左足を引き摺るようにして、私は歩く。

かなりの手応えがあった。

しかし、おそらくセイバーは霊核を破壊されるまでには至っていない。

「何としても、私自身の手で・・・」

セイバーに止めを刺す必要がある。

回復する可能性もあるし、何よりこれ以上、士郎に会わせたくなかった。

程なくして、彼女を見つけられることができた。

少女は一本の大木に寄りかかり、座り込むようにして倒れていた。

「・・・シロウ?・・・」

意識が混濁しているのだろうか。

虚ろな目をしたセイバーは、事もあろうに私に向けてそう問い掛けてきた。

「残念ながら違います」

黒い鎧のかなりの部位が破損しており、傷だらけだ。

だが、致命傷ではない。

私は杭剣を手に、彼女に近付いていく。

「・・・ああ・・・あなたですか・・・」

セイバーは私を認識して残念そうに呟いた。

「止めを刺させてもらいます」

「まさか、あなたに負けるとは・・・いいえ・・・私は負けるべくして負けたのでしよう・・・」

黒い騎士王たる少女は自嘲するような笑みを浮かべた。

「・・・思えば、あの日、あの時の判断ミスが全てでしたね・・・」

セイバーが言っているのは、柳洞寺でアサシンに土郎が襲われた時、彼女が私を残してアサシンを追った事だろう。

「・・・ええ。あれが無ければ、土郎の隣にいるのはあなただったでしょう」

一方で、私は慎二にいいように使われ、惨めな弱小サーヴァントとしてとうの昔に消えていた筈だ。今日、この時まで生き残っていられたとはとても思えない。

「そして、土郎はもつと簡単に勝者になっていたかもしれませぬ」
そう。

土郎にとっては、セイバーが傍にいたほうがずっと良かっただろう。私と関わってしまったから、彼はあんなにも苦悩し、傷つくことになった。

「・・・そうですね・・・私ならばきっと彼と正道を歩んで勝ち残っていたことでしょう」

彼女なりの矜持から出た言葉だったのだろうが、充分に説得力があった。

それだけ彼女は強く、そして真つ直ぐで誠実だった。

「ですが、現実には違います。今は、私が士郎と共に歩み、あなたは士郎に敵対し、そして敗れた」

それがただ一つの事実だ。

私は彼女を見据えて、それを突き付ける。

もしかしたら、キャスターの魔術と聖杯があれば、彼女を元に戻す方策があるかもしれない。

だが、

「私はあなたを殺します。士郎を誰にも取られたくない」
そう。

これは私の、女としての欲望だ。

「もし、違う世界で出会ったら、私を百回殺せばいい」

私は両手で一本の杭剣をきつく握りしめて、大きく振り上げた。

「ですが、この一回だけは譲れません」

「……それなら、遠慮なくあなたを千回殺しましょう」

少女はうつすらと微笑んだ。

「……シロウを頼みます」

それは、あまりにもこの少女らしい言葉だった。

セイバー、あなたはどこまでもあの少年の騎士を務めようとした。

もつと素直に女として振る舞ってもよかった筈なのに。

私は最期の一撃を振り下ろした。

心臓を破壊した確かな手応えが両手に伝わってきた。

「……だから……あなたは駄目なのです」

少女の魂が私の手の中で、儚く消えていった。

第37話 　　く14日目④　　「清なる願い」

Interlude in

キャスターは空中浮遊を使い、イリヤを抱えて飛んでいた。

「あれで、多少の時間稼ぎにはなるでしょう」

竜の牙を使って30体ほどの骸骨兵を生み出したキャスターは、通路を通って洞窟内に入るよう指示を終えると、すぐに元来た道を引き返しつつある。

「竜牙兵って一体一体がかなり強いんでしょう？それだけで倒せないのかしら？」

キャスターに抱えられたイリヤが顔を上げて尋ねた。

「英霊相手よ。期待していないわ。私達から目を反らす時間を作れば充分よ」

二人がしばらく森の上を飛ぶと柳洞寺の裏手にある大きな池に辿り着いた。

「ここね」

「ええ。ここが表向きの聖杯戦争の目的地ということになるわ。そしてキャスター。あなたの願いもここで叶えられる」

「・・・そうなのよね・・・」

その言葉にキャスターの表情が翳る。

「おもしろい私を恨むがいいわ」

キャスターは絞り出すように、銀髪の少女に告げた。

「言ったでしょ。私はそもそも聖杯として作られた。アインツベルンが負けた以上、願望機として使われる運命なのよ。今さらあなたを恨んだりしないわ」

素っ気なく、イリヤは断言した。

実際にそれは、聖杯戦争が始まるかなり前からこの少女が固めていた覚悟だった。

「それに、私を真っ当な願望機として使えるのはあなたしかいないわ。」

桜達に雑に使われて、世界をわけのわかんないことにされちゃったから、私も嫌だもの。士郎にも迷惑かけちゃうじゃない」

三人で話し合ったでしょう、と少女は続けた。

「あれ、ガールズトークって言うのよね」

少女が言っているのは、今日の朝、教会から戻って来てからライダーも交えて話した事だ。

「いいえ・・・話す内容が殺伐とし過ぎていたわ・・・」

「そう？誰が誰を好きとかを話しても流石に今更過ぎるから、あなた達がどうすれば幸せになれるのかって話をしていたんじゃない」

立派なガールズトークでしょ？と、屈託なく少女は笑う。

「……………ごめんなさい。今さら何をいい子ぶってるのって感じよね……………」

わかっているのよ、とキャスターは続けた。そして、いたたまれなくなつて、イリヤの顔を正視できなくなった。

「いいんじゃない。そういうのも。あなた魔女を演じるのも疲れたんでしょ？せつかく士郎に元に戻してもらったんだから、素のままにメソメソしてもいいわよ」

「それはそれで鬱陶しい女よね」

キャスターは、依然として俯いていた。

「そうね。本当のところ、私個人としては勘弁して欲しいわ」
でもね。とイリヤは続ける。

「士郎が幸せに近付くことが姉として嬉しいのは勿論だけど、あなたが幸せに近付くことも私は嬉しいわ」

銀髪の少女は、一人の不幸な女に手を差し伸べる。

「悲しい過去を背負った神代の魔女。せめてその未来は、私の力を使つて変えなさい」

イリヤ裏切りの魔女のフィール・フォン・アインツベルンの道具として作られた少女が、ただの不幸な女に救いを与えようとしていた。

キャスターは、視界が霞んでいくのを感じた。

涙が止まらない。

いつの間に自分はこんなに弱くなったのだろうか。

「……ありがとう……あなたの命と魂、しっかりと頂戴するわ……」
「本来なら願望機と化して魂を失つても体は残っちゃうんだけど、それじゃああなたがやり辛いだろうから、私は消えることにするわ」
そんな気遣いを口にしながら、少女が小さな指を自分の指へと絡めていく。

少女の体が少しずつ光を帯び、それに呼応するようにして、池の水
面も薄っすらと輝き始めた。

「さあ、あなたの願いをお言いなさい……」

「……はい」

キャスターは自分の唯一つの望みを少女に告げた。

少女がにっこりと笑う。

「さようなら、メディア。さようなら、シロウ。ほんの僅かな時間だったけど、私に本物の家族がいたみたいに幸せだったわ」

少女の微笑みを、キャスターは霞む視界で必死に脳裏に焼き付ける。

彼女の魂の美しさと自分の罪深さを忘れないようにするために。

しばらくすると、その体を包む輝きが強くなるにつれて、少女の姿は薄れていく。

「あなた達にも幸せが訪れますように……」

絡めあっていた指の感触も徐々に希薄になり……

やがて、完全に消えていった。

「……ごめんなさいね……」

消えた少女が残した光と清廉な余韻に詫びて、キャスターはその場に跪いた。

だが、嗚咽を漏らすのは辛うじて堪える。

「……私のやるべきことをしなくちゃ……」

ここでずっと泣きじゃくっていて本来の目的を果たせなくなっ
ては、少女に本当に申し開きができなくなる。

顔を上げると、池の上空には黒い穴が月のように浮かんでいた。

その穴からはゆっくりと黒い魔力の奔流が流れ出て、眼前に残った

少女の光へと向かってくる。

「必ずやり遂げて見せるわ」

キヤスターは自分にしかできない工程に取り掛かる。

E t u r n

「……この先に必ずいるはずだ……」

オレはライダーとセイバーを探して、彼女の宝具により薙ぎ倒された木々の残骸を辿って走る。

ライダーの【騎英の手綱^{ベルレフオーン}】は、オレが展開した盾の宝具により減衰したセイバーの宝具と衝突し、押し勝ち、そしてセイバーに深刻なダメージを与えたのは間違いなかった。

だが、その前の凌ぎ合いでライダーはかなり負傷していた。自身も突進する類の宝具なので、彼女自身の損耗もかなり激しい筈だ。

「無事でいてくれよ……」
いた。

森の中に無理やり作られた即席の通路の行き止まりには、大樹があった。

ライダーはその幹に寄りかかるようにして座り込み、目を瞑っていた。

「ライダー!?!」

ライダーが声に反応して、こちらに顔を向ける。

何とか無事なようだったので、オレは安堵する。

「土郎?」

目を開いてしまうとこちらが石化してしまうため、目を閉じたままだ。

オレは、拾っていた彼女のバイザーをその顔に掛けてやった。

「大丈夫か?」

オレは、これ以上のことを聞くつもりはなかった。

セイバーの姿が見当たらないということは、彼女は既に消えたということだろう。様々な思いがないまぜになるが、今はそれを心の奥底

に封じ込めるしかなかった。

「ええ。何とか」

ライダーはそう言ったが、左足がおかしな方向に曲がっており、動かないようだった。宝具発動の前に受けた傷跡も痛々しい。

とは言え、時間の経過により回復する類のものであることもわかった。

「負担を掛けてすまなかった。回復するまでここで暫く休んでいてくれ」

今の戦いではライダーに相当な無理をさせてしまった。

セイバーの強さを考えれば止むを得ないのだが、オレとしては本当に気が気じゃなかった。

ライダーが接近戦を仕掛け、オレが遠間から援護する戦い方は予定したとおりだった。それがベストな戦い方なのは間違いないが、男の自分が危険から離れた場所にいる一方で、彼女を危地に置くことになったことを実感させられ、歯噛みする思いだった。

「オレは先に行くから、ライダーは傷が癒えたら来てくれ」

ライダーに無理をさせたくないという思いもそうだが、状況は一刻と動いている。アンリマユの誕生までも時間はあまりないだろう。オレは一人で洞窟に向かうことにした。

「待って下さい。一人で行くのはあまりにも危険です」

「アーチャーがどう動くかわからない。下手すればキャスターが狙撃されるかもしれないから、あいつを抑える必要がある」

これも理由の一つではあった。

だが、アーチャーとは一対一で決着を付けなくてはいけないと感じてもいた。

「とにかくライダーは無理をしないでくれ。中途半端な状態で戦っても、いい結果は生まない」

そして、オレは合流するまでの手筈をもう一つ彼女に伝えた。

「……………わかりました。士郎」

ライダーは辛うじて頷いてくれた。

「心配かもしれないが、オレも生き残ることを優先するから、安心して

くれ」

そう言い残して、オレはその場を後にした。

今の言葉も本気ではあった。

だが、それを容易に実践できるほど甘い戦いになるとも思えなかった。

Interlude in

「・・・あれ？これって・・・」

桜が片手を額に当てて仕草をした。

ガララ・・・

「どうした？」

アーチャーは、洞窟内に押し寄せた竜牙兵の最後の一体を破壊したところだった。

振るった双剣の背で、両肩を軽く叩きながら、怪訝そうな声を出した桜のほうを見る。

「・・・えつと・・・多分、聖杯使われちゃいましたよ」

「・・・何だと？いや、そうか・・・願望機として使うだけなら表の池で問題なかったわけか。イリヤを連れてきたのはそのためだったわけだな」

左程、悔しそうな素振りも見せずに、アーチャーは淡々と独白した。

「だが、取り込まれた英霊の数は足りているのか？」

「私もそのあたりの仕組みはいまいわかりません。これまでに斃された英霊は、ランサー、偽アーチャー、バーサーカー、アサシン、そしてセイバーの5騎ですよね」

でも、と桜は続けた。

「あの偽アーチャーさんはすごい食糧応えがありました」

「そもそも5騎でも良かったのかもしれないし、偽アーチャー分で嵩上げされている可能性もあるわけか」

「何にせよ、まんまと出し抜かれちゃったみたいですね、先輩。先輩のお願い、叶わなくなっちゃいましたよ」

アーチャーはふん、と鼻を鳴らした。

「あまり、真剣に考えなかつたというのが実態だが、まあそういうことになるか。向こうとしては、こちらに願望機としての聖杯を使わせないことも重要だろう。何せ、我々は【悪の権化】なのだからな」

冗談めかした言い方をして、アーチャーはニヤニヤと笑う。

『世界を永遠の闇に閉じ込めるが良い』みたいなやつですか」

悪の大魔王みたいに、と続けてクスクスと桜も笑う。

「そんな極悪な願いに使われるくらいなら、先に使っちゃえてことですね」

「ああ。とは言え、衛宮士郎があつさりイリヤを犠牲にするというのも意外ではあるが……存外、知らされていなかったのかもな」

「……ああ……悪いお姉さま方に騙されていたのかもしれないね。あつちの先輩は、ライダーと一緒になってセイバーと戦っている最中だった筈ですし」

桜はアーチャーの言葉に合点がいったのか、人差し指を立てる。

「だとすると、キャスターの願いでも叶えたのだろう。奴なら危険物である聖杯も真つ当な願望機として利用可能だろうからな」

「キャスターさんの願いは明白ですね」

「少なくとも『女性の下着』ではないな」

「何の話です?」

桜は小首を傾げた。

「前世紀の古典で、早い者勝ちで使われた願いだ。実際には、もっと俗な言葉が使われていたがな」

「先輩、たまにわけがわからないこと言いますね」

「だが、その場合、小僧とライダーの望みが叶えられないことになるが……」

当初は二人とも願いはなかったが、今となつては違うだろう。使える願望機があるなら、使いたいと考えるはずだ

アーチャーは腕を組んで僅かの時間考え込むと、成程な、と呟いた。

「……これなら、一石二鳥も可能だな。ライダーとキャスターの共犯関係も成立するか」

「方法があるんですね？」

「そうだな。とは言え・・・」

アーチャーは竜牙兵達がやってきた洞窟の出口に向けて歩き出した。

「それはあいつらの思惑に過ぎないからな。こちらが付き合う義理はないし、むしろ嫌がらせぐらいはさせて貰わないとな」

「意地が悪いです。私にも教えてくださいよ、先輩」

桜は少し頬を膨らませて、アーチャーの後を追う。

「後でな」

アーチャーと桜は洞窟を出ると、その場に止まった。

「トリース投影、オン開始」

その単音節の詠唱を繰り返して、アーチャーは10本を超える剣を具現化させて、地面に突き立てた。

さらに黒い弓を生み出したうえで、3本の剣を矢に変成して、その手に持った。

「・・・池の方角は・・・向こうだな」

アーチャーは片膝を地面に着き、体の向きを調整した。

「さすがに木が邪魔で直接は見えんな・・・」

ギリリ・・・

弓に3本の矢剣をつがえて、引き絞る。

「終幕に向けて、盛大に花火を打ち上げるとしようか」

そう宣言すると、つがえた宝具の真名を解放して、池の方角へと矢剣を放った。

夜闇のキャンバスに、三条の美しい光が緩やかな放物線を描く。

そして、僅かの時間を経て、目標地点に到達すると続け様に爆発し、光を撒き散らした。

ゴウウウ・・・ン・・・

着弾点から、ここまではかなりの距離があるので、音量はそれほどでもないが、地鳴りのような音が伝わってくる。

「まあ相手を視認できていないから、本当にただの花火に過ぎないがな。当たったら儲けものというやつだ」

奴らからすれば交通事故だがな、と口の端を吊り上げる。

「ほんと、格好つけてばっかりですね。先輩」

アーチャーの後ろでずっとその様子を見ていた桜は、少し呆れたような声を出した。

だが、その目は楽し気な光を帯びて輝いていた。

「ふふ。悪くないだろう?」

ニヤリと笑いながら、アーチャーはまた3本の矢をつがえた。

E t u r n

森の木々の隙間から、三条の光が放物線を描くのが僅かに見えた。

「まずいな……」

森の中を洞窟の【裏口】の入り口を目指してオレは走っていた。

通常ルートである【表口】から行けば、キャスターの陽動によって【裏口】側に引き寄せられているはずの桜達より先に大聖杯に辿り着き、破壊できるかもしれない。

だが、既に竜牙兵の対処を終えて大聖杯の元へ戻っている可能性や、桜とアーチャーが二手に分かれている可能性もあり、成功するとは限らない。

「アーチャーの攻撃を止めないと……」

オレが恐れたのは、アーチャーが【裏口】から外に出て、キャスターやイリヤを狙撃することだった。

そして、それは現実になってしまったようだ。

「大丈夫だ。まだパスが切れた感覚はない」

以前、セイバーが取り込まれてしまった時に体験したサーヴァントとの契約が切れた感覚はなかった。

キャスターはまだ、消えていない。

「無事でいてくれよ」

オレは二人の無事を祈りながら、走り続けた。

I n t e r l u d e i n

「・・・く・・・」

キヤスターは地面を這うようにして何とか池から離れ、鬱蒼とした森の中へと転がり込んだ。

「・・・はあ・・・はあ・・・」

束の間の静寂に包まれた闇の中に響く荒い息づかいは自分自身のものだ。

殆ど本能的なものだったが、とにかく池の近くにはいけないという思いがあった。

負傷はしたが、充分に歩ける。

敵に完全に位置を把握されているわけではない。

相手はアーチャーなのだ。居場所を特定されていたら、自分は直撃を受けて一溜りもなかっただろう。

「・・・冗談じゃないわ・・・絶対に死んでたまるものですか・・・」
少女を犠牲にしてまで、ささやかではあるが大切な願いを叶えたのだ。

この願いを尊いものだと理解してくれた純粋な魂があった。

勿論、自分が死にたくないという思いも強いが、その少女の思いに応える義務もある。

カツ・・・

虚空に一瞬、三条の光が瞬いた。

先程と殆ど同じ軌跡を描いてこちらに向かっている。

「防ぎなさいー!」

キヤスターが命じると、不可視の防護壁が眼前に展開される。

ドドドンツツ!!

【矢】という表現では生ぬるい隕石のような光は、着弾するとともに強烈な閃光を伴って爆発した。

そのうちの一つはキヤスターの展開した防護壁に直撃した。

「ぎゃあああああつ・・・!!」

アーチャーの放った矢剣による爆発は、宝具に匹敵する破壊力を持っていた。

キャストターが張った壁では防ぎきることはできず、その余波は彼女自身にも及び、その体を吹き飛ばす。

「……ぼ……坊や……」

今ではマスターとなつた少年を、遠くなりそうになる意識の中で思い浮かべた。

自分が消えれば、彼の勝機もなくなるだろう。

とにかく、もつと森の奥へ。

それだけを思つてキャストターは必死に地面を這いずつて体を前へと進めていった。

第38話 　　く15日目①　　「エミヤタチ」

E t u r n

意外な程に明るい洞窟の奥には、以前とは大きく変わってしまった二人の姿があり、その向こうには大聖杯と思しき巨大な柱も見えていた。

「来たか。小僧」

桜と何事かを話していたのか、手前にいるアーチャーが背を向けた状態で首だけをこちらに向けてきた。

「いらつしやいませ。先輩」

桜はそのアーチャーの向こう側、少しせり上がった高台の上に立っている。

【裏口】から洞窟内へと入ったオレは、通路を通ってここまで辿り着いた。オレとしてはアーチャーの攻撃を止めるために【裏口】から来たのだが、奴は早々に攻撃を止めて、ここに戻ったということだろう。「お前一人ということは、ライダーはセイバーと相討ちにでもなったか？」

桜に取り込まれた後のアーチャーと直接会うのは、これが初めてだった。セイバーと同じく、全体的に色調が黒くなっており、禍々しい雰囲気があるが、口調などは大きく変わっていないようだった。

「いいえ、先輩。ライダーとのパスはまだ残っています。多分、今はまだ回復していないんじゃないでしょうか」

「そうか。では、邪魔が入らないように気を付けていてくれ」

オレは、二人のやり取りを聞きながら、途方もない違和感を覚えていた。

桜は、アーチャーの事を『先輩』と呼んでいる。

それは確かに間違いではない。

「・・・先輩・・・か。桜にももうわかってるんだな・・・」

思わず、確認せずにはいられなかった。

「勿論です。はつきりしたのは、マスターとサーヴァントという関係

になってからですけど、一緒にお料理を作っていた時からなんとなくわかっていました」

確かに桜なら気付くかもしれない。

オレも料理の味加減は、確信に至る材料の一つだった。

とは言え、今はこの事をこれ以上掘り下げても進展があるとは思えなかった。

「桜。お前がそうなってしまったことの一つの原因がオレであることはわかっている」

今は何より、変わり果ててしまった桜を元に戻さなければならぬ。

「うふふ。今となってはそんなにお気になさらずともいいですよ」

吹っ切れたということだろうか？オレには、桜の言葉の意味するところがわからなかった。

「私、今、とつても自由なんです」

桜はその言葉のとおり、自分が自由であるという事を示すように両手を広げた。

「ずっと桜を支配していた臓硯を殺したからか？」

先日の教会での出来事をオレは思い浮かべた。

簡単に殺すだけでは飽き足らない。そんな思いが込められた振舞いだった。

「それもあります」

桜は嘲るような笑みを浮かべた。

「お爺様を殺し、私を助けてくれなかった姉さんを壊し、それに大嫌いなこの街の人たちもたくさん殺しました。本当にいい気味でした」

街の人・・・

この時、オレは絶望的な気持ちになった。

「・・・桜。お前はそんな子じゃない。オレはお前を解放して、必ず元に戻してやる・・・」

絞り出すようにオレがこの言葉を桜に告げた時、背を向けていたアーチャーの雰囲気が変わり、こちらに体を向けてきた。

「うふふ。できるものならやってみてください、先輩」

あくまでも桜は悠然と応じた。

「でも、先輩が私の先輩に勝てるとは思えませんがね」

桜はそう言いながら、下にいるアーチャーへと視線を向けた。

「それじゃ、先輩、思う存分やっちゃってください。男と男の意地を賭けた戦いの邪魔をするほど、私は空気の読めない女じゃありませんから」

アーチャーは聞こえよがしに、ふう、とため息をついた。

「桜。勘違いしているぞ。別に私はそんなもののために戦うわけではない」

「そうなんですか？こういう時ってだいたい男同士の意地とプライドを賭けて戦うものだと思ってました」

「訂正するのも疲れるから、もうそれでいい」

「何ですか、それ。ちよつと傷つきます」

桜は頬を膨らませた。

だがアーチャーは意に介さず、桜との会話を打ち切って今度はオレに語りかけてくる。

「さて、小僧。正直なところ、オレはお前に対して、一時興味を失った」

「何だって？」

「オレの最初の目的は、お前を殺す事だった」

柳洞寺で散々襲ってきた時のことを思い出す。

ライダーが守ってくれなければ、オレは間違いなく殺されていた。

「それは、わかってる。殺る気満々だったからな。近親憎悪か？それとも、過去の自分を殺して今の自分を変えたかったとか？」

「まあ、そんなところだ」

奴は雑に肯定したが、本当なのかはさっぱりわからない反応だった。

今となつては、どうでもいいということだろう。

「いずれにせよ、お前はオレが殺したかったお前ではなかった」

おかしな言い回しだった。

だが、長年忘れていた自分の過去の姿を、間近に見せられた人間の心理などそうそう理解できるわけもない。

「だからどうでもよくなったわけだな。人違いだったって言葉はある意味正しかったわけだ」

一週間以上前になるだろうか。遠坂の家での会話を思い出す。

「そうだ。だが、今は、改めてお前を殺す理由ができた」

「それは、お前が闇に堕ちたからだな。遠坂から魔術刻印を奪い、アンリマユを誕生させて、災厄をもたらそうとしているお前をオレが止めようとしているからだ」

正確にはこいつの目的はわからない。だが、少なくとも、オレとこいつは明らかに敵対するしかない立場にいる。

オレ達は戦うしかない関係だと。

こいつの？き出しの殺意はそれをはっきりとオレに告げていた。

「ふん。いちいち訂正してやる義理はないな」

アーチャーは両手に双剣を生み出した。

「トレース投影、オン開始」

オレも奴に対抗するために、同じ剣を生み出す。

セイバーとの戦いから立て続けの投影だが、キャスターからの魔力供給もあり、今のところ問題は無い。

しかし、詠唱が必要なオレと、それを不要とするほどにあの双剣を使いこなせるアーチャー。

力の差は歴然としている。

それでも負けるわけにはいかない。

「オレはお前を斃し、桜を救ってみせる！」

オレは決意を口にして、双剣を構える。

「今、私がお前を殺したくて仕方がないのは……」

アーチャーが歯ぎしりをして、双剣を構えた。

「その勘違いを許せんからだ！」

ダンッ！

オレとアーチャーは、同時にお互いに向かって駆け出した。

ギギイーン！

オレと奴が左右の手に持つそれぞれの白い剣と黒い剣が、二つの十

字を形作って、せめぎ合う。

「ぐ……」

「ぬう……」

剣を絡ませて押し合う力は殆ど互角だった。

その場でお互いに足を地面に踏みしめて、押し込もうとするが動かない。

「ち……すっかり準備してきているというわけだな……」

奴の顔がオレの目の前で歪んでいる。

「当たり前だろう……」

オレは、キャスターの強化魔術が封じられた薬を予め飲んでいた。

そうでなくては、英霊であるアーチャーと互角に力比べができるわけもない。

「それに、お前の投影は、その武器の所有者の技術も模倣できる」

最初はわからなかったが、この投影は、生み出した武具の所有者の技量までも自身のものとできる。

オレが投影しているのは、アーチャーが投影した双剣なのだから、アーチャーの技も模倣できる。本来なら、この双剣の歴史上の使い手の技を模倣することになるのだろうが、この双剣はもはやアーチャーのものとして定義されているのだろう。

「ふ……そうだな……だから互角の戦いができる自信があるという事か……」

「イイインツ——」

拮抗していたオレとアーチャーは一度離れて、再び剣を交え始めた。

「ガギイ！ギンツ！ガンツツ！」

白い剣と黒い剣が、お互いに吸い寄せられるようにせめぎ合う。

洞窟内にはリズミカルと表現してもいい剣戟の音が、暫くの間木霊し続けた。

「実際に、こうして互角の状況を作られるとはな……」

「ギギイイン！」

アーチャーの眩きのとおり、オレは互角の戦いができていた。

これならなんとかなる。

再び、オレとアーチャーの双剣が二つの十字を作って、噛み合う。インツ！

先程と同様に、オレとアーチャーは拮抗していた剣を弾くが、今度はお互いにその場に踏み止まった。

「はあっ！」

「つああー！」

オレもアーチャーも今度は、左の黒剣を突き出す、いずれも体を捻って躲す。

「ふっ！」

続け様にアーチャーは右の白剣を横薙ぎに振るってくる。

ガンツ！

その斬撃をオレは先ほど攻撃として使った左の黒剣をすかさず防御に回して受け止めながら、今度は白剣を突き出す。

「ちっ!？」

この攻撃に対して、アーチャーが少し慌てたように、大きく跳んで後退する。

オレはそれを追う。

ここは畳みかけるべきだ。

「技術を真似るだけじゃない……」

オレとこいつには違う点がある。

「オレは、この剣を振るうお前に憧れた！」

間合いを詰めて、立て続けに両手の剣で突きを繰り返す。

ギンツ！ギンツ！ギンツ！ギンツ！

オレの連続した突きに対して、アーチャーは止むを得ず、両手の剣で弾きながら後退していく。

「小僧め……」

癪な話だが、アーチャーに憧れたオレは、自然とこいつと戦うことをいつもイメージし、実際に稽古をしてきた。あいつの戦いを見る度に、剣技、足捌き、戦術、癖、それら全てを目に焼き付け、何度も思い返してきた。

オレは、こいつの動きがわかる。

一方、アーチャーは、オレなんかを戦う相手として想定したことなどないだろう。

そこにオレの勝機がある。

「生意気だ!!」

下がり続けたアーチャーは状況を変えようと、オレの剣を躲しながら上体を屈めて、弧を描くようにしてオレの足を狙った回し蹴りを放ってきた。

だが、この動きもオレの予測の範囲内だった。

「はああっ!!」

オレは軽く跳んでその蹴りを躲すと、双剣を思いっきり奴の顔面に向けて斬り下ろした。

ガインツ!!

「ぐっ!!」

アーチャーは体勢を崩しながらもオレの剣を食い止めようとしたが、受けきれず左右の双剣を落とした。

「ぬうううっ!」

アーチャーは大きく間合いをとりながら、再び両掌を開いて、剣を生み出し始める。

アーチャーは瞬時に剣を投影できるが、些細ではあるが確かな隙だった。

ここで決める!

「鶴翼三連!」

右手に黒剣、左手に白剣を手にしたアーチャーを追いながら、オレは叫んで、持っていた双剣を両方とも投じた。

夫婦剣は、アーチャーに向けて左右に分かれて弧を描き飛んでいく。そして、磁力があるかのように一気に加速して奴の体に向かっていく。

「投影、開始!」

オレはアーチャーに接近しながら、空いた手に再度双剣を生み出した。

「舐めるなよ！」

挟み込むように高速で飛来したオレの双剣をアーチャーは手にした同じ剣、すなわち白剣を白剣で、黒剣は黒剣で弾き飛ばす。

オレの投げた双剣は大きく弾かれたが、対になる黒剣と白剣は引かれあう性質を持っているため、再びアーチャーの背後へと戻るべく弧を描く。

だが、

「はっ！」

アーチャーは、自身の黒剣をオレの白剣に向けて、白剣をオレの黒剣に向けて投げ、また、双剣を投影する。

キンツ！ギンツ！

「なっ!？」

すると、オレの剣は、近くに飛んできたアーチャーの剣に吸い寄せられるようにして衝突し、軌道を変えてしまった。

「同調、開始！」

だが、依然として状況はこちらが有利な筈だ。

一瞬、戸惑いながらも、オレは手にした双剣を強化してアーチャーに叩きつけた。

オレの攻撃に反応したアーチャーは、双剣で再び防ぐ。

ガツツ!!

「えっ？」

手応えが今までと違う？

オレの手にした剣は先ほどまで打ち合っていた時と違う感触を伝えてきた。有体に言えば今までよりも弾かれ方が強かった。

一方、強化したオレの剣とぶつかったことでアーチャーの双剣は、ひびが入っていた。

アーチャーはその剣から手を離す。

「技に溺れたな。衛宮士郎」

素手になったアーチャーだが、その顔にはオレを嘲る笑いが浮かんでいた。

攻撃を仕掛けた筈のオレは、想定外に剣を大きく弾かれたことで体

勢が崩れてしまっていた。

まずい・・・

一瞬そんな言葉が脳裏を過ぎり、
ゴッ！

目の中に強烈な火花が散った。

気付くと顔面に奴の拳が直撃し、オレの体は吹っ飛んでいた。
ダダンッ

「ぐっ！はっ!!」

地面に叩きつけられたことで、一瞬、息ができなくなっていた。
ゴスッ！

必死に空気を求めたオレの胸に今度は奴の蹴りが見舞われ、再び大きく飛ばされた。

オレはそのまま地面を大きく転がっていった。

「がああああ・・・!」

キャスターの薬で体が強化されていないければ、これだけで終わっていたかもしれない。

「調子に乗るなよ、小僧」

アーチャーはのたうち回るオレを見下ろしていた。

R t u r n

「・・・士郎」

士郎が去ってからまだ、そう時間は経過していない。

私自身の回復もまだ充分にはほど遠い。

それでも、これ以上にここに留まることなどできない。

1秒遅れることで少年が傷つき、10秒遅れることで少年が死ぬかもしれない。

「もう行かなくては」

私は重い体に鞭打って走る。

先ずは、士郎に伝えられたことを果たさなければならぬ。

正直なところ、それですらも躊躇ってしまう。多少の時間を要する

からだ。

本当なら、とにかく早く士郎の元に行きたい。

だが、生き残る最善の策と、少年がそう言ったのを信じた。

私は、持っていたキヤスターとの連絡用の符を破る。

「キヤスター、無事でいてください」

先ほど、強烈な宝具による連続した掃射があり、それは柳洞寺裏手の池付近に着弾していた。予定では、キヤスターとイリヤスフィールがその辺りにいた筈なのだ。

私が倒れていた地点からその池はそう遠くない。

池の縁にはすぐに着いた。

そこかしこの地面が挟れており、小型のクレーターのようになっていた。アーチャーの射撃の凄まじさを物語っていた。

直撃を受けたら並のサーヴァントでは一溜りもないだろう、と戦慄するのとはほぼ同時に、持っていた符が熱くなるのを感じた。

こちらが符を破ったのに応じて、キヤスターが自身の符を破ったのだ。

つまり、彼女は生きているということだ。

「どこですか？」

すぐに符に触れると、相手のいる場所が頭に飛び込んできた。

池を挟んで反対側の森の中だ。

再び私は全力で走り、その場所へと向かった。

「キヤスターー！」

いた。

傷だらけのキヤスターが、池にほど近い森の中、木に寄りかかるようにして座り込んでいた。

「・・・ライダー・・・？」

意識もある。

こちらが符を破ったのに応じたのだから、当たり前だが、それでも安堵する。

彼女が消えれば、士郎への魔力供給が途絶える。

それは、今、戦っている筈の士郎の敗北と死に直結する。

「どうして、あなたがここに？・・・坊やは？」

キヤスターは傷ついてはいるが、意識ははっきりしている。致命傷ではないのは明らかだ。

そもそも彼女の魔術をもつてすれば、この程度の傷はすぐに治療できらるだろう。

「一人で、地下洞に向かいました。私もすぐに追うつもりですが、士郎がその前にあなたに会うようにと」

「坊やが？」

「ええ。一刻を争います。早く済ませましょう。元々予定していた事を早めるだけなのですから」

「そういうことね」

キヤスターは、私が何をしようとしているのか理解したようだった。

「あなたには負担を掛けますが」

「それは仕方ないわよ」

「あなたが自分の治療をしないのは、できるだけ士郎への魔力供給を優先するためですか？」

確認しておくべき点だった。

仮に今の時点でキヤスターが自分の治療もできない程に魔力が底を着いているようでは、これからやることは無意味どころか、完全に悪手になる。

「そうよ。私の傷を治す為なんかに、貴重な魔力は使えない。けどまだ魔力自体は大丈夫。坊やも無闇に投影をしているわけではないから」

「やはりそうでしたか」

「それでも、背水ということになるわね」

「ええ。ですが、勝利を得るための貴重な一時ひとときを得られます」

「わかったわ。早くやりましょう。坊やが心配だわ」

同感だった。

「それでは始めましょう」

私達は、事を成すための準備に取り掛かった。

第39話 　　く15日目②　　「ケモノ夕子」

E t u r n

「ようやく形勢逆転ですか。もしかしたら、あのまま負けちゃうのかと思いましたがよ、先輩」

高所から戦いを見守っていた桜が、アーチャーをからかった。

アーチャーはオレを蹴った場所に留まり、桜をチラリと見上げた。

「実際、あのまま地味に削られたら厄介だったな」

「そしたら、本当にカツコ悪かったですよ」

「そうならずに済んだのはこいつのミスのお陰だな。まあ、あの流れの中で、早めに勝負を決めたいと思うのは止むを得んがな」

「・・・くっ・・・」

オレは、力の入らない膝を叩きながら、何とか立ち上がった。

アーチャーの言うとおりだった。

いくら、キャスターから魔力を供給されているとは言え、それは有限だ。桜から永続的に魔力を供給されるアーチャーと投影による武器の撃ち合いになつては、勝ち目はない。

「勝機のある限定された戦いで終わらせたのだから。まあ、こちらもこの洞窟内という状況を考慮すると、あまり派手な攻撃がし難いところではあるがな」

「・・・防いだお前の剣に大きく弾かれたのは、持つ剣を逆にしたからだな？」

オレもそうだが、あいつも右手に白剣、左手に黒剣で戦い続けた。しかし、あいつは先程投影しなおした時、その剣を逆に替えたのだ。あの瞬間は、違和感を感じたのみで、その理由はわからなかったが、思い返せばそうだったことに気付いた。

「そうだ。干将と莫邪はお互いに引き付け合う。ずっと違う剣で引き付け合いながら打ち合ってきたが、先ほどは同じ剣同士で交わることになったので、相対的に大きく弾かれたわけだ」

アーチャーは双剣を手にして、ゆつくりとこちらに歩みを進めていた。

「終わりだ。衛宮士郎」

「終わるわけにはいかないさ。投影、開始」

詠唱して、オレも双剣を生み出す。

「そもそも、お前は桜を救うと言った。確かに黒化した桜を元に戻す方策は、お前なりに考えているのだろう。無策でそれを放言するような阿呆でもあるまい」

「ああ。ある」

キヤスターの宝具を知ったことで、オレ達は桜を元に戻す方法に行き着いていた。

「だが、その手段が仮に有効だったとして、今の桜を元に戻してどうする？」

「なんだって？」

ポンと無造作に、思いもよらない問いが放り投げられてきた。

あの状態の桜を肯定できるわけがない、とオレはずっと思ってきた。

「桜は既に自分の意思で多くの無辜の人間を殺している。つまり大量殺人者だ。魔術師という立場上、単純に法の裁きの対象になるわけではないが・・・思い返してみろ。お前の傍らにいた少女は、その罪の重さに耐えられるのか？」

「・・・そ・・・それは・・・」

オレは反論できなかつた。

それは、先ほど、桜が街の人を殺した、とあつさりと言った時に感じた危惧だった。もはや、後戻りのできないところまで来てしまったのかもしれないという恐怖でもある。

遠坂への仕打ちや、臓硯を慎二に殺させたことは、聖杯戦争という特殊な条件下の、魔術師同士の争いとして止むを得ない事案と言えなくもない。

だが、数多くの一般人を意図的に殺したというのは、一線を越えてしまっている。

「彼女が罪の意識に苛まれ絶望する時、お前は常に傍らに寄り添い、自分を擲なげうって支えられるのか？」

無理だ。

オレは、既に違う女性のためにその選択肢を使った。

「きつと桜は罪の意識を抱え、生きながら死んだような人生を歩みながらも、お前たちに心配させまいと空虚な笑顔を見せ続けるだろう」残酷なまでに鮮明に、オレには、その桜の笑顔が想像できてしまった。

「そんな生き様のどこに救いがある？」

ない。

生き地獄だ。

「それでも彼女のためだと貴様は言い張れるのか!!!」

既にオレの眼前に来ていたアーチャーが、大きく振りかぶった白剣を力任せにオレに斬り下ろしてきた。

そこには、磨き上げられた技術も、洗練された精密さも、何もありません。はしなかった。

怒れる男がたまたまそこにあつた包丁を、ただ力任せに振り下ろしたようなものだった。

ガツンツツ!!

反射だけでオレはその一撃を黒剣で何とか受けたが、また大きく弾き飛ばされていた。

アーチャーは再び、こちらへとゆっくり歩み寄ってくる。

地面に転がったオレは、ぼんやりとその様子を眺めた。

「この世界は桜を救うことはなかった。この世界では、彼女はこちら側に来ることで初めて解放された。正確には間桐臓硯を殺したことでな」

確かにそうだろう。

桜にとっては、ここは救いのない地獄だった。

助けてくれるかもしれないと期待した姉は事態に気付かず、優しく接してきた先輩はただ思わせぶりなだけの中途半端な役立たずだったわけだ。

「聖杯と化した桜に残された時間は僅かしかない」

見た目にはわからないが、英霊を取り込んだ桜は徐々に壊れている。それは、取り込めば、取り込むほどに深刻になる。アーチャー達がキャスターやライダーを積極的に殺そうとしなかったのはそのためではないかと、イリヤは話していた。

そして時間の経過によっても、このままではいずれ自我が崩壊する。また、アンリマユが完全に生まれてしまった場合も、桜の意識は乗っ取られる事になるだろう。

「守護者である私に本来与えられた役割は、乱れた世界の修正であり、人類を守ることだ」

憤りを含むアーチャーの言葉は続いた。

守護者とは何なのか？

「だが、今の私にはそんなものは糞喰らえだ」

言っていることはわからないことだらけだが、奴は元々、世界に役割を与えられ、縛られている存在ということだろうか。

「私は、心の赴くままに行動する自由を彼女に与えてやりたかった。残されたのが僅かな時間だとしてもだ。そして、それは今の私の切なる願望だ」

「・・・ああ・・・そうか・・・」

その言葉を聞いた瞬間、オレの心が軽くなった。

オレは安堵したのだ。

それは、途轍もなく身勝手な心の在り様ようだった。

自分が真正面から向き合えなかった女に、向き合ってくれた者がここにいた。

多分、そんな思いなのだ。

そうか・・・

アーチャー、お前はつまり・・・

「・・・お前は桜だけの正義の味方になったんだな」

俯いたままに、オレは僅かに微笑んだ。

そして、オレは全てを受け入れることにした。

お前は確かにオレとは違う【衛宮士郎】だ。

だから、違う女を選んだ。

「これが正義なものか。ただ、どこまでも桜の味方になると決めただけだ。アンリマユの誕生にしても、桜が嫌いなこの世界を壊したいと思っ
ているから手を貸しているだけだ」

だが、やはり【衛宮士郎】でもあるということもわかった。

オレもお前も、どこまでも選んだ女の味方になることを決めた。

「貴様は中途半端だ。衛宮士郎」

オレの目の前にやって来たアーチャーは、今度は黒剣を大きく振り上げた。

それをオレは目で追いながら、両手に持つ自分の剣をしっかりと握り締めた。

「そうだな。桜の道を無理やり決める権利なんて、オレにはない」

オレはオレの決めた大事なモノの順番どおりに行動することしかできない。

ゴウツ！

振り下ろされてきたその黒い剣の太刀筋は、先ほど振るわれた白い剣のそれより、ずっと洗練されていた。

ギインツ!!

片膝を突いた状態で、その剣をオレは両手の剣を交差させて受け止めた。

「つうっ……」

オレはアーチャーの目を下から真っ直ぐに睨みつけた。

「ほう……吹っ切れたか……」

オレの視線に何かを感じ取ったか、奴は少し感心したように呟いた。

「いや……性質たちの悪い開き直りだな……」

「半端な立ち位置を止めたな」

「ああ。そうだ」

「そのほうがいい。わたしもお前も、とっくに衛宮士郎ではなくなっている」

そうだ。

『正義の味方』という大仰な理想を掲げた【衛宮士郎】は、もうあつちにもこつちにもいやしない。

「ああ。オレ達は自由だ」

「ああ。そういうことだ」

カランツ

オレに同意すると、アーチャーは右手の白剣をその場に落とし、空いた手をそのまま黒剣に添えて、オレを押し潰そうと力を加えてくる。

オレはそれに対抗して、必死に両手の双剣を支える。

奴の力に圧迫されて掌が変色し肌感覚が消えていく。

しかしそれとともに、思考は澄み切つていき、体は燃えるように熱くなる。

「ただ・・・」

「ひたすらに・・・」

潰そうとするアーチャーと、潰されまいとするオレ。

均衡した力比べが続き、噛み合った刃がギチギチと暴れる。

「一人の男として」

「一匹の雄おすとして」

やがて、オレ達の顔には徐々に奇妙な笑みが浮かんでいく。

「己の欲望のままに」

「抱いた女のために」

オレ達はありのままの思いを吐き出す。

「やりたいことをやる・・・」

オレ達は叫ぶ。

「それだけでいい!!!」

————ギイイイイイン————

黒と白の剣がぶつかり合う、今までと同様の剣戟の音。

だが、その質は先刻までより重く、それでいて澄んだ響きを孕みながら洞内に木霊する。

オレもアーチャーも、自分自身のために争う一匹の獣になって、ただただその牙をぶつけ合う。

オレの欲望を叶えるためにはお前が邪魔だ、理由はそれだけいいい。

「同調、開始！」

今のオレ達にお誂え向きの詠唱だった。

それは全く同時に紡がれ、響き渡る。

合わせ鏡のようにオレも奴も双剣を強化し、振りかざし、その場に留まって、せめぎ合う。

オレはアーチャーの動きを先読みできる。

その一方で、武器の強化についてはアーチャーのほうが上だった。同じ威力で噛み合った時、オレはアーチャーに押される。

だが、予測はオレの方が上。

結果的に互角。

オレ達は奇跡のように拮抗した。

Interlude in

「・・・きれい・・・」

桜は台座のようにせり上がった、小高い岩盤の上で誰にともなく眩いた。

「きつと、先輩だからなんでしようね」

自身の眼下で続く剣舞は、こびりついている筈の剥き出しの殺意や、男達の血潮をも綺麗だと、そう思わせてくれるほど、ただ美しかった。

「歪んでしまった先輩も、普通になってしまった先輩も、やっぱり先輩なんです」

【衛宮士郎】が矢を放つ時の射形が好きだった。

先程、洞窟の外に出て闇夜を切り裂くような矢を放った時のそれも、かつて学校の弓道場で見ることができたそれも。

矢を放つ時、当人には殺意があっただろう。様々な雑念もあったの

だろう。

それでも、綺麗なものは綺麗だった。

きつと彼が体現するものだからだ。

「うふふ。ことういうのって駄目な女なんでしょうね。昔、好きだった男と、今、好きな男が戦っているのを見てニヤニヤしているなんて」
浮気しているわけじゃないですからね先輩、と続けた。

「この時間が永遠に続けばいいのに……」

しかし、自分には時間が残されていないだろう。

「あぐ……」

桜は突然、強い痛みを襲われて、体をくの字に折り曲げる。

こうして断続的に痛みが襲ってくる。そうでありながら、五感は希薄になっていく。

自分が変わってしまったて以降、今まで抑制してきたことを、やりた
い放題、八つ当たりし放題やってきた。
それももうじき終わる。

「でも、本当になんて幸せなのかしら……ああ、ずっと見ていたい……」

桜は【衛宮士郎】達に心を奪われる。

だから彼女は気が付かなかった。

正確には気付いたのだが、深く考えられなかった。

もう一人のサーヴァントとのパスが途絶えたことの意味を。

Interlude out

E' turn

冷静に考えれば、こんなことに付き合う必要などない事は最初から
わかっていた。

いくらこいつが力をつけたと言っても、局所的なものに過ぎない。

投影できるのは、目にした武具だけ。

自分やあの金色のサーヴァントが見せたものが殆どだ。

洞窟内という特殊な戦場であり、崩落の危険性を考慮すると、あま

り周囲に影響するような武具は使えないが、それでも選択肢はいくらでもある。

先程、間合いが開いた時に、あっさりケリをつけられていただろう。だが、どうしても……

「……きれい……」

目の前のせめぎ合いに没頭している最中さなかでも、この戦いを見てそう呟く桜の声だけは、はつきりと聞こえた。

その少女に対する自分の気持ちは、どう表現したらいいかわからなかった。

最初は捨てられた猫を拾い上げたようなものだと思っていた。

それは今も本質的には変わらない。

だが、自分にとって唯一の存在になっていた。

これは、私の女だ。

明確に、自分の中に独占欲がチリチリと燃えているのを感じる。

その女の心を僅かでも虜にするお前が憎い。

だが、一方で、そんな自分に並びかけてくるお前に驚嘆したい。

自分とは明らかに違う道を歩むと決めた自分。

自分自身のもう一つの可能性でもある自分。

ここまでだと限界を見切ってしまった自分に、その先があるかもしれないと思わせてくれる自分。

完全に矛盾する自分。

それを楽しいと思ってしまう自分。

あまりにも多くの要素フアクターが絡み合い、こんがらがり過ぎて、複雑怪奇な英霊自身エミヤ。

もう理屈で考えても仕方がない。

そして、今は理屈で考えなくてもいい。

思うがままに振る舞えばいい。

自由に、この剣を振るえばいい。

そう、確かに今。

私は……いや……オレはオレのために戦っている。

「お前をねじ伏せなければ気が済まないオレが、ここにいます！」

吠えながら、右手の干将をきつく握りこむ。
歓喜の中、自分の全てを注ぎ込んでその一刀を振るった。

E t u r n

「お前をねじ伏せなければ気が済まないオレが、ここにいる！」
理屈ではなかった。

渾身の気魄を込めた白剣による袈裟切りの一刀。

それを受けた時、危ういところで保たれていた均衡が崩れた。

「がっ!？」

攻撃そのものは読んでいた。

受け流して、次のこちらの攻撃に繋がられるはずだった。

だが、その威力は予測を遥かに超えていた。

剣がぶつかると同時に体ごと持っていかれた。

膝が折れ、上半身が崩れる。

「はああああああー！」

ガギンツ!

続け様に振るわれた横薙ぎの黒剣を右手の白剣で防ぐが、さらにオレの体勢は崩れ、その分だけアーチャーが踏み込んでくる。

完全に流れが決定した。

ギン!ガン!ギイン!

攻めるアーチャー、守るオレ。

「貴様を斃す!!」

「そうはいくか!!」

鬼気迫る連撃。

それでいて、理詰め。洗練され、繊細だ。

こちらも気魄では負けていない。

感情は最高潮に昂っていて、同時に冷静でもある。全身の細胞が今でも躍動しているのがわかる。

それでも、先ほどの一撃で決まった流れを覆すことはできない。

僅かずつ、傾いていく戦いの趨勢。

バギイイイイ!!

遂にオレの黒剣が砕けた。

「つあああああ!?!」

そして、焼けるような痛みがオレの左手を塗り潰した。

奴の刃がオレの左の掌を切り裂き、血が止めどなく滴り落ち、それは使い物にならなくなった。

このまま続けば、間違いなくオレは殺される。

このまま続けば・・・

だがその時、

う・・・

オレの頭の片隅で、誰かがオレを呼ぶ声が聞こえた気がした。

いや誰か、ではない。

間違いなく来た。

確かに聞こえた。

そう信じることにした。

オレは必ず生き残ると誓った。

だから・・・

ガギン・・・

次のアーチャーの斬撃を残った白剣で必死に防ぐと同時に、

ダンッ!

オレは強化されている足で力の限り後方へと跳び、転がった。

「逃がさん!!」

アーチャーは間髪入れずに追ってくる。

だが、

「なっっ!?!」

「え?」

アーチャーと桜が不思議なものを見たような声を出した。

そして、

「ぐっっ・・・」

ズシャッ!

オレに斬り掛かろうとして距離を詰めてきたアーチャーが、突然前

のめりに倒れて、地面に手をつく。

確かめるまでもなく……

「石化だと……?」

その足は石になっていた。

「……く……桜……」

アーチャーは何事かを確かめるように桜のほうに振り向く。

その桜も、足元から石になりつつあった。

「……そんな……あれ?……何で?」

桜が混乱したように、片手でこめかみを抑える。

「……気が付かなかったのか……」

アーチャーが桜の様子を見て呟き、再びこちらに向き直った。

「何か細工をしたな?・お前達」

アーチャーはオレと、そしてオレの後方にいるライダーに向けて問い掛けた。

R t u r n

洞窟内を全速力で駆ける。

池から近い【表口】から入った私は、在らん限りの速さで士郎の元へと急いだ。

「お願いだから生きていてください……」

祈るように呟いたその時、ほんの僅かだが士郎の存在を感じた。

この先にいる。

大聖杯と思しき、柱が目飛び込んでくる。

しかし、せりあがった巨岩により視界は遮られ、向こう側は見えない。

その岩を回り込んだ時、傷ついた士郎の背中が見え、そして、アーチャーと桜も視界に入った。

士郎!

と心の中で呼び掛ける。

私の心の声を待っていたかのように、彼は必死にアーチャーから離

れた。

咄嗟に私はバイザーを外すと、即座に私の魔眼が発動する。

士郎を追おうとしたアーチャーが前屈みに倒れるのが確認できた。

「何が細工をしたな？・お前達」

膝立ちになったアーチャーが桜と少し問答をした後、忌々し気にこちらに問い掛けてきた。

だが、答える義務はない。

まずは士郎の安全が優先だ。

「士郎！」

今度こそ、私は少年の名を口にした。

かなり傷を負ってはいるが、生きている。

今はそれだけでいい。

「ライダー！」

士郎が私を振り返った。

少年もふくらはぎあたり迄が既に石となっている。

ザ・・・

私は彼を庇うようにその前に立つ。

私の前には、アーチャーがいる。

変貌してから、彼の姿を目にするのは初めてだった。

「・・・マスターである桜がお前の接近に気がつかないわけがない」

アーチャーは憮然としたまま、私達を睨みつけていた。

「先輩。ぶごめんなさい。私とライダーとのパスが切れています。てつきり消滅したのかと思つてしまいました」

問いの答えは桜が持つていた。

その桜も石化しつつある。

「そうか。先ほど小僧が僅かに仄めかしていたな。契約を断つ手段があつたわけか」

アーチャーの下半身は既に石と化していた。

「興奮ぎめな幕切れだが・・・多少の悪あがきはさせてもらおう」

眩いたアーチャーが詠唱する。

「最後だ。惚れた女くらい守ってみせろ」

「最後だ。惚れた女くらい守ってみせろ」

そう言つて、アーチャーが投影した弓矢を構えようとした。
狙いは士郎だ。

ザツ！

そんなことを許すわけがない。

私は瞬時に間合いを詰め、アーチャーの両手を杭剣で貫いた。

「私はもう、士郎に充分守ってもらいました。これ以上、彼を苦しめることは許しません」

「ち……私だつて衛宮士郎だぞ。少しは加減をして欲しいものだ」

そう言いながら、アーチャーは貫かれた両手を無感情に見つめた。
その手は血に塗^{まみ}れている。

「全く……この手の言葉遊びが好きな人ですね。あなたは、私の士郎ではありません。彼はそんなに捻くれた目をしていませんから」

「ふん……つれないな」

「ライダー、先輩を解放しなさい！」
ジャツ！

桜が動けないながらも影を放ってくるが、その動きは十分に警戒している。

私は落ち着いて攻撃を躲した。

「どうやら、ここまでのようだな。あの夜の道場で、去り際にあんなことを言つた私は間抜けだったな……」

アーチャーは諦観したように、薄っすらと笑みを浮かべた。

「まあ、私も守護者になって以来味わえなかった好き放題というやつを満喫できた」

彼は、まだ動く上半身だけで桜のほうを振り返る。

「すまん、桜。先に行く。この後、生きるも死ぬもお前の選択次第だ。自由を選んでくれ」

桜のほうが遠いことに加えて石化の威力を意識的に弱めているため、アーチャーのほうが石化の進行が早かった。

「本当に勝手な人ですね先輩。私の答えは決まっています」

桜は、ふう、と溜息をついて微笑んだ。

「そうだったな。それでは先に地獄で待つことにしよう」

「はい。私もすぐに参ります」

桜は両手を胸の前に組み、祈りを捧げるように応えた。

「ところで、先輩。姉さんがすぐに立ち直ることは、確信があったのでしょうか？」

桜は少し悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「そんなわけではないだろう。そもそもあの案はキミが考えたのではないか」

何を今さら、とアーチャーが反論する。

「嘘ばかり。それっぽいことを言つて、誘導したくせに。でも、それくらいは許します。私、これでも浮気には寛容なんですよ」

「ああ。知っているさ。この土壇場でそんな話を持ち出す女は、特に寛大だな」

本当なら、アーチャーは両手を広げて溜息をつきたかつたのかもしれない。

しかし、既にその自由もなかった。

「ええ。八つ裂きにするくらいで勘弁してあげます」

桜の目が潤んでいた。

「……さようなら、私だけの先輩……本当にありがとうございます
いました」

「ああ。お前も目が離せなくて、魅力的だった」

アーチャーの表情は満足気だった。

両目を閉じて穏やかな笑みを浮かべた顔は、全てをやり尽くした男のそれだった。

「……しまった。石像になるというのにポーズがイマイチだな」
「……もう……本当にダメな人……」

桜が両目の涙を拭いながら、くしゃくしゃになった笑顔を浮かべた。

第40話 　　く15日目③　　「スマレノウエ」

R t u r n

「士郎、とにかく止血を」

私は先ず、流血し続けている士郎の左手を、腕のスパッツを破いた布できつく縛って、何とかその血を止めた。

「桜……」

士郎は自分の手のことなど完全に忘れてしまっているかのようだった。

アーチャーの最期を見届けると、殆ど夢遊病者のように高台へと歩き始めた。

そこには既に腰まで石となっている桜がいる。

私も士郎を支えるようにして同行する。

「先輩。さっきの私と私の先輩とのやり取りは聞いていましたよね。今さらおかしなことを言うのは止してくださいね」

こちらから差し伸べる手は不要だと、桜はこれ以上ないくらいはつきりとその意思を伝えてきた。

桜とアーチャーの最期の会話を聞いた。

あれは、もはや私や士郎が踏み込める領域ではなかった。

「どちらにせよ、私、もう殆ど感覚が残っていないんです。私が私でなくなるのも、そう遠くないと思います」

「オレには、何を言う資格もないということ、痛いほどわかっている」

士郎が唇を噛んで、言葉を絞り出す。

私も士郎も桜を救うつもりだった。そのつもりでここまで来たのだ。その手段もあった。

だが、彼女はそれを拒んだ。

私も士郎も、既に桜に対してこれ以上踏み込む権利を持っているわけがない。

「……桜……お前はもう選んだんだ……」

「ええ。私、こうなってしまった最初の頃は、先輩やライダー、姉さん、そしてお爺様を酷い目に合わせようって思っていました。そして、私が嫌いなこの世界にも」

胸の前で交差するように置いた手も既に石となっているが、彼女は穏やかに語り続ける。

「でも、先輩がいてくれた。本当に私の事を第一に考えてくれて、そして愛してくれた」

無理やり姉さんから奪って引き摺り込んだんですけれど、と少女は笑う。

「こんな状況にしましてしまって身勝手なのはわかっていますけど、私も満足しちゃったんです」

「桜……すまなかった……」

士郎は俯いた。

たった数日間の自由と一人の男。

少女はそれで満足した。

そのささやかさと、そのささやかな望みのもたらした甚大な被害。自責の思いが、士郎の心を埋め尽くしているのだろう。

「でも、ご免なさい。アンリマユはまだ生まれてこようと藻掻いています。聖杯は使われちゃいましたけど、まだ、力は少し残っている。私との相性が良すぎて、だいぶ元気になっちゃったみたいなんです。止めないとこの街くらいは酷いことになるかもしれません」

「それは私が必ず止めます、桜。ご心配なく」

私は、はつきりと桜かっつてのマスターに告げた。

「そうね。折角、幸せを掴んだんですもの。それを邪魔しそうなものはお掃除しておいたほうがいいわよ。ライダー」

桜が私に顔を向けた。

「あなたともお別れね。ひどいマスターで本当に苦労ばかりかけたわね」

「というか間桐家の人間が酷すぎたわよね、と苦笑いしながら続けた。

「桜……私は……」

私は、何と返したらいいかわからなかった。

「あなたを憎んだのも筋違いだつてよくわかっているの。だつて、先輩を守つてねつてお願いしたのは私だもの。それに、あなたが先輩に惹かれることも予想できていた。ほんと、逆恨みよね」

だが、私は桜の気持ちも充分にわかっていたし、いつからか士郎を最優先にして行動してきた。

忠実なサーヴァントの振る舞いとは、とても言えないだろう。

「でも、本当に今はどうでもよくなつたわ。いい加減なものなのね、こういう感情つて。知らなかつたわ。次の男が見つかったら、こんなにも綺麗さっぱり前の男のことが消えてなくなるなんて」

知らなくて当然だ。

彼女の初恋だったのだから。

「あなたの生前が大概ひどいものだったことは私もよくわかつている。仮にも主人の想い人を奪つたんだから、幸せになつて頂戴ね」

「・・・はい。桜・・・」

そう返事をする以外になかつた。

「ふふ・・・この話はもうお終い」

桜はニコリと微笑んだ。

「ここからはもつと大事な話よ、ライダー。先輩のポーズはイマイチだけど、私の今の恰好は大丈夫かしら？」

桜はアーチャーと最期の会話をしていた時と同様に、両手を胸の前で組んだ姿勢のままだった。

その様子はまるで・・・

「ええ・・・祈りを捧げる聖女のようにです」

今の表情と相俟つて、彼女はとても清らかに見えた。

「ふふ・・・本当の私とはまるで正反対ね。でも、見た目としてはいいわよね」

「ええ」

「あなたの石化つていいわね。今の私つて殆ど真っ黒でしょう？でも石になつたら灰色になるから、それがわからなくなるもの」

いいえ、桜。

あなたは本来の姿に戻るだけですよ。

「さようなら、ライダー。そして先輩。色々ご迷惑をお掛けしました」

既に、桜の首までが灰色に塗り固められていた。

「それにしても、先輩は嘘あのみとばかりですね。もう二度と会えないってわかっているくせに。『待っている』だなんて」

アーチャーは、英霊の座に還るだろう。

桜と巡り合うことはない。

だが、間桐桜は微笑みを絶やさない。

そして董色の髪あざみの少女は、何事かを願うようにゆっくりと目を閉じた。

「本当に・・・嘘つきなんだから・・・」

E t u r n

「桜・・・」

オレは、呆然と立ち尽くすしかなかった。

『桜の選択を受け入れる』、そう覚悟を決めたなんて思っていたのが、どれだけ虚ろだったのかを思い知らされた。そんなものは横殴りの雨の日の、ビニール傘みたいな役に立たなかった。

少女が穏やかにこの世界から去っていくのを、客席で見ていることしか許されなかった。

オレは桜の石像の足元に蹲り、嗚咽した。

「士郎・・・」

ライダーは労わるようにオレに声を掛けてきた。

だが、その後続く言葉は凜としていた。

「私は最後の仕事をします」

その声で、オレは顔を上げる。

ライダーの視線の先には、巨大な柱が脈打ちながら、聳え立っている。その中程にはうっすらと大きな目のようなものが浮かんでおり、鼓動を打っていた。

桜が言っていたように、呪いの胎児は、生まれようとしているように思えた。

これは、壊さなければならぬものだ。

「私の宝具で終わらせませう」

強力な宝具による一撃。

これで消滅させるのが最善だ。それはわかっている。

「ライダー……魔力は大丈夫なのか？」

オレはだいぶ前からキャスターからの魔力供給が途絶えているのを感じていた。

キャスターは消えてはいない。

だが、かなり魔力を消耗しているのだろう。

ライダーの魔力は今、そのキャスターによって賄われている。

「大丈夫です。士郎に時間をいただきまし、キャスターからの魔力供給も問題ありません」

ライダーは落ち着いて答えてくれたが、真相はわからない。

おそらく、ギリギリだろう。だが、これを壊さなければオレ達に真つ当な未来はない。

「いずれにせよ士郎の手持ちでは、破壊力で私の宝具を上回るものはないでしょう？」

悔しいがそのとおりだった。

セイバーの宝具であれば、ライダーの宝具を凌駕しているが、あれは解析出来なかった。

「ライダー、オレはお前と一緒に未来を見たい」

「士郎。私はおそらくあなたよりもその思いはもつと強い。知っているでしょう？私欲が深いことを」

「ああ。そうかもしれないな」

オレは彼女が止血してくれていた包帯代わりの布を解いた。

「それなら……」

当然、左手からは止まっていた血が滴り落ちる。

「く……」

元々あつた激痛が、一層増す。

「な・・・何を・・・!?」

「ありったけ飲んでくれ。早くしないと勿体ないぞ」

彼女の眼前に左手を差し出した。

「・・・はい」

彼女はオレに反論しても無駄だと、すぐに悟ってくれた。

諦めたように血を啜る。

残念ながら感覚の無くなった掌では、本来だったら艶かしく感じられる筈の彼女の唇や舌の感触はわからなかった。

「無糖ブラックですまないな」

「いいえ、士郎。あなたの血は何より甘美です」

たつぷりとオレの血を飲んだ彼女は、オレが解いた布を使って再びキツく縛ってくれた。

「ぐ・・・」

オレの体力は殆ど限界だったが、なんとか座り込まないように踏ん張った。

彼女に心配させるわけにはいかない。

「これで、オレは殆ど動けないな」

「士郎・・・」

「ライダーに抱えられてしか帰れないからな」

かならず二人で帰るのだと、彼女に伝える。

「士郎は、あれがお嫌いでしょう?」

「言ったら。生き残る事を優先するって」

「ふふ。わかりました。あなたを抱えて走るのもきつとこれが最後になるでしょう。この戦いが終われば、そんな必要もなくなる」

ライダーは、杭剣で僅かに自分の腕を刺し、その血で召喚陣を描く。

そして、すっかり見慣れた白い天馬ベガサスを呼び出すと、ひらりとその背に跨った。

「あなたにも、散々お世話になりました。これが最後の仕事です。お願いしますよ」

そう言って、愛馬のたてがみを彼女は優しく撫でる。

最後まで負担をかけて済まない。きつとライダーを無事に連れ帰っ

てくれ」

言葉が通じるのか不安だったが、オレの気持ちを汲み取ったように天馬は一啼きした。

「必ずやり遂げ、そしてあなたの元へと戻ります」

彼女は、目を瞑ってバイザーを外すとオレに渡してきた。

受け取ったオレはしっかりとそれを握りしめる。

「それでは行きます」

振り向いた彼女の先には黒い柱が蠢いていた。

「頼む。ライダー」

この言葉を、何度こうして彼女に送っただろうか。

彼女がもう振り返らないことを確信したオレは、その場に片膝を立てて座り込んだ。

体は限界を訴えており、もう、立っていられなかった。

少し霞んできた目で、彼女の凛々しい後ろ姿を見送る。

戦いの時には、いつもオレの前でその薄紫色の髪が美しく靡いていた。

この光景を、この気持ちで見るのは最後だ。

オレは彼女の姿を目に焼き付ける。

「騎英の——」

そして、彼女は黄金の手綱を握り、眩い彗星となって翔けていった。

Interlude in

「……全く……少しは遠慮しなさいよ。あの電柱女……」

ライダーが宝具を使ったことが、キャスターにははつきりと伝わってきた。それによって、残されていた自分の魔力の殆どが空になったのを感じた。

もはや傷ついている自分自身の体を治す魔力はない。

「図体ばかり大きいから燃費が悪いのよ……」

自身のサーヴァントとなったライダーに対して、こうして悪態をつ

いていないと、意識を繋ぎ留めておけなくなりそうだ。

地面に腰を下ろし、もたれかかった木から動くこともできなくなっていた。

「やったのよね。坊や」

この山のはらわたの中で大きな何かが壊れたことが、確かに感じられた。

少年とのパスも繋がっている。

殆ど絶望的だと思っていた目的を成し遂げたという確信があった。だが、彼らがここに戻るまで自分が無事でいられるか自信がない。少年の魔力も尽きかけているが、当然、自分から魔力を送ることはできなくなっていた。勿論、少年からの魔力供給も殆どない。

「今度こそお終いなのかしら・・・？」
目を閉じて呟く。

自分の欲望を叶えるために犠牲にした銀髪の少女の顔が過ぎる。

「ごめんなさい・・・」

こうして少女に詫びるのは何度目になるだろうか。

そして・・・

次に、共に生きたいと夢見た男の顔が脳裏に浮かぶ。

1か月余りの間、その傍にいたことができた。

それだけでも本当に幸せだった。

その筈だったのに飽き足らず、ヒトの女となって添い遂げたいと願った。

あと一度。

一目だけでもその顔を見たかった。

目を開く。

森の木々の隙間から漏れる僅かな月明かりに照らされて、目の前には最愛のその男の顔が鮮明に浮かぶ。

まるで本物のようだ。

「・・・ああ・・・本物の宗一郎様が現れたかのよう」

戦いが終わるまで、決して起きないようにと三日三晩眠る薬を飲ませたのだ。

ここにいる筈もない男。

自分がただ生きて欲しいと願った男。

「……ええ……でも、いいの。宗一郎様が生きてさえいてくれれば『さえ』ではない。キャスター。私はお前と共に生きる」

幻だったはずのものが突然、声を発した。

「え？」

「待たせてすまなかったな。そして、ご苦労だった。キャスター」

眼前に現れた男の手が、柔らかく、そして慈しむようにキャスターの頭に、ぽんと乗せられた。

「あ？え？……宗一郎さま？」

それは紛れもなく、葛木宗一郎だった。

その大きな手は、自分の髪を梳くようにゆっくりと撫でてくれた。

ああ、温かい。

徐々に本物だという実感が伴ってくる。

「宗一郎様……どうしてここが？……いいえ、どうしてここに？」
キャスターは困惑しながら問い掛ける。

「ここにすることがわかったのは、男の勘だ」

葛木はそう答えて、自身のポケットに触れる。

その中にはキャスターから以前渡された符が入っていた。

「そして……」

そう続けながら、葛木宗一郎は自分を両手で抱えあげた。

「……そ……そ……そういちろうさま……ここ……これは、お姫様抱っこ……」

キャスターは自身がどうなっているかを認識し、困惑と、そして嬉しさとで体を硬直させた。

顔がこの上もなく火照るのを自覚する。

「妻の仕事の手伝いはできなくても、迎えにくらいは来てもいいだろう？」

葛木の目の端に光るものが見えた気がした。

「お前が生きていて良かった。メディア」

「・・・ああ・・・」

いいえ。

これほど生きていて良かったと思えたのは私のほうなのです・・・
きつと、あなたが想像もできないほどに。

「・・・ええ・・・私もです・・・宗一郎・・・」

I n t e r l u d e o u t

第41話 終章

Epilogue

「凜。随分とご無沙汰になってしまいましたね。物凄く忙しいのでしょう?」

山門の入り口で待っていた私は、石段を登ってきた凜に声を掛ける。

彼女に会うのは、本当に久しぶりだ。

レンズ越しに見る彼女は黒の制服を着ているため落ち着いた印象ではあったが、相変わらず生気に満ち溢れていた。

「そうだけど、戻ってこないわけにはいかないわよ。まさかこんなに早く……ね」

昔とは違いセミロングにしている髪を軽くかきあげながら、彼女は小さく溜息をついた。

「あなたが活躍しているのを見るのはとても嬉しいわ」

私の後ろから、凜と同様に礼服に身を包んだキャスターがやってきた。

彼女は髪型を含めて、昔とあまり変わらない。

凜の魔術師としての道を絶ってしまった彼女としては、別の道で凜が存分に力を発揮しているのを見ると、ほっとするというのが正直な心情だろう。

「最初の頃は、あなた達にも色々とお世話になったもの。感謝しているわ」

今となつては、凜は最先端IT企業の代表取締役社長として、世界中に名を轟かせている。

もはや世界の半分は彼女に牛耳られているとまで評されている。

「……」

え?

「……だ……大丈夫なのでしょうか……この世界は……」

よくよく考えると極めて危険な気がするが、まあ、彼女のことだ。

世界制覇目前で、盛大なうっかりをやらかして世界に平和が戻るとだろう。

なお、会社のキャッチコピーは、『科学の叡智で魔法を超えろ！』

という胡散臭さ満載、怪しきここに極まれりというものである。

もはや魔術師だった頃に彼女が目標としていた並行世界への到達も可能なのではないだろうか。

ちなみに、原案ではその後「絶対に協会なんかには負けないわよ！」も続けようとしていたが、これは周囲（私達）が全身全霊を掛けて思いとどまらせたのだ。

彼女の信条は、

『別にやり方なんてなんでもいいんでしょ？要は早くゴールに辿り着けばいいのよ』

という言葉に集約されている。

IT企業の社長でありながら、壊滅的なまでの機械音痴人間である彼女は、いまだにTVの録画操作も俣ならないそうだが、

『それを使える人を使えばいいだけのことでしょう？』
とのことだ。

それを実践しているのだから、凄まじい才覚と言えるだろう。

「あら？そう言えば、キャスター。旦那と子供はどうしたのよ？」

凜がキャスターの隣に誰もいないことを訝いぶかった。

「今日は帰ってもらったわ。これからは、女同士の話だからって言うてね。それじゃあ、行きましようか」

そう言つて、キャスターは山門に留まっていた私達に対して、移動するよう促した。

「さつき、チラつとだけ見たけどすっかり大きくなったわね。あなたの子供も。もう高校生だっけ？」

凜は、キャスターに並びかけて訊ねた。

「ええ。来年は大学に進学するわ」

キャスターは少し誇らしげに胸を張った。

「父親に似なくて良かったわよね」

「宗一郎様に似ることに何の問題があるのよ?」

キヤスターが少し気色ばんだ。

「あいや、堅物過ぎるのも問題じゃない。イマドキね」

ちよつと凜が慌てて、言い繕った。

「そこが男らしくていいんじゃない。あなただつて本当はそういうタイプの方が好みでしょうに。だから、まだいい人を見つけれないんじゃない?」

凜は未だに独身だ。

「うるさいわね。忙しい上に、そんな男はイマドキ絶滅危惧種なの。そうそう見つからないわよ」

完全に語るに落ちていた。

どうやら、彼女の好みは変わっていないらしい。

「なんか、昔、似たような会話をした記憶があるわ」

「そうね」

確か私もその場にいた記憶がある。

二人の会話を聞きながら、思い出す。

第五次聖杯戦争あの戦から長い年月が経過した。

「早いものね。あれから20年経つたね」

「ええ。でもあつという間の20年でした」

「あなた達はほんと変わらないわね。冬木の二大美魔女とか呼ばれてるんでしょ? だいたいキヤスター、あなたもうサーヴァントじゃないくせになんで年取らないのよ」

そう言う凜も、20年あの頃前から比べれば大人になっているが、十分に若々しい。

「とつてるわよ。私は単に見た目があまり変わらないだけ。色々と気を遣っているもの」

実際は妖しい魔術も併用して、外見年齢を保っているのだろう。

「それにしても、ご免なさいね。式に間に合わなくて・・・」

日本の反対側にある国の王族と会っていた凜は、報せを聞いて慌てて飛行機に乗ったものの式には間に合わなかった。

「仕方がないわよ。それにあなたも含めたこの三人で、こうして改め

て会いに行くのも悪くはないと思うわ」

キャスターが凜に気を遣ってフオローする。

「そうですね。彼も喜ぶでしょう」

私も同意した。

「ありがとう。そう言ってもらえると、少し救われるわ」

私達は本堂の裏にある墓地へと辿り着いた。

「やっぱり無茶ばかりしてたからなのかな・・・」

凜はそう呟きながら、蛇口を回して桶に水を注ぎ入れる。

私達は、多くの石が林立する細い道を縫うように歩き、真新しい御影石でできた墓石へと向かった。

多忙の凜を空港まで見送った私とキャスターは、夜になるのを待って、歩いて穂群原学園へと向かった。

私にとっては、そこで士郎と出会えたことが全ての始まりだった。だから、行きたかったのだ。

「そろそろ教えてもらえませんか？」

私は横を歩くキャスターに問い掛けた。

昼とは違い、私達は普段着に着替えている。

物は違うが、私もキャスターも20年前に着ていた服装に近いものを着ていた。

単なる偶然なのか、無意識のうちにそうしたのかはわからない。

「そうね。もう、いいわよね。坊やとの約束だったけど。もう・・・」

「士郎は父親も短命だったから、衛宮家の運命だと。だから仕方ないなんて言っていました」

私は士郎との会話を思い出しながら話した。

「勿論、全然違うわ」

キャスターは案の定、かぶりを振った。

「やはりあの戦いが原因なのですね」

「ええ。直接は捕らえられたあなたを助けに行く時に飲んだ薬が原因よ」

学校に辿り着いた私達は校門を飛び越えた。

月明かりだけが照らす校庭。

かなり老朽化した校舎は闇に隠されており、20年前と何も変わっていないかのようだ。

「やはりそうだったのですか」

「推測どおりということかしら？」

「ええ。最後の戦いに赴く時に、士郎はあの薬を持った様子がありませんでした。勿論私はあんなものを使わせたくはなかったので、そのこと自体に問題はありません」

校舎の手前で止まる。

最初にランサーに殺されそうになった士郎を私が助けることになった辺りだ。

「しかし、士郎の性格からすれば、最後の戦いの時にあの薬を使うことは充分に選択肢としてあり得たはずです。間違いなく勝率は上がるのですから」

「ええ。それをしなかったのは、もうそれができなかったからよ。あの薬をもう一度使えば坊やの体は耐えられなかった。それだけ副作用が強い。勿論、最初の時に私はそれを伝えたわ。間違いなく寿命を大きく縮めることになるよ」

やはりそうだったのか。

私を救うために士郎は自分の人生の半分以上を削っていたのだ。

「私は士郎の傍でこの上もなく幸せな20年を過ごせました。ですが、士郎にとってもそうだったのか、私には自信がありません」

「坊やはあなたを選んだ。選んだ以上絶対にそれを貫く。そういう生き方しかできない子よ」

「そうですね」

衛宮士郎とは、そういう人物だった。

私は、もう一つ抱えていた疑念を口にした。

「もしかしたら、イリヤスフィールのことも気付いていたのかもしれないですね」

私達はイリヤスフィールを犠牲にすることで、こうして現世に留まることができた。

聖杯としての彼女を使えば、彼女自身は消える。そのことを、私もキャスターも解つていながら士郎に黙っていた。

そのうえでキャスターであれば聖杯を使つて真つ当に願いを叶えられることを士郎には教えた。そして、思惑どおりキャスターは受肉し、私は彼女のサーヴァントとなることで現世に留まることができた。

「私は自分のためにあなたを利用しました」

私を救い出してくれた士郎が倒れた時、キャスターが私の血を浄化して彼に注ぎ込んでいるのを見て、彼女なら聖杯の中身も浄化して正常に本来の願望機として使えるのではないかと考えた。

そして、それは正しかった。

「そうね。あの^{イリヤスフィール}子がいくら聖杯としての覚悟を持っていたからと言つても、あの子を使うことに私には躊躇いがあった」

キャスターが凜の魔術回路を奪った後、自暴自棄になつて士郎の元を離れた理由。それは、凜に対する行いの反動でもあったが、自身の望みを叶えるためには士郎の姉であるイリヤスフィールを犠牲にすることへの後ろめたさを抱えていたことが大きかった。

「ええ。それを私が引き摺り込みました。あなたは中途半端に人がいいですから」

「あなたは、いざとなれば残酷になれるものね」
「ええ」

そして、私はイリヤスフィールに告げた。

キャスターには受肉して現世に留まつてもらい、私が現界し続けるためにキャスターを私のマスターにする。と。

その案を、犠牲になる少女はあっさり賛成してくれた。

『本当に好きな人と幸せになることを誰も否定することはできないわ』

無垢な少女はそう言つて笑つたのだ。

「その事については、あなたに何かを言う権利は私にはないわ。あなたの誘いに乗るしかなかったし、自分でそれを選んだ共犯者だもの。そしてそのお陰で宗一郎様と共に生き、子供まで授かつたわ」

今でも夢のよう、とキャスターは噛み締めるように呟いた。

「ええ・・・私もここで望外の幸せを得ました」

桜とイリヤスフィール・・・二人の少女を犠牲にして、私達のような歪んだ古代の女が生き残り、自らの欲望を実現した。

端的に言えば、そんな構図なのだ。

「あなた、その割には結構他の男とか、たまに他の女とかに手を出していたでしょう？」

キャスターがじつとりと睨みつけてくる。

「ただのつまみ食いです」

私は明後日の方向を向いて、しれつと言った。

「ほんと、勘弁して欲しかったわ。坊やが不憫だから、何度あなたとのパスを切って消滅させてやろうと思ったことか」

「では、これでせいせいするでしょう」

「そうね」

ザッ

私達は、校舎の下から屋上へと飛び上がった。

「思わぬ長い付き合いになりました。まさか、利害関係があったとは言え、あなたとこんなにも近い関係になるとは夢にも思いませんでした」

屋上に降り立って、私は隣のキャスターを改めて見た。

「坊やがいたからよ。私もあなたもあの子が好きだった。そして、それが競合する形ではなかった」

「そうですね」

その士郎はいなくなつた。

この世界にはもう未練はない。寧ろ私はここでは果たせなかつた使命を果たさなくてはいけない。

士郎の最期の言葉を思い出す。

『ライダー、もし次があつたなら・・・二人で必ず桜を助けよう』
遠くを見るような目だった。

無理やり閉じ込めたその思い、心に棘となつて刺さっていたその後悔。やり直しなど効かないのに、それでも何とかしてやれなかつたの

かという嘆きの塊。

「はい。士郎……」

改めて私は士郎のその思いに小さく返事をした。

たとえあの時、アーチャーが桜に寄り添っていてくれたお陰で幾らか救われたとしても、ああなる前になんとかできたのではないか。

それはどんなに幸せな時でも、常に私の心の片隅を占めていた思いでもあった。

「ルールブックレイカー破戒すべき全ての符」

キヤスターが歪な形状の短剣を出現させた。

この宝具で刺されるのは二度目になる。

一度目はあの日、柳洞寺の池で桜との契約を断つ時だった。

「それじゃあ縁を切らせてもらうわ。これでだいぶ楽になるわね」

実際に、私への魔力供給は彼女を以てしても相当な負担だったろう。彼女は基本的には大聖杯が集める魔力を流用していたが、自身の魔力もかなり恒常的に私の現界に使っていた筈だ。

魂食い、すなわち一般人からの魔力吸収は二度としないと彼女は誓っていた。自分が聖杯戦争中にその標的とした人々に後遺症などが出ていないか、密かに確認していたのも知っている。

「ふふ。確かに士郎の言うとおりでしたね」

キヤスターは争い事に向いていない、という士郎の言葉を私はふと思い出したのだ。

「なんのこことよ?」

「いいえ、こちらの話です」

トンッ

と軽く刃の先端が私の胸に刺さると、キヤスターとの契約が切れたのがわかった。

それと同時に彼女から供給されていた魔力が途絶える。

「ふう。本当に楽になったわ」

「燃費の悪い大女ですから」

「人の悪態を勝手にとらないで頂戴」

「ワンパターンだからですよ」

「まあ、いいわ」

彼女との口喧嘩もこれが最後だ。

「それでは……私は旅立ちます」

そう言うのと、私は眼前に召喚陣を描いて、天馬を喚び出した。

ベガサス

20年ぶりなので、少し不安だったが問題なく私の可愛い愛馬は召喚に応じてくれた。

「私は初めて見るけれど、綺麗なものね」

キャスターが少し目を細める。

そう言えば、彼女の前では見せたことがなかったか。

「乗せませんよ」

私は愛馬の首筋を優しく撫でた。

「あなたとは乗りたくないわ」

「色々ありましたけど、お世話になりました」

「ええ。あなたのお陰で私は生前得られなかった本物の幸せを実現できた。今更だけれど、本当に感謝しているわ。勿論……それ以上に坊やにもね……」

士郎のことを思い出したのだろう。

キャスターがその場で声もなく泣き崩れた。

裏切りの魔女も、涙脆い普通の女に戻ったものだ。

「あなたは人としての幸せを全うしてください」

今や、普通の妻でもあり、母親でもある彼女にそう告げる。

そして、眼鏡を外して泣き崩れる彼女の傍らに置いた。

「お手数ですが、これを士郎に返してあげてください」

士郎が私に贈ってくれた眼鏡。

それは少年が私をサーヴァントや英霊としてではなく、一人の人間として接してくれた証だ。

そう思うと自然と目の端が湿ってくるのを感じた。

少しだけ未練たらしく、ゆっくりとその眼鏡から手を離し、私は踵

を返した。

「・・・ごめんなさい。そして、本当にありがとうございました。あなたの人生を私のためにいただいて・・・」

軽く跳んで私は天馬ベガサスの背中に跨り、黄金の手綱を握る。

数多の糸が絡み、解ほつれ、それらが偶然にも織り上げた運命。

千回、いや万回に一つしか訪れないであろう、怪物メドウーサと魔女メドイアのかけがえない幸せの時間。

『二人とも、一人の人間として幸せになってくれればいいんだ。罪と贖あがないはオレも背負う』

たとえ、それが幾多の不幸の上になしか成立し得ないものだったとしても、この奇跡を認め、そして選んでくれた少年がいた。

その少年・・・衛宮士郎がいたからこそ、私達は自分を大事にできた。自分達でもここにいていいと思うことができた。

「さようなら、士郎。あなたは本当に素敵でした。またお会いしましょう。そして・・・今度こそ・・・」

私は空高く舞い上がり、そして、一条の光となって消えていく。

次こそはあの少女のために、少年の翼となって・・・涯はてまでも翔かけるために・・・

〈 f i n 〉

後書き く登場人物総括く マスター編①

初めてこういった物語を書いたので、受け取るだけの頃とは違った思い入れを各キャラに抱くことになりました。

そんなわけで、後書きを兼ねて本作での登場人物について思ったことをつらつらとメモしてみました。

まずはマスター側から並べていきます。ちなみに「あいうえお」順です。

1. イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

●概要

冷静に事象を説明したり、ツツコミ役となったり、キャスターを論じたりというシーンが殆どでした。

聖杯としての役割については受け入れているつもり。しかし、心底では誰かに助けて欲しいという思いを抱えているのだと思いますが、本作では士郎との関係が薄いため感情的になるシーンが少なかったですね。

本作のヒロイン度を順番で並べると、①ライダー②キャスター③桜④凜⑤イリヤ⑥セイバーという順番になるので、正直、構想時点から影が薄くなるだろうなと思っていました。

案の定、序盤の戦闘後は中盤までほぼ出番がないという状況に。

本作は聖杯の謎を解明するとか、兄と妹などの家族関係などをテーマとしたものではないため、イリヤのポジションは「バーサーカーのマスター」、「アインツベルンの当主」、「聖杯」となるわけですが、正直、体のいいお便利道具という感じですよ。

そんな中でもキャスターとの絡みは幾つか入れるよう気を配りました。そうしないとキャスターの願いを叶えるところが完全に機械的なものになってしまうので……

●ツツコミどころ

自分で書いていて言うのもなんですが、2日目以降はいったい何をしていたのでしょうか……

彼女が本気になっていれば、士郎陣営は崩壊していたはずです。

●印象深いシーン

①14日目

最後のキャスターとのやり取り。イリヤのほうは不幸度は高いのですが、キャスターに手を差し伸べる彼女の純真無垢さが書いててキツかったです。

②11日目

キャスターに眠らされた後、士郎とライダーに対してツツコミを入れるところ。

③9日目

ギル戦。渾身の「やっちやえ！バーサーカー!!」。イリヤはやっぱりこれです。

2. 衛宮士郎

●概要

正義の味方であるか否かに拘らず、彼が主人公たりえるのは、常に体を張っているからだなど改めて気付かされました。本作でもどれだけ、自ら流血することを選んだことか。ぶっちやけ早死にするのが当たり前です。本作では30代半ばでお亡くなりになるわけですが、士郎の場合、そこまで生きられればもはや天寿を全うしたと言ってもいいようにも思えます。

人としては歪でも、その在り方は有無を言わさない説得力を生み出してしまいます。だからこそ、ライダーやキャスターという本来悪寄りの人達でも、彼に承認されれば免罪されてしまうわけで。まさに化物ですね。

●ツツコミどころ

モテ過ぎですね。アブナイ男は女子を引き寄せます。

●印象深いシーン

①15日目

アーチャーとのラストバトル。ああいうふうにごうごうと思つてたわけではなく、二人で勝手に盛り上がってました。

本作のテーマは「我欲」なので、端的に表現できて良かったです。

② 14 日目

キャスターとの契約場面。士郎のカッコよさと、キャスターの人間臭さが表れた場面です。

③ 9 日目 ライダー救出

いくらライダーを救うためとはいえ、現代人がハラキリできるものでしょうか・・・まあ、士郎ですから。

3. 葛木宗一郎

● 概要

でしゃばり過ぎず、引つ込み過ぎずと、ちょうどいい感じに活躍してくれました。構想初期はお亡くなりになることも考えたのですが、そうするとキャスターの願いは彼の蘇生になってしまつて、彼女の幸せには繋がられないので没となりました。それに本編では生存率0%ですから、なんとか生かしてあげたかったです。

結果的に普通に活躍して、綺礼と絡ませてあとは流れで、と思つてました。ランサー戦、アサシン戦、綺礼戦と戦闘シーンでもかなり活躍しています。

葛木と綺礼の絡みは当初構想時からやってみたかったことで、特に車中という閉鎖空間で語らせたいと思つていました。何も持たない綺礼が形のないもの「自分が何者であるかの答え」に囚われているのに対して、何も持たされなかった葛木は「綺麗な女」という非常に俗なものに囚われたわけで。この二人の対比構造を表現したかったのですが、書ききつた感はありません。

fate SNキャラではバーサーカーと並んで最もブレない男と信じていますので、だいぶ男前に表現しました。

● ツッコミどころ

綺礼との戦いですね。最初からドーピングしておけよと。まあ、演出上の都合によるものですが。

● 印象深いシーン

① 15 日目

ラストシーン。「手伝えなくても迎えにくらいは来てでもいいだろう?」。自身もすっかりと場外乱闘しながらも、それを見せずにはたてキヤスターを迎えに来たという渋さ。専業主夫が稀有ではなくなりつつある(?)。現代社会を先取りしたセリフとも言えましょう。

②12日目

「出るぞキヤスター」。スーツのボタンを外しながら玄関に向かっているところを脳内補完していただければ(普通に書けよって感じですね)

③14日目

綺礼との戦い。「私は枯れていない」。ええ、意外と若いんですね。

4. 言峰綺礼

●概要

葛木同様、アクセントになるサブキャラとしての地位を確立してました。コンスタントに登場し、殆どの場面でインパクトを残したという点では葛木以上のお便利キャラだったと言えます。

本作での彼は、「教会という駆け込み寺の主」+「みんなが暴れた後の事後処理人」という非常に有難い存在でした。それなのに、最後には悪いことをしようとしてしまうのも彼の彼たる所以でしょう。hollowで語られるように、綺礼だけはこの聖杯戦争で生き残る道筋がないという設定に忠実にしました。いずれにせよ、八面六臂の大活躍で、彼だからこそ許されてしまう立ち回りを演じてくれました。長口上を勝手に話し出すので書き手的には非常に楽な人です。

葛木との絡み12日目までお互い面識なしというのが少し不安で、もう少し前のタイミングで絡めようかと迷いましたが、結果的に問題なかったかなど。

●ツツコミどころ

存在自体にツツコミたいところですが。強いてあげるなら、どこにその黒鍵は入っているのでしょうか?重くないのでしょうか?あと、神父さんは午前中から酒を飲んでもいいのでしょうか?

●印象深いシーン

他のキャラ以上に甲乙つけ難いのですが、

①6日目

ライダーとの対話中におけるテンパリシーン。監督役は辛いよ…

②14日目

「下手するとその男が殺人犯になるぞ」。作中殆どのシーンでそうですが、彼は良識があるわけで。

③12日目

「そこの御仁乗るかね?」。ほんとこの時、この気紛れを起こさなければ、全然違う展開になっていたわけです。

後書き く登場人物総括く マスター編②

登場人物総括マスター編の第2部です。

「あいうえお」順で並べていきますので、4人中3人が間桐家の人々です……

5. 遠坂凧

●概要

会話シーンではとめどなく勝手に話してくれるので非常に楽なキャラクターです。キャスター、綺礼も楽ですが、No. 1は間違いなく彼女です。

実は流れ次第では途中で死亡させてもいいと思いつながら書いてきました。本作は決して彼女を中心とした物語ではないので。ですが、結局のところ最後まで死ぬ気配もなく、コンスタントに出番がありました。強いて言えば、14日目後半に登場シーンがなかったのが本作での彼女のポジションを端的に表していたわけですが、それでも存在感がありましたね。

戦闘シーンでも彼女は決して目立っていなくて、関与したのは、

1日目 バーサーカー戦

6日目 慎二をいじめるところ

6日目 ランサー戦

12日目 アーチャー戦

などですが、左程活躍してはいません。

彼女の真骨頂は会話シーンです。結局のところ、誰もが彼女を精神的に屈服させることができないため、みんな彼女を蔑ろにできません。慎二、桜、ライダーの嫉妬の対象であり、キャスターは負い目を感じる相手ですが、当の凧は歯牙にもかけていません。

また、エピソードの後書きでも書きましたが、他者が彼女をどう表現するかによって、表現者側の度量が滲み出ます。そういう意味ではライダーが凧を自分より上だと初めから認めていたことで、今作のライダーのしなやかさを表現できたような気がします。

● ツッコミどころ

完全に結果論ですが、宝石剣を作る必要はなかったですね。その隙を突かれて、魔術回路を奪われてしまいましたし。

● 印象深いシーン

綺礼同様コンスタントなので、選び辛いのですが・・・

① 13日目

「ありふれた存在だつて卑下することなんてない」ときっぱり言つてのけた凜。魔術回路を消されてしまったことで桜に「ありふれた存在」と嘲られた際に返したセリフです。凜としては、「魔術師であること」そのものに価値を見出してはいないのです。

② 9日目

「召喚したのがあなたで良かった」。アーチャーとの別れシーンです。この二人の間には長い会話は必要ないですね。

③ 14日目

「何やつてるのよ、あなた達！」綺礼VS葛木戦で綺礼にとって致命的になった闖入シーン。6日目にライダーが士郎を演技で殴つて慎二をだまくらかさそうとした場面でも、凜がぶち壊しにしました。彼女は何気に間が悪いです。

6. 間桐桜

● 概要

本作で最も悩ましかったのが、桜の救済でした。ライダーが士郎とくつつくことは確定事項でしたので、桜が嫉妬で黒化するの当然の流れなんです。落ちっ放しで、救済なしではいくら何でも酷い（桜ファンからのバッシングが怖い・・・）。

考え抜いた結果として、アーチャーが桜を拾つてあげる形に落ち着きました。原作などではアーチャーと桜の絡みは殆ど記憶にないのですが、終わってみればすんなりと収まった気がします。

抑えたままのいい子の桜は、書いててもどかしいというか筆も進まない。だけど、黒い桜やキレた桜は俄然生き生きとして、書いていて楽しかったです。

前半は危険な香りを発散しまくり、めでたくアーチャーをゲットした後は、もうノリノリです。

戦闘面では、ヘヴンズフィールで凜に勝ちきれなかったことを踏まえ、いざ黒桜になってしまおうと不意をつかない限り英霊相手には太刀打ちできないという状態と解釈して表現しました。

● ツツコミどころ

9日目に士郎が慎二にいたぶられますが、あの場面を見てて士郎がハラキリするまで桜が気配を消し通せたとは思えないんです・・・慎二が魔術で士郎を攻撃したあたりで悲鳴をあげますよね。

● 印象深いシーン

① 9日目

黒桜になって、みんなを詰るところ。溜まりに溜まったあらゆるものへの不満を一齐にぶちまけているわけで。今、見返すとこれでは足りないくらいだったなと思えます。

② 6日目

眼鏡をかけたライダーに対しての「あなたって本当に綺麗ね」・・・それは刃物です。

③ 15日目

「本当にダメな先輩」。アーチャーとの別れのシーン。愁嘆場になると鬱陶しいので、こんな感じにしました。最後にボケたアーチャーのフライングプレイです。

7. 間桐慎二

● 概要

慎二は、展開次第ではいい人や、格好いい人にもしようがあると思うのですが、本作ではダメ人間を貫くことを決めていました。必ずライダーとの主従関係にはつきりした決着をつけて、終わらせたかったからです。生き死にはどちらでもいいと思って書き進めました。結果的に生き残っていますが、彼のその後の人生は惨憺たるものでしょう。

非常に微妙な機微のあるキャラクターで、筆者の解釈としては、士

郎のことが本来好きなのですが、同時に士郎には勝てないということ
をわかっている。聖杯戦争なんてものがなければ、それを認めたま
ま、そのままの距離感で大過なく終わった筈の関係ですが、残念なが
ら士郎が魔術師という自身が最も特別視する存在だということがわ
かり、正面(?)衝突することになりました。

物語的には超重要キャラの割に扱いがぞんざいになるのが彼の持
ち味と言えるのかもしれませんが、登場人物の中でもっとも表現しき
れなかった人物が彼でした。正直、心残りで、もう少しはっちやけさ
せたかったです。特に12日目の凜との会話や、13日目のライダー
とのやり取りはもっと振り切れた表現ができなかったかなと反省し
ています・・・

● ツツコミどころ

6日目と9日目に士郎への脅迫状を投函しているわけですが、いず
れもかなりの早朝です。目覚ましをかけて早起したのか完璧したの
か・・・地道に頑張りますね。

● 印象深いシーン

① 1日目

「はあっ?!?何でそんな必要があるんだよ!?!」。この時まではツンデレ
気味の面白い人で済んでいたのですが。

② 13日目

「セイバーには一撃でやられたんだ。まるで相手にならなかった」。
ライダーも驚いていましたが、ちゃんと事実を捉えてはいるんです
よ。この人。ただの阿呆ではないのです。

③ 13日目

「こんな理不尽な戦いに巻き込まれたばかりにね」。凜は、慎二が自ら
の意思でこの戦いに参加したくせに、と否定していますが、ある意味
では慎二の嘆きも真実です。同情の余地はないですが、彼もまた道具
に過ぎなかったわけで。

⑧ 間桐臓硯

● 概要

桜が闇落ちする9日目迄は登場シーンは1回だけ。完全に黒幕に徹しました(士郎なんて13日目まで会っていません)。「臓硯が暗躍している」のは、読者の皆様には既知のことなので敢えて描写する必要もないかと思ひまして。決して手抜きではないんです……

性格などは、HFと殆ど変えていません。慎二と同様かそれ以上に救いようのない、そして救う必要もないキャラクターとして貫き通しました。HFではそもそも聖杯戦争が生まれた背景などを説明するためにも、彼のかつての志を掘り下げていたと思いますが、本作ではそれらの事情は読者の皆様にとっては既知のものという前提です。そのため、彼の矮小さを際立たせることで、どうしようもない人という個性を強調したつもりです。

とは言え、純粹に出番が少ないため、インパクトはあまり残せませんでした。元のイケメンに若返って大活躍するような展開にしたなら、インパクトはあったんだろうなと妄想だけはするのですが。

● ツッコミどころ

桜を闇落ちさせた後のことが杜撰すぎるとか、蟲蔵を冬木市外にも作っておけよとか、13日目に夜襲掛けた時も油断しすぎだろとか色々ありますね……

● 印象深いシーン

「特になし」です……

後書き く登場人物総括く サークヴァント編①

1. アサシン

●概要

原作同様、臓硯に忠実なサーヴァントとして仕事人っぷりを発揮し続けてもらいました。

一方で原作と大きく違うのは、最初から賢く設定したことですが、原作ではランサーの心臓を取り込んで知性を取り戻した彼でしたが、本作ではランサーには主人公サイドと派手に戦って散ってもらったつもりだったため、アサシンのレベルアップアイテムにはできませんでした。

彼自身は戦闘面で真つ向勝負となると、士郎に手を焼いたり、葛木（ドーピング有）に押されたりとイマイチ頼りにならないわけですが、彼らの引き立て役として存分に活躍してくれたと言えるでしょう。

臓硯を裏切って、綺礼と手を組ませることも少し考えましたが、主人に忠実な彼の良さを消してしまうと思えば、最後まで臓硯とペアリングしました。臓硯が最後に彼を罵倒する一方で、アサシンは落ち着いて臓硯を気遣って最期を迎える形にして、彼の魅力を引き立たせてみました。サーヴァントらしいサーヴァントと言えるでしょう。

●ツツコミどころ

もう少しアサシンらしく、気配遮断からの不意打ちで相手を斃せないものでしょうか？ 一番の謎は11日目にイリヤを襲った時で、どうして彼女をあつさり攫えなかったのでしょうか・・・まあ、イリヤも優秀な魔術師ですから何となく察知できたんでしょね（まるで他人事のように・・・）。

●印象深いシーン

①12日目

「お前の中身はがらんどうだ」。綺礼から臓硯を裏切るように水を向けられた時にあつさりと断った時のセリフです。勿論、胡散臭い綺礼からの誘いを一蹴するのは、当然としても、彼の本質迄見抜いたよ

うに「お前の中身は空っぽだ」と言い切った彼の洞察力は稀有であると言えます。同時に彼にもしつかりとした芯があることが窺えます。この数時間後に夜襲に失敗して、石になってしまふのはご愛嬌です。

② 13日目

臍硯に罵倒されても、彼を気遣う場面。忠義の漢です。

③ 9日目

「出会う度に動きが良くなるな」。桜が黒化した直後に士郎を襲った時のセリフです。この時点で士郎と三度相對しており、この一言で士郎の成長を表現してくれています。

2. アーチャー

● 概要

書いていて途中でこれってアーチャールートじゃないかと、気付きました。結局はお前が全て持ってくのかと。

当初構想段階ではあくまでも士郎のレベルアップに貢献する人くらいの位置付けのつもりでした。しかし、桜への救いがやはり必要だと考えてだしぶ悩んだ挙句、やはり適任者は衛宮士郎しかいないなと。元々、原作とは違い凜は桜と絡ませないつもりだったので。アーチャーはいい奴にも悪い奴にもなれるので、本当に便利な男です。

そんなわけでアーチャーと桜が懇ろになるのがなるべく不自然にならないよう、黒化前からアーチャーと桜の絡むシーンを意識的に増やすようにしました。

そのために、「6日目に慎二から引き剥がす」「7日目の桜お姫様抱っこ」「7日目、8日目のお料理シーン」などを意図的に入れていきます。「11日目の据え膳」も一旦、全話書いた後に追加した話だったりします。

戦闘面でも

4日目 ライダー戦

6日目 ランサー戦

8日目 ギルガメツシュ戦

15日目 ラストバトル

と、活躍する戦闘シーンが多いです。

いずれにせよ、凜が作品に広がりを提供してくれたのに対して、彼は深みと厚みをもたらしてくれました。本当にありがとう。

ちなみに、彼が聖杯を使って叶えようかなくて考えていたのは、「守護者でなくなる事」でしたが、どうせ無理だろうとも思っていたという設定です。

● ツツコミどころ

もっと弓を使えよ・・・ギル様も士郎もそれで終わっていたでしょう。

● 印象深いシーン

① 15日目

「しまった。石像になるというのにポーズがイマイチだな」。よりによって最期のセリフがこのボケというのが、ある意味彼らしいと思っっています。

② 11日目

「据え膳」。最高の言葉ですが、イマドキこんな言葉を持って嘸すと炎上するのでしょうか・・・

③ 9日目

「達者でな。遠坂」。これは映画のまままで変えられませんでした。万感の思いが詰まった名台詞です。

3. キャスター

● 概要

紫No. 3。本作で最も幸せになった人。

この作品を書いた目的の一つとして、原作の三つのストーリーでは悉くズタボロにされて殺されてしまった彼女を幸せにしてあげたいというのがありました。本作のメインヒロインは当然ライダーですが、幸せ度ではキャスターのほうが勝っています。

彼女の魅力は、とにかく話し方が上品で会話も書いてて凄く楽しい。ライダーとは違って、根は善人かつ常識人というのが私の解釈のため、物語中の良心、母親的立ち位置で士郎をサポートし続けており、

ほぼ全開で良い人として表現し続けました。

また、願望機としてのイリヤを使うのは彼女だったため、士郎とイリヤの絡みよりも、キャスターとイリヤの絡みを増やしました。イリヤをただの道具ではなく、一人の人間あるいは士郎の姉ということを意識したうえで犠牲にするという選択をしています。だからこそ、一度は暴走して士郎達と袂を分かち、実際に願いを叶える時には涙してもらいました。

戦闘面では基本魔力不足のため、殆ど直接の活躍はないけど、それでいいのです。ドラッグ製造マシン、浄水器、ヒーラーなど完全に便利屋。なんでもありで、優秀過ぎました。

攻撃方法については光弾を撃つくらいしかなくて、バリエーションに乏しいのが珠にキズです。あまりバリエーション作ると強くなっちゃうので控えめにしましたが、本当はもっと色々とできるのではないかと思います。直接サーヴァントを攻撃するのではなく、目晦ましてか、足元を凍りつかせたりするだけでもだいぶ違うような・・・

● ツツコミどころ

9日目に士郎が間桐邸にこつそりと向かったわけですが、もうちよっと注意しておけば彼女は士郎の行動に気付いた筈です。これも物語の展開上やむを得ないうっかりということで見逃してください。

● 印象深いシーン

① 15日目

ラストシーン。書く予定のないシーンでしたが、葛木が病院で待っているような男ではないと思い直して迎えに来させることにしました。お幸せに。

② 14日目

「ごめんなさい」。士郎との契約後、泣き崩れるシーンです。彼女の弱さも素直さもここではつきりと表現しました。

③ 11日目

「まったく、手間のかかる子ばかりね」。イリヤの不審な行動に気づき、眠らせた場面。彼女のお母さんの発想が垣間見えます。

4. ギルガメツシユ

●概要

ランサーと同じく本作ではHFよりはしゃぐ場面はあったので許してください。偽アーチャー呼ばわりされていますが、それも許してください。

本作ではとにかく全てのキャラクターを善悪問わず生き生きと描きたいと思っていました。そういう意味では彼も僅かな登場シーンしかありませんが、そこで精一杯暴れてもらったわけです。実はその犠牲になったのがセラだったりして、彼の傍若無人っぷりを端的に表現するためにあっさり殺されてしまっています。

本作はライダー、キヤスターを中心とした人間ドラマですので彼のような盤面をひっくり返してしまうような存在はある意味危険です。そんなわけで処刑人であるセイバーによって抹殺させていただきました。最後の場面で彼女と会えて、はしゃいでいましたのできつと本望だった筈・・・

●ツツコミどころ

ていうか、8日目迄何をしていたのでしょうか・・・開戦直後にセイバーに会いに行けばよかったのに。

●印象深いシーン

1日しか出演していませんので、選択肢が少ない・・・強いて挙げるなら、

最後にセイバーと相対する場面で、間違いなく勝てないという状況でもはしゃぎ続けていたところです。ギル様だって乖離剣を使おうとしても、もう勝てないということとはわかっているのですが、そんなの関係ないんです。この人は。

後書き く登場人物総括く サーヴァント編②

5. セイバー

●概要

本作のメインヒロインがライダーということもあり、セイバーは原作以上にライダーの引き立て役というポジションになりました。

HFでは救いがなく散っていく彼女ですが、本作は輪をかけて救いがあります。セイバーファンからすると、非常に耐え難い展開だったでしょう。

14日目の戦いでライダーの台詞や独白に集約されていますが、こと戦闘面においてはセイバーは隙が無く士郎マスター時でも非常に頼りになる存在として描いています。ランサー、ライダーに対しては完全に圧倒しましたし、初日のバーサーカー戦も互角という形になっており、士郎が彼女を助ける必要が生じていません。独白の中では、ライダーは自分を二流と表現しましたが、これはセイバーを一流とすればという意味合いです(実態としては、セイバーが超一流で、ライダーが一流だとは思いますが)。

士郎との男女関係で言うと、彼とペアになり得るのは①セイバー②凛③桜④ライダー⑤イリヤ⑥キャスターあたりだと思います(順番はあくまで私見です)が、本作ではライダーがライバルとして明確に意識したのはセイバーと凛です。そのため、原作では直接言葉を交わすことは殆どなかったのですが、セイバーとライダーの会話をなるべく増やして、彼女らの士郎に対する想いを表現したかったんです。この手の会話は楽しいですし。

実のところ、筆者はセイバーというキャラクターは特に鼻屑にしています。です。最初彼女に関わる文章をニュートラルに書いていましたが、彼女の凛々しさや誠実さを表現していくうちに、感情移入していききました。ほんといい子ですよね・・・何とかしてあげたかったです。

●ツッコミどころ

身も蓋もありませんが、周囲の被害を気にせず、衛宮邸にエクスカ

りバーぶち込めば終わりですよね。

● 印象深いシーン

① 14日目

「遠慮なくあなたを千回殺しましょう」。この台詞は筆者自身もセイバーがどんな感情から発したものはつきりしません（なんだそりや？）。士郎を盗ったライダーに対する本心の吐露なのか、あるいは彼女なりのジョークなのか・・・

② 13日目

士郎が自分に買ってくれたぬいぐるみを凝視するシーンです。黒化しても彼女が士郎との思い出を抱えていることを表現しています。

③ 1日目

「あなたがマスターとなったのは運命だったということだ」。どんな結論に士郎が至ったとしても受け入れるというセイバー。前回の切嗣との仲が悪すぎて、士郎にゾッコンなわけです。

6. バーサーカー

● 概要

本作でもクラッシュャー黒セイバーの餌食となりました。原作と違って桜ではなく、イリヤに取り込まれることになったため、黒化していません。そのため、出番は1日目と8日目のみとなりました。まあ、8日目しか登場していないギル様よりはマシですよね。ギル様同様、生き残られると主人公サイドの勝ち筋をあまり見出せないのも、強者同士でつぶし合っていたら退場してもらいました。バトルメインの物語ならいいのですが、「■■■■」だけで人間ドラマを作るのはかなり難易度が高いです。それでも、イリヤのために懸命に戦っている姿をなるべくしっかりと表現してみました。

彼はぱつと見でわかりやすく強いキャラのため、主人公サイドに絶望感を与えたり、他の強キャラの囁ませ犬的に使われがちです。原作でも本作でもそういう立ち位置で、ギル様や黒セイバーの引き立て役になっていますが、もう少し彼自身を中心にした物語を作れないかなと思ったりもします。

● ツツコミどころ

バーサーカー自身の問題ではないんですが、この時の士郎はライダーを攫われて茫然自失状態です。そんな中で、バーサーカーVS黒セイバーの解説ができることに大層な違和感を感じます。一人称語りで進行するため、止むを得ないのですが。

● 印象深いシーン

「■■■■」しかないのに、どうやって差をつければ良いのか・・・

① 8日目

「————■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■———!!」。ギル様が士郎達を攻撃した直後、イリヤの「やっちゃえ！バーサーカーツツ!!」に応じてギル様に躍りかかったシーン。最高の形式美です。

② 8日目

黒セイバーに対して放った「渾身の右ストレート」。これが一番効果的。剣いらぬです。

③ 1日目

アーチャーが放った鶴翼三連により飛来した剣を拳で弾き返したところ。やっぱりの剣いらぬんじや・・・

7. ライダー

● 概要

本作の主人公兼メインヒロインという立場ですので、当然のようにフル稼働でした。

自分で作品を書くとき改めてわかりますが、彼女は色々な側面があるのが魅力です。マイペースでサディスティック、そしてf a t e / S Nのキャラの中ではかなり根っこは悪い人なので、特に物語後半はそこも表現してみました。前半から欲望丸出しでやってしまうと反感を買うでしょうから、前半は彼女なりの苦悩（+苦勞）をしつかりと見せて、彼女に肩入れしやすくなるよう腐心しました。とは言え、不幸合戦をしたら桜のほうが遥かに上ですから、士郎を桜から奪い取ったというのはサーヴァントとしては結構な罪でしょう。本作では士郎が桜を異性としては意識していないものとするので緩和を図り

ましたが、主人の想い人を奪ったという構図は変わりません。

そのため、生き残って士郎と一緒にになり、勿論それはそれで幸せになったのですが、筆者としては桜も生き残ったHFのほうがライダーとしてはより幸せを得られたルートと認識しています。

根が受動的な真面目人間ですが、やや思考停止しがちです。原作をプレイしていた時には、この人がもう少し間桐家内の事情を把握しておけば、桜が闇落ちするのをそもそも防げたのではないだろうかと思ったりしたもので、本作でも士郎とイチャイチャしているうちに、桜はどんどん悪い方向に転げ落ちていきました。

なんとなく否定的な内容を書いてきましたが、端的に言えば自分の欲望に素直な多面性のある普通の人なので、色々と悪戯的な行動をさせても違和感がありません。そのため綺礼との絡みや、ドライブデート、凜との会話なども自由に書いて楽しかったです。

戦闘面では大活躍でした。

4日目 アーチャー戦

8日目 ギルガメツシユ戦

13日目 アサシン戦

14日目 セイバー戦

15日目 アーチャー戦

ベルレフォン×3回、魔眼×2回発動して、実質的な撃墜相手はギル様、アサシン、セイバー、アーチャーです。

相性の良さもだいぶ生きました。

● ツッコミどころ

色々と言いついていましたが、確信犯です。ええ。

● 印象深いシーン

① 14日目

「もし、違う世界で出会ったら、私を百回殺せばいい。ですが、この一回だけは譲れません」。このチャンスにしがみつこうとした彼女の偽らざる心情です。実際には少なくとも他にも一回セイバーを斃していますね（止めは士郎ですが）。

② 15日目

ラストで大聖杯にライダーが宝具を使う直前、『この光景を、この気持ちで見るのは最後だ。オレは彼女の姿を目に焼き付ける。』という士郎の独白がありますが、筆者自身としても最後まで書ききった感があり感慨深かったです。

③ 13日目

ドライブデート全体。ライダーのマイペースさと格好良さを一緒に表現できたかと。

8. ランサー

● 概要

アサシンとの戦いはなしにして、主人公サイドと戦って派手に散ってもらいました。あまり本気で勝ち残ろうとしないタイプの人と解釈しています。サーヴァントとして最低限の仕事はするけど、折角現界したんだから思う存分戦いたいみたいな。

出番があまり多くない中でも、彼らしい気風の良さ、躍動感などは損なわずに済んだのではないかと思っています。バーサーカーを除けば、サーヴァントの中では最も裏表のないキャラなので、登場シーンは少なくとも表現しやすいとも言えます。だから出番が少なくてもOK・・・

● ツツコミどころ

実は、初日のアーチャー戦でいきなり投げボルクを使いましたが、最初は無印ボルクでした。しかし、これだとセイバーのような『直感』のないアーチャーだといきなり死んじゃうんじゃないかね？って思い直して投げに変更しました。

● 印象深いシーン

出番が少ないので、二つだけです。

① 6日目

「これ以降はこれ以下しかないという確信だ」。最期の独白ですが、実際のところ綺礼にこの後も使われ続けたら彼はどうなっていたのか。雑な感じでギル様にやられますかね。

②6日目

「好かないってのは、戦士が主に従わない理由にはなり得ねえよ。それじゃあ戦争は成り立たねえだろうが」。元のマスターであるバゼットを殺した相手に、曲がりなりにも従っているのは彼がこういった信条を抱えているからこそかなど。